

中央自動車道長野線
埋蔵文化財発掘調査報告書 9

—松本市内 その6—

三の宮遺跡

本文編

1990

日本道路公団名古屋建設局
長野県教育委員会
(財)長野県埋蔵文化財センター

中央自動車道長野線
埋蔵文化財発掘調査報告書 9

—松本市内 その6—

三の宮遺跡

本文編

1990

日本道路公団名古屋建設局
長野県教育委員会
(財)長野県埋蔵文化財センター



遺跡遠景（上空東より）



SB117 出土ヘラ描き須恵器

序

中央自動車道長野線にかかる、松本市内11遺跡のうちの一つである三の宮遺跡は、松本市の北西に位置し、すぐ北には松本電鉄上高地線が走る田園地帯にあります。三の宮遺跡の発掘調査は、昭和60年に始まり翌61年に終了しましたが、古代から中世に至る人々の生活の跡が55～60mの路線幅いっぱい、全長約850mの長さから検出されました。

調査の成果については、現地説明会・出土遺物展示会・(財)長野県埋蔵文化財センター年報・埋文ニュース等によって公開してまいりましたが、その後の整理によって松本平の沖積地に広範に亘って立地した古代・中世集落の一部であることが明らかになってきております。この状況は11の遺跡に共通しており一連のものとしてとらえようと意を注ぎました。

本遺跡は、松本平南西部の開発初期にあたる7世紀末に開発が始まります。途中10世紀初めから中頃にかけて遺構が見られない時期もありますが、12世紀初めにかけてと中世にまでおよび、長期間居住域として利用された遺跡として注目されます。特に、本遺跡の開発初期に属する遺構が河川・水路にそって展開する地区では、幾度かの水路の氾濫を経験しながら存続していた集落の様子が見られ、古代においても河川の水が生活の基盤であったことが分かります。また、この水路は現在に至るまで幾度か改修されながらその位置を変えずに利用されており、水利関係を知るうえでも貴重な資料を提供してくれました。

礎石が据えられた、一辺8mをこす大型竪穴住居址からは、壁板をおさえた地覆木であったと思われる木材が床面から検出されました。当時の建物の構造を知るうえでこれも貴重な発見といえましょう。それらを裏付けるように、本県では例をみないへら描き女性像のある須恵器杯も検出され、多くの遺物からも三の宮遺跡の重要性が立証されております。古代・中世の集落を考えるうえで、この発掘調査が果たした役割は大変大きいといえましょう。

最後になりましたが、調査開始より本書発刊に至るまで、記録保存の遂行に深いご理解とご協力をいただきました、日本道路公団名古屋建設局、同松本工事事務所、長野県高速道局、同松本高速道事務所、松本市、同教育委員会、松本平農業協同組合、地区被買収(者)組合等の関係諸機関、発掘現場や記録整理作業に従事された多くの皆さん、直接のご指導・ご助言を賜った、長野県教育委員会文化課、発掘調査を実施した(財)長野県埋蔵文化財センター職員に対し、心から敬意と感謝を表する次第であります。

平成2年3月20日

(財)長野県埋蔵文化財センター

理事長 樋口 太郎

例 言

- 1 本書は、中央道長野線建設工事に係わる、松本市内・豊科町内12遺跡の内、^{さんのみや}三の宮遺跡(ESM)の発掘調査報告書である。
- 2 本書は、松本市内に係わる遺跡を、古代から中・近世にかけての一連の遺跡群としてとらえ発掘調査を実施した関係から、全遺跡に係わる内容と考察編を1冊に、各遺跡編を6冊に分けて編集し、以下の構成をとる。松本市内その1－総論、松本市内その2－神戸遺跡・上二子遺跡・中二子遺跡、松本市内その3－下神遺跡、松本市内その4－南栗遺跡、松本市内その5－北栗遺跡、松本市内その6－三の宮遺跡、松本市内その7・豊科町内－南中遺跡・北中遺跡・北方遺跡・上手木戸遺跡。
- 3 本書で使用した航空写真は、建設省国土地理院の許可を得て複製したものである。
- 4 本書で使用した地図は、日本道路公団作成の中央自動車道長野線平面図(1:1000)、松本市発行の松本市都市計画図(1:2500)をもとに作成したほか、建設省国土地理院の許可を得て同院発行の2万5千分の1、5万分の1地形図を複製した。
- 5 本書及び松本市内・豊科町内遺跡報告書に掲載した、実測図の縮尺・表現方法、時代・時期区分、遺物写真縮尺、遺構・遺物の分類基準等は全分冊で統一しており、その要点は凡例に示してある。
- 6 本書および松本市内の調査報告書では以下の遺構記号を使用している。竪穴住居址－SB、掘立柱建物址－ST、溝址－SD、柵址－SA、土坑－SK、水田址－SL、畠址－SN、河川跡・自然流路－NR、不明遺構－SX
- 7 本書で報告する3遺跡については、既に、当埋文センター発行の『長野県埋蔵文化財ニュース』、『長野県埋蔵文化財センター年報』2～4に調査概要を報告している。それらと本書での記述に若干の相違があるが、本報告をもって最終的な報告とする。
- 8 発掘調査、報告書作成にあたり、次の各項目について、各氏に終始ご指導いただいた。
古代集落関係－小笠原好彦、中世集落関係－石井進、竪穴住居址・掘立柱建物址－宮本長二郎、プラントオパール分析－藤原宏志、水田土壌－梅村弘、古代集落・土器－吉岡康暢・桐原健・水野正好、人骨・獣骨鑑定－西沢寿晃、炭化材鑑定・同定－中島豊志、灰釉陶器－斎藤孝正、美濃須衛窯産須恵器－渡辺博人、条里遺構－井原今朝男・小穴芳実・小穴喜一、輸入陶磁器－森田勉、古瀬戸系陶器－藤澤良祐、近世陶磁器－仲野泰裕、墨書土器・ヘラ書き土器－平川南、協力機関－松本市教育委員会・遺跡調査指導委員会(順不同、敬称略)。
- 9 発掘調査及び文責等本書刊行に関する分担は巻末に一括掲載してある。
- 10 参考文献は巻末に一括した。
- 11 本書で報告した各遺跡の記録及び出土遺物は(財)長野県埋蔵文化財センターが保管している。

凡 例

1 本書に掲載した実測図の縮尺は、特にことわりのある場合を除いて下記のように統一してある。

(1) 遺構実測図

本文挿図 竪穴住居址・掘立柱建物址 1:60 住居址内施設・墓址・土坑 1:40

図 版 遺構図 1:120

(2) 遺物実測図

土器・陶磁器 1:4 文字関係資料 1:3 墨書文字 1:2 土器拓影 1:3

金属製品 1:2 石器・石製品 1:4~2:3 銭貨拓影 2:3

(3) 遺物写真

土器・陶磁器 2:5 内耳鍋・常滑系甕 1:4 中世土器・陶磁器破片 1:2

鉄製品 1:2 銅製品・銭貨 1:1 石器・石製品 1:4~2:3

2 遺物実測図の番号は、遺跡ごとに次のように付けてある。

- | | |
|-----------------------------|-----------------------|
| (1) 縄文・弥生土器、石器……1から通し番号 | (4) 文字関係資料……1から通し番号 |
| (2) 古代土器……各遺構毎の通し番号 | (5) 金属製品……1から通し番号 |
| (3) 中・近世土器・陶磁器……それぞれ1から通し番号 | (6) 古代以降の石製品……1から通し番号 |

3 実測図中のスクリントーン等は以下の事項を表わしている。

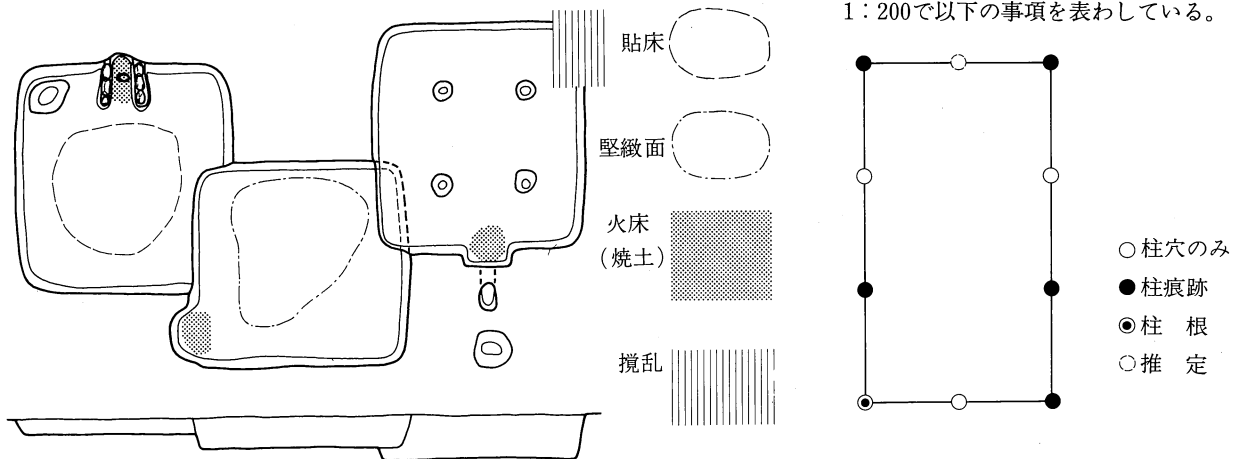
(1) 遺構

ア 竪穴住居址

イ 掘立柱建物址

本文中の掘立柱建物址模式図は、

1:200以下の事項を表わしている。



(2) 遺物

ア 古代土器

① 実測図の断面は、黒色土器・赤彩土器を含む土師器—白抜き、須恵器・施釉陶磁器—黒塗り、輸入陶磁器—スクリントーン によって区別した。黒色処理・赤彩を施したものはその処理された器面の範囲に、漆・炭化物の付着については以下のスクリントーンにより表現してある。



② 施釉陶磁器の施釉範囲は一点鎖線で示した。

イ 中・近世土器・陶磁器

① 実測図の断面は、土器—白抜き、陶器—黒塗り、磁器—スクリントーン により区別してある。

② 国産陶磁器の釉の種類は以下の網目により区別してある。但し、灰釉は白抜きにした。



③ 施釉陶磁器の施釉範囲は一点鎖線で示した。

ウ 金属製品

- ① 金属製品の形状はX線等の観察にもとづいており、銹・付着物によるふくらみは線の太さをおとして表現してある。
- ② 断面図は、平面形状観察にさしさわりのない範囲で平面図に組み入れてある。
- ③ 鉄製品 銅製品の断面図と、漆・炭化物の付着及び木質部を以下のスクリーンで表現してある。



エ 石器・石製品

① 打製石斧・磨製石斧等の磨耗範囲は で示し、砥石の使用面は、断面図に ← → で示した。

オ 土製品

① 羽口のタール付着・ガラス状発泡範囲を 、被熱により変色した範囲を で示した。

4 本書を含む松本市内・豊科町内遺跡報告書における遺構・遺物の分類、時期区分の要点は以下のように統一しており、ここで扱っていないものについては、各報文中で説明してある。詳細は「松本市内その1」第3章に記述してある。

(1) 時代・時期区分

時代区分は、縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中世、近世、近・現代とし、古代を1～15期、中世を1期、2期に時期区分した。

(2) 遺構

ア 竪穴住居址

- ① 主軸は、カマドの中心を通る竪穴住居址の中軸線をあて、それと直交する中軸線を直交軸とした。但し、住居址の隅にカマドを有するものや、カマドの見られない住居址については、東西方向の中軸線を主軸とした。住居址の規模は主軸と直交軸方向での床面の差渡して測り、床面積はその二者の積をあてた。
- ② 平面形は「方形」「隅丸方形」「長方形1」「隅丸長方形1」「長方形2」「隅丸長方形2」及び「不整形」に分けた。(隅丸)方形は主軸と直交軸方向の長さの差が10パーセント未満のもの、その差が10パーセント以上15パーセント未満のもの(隅丸)長方形1、15パーセント以上15パーセント以上のもの(隅丸)長方形2とした。
- ③ 古代住居址の規模については、時期別に、一辺の長さで以下のような6つの種類に分けた。

時期	型	小型	中型1	中型2	大型1	大型2	超大型
1～4期		3m強	4m強	5m位	6m位	7m位	8m以上
5～15期		3m以下	3m～4m弱	4m～5m弱	5m強	6m位	7m～8m以上

イ 掘立柱建物址

- ① 棟方向は、南北棟、東西棟と記してあるが、不明なものについては南北棟として記した。
- ② 規模は、柱痕跡、掘り方の芯芯間の距離を基本として推定復元し、面積は両者の積により求めた。
- ③ 柱間寸法は、柱痕跡、掘り方の芯芯間の距離を求め、最大と最小値について表示した。
- ④ 掘り方では、平面形については方形、円形に分類し、「方」「円」と表記し、両者の混在するものは「方・円」とした。規模については、長軸の最大値と最小値を表示した。

(3) 遺物

ア 古代土器の器種分類について

- ① 次ページに示す古代土器器種分類表は、本報告書における土器の器種の呼称を示したものである。報告をおこなう土器のうち、土器の器種分類に当たって出土例が少なく、将来、周辺遺跡の資料をも含め、資料の増加を待って細別名を決定すべきと判断したものについては、ここではあえて細別を行わず、通例の呼称に従っている。
- ② 器種分類の詳細、器種内の法量等による細別については、「松本市内その1」、第3章で明らかにしている。

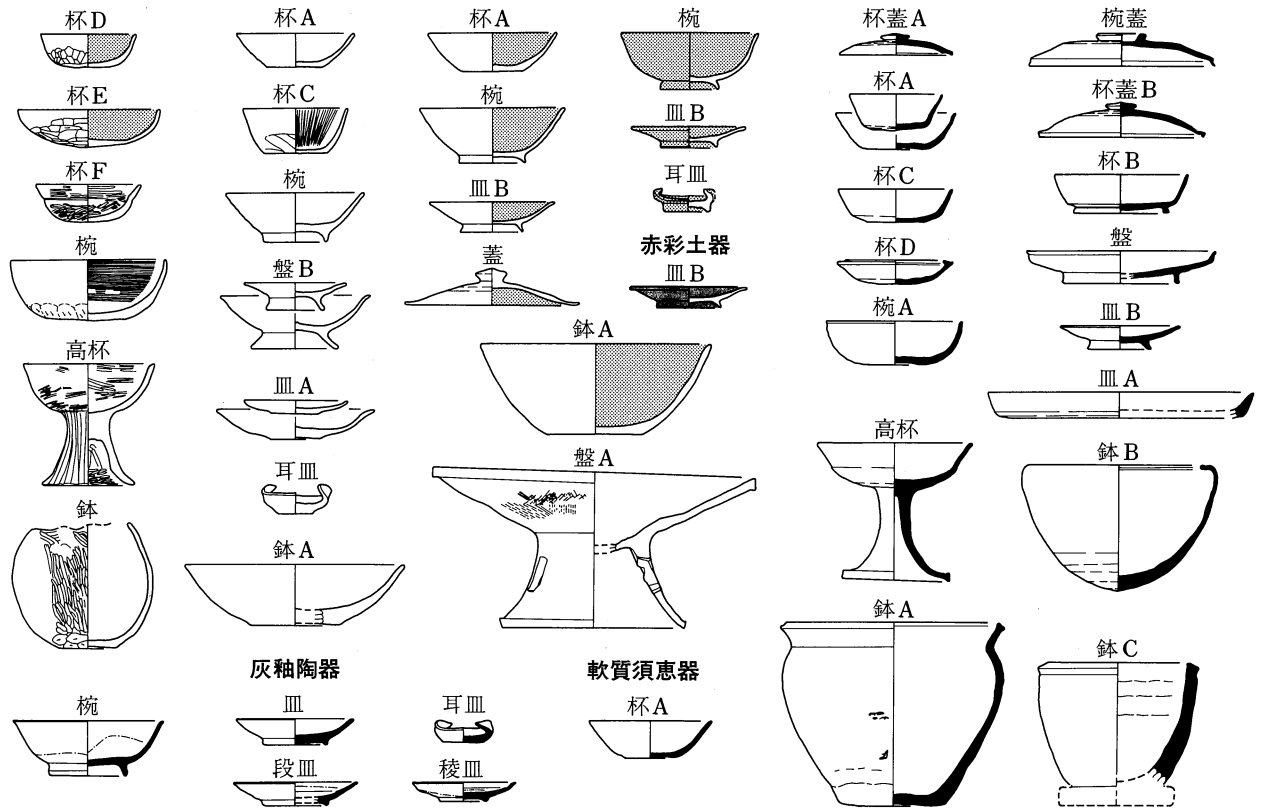
食器

土師器

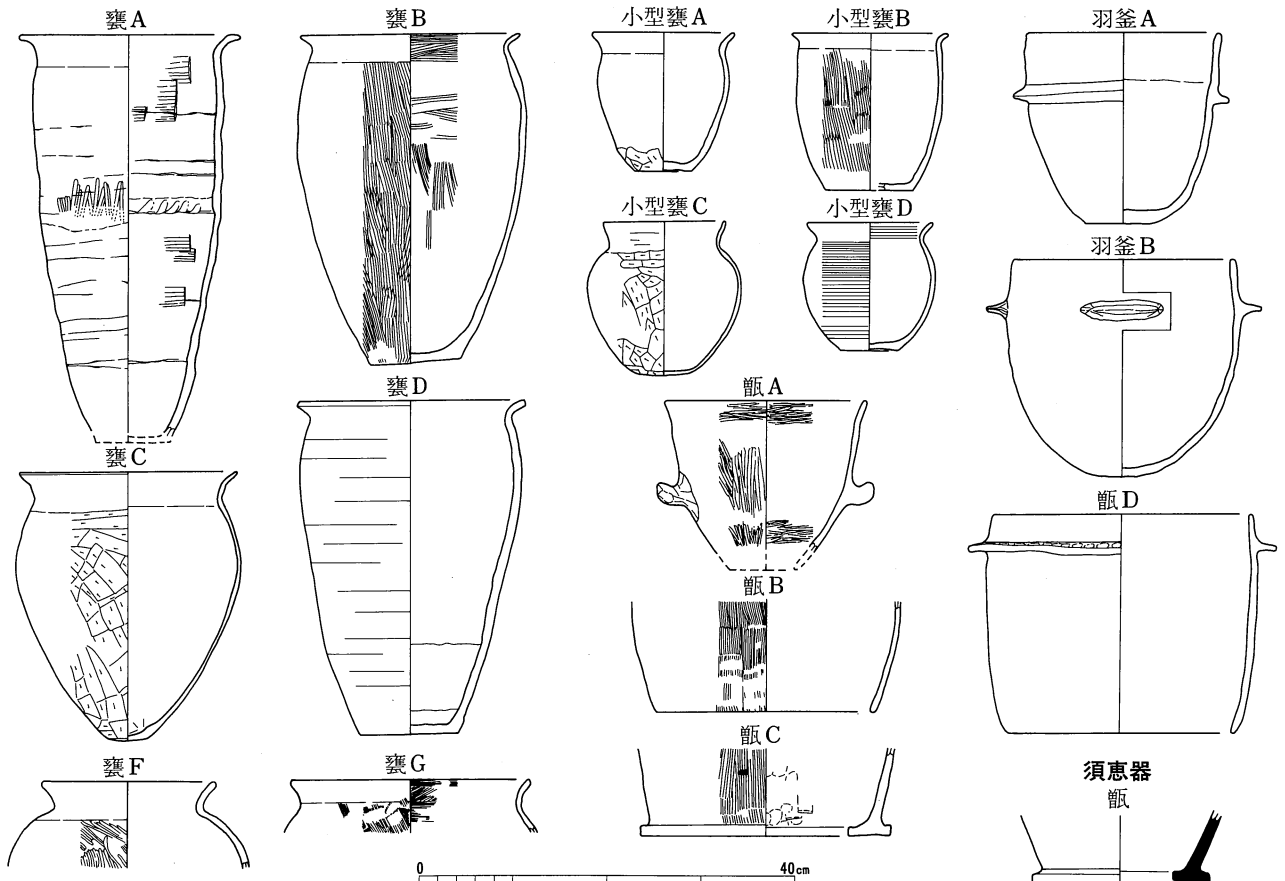
黒色土器A

黒色土器B

須恵器



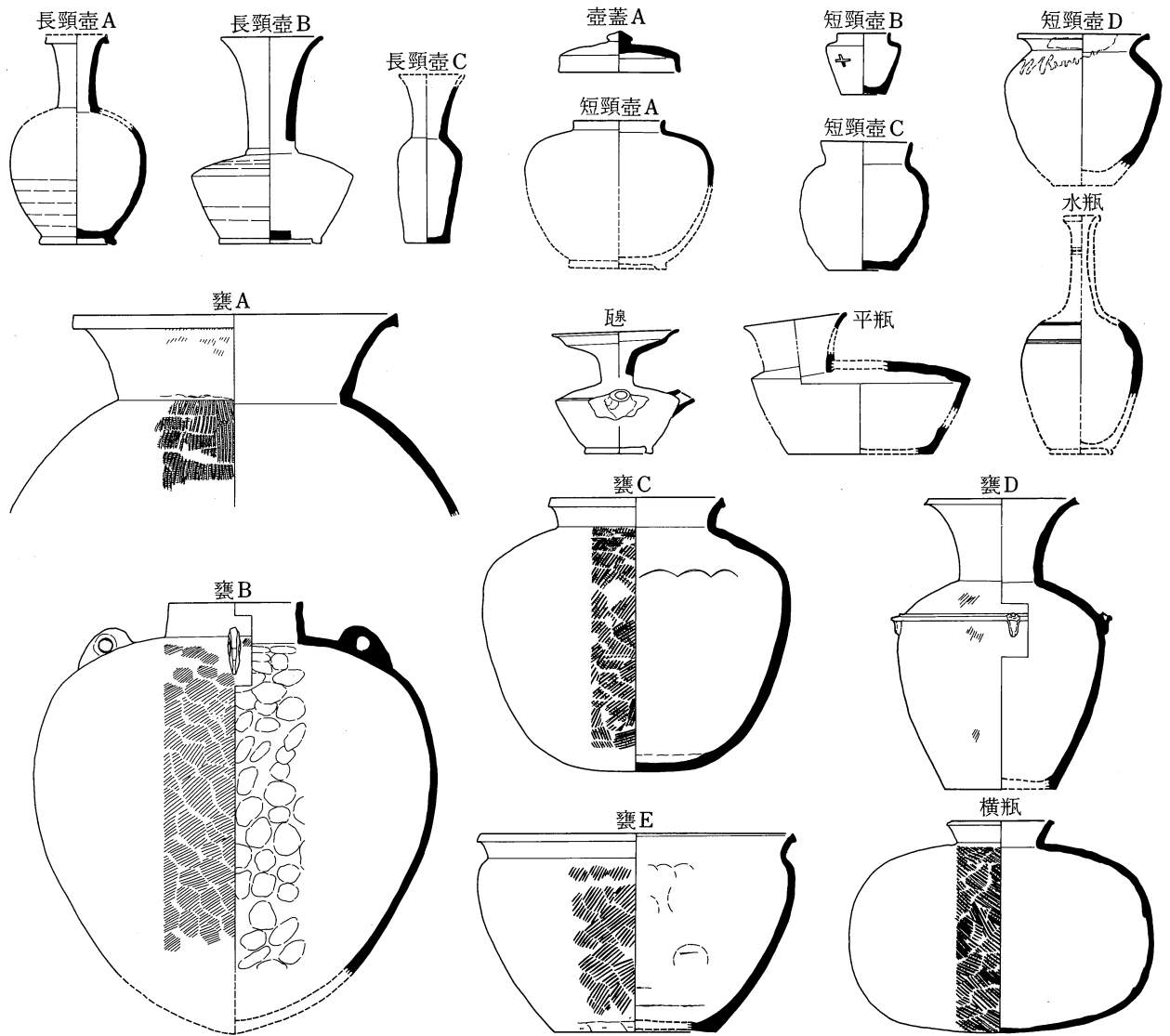
煮炊具 土師器



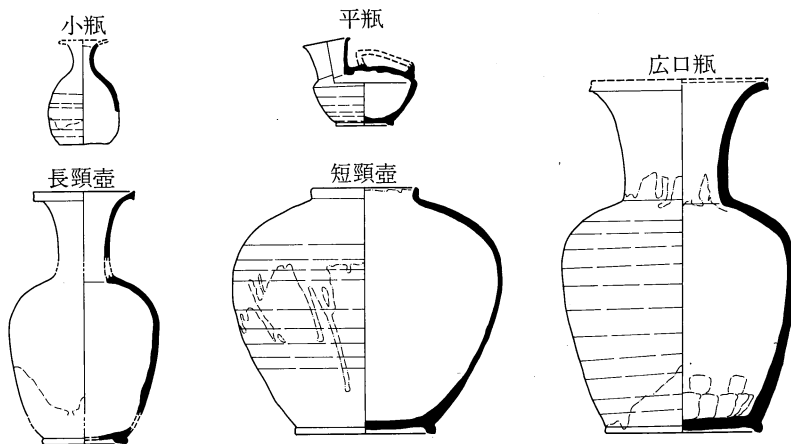
古代土器の器種分類(1) 食器・煮炊具

貯蔵具

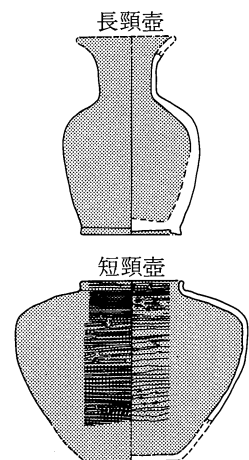
須恵器



灰釉陶器


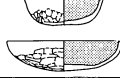



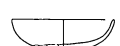
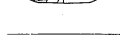


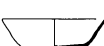
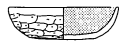








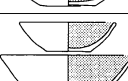

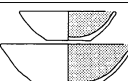

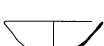





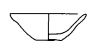


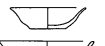

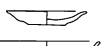

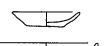



黒色土器B



0 40 cm

古代土器の器種分類(2)貯蔵具

期	土師器		須恵器		黒色土器A	土師器	三の宮遺跡の 代表的遺構
	杯F	杯D・E	杯A	杯A	杯A	杯A	
700	1						SB128 SB148
	2		 				SB25 SB51
	3		 	 			SB54
	4						SB117 SB115
800	5				 		SB28 SB119
	6				 		SB27 SB99
	7				 		SB151 SB153
	8				 		SB 2 SB 8
900	9						—
	10						—
	11						—
1000	12					 	SB86
	13					 	SB33 SB97
	14					 	SB142
1100	15					 	SB170 SB169
備考	非ロクロ調査 有 稜 杯	非ロクロ調査	ロクロ調整 回転ヘラ切り	ロクロ調整 回転糸切り 8期は軟質須 恵器	ロクロ調整 回転糸切り	ロクロ調整 回転糸切り	縮 尺 1 : 10

古代土器時期区分の大略

イ 中世土器・陶磁器の分類

神戸遺跡から上手木戸遺跡を通して、出土した土器・陶磁器の主な器種内の分類と消長表を以下に示した。詳細は「松本市内その1」で明らかにしている。

① 土師器皿

〈手捏ね調整＝I類〉

- I A 1—口径約12.5cm以上、器高約2.5～3.5cmのもの。
- 2—口径約11.0～12.5cm未満、器高約2.0～3.5cmのもの。
- 3—口径約10.0～11.0cm未満、器高約2.5～3.5cmのもの。
- I B 1—口径約9.0～11.0cm、器高約1.5～2.5cm未満のもの。
- 2—口径約9.0cm以下、器高約1.0～2.0cmのもの。

〈ロクロ調整＝II類〉

- II A—口径約10.0～12.0cm、器高約2.0cm以上のもの。
- II B—口径約7.0～10.0cm未満、器高約1.0～2.5cmのもの。

② 内耳鍋

- I—口径縁部を強く「く」状に外反させるもの。
- II A—口径縁部内面に明瞭な1条の工具痕を残すもの。
- II B—口径縁部内面に明瞭な2条の工具痕を残すもの。
- II C—口径縁部内面に明瞭な3条の工具痕を残すもの。
- III—口径縁部の断面がクランク状に外へ張り出すもの。

③ 常滑系の壺・甕類

- I—頸部を緩く「く」状に反らせ、口径縁部を丸くおさめるもの。
- II—口径縁部断面が「L」状の受口状を呈するもの。
- III—口径縁部断面を「—」状あるいは「N」状とし、縁帯が頸部に接着しないもの。
- IV—口径縁部断面を「N」状とし、縁帯を頸部に接着させようとしているもの。
- V—口径縁部断面を「N」状とし、縁帯を頸部に完全に接着させているもの。

④ 捏鉢

- I—口径縁部をやや細く挽き出し、端部を面取りするもの。
- II—器壁を均一に保ちながら口径縁部を挽きあげ、端部外面を面取りして尖らせるもの。
- III—器壁を均一に保ちながら口径縁部を挽きあげ、端部を隅丸方形及び丸くまとめるもの。
- IV—口径縁部から1～4cmくらい下をナデて器壁を薄くし、端部は丸くおさめているもの。
- V—口径縁部から1～4cmくらい下をナデて器壁を薄くし、端部を角状にして端部中央に弱い溝を入れるもの。
- VI—口径縁部から1～4cmくらい下を強くナデて器壁を薄くし、端部を丸くおさめて中央に溝を入れるもの。

⑤ 輸入陶磁器

横田賢次郎・森田勉の成果(1978)に負うところが大きく、特に青磁碗についてはそれに従って以下のように分類した。

- A—同安窯系碗I類。 G—龍泉窯系碗I—6 a・b類。
- B—同安窯系碗II類。 H—龍泉窯系碗III—2類。
- C—龍泉窯系碗I—1・2・3類。 I—龍泉窯系碗I—1およびIII—1類。
- D—龍泉窯系碗I—4類。 J—明代の所産で、外面上半に雷文施文のもの。
- E—龍泉窯系碗I—5 a類。 K—明代の所産で、外面に片切彫りによる細蓮弁文施文のもの。
- F—龍泉窯系碗I—5 b・c類。 L—明代の所産で、外面に線刻によつての細蓮弁文を施すもの。

⑥ 古瀬戸系陶器と大窯製品の分類は、藤澤良祐(1982・1984,1986)に従い、山茶碗の分類は、斎藤孝正(1988)・田口昭二(1983)による。

各形態 消長表

	古代	中世 1 期			中世 2 期		近世
年 代	12 C	13 C	14 C	15 C	16 C	17 C	
土 師 器 皿	IA 1・2 ? IB 1 ? IB 2		IA 3	II A II A	?	?	
内 耳 鍋			I	II C II B		III	
捏 鉢	I	IV II III	V VI				
常 滑 系 甕	I II	III	IV	V			

本文目次

巻頭カラー図版 遺跡遠景・SB117出土ヘラ描き須恵器

序

例言

凡例

第1章 遺跡の概観と調査の概要	1
第1節 遺跡の概観.....	1
第2節 調査の概要.....	2
第3節 調査の方法.....	5
第4節 調査の経過.....	6
第5節 基本層序と微地形及び河川下の調査.....	7
1 基本層序.....	7
2 遺構切込み面の微地形.....	8
3 河川下の調査.....	11
第2章 遺 構	18
第1節 古代の遺構.....	18
1 竪穴住居址.....	18
2 掘立柱建物址.....	104
3 溝 址.....	131
4 柵 址.....	139
5 土 坑.....	143
6 小鍛冶址.....	157
7 水田址.....	160
8 畠 址.....	161
9 自然流路、河川跡.....	162
第2節 中世の遺構.....	165
1 竪穴住居址.....	165
2 掘立柱建物址.....	166
3 溝 址.....	176
4 柵 址.....	180
5 墓 址.....	181
6 土 坑.....	184
7 水田址.....	201
8 畠址.....	208
9 その他の遺構.....	208
第3節 近世以降の遺構.....	209
1 掘立柱建物址.....	209
2 溝 址.....	213
3 柵 址.....	214
4 墓 址.....	214
5 土 坑.....	216

第3章 遺物	217
第1節 縄文・弥生時代の遺物	217
1 土器・石器	217
第2節 古代の遺物	218
1 古代の土器	218
2 文字関係資料	254
3 金属製品、鉄滓	258
4 石製品	262
5 土製品	262
第3節 中世の遺物	264
1 土器・陶磁器	264
2 文字関係資料	265
3 漆器	266
4 金属製品、銭貨	266
5 石製品	267
第4節 近世以降の遺物	269
1 土器・陶磁器	269
2 金属製品・銭貨	270
第4章 調査の成果と課題	272
第1節 古代遺構の構造と変遷	272
1 竪穴住居址の構造と変遷	272
(1) 竪穴住居址の時期別軒数の推移	272
(2) 竪穴住居址の規模とその変遷	272
(3) 竪穴住居址の平面形	274
(4) 竪穴住居址の構造と施設	274
(5) 竪穴住居址の類型	276
(6) 竪穴住居址のカマドの構造とその変遷	280
(7) カマドの類型とその変遷	281
(8) 竪穴住居址の主軸方向	287
2 掘立柱建物址の構造と変遷	288
(1) 掘立柱建物址の棟数の推移	288
(2) 掘立柱建物址の規模と構造	288
(3) 掘立柱建物址の変遷と性格	290
(4) 掘立柱建物址の主軸方向	291
第2節 三の宮遺跡の集落景観とその変遷	292
1 古代の集落景観	292
(1) 1～3期の集落とその変遷	292
(2) 4～6期の集落とその変遷	293
(3) 7・8期の集落とその変遷	300
(4) 12～14期の集落とその変遷	308
(5) 15期の集落の展開	308
2 中世の集落景観と墓域・生産域	308
(1) 中世1期の集落・墓域とその変遷	308
(2) 中世2期の集落とその変遷	315

(3) 中世の生産域	315
3 近世の集落景観とその変遷	317
4 三の宮遺跡における集落景観の変遷	318
第3節 地形環境の変化と遺構群の展開	320
1 土層の堆積と遺構群の占地	320
2 古代竪穴住居址の覆土の変遷	322
第5章 結語	325
参考文献一覧	
発掘調査及び執筆等の分担一覧	
付表	

挿 図 目 次

第1図 発掘調査区・トレンチと地区呼称	第32図 SB29実測図
第2図 グリット配置図（大地区）	第33図 SB30実測図
第3図 グリット配置図（中・小地区）	第34図 SB32・33土層断面図、カマド実測図
第4図 土層概念図	第35図 SB34実測図
第5図 境沢、NR3・4土層断面図	第36図 SB35実測図
第6図 小境沢、NR5・6・7土層断面図(1)	第37図 SB36カマド実測図
第7図 小境沢、NR5・6・7土層断面図(2)、宮沢・NR8土層断面図	第38図 SB37カマド実測図
第8図 久保川・NR9、堂沢、梅沢土層断面図	第40図 SB40実測図
第9図 SB1土層断面図	第41図 SB42カマド実測図
第10図 SB2実測図	第42図 SB43実測図
第11図 SB6実測図	第43図 SB47カマド実測図
第12図 SB5カマド実測図	第44図 SB49・50カマド実測図
第13図 SB3・5・6・7・8・9土層断面図	第45図 SB51実測図
第14図 SB6カマド実測図	第46図 SB52実測図
第15図 SB8実測図	第47図 SB55・57カマド実測図
第16図 SB9カマド実測図	第48図 SB58実測図
第17図 SB9実測図	第49図 SB59実測図
第18図 SB10カマド実測図	第50図 SB60カマド実測図
第19図 SB11・12カマド実測図	第51図 SB61実測図
第20図 SB12カマド実測図	第52図 SB62・63実測図
第21図 SB15実測図	第53図 SB64実測図
第22図 SB18実測図	第54図 SB65実測図
第23図 SB16・17実測図	第55図 SB65カマド実測図
第24図 SB19実測図	第56図 SB66実測図
第25図 SB19～22・ST5土層断面図	第57図 SB70～76、ST31、SD25～27、SK249・265実測図
第26図 SB22・23カマド実測図	第58図 SB71実測図
第27図 SB19カマド実測図	第59図 SB75実測図
第28図 SB21実測図	第60図 SB74実測図
第29図 SB25実測図・遺物出土状況	第61図 SB78実測図
第30図 SB27実測図	第62図 SB78カマド実測図
第31図 SB28実測図	第63図 SB79・80・84・85、NR8土層断面図
	第64図 SB80カマド実測図

- 第65図 SB82実測図
- 第66図 SB83実測図
- 第67図 SB83カマド実測図
- 第68図 SB84カマド実測図
- 第69図 SB86実測図
- 第70図 SB86カマド実測図
- 第71図 SB88・89カマド実測図
- 第72図 SB90カマド実測図
- 第73図 SB91実測図
- 第74図 SB92カマド実測図
- 第75図 SB93実測図
- 第76図 SB94・98土層断面図
- 第77図 SB96実測図
- 第78図 SB97実測図
- 第79図 SB99～104、SK457～459・464・465実測図
- 第80図 SB100実測図
- 第81図 SB101カマド実測図
- 第82図 SB105実測図・カマド実測図
- 第83図 SB102カマド実測図
- 第84図 SB107実測図
- 第85図 SB109・110・118～122土層断面図
- 第86図 SB110カマド実測図
- 第87図 SB113土層断面図
- 第88図 SB111・112実測図・カマド実測図
- 第89図 SB108・114～117、SK546土層断面図
- 第90図 SB116・114実測図
- 第91図 SB116実測図
- 第92図 SB119実測図
- 第93図 SB121実測図・カマド実測図
- 第94図 SB122実測図
- 第95図 SB123実測図
- 第96図 SB124実測図
- 第97図 SB125実測図
- 第98図 SB126実測図
- 第99図 SB128～138、ST52、SD37、SA11ほか土層断面図・
SB126・134・135カマド実測図
- 第100図 SB128実測図
- 第101図 SB132実測図
- 第102図 SB137実測図
- 第103図 SB139実測図
- 第104図 SB141・144・149カマド実測図
- 第105図 SB145実測図
- 第106図 SB146実測図・カマド実測図
- 第107図 SB147実測図
- 第108図 SB148実測図
- 第109図 SB142～144・150・153土層断面図・SB153実測図・配
石実測図
- 第110図 SB151実測図(1)
- 第111図 SB151実測図(2)
- 第112図 SB154・156・157・159カマド実測図
- 第113図 SB155実測図・カマド実測図
- 第114図 SB158実測図
- 第115図 SB160実測図
- 第116図 SB161実測図
- 第117図 SB163実測図
- 第118図 SB167実測図
- 第119図 SB165～168カマド実測図
- 第120図 SB169実測図
- 第121図 SB171・172実測図
- 第122図 SB174実測図
- 第123図 SB175・179実測図
- 第124図 SB176・177カマド実測図
- 第125図 ST2・4・8実測図
- 第126図 ST5、SK137実測図
- 第127図 ST12・13実測図
- 第128図 ST16・17実測図
- 第129図 ST18・19実測図
- 第130図 ST21実測図
- 第131図 ST20・22実測図
- 第132図 ST29・30実測図
- 第133図 ST33・34実測図
- 第134図 ST35・36実測図
- 第135図 ST42・44・46実測図
- 第136図 ST47・49実測図
- 第137図 ST50・53実測図
- 第138図 ST52・57実測図
- 第139図 ST58・59実測図
- 第140図 ST61実測図
- 第141図 SD4実測図
- 第142図 SD20・21・22実測図
- 第143図 SD23・24実測図
- 第144図 SD39・40・42実測図
- 第145図 SD44実測図
- 第146図 古代土坑の長軸と短軸関係図
- 第147図 古代土坑実測図(1)
- 第148図 古代土坑実測図(2)
- 第149図 古代土坑実測図(3)
- 第150図 古代土坑実測図(4)
- 第151図 古代土坑実測図(5)
- 第152図 古代土坑実測図(6)

- 第153図 古代土坑実測図(7)
- 第154図 SK156実測図
- 第155図 古代小鍛冶址実測図
- 第156図 中部III地区の水田土壌
- 第157図 SB190実測図
- 第158図 ST72周辺遺構配置図
- 第159図 ST77実測図
- 第160図 ST78実測図
- 第161図 ST80実測図
- 第162図 ST81実測図
- 第163図 ST82実測図
- 第164図 ST84実測図
- 第165図 ST85実測図
- 第166図 ST86実測図
- 第167図 ST87実測図
- 第168図 ST88実測図
- 第169図 ST89実測図
- 第170図 SD51～56実測図
- 第171図 SD60実測図
- 第172図 SD62～66・81実測図
- 第173図 中世墓址実測図
- 第174図 中世土坑の長軸と短軸関係図
- 第175図 中世土坑実測図(1)
- 第176図 中世土坑実測図(2)
- 第177図 中世土坑実測図(3)
- 第178図 中世土坑実測図(4)
- 第179図 中世土坑実測図(5)
- 第180図 中世土坑実測図(6)
- 第181図 中世土坑実測図(7)
- 第182図 SK2769・2770実測図
- 第183図 SL11・12プラントオパール定量分析結果(抄)
- 第184図 SL12実測図
- 第185図 SL15実測図
- 第186図 SL18・19実測図
- 第187図 ST101実測図
- 第188図 ST102実測図
- 第189図 ST103実測図
- 第190図 ST104実測図
- 第191図 ST105実測図
- 第192図 ST106・107実測図
- 第193図 近世以降の土坑の長軸と短軸関係図・近世墓址実測図
- 第194図 縄文・弥生時代遺物分布図
- 第195図 竪穴住居址出土土器の構成
- 第196図 SB 2 出土土器法量分布図
- 第197図 SB 8 出土土器法量分布図
- 第198図 SB25出土土器法量分布図
- 第199図 SB27出土土器法量分布図
- 第200図 SB28出土土器法量分布図
- 第201図 SB32出土土器法量分布図
- 第202図 SB35出土土器法量分布図
- 第203図 SB61出土土器法量分布図
- 第204図 SB83出土土器法量分布図
- 第205図 SB84出土土器法量分布図
- 第206図 SB96出土土器法量分布図
- 第207図 SB122出土土器法量分布図
- 第208図 SB147出土土器法量分布図
- 第209図 SB153出土土器法量分布図
- 第210図 SB158出土土器法量分布図
- 第211図 SB167出土土器法量分布図
- 第212図 SB169出土土器法量分布図
- 第213図 SB170出土土器法量分布図
- 第214図 墨書文字集成
- 第215図 遺構別出土鉄滓の重量と個数
- 第216図 近世・近代の遺構と遺物分布
- 第217図 古代の竪穴住居址の規模
- 第218図 古代の竪穴住居址の類型(1)
- 第219図 古代の竪穴住居址の類型(2)
- 第220図 古代の竪穴住居址の平面形の推移
- 第221図 古代の竪穴住居址の類型別件数の推移
- 第222図 古代竪穴住居址のカマドの類型(1)
- 第223図 古代竪穴住居址のカマドの類型(2)
- 第224図 古代竪穴住居址の主軸方向
- 第225図 古代掘立柱建物址の棟方向と規模
- 第226図 中部 I・II地区の古代1・2期の集落
- 第227図 古代集落景観変遷図(1)
- 第228図 古代集落景観変遷図(2)
- 第229図 古代集落景観変遷図(3)
- 第230図 三の宮遺跡隣接調査区遺構配置図
- 第231図 古代の鉄製品・鉄滓の時期別保有率
- 第232図 古代7・8期の集落
- 第233図 古代7・8期の集落と土器の出土量、鉄製品の所有
- 第234図 古代7・8期の集落と墨書・刻書土器の分布
- 第235図 北部II地区中世土坑群遺物出土状況
- 第236図 北部II地区中世土坑群の諸属性
- 第237図 北部II地区中世土坑群の長軸方向
- 第238図 北部II地区中世土坑群の変遷(1)
- 第239図 北部II地区中世土坑群の変遷(2)
- 第240図 北端 I 地区南の中近世遺構群
- 第241図 微地形と居住域の変遷
- 第242図 土層別の堆積範囲

挿表目次

第1表	古代の土坑形態分類表	第24表	SB61出土土器の構成
第2表	中世の土坑形態分類表	第25表	SB78出土土器の構成
第3表	SL12田面・アゼ計測表	第26表	SB82出土土器の構成
第4表	SL15アゼの幅・走向表	第27表	SB84出土土器の構成
第5表	SL15田面の形状と面積表	第28表	SB89出土土器の構成
第6表	SL16アゼの幅・走向表	第29表	SB96出土土器の構成
第7表	SL16田面の形状・面積表	第30表	SB102出土土器の構成
第8表	SL18アゼの幅・走向表	第31表	SB105出土土器の構成
第9表	SL18田面の形状・面積表	第32表	SB107出土土器の構成
第10表	SL19アゼの幅・走向表	第33表	SB108出土土器の構成
第11表	SL19田面の形状・面積表	第34表	SB111出土土器の構成
第12表	SL23アゼの幅・走向表	第35表	SB119出土土器の構成
第13表	SL23田面の形状・面積表	第36表	SB122出土土器の構成
第14表	近世の土坑形態分類表	第37表	SB147出土土器の構成
第15表	SB 2 出土土器の構成	第38表	SB148出土土器の構成
第16表	SB 8 出土土器の構成	第39表	SB151出土土器の構成
第17表	SB25出土土器の構成	第40表	SB153出土土器の構成
第18表	SB29出土土器の構成	第41表	SB167出土土器の構成
第19表	SB30出土土器の構成	第42表	SB169出土土器の構成
第20表	SB33出土土器の構成	第43表	SB176出土土器の構成
第21表	SB35出土土器の構成	第44表	SB179出土土器の構成
第22表	SB51出土土器の構成	第45表	墨書土器一覧表
第23表	SB58出土土器の構成	第46表	近世土器・陶磁器器種構成表

付表目次

付表1	三の宮遺跡プラントオパール定量分析結果(抄)	付表10	三の宮遺跡古代鉄製品・鉄滓遺構別一覧表
付表2	三の宮遺跡古代堅穴住居址一覧表	付表11	三の宮遺跡出土石製品一覧表
付表3	三の宮遺跡古代堅穴住居址覆土一覧表	付表12	三の宮遺跡出土土製品一覧表
付表4	三の宮遺跡古代掘立柱建物址一覧表	付表13	三の宮遺跡中世土器・陶磁器出土遺構別一覧表
付表5	三の宮遺跡中・近世掘立柱建物址一覧表	付表14	三の宮遺跡中世鉄製品・鉄滓遺構別一覧表
付表6	三の宮遺跡遺構別古代土器一覧表	付表15	三の宮遺跡銅製品一覧表
付表7	三の宮遺跡墨書・刻書土器一覧表	付表16	三の宮遺跡古代遺構の時期区分表
付表8	三の宮遺跡陶硯・転用硯一覧表	付表17	三の宮遺跡遺構番号新旧対照表
付表9	三の宮遺跡出土鉄製品・鉄滓時期別一覧表		

第1章 遺跡の概観と調査の概要

第1節 遺跡の概観

三の宮遺跡は松本市大字島立字大麦田3,100一〇ほかに所在する。梓川によって形成された三角州性扇状地上に展開し、奈良井川左岸に位置する現中村・三の宮集落を含む水田地帯一帯が本遺跡の範囲である。現地表面の標高は598～529mを測り、南西から北東方向に向かって緩やかに傾斜している(図版2)。

今回設定された調査区域は三の宮遺跡の西端を縦断しており、「新村島立条里遺構」と把握されてきた条里景観が広がる地域の北東部にあたる。しかし、本遺跡から南側に接近する北栗遺跡にかけて、さらに、松本市教育委員会による調査では現永田集落にかけて切れ間なく遺構が展開するため、必ずしも遺跡の範囲は明確ではない。

遺跡内には条里地割の南北方向の基準線に比定されている仁科道(市道仁科線)が西寄りに走り、「堰・セギ」と当地域で総称され水田の用排水路として機能する河川が遺跡内に何本か西から東へ流れている。また、遺跡南東よりに延喜式内の小社に登載されている沙田神社が鎮座している。一方、宮沢・久保川に沿った沙田神社周辺の7地点で土師器・須恵器・灰釉陶器・有袋鉄斧・鉄製鋤鍬先が、また今回の調査区域のすぐ東でも該期の遺物の出土が伝えられ、松本平「西麓ないし梓川からの分流による自然流とその利用」によった古墳時代以降の集落の成立が以前から指摘されていた(藤沢宗平1973)。

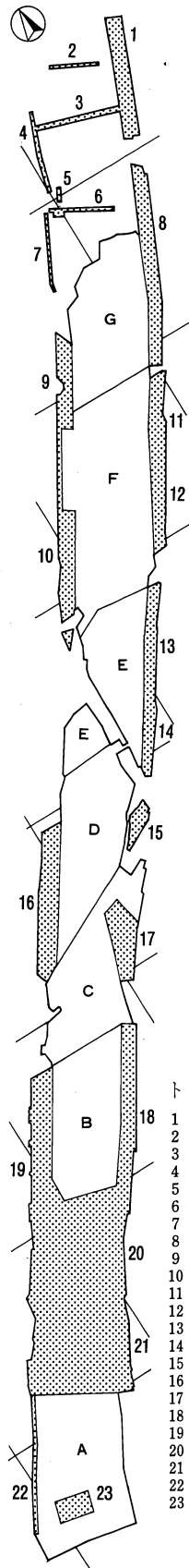
近年、中央道建設に関連して路線周辺のは場整備事業と県道改良工事が開始され、それに伴う埋蔵文化財の調査が松本市教育委員会(以下、松本市教委と略す)によって南栗遺跡を皮切りに進められ、三の宮遺跡の範囲内では島立小学校部分を含め6地点で調査が行われ、成果も公刊されつつある(松本市教委1988a・88b・88c・89a)。

条里遺構や予想される水田址に対処する意味で本調査に先行してプラントオパール定量分析を宮崎大学の藤原宏志氏に依頼し、昭和60年6月25日から29日にかけて実施した。調査は路線建設用の中心杭沿い100m置きに計8か所の試掘坑を設定し資料を採取した。その結果、水田址もさることながら古代集落にかかわる遺構も3地点で確認された(第4図、付表1)。

このような歴史的環境と先行調査の成果に基づき、今回の調査は条里遺構の存否および成立時期や性格付を含めた水田址の確認、それを経営したであろう古代・中世の集落の把握、さらに、河川の状況や基本土層の堆積など地形を中心とした自然環境と遺構群との係り、集落構造の基礎となる単位的な遺構群の抽出などいくつかの課題を設定し調査に臨んだ。

なお、調査以前の遺跡の土地利用は水田が主体で、畠・小規模な墓地が見られた。

発掘調査区・トレンチ

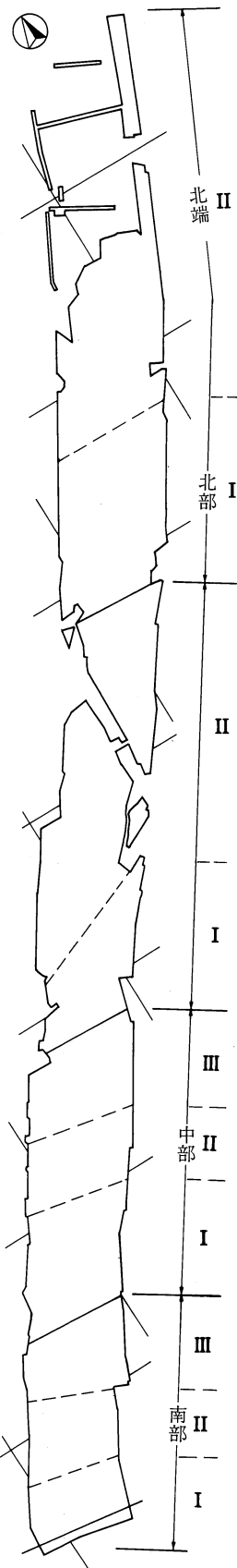


トレンチ名

- 1: 梅沢北東側トレンチ(大庭)
- 2: 梅沢北トレンチ
- 3: 梅沢北東西トレンチ
- 4: 梅沢北西側トレンチ
- 5: 梅沢トレンチ
- 6: 梅沢南東西トレンチ
- 7: 梅沢南西側トレンチ
- 8: 梅沢南東側トレンチ
- 9: 堂沢北西側トレンチII
- 10: 堂沢北西側トレンチI
- 11: 梅沢・堂沢間東側トレンチ
- 12: 堂沢北東側トレンチ(島立北部)
- 13: 堂沢南東側トレンチ(島立中部)
- 14: 堂沢南東側トレンチ(島立北部)
- 15: 05トレンチ
- 16: 中村中央西トレンチ
- 17: 04トレンチ
- 18: 03トレンチ(中村南東トレンチ)
- 19: 中村南西トレンチ
- 20: 02トレンチ
- 21: 01トレンチ
- 22: 境沢北南北トレンチ
- 23: 境沢北区(CB13区)

昭和60年度調査分

地区呼称



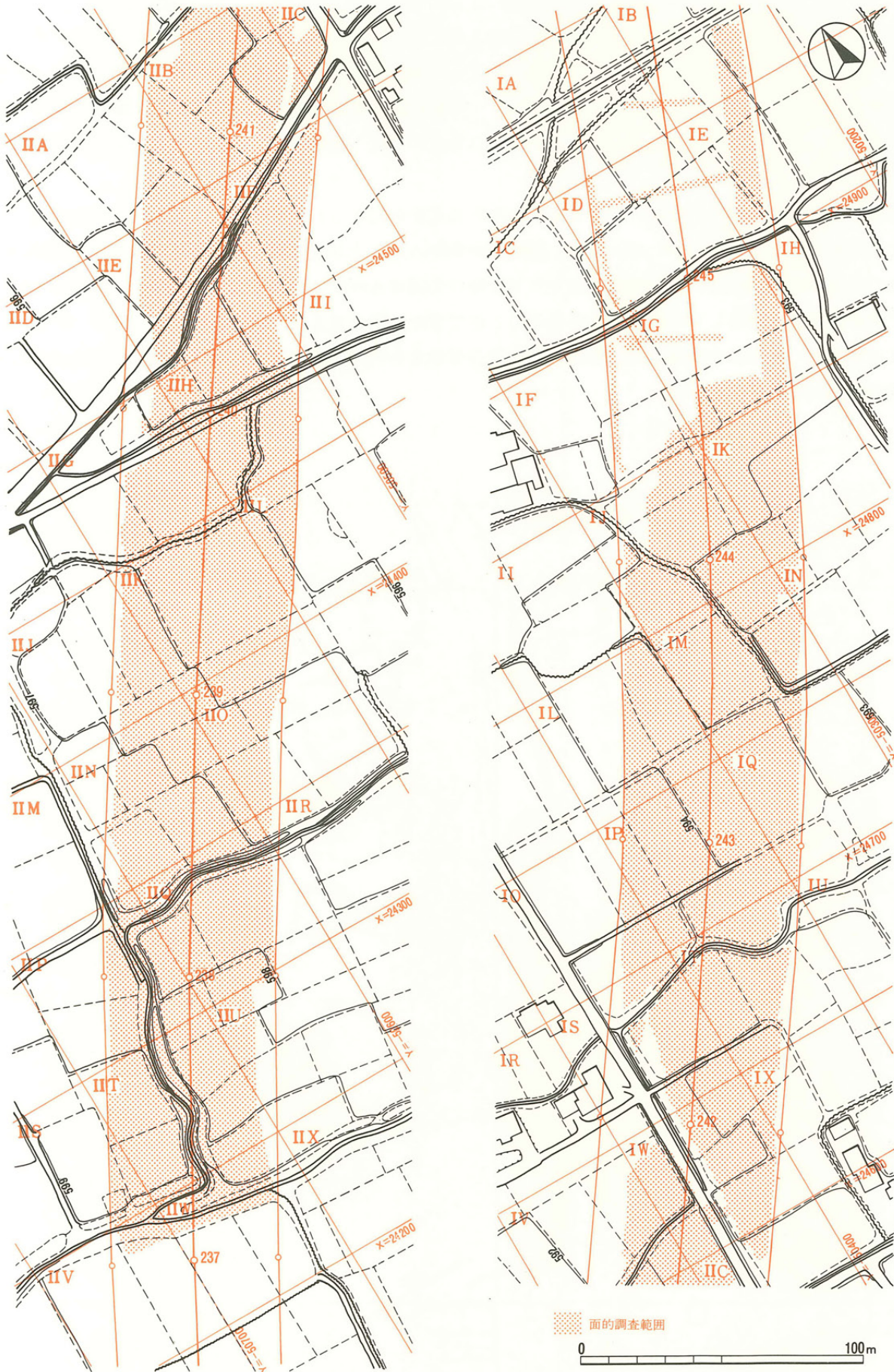
第2節 調査の概要

中央道長野線は遺跡の西側を南南西から北北東の方向へ縦断するため、境沢から松本電鉄上高地線南側まで直線距離にして850m、43,120㎡の範囲が調査対象になった。調査は昭和60年8月26日に開始され、冬季の整理作業を挟んで61年11月13日に至る2か年余に及んだ。この間路線建設工事と並行して調査は進められ、昭和60年度は工事中両側道下とカルバートボックス(立体交差部)設置箇所(調査)の調査が先行され、昭和61年度は本線下の調査が中心であった。さらに生活道路・上水道・用水路の付替え、住居の撤去などのため調査区はかなり細かく区切られることになった(第1図)。

初年度の調査は、遺跡の南端から北端までの両側道下片側幅10mの調査と、遺跡の南寄りで県道と交差する大型カルバートボックス設置箇所下の総計26,800㎡を対象とし、8月26日から12月21日にかけて行われた。最初は松電道床南側と市道仁科線南側の5地点で重機を導入しつつトレンチ調査を開始した。トレンチ内では各基本土層上面で遺構遺物の検出に努め、遺構が確認された地点では面的調査に切り替えた。当初は2班12名体制でこれに臨み、最終的には16名がこれに当たった。県道と交差する部分では比較的まとまった数量と内容の遺構・遺物群を確認し、遺跡全体では予想されたほど広範な水田址や条里遺構は認められず、竪穴住居址40・掘立柱建物址30・溝14・土坑601・水田址・畠址各1などが確認され、多くの部分が古代から中世にかけての集落や墓域に該当することが判明した。

次年度は4月7日に調査を再開し、道

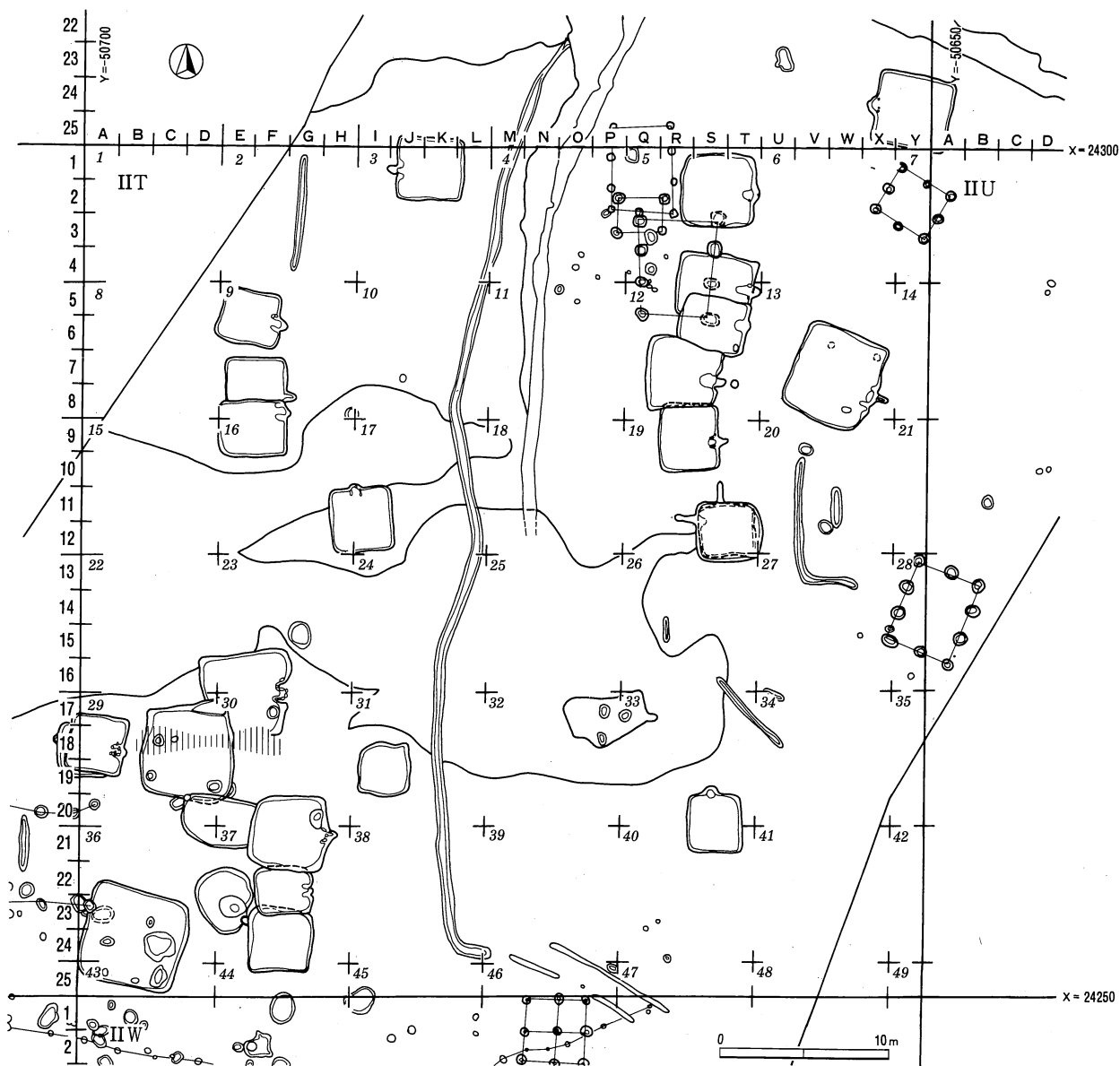
第1図 発掘調査区・トレンチと地区呼称



第2図 グリッド配置図(大地区)

路の付け替えのため10月3日に中断したが10月14日に再開し同月27日にすべての発掘調査が完了した。調査は本線下が主体で工事工程等との調整から7調査区に分け、12名の調査研究員が3班に分かれて作業を進め、最後は遺跡中央部の調査をもって終了した。この間に確認された遺構は古代から近世にかけての竪穴住居址140・掘立柱建物址58・溝49・土坑2162・水田址16・畝址3などで、松本平の遺跡のなかでも有数の遺構数と遺物量をもつ遺跡となった。また、61年度には松本市教委による三の宮遺跡の調査が並行して行われている。

整理作業は昭和60年12月から61年3月までと同年10月から62年3月まで断続的に行った。遺物の水洗注記は発掘作業と並行して行ったが、遺物・遺構数が多かったことから図面・調査所見の整理は発掘調査終了後の冬季に実施した。また、発掘調査・出土遺物の公開は各年度に一回ずつ遺跡見学会、塩尻市・松本市で遺物速報展を開催し多くの見学者を得ることができた。調査成果の一部は当センター発行の年報・埋蔵文化財ニュース等にも掲載した。なお、報告書刊行のための本格的な整理作業は昭和63年4月から始め、本報告書刊行の運びとなった。



第3図 グリッド配置図(中・小地区)

第3節 調査の方法

遺跡名称は長野県教育委員会作成の遺跡台帳に掲載される名称を用いたが、遺跡の範囲は不明瞭であるため南隣する北栗遺跡との境界は便宜的に境沢とした。遺跡記号は「ESM」と定めた。

調査は原則的に分層発掘であるが工事工程による時間の制約から、中近世遺構の検出されるI C層上面と古代遺構が発見されるII A層上面・II B層上面の合わせて三面の調査を行った。最下位の検出面の深さは現地表面から150cmに及ぶ。部分的に土層の堆積時期や堆積環境を把握するため人力による調査も励行した。遺物の取り上げについては検出面の遺物ではトレンチ名もしくは中・小地区(グリット)名を冠して層位別に行い、遺構内の遺物は分層ごとに取り上げ床面やカマド等の施設内の遺物は可能な限り遺物の位置と標高を記録した。なお、遺物の注記は発掘調査時の遺構名に基づいている。

測量は建設省の規定による第VIII系座標を使用し、既に座標の示されている日本道路公団工事用中心杭、STA240とSTA241から算出される $X=24500$ 、 $Y=-50500$ を基準点(II I A01)とした。また、標高はSTA240の杭高から引出し、調査区内に独自のベンチマークを設けて使用した。調査区の設定は当センターの地区割付け原則に従い基準点から50mのメッシュの基準線を設け、遺跡の北端からI A～I X・II A～II Xの大地区を設定した(第2図)。さらに、その中を8mメッシュの中地区(8mグリット)、2mメッシュの小地区(2mグリット)に区分し(第3図)、遺構の測量・遺物の取り上げに使用した。

遺構の測量は簡易遣り方をくみ、遺構図は20分の1の縮尺で図化したがかマドなどの遺構内施設は必要に応じて10分の1で記録し、集石・水田址などは写真測量を併用した。

本報告書では記述を進めるうえで便宜上、遺跡内での位置を示す呼称として調査区全域を南部地区・中部地区・北部地区・北端地区の四つに分け、さらに細分が必要なときは各地区内を2・3分して、南部I地区・北部II地区というように使用している(第1・4図)。なお、本書に掲載された遺構番号は発掘調査時のものを振替えており、その対照はSB・STについては一覧表(附表2・4)、そのほか本文編巻末の附表17に示した。

第4節 調査の経過

昭和60年度

- 6月25日 プラントオパール定量分析のため試掘杭を8か所で開ける。20・22・23地点で竪穴住居址のカマドなどの遺構を確認する。
- 8月26日 遺跡北端より重機・人力によるトレンチ調査を開始。中近世遺物と遺構を確認。
- 9月4日 市道仁科線南側5か所でトレンチ調査を開始し、I B層上面で火葬墓を確認。
仁科線北側では面的調査が開始され中世の土坑群を確認。
- 9月17日 遺跡北端（大庭地区）と中部地区（03トレンチ）で水田址を確認。宮崎大藤原宏志氏、信濃史学会小穴喜一氏・小穴芳実氏水田址を視察。指導を受ける。
- 9月27日 北部I地区（04トレンチ）I C層上面で畝址・堀立柱建物址を検出。
- 10月1日 中部I地区で面的調査を開始（県道交差部のカルバートボックス下）。II A・II B層上面で古墳時代からの平安時代の遺構を多数確認。
- 10月7日 小境沢下の調査に入る。II A層上面で広範な河川跡を確認する。
- 10月24日 北部II地区で集石土坑・水田跡の写真測量を実施
- 10月26日 南部I地区の境沢北のカルバートボックス下の調査開始。多数の古代遺構が確認される。
- 11月13日 仁科線北側の調査終了。
- 12月6日 南部III・中部I地区（最南端・南端）の古代遺構群の航空測量を実施。
- 12月7日 三の宮・北栗遺跡の見学会を松本市教委と協賛して実施。寒風のなか見学者60名を数える。
- 12月13日 梅沢下の調査。小穴喜一氏・小穴芳実氏調査を視察。指導を受ける。
- 2月25日 滋賀大小笠原好彦氏来所。古代集落について指導を受ける。
- 3月10日 次年度に向け準備開始。重機による表土除去を始める。
- 5月17日 小笠原好彦氏調査を視察。19日に松本筑摩高校桐原健氏、20日に檀原考古学研究所石野博信氏遺跡を視察。
- 5月21日 藤原宏志氏来所。プラントオパール分析を依頼する。中部地区で航空測量実施。
- 5月21日 京都大高谷好一氏、信州大笹本正浩氏、遺跡を視察。
- 6月6日 南部地区調査終了。北端（F区）調査開始。
- 6月10日 北部I・北部II地区東側（C・E区）で航空測量を実施。
- 6月20日 追手門大金田章裕氏遺跡を視察。
- 6月24日 宮沢下・中部・北部I地区（B・C区）調査終了。北部II地区西側（D区）の調査を開始する。
- 7月20日 隣接遺跡とともに遺跡見学会を実施。見学者300名を数える。
- 7月25日 北部II地区東側の調査終了。
- 8月23日 堂沢下の調査をもって北端地区の調査終了。
- 8月30日 奈良大水野正好氏来所。古代集落・へら描き土器について指導を受ける。
- 9月3日 台風15号による大雨のため遺跡水没。復旧に3日費やす。
- 9月5日 北部II地区西側II A層上面検出の遺構群を航空測量。終了後II B層上面の調査に移る。
- 9月10日 信濃毎日新聞社、礎石をもつ竪穴住居址を取材。
- 10月2日 北部II地区の調査終了。出土遺物の水洗・注記作業を始める。
- 10月14日 市道久保川線下・仁科線下の調査を始める。仁科線下にはNTTのケーブル・上水道本管が埋設されているためトレンチ調査に規模を縮小して実施。
- 10月22日 小穴芳実氏、仁科線下・久保川下の調査を視察。指導を受ける。
- 10月27日 全ての発掘調査を終了する。本格的な整理作業を始める。
- 3月30日 大部分の図面・発掘所見の整理終了。

昭和62年度

- 4月1日 遺構・遺物図版レイアウトなど報告書に向けた整理作業を始める。

昭和63年度

- 4月1日 遺物実測・図版トレースなど引き続き報告書に向けた整理作業を進める。

平成元年度

- 4月1日 原稿執筆など引き続き報告書に向けた整理作業を進める。

昭和61年度

- 4月7日 風雪のなか調査開始式。調査研究員12名・作業員70名の体制で、南部地区（A区）・中部地区（B区）・北部地区（C区）・北端地区（G区）の調査を同時に開始
- 4月30日 北端II地区（G区）の調査を終了し、北部II地区（E区）の調査を開始。
- 5月14日 松本筑摩高校2年生42名、遺跡・条里景観を見学農事試験場飯山試験地長梅村弘氏来所。遺跡で水田土壌について指導を受ける。

第5節 基本層序と微地形・河川下の調査

1 基本層序

IA層 褐灰色含礫泥層。三の宮遺跡で見られる土層で最上位にあり、遺跡全面に分布する。層厚は20～40cmを測り、上部または全部が現在の水田耕作土、ないしは灰色低地水田土壌化作用を受けている。小豆大から鶏卵大までの礫を散在的に含み、細砂ないし極細砂の基質から成る。

灰色水田土壌化は中部・北部地区で著しく、南部・北端地区に比べて粒子が細くなる傾向にある。南部・北端地区では南縁または北縁で粗粒化し、下部はマンガン・水酸化鉄の集積層となっている。

IB層 灰オリーブ含礫泥層。IC層を覆い遺跡全面に分布する。また、直接III層を覆っている地点も見られる。層厚は20～30cmを測り、本層上面からの水田土壌化や現水田(IA層上面)による集積層となっている。小豆大から拳大までの礫を少量ではあるが塊状に含み、基質はシルト質である。

北端II地区では級化層理も認められ、層厚も厚く直接III層を覆う。堂沢や梅沢沿いでは下部に礫質の氾濫性堆積物が認められ、河川から離れるにしたがって同一層内で細粒化し、河川による側方堆積の過程を示している。これは広域に広がるIB層とは推定される堆積機構を別にし、IB層とは異なった堆積単位と考えられる。北端地区ではこれをIB層下部層とし広域に展開する上部層と区別する。

IC層 にぶい黄褐色含礫泥層。ID層またはIIA層を覆い、北端I地区の一部を除き遺跡全面に分布する。層厚は10～50cmと変化が大きい。小豆大から極粗砂大の粗粒物質を塊状に含み、主として極細砂の基質から成る。

遺跡南から北寄り向かい徐々に粗粒化する傾向にあり、礫の含有率が低下して細粒砂に集中する(中央値3.1φ、集中度0.43φ)。河川沿い、特に北端地区では級化層理が観察される。

ID層 灰オリーブまたは褐灰色の含礫泥層またはシルト層。IIA層を覆い、堂沢以南で断続的に小範囲に分布し、堂沢以北では北端I・北端II地区の北側を除く低位に分布する。ID層は推定される堆積機構により2大別できるので、以下分けて記載する。

IDf層 一般に指頭大以下の礫を塊状に含みシルト基質から成る。境沢・小境沢・宮沢・久保川の各河川に添ったIIA層上面の低地に分布し、各地点で複数の堆積単位が識別される。特に宮沢に添った地点では三つの堆積単位を区別できるが、各単位の層厚は10cmを越えない。また、含まれる礫による級化層理が発達する単位も認められ、上面は細粒物質によって水平が保たれようとしている。以下の現象から水を多量に含んだ小規模な氾濫による堆積物と判断される。

IDr層 シルト質で級化層理が認められ、特に北端地区ではしばしば葉理が視察される。礫はほとんど含まれず構成物質は中粒砂とシルトに2分されるが集中度は0.7と高く淘汰良好である。また、北端II地区の梅沢付近では北に傾斜する礫のレンズ状堆積物を挟んでいる。以上の現象から、大形河川の流路内堆積物と判断される。

IIA層 褐色細砂層。IIB層またはIII層を覆い遺跡北縁を除く全面に分布する。層厚は10～25cmを測り、III層上面が高い地点では薄い傾向にある。

層相は2分され、南部から北部地区でIII層が高い部分と北端地区では礫を多含し、III層の低い地点では安定した細砂層である。両相は漸移関係にある。

IIB層 黄褐色シルト層。III層を覆い南部から北部地区の基底礫層上面の起伏が低まった部分に堆積する。層厚は20～30cmである。

本遺跡で見られる土層中、分級の程度が最も低く(集中度0.23φ)、静寂な環境下で堆積したことを物語っている。また、各分布地点では礫を主体とする大形のレンズ状堆積物を挟む。

III層 礫層。本遺跡の基底を構成し、地表下40～150cm付近で出現する。松本盆地西方の山系に由来する拳大以上の礫から構成され、上面には複数の礫堆が存在し、波状の凹凸地形を形成している。

小凸部の頂部は東西方向に主軸をもち、200～450mの間隔で4地点で認められる。頂部・底部の標高とも北に進むにつれ低くなり、起伏の振幅は南に向かうほど大きい。

2 遺構切込み面の微地形

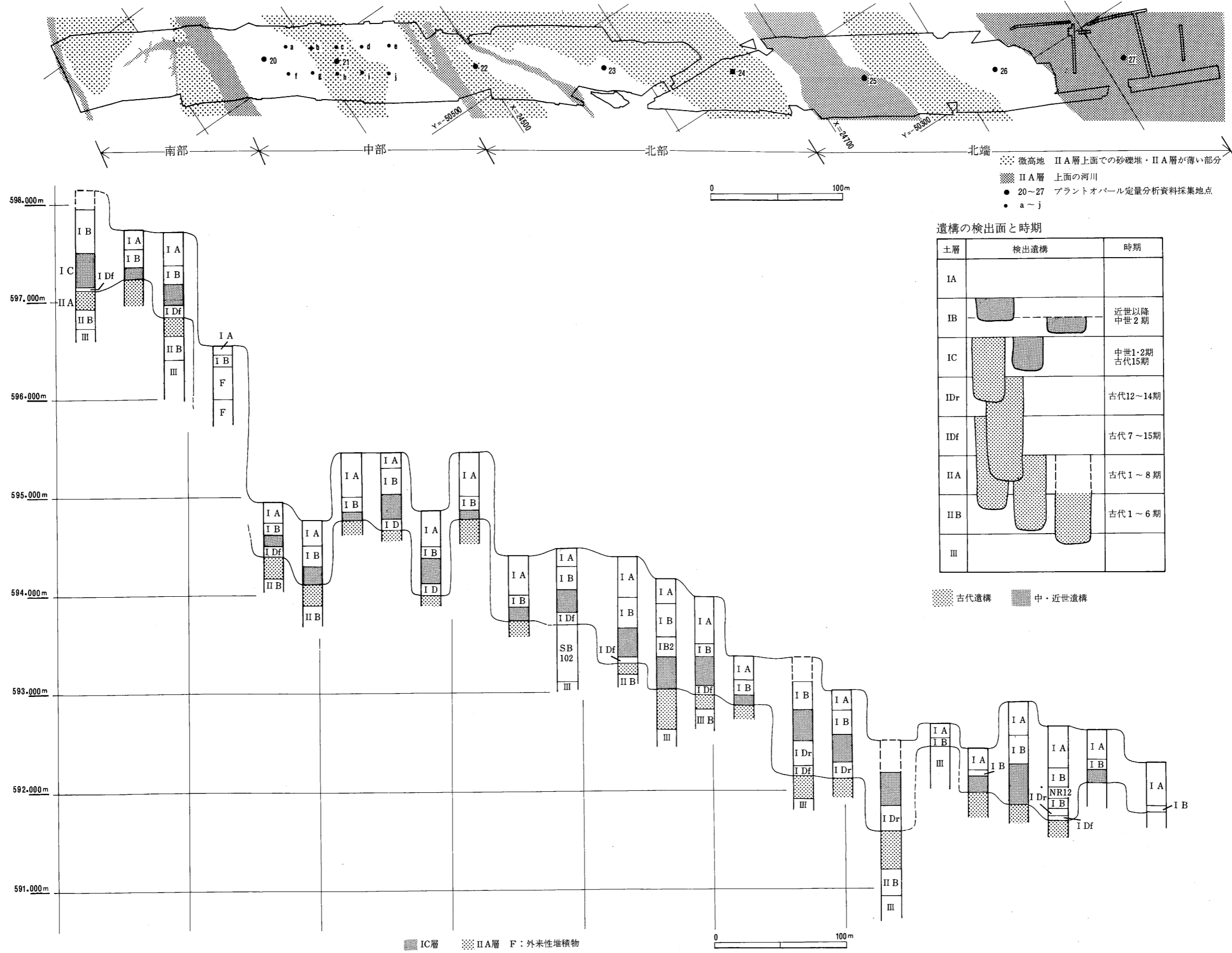
遺構切込み面は遺構の検出状態や帰属時期からII A層上面が古代1期から5・6期(古墳時代後期～平安時代前期)、I Df層上面が古代6・7期から14・15期(平安時代中期～後期)、I Dr層上面が古代12～14期(平安時代後期)、I C層上面が古代15期(平安時代末)、I B層下部上面が中世2期末、I B層上部上面が近世前期、I A層上面が近世中期と判断される。

おそらく縄文時代から弥生時代中期にかけて本遺跡付近には網状流河川が流れ、礫堆(中洲)を形成していたと思われる。網状流の衰退に伴って河道は幅を狭め、細粒のII B層がそのあとへ堆積した。松本市教委による三の宮遺跡の調査では(中村集落東地点)、本調査区北部地区と連続した地形環境にあるII B層上面で弥生時代末から古墳時代初頭にかけての遺構が確認されており、少なくとも弥生時代後期以前にはII B層は堆積完了していたと考えられる。さらに、古墳時代後期までの間にII A層が小凹地を埋積し、かつての旺盛な河道は小河川として小凹地に残存し、主体的な流路は堂沢以北(北端地区から遺跡北側)に退いたと考えられる(古樽木川の形成)。

古墳時代後期から平安時代前期にかけては上記の過程によってもたらされた地形が展開していたと考えられる。すなわち、南部から北部地区にかけて砂礫の含有量の多い小凸地が約200m間隔で3か所配列し、最も北側の小凸地の以北には河岸が展開し、その先には規模を小さくした網状流河川「古樽木川」が東流していた。南部から北部地区では離水してしばらくの時間経過があったものの北端地区ではひとたび増水すると全てが水に没する「小氾濫原」で居住に適した安定した土地ではなかったと推察される。増水時の冠水を防いでいたのは最も北の小凸地で、頂部から河岸までの落差は1mに及ぶ。河道の蛇行は激しく、本調査区では北側へ屈曲する部分に当たる。時代が下るにつれ、河道を北に移しながら曲率を大きくしていることが調査所見から明らかにされており、自然流路的な性格を有していたことを示している。したがって、小凸地付近は沖積段丘崖および蛇行洲の性格を持っていたといえる。ともあれ南部から北部地区では小凹地に小河川が流れ、安定した環境と土壌が用意されていた。

その後の平安時代後期にかけては気候は乾燥化に向かったらしい(「松本市内その1」参照)。流量の減少に伴い河床は低下し、北端地区にあった河岸は離水し冠水域はより北側、梅沢以北に移ったと考えられる。古樽木川はさらに北に後退する一方で、上流側での浸食が盛んになって小河川沿いは何回かの氾濫に見舞われた。それらの小規模な氾濫は古代6・7期と12～14期に起こり、前者はI Df層、後者はI Dr層に比定される。これらの堆積により北端地区では離水の傾向はより進んだものの、南部から北部地区では地形景観の大局には影響することはなかったと思われる。

地形景観を一変させたのは古代14・15期頃(平安時代末期)のI C層の堆積で、これは水を飽和状態に含む低密度で規模の大きな流体が予想される。このI C層は小河川沿いでは級化層理が観察されることから、小河川沿いに流下し遺跡のほぼ全面が短期間のうちに覆い尽くされたものと判断される。I C層の堆積によって前代にあった小凹地はほとんど埋積されて平坦化し梅沢以北に大河川が残ったが、これも徐々に後



第4図 土層概念図

退して本遺跡付近の全面が離水した。

I C層上面の地形面がしばらく続いた後、中世末期から近世にかけて2回の泥流に覆われて(I B層・I A層の堆積)現在に至るが、地形形成過程を通してみると、河川が北に退き離水域が徐々に広がり、地表面の起伏が平準化される経緯を読み取ることができる。南に隣接する北栗遺跡北半部からの地形傾斜の状態と、起伏の波長が100mから200mへと大きくなる点を勘案すると、地形の変換点が境沢・堂沢・梅沢に想定され、それらが時々の離水域と流路との境界に当たりながら、北の地点ほど新しい離水域であるという図式が成り立つ。こうした意味で本遺跡全体が相対的に北栗遺跡より新しい土地であると考えられる。

3 河川下の調査

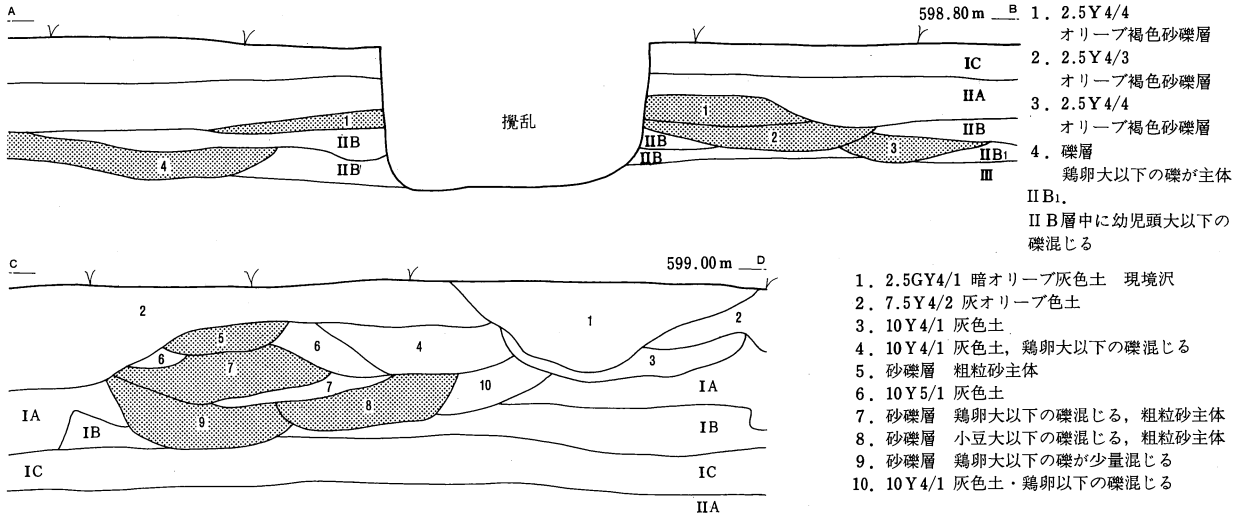
概観

目的：本遺跡内では北栗遺跡との境とした境沢(堺沢)をはじめ小境沢・宮沢・久保川・堂沢・梅沢(男女沢)など西から東へ流れる河川と、それから分岐し直交する方向に流れる何本かの流路(「横堰」)が存在し、水田の用排水路として機能している。この地域では水田地帯の用水路を一般に「堰」と称しているが、それら堰を含めた水田の現景観や地字名の分布状況から本遺跡付近には条里制が想定され、樹枝状型を呈する水路の展開形態から、自然流路を治定・管理し用水路として維持してきたと想定されている(小穴喜一1987ほか)。今回の調査ではこれらの堰がどの時期から流れ、どのように治定・管理されていたかを究明するため、各河川に直交する1・2本の試掘溝を設定し断面観察を行い、平面形も図化した。変遷過程：境沢・小境沢は古代1期以前、II A・II B層の堆積した頃から河川として存在し、それが古代に治定管理され現実に至ったと判断される。中世までは小境沢のほうが優勢な河川であった。また、堂沢は古代末期、梅沢は中世末期頃現在の位置に治定されたと考えられ、それ以前には流路幅30mを越える範囲を自由蛇行的に河道を変えていたと推定される。久保川と横堰のNR3・4はその地形環境や流路の形状から人為的に開削された流路と判断され、宮沢についてもその可能性が窺える。河川の管理：土層断面に表れる流路は砂・砂礫で満たされた河川堆積物としてであって、必ずしも恒常的に水流があったか否かは判断できない。河川管理面では現地表面に近い部分を除き築堤の痕跡は見られず、流路の両側は平坦面として観察されるが、これについては上位の土層の堆積時に旧地表面の凸部が削剝されたことも影響を与えていると考えられる。直接的な管理の痕跡としては境沢・久保川沿いに柵址や杭の跡と考えられる小土坑が見られ、小境沢では流路に沿って溝が掘られていることが挙げられよう。逆に、現在いずれの河川も河床が上昇し天井川化しており、そのことが継続的に河川管理がされてきたことの証査と考えられる。

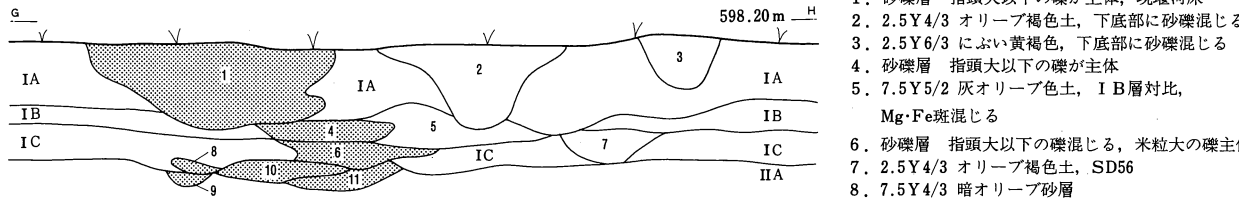
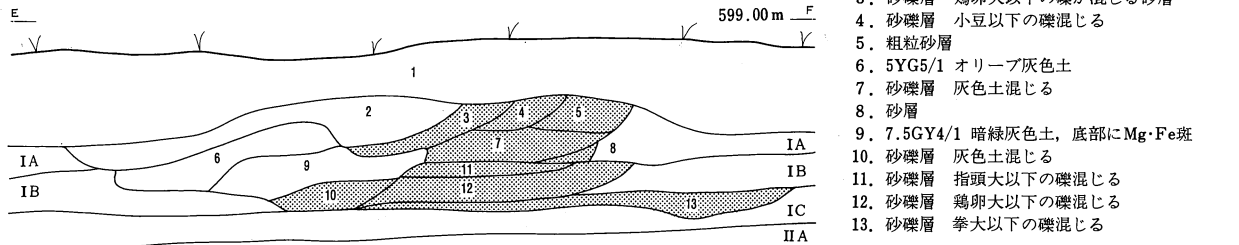
境沢 位置：南部III 図版4・66、第5図

調査の方法：調査区のほぼ中央に流路の直交するトレンチを入れた。なお、同様の調査が北栗遺跡でもなされている(当センター発掘調査報告書8参照)。流路の平面形はII A層上面でおさえた。変遷過程：近年の改修工事により付近は大きく削平されているため土層断面でも攪乱された部分が多く、II A層以上の部分では流路跡をつかむことはできなかった。II B層上面およびII A層中で幅5mを越えるような砂礫の堆積が4回認められ、II A・II B層の堆積時に河川が流れていたことが窺える。今回の調査では遺構の展開する時期の流路を直接確認することはできなかったが、NR1・2が本流路から溢れ出た氾濫性堆積物と考えられ、また、古代8期の遺構配置はこの流路を意識して展開していると考えられることから、古代にも流路が存在していたと判断される。本流路は河床が高まりほかの流路に比べても天井川化が進行している。II A層上面での流路跡は北栗遺跡側にやや湾曲していた。

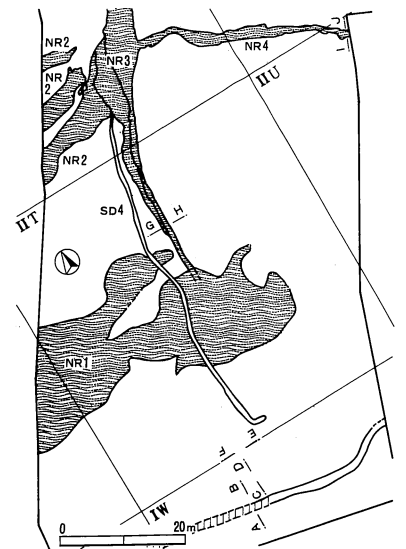
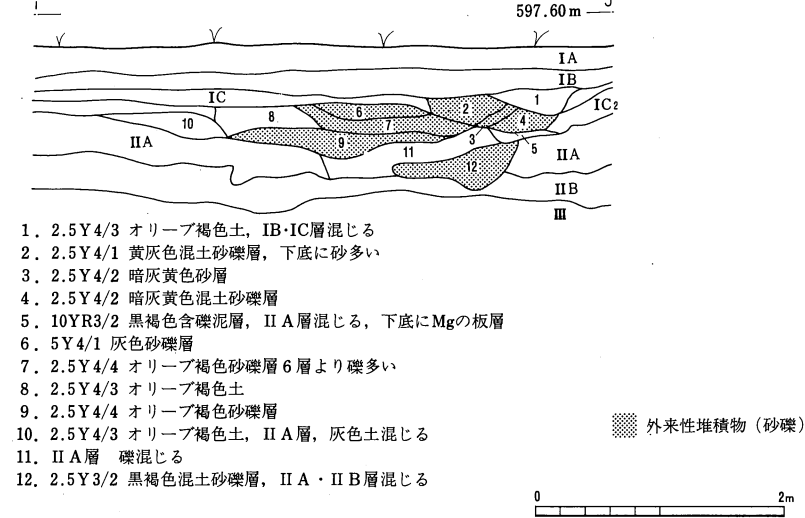
境沢



NR3



NR4



第5図 境沢、NR3・4土層断面図

NR 3 位置：南部 I・II 図版4・66、第5図

調査の方法：現状では境沢から取水し、小境沢に水を落とす横堰であるが、河川名が付されていないため NR 3 と仮称する。調査は境沢から分岐し並走する部分と、北に折れた地点・流路のほぼ中央の三か所にトレンチを設定し、I C 層上面と II A 層上面で平面形を図化した。変遷過程：南北方向に延びる部分についてはその初源は II A 層上面にもとめられるが、境沢からの分岐部分については I B 層以上でしか確認されなかった(第2節10自然流路・河川跡参照)。規模・形状：中央部では II A 層上面から現在に至るまで7回の流路跡が認められ、それぞれの幅は0.3～2 mを測り1 m前後のものが多い。途中で NR 4 を分岐させているが、この部分では I C・II A 層上面でも幅広く砂礫の堆積も厚い。この流路が境沢から取水するようになったのは I B 層堆積以後で、それ以前、特に古代においては現在とは逆に小境沢から取水し NR 4 および境沢へ水を流していたと判断される。

NR 4 位置：南部 II 図版4・66、第5図

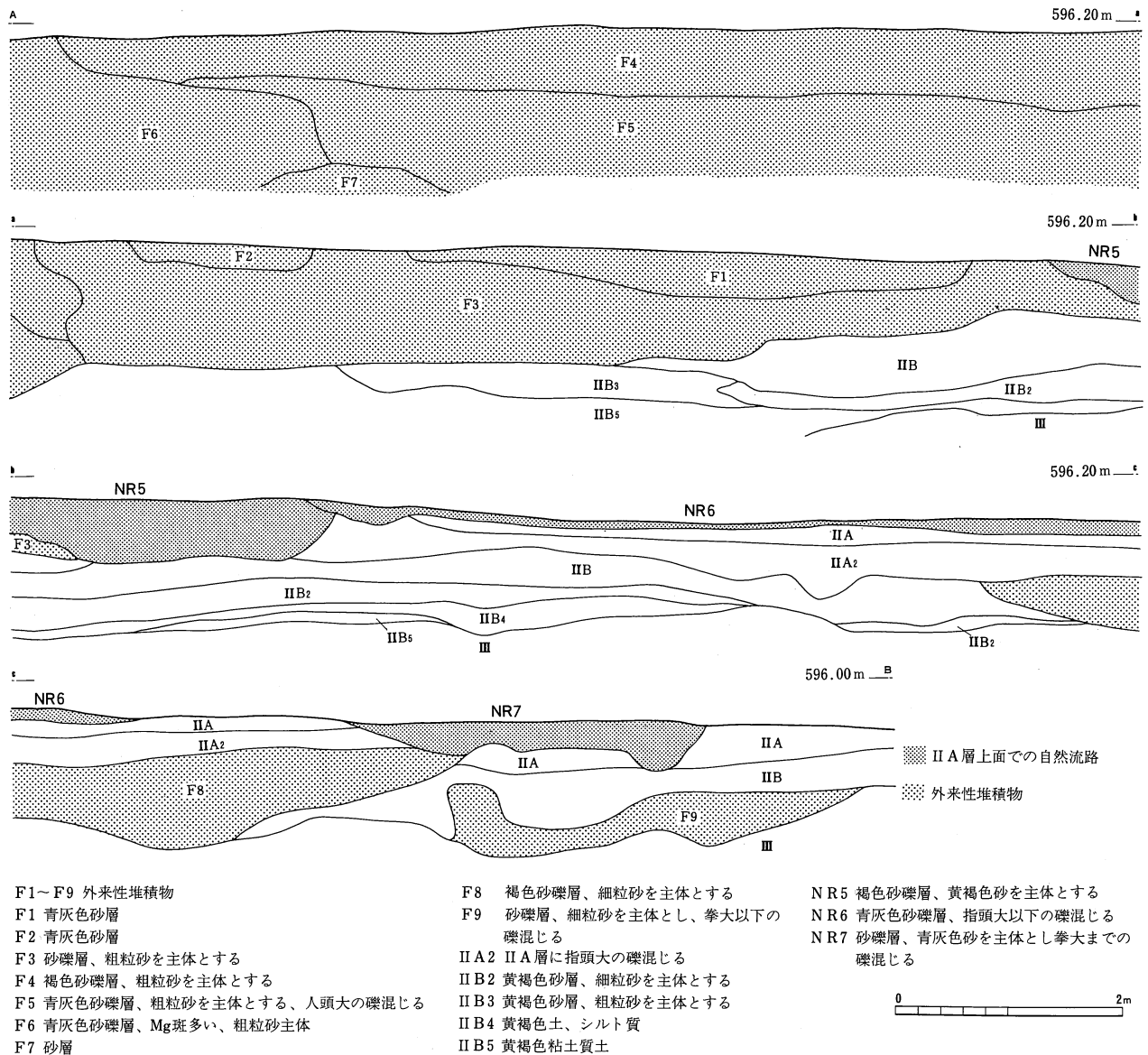
調査の方法：I C 層・II A 層上面の調査で確認された河川で、I B・I A 層に完全に覆われ現地表面ではその痕跡すら認められなかった。調査区東側と NR 3 からの分岐部分にトレンチを入れ断面観察を行い、I C 層・II A 層上面で平面形を追った。変遷過程：II A 層から I C 層上面までの間に10本の流路跡が確認された。それぞれの幅は0.5～1.8 mを測るが1 m前後が多い。NR 3 との接合部では流路は二股に分かれていた。流路はその底面高から東流していたと判断される(第2節10自然流路・河川跡参照)。

小境沢 位置：南部 III 図版5・20～22・24、第6・7図

調査の方法：調査区東側で断面観察を行い、さらに、II A 層上面で幅30 mにわたり砂礫が堆積し広範に流路の変遷が認められるため南北方向に長さ38 mのトレンチを設営して断面観察を行った。平面形は I C 層上面と II A 層上面でおさえた。変遷過程：III 層上面から II A 層上面にかけて砂礫を主体とした外来性の堆積物が9枚認められ($F_1 \sim F_9$)。この付近に幅10 mに達するような氾濫性堆積物も認められ、優勢な河川が展開していたことが窺われる。これらの流路跡を切って流れる流路で遺物の混入が認められ遺構配置と密接にかかわるものを NR 5・6・7 として取り上げた(第2節10自然流路・河川跡参照)。流路は自然蛇行的に変遷を繰り返すが基本的には南から北へ移り、ほぼ現在の位置に流路が治定されるのは I Df 層堆積以降で、NR 7 の状況からその時期は古代8期に比定される。I C 層上面でも流路幅は2 mを越えており周囲の河川より優勢であった。現在のように境沢から水を落とされるようになったのは NR 3・4 の状況から I B 層堆積以降と推定され、それ以前は水量も多く、この付近一帯の中心的な流路であったと判断される。河川の管理：NR 7 に SD 13 が並走しており、この流路からの取水したと同時に流路管理に係る可能性があろう。また、I A 層では幅2～4 m、高さ1.5 mの築堤のあとが土層断面で観察された。本流路も天井川化が進み現地表で堤頂部と流路北側の水田面とは約1.4 mの比高差を有している。

宮沢 位置：中部 III・北部 II 図版6・7、第7・63図

調査の方法：調査区東寄りで南北方向にベルトを残し断面観察を行った。また、II A 層上面で広範囲にわたり砂礫の堆積が認められたのでこの部分は別個に調査した(第2節10自然流路・河川跡)。変遷過程：II A 層上面で幅広く流路跡が観察されるのは、I Df 層堆積時・古代7期と判断される。直接痕跡は見られないもののそれ以前にも周辺の遺構配置から考えて、ここの東流する河川が存在した可能性もある。また、本流路の南15 mの位置に並走して古代2期と15期の流路(S D 26・27)があり本流路の分流の跡と判断される。I Df 層堆積以後現在まで4枚の流路の痕跡が観察される。本流路には流路下に先行する自然流路が見ら



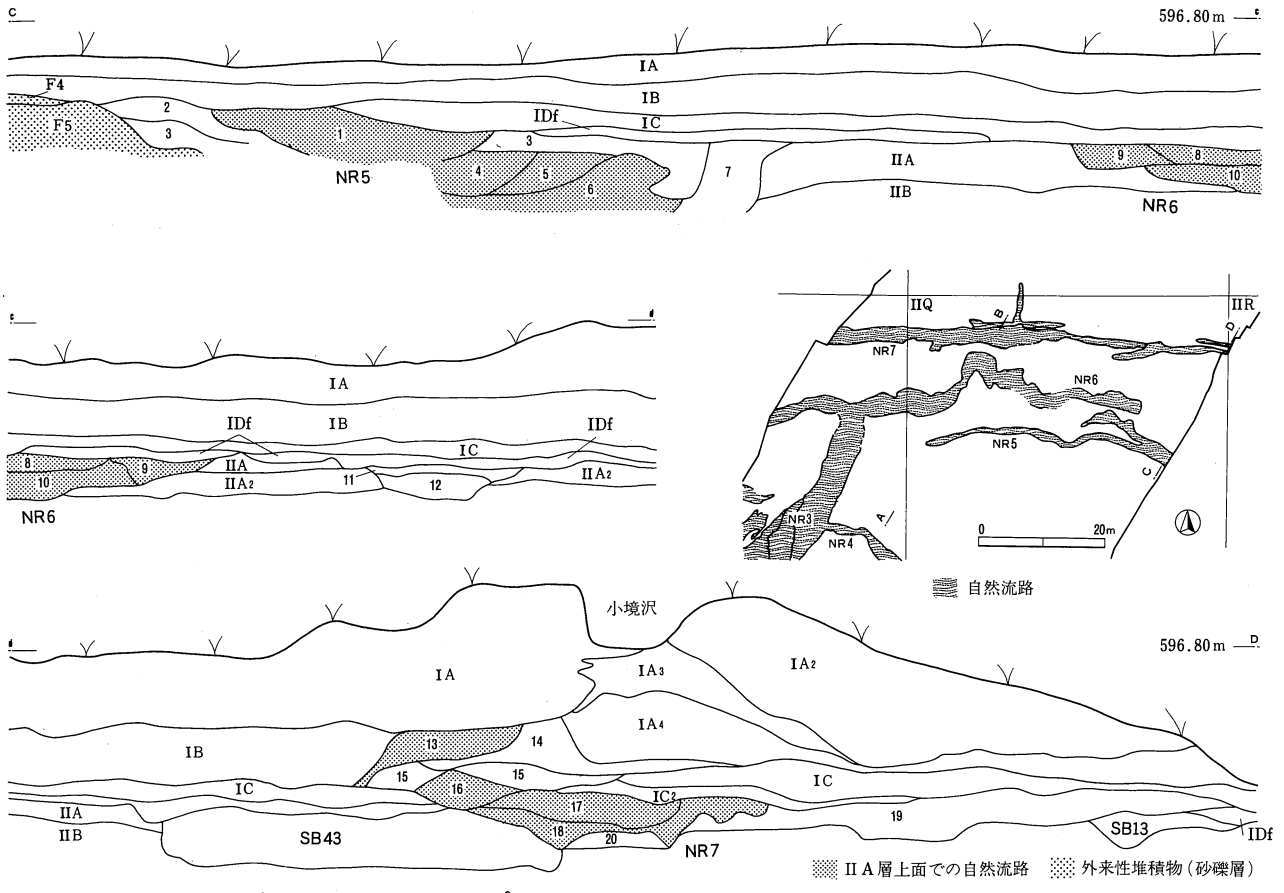
第6図 小境沢、NR5・6・7土層断面図(1)

れず、流れる位置も微高地を横断していることから、人工的に開削されたとも考えられる。現流路の南35mの位置に境沢から取水し、宮沢に水を落とす横堰があり、本調査区では宮沢に並行している。これに対応する流路の痕跡としては古代15期に比定されるSD23・24・25、中世段階のSD59が比定されるが、流下方向が逆であったり、位置もずれているなど疑問も残る。この横堰が現流路と一致するのはII B層の堆積以降である。

久保川 位置：北部 図版7、第8図

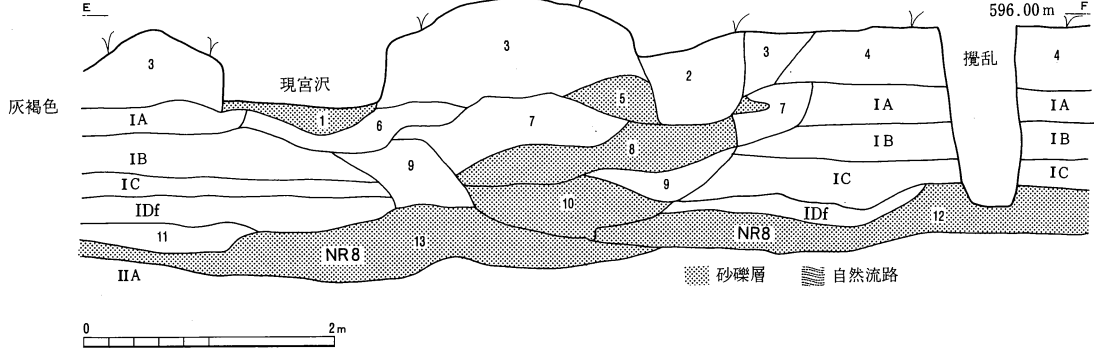
調査の方法：調査区の東側で断面観察を行い、II A層上面でその平面形を図化した。変遷過程：II A層上面でその初源の流路痕を確認している。流路の主軸方向は古代1期および6・7期の遺構群と一致する。この段階の流路は直線的に延びていること・その下に自然流路の痕跡が見られないこと・流路の流れる位置が微高地を横断していること・他の流路とはやや異なった方向に流れることから人工的に開削された可能性が高い。II C層上面では流路の痕跡は見られないが、II C層の堆積以降10枚の流路痕が確認された。河川の管理：古代面では本址に並走して柵址が見られ、小土坑の分布も多く杭が打ち込まれ柵が形成され

小境沢、NR5・6・7



- | | | | |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>NR 5</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 砂礫層 2. 灰色土 3. 淡黄白色土 4. 砂礫層 5. 砂層 6. 砂礫層 7. 淡灰色土 | <p>NR 6</p> <ol style="list-style-type: none"> 8. 褐色砂層、Mg斑混じる 9. 褐色砂層 10. 砂礫層 拳大以下の礫混じる 11. II A層とIDf層の混土層 12. II A2層とIDf層の混土層 | <p>NR 7</p> <ol style="list-style-type: none"> 13. 砂礫層 粗粒砂主体 14. 青灰色土 指頭大の礫混じる 15. 青灰色土 粘性あり 16. 砂礫層 粗粒砂主体 17. 砂礫層 青灰色砂層 18. 青灰色砂層 19. 砂礫層 青灰色砂主体 20. 砂礫層 青灰色砂主体 | <p>IA2 指頭大の礫を多く含む</p> <p>IA3 青灰色土・指頭大の礫を含む</p> <p>IA4 青灰色土</p> <p>IC2 Mgの集積が多い</p> <p>F4 褐色砂礫層</p> <p>F5 青灰色砂礫層</p> |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

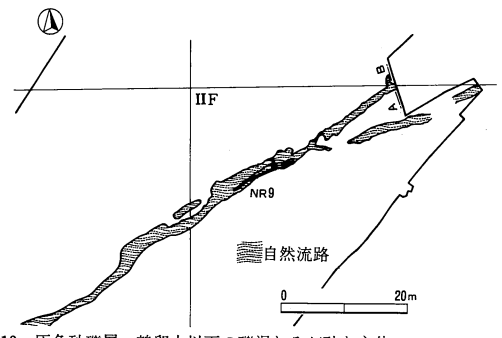
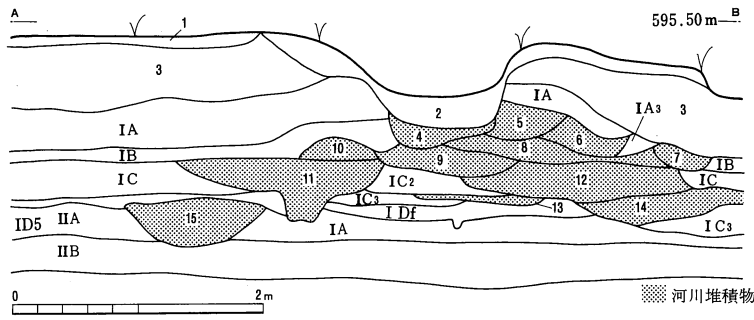
宮沢・NR8



- | |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>1. 砂礫層 現宮沢河床</p> <p>2. 混土砂礫層、宮沢の旧河道で、人為的な埋戻し土</p> <p>3. 灰褐色土、砂礫が混じる人為的な盛土</p> <p>4. 混土砂礫層 市道、中央線舗装に伴う人為的な盛土</p> <p>5. 砂礫層、粗粒砂を主体とし、小豆大から鶏卵大の礫混じる</p> <p>6. 7. 5GY5/1緑灰色砂質土、小豆大までの礫・砂混じる、IA層対比</p> <p>7. 10BG5/1青灰色土、溶脱受ける</p> <p>8. 砂礫層・粗粒砂を主体とし、鶏卵大以下の礫混じる</p> <p>9. 10BG6/1 青灰色砂質土、シルト質、粗粒砂混じる、IB層対比</p> <p>10. 砂礫層、粗粒砂を主体とし、拳大以下の礫混じる</p> <p>11. 青灰色砂層、粗粒砂</p> <p>12. 砂礫層、粗粒砂を主体とし、拳大までの礫混じる</p> <p>13. 砂礫層、陶汰の悪い砂を主体とし拳大までの礫混じる。</p> |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

第7図 小境沢、NR5・6・7土層断面図(2) 宮沢・NR8土層断面図

久保川・NR9

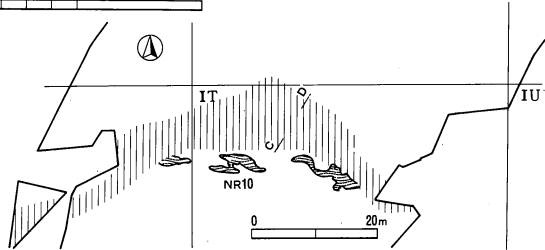
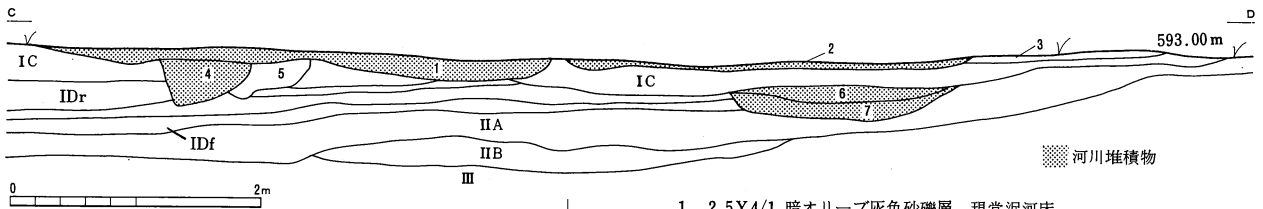


- 1. 市道久保川線盛土、アスファルト舗装
- 2. 5Y3/1 オリーブ褐色土層、腐植土
- 3. 5Y4/2 灰オリーブ色土、砂礫混じる
- 4. 混土砂礫層 IA層土塊混じる、下底部に礫
- 5. 灰色砂礫層 鶏卵大以下の礫が混
- 6. 灰色砂礫層 礫は5層より多くIA層土塊混

- 7. 灰色砂礫層 鶏卵大以下の礫混じる
- 8. 灰色砂礫層 鶏卵大以下の礫混じる
- 9. 灰色砂礫層 拳大以下の礫混じる
- 10. 混土砂礫層 IB層土混じる
- 11. 灰色砂礫層 鶏卵大までの礫混じる
- 12. 灰色砂礫層 灰色土塊少し混じる

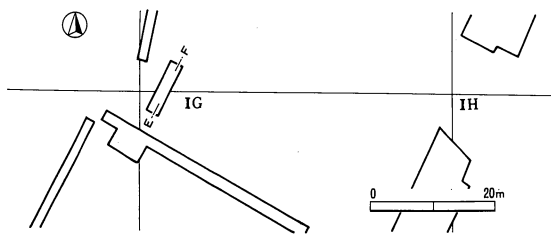
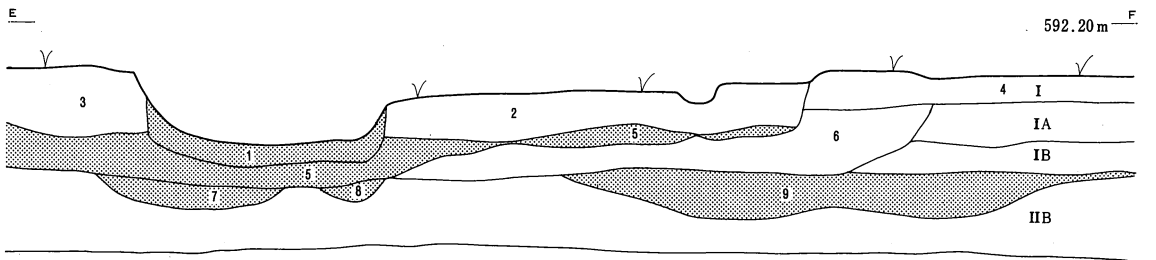
- 13. 灰色砂礫層 鶏卵大以下の礫混じるが砂が主体
- 14. 灰色砂層 下底に大豆大の礫入る
- 15. 灰色砂礫層 鶏卵大以下の礫混じる
- IA2. 7.5Y5/2 灰オリーブ色土
- IA3. IA層に礫混じる
- IA2. 2.5Y5/3 黄褐色土
- IA3. 2.5Y4/3 オリーブ褐色土

堂沢



- 1. 2.5Y4/1 暗オリーブ灰色砂礫層、現堂沢河床
- 2. 5Y4/1 灰色混土砂礫層、拳大以下の礫混じる
- 3. 2.5Y4/2 暗灰黄色土
- 4. 7.5Y4/2 灰オリーブ砂礫層
- 5. 5Y4/3 暗オリーブ色土、シルト質
- 6. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂層
- 7. 5Y4/2 灰オリーブ色混土砂礫層
- IDr. 10Y5/1 褐灰色土

梅沢



- 1. 砂礫層 現梅沢河床
- 2. 灰色土 礫混じる 市道梅沢線盛土
- 3. 灰色土 砂混じる
- 4. 灰色土 IA層を基源とする畑耕作土
- 5. 砂礫層 下部に灰白土混
- 6. 細粒砂層 シルトに近い
- 7.~9. 砂礫層 礫は鶏卵大以下で砂が主体
- II B層 鶏卵大以下の礫が混じる黄褐色粗粒砂層
- III層 人頭大以下の礫が混じり細礫が主体

第8図 久保川・NR9、堂沢、梅沢土層断面図

堂沢

位置：北部II・北端I

図版9、第8図

調査の方法：調査区の中央で南北方向にトレンチを設定し、IC層上面でその平面形をおった。調査された部分は流路の湾曲部に当たるため、流路幅は広く変化も激しい。変遷過程：流路の痕跡が初めて確認さ

れるのは I Dr層上面で古代12～14期に比定される。それ以前は堂沢南側の沖積段丘もしくは蛇行洲と、この部分から北へ50mの位置にあり東西方向に延びる砂礫堆と挟まれた小凹地全体に、自由蛇行的に変遷する河川が存在したことが土層断面の観察から推定される。この幅広の河川は奔流ではなく増水時に冠水するような河岸的な状況であったことも土層断面から窺える。I Dr層以後2回の流路の痕跡を見出せるが、現流路に上部を浸食され切込み面等は不明である。なお、久保川と堂沢の間に現永田集落方面から流下し本遺跡内で堂沢に合流する堰が存在するが、土層断面の観察ではこの流路が形成されたのは I B層堆積以降である。

梅沢 位置：北端II 図版9・71、第8図

調査の方法：調査区西寄りで南北方向にトレンチを設定し、土層断面の観察を行った。梅沢沿いの地域では I A層・I B層下が直接、砂礫層で土壌の堆積自体も薄く、一部を除き明確な遺構の分布も認められない。変遷過程：調査した部分は I B層より下が人頭大以上の礫を主体とする砂礫層で、その上面と I A層上面に幅広の流路の痕跡が認められたことから、梅沢が現在の位置に治定されたのは I B層堆積以降と判断される。それ以前、古代においては自由蛇行を繰り返す大規模な網状流河川の南縁部に当たり、河川が北に後退しこの付近が離水したのは I B層の堆積以降である。また、梅沢から分岐し堂沢へ水を落とす横堰が本調査区内を南流しているが、この流路は土層断面では I A層堆積以降でしか観察されない。

第2章 遺構

第1節 古代の遺構

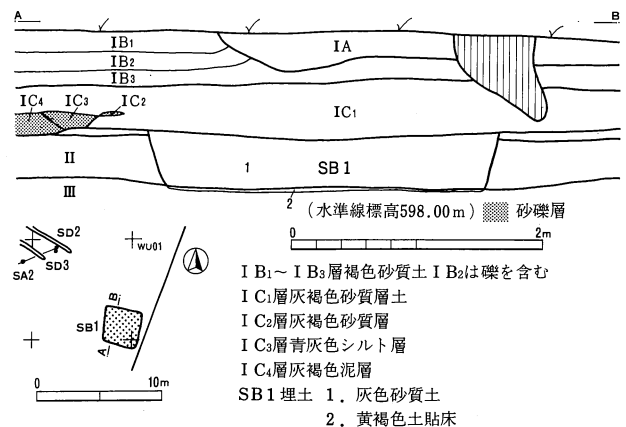
1 竪穴住居址

概観

分布：本遺跡からは179軒の竪穴住居址が検出された。三の宮遺跡の調査地区は、南部・中部・北部・北端の4地区に分れるが(第1図)、北端地区には竪穴住居址は少なく、所属する時期も14期以降に限られており、ほかの地区と分布状況が異なっている。各地区はさらに、遺構の密集度・地形や土壌環境の違いから2～3細分することができ、その地区ごとの竪穴住居址数は次の通りである。南部I地区は15軒・南部II地区14軒・南部III地区18軒で南部地区は計47軒、中部I地区は6軒・中部II地区7軒・中部III地区18軒で中部地区は計31軒、北部I地区は26軒・北部II地区65軒で北部地区は計91軒、北端地区は全体で10軒の竪穴住居址を確認している。この数字が示すとおり北部II地区に多数の住居址が集中し、また、遺構の重複関係も複雑である。規模・構造：床面積から小型・中型1・中型2・大型1・大型2・超大型の6類型に分類されるが、7・8期に大型2・超大型の住居址が1軒ずつあるのみで、他は一辺6m以下の住居址で中型のものが大多数を占めている。カマドの見られない住居址が15軒・柱穴の見られた住居址が9軒確認されたほかは、取り立てて何らかの施設が見られるような住居址は少ない。また、住居址の隅にカマドをもつものは8期以降に限られ11軒存在する。埋没：自然堆積と考えられる覆土の住居址が多く、また、覆土中に砂礫が混じる例も少なからず存在している。検出面上での土色は1～3期と4～8期、さらに12期以降とでは大きく異なり、基本土層の堆積や自然環境の相違と関連している可能性がある。69軒の住居址の覆土中に拳大以上の礫が散在的にあるいは集石といった状態で出土しており、住居址の廃棄の様子や屋根の葺き方を窺い知ることができる。立地：南部I・III地区、中部III～北部I地区は河川の氾濫に起因する砂礫堆に立地している。また、III層上面の高低により本遺跡内では土層の厚さに相違が認められ、それが住居址の占地に影響を与えている。

SB1 位置：南部I
図版13、第9図

検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。土層断面ではI Df層でも検出可能であった。なお本址は境沢の断面調査の際に確認された。カマド等の施設は検出されていないが一辺2.8mの隅丸方形プランであることや貼床の存在から竪穴住居址と認定した。床：II B層上面まで掘り下げた後、黄褐色土を入れ築き固めている。掘り方面は平坦であった。埋没：灰色土とI Df層

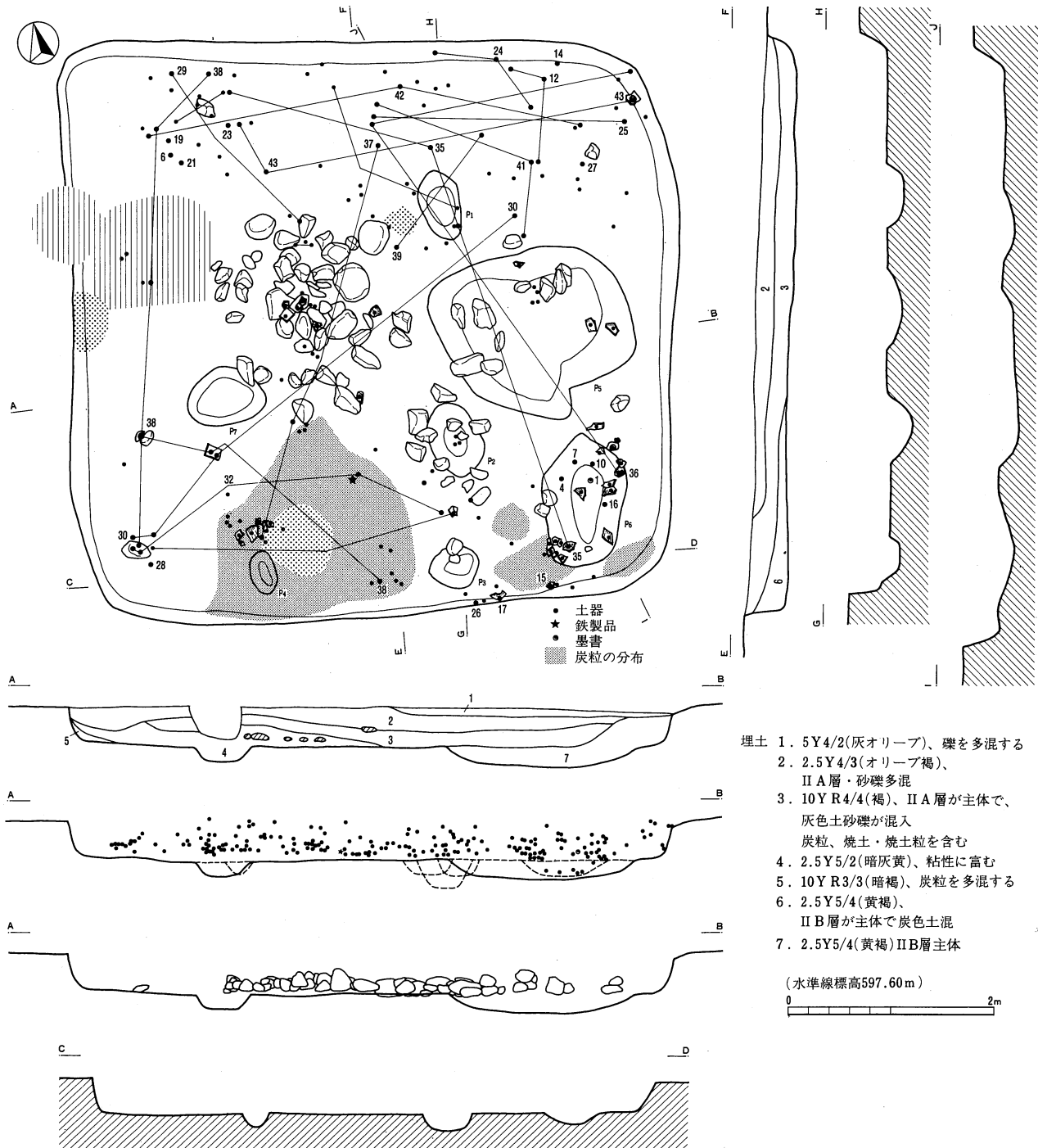


第9図 SB1土層断面図

が混じり合う埋め戻し土である。帰属時期：遺物の出土が極少量のため不明であるが、検出状況・覆土の特徴から6期以降8期以前に属するものと考えられる。SB2・10と主軸方向が一致している。

SB 2 位置：南部 I 図版12、第10図

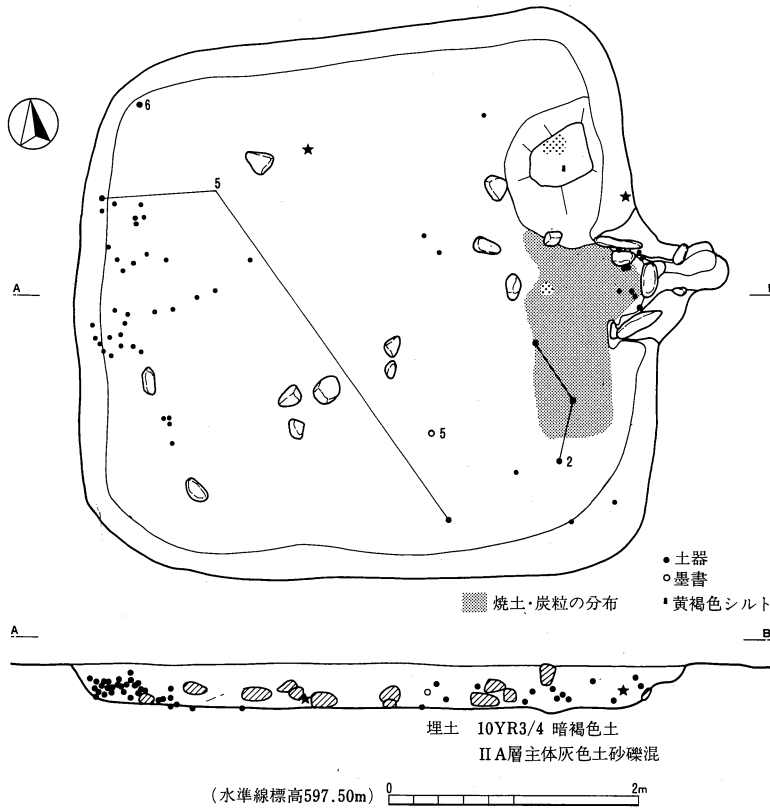
検出：II A層上面で礫を多含する灰色土が落ち込み、遺物もかなり散在していた。SK70・SA3-P₄に切られる。SK70の埋土は本址より灰色土の混入が、SA3は炭粒が多い。カマド：袖土と思われる黄褐色土が東壁際中央に分布し(覆土7層)、焼土・炭粒が見られることからカマドと判断した。この下に楕円形プランで深さ20cmの落ち込みが存在しており、カマドの掘り方と考えられる。諸施設：カマド右脇床面に



- 埋土 1. 5Y4/2(灰オリーブ)、礫を多混する
 2. 2.5Y4/3(オリーブ褐)、II A層・砂礫多混
 3. 10Y R4/4(褐)、II A層が主体で、灰色土砂礫が混入
 炭粒、焼土・焼土粒を含む
 4. 2.5Y5/2(暗灰黄)、粘性に富む
 5. 10Y R3/3(暗褐)、炭粒を多混する
 6. 2.5Y5/4(黄褐)、II B層が主体で炭色土混
 7. 2.5Y5/4(黄褐)II B層主体

(水準線標高597.60m)
 0 2m

第10図 SB 2 実測図



第11図 SB6 実測図

炭粒を多含する深さ20cmの楕円形プランの落ち込みが炭層下に検出され貯蔵穴とも思われる(P₆)。他に深さ15~25cmの落ち込み5基を床面で確認した。P₁・P₂とP₃・P₄は位置的に支柱穴と支柱穴に該当するものであろう。床：II B層下位・III層上面まで掘りさげた後、築き固めている。P₆の周囲では炭粒が厚く床面に集積していた。埋没：カマドの崩落土を除き6分層される。住居址中央部に分布する6層は焼土粒を多含し、土器や鉄滓を多出している。この層の下底、P₄脇では焼土が厚く堆積した深さ5cmの円形の落ち込みを確認している。6層中には鉄製品や鉄滓も多く出土しており、住居址廃絶後、小鍛冶がこの地点で行なわれたと考えられる。3層お

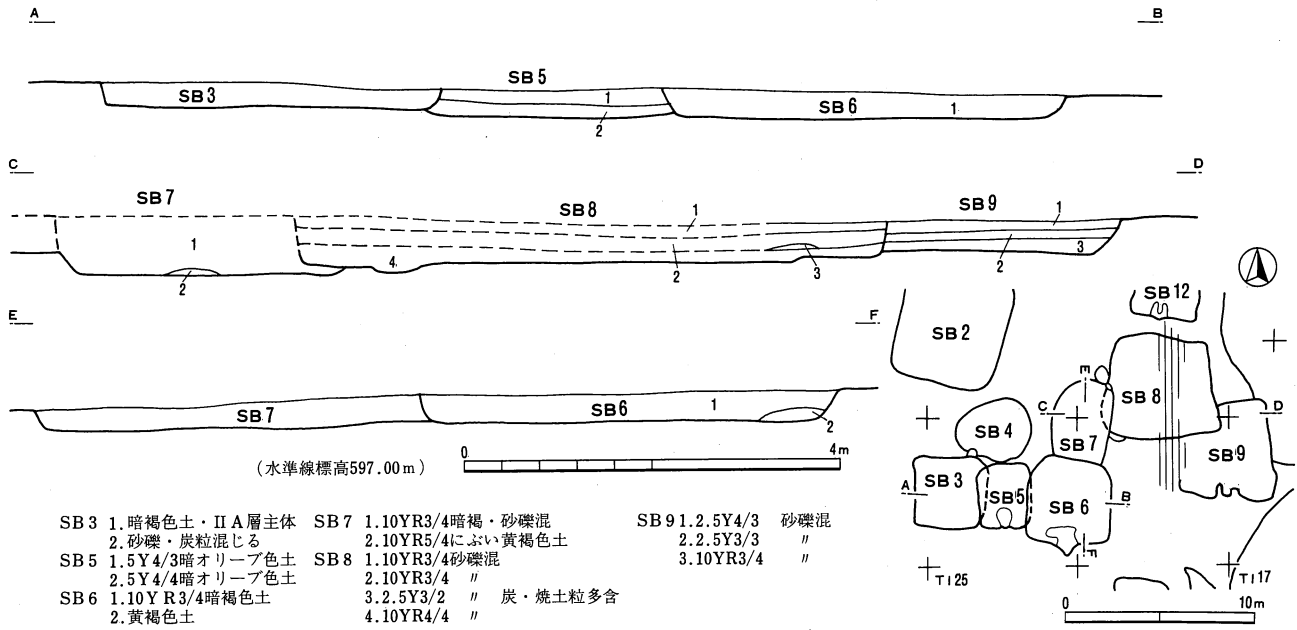
よび4層は煤の付着した花崗岩の円礫のほか、人頭大の礫を多量に含む埋め戻し土である。2層はII A層・灰色土・砂礫を、1層は灰色土を主体とした自然堆積土である。遺物出土状況：遺物は床面より5~10cm以上浮いた位置で、特に4層上半部・2・3層中に多量に包含される。出土する遺物は破片がほとんどで、接合関係にも規則性が見られないことから土層の堆積時に流入したものと解釈される。P₆脇床面の土師器小型甕D(36)、P₁内の黒色土器A杯(7・10)・椀(16)が本址に帰属し得るものである。ほかに灰釉陶器椀の底部片を用いた転用硯(27)、土錐(10)、鞆羽口が2点(16)、鉄製品の鑿(49)・鉸具(63)・環状品(99)などが床より浮いた位置で出土した。帰属時期：SB10と主軸方向が一致し、出土遺物の様相からも8期と判断される。

SB 3 位置：南部 I 図版12、第13図

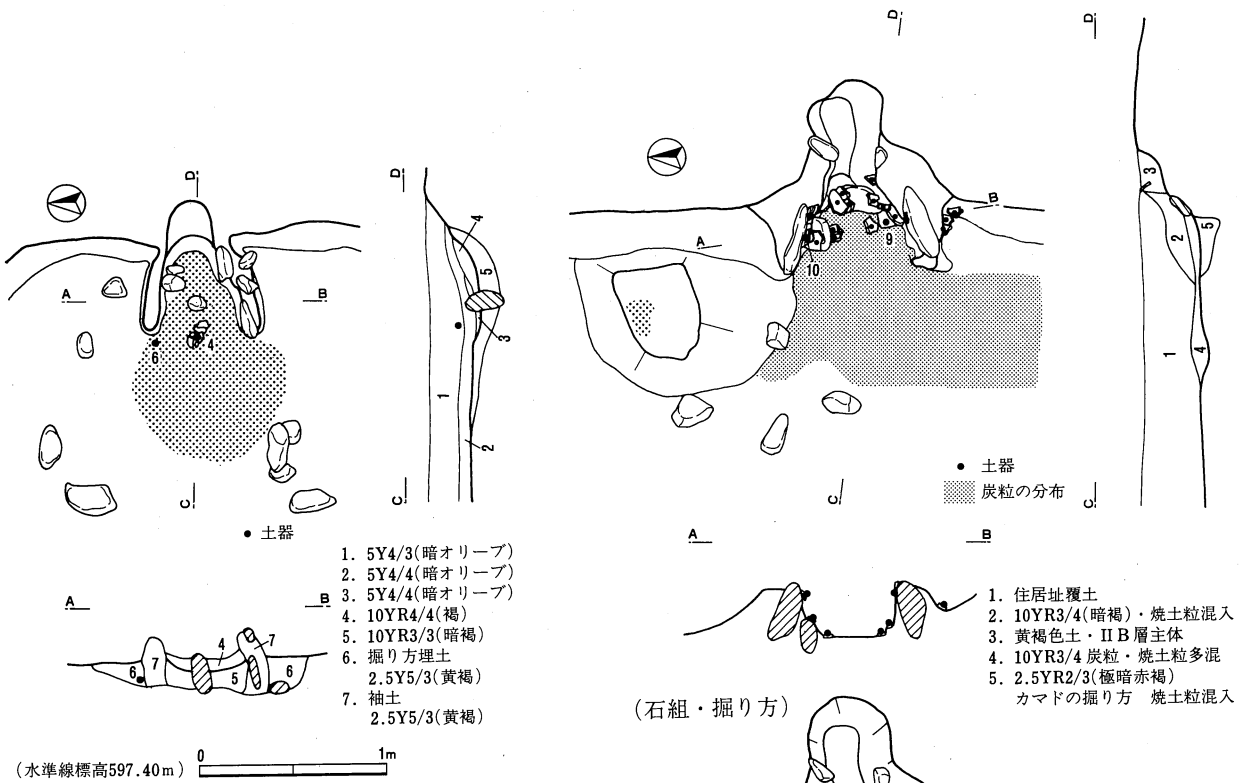
検出：II A層上面で暗褐色土が落ち込む。SB 5・SK71を切る。本址の覆土のほうに炭粒・灰色土の混入が多い。カマド：覆土中にカマド袖石を含む礫が見られることからカマドの存在した可能性はあるが、位置・構造は不明である。床：II B層中位まで掘り下げた後、黄褐色土を貼った部分がわずかに見られる。埋没：単層であるが浅いため詳細は不明である。遺物出土状況：住居址内東寄りにやや多く分布するものの全体量は少ない。軟質須恵器杯(6)が床面直上で、ほかに鞆羽口片も見られた。帰属時期：出土遺物の様相から8期に比定される。

SB 4 位置：南部 I 図版12

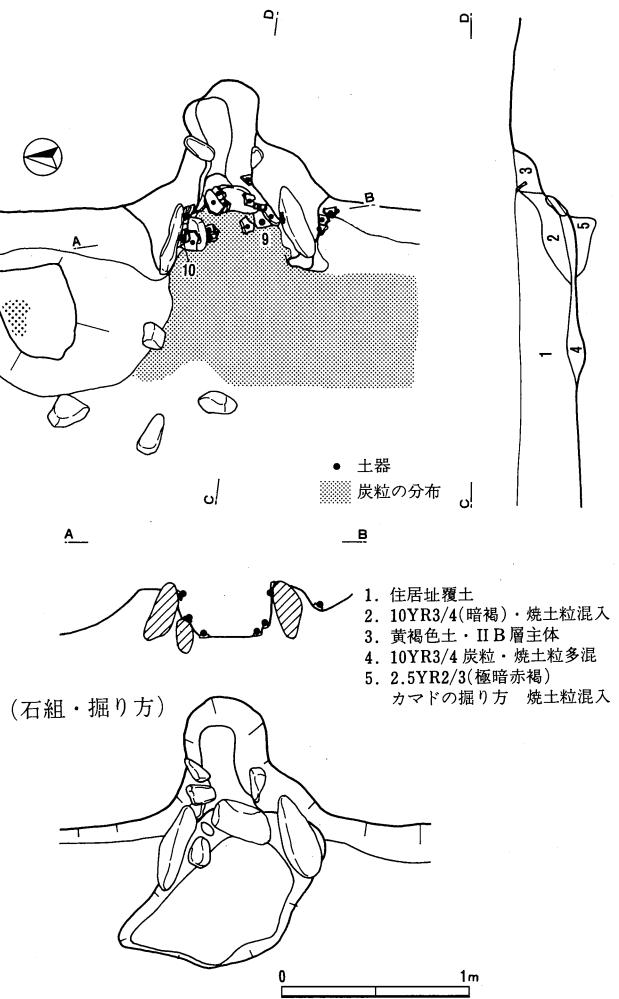
検出：III層上面でII A層を主体とした土が落ち込む。II A層上面でも遺物の出土が見られた。カマド：多量の焼土・土師器甕の出土から東壁中央に存在したと考えられる。この下には1.70m×1.10mの卵形プランで深さ10cm弱の掘り方が見られた。埋没：単層で遺物や礫の出土状態から埋め戻しと判断される。おそらく壁の崩落や河川の浸食によって不整形なプランを呈しているものと判断される。遺物出土状況：大半



第13図 SB3・5・6・7・8・9土層断面図



第12図 SB5 カマド実測図



第14図 SB6 カマド実測図



第15図 SB 8実測図

の遺物は床面より浮いており、土師器甕A・D (11・8・7)、高杯(5・6)がカマド内で出土した。帰属時期：出土遺物の様相から2期に比定される。

SB 5

位置：南部 I

図版12、第12・13 図

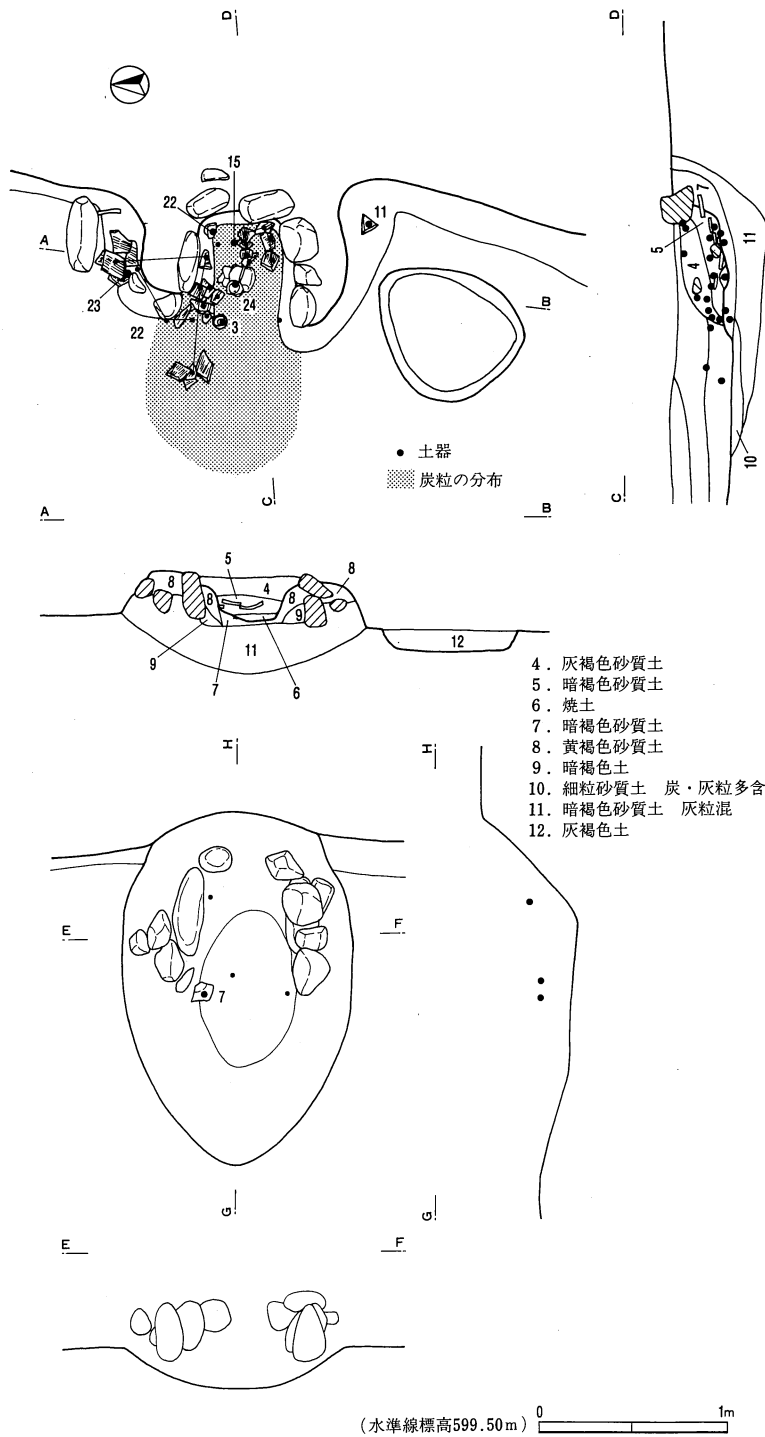
検出：II B層上面で暗褐色土が落ち込む。II A層上面でも遺物が散布していた。SB 6を切り、SB 3に切られる。SB 3の覆土のほうは灰色土の混入が多く、SB 6より本址のほうが砂礫・灰色土が多く混入していた。カマド：石組カマドで、構築は地山を掘り凹めたあと、扁平な円礫を横長・縦位に置き、地山の黄褐色土を充填して袖を作り、燃烧部は

支脚石を立てた後、暗褐色土を入れて埋めている。明確な火床は認められない。左袖は原形を留めていなかった。床：III層上面まで掘り下げた地山面を床としている。埋没：2分層される。上層は多量に砂礫を含む一過性の自然堆積土。下層はカマド破壊ののち埋め戻されたものであろう。遺物出土状況：北西隅近く床面より10cm浮いて完形の軟質須恵器杯(5)が、また、カマド火床上および掘り方内でも軟質須恵器杯(4・6)が出土している。帰属時期：切合い関係からSB 3より古い、土器の様相は8期である。SB 9と主軸が一致しており、その関係が注意される。

SB 6

位置：南部 I

図版14、第11・13・14図、PL 2



第16図 SB9 カマド実測図

検出：II B層上面で暗褐色土が落ち込む。II A層上面でも遺物・炭粒の散布が認められた。SB7を切りSB5に切られる。SB7のカマド部分は本址のプランにそって破壊されており、SB5の覆土は本址に比べ灰色土・砂礫の混入が多かった。カマド：石組カマドである。構築は地山を皿状に掘り凹めたあと扁平な人頭大の円礫を横長・縦位に置き小形の礫をその間に詰めた後、地山の土を充填している。燃烧部内側壁に土師器甕B片を貼り付けてあり、奥壁には人頭大の平石を敷いている。明確な火床は見られない。煙道は斜めに立ち上がるが、その側壁には棒状の礫が配されていた。床：II B層下位まで掘り下げた地山面を床にしている。埋没：単層であるが、砂礫の混入が多いことから自然堆積土と思われる。諸施設：カマド左側床面に地山II B層が台状に盛土され、その下には土師器甕B片・焼土塊が見られた。遺物出土状況：西壁よりの覆土中に集中して見られることから、西方より土砂とともに流入したものであろう。「湊」?の墨書のある黑色土器A杯・須恵器杯A片も覆土中の遺物である。他に鉄滓も出土している。帰属時期：出土遺物の様相から6期に比定される。

SB7

位置：南部I

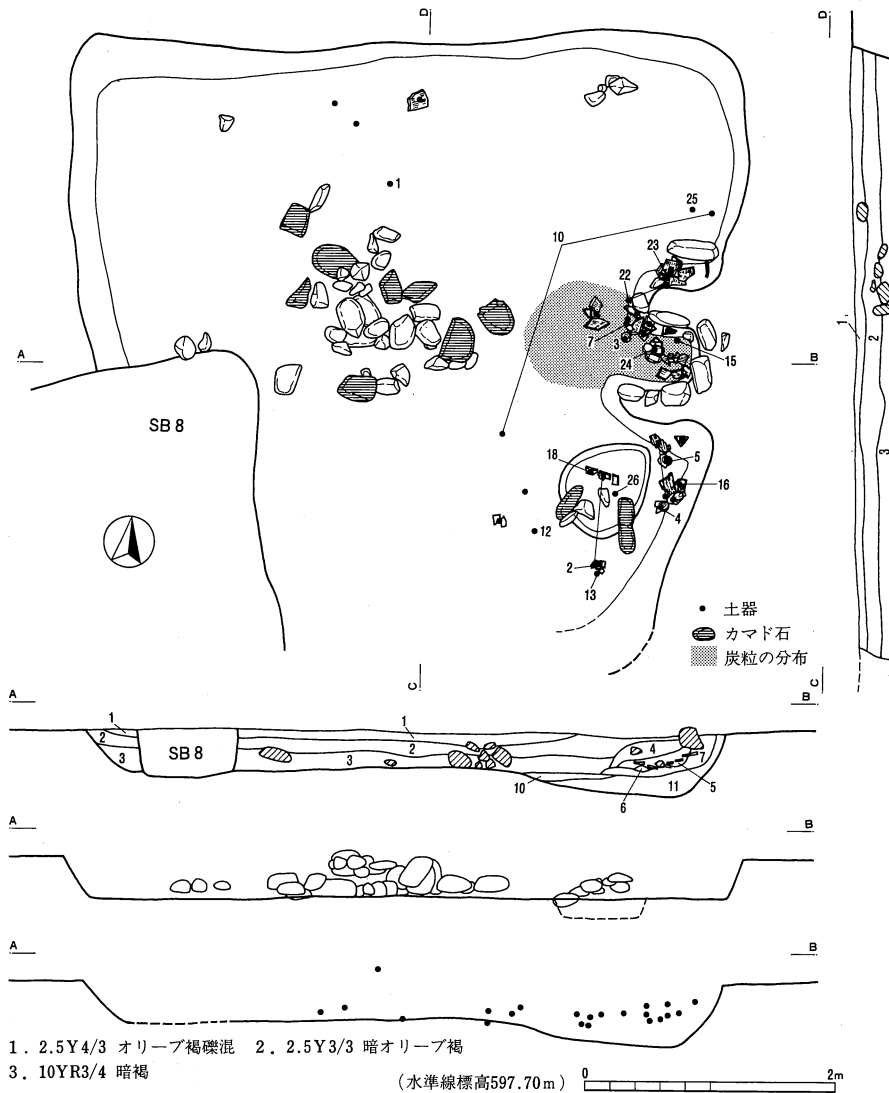
図版14、第13図

検出：II B層上面で暗褐色土が落ち込み、遺物が散布していた。II A層上面で調査したSB6・8に切られる。カマド：SB6に破壊されているため詳細は不明である。袖土と思われる粘土塊と、焼土の散乱および火床の一部を確認した。床：III層上面まで掘り下げた後、黄褐色砂質土を貼り、叩き締めている。埋没：二分層される。下層は黄褐色土塊を含み軟質で床面中央部にのみ堆積している。上層はII A層を基調とした土であるが、砂礫の混入が多く、一過性の自然堆積と考えられる。帰属時期：出土遺物の様相から6期に比定される。

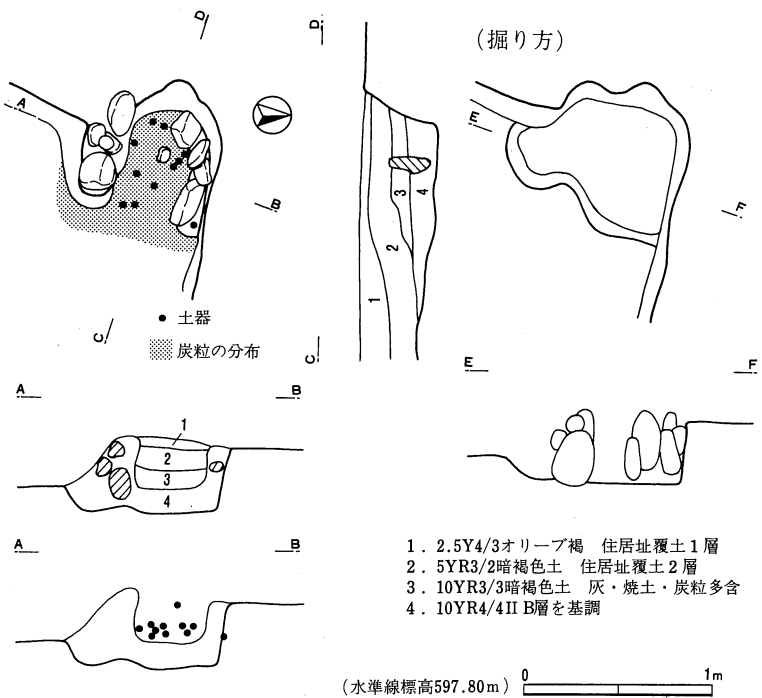
SB8

位置：南部I

図版14、第13・15図



第17図 SB9実測図



第18図 SB10カマド実測図

検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。SB 7・9、SK79・81を切る。これらに比べ本址の覆土は灰色土の混入が多い。カマド：東壁下で袖か天井部の崩落土と考えられる黄褐色土の堆積と焼土の分布、赤変した花崗岩円礫が出土している。本来は石組カマドであろう。床：III層上面まで掘り下げ、そのうえに黄褐色土を貼った部分が床中央から西壁際にかけて見られる。諸施設：カマド右脇床面に深さ25cmの落ち込みを確認(P₁)。覆土中に灰・炭・焼土粒を含むことから灰溜めと判断される。他にも床面上で深さ20~30cmの落ち込み

(P₂・P₃・P₄)を検出しているがその性格は不明である。なお、P₃中から鉄製品の鎌(10)が出土した。また、北壁中央から東側にかけて平坦な張出しが存在する。埋没：4分層される。1・2・4層は自然堆積土。中央部から北側にかけて分布する3層は炭粒を多く含み、鉄滓が出土していることから、本址埋没途中で小鍛冶に係わった可能性もある。遺物出土状況：遺物・礫は床面より5~10cm浮いた状態で多出している。カマドとP₁付近にやや偏在が認められるものの、分布状況や接合関係に規

則性はなく土砂とともに流入したものと判断される。墨書土器7・8が床面直上で、6は覆土中で出土している。鉄製品では鎌(4)のほかに、刀子(25・26)棒状品(75・86・89)、板状品が覆土中で見られた。他にイネ科植物を苜として混ぜた粘土塊が焼成したと思われるものが出土している。帰属時期：出土遺物の様相から8期に比定される。

SB9 位置：南部I 図版14、第13・16・17図

検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。SB8に切られる。カマド：石組カマドである。構築は地山を皿状に掘り凹めた後、袖付け根に棒状の人頭大の礫を一对立て、そのほかは花崗岩・硬砂岩の扁平な円礫を横長・縦位に置き、黄褐色土を充填して作られる。明確な火床は残されていない。燃烧部内から須恵器甕A片、土師器小型甕D(21・22・23)、黒色土器A杯(7)、灰釉陶器椀(15)が投げ込まれた状態で出土している。また、火床下掘り方内より黒色土器A杯が逆位で出土している。床：III層まで掘り下げたあと、黄褐色土を築き固めた貼床が中央部から南壁際にかけて見られる。諸施設：カマド右脇床面に深さ10cmの落ち込みを確認した。覆土が3層と同様で灰粒が混じることから灰溜めと判断される(P₁)。埋没：3分層される。1層は自然堆積土である。2・3層は地山II A層を基調とした埋め戻し土と思われ、そのなかには煤の付着したカマド袖石を含む大形の礫が集中して出土した。遺物出土状況：カマド右脇で黒色土器A椀(4・5)、灰釉陶器椀(18)、須恵器甕A片が床面直上で出土している。他に、P₁周囲でも遺物の出土は多く、そのなかに墨書土器13が見られた。帰属時期：切合い関係からSB8より古く位置付けられるが、土器の様相は8期に比定される。

SB10 位置：南部I 図版12、第18図

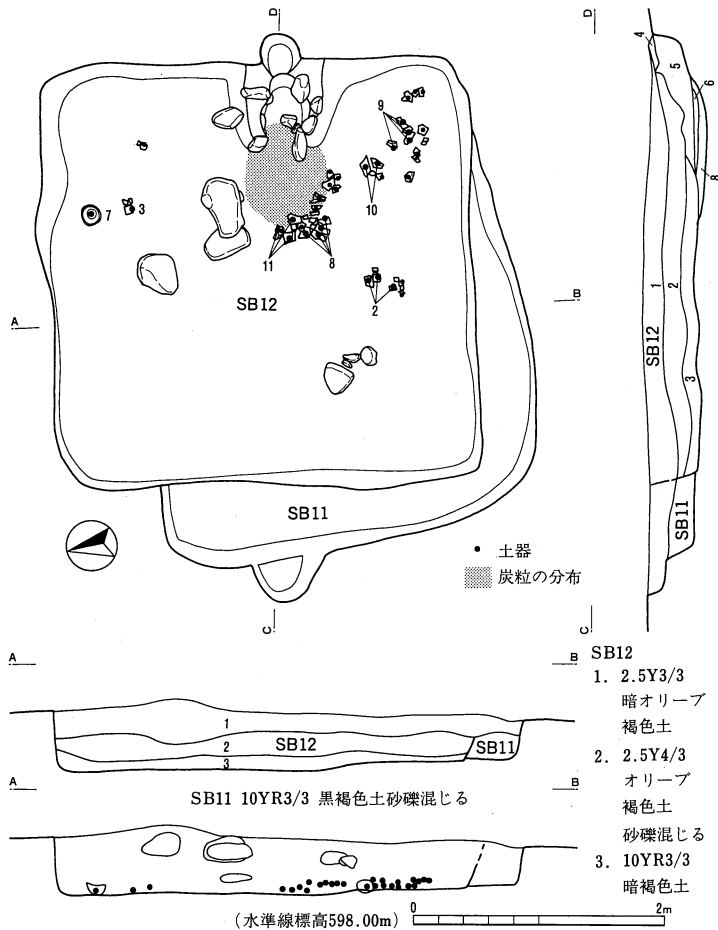
検出：II A層上面で灰色土が落ち込み、炭粒・土器片が散布していた。ST2を切っている。カマド：石組カマドである。北西隅に位置するが主軸は住居址の主軸と平行する。カマドの構築は地山を掘り下げた後、黄褐色土を埋め戻しつつ扁平な花崗岩の円礫を横長・縦位に置いて袖を作り、中央に棒状の礫を立てて脚としている。また、火床下には鶏卵大の礫が敷き詰められていた。火床上より土師器甕Bの口縁部(5)と底部片(6)が出土している。埋没：2分層される自然堆積土で、上層は灰色土を主体とし、下層はII A層と砂礫を主体とする。床面よりやや浮いてカマド袖石を含む大形の礫が出土している。遺物は少なく覆土中に散在的に出土している。帰属時期：SB8と主軸方向をそろえており、出土土器の様相から8期に比定される。

SB11 位置：南部I 図版14、第19図、PL3

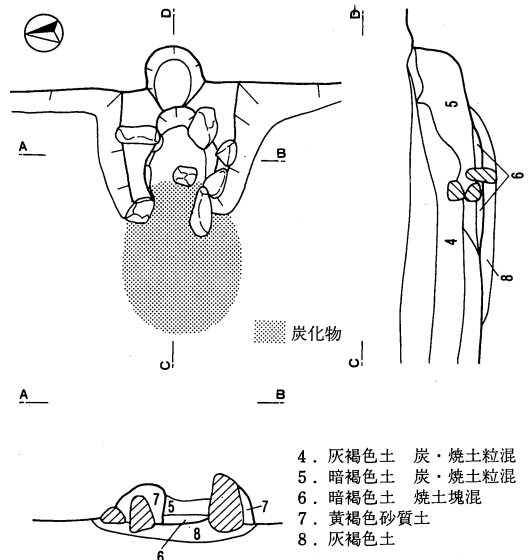
検出：I Df層相当の砂礫層上面で灰色土が落ち込む。SB12に切られる。諸施設：III層上面まで掘り下げた地山面を床としている。西壁中央からやや北寄りに半円状の張出しが見られる。床面から張出し底面までの高さは20cmほどで、出入口にかかわる施設の可能性もある。埋没：2分層される自然堆積土で、遺物は覆土中に少量存在した。帰属時期：遺物が少なく詳細は不明であるが、SB6・9、ST2と主軸が一致していることから8期に属すものと考えられる。

SB12 位置：南部I 図版14、第19図、PL3

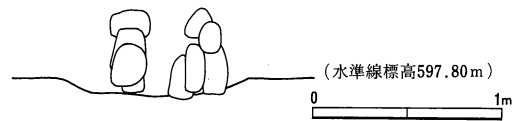
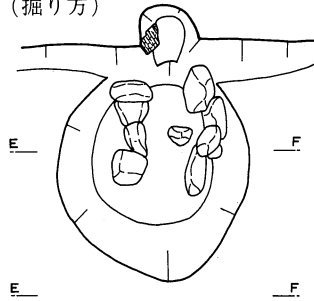
検出：I Df層相当の砂礫層上面で灰色土が落ち込む。SB11を切る。1層を取り除いた時点で切合いを確定した。本址の覆土のほうが明るい土色であった。カマド：石組カマドである。構築は地山を皿状に掘り凹めた後、黄褐色土を埋め戻しながら、花崗岩・硬砂岩の人頭大の円礫を横長・縦位において袖を作る。支脚石は火床中央からやや右よりに位置する。床：III層上面まで掘り下げた地山面を床とする。埋没：3分層される自然堆積土である。3層上部から2層下部にかけてカマド袖石を含む人頭大の円礫や遺物の出土が多く認められた。遺物出土状況：黒色土器A椀(2・3)、土師器甕B(8~11)、灰釉陶器長頸壺(7)がほぼ床面直上で出土している。帰属時期：出土遺物の様相から8期に比定される。



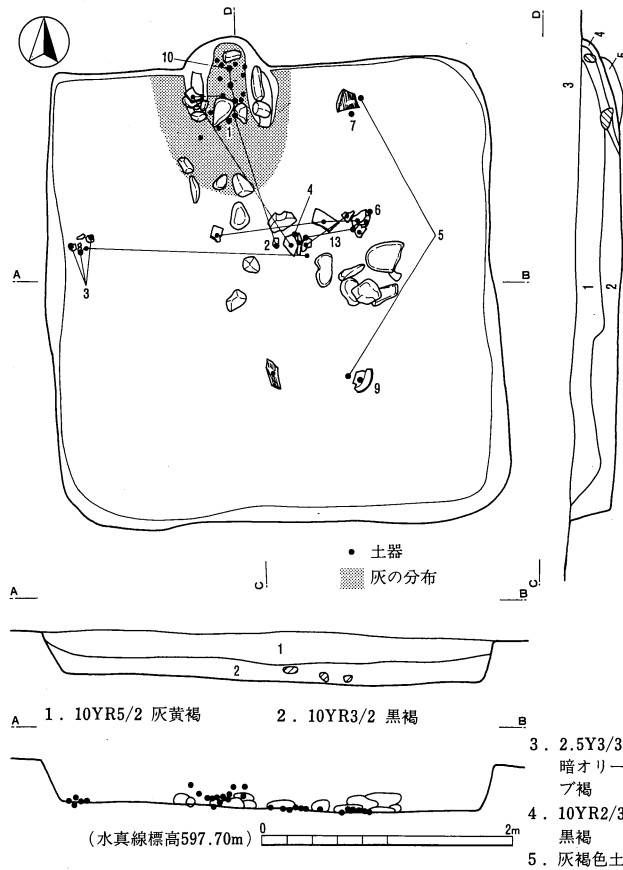
第19図 SB11・12実測図



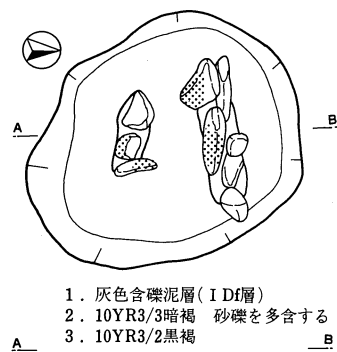
(掘り方)



第20図 SB12カマド実測図



第22図 SB18実測図



第21図 SB15実測図

SB13 位置：南部Ⅰ 図版14

検出：ⅡA層上面で灰色土が落ち込む。カマド：確認はできなかったが、北壁よりで花崗岩の人頭大の円礫と土師器小型甕D片、南西隅よりで土師器甕B片(4)が出土していることからカマドが存在していた可能性が高い。埋没：3分層される自然堆積土である。床面直上でカマド袖石を含む礫が見られた。床面近くでの遺物の出土が多い。帰属時期：出土遺物の様相から8期に比定される。

SB14 位置：南部Ⅰ 図版15

検出：ⅡA層上面で灰色土が落ち込む。カマド：火床のみ残る。燃烧部は北壁中央を丸く掘り込んで構築される。床：ⅡB層下位まで掘り下げた地山面を床としている。埋没：2分層される自然堆積土である。上層は灰色土を主体とする。下層中には砂礫が多く含まれる。遺物量は少ない。帰属時期：出土遺物の様相から5期に比定される。

SB15 位置：南部Ⅰ 図版14、第21図

検出：ⅡA層相当の含礫泥層上面で遺物の散布と石組を確認した。この石組中の礫は内側が被熱によって赤変しており、堅穴住居址のカマドと同様な施設と想定される。また、本址はⅠDf層相当の砂礫層(NR1)に覆われていることから、ⅠDf層堆積時に浸食された堅穴住居址でカマド部分のみが遺存したものと判断される。カマド：SB16・18と同様の方法で構築される。石組は東にむかってハの字状に開くことから、西カマドと考えられる。埋没：多量に砂礫を含む黒褐色土で他の遺構とは異なっている。帰属時期：NR1に浸食されていることや出土遺物の様相から7期に比定される。

SB16 位置：南部Ⅱ 図版17、第23図

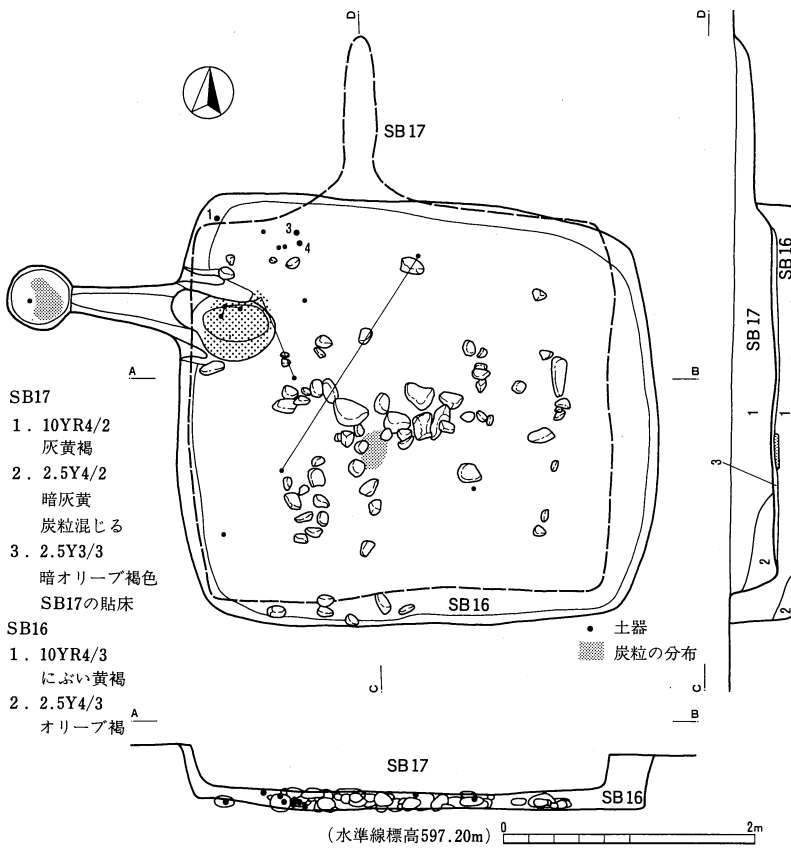
検出：ⅡA層上面で灰色土が落ち込む。SB17に切られる。カマド：SB17に削平されているため袖の下位と火床が残るにすぎない。左袖に礫が見られることから石組カマドと考えられる。煙道先ピット底部には炭粒が分布し、土師器甕B片が出土した。床：Ⅲ層上面まで掘り下げた後叩き締めている。埋没：2分層される。下層は壁の崩落土である。上層は拳大以上の礫が多出し、土も地山の土塊が混じり合うことから、SB17の床構築のために埋め戻された土層と考えられる。遺物出土状況：カマド周囲を中心として床面よりやや浮いた状態で、黒色土器A杯(1)、須恵器杯A(3)・杯B(4)、土師器甕B片、須恵器甕片が出土した。帰属時期：出土遺物の様相から7期に比定される。

SB17 位置：南部Ⅱ 図版17、第23図

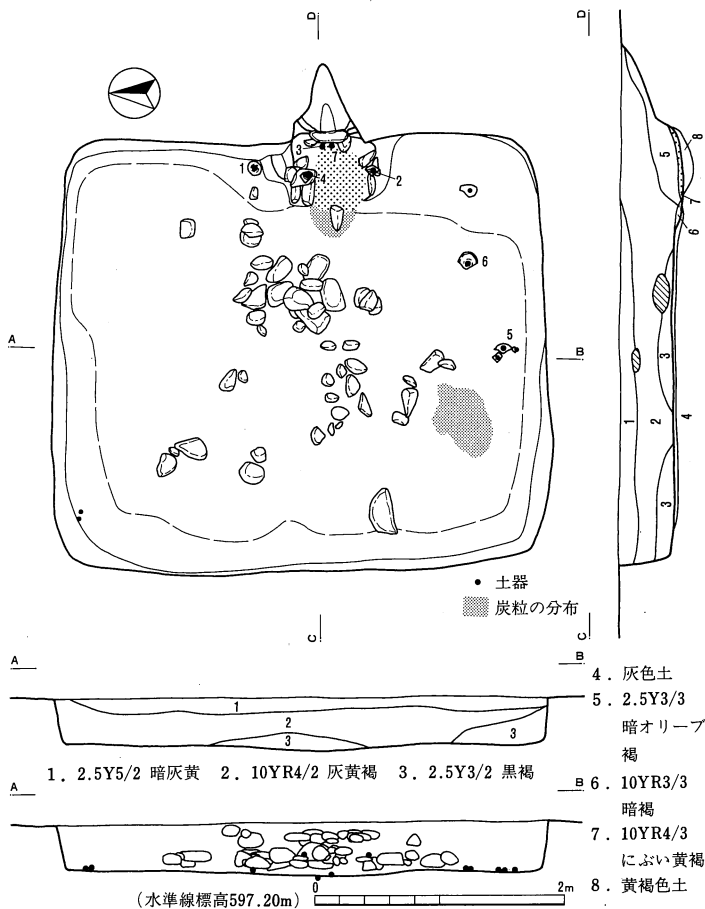
検出：ⅡA層上面で灰色土が落ち込む。SB16を切る。切合いはいわゆる「入れ子」の状態に近い。本址の覆土のほうがⅡA層土粒の混入が少ない。カマド：煙道のみ残る。燃烧部奥壁にわずかに炭粒が散っている。床：SB63床面に大形の礫を入れ、その上に灰色土を厚さ5～10cm貼っている。埋没：2分層される。下層は壁の崩落土である。上層は灰色土・ⅡA層・砂礫の混合で埋め戻しと考えられる。床面から覆土上位にかけ大形の礫が出土している。遺物は覆土中に散在した。帰属時期：出土遺物の様相から7期と判断される。切合いの状態からSB16から直接、建替えられたものと考えられる。

SB18 位置：南部Ⅱ 図版16、第22図

検出：ⅡA層およびⅠDf層対比の含礫泥層上面で灰色土が落ち込む。カマド：石組カマドである。燃烧部は壁を丸く掘り込んでいる。カマドの構築は地山を皿状に掘り凹めた後、黒褐色土を埋め戻しつつ、扁平な花崗岩の円礫を横長・縦位に置いて袖を作っている。火床上より土師器杯片(1)、小型甕D片(10)が出土している。床：Ⅲ層上面まで掘り下げた地山面を床としている。埋没：2分層される自然堆積土。床面から下層中にかけてカマド袖石を含む礫が出土している。大半の遺物は覆土上位で出土している。遺物出土状況：カマド周囲から床中央部にかけて黒色土器A杯(3・4)、須恵器杯A(6)、灰釉陶器碗(9)が見られた。また、覆土中で須恵器杯蓋を使用した転用硯(8)も出土している。帰属時期：出土遺物のなかで



第23図 SB16・17実測図



第24図 SB19実測図

主体を占めるものから8期と判断した。

SB19 位置：南部II

図版17、第24・27図、PL 3

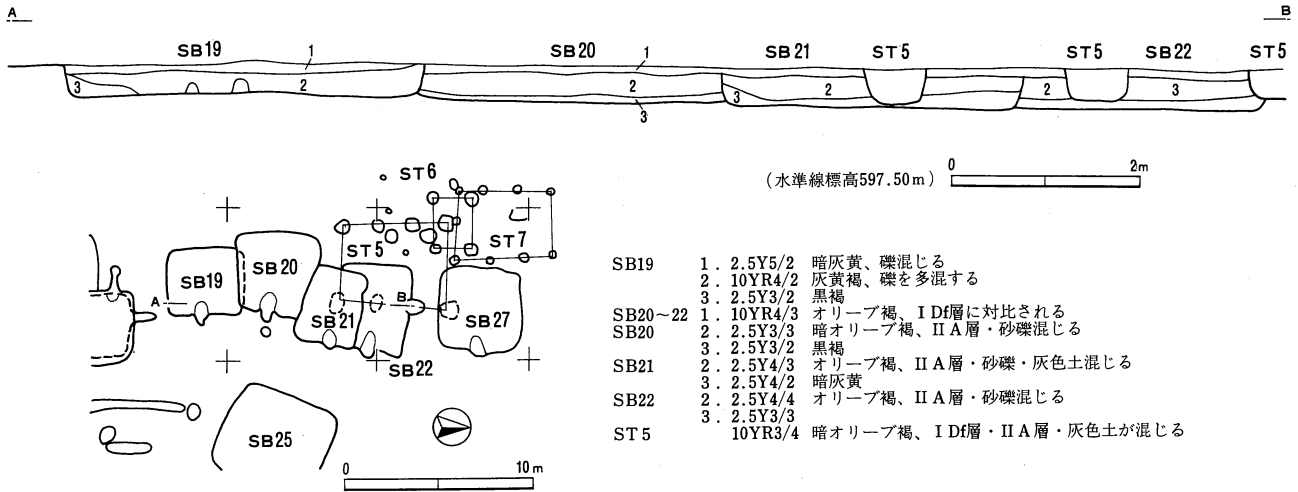
検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。SB20を切っている。本址の覆土のほうは灰色土の混入が多い。カマド：石組カマドである。燃烧部はやや壁を掘り込む。カマドの構築は地山を皿状に掘り凹めたあと、袖付け根に棒状の大形の礫を一对たて、その上に天井石を載せている。他の袖石は扁平な円礫を横長・縦位に置き、その間を黄褐色土で充填している。両袖から火床上にかけて、軟質須恵器杯(4)、黑色土器A杯(2)が逆位に置かれていた。他に黑色土器A

椀(3)、土師器甕B(7)が出土した。床：III層上面まで掘り下げた後、厚さ数cmの灰色砂質土(I Df層対比)を貼り、叩き締めている。南壁際床面に炭粒が分布していた。埋没：3分層される。1・3層は自然堆積土である。2層中にはカマド袖石を含む大形の礫が多出しておりII A層土粒が混在することから埋め戻しと考えられる。遺物出土状況：南壁寄り床面で灰釉陶器椀(5)・皿(6)が、カマド左脇床面で黑色土器A杯(1)が完形・正位で出土している。帰属時期：出土遺物の様相から7期に比定される。

SB20 位置：南部II

図版17、第25図

検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。SB19・21に切られる。カマド：火床のみ残る。床面を10cmほど掘り凹めた火床には焼土が堆積していた。その焼土中で須恵器杯Aが正位で出土し、内部も焼土

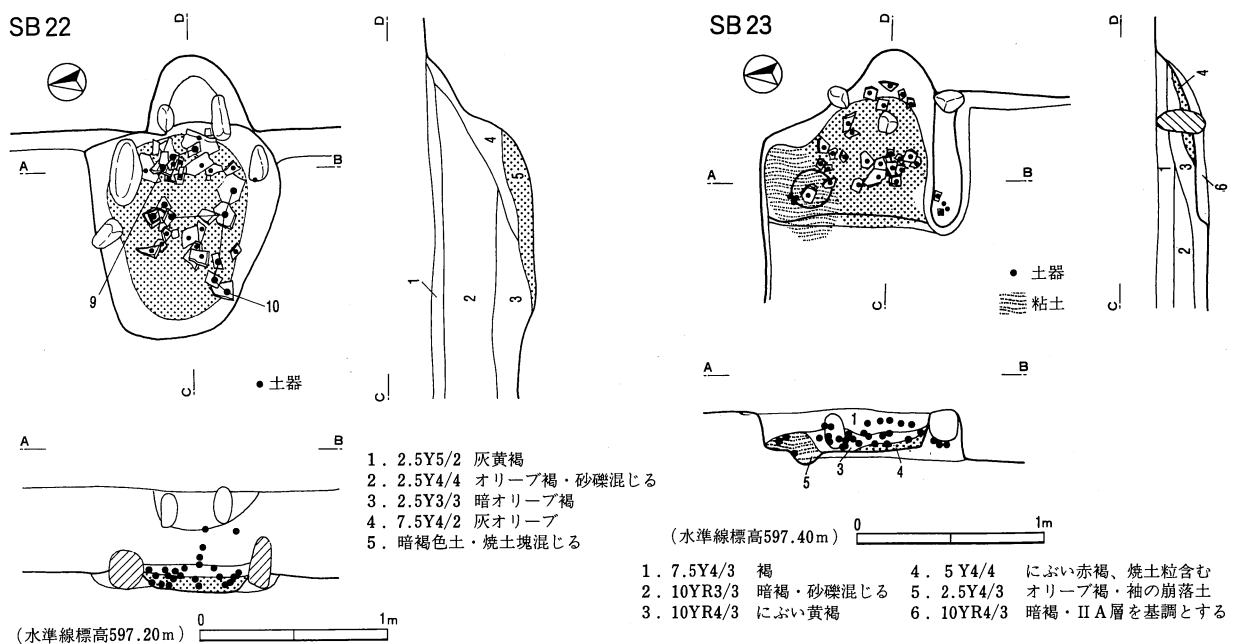


第25図 SB19~22・ST5土層断面図

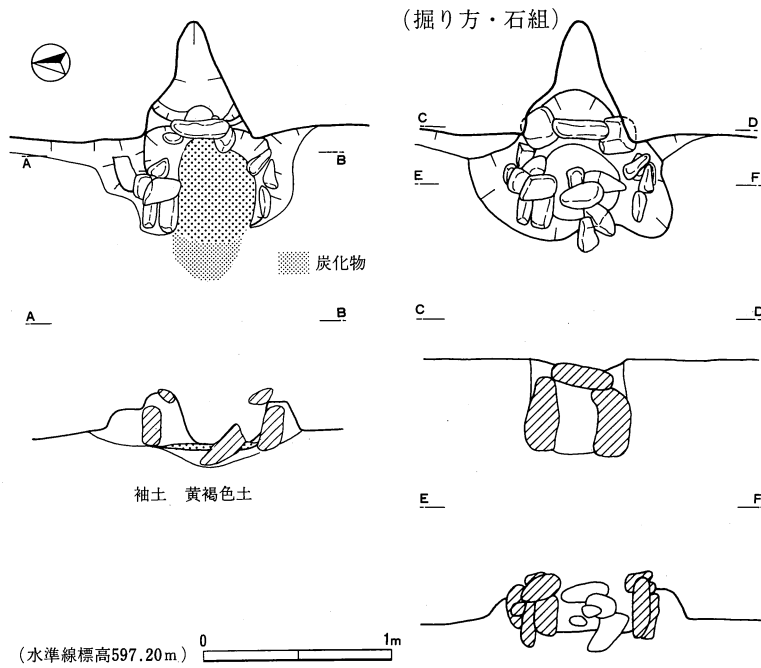
で満たされていたことから、カマド使用時には埋設していたものと判断される。火床上には土師器甕B片(3・5)も見られた。袖付け根に当たる部分は壁を若干掘り残している。床：III層上面まで掘り下げた後、灰色土を貼り叩き締めている。埋没：3分層される。1層はI Df層対比の自然堆積土である。2層はII A層と灰色土の混じり合う埋め戻し土で、3層は自然堆積土である。遺物出土状況：カマド右脇床面で須恵器鉢A(6)、土師器甕B片(3・5)、須恵器甕片が出土している。また覆土中より砥石(1)も出土している。帰属時期：出土遺物の様相から4期に比定される。

SB21 位置：南部II 図版17、第25・28図、PL4

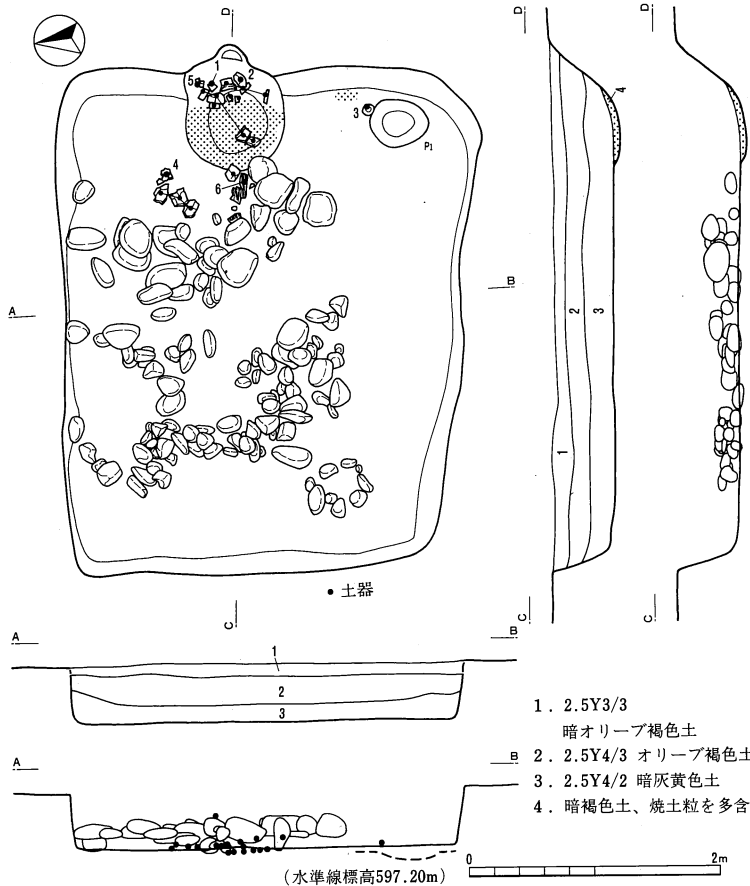
検出：I Df層およびII A層上面で灰色土が落ち込み、遺物が散っていた。ST15-P₈に切られ、SB20・22を切る。ST15の掘り方埋土のほうが灰色が強く、SB20・22の覆土は黒味を帯びていた。カマド：火床のみ残る。燃烧部は壁をやや掘り込む。火床も床面を7~8cm皿状に掘り凹めている。燃烧部奥壁下で土師器甕B片(7)、黒色土器A杯(2)がつぶれた状態で出土している。諸施設：カマド右脇で深さ10cmの落



第26図 SB22・23カマド実測図



第27図 SB19カマド実測図



第28図 SB21実測図

ち込みを確認した。灰色砂質土を覆土とし炭粒・骨粒がわずかに混じる(P₁)。床：III層上面まで掘り下げたあと灰色土を入れ叩き締めている。埋没：3分層される。1層はI Df層対比の自然堆積土。2層は地山と灰色土が混じり合い、カマド袖石を含む大形の円礫が多出していることから埋め戻しと判断される。3層は均一な粒子であることから緩慢に堆積したものであろう。遺物出土状況：カマド周囲の床面で土師器甕C(6)、須恵器杯A(4)が、P₁脇で須恵器坏A(3)が床面直上で出土している。それらのなかで1と4、さらにカマド付近で出土した須恵器杯A(5)には、墨書が見られた。帰属時期：切合い関係からSB22よりは新しいが、出土遺物の様相から6期に比定される。

SB22 位置：南部II

図版17、第25、26図

検出：I Df層中で灰色土が落ち込む。SB21、ST15に切られる。カマド：石組カマドである。構築は壁をやや掘り凹めたあと袖石を置いて作られているが、遺存状態が悪く左右の袖付け根部と燃烧部奥に礫が一对残るのみである。火床上から土師器甕B(9・10)、須恵器甕片が折り重なった状態で出土している。床：III層上面まで掘り下げた後、灰色土を一面に入れ叩き締めている。埋没：3分層される。1層は灰色土を主体とした自然堆積土である。2層はSB20と同様な埋め戻し土で、3層は粒子が細かく均一であることから自然堆積と判断される。覆土中に遺物は少ない。帰属時期：カマド出土の遺物から6期に比定される。

SB23 位置：南部II 図版16、第26図

検出：II B層対比の礫層上面で暗褐色土が落ち込む。SB24を切るが本址の覆土のほうが褐色が濃く、礫

の混入が少ない。カマド：東壁北寄りに位置する粘土カマドであるが、両袖付け根部分に一對礫を配している。左袖が倒壊したものと考えられる粘土塊が火床左に分布し、その下に支脚の痕跡と思われる深さ10cmの小穴が存在する。火床上には厚く焼土・炭が堆積し、支脚石が残されていた。火床上で土師器甕A(3・4)、須恵器杯A(1)が出土した。床：II B層下位まで掘り下げた後、叩き締めている。埋没：3分層される自然堆積土である。II A層を主体とし砂礫・灰色土・II B層が混入する。遺物出土状況：北壁際床面で須恵器杯A(2)が床面直上で出土しているほかは、覆土中の遺物量は少ない。帰属時期：検出状況およびカマド内出土遺物の様相から2期と考えられる。

SB24 位置：南部II 図版16

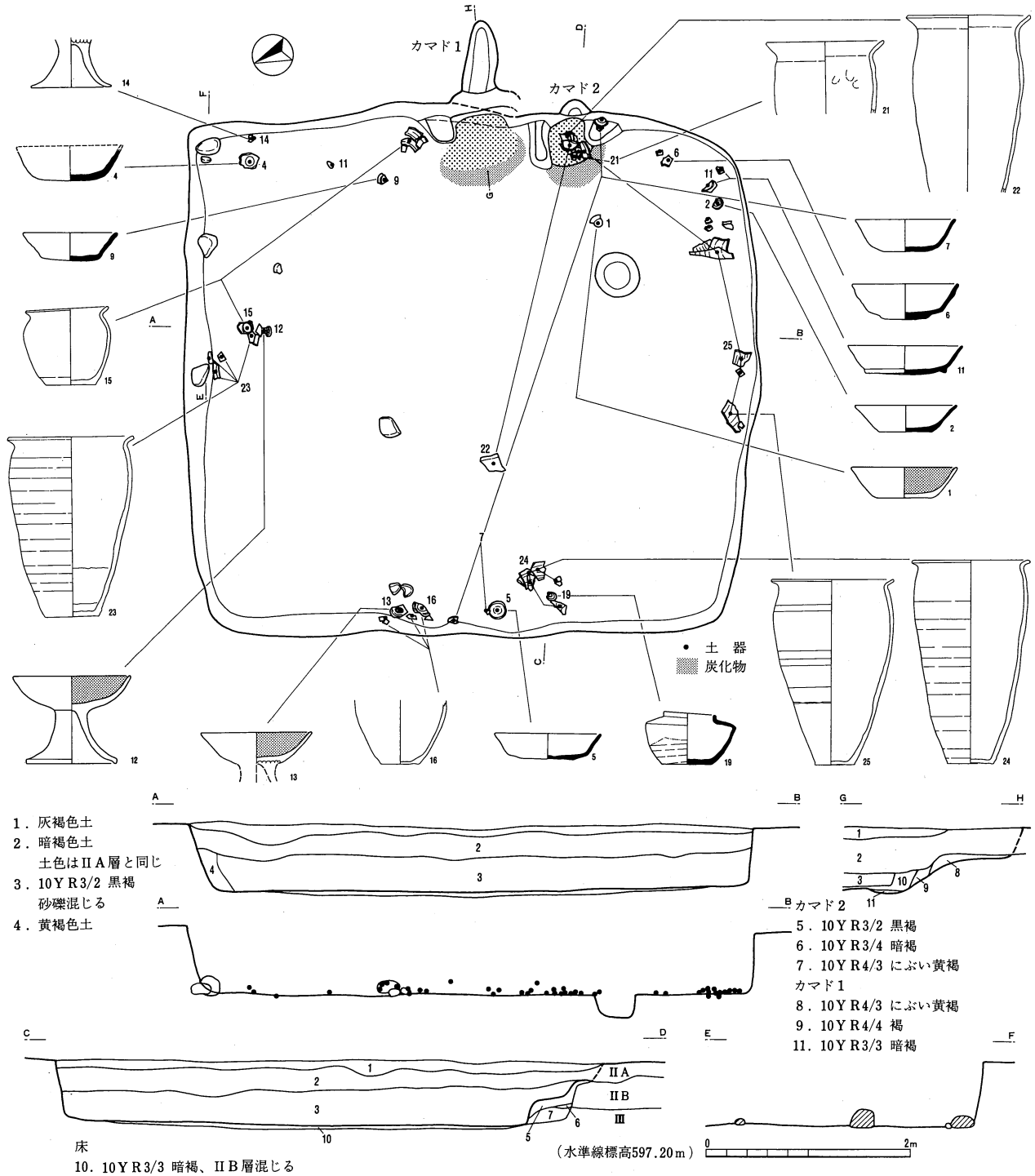
検出：II B層対比の礫層上面で暗褐色土が落ち込む。SB23に切られる。カマド：煙道と思われる溝状の落ち込みを東壁外で確認できただけである。床：II B層下位からIII層上面まで掘り下げた後、叩き締めている。埋没：単層である。拳大から人頭大の円礫が多出することから、II A層を主体とした埋め戻しと判断した。覆土中の遺物量はわずかである。帰属時期：遺物が少なく不明確だが、SB23より古く、検出状況や遺物から2期と判断した。

SB25 位置：南部II 図版18、第29図

検出：I Df層上面で灰色土が落ち込み遺物が散っていた。カマド：東壁中央部に粘土カマドが2基確認された。北側のをカマド1、南側をカマド2とした。新旧関係は後者のほうが新しい。カマド2の火床面より数cm下にカマド1の火床が位置し、また、貼床下からカマド1の袖の痕跡が見つかったためカマド1が廃絶されたのちに床が貼られ、カマド2が作られたと判断した。カマド1の構築は袖付け根に当たる地山部分をやや高く掘り残して袖が作られている。また、燃焼部はやや壁を掘り込んでいる。カマド2は床を貼ったあと袖が作られている。カマド2では須恵器杯A(7)と火床上で土師器甕Dが3個体分折り重なるように出土し、それらが住居址壁際で検出された遺物と接合関係を有しており(7・22・25)、住居址廃絶時の遺物遺存のあり方を考えるうえで好資料であろう。柱穴：南東より床面で径40cm深さ25cmの円形プランの落ち込みを確認している。他には検出できなかったがその位置から主柱穴の一本と判断される。北壁下で幼児頭大の扁平な円礫が3個1m～1.2m間隔で置かれており、上屋支柱の礫石か、壁材を支えるような機能をもつと推定される。床：III層上面まで掘り下げた後、暗褐色土を貼り叩き締めている。埋没：4分層される。1層はI Df層対比の自然堆積土で、6～8期の遺物を含む。2層はII A層と土色が同じであるが、粒子の大きさや混入物の違いから本来は違う土で、本址埋没以降の土壌化作用によって同色になったと判断した。3層は砂礫を多量に含むことから一過性の自然堆積土と考えられる。4層は壁の崩落土である。遺物出土状況：覆土3層中からの出土が多い。また、北・西・南壁際に完形・半完形の状態で多くの遺物が出土している。土師器甕Dが横倒しの状態で検出された(15・16・23・24・25)ほかに、須恵器杯(2・4・6・7)・短頸壺(19)、土師器杯(1)・高杯(13)・土錘(11)が床面直上ないしそれに近い状態で出土している。また、覆土中で鉄製品の刀子(27)が見られた。帰属時期：出土遺物の様相から2期に比定される。

SB26 位置：南部II 図版16

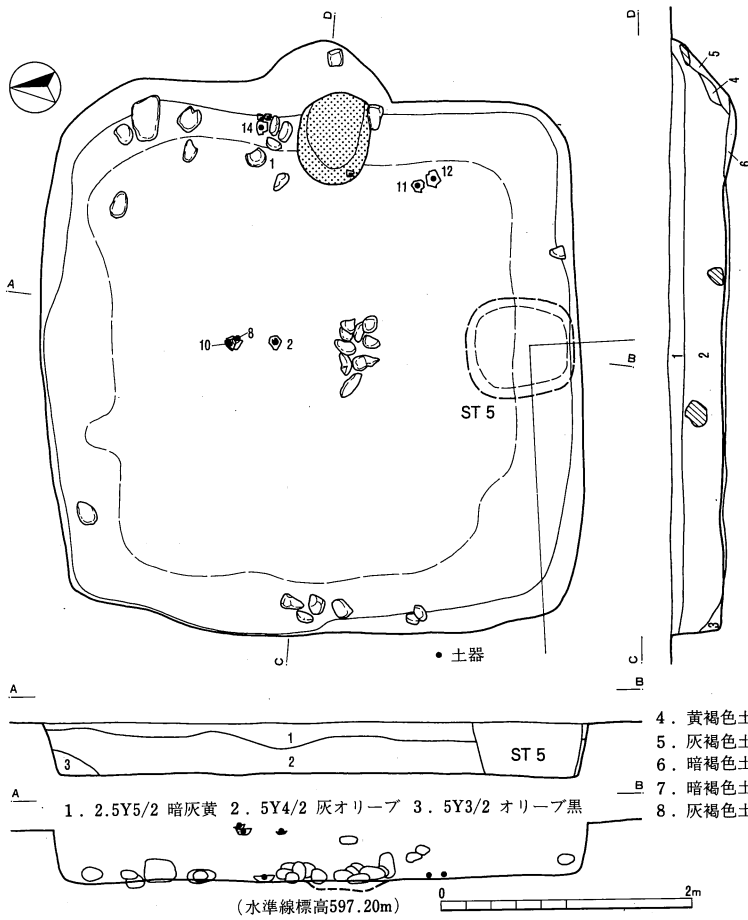
検出：II A層上面で灰色土を混えた暗褐色土が落ち込む。カマド：粘土カマドであるが、両袖先端に人頭大の円礫を配している。燃焼部は壁を丸く掘り込む。左袖外側に須恵器杯A(1)が貼り付けられたように出土した。床：III層上面まで掘り下げた後、灰色土を1～2cm貼り、叩き締めている。埋没：2分層される自然堆積土である。遺物出土状況：西壁下中央で須恵器杯A(2)、床中央で須恵器長頸壺(4)が出土している。また、カマド火床上には須恵器杯A(3)、土師器甕B片(7・8)が散乱していた。帰属時期：出土遺物の様相から5期に比定される。



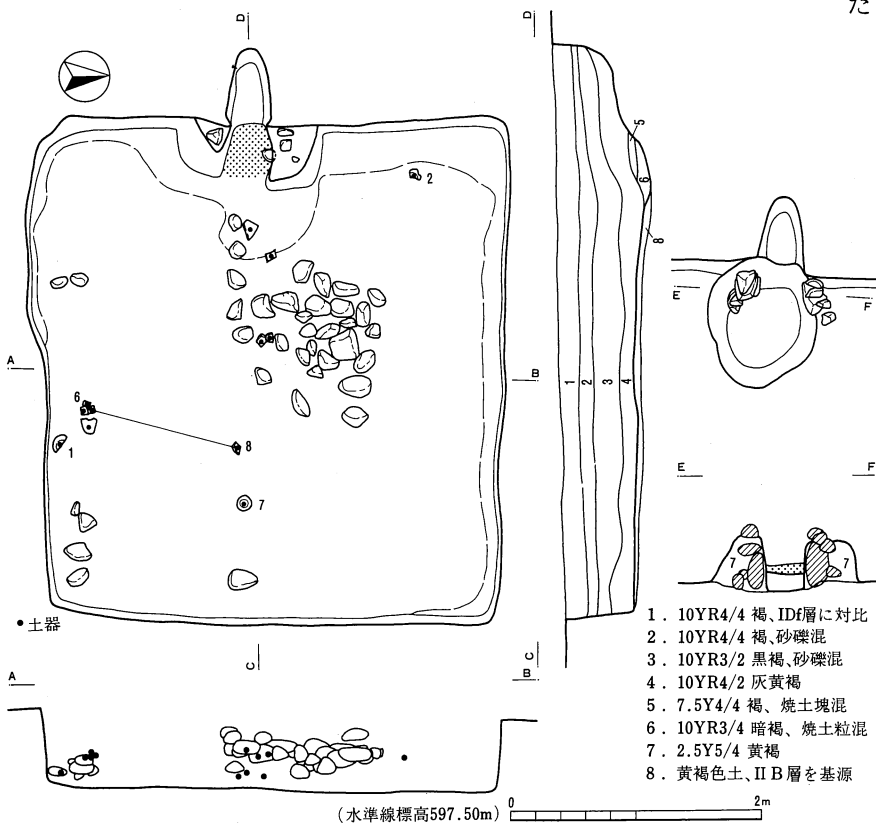
第29図 SB25実測図・遺物出土状況

SB27 位置：南部II 図版17、第30図、PL 4

検出：I Df層中で灰色土が落ち込み遺物が散在していた。ST5 - P₅に切られる。ST5の掘り方埋土のほうが灰色が濃い。カマド：石組カマドである。燃烧部奥は壁を丸く掘り込んでいる。袖は右袖付け根部に袖石が1個のこるのみであった。火床は床面より深さ6~7cmの皿状の落ち込みとなっている。床：III層上面まで掘り下げた後、壁際を除き灰色シルト(I Df層対比)を2~3cmの厚さで貼り叩き締めている。東壁際床面で人頭大の扁平な礫が置かれていた。埋没：4分層される。1層はI Df層対比の自然堆積土。2層は地山II A層を多混する埋め戻し土で、3・4層は壁の崩落土である。遺物出土状況：住居址中央の覆土上位で、須恵器杯A・杯蓋(8・10)がセットで、やや離れて黒色土器A杯(2)が正位で出土した。この



第30図 SB27実測図



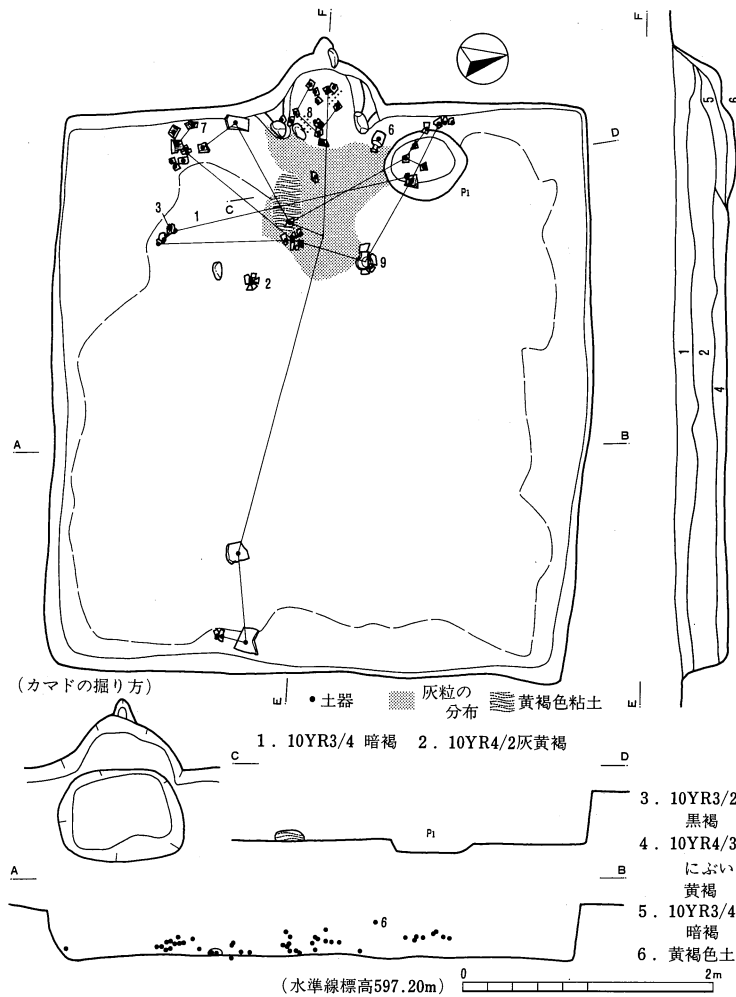
第31図 SB28実測図

出土状況は本址が埋没したあと置いたか、あるいは、埋設したものと考えられ、ST 5の北にあたり関係が注意される。なお8の須恵器杯には「倉」、黒色土器A杯(2)にも漢字の一部で草冠らしき墨書が観察された。ほかにカマド周辺で黒色土器A杯(1)、須恵器鉢C(11)、土師器小型甕D(12)、土師器甕B(14)が見られた。床中央部に拳大の円礫が9個出土しているが、その性格は不明である。帰属時期：出土遺物の様相から6期に比定される。

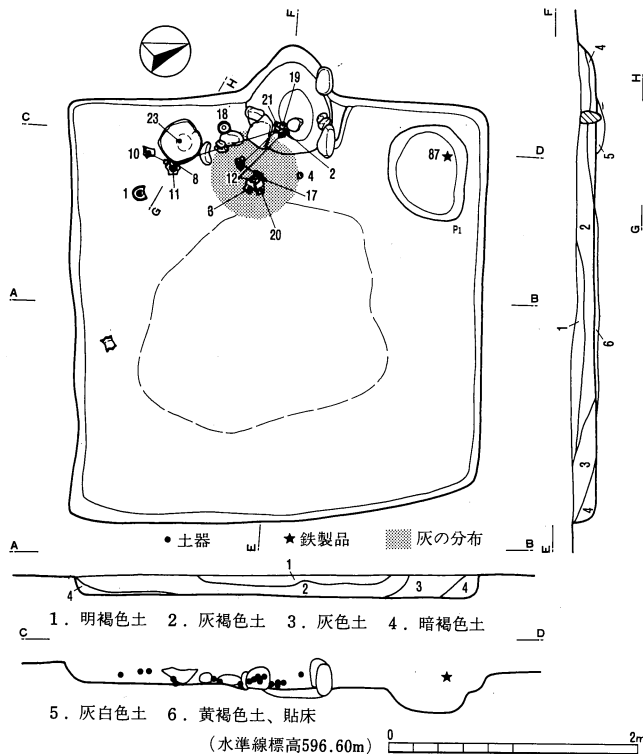
SB28 位置：南部II

図版16、第31図

検出：I Df層上面で灰色土が落ち込む状態がかすかに確認できた。平面形の確定はII A層上面で行った。カマド：石組カマドである。構築は床面を皿状に浅く掘り凹めたあと、硬砂岩の人頭大の円礫を袖付け根部に置き、その上に拳大の礫を積み上げて袖を作っている。床：II B層上位まで掘り下げて、削平し叩き締めている。埋没：4分層される自然堆積土で、3・4層中には拳大以上の大形の礫が多数入り、人為的に礫が投げ込まれたとも考えられる。遺物出土状況：遺物は覆土中に散漫に出土している。検出面上で灰釉陶器片が出土した。また、覆土中で須恵器杯蓋Bを用いた転用硯(6)が出土した。帰属時期：出土遺物の様相から



第32図 SB29実測図



第33図 SB30実測図

5期に比定される。

SB29

位置：南部II

図版18、第32図

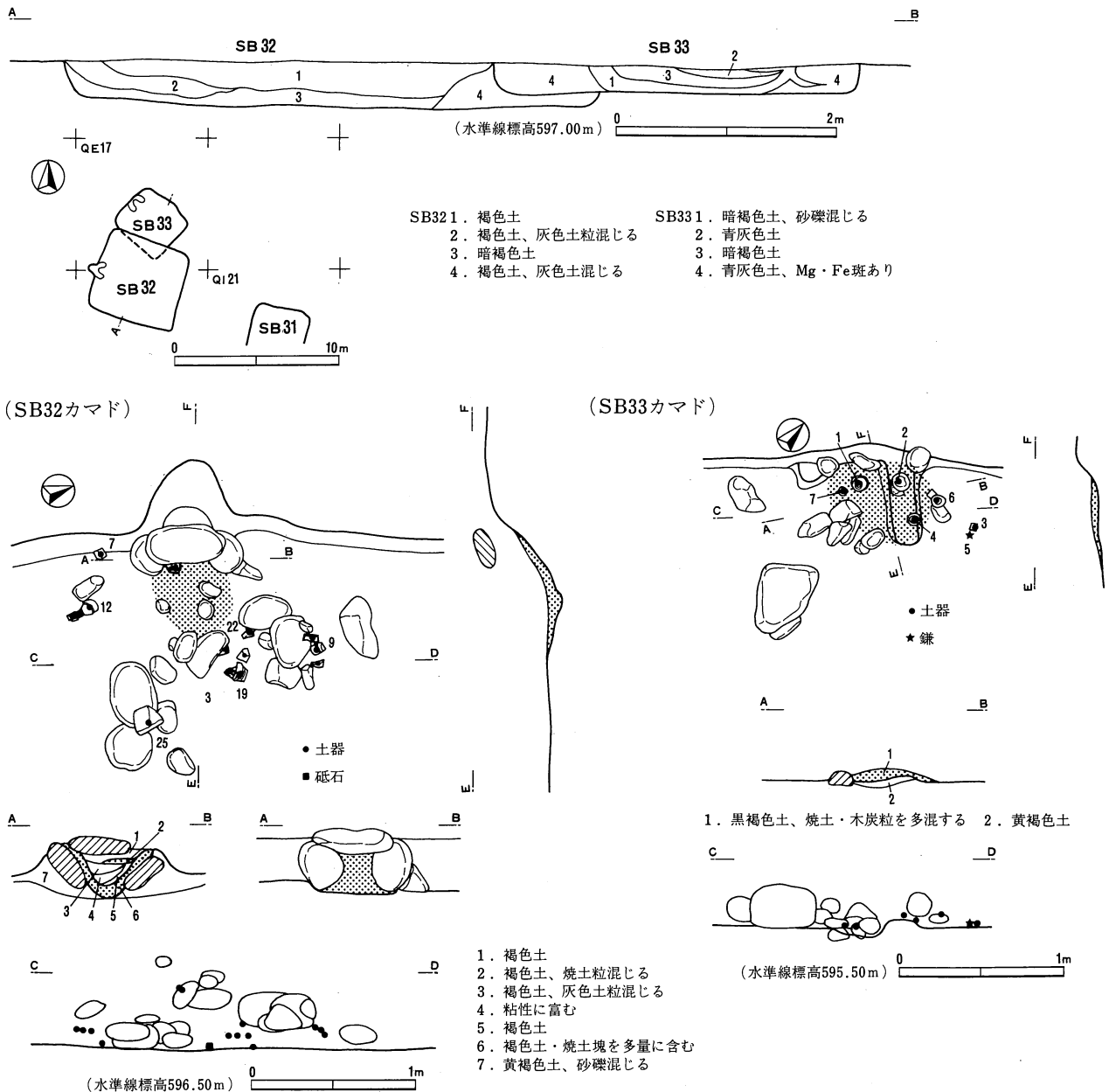
検出：I Df層上面で灰色土が落ち込む。カマド：石組カマドである。燃烧部は壁を掘り込んで作られる。煙道付け根部と両袖付け根部に石組の残存物と思われる円礫が置かれていた。明確な火床は確認できなかった。付近の床面に広く灰粒と粘土塊が分布している。火床上より土師器甕B片(8)が出土した。床：II B層・III層上面まで掘り下げた後、暗褐色土を薄く貼り叩き締めている。埋没：4分層される自然堆積土である。1層はI Df層起源で、2・4層はII A層を基調とする自然堆積、3層は壁の崩落土である。遺物出土状況：カマド前の床面で黒色土器A杯(1・2)、須恵器杯A(4)、土師器甕B(7)・甕C(9)が出土し、周囲の覆土中から須恵器長頸壺(6)が完形で、ほかに、須恵器甕A片が住居址内に散乱した状況で出土している。帰属時期：出土遺物の様相から7期に比定され、主軸方向の一致や墨書土器の存在からSB31・32との関係が注意される。

SB30

位置：南部III

図版19、第33図

検出：II A層上面で明褐色土が落ち込む。カマド：石組カマドである。構築は床面を皿状に掘り込んだ後、人頭大の円礫を置き袖を作る。燃烧部は壁を掘り込んでおり、中央に支脚石が残る。床：III層上面まで掘り下げた後、黄褐色土の混じった灰白色土を貼り叩き締めている。埋没：4分層される自然堆積土である。土層は河川の影響による後置的な灰色化現象が進んでおり青灰色を呈している。遺物出土状況：カマド左側に完形・半完形の遺物の出土が



第34図 SB32・33土層断面図、カマド実測図

多い。特に、須恵器甕A(23)は円礫と黒色土器A碗(8)、灰釉陶器碗(11)で支えられて、正位・床面直上で出土した。覆土中から棒状の鉄製品が出土している(87)。帰属時期：出土遺物の様相から8期に比定される。

SB31 位置：南部III 図版19

検出：II A層およびそれに対比される砂礫層上面で褐色土が落ち込み、炭粒・遺物が散布していた。カマド：石組カマドである。構築は地山を皿状に掘り凹めた後、扁平な人頭大の円礫を横長・縦位に置き、明褐色土を充填して袖を作る。床面および覆土中にカマド袖石が散乱しており、カマドが崩された可能性もある。床：III層上面まで掘り下げた地山面を床としている。埋没：4分層される自然堆積土で、2～3層中にカマド袖石を含む拳大以上の円礫が多出している。遺物出土状況：覆土中に散漫に分布している。覆土中の黒色土器A皿(5)、土師器甕B(7・10)はSB32の遺物と接合関係を有する。なお黒色土器A碗・皿(4・5)には墨書が見られた。帰属時期：出土遺物の様相や、SB29・32と主軸方向が一致し、遺物の接合が見られることから7期に比定した。

SB32 位置：南部III 図版19、第34図

検出：II A層およびそれに対比される砂礫層上面で褐色土が落ち込む。SB33に切られる。カマド：石組カマドである。構築は地山を皿状に掘り凹めた後、扁平な人頭大の円礫を横長・縦位に置き明褐色土を充填して袖を作る。袖の上には天井石が残り、火床中央に支脚の痕跡が見られる。カマド前には袖石が散乱し、黒色土器A杯(7・9)・皿(12)、土師器甕B・小型甕D、須恵器長頸壺(25)が分布している。これらの状況からカマドは西から東の方向へ倒壊したものと判断される。床：III層上面まで掘り下げた後、灰色土の混じった黄褐色土を貼っている。諸施設：南壁際床面に深さ20cmの落ち込みを確認している。埋没：4分層される自然堆積土である。遺物出土状況：カマド周囲で遺物量が多いが、墨書土器(12)、石製品の砥石(3)が床面直上で出土しているほかは床面より10cm以上浮いた状態でのものが大半である。帰属時期：出土遺物の様相から7期に比定される。SB31と遺物の接合が見られた。

SB33 位置：南部III 図版19、第34図

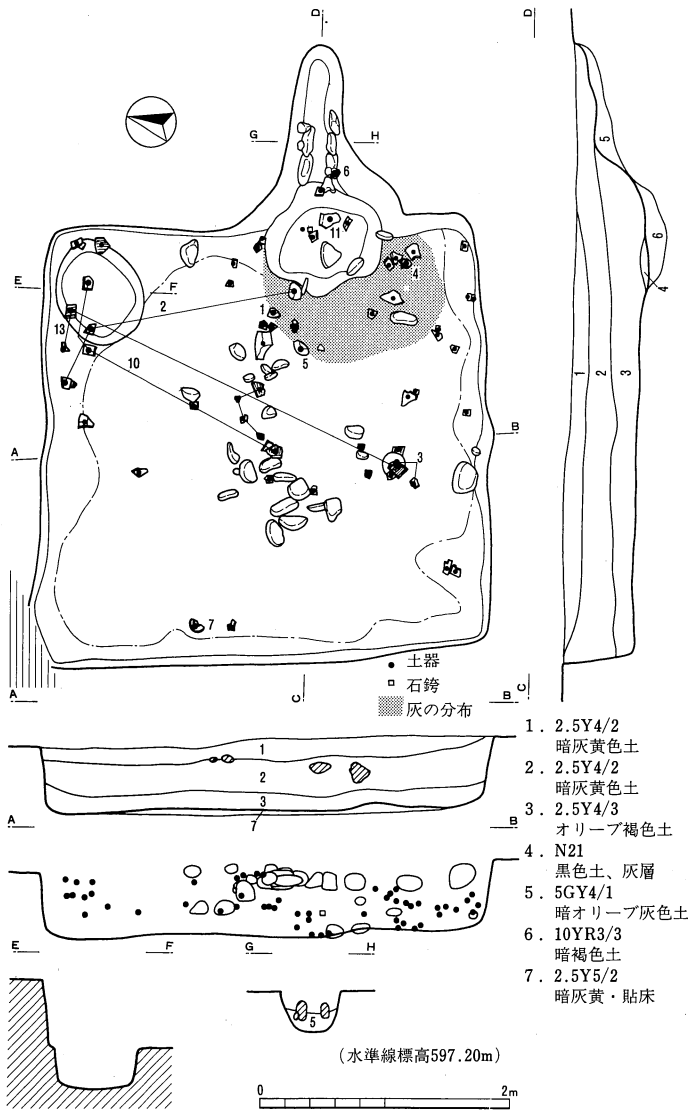
検出：II A層およびそれに対比される砂礫層上面で青灰色土が落ち込む。SB32を切る。本址の覆土のほうに灰色が濃い。カマド：石組カマドである。カマドの構築は地山を皿状に掘り凹めた後、黄褐色土で袖を作る。石組の一部が残っているのみである。カマド前に袖石が散乱していた。床：III層上面まで掘り下

げた後、青灰色土の混じる暗褐色土を貼り叩き締めている。諸施設：南西隅寄り床面で深さ12cmの落ち込みを確認している。埋没：4分層される自然堆積土である。砂礫の混入の多いことや土層断面形から一過性の自然堆積と判断される。遺物出土状況：カマド内で土師器杯(1・2)・椀(4)・鉢(7)、黒色土器A椀(6)が見られた。出土状況からカマド崩壊後に置かれた可能性が高い。ほかに鉄製品の鎌(5)が床面直上で出土している。帰属時期：カマドを中心とした出土遺物の様相から13期に比定される。

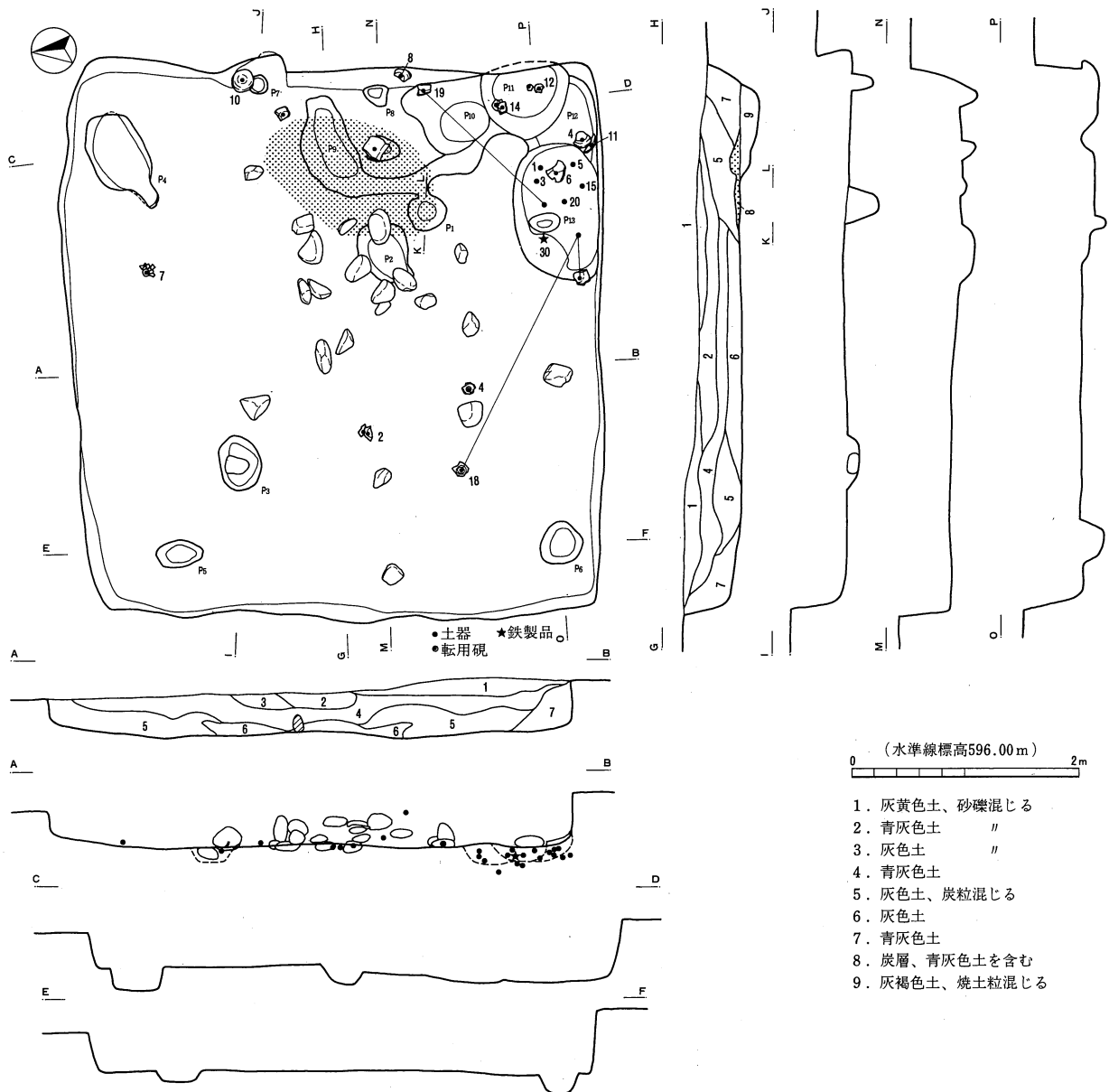
SB34 位置：南部III

図版19、第35図

検出：I Df層中で灰色土が落ち込み遺物の散布が見られた。カマド：燃烧部は壁を丸く掘り込んでいる。火床上に人頭大の礫が散乱しているため本来は石組カマドと想定される。火床下には深さ10cmの掘り方が見られ、カマド前には灰が分布していた。煙道の構築は深さ30cmほどの溝状に掘り凹めた後、両側に棒状の礫を配しつつ埋め戻し、深さ20cm・幅15cmくらいに仕上げている。確認できなかったが、本来はこの礫の上は平石で蓋がされていたと考えられる。カマド周囲の床面から黒色土器A椀(4)、軟質須恵器杯(7)、土師器甕



第35図 SB34実測図

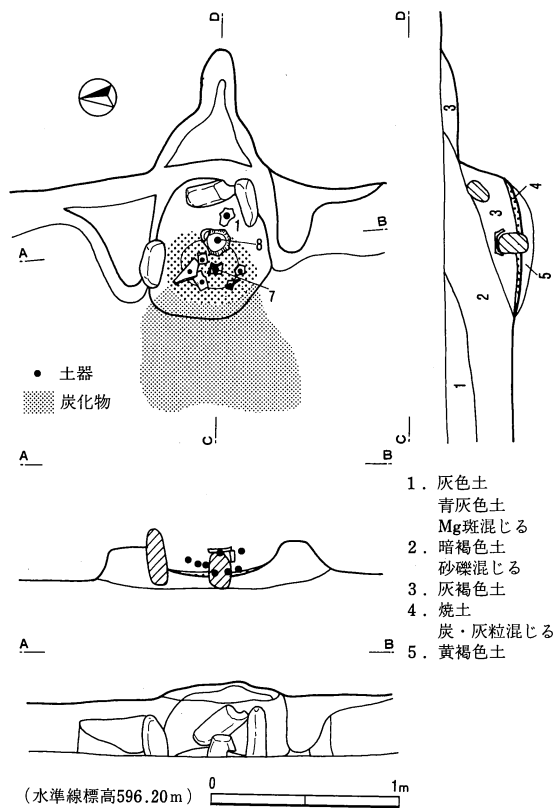


第36図 SB35実測図

B片、煙道掘り方内から軟質須恵器杯(6)が出土している。床：II B層中位まで掘り下げた後、灰黄色土を厚さ数cm貼り、叩き締めている。諸施設：北東隅寄り床面で深さ30cmの落ち込みを確認しているが、その性格は不明である。埋没：3分層される。上層は自然堆積土である。中・下層は大形の礫が多出していることから埋め戻し土と判断した。遺物出土状況：礫の出土と同様に床面より10cm以上浮いて多くの遺物が見られた。カマド近くの覆土中から石鏑巡方が出土した。帰属時期：出土遺物の様相から7期に比定される。

SB35 位置：南部III 図版22、第36図

検出：II A層上面およびI Df層相当の砂礫層上面で灰色土が落ち込む。NR5を切って構築される。カマド：覆土中および床面にカマド袖石が散乱することから存在した可能性が高い。柱穴：床面中央部に深さ25・18・8cmの落ち込みがあり、位置的に主柱穴の可能性はある(P₁・P₂・P₃)。また住居址隅寄りにも20・15・15cmの落ち込みが見られる(P₄・P₅・P₆)。さらに東壁中央部にも深さ20cm・15cmの小さな穴があり(P₇・P₈)、これらは支柱穴と考えられる。諸施設：南東寄り床面で5基の落ち込みを確認した。東壁中



第37図 SB36カマド実測図

中央下のP₉は不整形な溝状を呈し、覆土中に炭・焼土粒を混じえることからカマドの掘り方と考えられる。南東隅下のP₁₀~P₁₃は楕円形プランで深さ5~15cmを測る。P₁₁・P₁₃内では多くの遺物の出土を見ている(1・3・5・9・12・14・18・20)。これらは位置的に貯蔵穴等の施設とも思われる。床：II A層下位まで掘り下げた後、中央部を黄褐色土で、北壁寄りを砂礫で厚さ25cmほど埋め戻してから黄褐色土を数cm貼っている。埋没：7分層される自然堆積土である。P₉の上には炭粒を多含する土が分布する。遺物出土状況：黒色土器A杯(2)、軟質須恵器杯(10・11)、灰釉陶器碗片を用いた転用碗(4)が床面直上で出土しているほか、覆土の下位に遺物が多い。P₁₃内では鉄製品の刀子(30)が出土したほか、覆土中で多数の鉄滓も出土している。帰属時期：出土遺物の様相や、SB36・37と主軸方向が一致することから8期に比定される。

SB36 位置：南部III
図版21、第37図

検出：II A層上位で灰色土を多含する暗褐色土が落ち

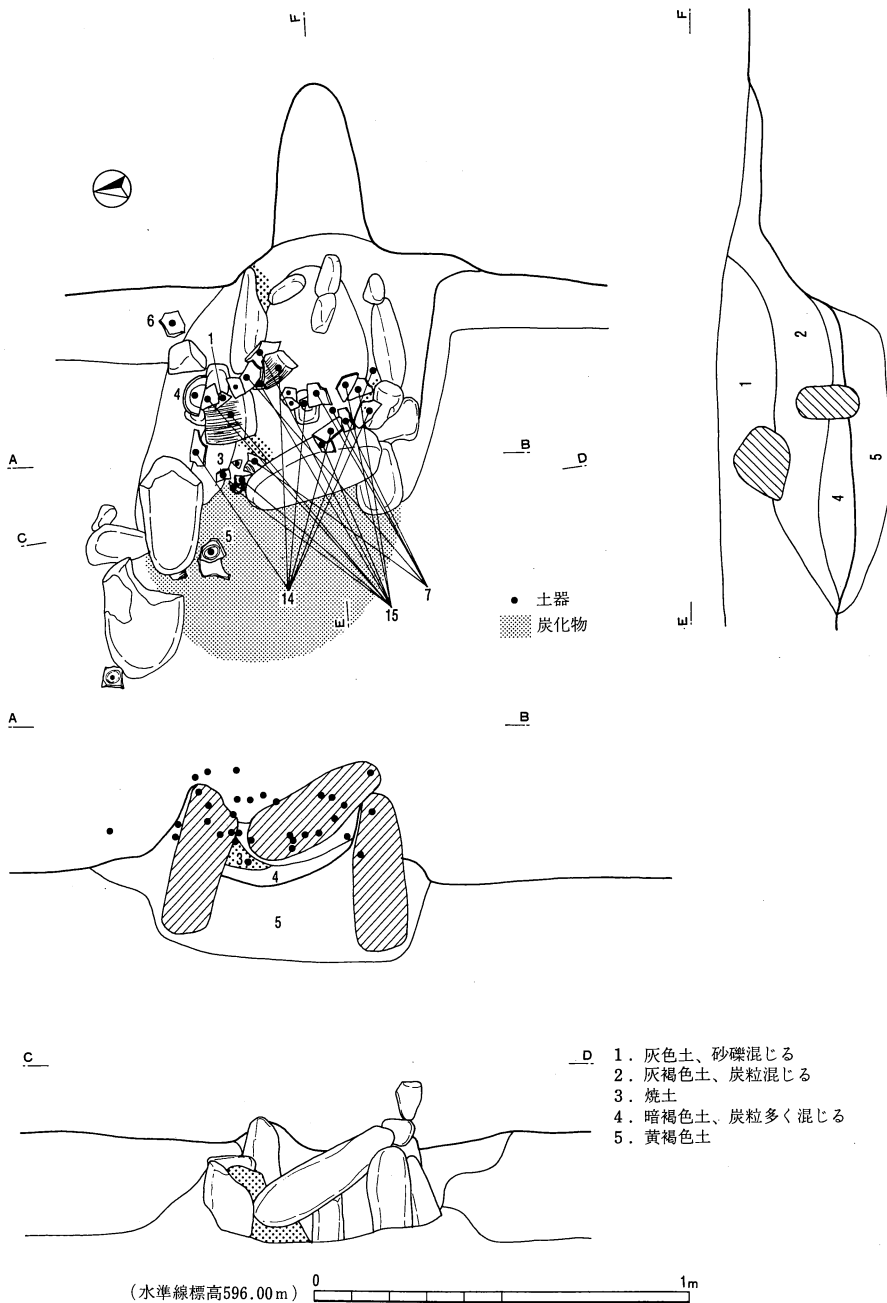
込む。カマド：石組カマドである。構築は地山を皿状に掘り凹めた後、花崗岩の扁平な人頭大の円礫を横長・縦位に配して、褐色土を充填して袖を作っている。袖石の多くは抜き取られている。火床中央に土師器甕B底部(8)を被せた支脚石が残っている。カマド内で土師器杯(1)・小型甕D片(7)が見られた。床：II B層下位まで掘り下げた地山面を床としている。諸施設：カマド周囲の床面で深さ15cm弱の落ち込みが見られ、位置的には柱穴の可能性はある。北東隔壁面に床面からの高さ10cm位の平坦面が存在する。埋没：2分層される自然堆積土である。遺物出土状況：北壁中央下および南東隅下床面で黒色土器A碗(4・5)・杯(2・3)が完形状態で出土している。帰属時期：出土遺物の様相から8期に比定される。

SB37 位置：南部III 図版21、第38図、PL 5

検出：I Df層中で灰色土が落ち込み、遺物・炭粒が散布していた。NR 6を切り、SK142に切られる。SK142の覆土は黄褐色を呈している。カマド：石組カマドである。燃焼部はやや壁を掘り込む。カマドの構築は花崗岩の人頭大の円礫を横長・縦位に置き、その上に天井石を組んでいる。両袖は平行で、火床中央に支脚石が残っていた。カマド内に土師器杯(3)、黒色土器A杯(4・5)・碗(6)・鉢(7)、2個体の土師器甕B(14・15)が袖上部から燃焼部にかけて斜位・逆位で出土しており、カマド崩壊後に入ったものと考えられる。床：III層・II B層下位まで掘り込んだ後、中央部から西壁下にかけて黄褐色土を貼っている。埋没：単層であるが、砂礫の混入が多いことから一過性の自然堆積土と判断される。遺物出土状況：土師器甕B(13)・小型甕D(10・11・12)の底部が壁際の床面直上で出土している。帰属時期：カマドを中心とした遺物の様相から8期に比定される。

SB38 位置：南部III 図版20

検出：I Df層に対比される砂礫層およびII A層上面で灰色土が落ち込む。規模は小さいものの平坦な床面を持つことから竪穴住居址と判断した。カマド：西壁寄り焼土の分布が見られることから西壁にカマドが存在した可能性が高い。床：III層上面まで掘り下げた地山面を床としている。埋没：3分層される自



第38図 SB37カマド実測図

然堆積土である。覆土中には砂礫の混入が多い。遺物量は少ない。帰属時期：出土遺物の様相から7期と判断した。

SB39

位置：南部III

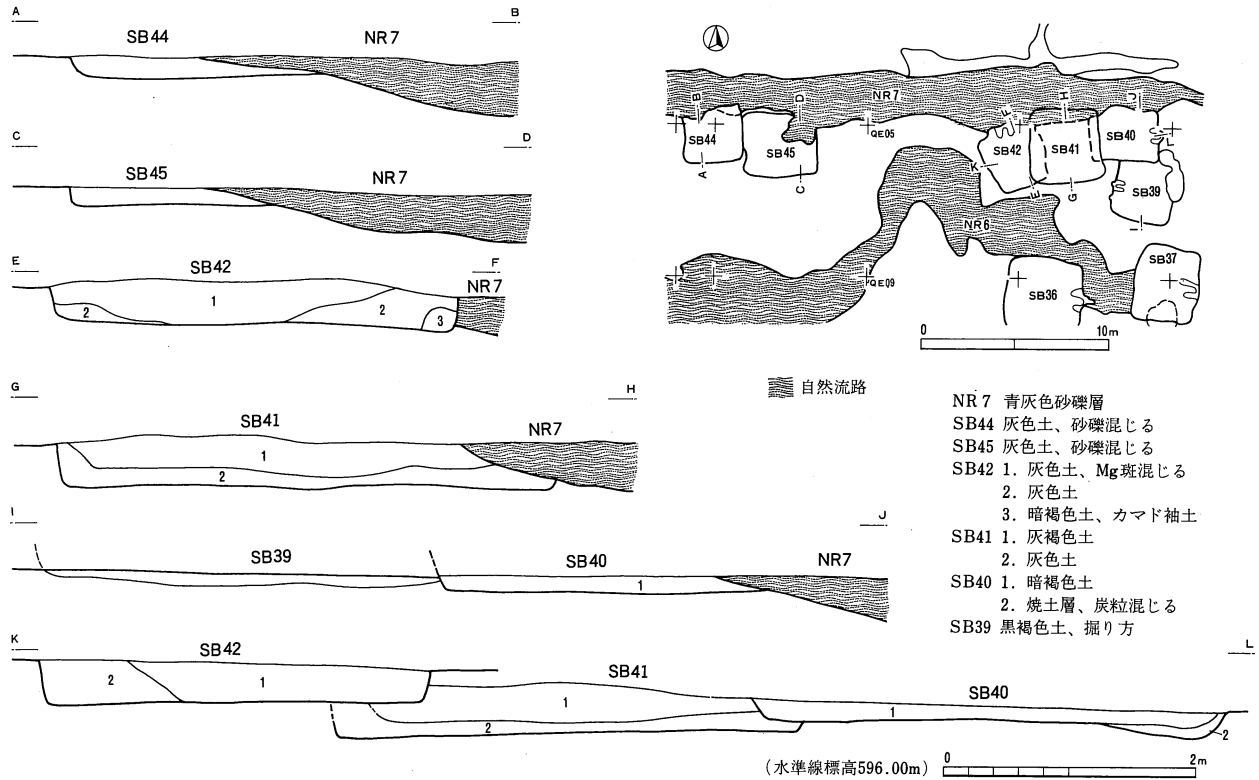
図版21、第39図

検出：II A層上位で暗褐色土が落ち込む。I Df層の堆積により本址の覆土の大半が削剝されている。SB40に切られる。カマド：粘土カマドであるが袖の下位と火床が残るのみである。諸施設：カマド左側壁際に焼土・炭粒を伴う浅い皿状の落ち込みを確認している(P₁)。覆土の状態から灰溜めと判断される。床：II B層下位まで掘り下げた後、若干埋め戻し暗褐色土を入れ叩き締めている。埋没：浅いため詳細は不明である。遺物量は多い。帰属時期：出土遺物の様相から2期に比定される。

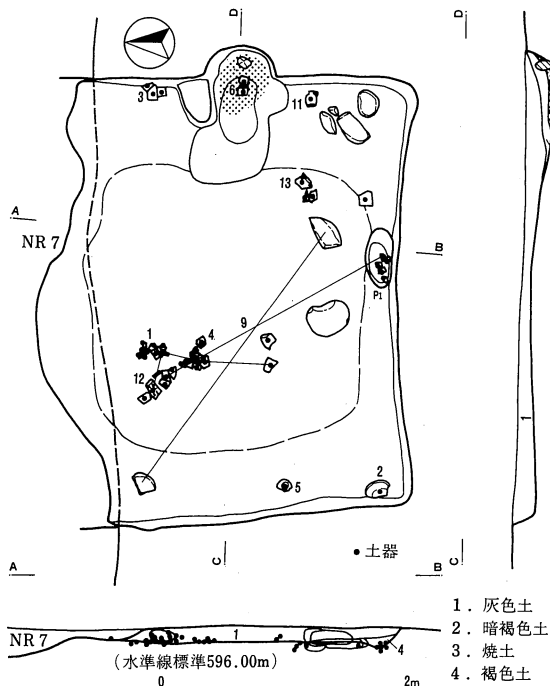
- D. 1. 灰色土、砂礫混じる
 2. 灰褐色土、炭粒混じる
 3. 焼土
 4. 暗褐色土、炭粒多く混じる
 5. 黄褐色土

SB40 位置：南部III 図版21、第39・40図

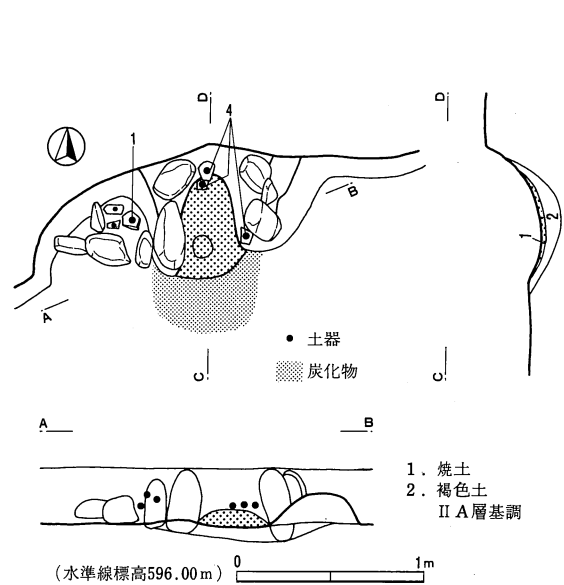
検出：II A層上位で灰色土が落ち込む。I Df層でも検出可能であった。SB39・41を切る。本址覆土のほうが灰色土の混入が多い。NR7に浸食される。カマド：花崗岩のカマド袖石が床面・覆土中に散乱することから本来は石組カマドと思われる。カマドの構築は床面をやや掘り凹めた後、II B層起源の黄褐色土で袖を作り、燃烧部は壁を丸く掘り込む。支脚石が残っていた。火床上で黒色土器A碗(6)が出土している。床：II A層下位まで掘り下げた後、暗褐色土を貼っている。諸施設：南壁際床面で深さ8cmの焼土粒を多含する落ち込みを確認している(P₁)。内部で軟質須恵器杯(7)が見られた。埋没：単層であるが覆土が浅いため詳細は不明である。遺物出土状況：床面で土師器杯(1)、黒色土器A杯(2・3)・碗(4・5)、土師器甕B片・小型甕D(9)、灰釉陶器小瓶(11)、須恵器甕A(12)が見られた。帰属時期：出土遺物の様相から8期に比定される。



第39図 SB39~42・44・45土層断面図



第40図 SB40実測図



第41図 SB42カマド実測図

SB41 位置：南部III 図版21、第39図

検出：II A層およびI Df層上面で灰色土が落ち込む。北側はNR 7に浸食されている。SB40・42に切られる。カマド：東壁際に焼土・炭粒の分布が見られ、カマドと考えられる。床：II B層下位まで掘り込んだ後、黒褐色土を貼り叩き締めている。埋没：2分層される自然堆積土である。遺物出土状況：カマド付近の床面で黒色土器A杯(2)・土師器甕B・甕C(5)が見られた。覆土中より鉄製品の釘が出土している。

帰属時期：出土遺物の様相から7期に比定される。

SB42 位置：南部III 図版21、第39・41図

検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。SB41・NR7を切る。本址はSB41覆土中に貼床をしている。カマド：石組カマドである。燃烧部は壁を丸く掘り込んでいる。袖は花崗岩他の扁平な人頭大の円礫を横長・縦位に配している。カマド周囲に袖石が散乱している。火床上より土師器甕B片(4)が出土した。床：II B層下位まで掘り下げた後、黄褐色砂質土を入れ叩き締めている。埋没：2分層される自然堆積土である。遺物出土状況：南東隅寄りの床面で灰釉陶器小瓶を用いた水滴(6)が出土した。帰属時期：出土遺物の様相から8期に比定される。

SB43 位置：南部III 図版22、第42図、PL5

検出：II B層上面で灰色土が落ち込む。本址東側の大半が調査区域外で調査に至らなかった。NR7に浸食される。カマド：粘土カマドである。袖は住居址の荒掘り時に、袖の部分を高く掘り残して作られている。火床中央に深さ10cm弱の支脚痕を認める。天井部の崩落土と思われる灰白色粘土の堆積がカマド内に見られた。床：II B層中位まで掘り下げた後、暗褐色土を貼床している。カマド構築後に床が作られている。諸施設：カマド両側に深さ15cmの落ち込みを確認した(P₁・P₂)。また、カマド左袖脇にも深さ7cmの小さな穴が見られた。それらの覆土は同質で焼土・炭粒を多く含む。P₂からは土師器杯D(1)、須恵器杯A(2)、土師器小型甕B(4)・甕A片が出土している。埋没：2分層される自然堆積土である。覆土中の遺物量は少ない。帰属時期：P₂を中心とした出土遺物の様相から1期に比定される。

SB44 位置：南部III 図版20、第39図

検出：II A層上面で灰色土と砂礫の混じった土が落ち込む。SB45に切られ、NR7に浸食される。カマド部分は確認できなかった。床：III層上面まで掘り下げた後、叩き締めている。床面上に炭粒と焼土粒の分布する箇所が見られることから焼失住居の可能性もある。埋没：単層だが覆土が薄いため詳細は不明である。遺物出土状況：床面よりやや浮いて黒色土器A杯(2)・碗(3)、軟質須恵器杯(4)、棒状鉄製品が出土しているほかは、遺物量は少ない。帰属時期：出土遺物の様相から8期に比定される。

SB45 位置：南部III 図版20、第39図

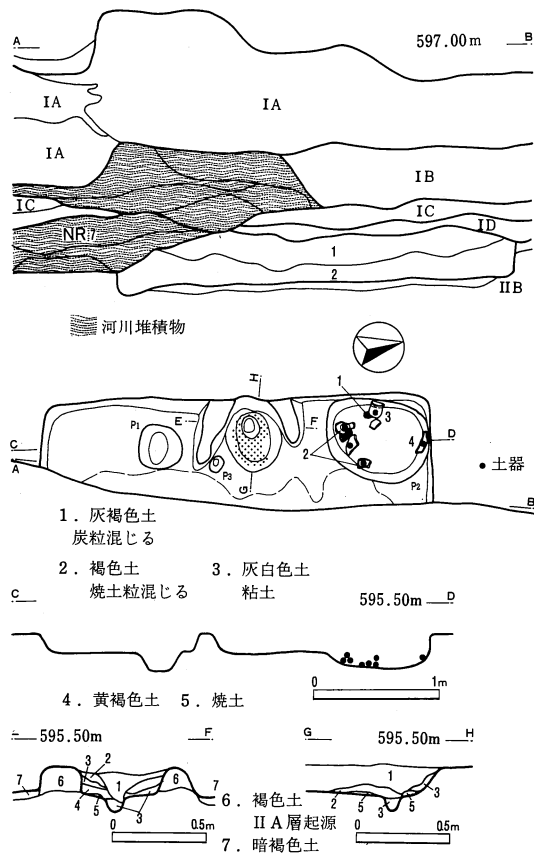
検出：II A層上面で灰色土と砂礫の混じった土が落ち込む。NR7に浸食される。SB44とは接するように切り合っているが、検出状況からは本址のほうが新しいと判断した。カマド：石組カマドである。構築は地山をやや掘り込んだ後、扁平な人頭大の円礫を横長・縦位に置き、明褐色土を充填して袖を作っている。左袖のみ残っていた。火床中央に支脚痕を確認している。カマド内から土師器小型甕D(3)が出土している。床：地山を削平した後、叩き締めている。埋没：覆土が薄いため詳細は不明である。遺物出土状況：カマド左側で土師器甕B(5)・小型甕D(2)が出土している。帰属時期：出土遺物の様相から8期に比定される。SB44より土器の様相は後出的である。

SB46 位置：南部III 図版24

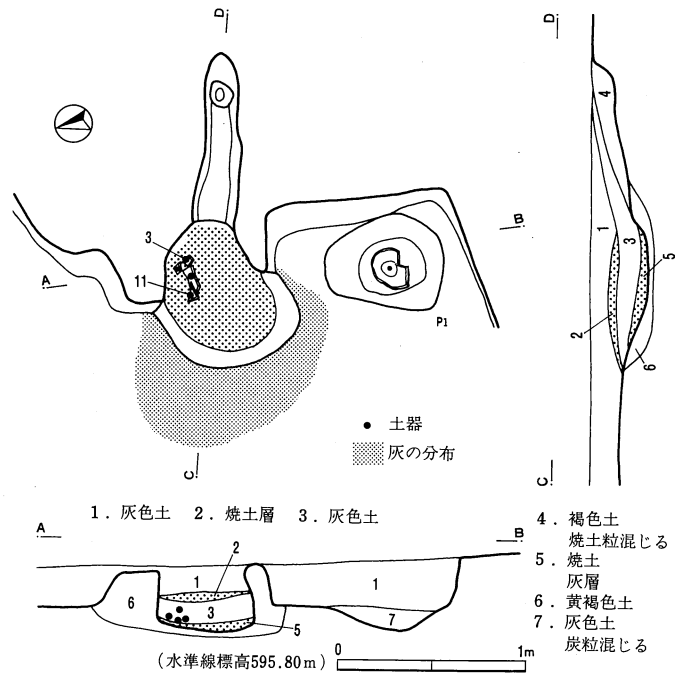
検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。東側の大半が用地外で調査に至らなかった。床：II B層下位からIII層上面まで掘り下げた後、暗褐色土を入れ叩き締めている。埋没：5分層される自然堆積土である。遺物量は少ない。帰属時期：出土遺物の様相から8期に比定される。

SB47 位置：南部III 図版23、第43図

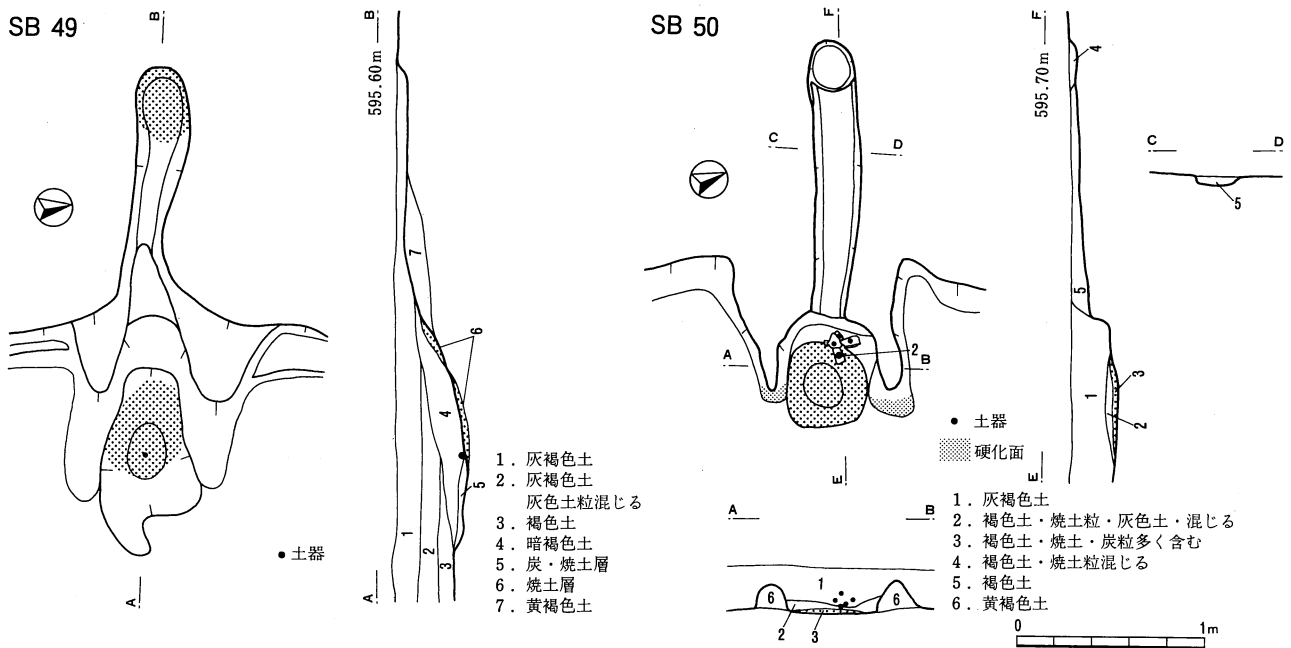
検出：II B層上面で灰色土が落ち込む。覆土の状況からより上層での検出も可能であったと思われる。カマド：粘土カマドである。構築は壁を大きく掘り込んだ後袖が作られているが燃烧部は壁外へでない位置に作られている。火床上に焼土・炭・灰粒が厚さ5cmほど堆積しており、その上に黒色土器A杯(1・2)が出土した。床：III層上面まで掘り下げた後、灰色土を入れ叩き締めている。諸施設：カマド右脇の床面



第42図 SB43実測図



第43図 SB47カマド実測図



第44図 SB49・50カマド実測図

に深さ15cmの落ち込みを確認している。内部より土師器甕B底部が出土しており、貯蔵穴とも考えられる(P₁)。また、南壁より床下で深さ35cm位の楕円形の落ち込みが見られた(P₂)。P₂の覆土はII A層に灰色土が混じっており、埋め戻されたものと判断される。内部より須恵器杯A(7)が出土した。埋没：3分層される。地山と灰色土を主体とした自然堆積土である。遺物出土状況：北西隅・南西隅下で黒色土器A杯

(4)・椀(5)、土師器小型甕D(10)が出土しているが、覆土中の遺物量は少ない。帰属時期：出土遺物の様相から7期に比定される。

SB48 位置：中部 I 図版24

検出：II A層下位でII A層と灰色土の混じった土が落ち込む。II A層上面でも地山よりわずかに褐色が濃く、炭粒・遺物が散布していた。西壁際はプラントオパール分析の試掘坑により破壊される。SK155に切られる。カマド：火床のみ残る。床：II B層下位まで掘り下げた後、暗褐色土を貼っている。埋没：単層だが砂礫の混入が多く一過性の自然堆積と判断される。遺物出土状況：南壁下床面で須恵器杯Aが2個体(4・5)、東壁際に石錘と思われる細長い円礫が6個まとまって出土している。帰属時期：床面出土の遺物を中心とした土器様相から2期に比定されるが、SB50と遺物の接合関係を有する。

SB49 位置：中部 I 図版23、第44図

検出：II B層上面で灰褐色土が落ち込む。カマド：粘土カマドである。袖は地山II B層を掘り残して作られており、付け根部のみ残る。煙道先端底面が焼土化している。カマド内より土師器杯E(1)が見られた。床：II B層下位まで掘り下げた後、青灰色土粒の混じる褐色土を入れ、叩き締めている。西壁南半を除き四壁に床面よりの高さ25~30cmの位置に平坦な面を有している。遺物出土状況：遺物量は少ない。須恵器杯蓋A、鉄製品では刀子が2点(31)・棒状品が出土している。帰属時期：出土遺物の様相と、SB50と主軸方向が一致し、遺物の接合関係も見られることから1期に比定される。

SB50 位置：中部 I 図版23、第44図

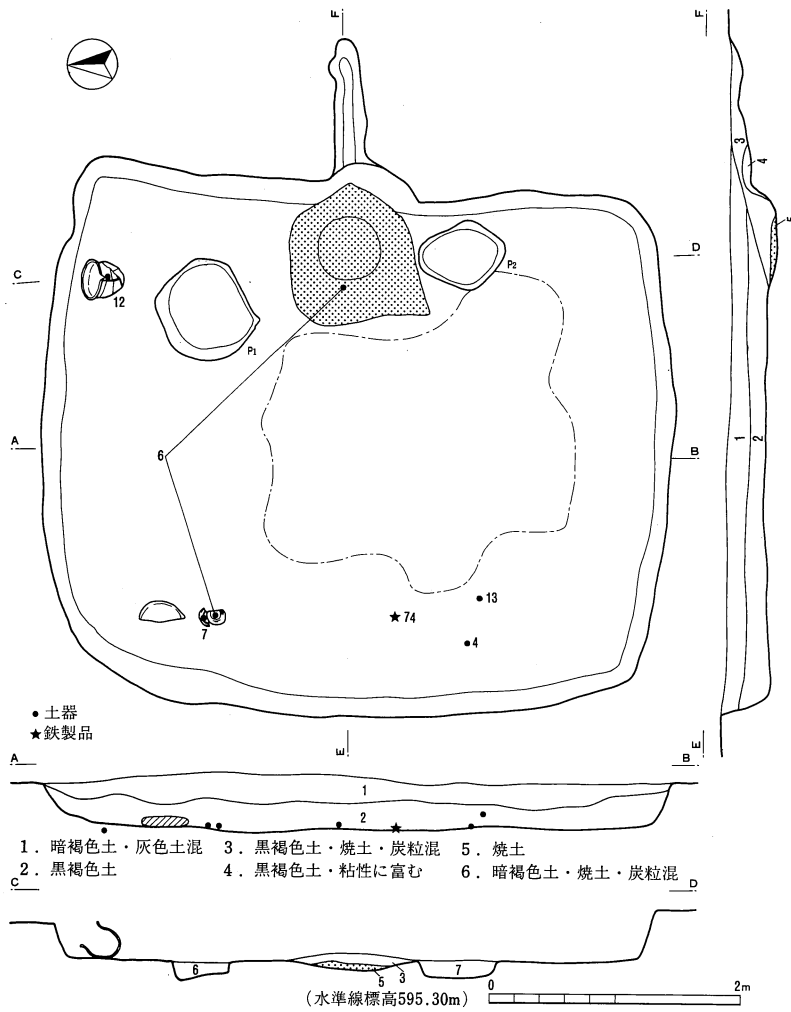
検出：II B層上面で灰褐色土が落ち込む。カマド：粘土カマドである。カマドの構築は地山を皿状に掘り下げた後、灰色土と褐色土の混じった土で袖を作っている。袖先端は固く締まっていた。火床上に須恵器杯A(2)、土師器甕A片が出土している。煙道先ピットが認められた。床：II B層下位まで掘り下げた後、青灰色土の混じる褐色土を入れ、叩き締めている。西壁沿いに床面よりの高さ20cmの位置に平坦な面が残されていた。埋没：6分層される自然堆積土である。遺物出土状況：床面より鉄製の刀子が2点出土している。帰属時期：出土遺物の様相や、SB49と主軸方向が一致し、遺物に接合関係が見られることから1期に比定される。

SB51 位置：中部 I 図版25、第45図、PL 8

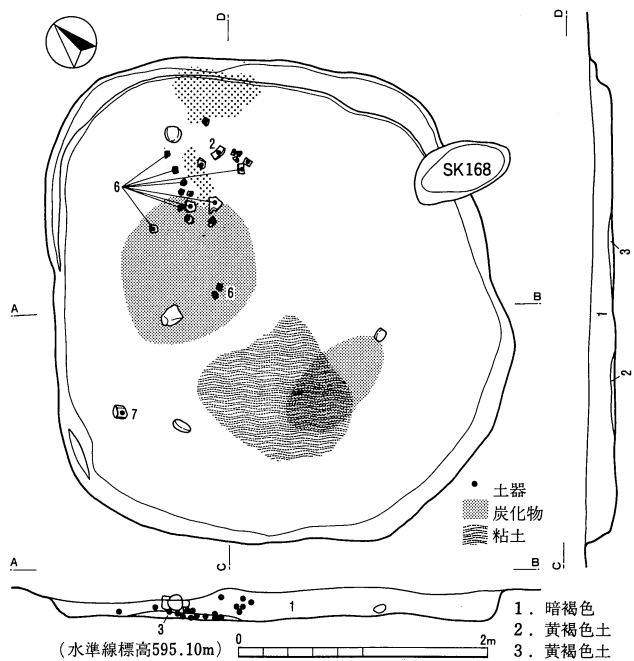
検出：II A層中位でII A層と灰色土の混じった土が落ち込む。SK162・163・164に切られる。SKの覆土のほうに青灰色の混入が多い。カマド：やや掘り凹められた火床のみ残る。火床上に須恵器杯B(6)が見られた。床：II B層下位まで掘り下げた後、暗褐色土を入れ叩き締めている。諸施設：カマド両脇床面で深さ10・16cmの落ち込みが確認された(P₁・P₂)。双方とも覆土中に焼土・炭・灰粒を含み、特にP₁では骨片が認められた。埋没：2分層される自然堆積土である。遺物出土状況：床面直上で須恵器杯Bが2個体(6・7)、須恵器杯蓋B(4)、土師器甕(13)、鉄製の紡錘車の軸(74)が見られた。また、完形の土師器甕A(12)が北壁際で出土している。帰属時期：出土遺物の様相から2期に比定される。

SB52 位置：中部 I 図版26、第46図

検出：II B層上面で暗褐色土が落ち込む。東壁側が張り出しやや不整形である。SK167を切りSK168に切られる。SK168には砂礫の混入が多く。SK167の覆土は黒褐色を呈しているが、双方とも類似した覆土であり時期的には近いものと判断される。カマドが見られず、掘り込みも周囲の竪穴住居址より浅い。床：II B層下位まで掘り下げた後、叩き締めている。焼土・炭・粘土が床面に分布している。諸施設：西壁から北壁にかけて床面よりの高さ7~8cmの位置に平坦面が存在する。埋没：単層でII A層を基調とした埋め戻し土と判断される。遺物出土状況：床面上で土師器甕B(6)が1個体分出土している。出土遺物の様相から1期に比定される。



第45図 SB51実測図



第46図 SB52実測図

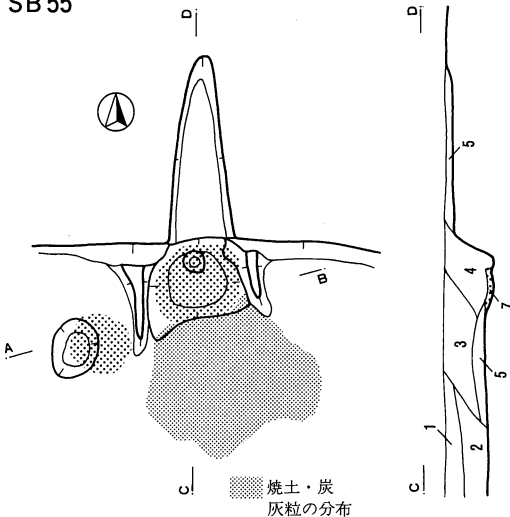
SB53 位置：中部 I
図版28

検出：II A層下位からII B層上面で廃褐色土が落ち込む。周囲の竪穴住居址に比べ掘り込みは浅く、構築も脆弱である。床：II B層下位まで掘り下げた後築き固めている。諸施設：床面上で深さ10cm弱の落ち込みを3基確認している(P₁~P₃)。そのうち東寄りに位置するP₃内より土師器高杯(3)が検出された。埋没：II B層を主体とし灰色土とII A層土粒の混入する単層である。遺物量は少ない。帰属時期：出土遺物の様相から1期に比定される。ST18・22と主軸が一致し遺構配置のうえでも関係が注意される。

SB54 位置：中部 II
図版30

検出：II A層上面で褐色土が落ち込む。SK207に切られる。SKの覆土のほうに灰色土の混入が多い。カマド：粘土カマドである。袖の下位が残るに過ぎないが、II B層を使って袖は作られている。火床下には深さ25cmの掘り方が見られた。床：II B層下底部・III層上面まで掘り下げた地山面を床としている。埋没：覆土は浅いため詳細は不明である。灰色土粒を含む褐色土の単層である。遺物出土状況：床面直上で須恵器杯B(8)、カマド前で土師器甕A(11)・甕B(12)片が出土しているほかは、量は少ない。帰属時期：出土

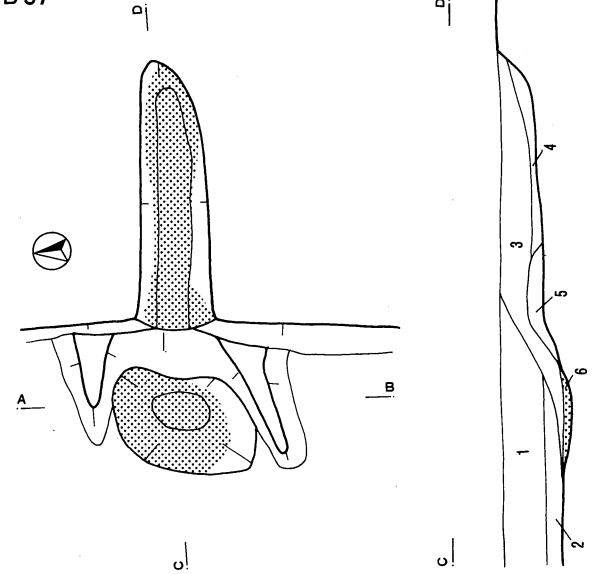
SB55



1. 褐色土
 2. 明褐色土
 3. 褐色土、II A層基調
 4. 明褐色土、炭粒混
 5. 褐色土、焼土粒混
 6. 明褐色土、炭・灰・焼土粒混
 7. 焼土
 8. 黄褐色土
 9. 褐色土

0 2m (水準線標高 595.20m)

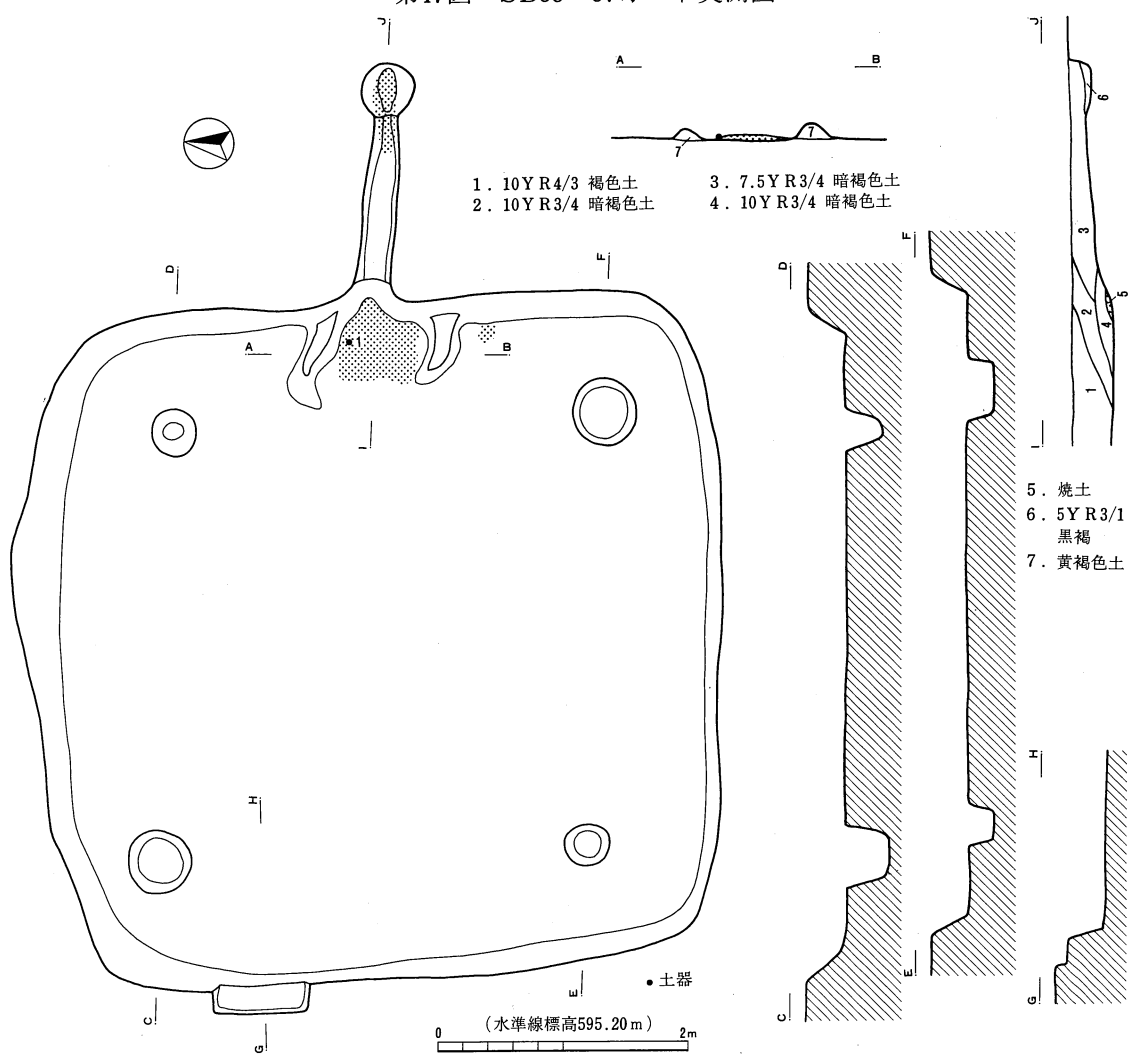
SB57



1. 褐色土
 2. 暗褐色土
 3. 明褐色土
 4. 褐色土・焼土粒混
 5. 赤褐色土・焼土混
 6. 焼土
 7. 黄褐色土

0 2m (水準線標高595.20m)

第47図 SB55・57カマド実測図



0 2m (水準線標高595.20m)

第48図 SB58実測図

遺物の様相から3期に比定される。

SB55 位置：中部II 図版32、第47図

検出：II B層上面で灰褐色土が落ち込む。II A層中でも不明瞭ながらも確認できた。カマド：粘土カマドである。両袖は平行で、火床奥に支脚の拔取り痕が見られた。床：II B層下位まで掘り下げた地山面を床としており、堅く平坦である。諸施設：カマド左と南壁下床面に深さ5cm位の落ち込みが見られた(P₁・P₂)。埋没：5分層される自然堆積土である。下層ほど多く炭粒を含む。遺物量はわずかであった。帰属時期：出土遺物の様相から1期に比定される。

SB56 位置：中部II 図版29

検出：II A層中で褐色土が落ち込む。北西側は調査区域外で調査に至らなかった。床：III層上面まで掘り下げた後、褐色土を厚さ数cm貼っている。埋没：2分層される自然堆積土である。遺物量は少ない。帰属時期：出土遺物の様相から2期に比定される。

SB57 位置：中部II 図版29、第47図

検出：II A層中で褐色土が落ち込む。カマド：粘土カマドである。袖は床面を皿状に掘り凹めた後にII B層を基調とした土で作られている。煙道底面は焼けて硬化している。床：III層上位まで掘り下げた地山面を床としている。埋没：2分層される自然堆積土である。遺物出土状況：床面西寄りで須恵器杯B(4)、土製紡錘車(3)、鉄製品の鉸具(64)が検出されたほか、鉄製の鋤鍬先(1)、土製紡錘車(2)、土錘(9)が覆土中で出土している。帰属時期：出土遺物の様相から2期に比定される。

SB58 位置：中部II 図版30、第48図、PL 9

検出：II B層上面で褐色土が落ち込む。SB59に切られる。中央部をプラントオパール資料採集のための試掘坑で破壊されている。カマド：粘土カマドである。袖は地山II B層を使って構築されている。煙道は燃焼部奥から緩やかに立ち上がる。深さ20cmの煙道先ピットの底面は焼土化している。火床上で土師器杯E片(1)が出土している。支柱穴：深さ20~35cmを測り下底部は地山III層に達している。床：II B層下位まで掘り下げた後、叩き締めている。諸施設：西壁北寄りに床面からの高さ27cmの位置に矩形の張出しが認められ出入口に係わる施設の可能性もある。埋没：単層であるが、土粒の淘汰がよく自然堆積と判断される。帰属時期：出土遺物の様相から2期に比定される。

SB59 位置：中部II 図版30、第49図

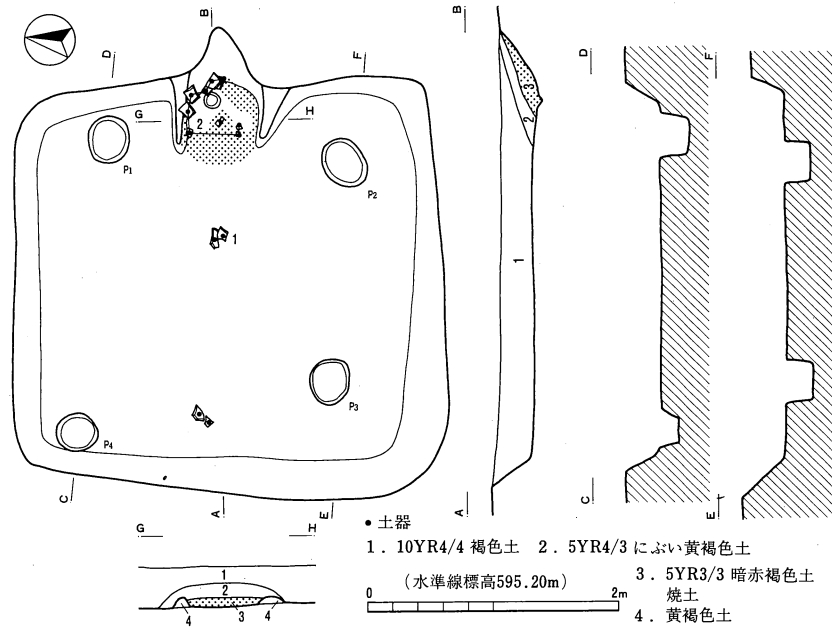
検出：II B層上面で褐色土が落ち込む。SB58を切る。本址覆土のほうが褐色が濃い。カマド：粘土カマドである。袖は下位が残るに過ぎないが、II B層を使って作られている。火床奥寄りに支脚の痕跡が認められる。火床上から土師器甕A片(2)が見られた。支柱穴：深さ20cmを測るが、北西寄りの柱穴はほかよりも浅く位置もずれている。床：II B層下位まで掘り下げた後、叩き締めている。埋没：単層であるが混入物がないため自然堆積と判断される。遺物量は少ない。帰属時期：切合い関係からSB58より新しいが、出土遺物の様相から2期に比定される。

SB60 位置：中部II 図版30、第50図

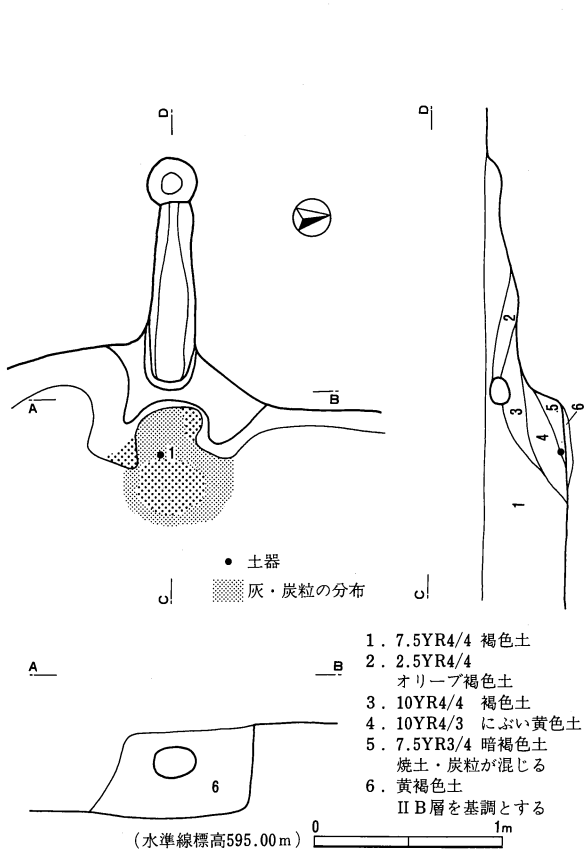
検出：II B層上面で褐色土が落ち込む。カマド：粘土カマドである。袖の付け根部のみ残っていた。II B層を基調とした土で作られた天井部がアーチ状に残る。火床上に須恵器杯B(1)が出土した。床：II B層下底まで掘り下げた後、叩き締めている。埋没：単層で地山の土塊が混じり合うことから埋め戻しと判断される。遺物出土状況：遺物量は少ない。覆土中で砥石(5)が出土している。帰属時期：出土遺物の様相から1期に比定される。

SB61 位置：中部III 図版32、第51図

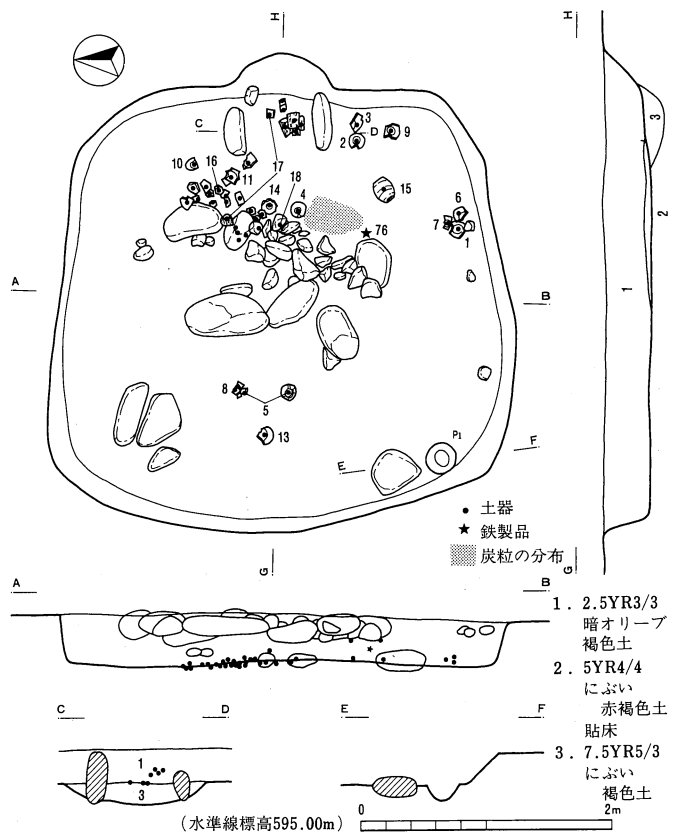
検出：I Df層上面で灰色土が落ち込み礫・遺物が散布していた。カマド：石組カマドである。構築は床



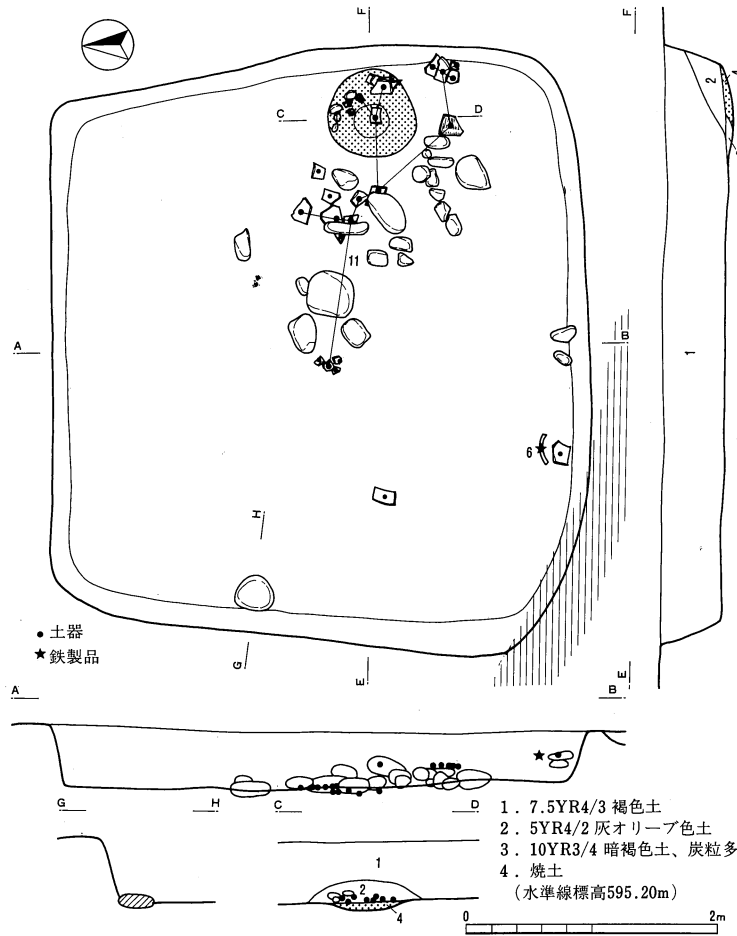
第49図 SB59実測図



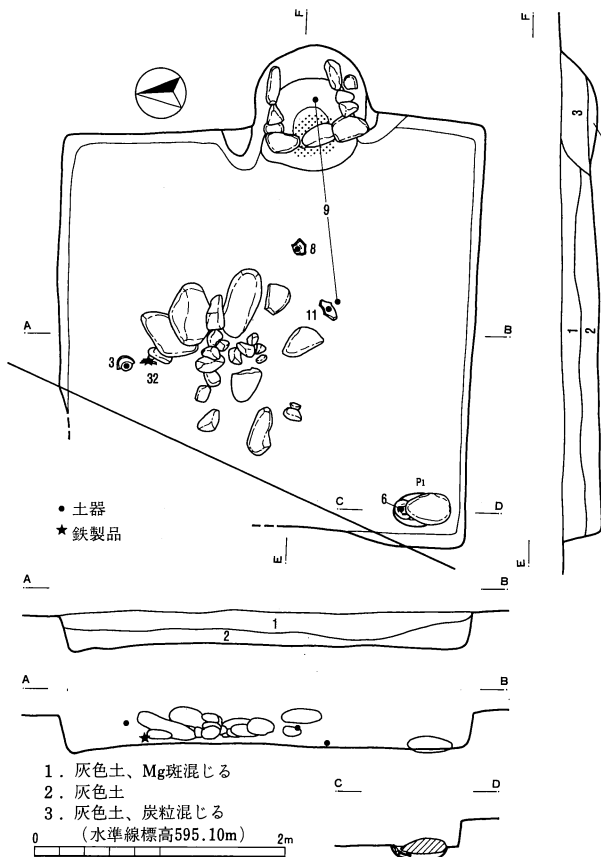
第50図 SB60カマド実測図



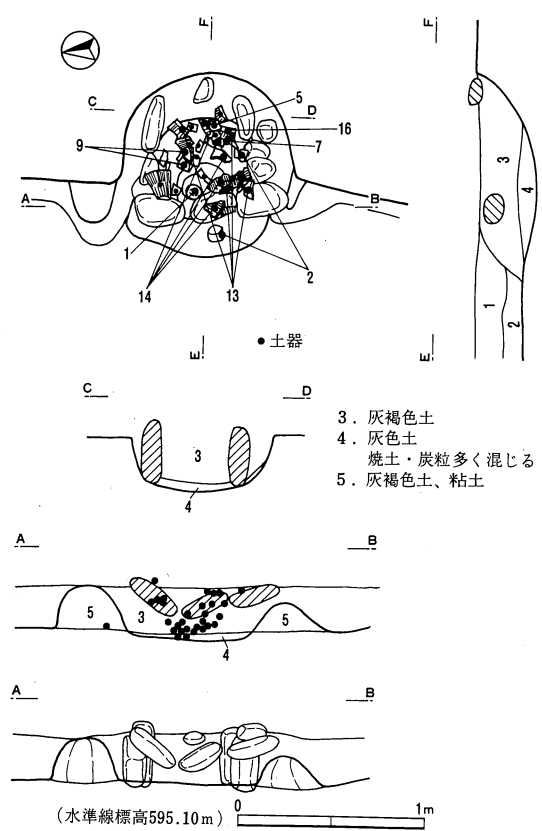
第51図 SB61実測図



第53図 SB64実測図



第54図 SB65実測図



第55図 SB65カマド実測図

ら7期に比定される。

SB63 位置：中部III 図版32、第52図、PL10

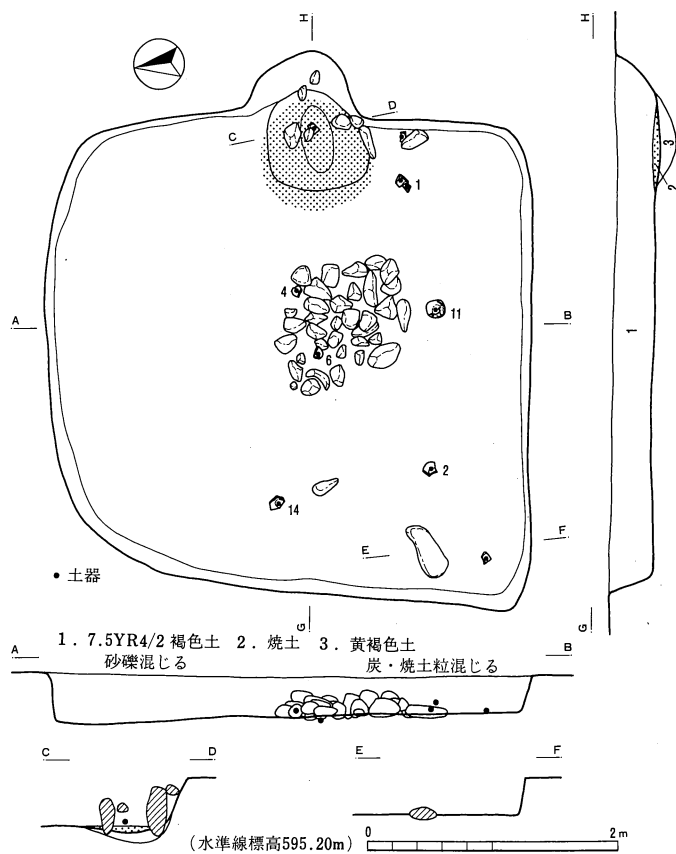
検出：II A層上面で青灰色土が落ち込む。土層断面ではI Df層上面から落ち込む。SB62を切る。本址覆土のほうが青灰色が強い。SD23・24に切られている。カマド：石組カマドである。火床上に袖石と思われる人頭大の礫が散乱している。また、土師器甕B(14)・小型甕D(13)片が見られた。床：III層上面まで掘り下げた地山面を床としている。埋没：3分層される自然堆積土である。床面から2層中にかけて人頭大の円礫が多出している。出土状況から礫はカマド寄りの方向から住居址中央に向かって投げ込まれたものと判断される。遺物は礫と同様の状態で出土しているが、量は少ない。帰属時期：出土遺物の様相から8期に比定される。

SB64 位置：中部III 図版33、第53図

検出：I Df層中で灰色土が落ち込む。南側をSD24に切られている。カマド：火床のみ残る。火床は深さ10cmほど掘り凹められ焼土が堆積していた。須恵器甕A片(11)が出土している。床：III層上面まで掘り下げた後、叩き締めている。諸施設：西壁下床面で花崗岩の扁平な人頭大の円礫が平に据えられている。埋没：単層だが土粒の混入がなく粒子の淘汰が良いため自然堆積と判断される。カマド周囲で床面からやや浮いた状態で拳大以上の円礫と須恵器甕A片(11)が出土している。遺物出土状況：南壁際で鉄製の鎌(6)が出土した。帰属時期：出土遺物の様相から7期に比定される。

SB65 位置：中部III 図版33、第54・55図、PL10

検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。カマド、石組カマドである。燃烧部は壁を大きく掘り込む。カマドの構築は床をやや掘り下げた後、花崗岩他の扁平な人頭大の円礫を横長・縦位に置き、黄褐色土を充填して袖を作っている。袖上に渡された3個の天井石が残っていた。燃烧部内に完形の黒色土器A杯(1・



第56図 SB66実測図

2)・椀(5)・鉢(9)、軟質須恵器杯(7)、土師器甕B(13・14・16)が折り重なって出土している。床：III層上面まで掘り下げた後、叩き締めている。諸施設：南西隅下床面で花崗岩の人頭大の円礫が平に据えられている。その下部に深さ10cm位の落ち込みを有している。この礫の下に黒色土器A椀(6)が正位で出土した。埋没：2分層される自然堆積土である。住居址中央部で拳大以上の円礫が多出している。出土レベルから覆土2層堆積後に入ったと考えられる。遺物出土状況：礫と同様の出土状況でほぼ完形の黒色土器A杯(3)、軟質須恵器杯(8)、須恵器甕D片(11)、鉄製の刀子(32)が見られた。帰属時期：カマドを中心とした出土遺物の様相から7期に比定される。

SB66 位置：中部III

図版33、第56図

検出：II A層上面で灰色土が落ち込み、礫や遺物が散布していた。カマド：石組カマ

ドであるが、遺存状態は悪く袖付け根に礫が残るのみであった。構築は床面を皿状に掘り凹めた後、埋め戻しつつ袖石を置いている。床：Ⅲ層上面まで掘り下げた地山面を床としている。諸施設：南西隅寄り床面に扁平な人頭大の円礫が床に平に据えられている。埋没：単層だが土粒の混入がなく粒子の淘汰が良いため自然堆積と判断される。住居址中央部床面直上から覆土下位にかけて礫が多出している。遺物出土状況：礫と同レベルで黒色土器A杯(1・2)・椀(4)、軟質須恵器杯(6)、土師器甕B(14)が出土している。ほかに、小型甕D(11)が床面直上・正位で出土した。帰属時期：出土遺物の様相から7期に比定される。

SB67 位置：中部Ⅲ 図版34

検出：ⅡA層上面で灰色土が落ち込む。カマド：石組カマドであるが、右袖の一部が残るに過ぎない。袖は床を10cm掘り凹めた後、礫を置いて作られている。床：Ⅲ層上面まで掘り下げた後、築き固めている。諸施設：南東隅の壁面に床面からの高さ5～10cmの平坦面をもつ。遺物出土状況：床面中央で土師器甕B片(4)が見られた。覆土中で鉄製の刀子(33)、釘(51)が出土している。帰属時期：出土遺物の様相から7期に比定される。

SB68 位置：南部Ⅲ 図版34

検出：ⅡA層上面で灰色土が落ち込む。西側は調査区域外で調査に至らなかった。カマド：燃烧部はやや壁を掘り込む。右袖の粘土がわずかに残るのみである。カマド右側の壁がやや張り出す。床：ⅡB層下位まで掘り下げた後、築き固めている。埋没：4分層される自然堆積土で下層ほど砂礫の混入が多い。遺物は覆土中に散漫に分布した。帰属時期：出土遺物の様相から7期に比定される。

SB69 位置：南部Ⅲ 図版34

検出：ⅡA層上面で灰褐色土が落ち込む。規模・平面形・平坦な床を持つことからカマドの見られないものの堅穴住居址と判断した。床：Ⅲ層上面まで掘り下げた地山面を床としている。埋没：3分層される自然堆積土である。遺物出土状況：遺物量は少ない。覆土中で棒状鉄製品が出土している。帰属時期：出土遺物の様相から5期に比定される。

SB70 位置：南部Ⅲ 図版34、第57図

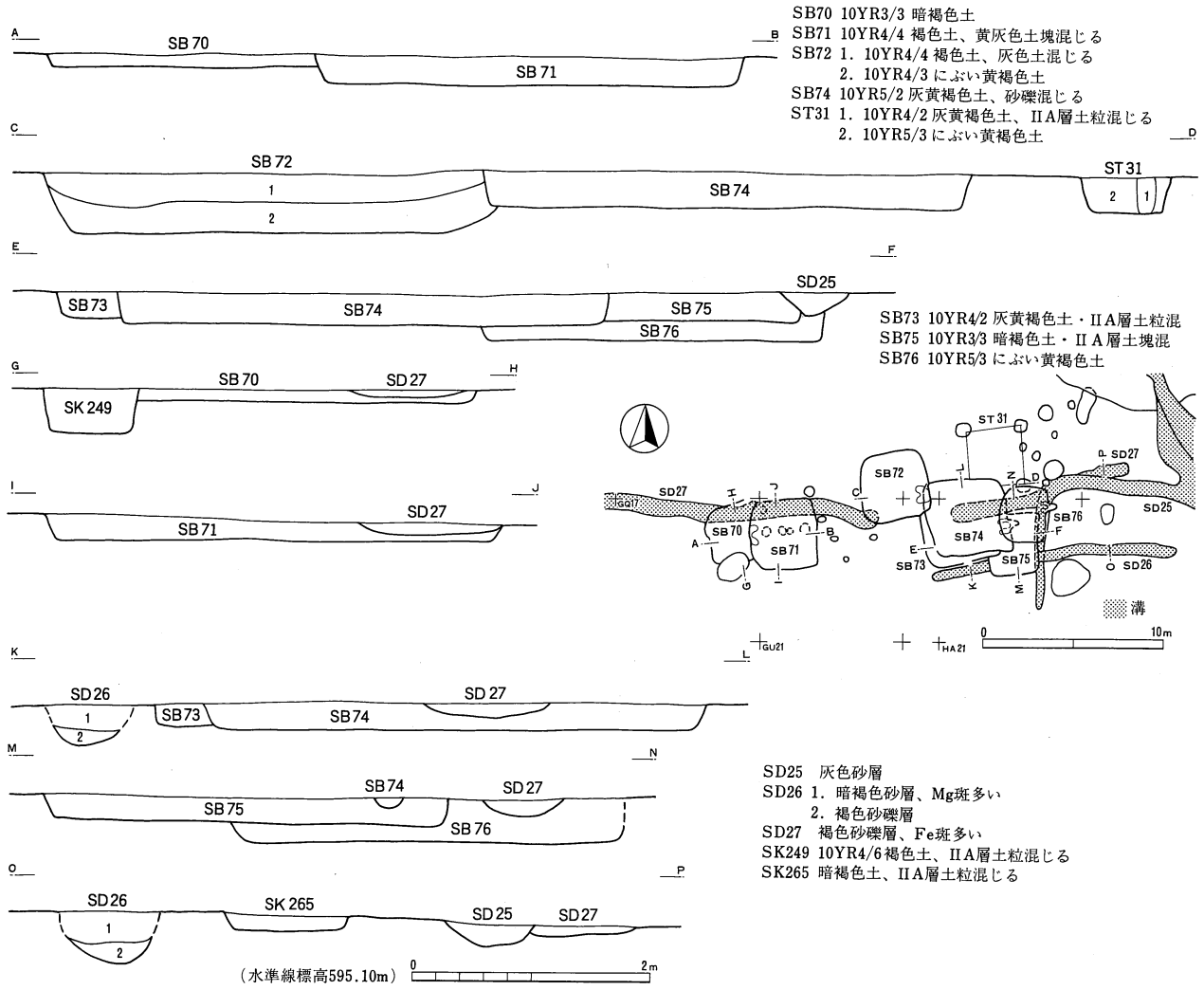
検出：ⅡB層上面で褐色土が落ち込む。SB71に切られる。ⅡA層上面で検出したSK249に切られる。また、SD27に浸食される。埋没：覆土が浅いため詳細は不明であるが土粒の混入がないため自然堆積とも考えられる。遺物量は少ない。帰属時期：切合い関係からSB70より古く出土遺物の様相から6期に比定される。

SB71 位置：南部Ⅲ 図版35、第57・58図

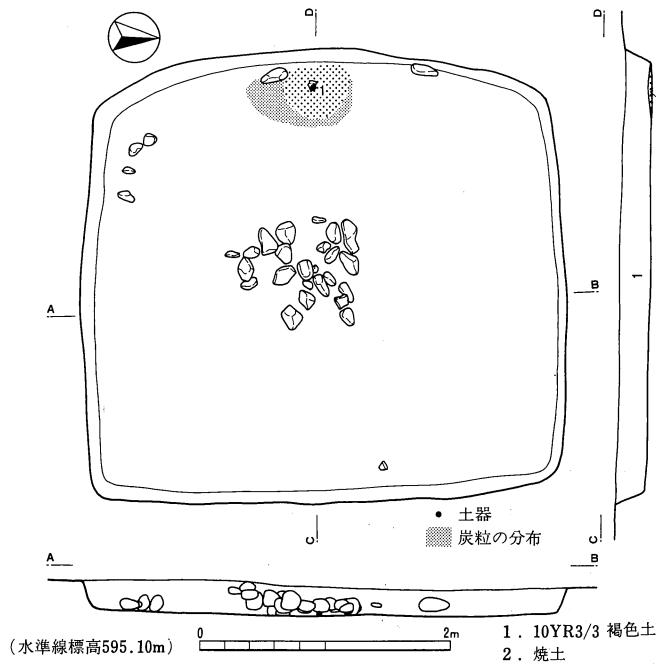
検出：ⅡB層上面で褐色土が落ち込み、礫が散布していた。SB70を切る。本址覆土のほうが明るい土色であった。SD27に浸食される。カマド：石組カマドである。左袖付け根に袖石が1個残っていた。火床上には焼土の堆積が見られ土師器甕C片(7)が出土している。床：Ⅲ層上面まで掘り下げた地山面を床としている。埋没：黄褐色土塊(ⅡB層対比)が混入し、人為的な埋戻しの可能性がある。床面直上および床よりやや浮いた状態で拳大以上の円礫が多出している。帰属時期：切合い関係からSB70より新しく出土遺物の様相から7期に比定される。

SB72 位置：南部Ⅲ 図版35、第57図

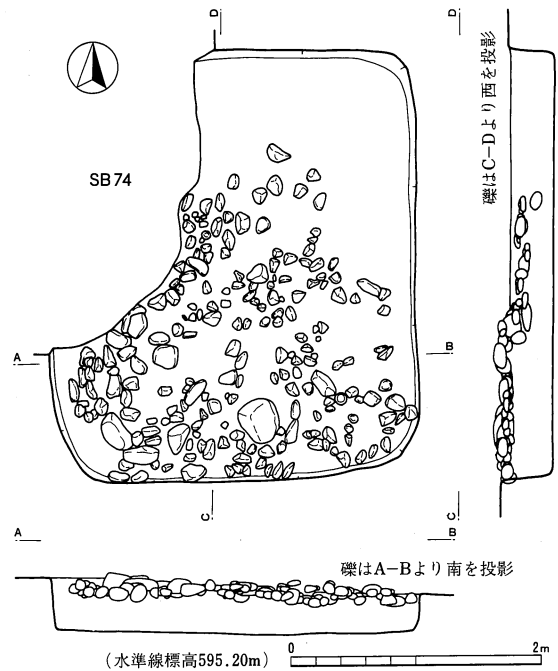
検出：ⅡA層上面で褐色土が落ち込む。平面形の確定はⅡB層上面で行った。SB73・74に切られる。カマド：袖石と思われる焼損した礫や花崗岩の人頭大の円礫がカマド周囲で見られたことから石組カマドと判断される。火床中央に支脚石が残る。火床上で須恵器杯A(2)、土師器甕B片(4)が出土している。床：本址付近を流れていた河川堆積物中に床面が作られており、堅緻な部分は認められなかった。埋没：2分層される自然堆積土である。遺物量は少ない。帰属時期：出土遺物の様相から4期に比定される。



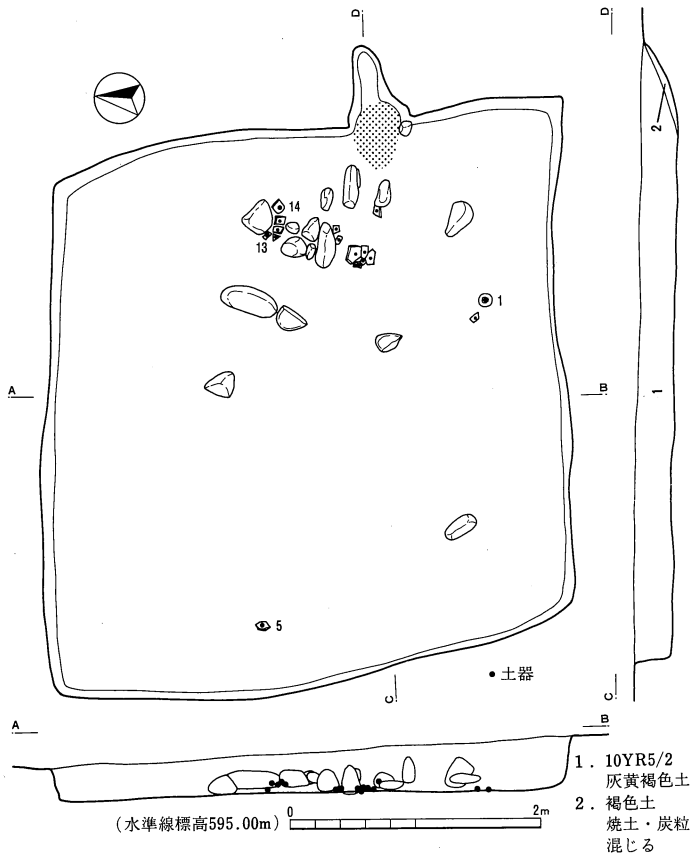
第57図 SB70~76・ST31・SD25~27・SK249・265土層断面図



第58図 SB71実測図



第59図 SB75実測図



第60図 SB74実測図

SB73

位置：南部Ⅲ

図版35、第57図

検出：ⅡA層上面で灰色土が落ち込む。SB74に切られており、ⅡB層上面検出のSB72・75を切る。主軸方向・規模・平面形・覆土ともSB74に類似しており、本址からの建替えが予想される。床：Ⅲ層上面まで掘り下げた地山面およびSB72・75覆土中に床が作られる。埋没：単層で埋め戻しと判断される。帰属時期：出土遺物の様相から8期に比定される。

SB74

位置：南部Ⅲ

図版35、第57・60図

検出：ⅡA層上面で灰色土が落ち込む。SB72・73・75・76を切る。SB72・76はⅡA層上面で検出した。また、SB73・75より本址覆土のほうが灰色土の混入が多い。SD27に切られる。カマド：石組カマドである。右袖付け根に花崗岩の被熱赤変した円礫が1個残るのみである。燃

焼部は壁をやや掘り込む。床：Ⅲ層上面まで掘り下げた後、叩き締めている。埋没：単層だが覆土の状態は自然堆積土と思われる。床面直上で拳大から人頭大の円礫が10個ほど出土している。その礫の下に土師器甕B片(13・14)、須恵器甕片が出土している。遺物出土状況：南壁寄り床面で完形の黒色土器A杯(1)が検出された。覆土中の遺物量は多いが小破片のものが大半である。また、白磁片が出土したが、これはSD27からの混入品であろう。

SB75

位置：南部Ⅲ

図版35、第57・59図

検出：ⅡA層上面で褐色土が落ち込む。SB73・74に切られ、SD25に切られる。また、SB76・SD26を切っており、これらの覆土より本址のほうが灰色土の混入が多い。規模・平面形・平坦な床を持つことからカマドが見られないものの竪穴住居址と判断した。床：ⅡB層下位まで掘り下げた地山面を床としている。埋没：単層で地山の土塊が混入することから埋め戻しと判断される。覆土中位から上位にかけて拳大以上の円礫が多出している。遺物量は少ない。覆土中で棒状鉄製品(刀子か、29)が出土している。帰属時期：切合い関係からSB73より古くSB76より新しい。出土遺物の様相から7期に比定される。

SB76

位置：南部Ⅲ

図版35、第57図

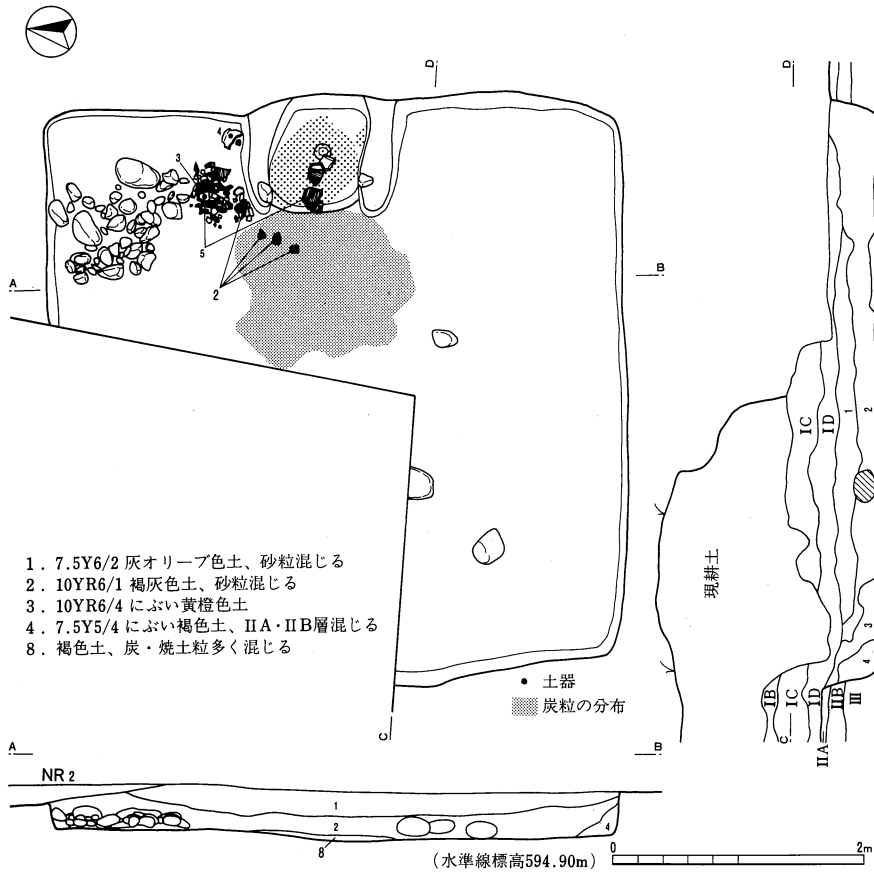
検出：ⅡB層上面で褐色土が落ち込む。ⅡA層上面で検出したSB74・75に切られる。SD27にも切られる。また、ⅡB層検出のSD26を切る。カマド：石組カマドである。袖石は倒壊した状態で出土した。燃烧部は壁をやや掘り込む。床：Ⅲ層上面まで掘り下げた地山面を床としている。埋没：単層で灰色土塊が混入することから埋め戻しと判断される。遺物量は少ない。帰属時期：出土遺物の様相から3期に比定される。

SB77

位置：南部Ⅲ

図版34

検出：ⅡA層中で灰色土が落ち込む。北西部は調査区域外で調査に至らなかった。カマド：床面西側に被熱赤変した花崗岩の人頭大の円礫が見られることから西壁にカマドの存在した可能性が高い。床：Ⅲ層上



第61図 SB78実測図

面まで掘り下げた地山面を床としている。堅緻ではあるが、5cm内外の凹凸が見られる。諸施設：床面南西寄りに深さ15cmに落ち込みが見られ(P₁)、柱穴の可能性もある。埋没：単層で人頭大の円礫が床面に分布していた。帰属時期：出土遺物の様相から7期に比定される。

SB78 位置：南部III
図版36、第61・62図

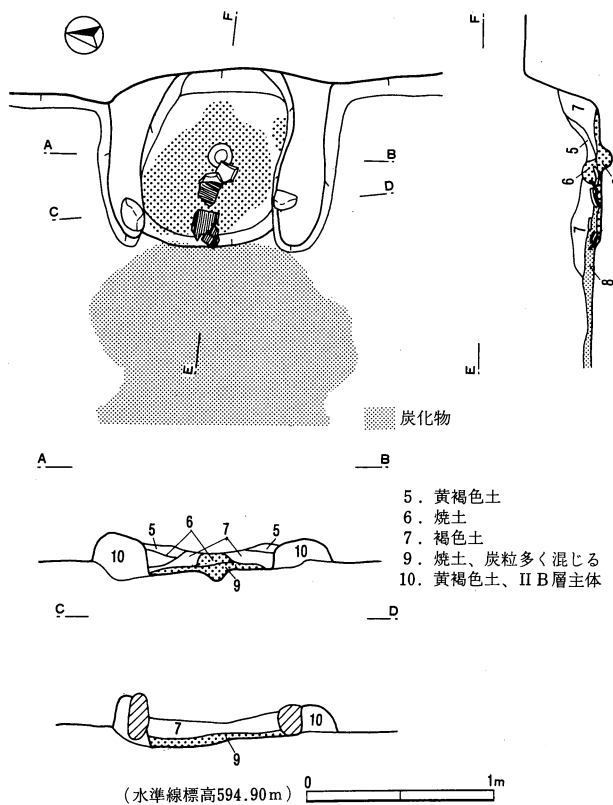
検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。北西部は調査区域外で調査に至らなかった。北側はNR 8に浸食される。カマド：粘土カマドであるが両袖先端に礫を配している。カマドの構築は床面を10cmほど皿状に掘り凹めた後、袖を作っている。火床中央に支脚痕確認している。土師器甕B片(5)が出土した。床：

III層を25cmほど掘り下げた地山面を床としている。埋没：4分層される自然堆積土である。4層は壁の崩落土。1層はI Df層に類似しており、本址が埋没しきれていないときに流れ込んだものと判断される。覆土全体がNR 8の影響で土壌灰色化現象が進む。北東よりに礫が床面より5~10cm浮いて集積していた。遺物出土状況：カマド左脇床面で土師器甕B(2~5)がつぶれた状態で出土した。帰属時期：土層断面の観察からI Df層堆積以前で、出土遺物の様相から4期に比定される。

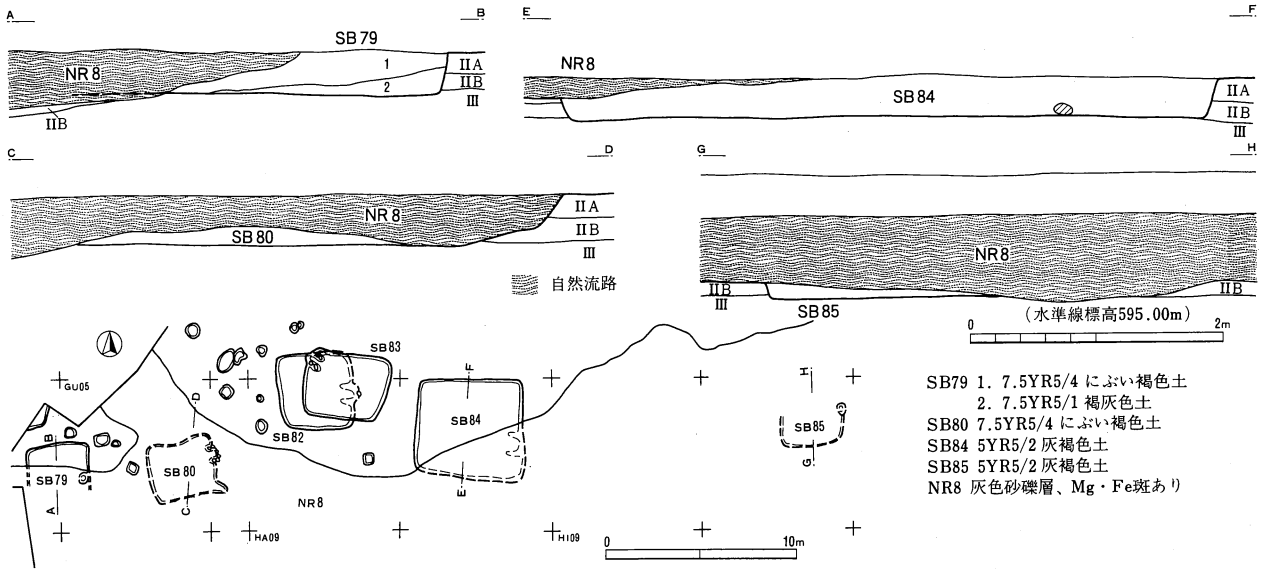
SB79 位置：北部I

図版36、第63図

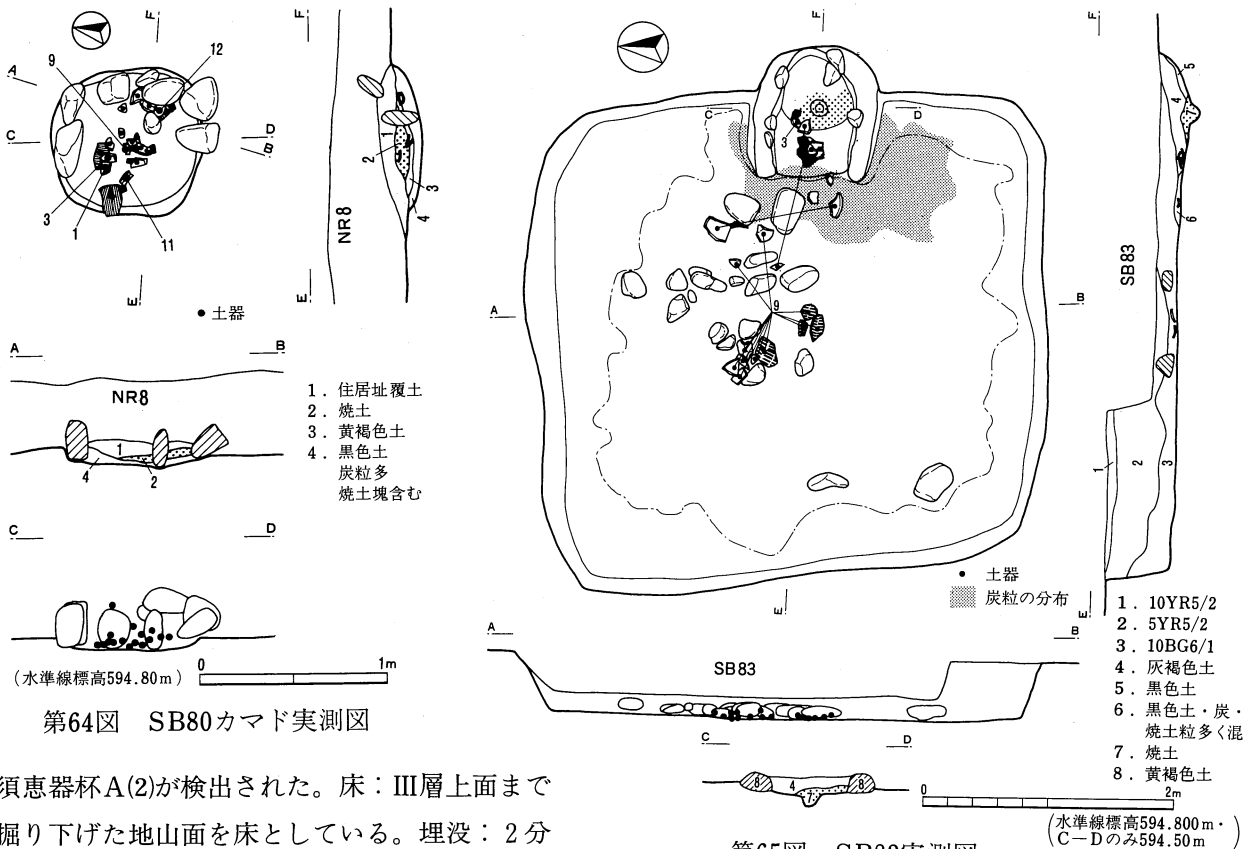
検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。南側をNR 8に浸食される。カマド：床をやや掘り凹めた火床のみ残る。袖石を埋めた痕跡がないことや周囲に明褐色土が分布することから粘土カマドと考えられる。火床上に土師器甕B片(3)が散乱していた。また、カマド前で



第62図 SB78カマド実測図



第63図 SB79・80・84・85、NR8 土層断面図



第64図 SB80カマド実測図

第65図 SB82実測図

須恵器杯A(2)が検出された。床：Ⅲ層上面まで掘り下げた地山面を床としている。埋没：2分層される自然堆積土である。1層はSB98の1層

と2層はSB87の2層と酷似する。NR8の影響で覆土は土壤灰色化現象が進む。遺物出土状況：覆土中で鉄製の刀子(34)が出土した。帰属時期：出土遺物の様相から7期に比定される。

SB80 位置：北部Ⅰ 図版36、第63・64図

検出：NR8下、ⅡB層及びⅢ層上面で灰色土が落ち込む。東側はカマド部分を除き、床面のみ残る。カマド：石組カマドである。構築は床面を深さ10cmほど皿状に掘り凹めた後、細長い人頭大の円礫を縦位に置く。火床中央よりややずれて支脚石が残る。天井部の崩落土と思われる焼土層の下から黒色土器A杯(1・3)・椀(6)、須恵器杯A(9)、土師器小型甕D(11)が出土している。床：Ⅲ層上部まで掘り下げた地

山面を床としている。埋没：単層であるが覆土が薄いため詳細は不明である。SB79・98の覆土1層に酷似している。覆土中で墨書土器(31)が出土した。帰属時期：出土遺物の様相から7期に比定される。

SB81 位置：北部 I 図版36

検出：I Df層上面で黄褐色土が落ち込む。本址の大半は調査区域外で調査に至らなかった。床：II A層中位まで掘り下げた後、築き固めている。壁際を除き堅緻面が認められる。埋没：2分層される自然堆積土である。帰属時期：検出時の覆土の状態がSB83・86・97と同様であることから12～13期の所産と考えられる。

SB82 位置：北部 I 図版36、第65図

検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。SB83に切られる。カマド：粘土カマドである。燃烧部は壁をを丸く掘り込む。袖付け根部および中程に円礫を配している。火床中央で支脚痕を確認している。須恵器杯A(14)、土師器甕B片がカマド内より出土した。床：III層を20cm弱掘り下げた後、叩き締めている。埋没：3分層される自然堆積土である。覆土1層はSB93、2層はSB84・98と酷似する。住居址中央部で床面から数cm浮いた状態でカマド袖石を含む拳大以上の礫が出土している。礫の分布域内で土師器甕B片、須恵器甕A(9)が見られた。帰属時期：出土遺物の様相から6期に比定される。

SB83 位置：北部 I 図版36、第66・67図、PL15・16

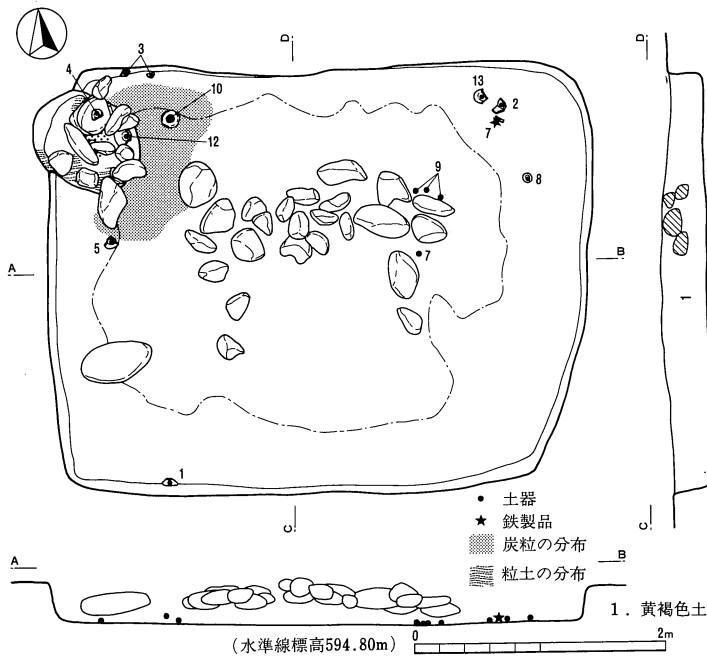
検出：II A層上面で黄褐色土が落ち込む。I Df層上面でも検出可能であった。SB82を切る。本址覆土とSB82とは明瞭に分離し得た。カマド：北西隅にかなり寄った石組カマドである。カマドの中軸は住居址の中央を向いている。燃烧部は壁をやや掘り込む。カマドの構築は床面を深さ5cmほど掘り凹めた後、柱状の人頭大の円礫を縦位に並べ青灰色土を充填して袖を作り、火床は平に埋め戻されている。支脚石・天井石が残っている。焚口部には多量の炭・灰が堆積していた。天井石の上に土師器杯A(4)、火床上で灰釉陶器碗(12)、カマド左右脇に土師器杯A(3・5)が伏せた状態で、焚口部に黒色土器B碗(10)が伏せた状態で出土している。床：III層上面及びSB82覆土下位まで掘り下げた後、築き固めている。壁際を除き堅緻面が認められた。埋没：単層である。床面から10cm弱浮いてカマド袖石を含む人頭大の円礫が出土している。遺物出土状況：灰釉陶器段皿(13)、土師器杯A(2)、黒色土器A碗(8)、鉄製品では鎌(7)が床面直上で出土し、また、南壁際で土師器杯A(1)が伏せた状態で検出された。帰属時期：出土遺物の様相から13期に比定される。

SB84 位置：北部 I 図版36、第63・68図

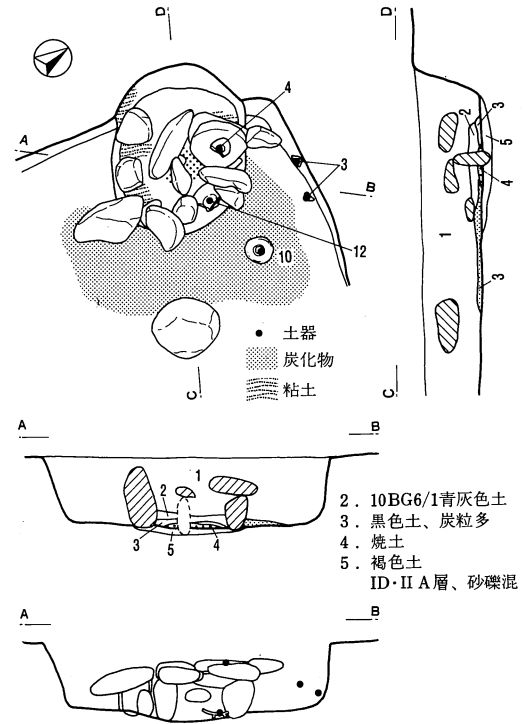
検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。南側をNR8に浸食される。カマド：粘土カマドである。規模はほかの住居址より大きい。カマドの構築は床を10cmほど掘り凹めた後、袖付け根部内側に花崗岩の円礫を置き黄褐色土を充填して作っている。火床中央部に30cmの間隔を置いて2本の支脚石が残っていた。火床上で黒色土器A杯片(2・4)と完形の黒色土器A皿(6)が逆位で、ほかに土師器甕B片(20・21)・小型甕D片(17・18)が出土している。床：III層上面まで掘り下げた後、叩き締めている。諸施設：南西隅寄り床面に深さ7cmの落ち込みを確認している(P₁)。内部に花崗岩の人頭大の円礫と須恵器長頸壺片(23)が入っていたが、住居址使用時に開口していたかどうかは不明である。埋没：単層であるが土塊の混入がなく淘汰が良いため、自然堆積と考えられる。遺物出土状況：カマド左脇床面で須恵器杯A(12・14)、北壁下で床面よりやや浮いて砥石(6)、覆土中で鉄製の鎌(8)が出土している。帰属時期：NR8堆積以前で、出土遺物の様相から7期に比定される。

SB85 位置：北部 I 図版38、第63図

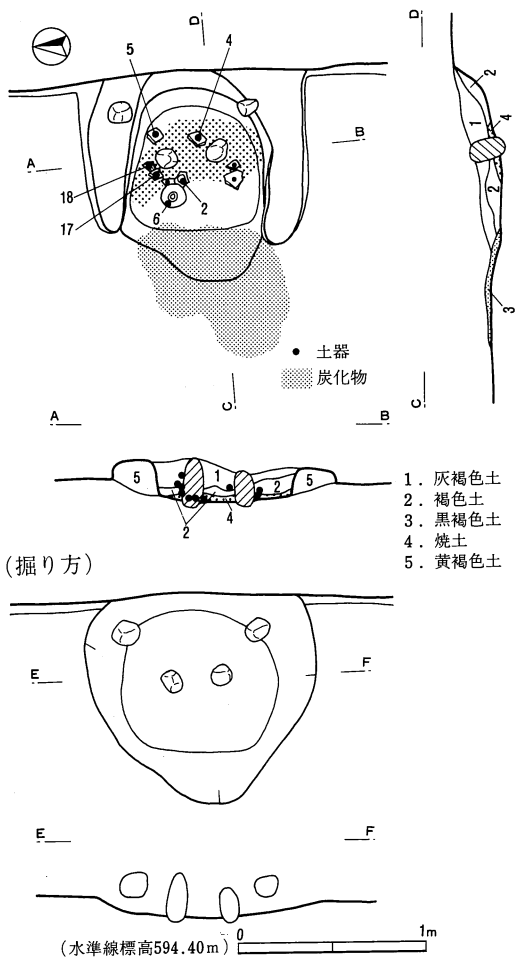
検出：NR8下のII B層中で灰色土が落ち込む。覆土の上半部と北側はNR8に浸食されていた。カマド：壁および床面をやや掘り込んだ火床のみが残っていた。その上で土師器小型甕D片(3)が見られた。



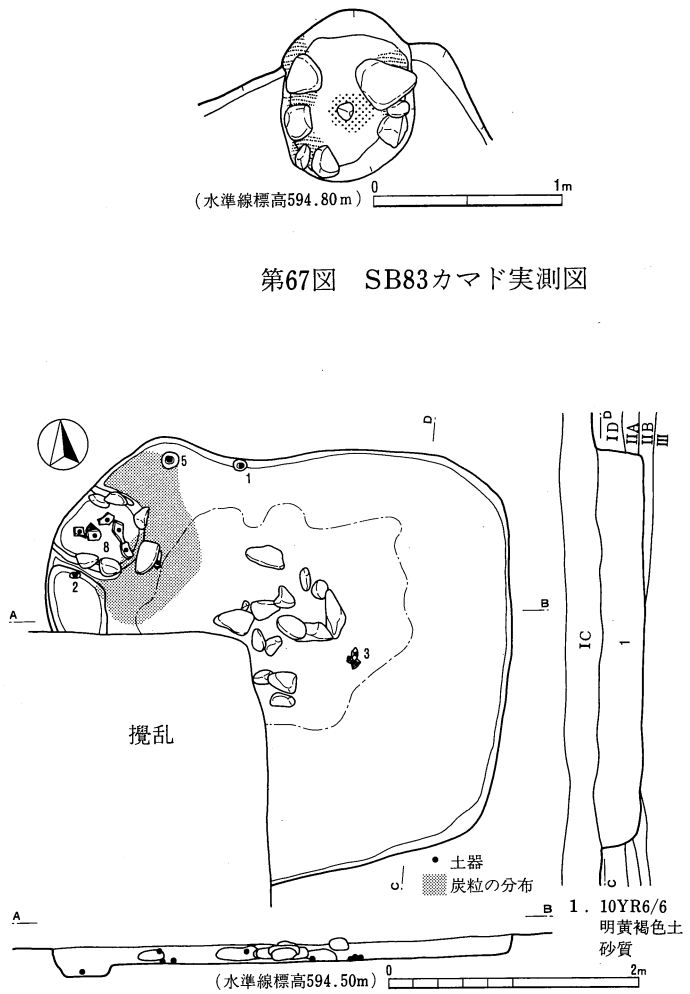
第66図 SB83実測図



(石組・掘り方)



第68図 SB84カマド実測図



第69図 SB86実測図

床：Ⅲ層上面まで掘り下げた後、叩き締めている。南壁寄りで床面より1cm浮いて炭粒が集中する箇所がある。埋没：単層であるが覆土が薄いため詳細は不明である。SB84の覆土と酷似する。帰属時期：NR8堆積以前で、出土遺物の様相から7期に比定される。

SB86 位置：北部 I 図版38、第69・70図

検出：I D f層上面で明褐色土が落ち込む。南西部はプラントオパール分析用の試掘坑によって破壊されている。カマド：石組カマドである。構築は袖の下を溝状に掘った後、人頭大の円礫を置き褐色土を充填して袖を作っている。カマド付近の壁は張り出しており、住居址全体の平面形は長方形の一隅を切り落としたような五角形を呈している。火床および焚口部から土師器羽釜A片(8)が出土している。床：II B層下位からⅢ層上面まで掘り下げた後、築き固めている。床中央からカマド前にかけて堅緻面が広がる。諸施設：カマド左脇床面に深さ15cmの落ち込みが確認された(P₁)。その覆土中には焼土・炭・灰粒が混じる。この落ち込みの壁面から土師器杯A(2)が出土している。埋没：単層で埋め戻し土と考えられる。床面中央で拳大以上の円礫が出土している。遺物出土状況：床面直上で土師器杯A(1・3)、黒色土器A碗(5)が検出されたが遺物量は少ない。帰属時期：出土遺物の様相から12期に比定される。

SB87 位置：北部 I 図版37

検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。カマド：火床や焼土の分布は確認できなかったが、壁が丸く掘り込まれていることから、西壁中央に存在したと考えられる。床：Ⅲ層上部をわずかに掘り下げた地山面を床としている。埋没：2分層される自然堆積土である。遺物出土状況：北壁際で土師器甕B底部(10)が床面直上で出土したほかは遺物量は少ない。覆土中で墨書土器(34)が検出された。また、須恵器甕A(12)はSB88との接合関係を有する。帰属時期：出土遺物の様相、および、SB88と遺物が接合することから6期に比定される。

SB88 位置：北部 I 図版37、第71図、PL14

検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。SB89を切る。本址の覆土のほうが灰色が濃い。カマド：石組カマドである。構築は床を5cmほど掘り下げた後、扁平な人頭大の円礫を横長・縦位に置き、その外側を暗褐色土で充填して作られている。火床上には焼土が厚く堆積し、支脚の痕跡が見られた。カマド内で黒色土器A杯(6)、須恵器短頸壺C片(13・16)、土師器甕片が出土している。遺物出土状況：黒色土器A杯(2・4)、須恵器杯A(9)・短頸壺C(12)・長頸壺A(14)が出土している。覆土中で鉄製の鎌片・不明鉄製品(96)が見られた。帰属時期：切り合い関係からSB89より新しいが、出土遺物の様相からは7期に比定される。

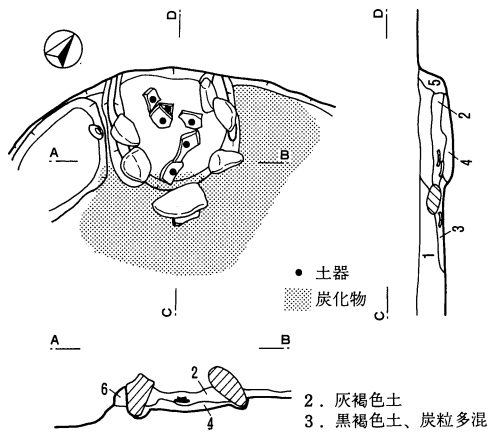
SB89 位置：北部 I 図版39、第71図、PL14

検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。SB88に切られる。カマド：石組カマドである。燃烧部は壁を四角く掘り込む。構築は床を深さ15cmほど播鉢状に掘り下げた後、花崗岩の扁平な人頭大の円礫を横長・縦位に置き灰褐色土を充填して作られている。火床上には天井が崩落したと考えられる焼土の堆積が認められ黒色土器A杯(1・2)が潰れた状態で、その上に完形の土師器小型甕D(4)が出土している。床：Ⅲ層上部まで掘り下げた後、叩き締めている。埋没：2分層される自然堆積土である。覆土中の遺物量は少ない。帰属時期：切合い関係からSB88より古く、出土遺物の様相から7期に比定される。

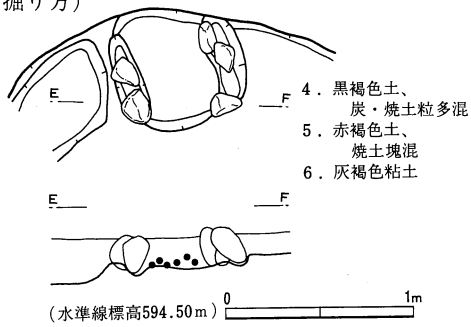
SB90 位置：北部 I 図版40、第72図、PL14

検出：II B層上面で灰色土が落ち込む。カマド：粘土カマドである。袖は床面をわずかに掘り凹めた後つくられている。厚く焼土の堆積する火床奥から土師器甕B片(8)が出土している。床：Ⅲ層上面まで掘り下げた地山面を床としている。埋没：4分層される自然堆積土である。1層中に遺物が多い。帰属時期：出土遺物の様相から2期に比定される。

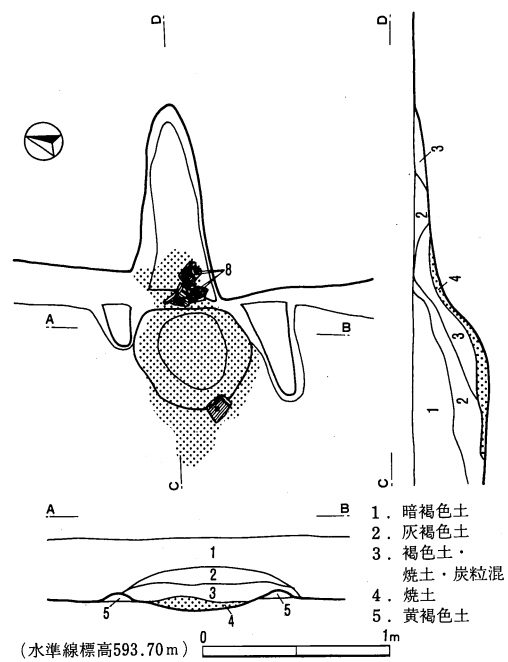
SB91 位置：北部 I 図版39、第73図



(掘り方)

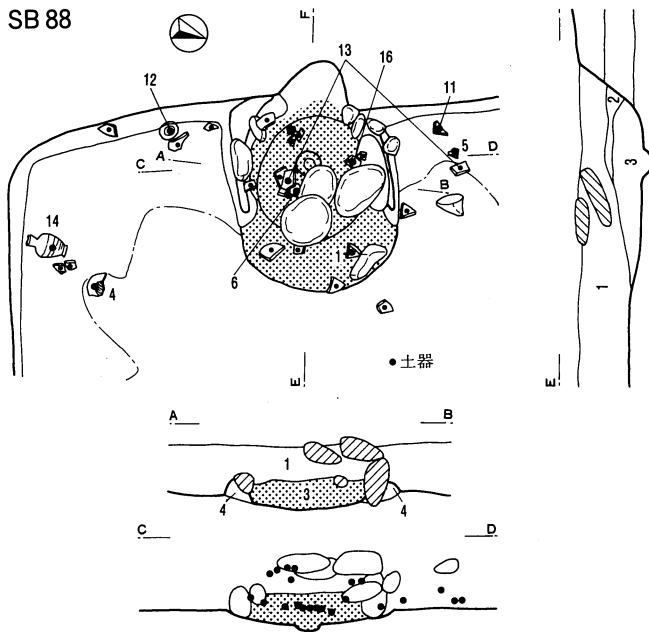


第70図 SB86カマド実測図

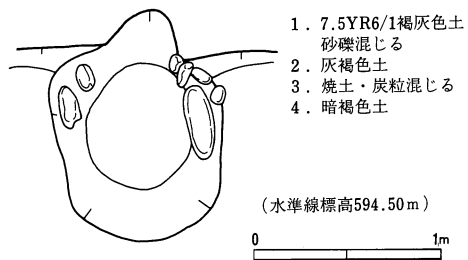


第72図 SB90カマド実測図

SB 88

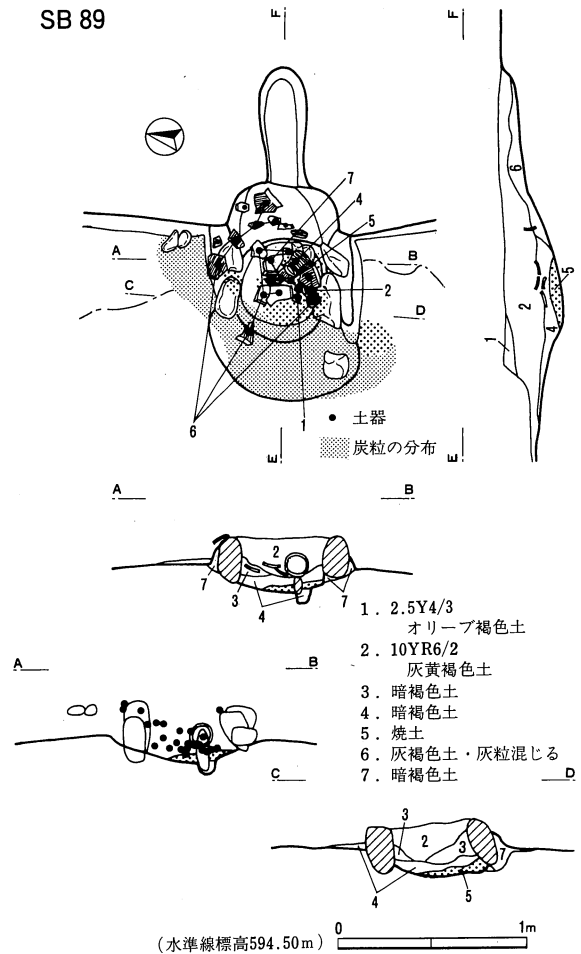


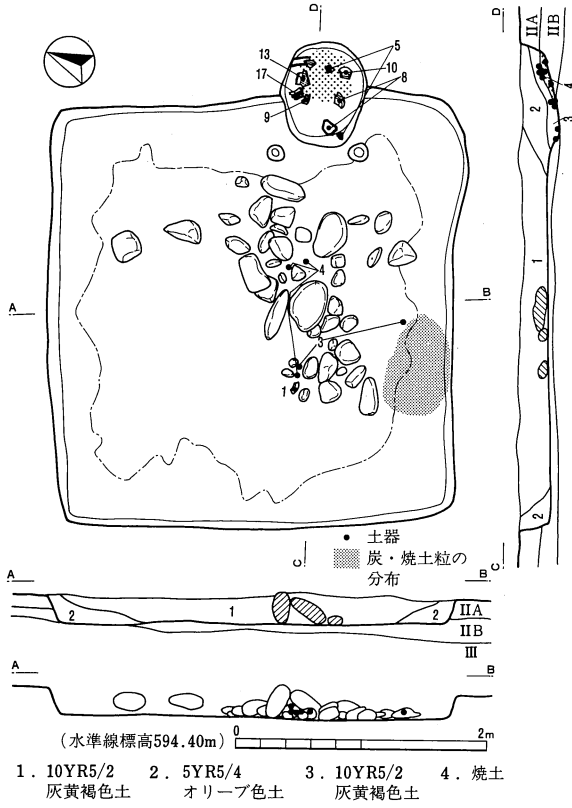
(掘り方)



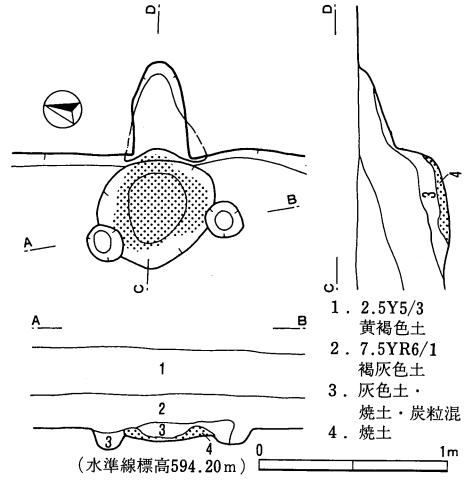
第71図 SB88・89カマド実測図

SB 89

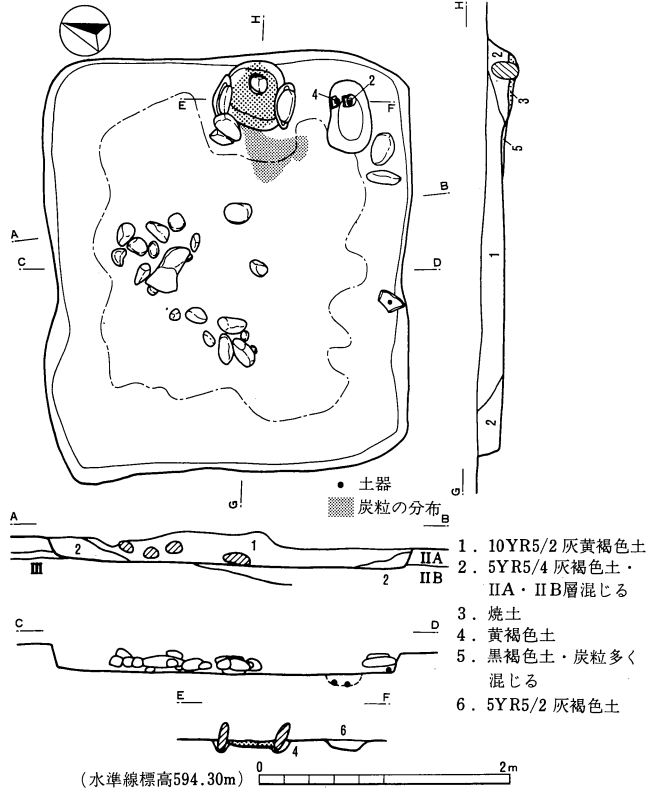




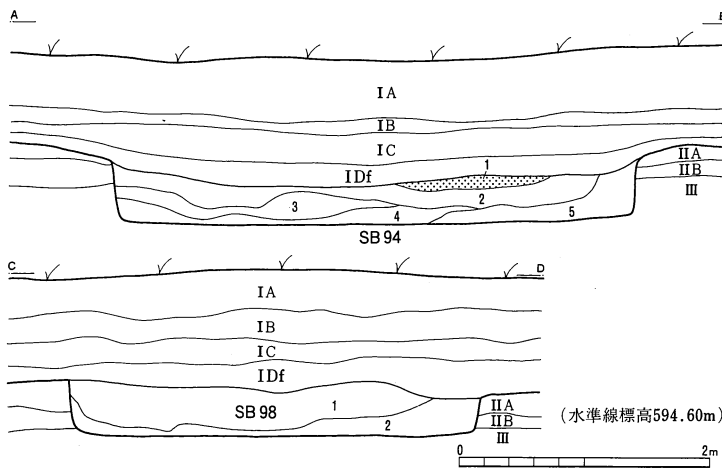
第73図 SB91実測図



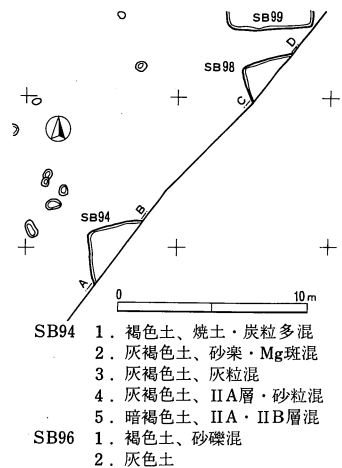
第74図 SB92カマド実測図



第75図 SB93実測図



第76図 SB94・98土層断面図



検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。カマド：火床のみ残る。燃烧部は壁を四角く掘り込み、床面を5cmほど掘り凹めている。火床前に深さ5cm位の小穴が2基見られ、その位置から袖先端に据えられた袖石の抜取り痕であろう。火床上から須恵器杯A(8・9・10)、黑色土器A杯(5)、土師器甕B片(11)、須恵器甕D片(13)が出土している。床：II B層下位まで掘り下げた後、叩き締めている。埋没：2分層される。1層はSB93の覆土に似る。2層は壁の崩落土である。床面直上から1層中にかけてカマド袖石を含む拳大以上の礫が出土している。また、南壁際に床面より5cm浮いて炭・焼土粒が分布している。遺物出土状況：礫間に黑色土器A杯(1・3・4)が、覆土中で墨書土器(2)が出土している。帰属時期：出土遺物の様相から7期に比定される。

SB92 位置：北部 I 図版39、第74図

検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。SB93に切られST36を切る。本址覆土中にST36に属す柱穴は確認できなかった。SD33を切る。本址の覆土のほうが灰色が濃い。カマド：火床のみ残っていた。袖先端に当たる部分に深さ10cm強の穴が見られる。火床上には焼土が厚く堆積していた。カマド内で黑色土器A杯(2)、須恵器杯A(4・5)・杯B(6)、土師器甕B片(9)が出土している。床：III層を25cm位掘り下げた地山面を床としている。埋没：2分層される自然堆積土である。遺物量は少ない。帰属時期：出土遺物の様相から6期に比定される。

SB93 位置：北部 I 図版39、第75図

検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。カマド：石組カマドである。袖石下には深さ10cm位の掘り方を有している。火床中央やや奥寄りに支脚石が残る。袖は花崗岩の扁平な人頭大の円礫は横長・縦位に置き、黄褐色土を充填して作られる。貯蔵穴：カマド右脇床面に深さ10cm位の落ち込みを確認している。覆土2層と同質の覆土を有することから住居址使用時には開口していたと思われる(P₁)。床面から黑色土器A杯(3・4)が正位で出土している。床：II B層下位・III層上面まで掘り下げた後、叩き締めている。埋没：2分層される。2層は壁の崩落土である。床面直上からやや浮いた状態で拳大以上の円礫が出土している。帰属時期：出土遺物の様相から7期に比定される。

SB94 位置：北部 I 図版40、第76図、PL15

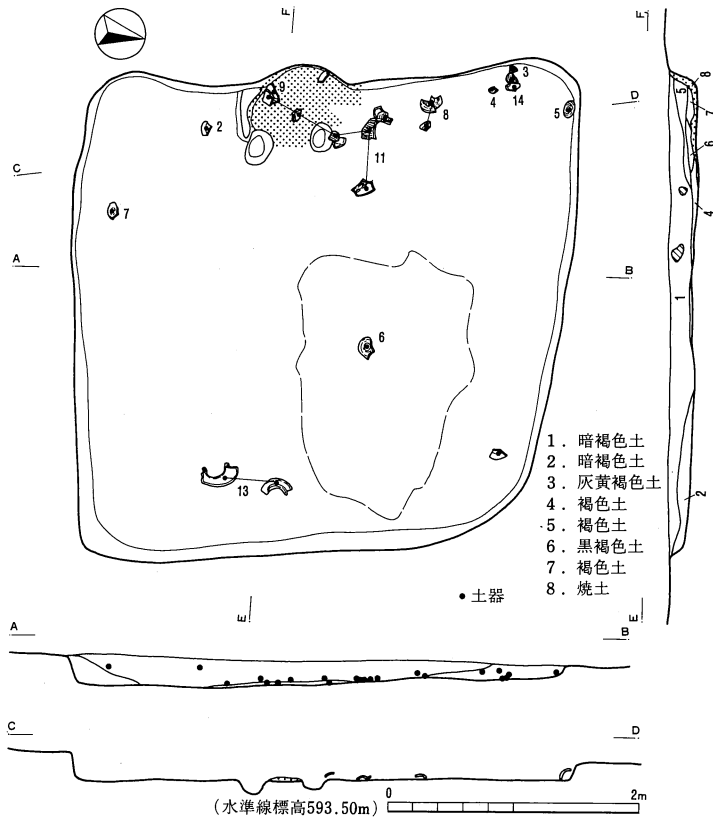
検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。南東部は調査区域外で調査に至らなかった。床：III層を20cm位掘り下げた地山面を床としている。埋没：5分層される自然堆積土である。1層は焼土塊・炭粒を多く含んでいる。土層断面ではI Df層堆積時には本址はまだ完全には埋没しきれていないことを示している。遺物出土状況：遺物量は少ない。北壁下床面で黑色土器A杯(1・2)、須恵器杯A(7)が出土している。帰属時期：出土遺物の様相から6期に比定される。

SB95 位置：北部 I 図版41

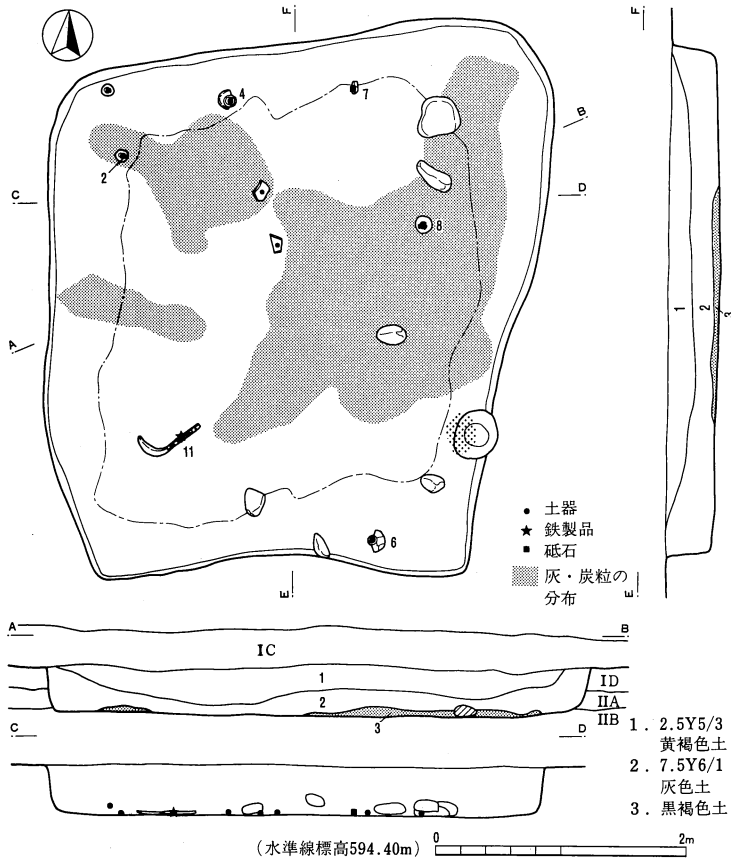
検出：II B層上面で灰褐色土が落ち込む。カマド：東壁中央下に焼土の分布が見られることからカマド跡と判断される。埋没：7分層される自然堆積土で、6・7層は壁の崩落土である。各層内では土粒の級化作用が進む。遺物量は少ない。帰属時期：出土遺物の様相から4～5期に比定される。

SB96 位置：北部 I 図版42、第77図、PL16

検出：II B層上面で灰褐色土が落ち込む。カマド：粘土カマドである。両袖先端に深さ10cm位の小穴が見られ、袖先端に礫を配していたと考えられる。火床上で須恵器杯A(9)・短頸壺B(13)が見られた。床：III層上面まで掘り下げた後、わずかに貼床している。埋没：4分層される自然堆積土である。4層は炭・焼土粒を多く含みカマド崩落以前に堆積している。遺物出土状況：カマド周囲の床面から須恵器杯A(8)、黑色土器A杯(2)、土師器甕B(11)が、床中央で須恵器杯A(6)・短頸壺B(13)が出土している。帰属時期：出土遺物の様相から6期に比定される。



第77図 SB96実測図



第78図 SB97実測図

SB97

位置：北部 I

図版42、第78図、PL16

検出：I Df層上面で黄褐色土が落ち込む。SB96と接している。本址はSB96の覆土とは異質で明瞭に区別できた。カマド：北東隅が丸く膨らむプランであること、周囲にカマド袖石が散乱することから、北東隅に存在したと考えられる。床：II B層上面まで掘り下げた後、築き固めている。壁際に堅緻面が見られる。埋没：3分層される自然堆積土である。3層は木材起源と思われる炭塊を主体とし焼土粒が多含する炭層である。床面および床よりやや浮いて出土した遺物が被熱によって変色していることから本址は焼失した住居と判断される。遺物出土状況：土師器杯A(1・2)・椀(4)、黒色土器A椀(6)、灰釉陶器小椀(8)、砥石(7)が床面直上ないし3層上面で出土した。また、柄の木材が炭化して着柄の状態を留めている鎌(11)も3層中で出土した。覆土中で鉄製品では鏝(50)・棒状品(78)が検出された。帰属時期：出土遺物の様相から13期に比定される。

SB98

位置：北部 I

図版43、第76図

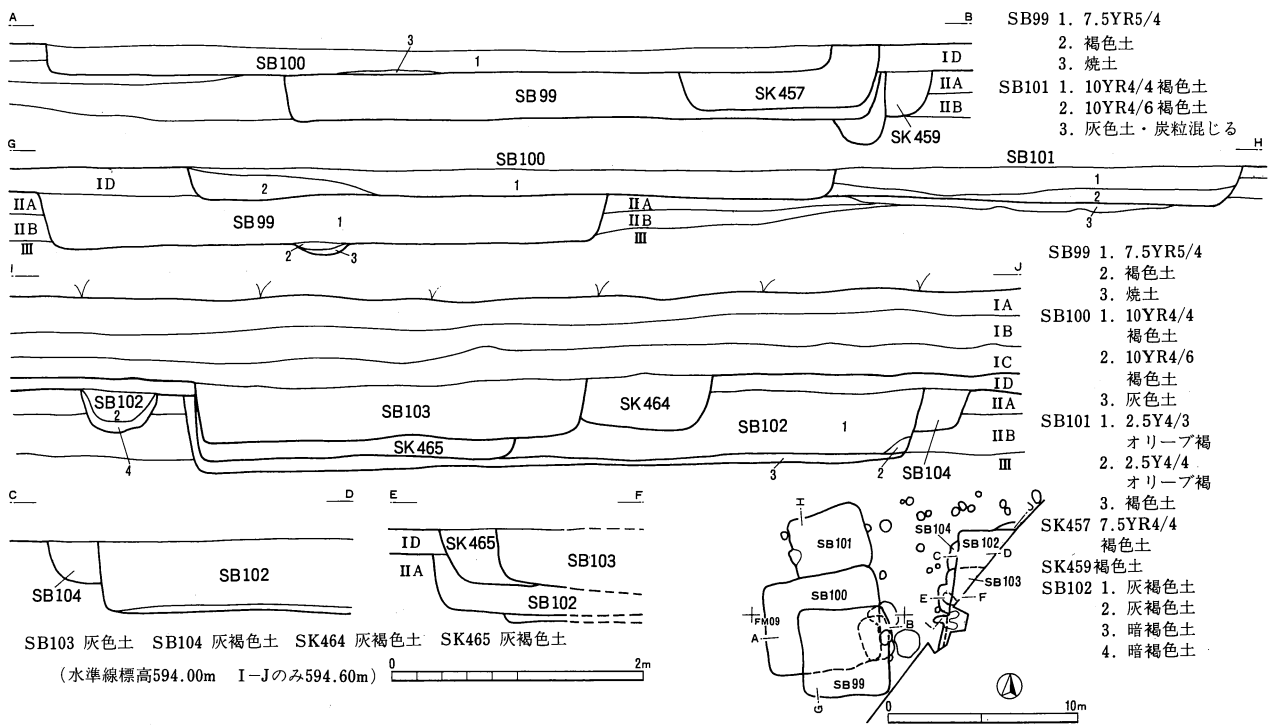
検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。南東側は調査区域外で調査に至らなかった。床：III層上面まで掘り下げた地山面を床としている。埋没：2分層される自然堆積土である。本址埋没後I Df層が堆積している。遺物量は少ない。帰属時期：出土遺物の様相から5期に比定される。

SB99

位置：北部 I

図版43、第79図、PL15

検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。SB100・SK457に切られる。SB100の覆土は黄褐色土を主体とし、SK457は



第79図 SB99～104・SK457～459・464・465土層断面図

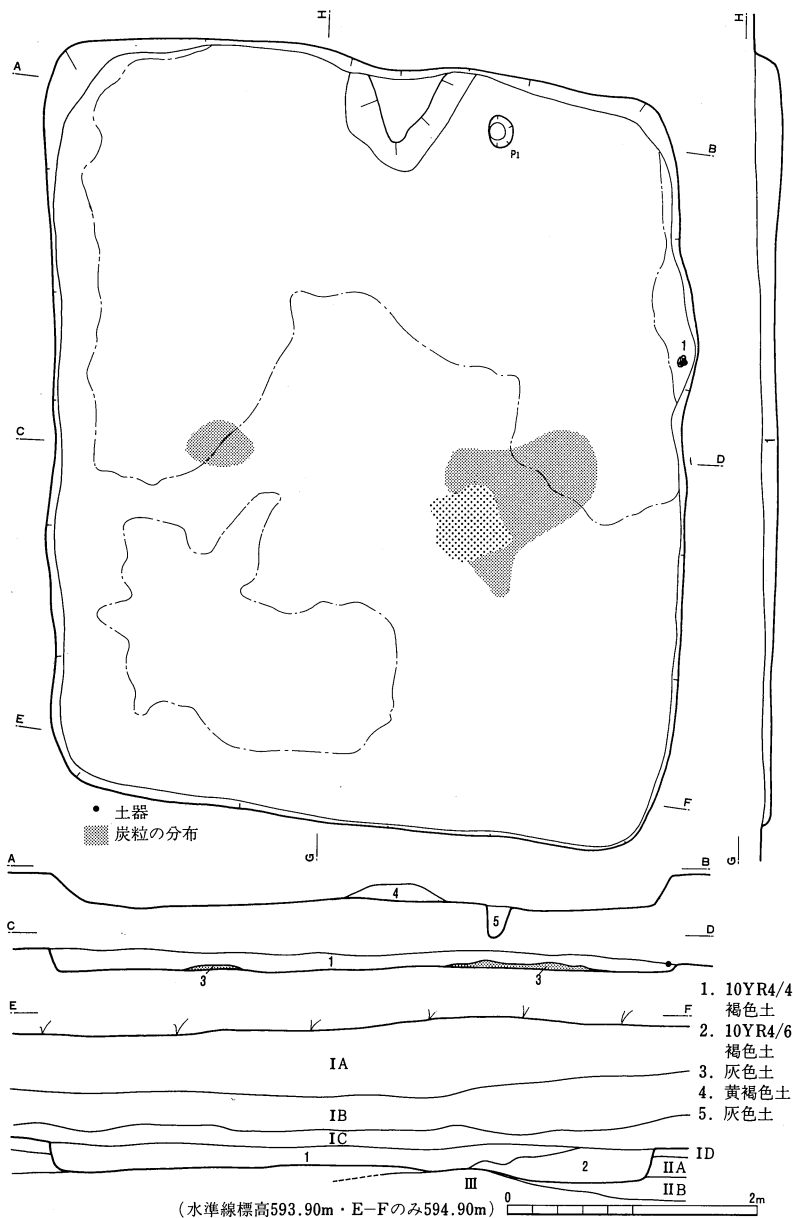
本址よりII A層土粒の混入が少ない。SK456・458・459を切る。本址覆土のほうが灰色が濃い。また、出土遺物や覆土の特徴からSK459は3期以前と判断される。カマド：床面をやや掘り込んだ火床のみ残る。周囲に黄褐色土が分布し、袖石が見られないことから本来は粘土カマドであったと考えられる。床：III層上面まで掘り下げた後、叩き締めている。床面中央部に炭粒の分布が見られる。埋没：単層でII A層土塊が混入することから埋め戻しと判断される。遺物出土状況：北東隅寄り床面で黒色土器A杯(1・3)、カマド周囲床面で須恵器杯片(5)が出土している。帰属時期：出土遺物の様相から6期に比定される。

SB100 位置：北部I 図版43、第79・80図、PL17

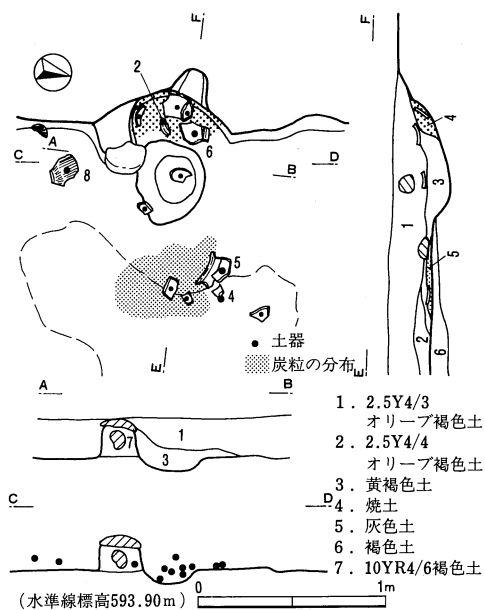
検出：IDf層上面で黄灰色土が落ち込む。SB99・101、SK457・459を切る。本址覆土は古代の他の遺構とは異質であり明瞭に区別できた。諸施設：東壁下中央に床面からの高さ10～15cmにわたり地山II A層を主体とした土による高まりが見られる。また、その南側に深さ25cmの落ち込みを確認している(P₁)。焼土等が見られないので確定はできないがカマドと判断される。床：II B層上面まで掘り下げた後、築き固めている。中央部を除き堅緻面が広がる。南寄りの床面が焼土化しており、その周囲に炭粒が分布する。埋没：2分層される自然堆積土である。遺物出土状況：遺物量は少ない。青白磁合子が南壁際で床面からの高さ10cmの位置に斜位で出土したほかは小片で摩滅したものが多い。帰属時期：I C層堆積以前でIDf層を切り込み面とすることや覆土の特徴から古代の遺構と判断され、出土遺物の様相から15期に比定した。

SB101 位置：北部I 図版43、第79・81図

検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。SB100に切られる。カマド：石組カマドである。左袖がわずかに残るのみで大部分は崩落していた。火床は床を5cmほど掘り下げており、燃焼部はやや壁を掘り込んでい。袖は破碎した花崗岩片や拳大の円礫を芯材に利用し、黄褐色土を充填している。焚口部で土師器甕B片(5)・小型甕D片(4)が、火床上から軟質須恵器杯(2)、土師器甕B片(6)が出土している。床：III層上



第80図 SB100実測図



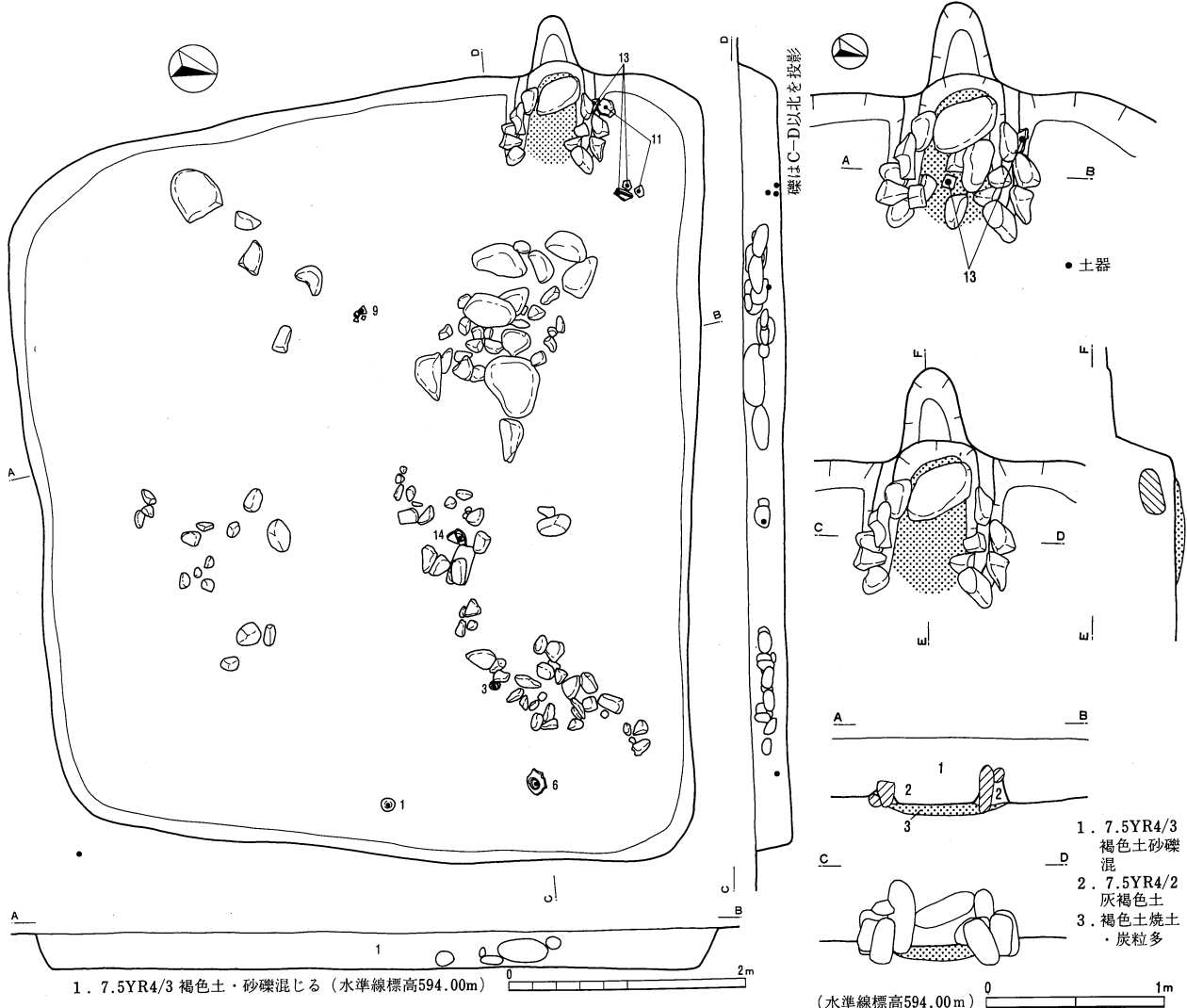
第81図 SB101カマド実測図

位まで掘り下げた後、地山II A層とII B層の混ざった土を入れ築き固めている。埋没：2分層される自然堆積土である。遺物出土状況：東壁下床面で土師器甕B片(7)、南壁際床面で黒色土器A椀(1)が検出された。帰属時期：出土遺物の様相から7期に比定される。

SB102 位置：北部I

図版43、第79・83図

検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。SB104を切る。本址覆土のほうで灰色土の混入が多い。SK465に切られる。SK465のほうで灰色土の混入が多い。I Df層検出のSB103・SK464に切られる。東側大半が調査区域外で調査に至らなかったが、本址の規模はカマドが壁中央にあったとすると一辺9m前後になる可能性がある。カマド：石組カマドである。煙道側縁にも石組をもつ。袖の構築は床面を20cm位掘り下げた後、埋戻しながら、花崗岩の人頭大の円礫を横長・縦位に二重に置き暗褐色土を充填して作っている。煙道でも同様に石組を作っており、本来はこの上に蓋石が載せられていたと判断される。火床上には厚く焼土が堆積しており、その中から黒色土器A杯(3)・鉢(7)、須恵器杯A(10)、土師器甕B片・小型甕D(13・14)が出土している。床：2面有する。下位床面はIII層上面まで掘り下げた後、築き固めている。上位床面はその上に暗褐色土を5cmほど入れて作られている。カマドはこの上位床面上に設置される。埋没：2分層される。下層は壁の



第82図 SB105実測図・カマド実測図

崩落土。上層は土壌化されて地山II A層と同様の土色を呈している。本址はI Df層に被覆されている。
 遺物出土状況：北壁際の上位床面上で須恵器杯A(8)が逆位で出土している。切合い関係からSB104より新しくSB103より古いと判断される。カマドを中心とした出土遺物の様相から6期に比定される。

SB103 位置：北部I 図版43、第79図

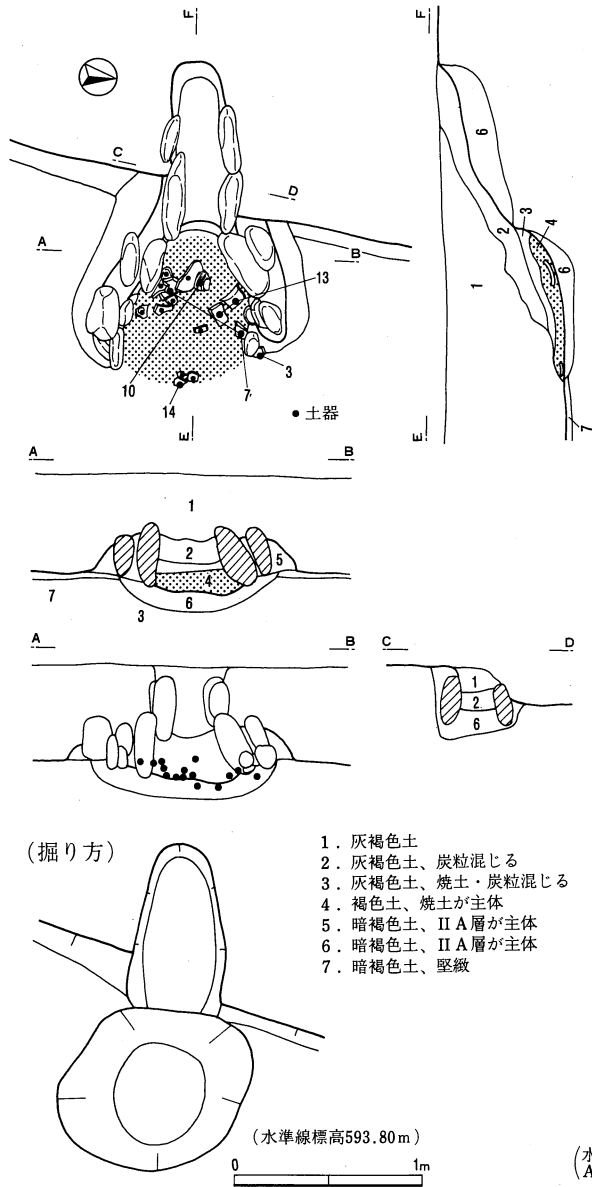
検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。土層断面ではI Df層上面より切り込む。SK464を切る。本址覆土のほうがII A層土塊の混入が少ない。また、II A層上面を検出面とするSB102・104、SK465を切る。
 床：II B層中位およびSB102・104、SK465・466の覆土中に床を設けている。埋没：単層であるが土粒の混入が見られないため自然堆積土と考えられる。遺物出土状況：北寄り床面で黒色土器A碗片(2)が出土した。帰属時期：出土遺物の様相から7期に比定される。

SB104 位置：北部I 図版43、第79図

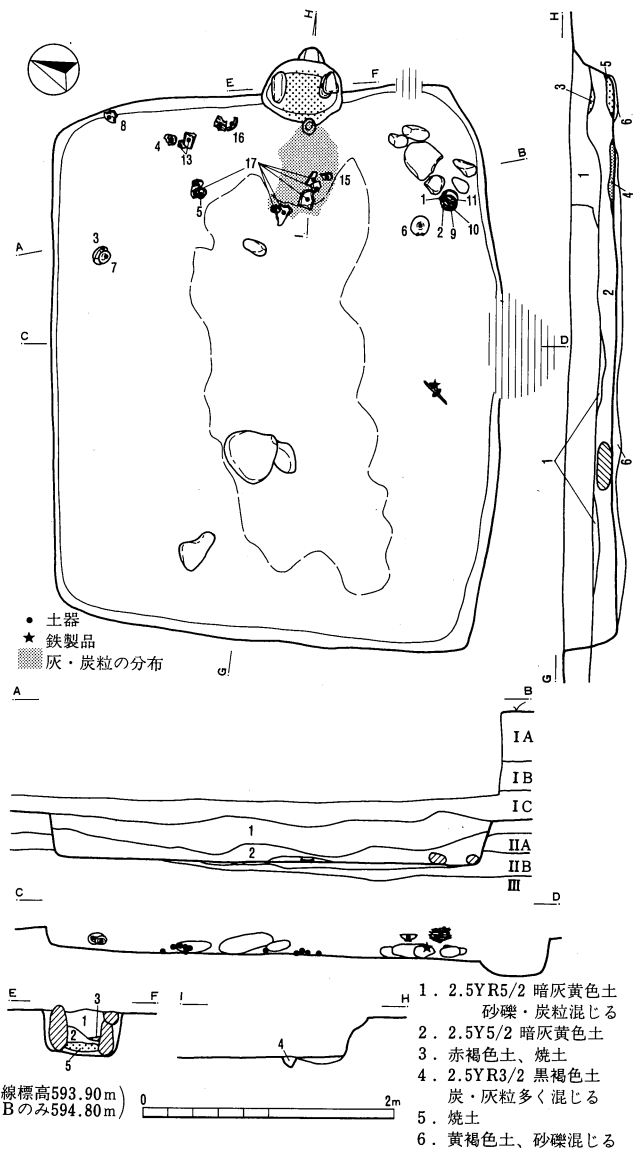
検出：II A層上面でII A層土粒の混入の多い灰色土が落ち込む。SB102・SK465、I Df層検出のSB103・SK464に切られる。東側は調査区域外で調査に至らなかった。床：II B層下位まで掘り下げた地山面を床としている。埋没：覆土の大半が他遺構に切られているため詳細は不明である。帰属時期：I Df層堆積以前で、出土遺物の様相から6期に比定される。

SB105 位置：北部II 図版41、第82図、PL17

検出：II A層上面で黄褐色土が落ち込む。カマド：石組カマドである。袖は地山を皿状に深さ10cm位掘り



第83図 SB102カマド実測図



第84図 SB107実測図

凹めた後、棒状の人頭大の円礫を縦位に置き褐色土を充填して作っている。カマド内で土師器羽釜A(13)が出土している。床：III層上面まで掘り下げた後、築き固めている。埋没：単層で埋め戻しと思われる。床面直上から覆土中にかけてカマド袖石を含む拳大以上の円礫が出土している。遺物出土状況：遺物量は少ない。カマド右脇床面で土師器羽釜A片(13)・小型甕片(11)が見られたほかは覆土中の遺物であり、鉄製の苧引鉄らしきものも出土している(66)。帰属時期：出土遺物の様相から13期に比定される。SA 6とは位置関係や覆土が類似することから併存した可能性が高い。

SB106 位置：北部II 図版56

検出：II A層上面で褐色土が落ち込む。SK541に切られる。SK541の覆土は灰色土が主体である。また、SK542を切る。SK542の覆土の方がII A層土の混入が多い。カマド：覆土中にカマド袖石が見られたことからカマドの存在した可能性がある。床：III層上面まで掘り下げた後築き固めている。部分的に黄褐色土を入れた貼床が存在する。埋没：2分層される自然堆積土である。下層は水酸化鉄に汚染されており、本址埋没後、付近は水田化されたと考えられる。遺物出土状況：床面やや北寄りで鉄製釘(52)が出土してい

る。帰属時期：出土遺物の様相から7期に比定される。

SB107 位置：北部I 図版45、第84図、PL18

検出：I Df層上面で灰色土が落ち込む。SK504・506に切られる。土坑の覆土のほうが灰色が濃い。また床下でSK505を検出している。II A層上面検出のNR9を切っている。カマド：石組カマドである。燃烧部は壁を丸く掘り込む。袖は床面をやや掘り凹めた後、花崗岩の扁平な人頭大の円礫を横長・縦位に置いている。深さ8cmの支脚痕を確認している。床：II B層下位・III層上面まで掘り下げた後、赤褐色土を入れ、叩き締めている。埋没：2分層される自然堆積土である。1層は砂粒を多量に含む。床面にカマド袖石が散乱していた。遺物出土状況：カマド前から左側床面に黒色土器A椀片(4・5)、軟質須恵器杯(8)、土師器甕B片(17)・小型甕D片(15)が出土。やや離れて完形の黒色土器A杯(3)、軟質須恵器杯(7)が重なって出土していた。また、花崗岩のカマド袖石2個を含む人頭大の円礫6個上面の高さを揃えて並んでいた。その脇で上から軟質須恵器杯(11・10)・土師器杯A(1)、軟質須恵器杯(9)、黒色土器A杯(2)の計5個の杯Aが重なり合い、それより20cmほど離れて黒色土器A椀(6)が正位で出土している。これらの出土位置・レベルから考えて、礫と何らかの施設を形作っていたと判断される(配石1)。覆土中から鉄製の紡錘車も出土している。帰属時期：出土遺物の様相から8期に比定される。

SB108 位置：北部II 図版56、第89図

検出：II B層上面で灰褐色土が落ち込む。II A層上面検出のSK546・547・548に切られる。カマド：火床のみ残る。火床上より須恵器杯蓋B(4)・杯B(5)が出土している。床：III層上面まで掘り下げた後、築き固めている。床面西寄りで花崗岩の人頭大の円礫が出土した。埋没：単層だが砂礫の混入が多いことから自然堆積と判断される。遺物出土状況：覆土中で土製の鞆羽口(19)、鉄滓が出土している。帰属時期：出土遺物の様相から5期に比定される。SB118と遺物の接合関係を有している。

SB109 位置：北部II 図版44、第85図

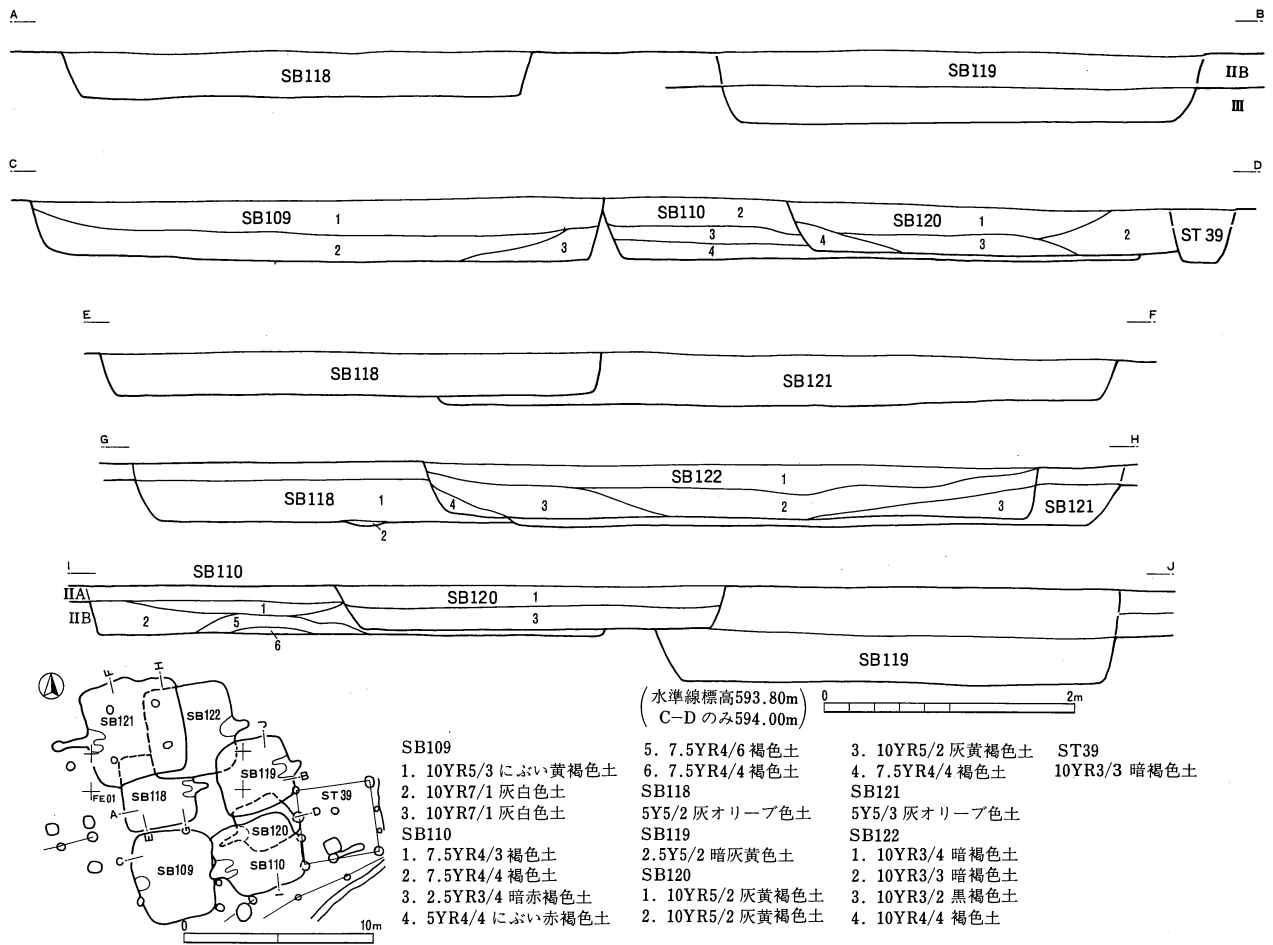
検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。SK557・558に切られ、SB110を切る。SKの覆土は本址より灰色が濃く、SB110の覆土は褐色を呈しており、明瞭に分離できた。カマド：西壁中央下に火床のみ残る。床：III層上面まで掘り下げた後、築き固めている。埋没：3分層される自然堆積土である。3層は壁の崩落土である。床面直上から2層中にかけて拳大以上の円礫が少量見られた。遺物出土状況：カマド前床面で須恵器杯A(19)・長頸壺片(32)、土師器甕B片(31)が出土した。また、検出面で黒色土器A杯(4・5)、須恵器平瓶(31)が完形・正位の状態で出土している。覆土中で墨書土器(40~45)、鉄製釘(54)が見られたほか、遺物量は多い。帰属時期：出土遺物の様相から7期に比定される。

SB110 位置：北部II 図版44、第85・86図

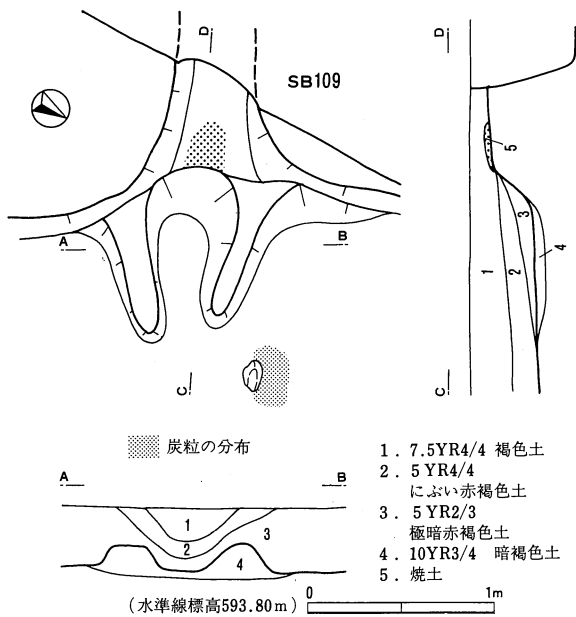
検出：II A層中で暗褐色土が落ち込み、焼礫・焼土粒が点在していた。SB119・120に切られ、また、ST39にも切られる。ST39の掘り方埋土は灰色土を主体としている。カマド：粘土カマドである。構築は床を若干掘り凹め、黄褐色土で袖を作っている。明確な火床は認められないが、燃烧部奥から煙道にかけて厚く焼土が堆積している。床：II B層下位およびIII層上面まで掘り下げた後、築き固めている。床面北寄りに炭粒が分布していた。埋没：4分層される自然堆積土である。本址廃絶後2回にわたり焼土を多含する土の堆積が見られた。帰属時期：カマドを中心とした出土遺物の様相から6期に比定される。

SB111 位置：北部II 図版43、第88図、PL18・19

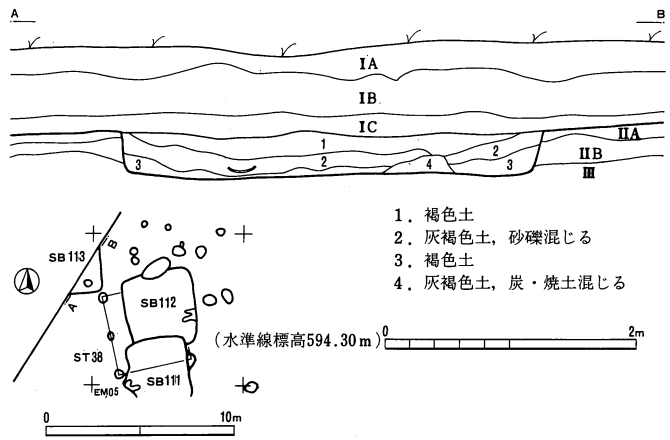
検出：本址付近ではIII層上面の標高が高くII A・II B層が堆積していないため、III層上面で褐色土が落ち込む状態で検出された。SB112・ST38を切る。本址の覆土のほうがやや灰色土の混入が多い。カマド：石組カマドである。燃烧部は壁を丸く掘り込んでいる。袖の構築は床面に花崗岩の扁平な人頭大の円礫を横長・縦位に、2対置いて作られている。火床下に深さ5cmの皿状の落ち込みが見られた。袖および天井



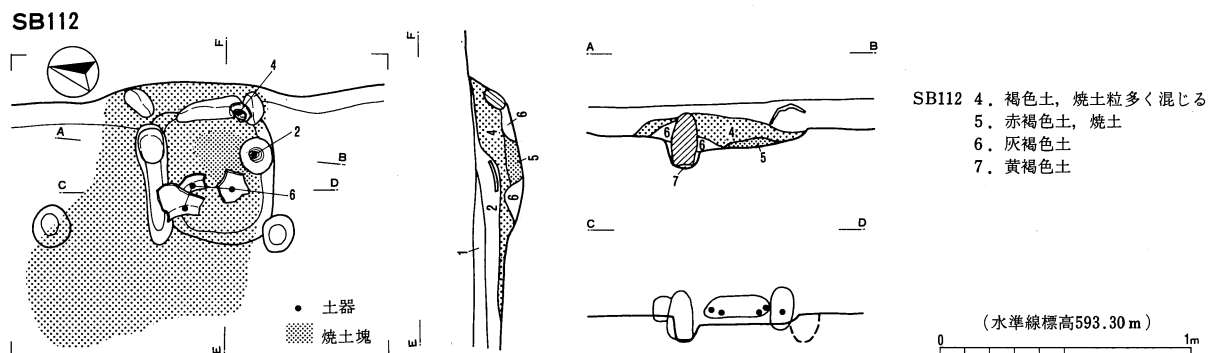
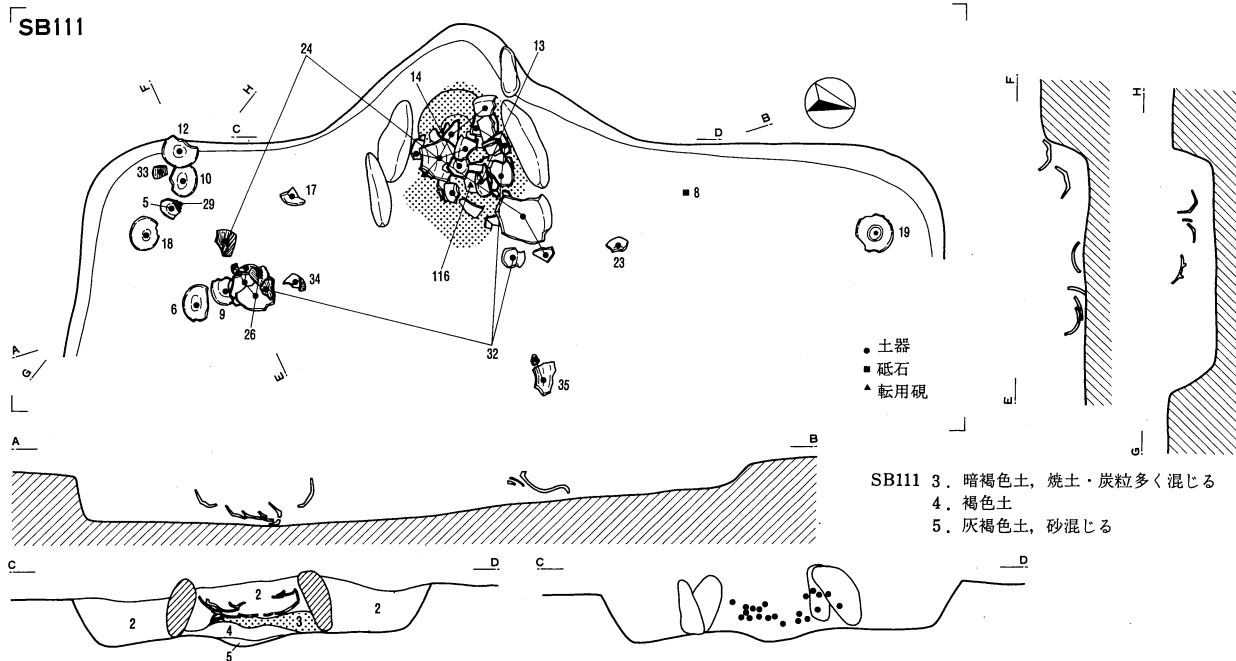
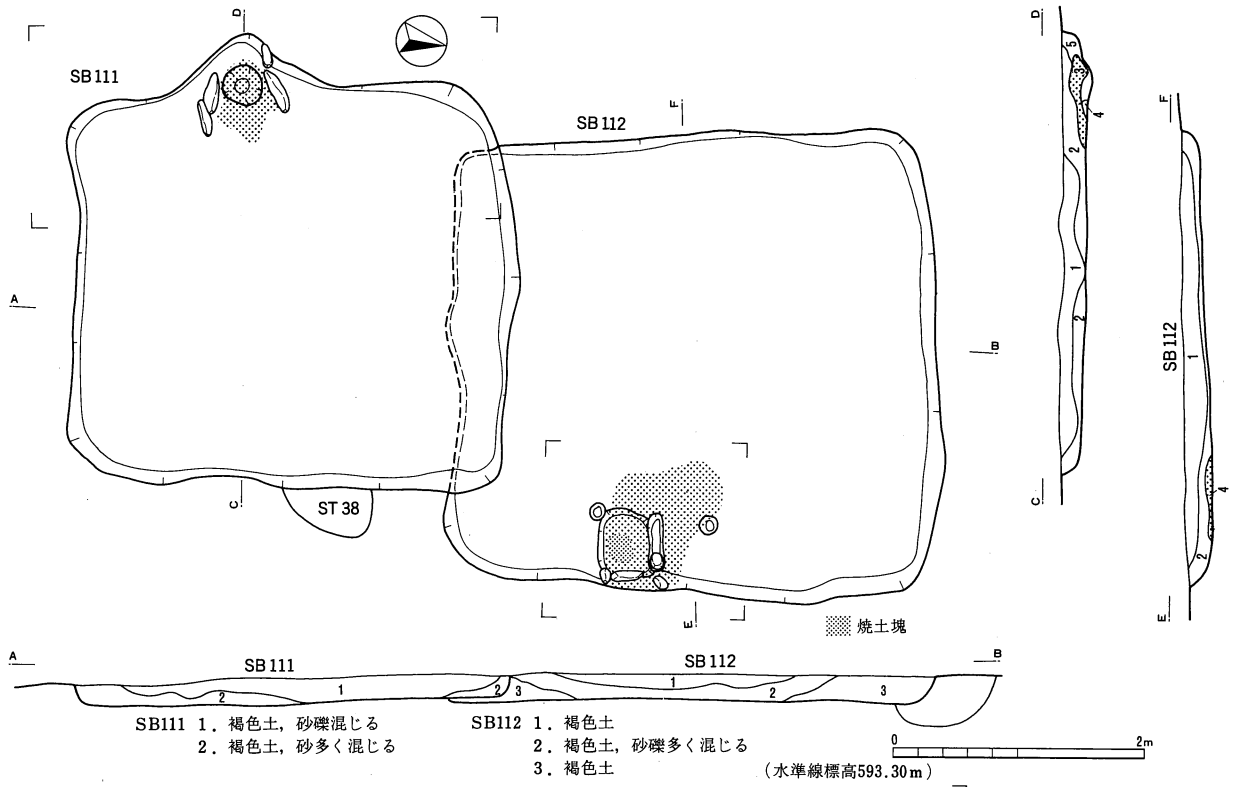
第85図 SB109・110・118～122土層断面図



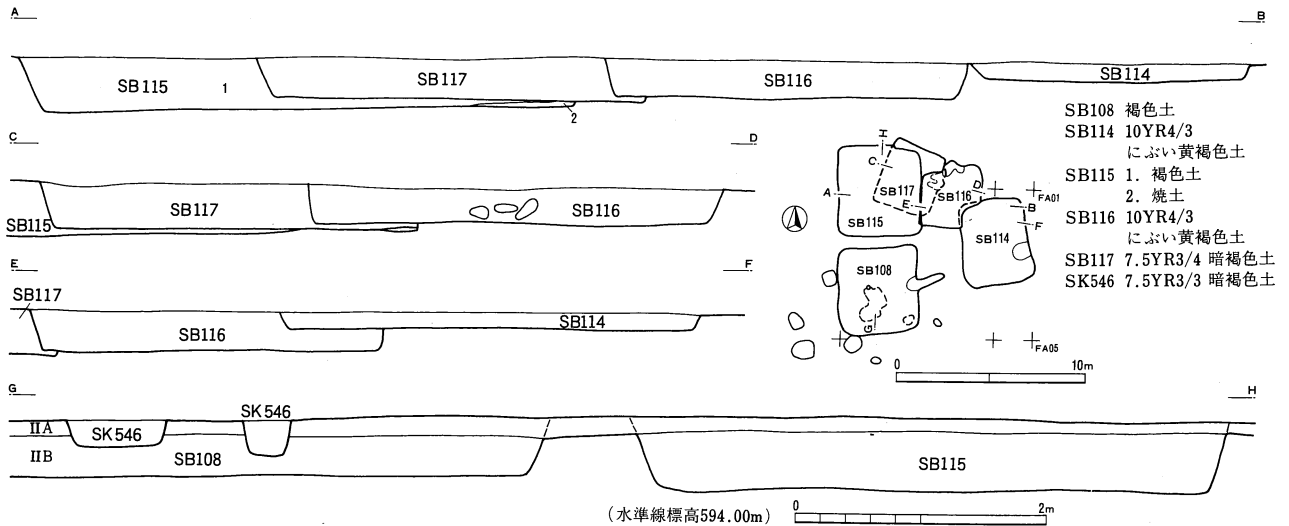
第86図 SB110カマド実測図



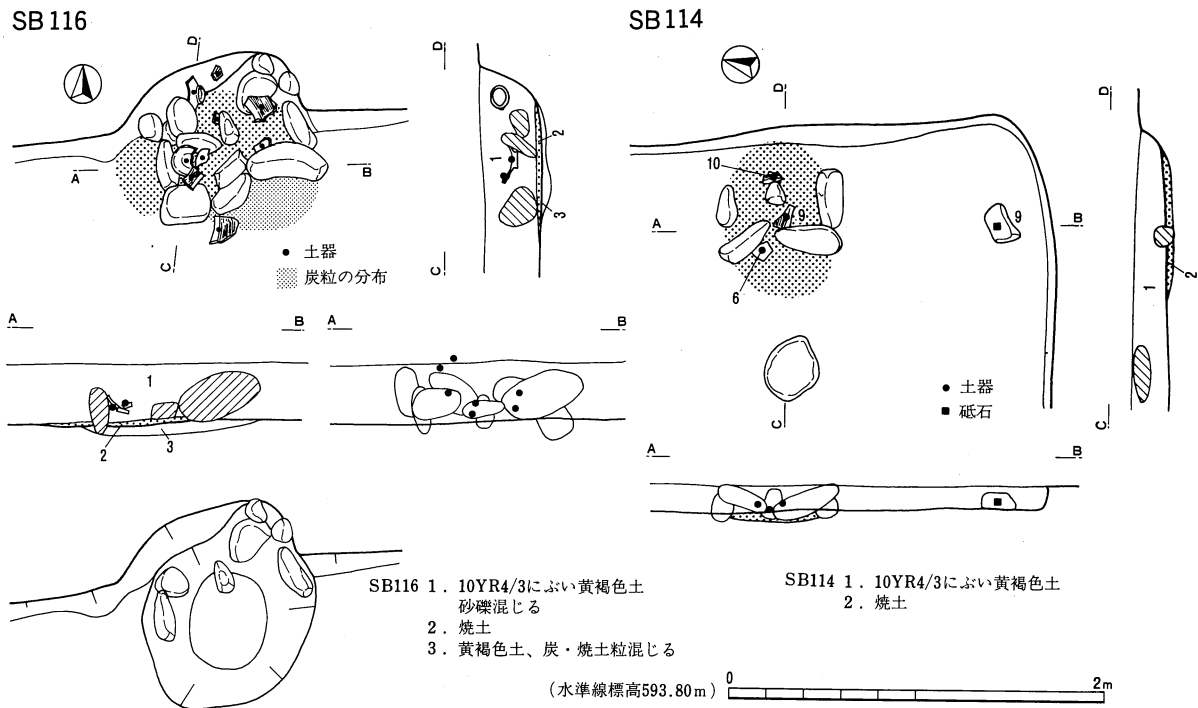
第87図 SB113土層断面図



第88図 SB111・112実測図・カマド実測図



第89図 SB108・114～117、SK546土層断面図



第90図 SB116・114カマド実測図

に崩落土と考えられる焼土層(3層)が火床上に堆積しており、その上に黒色土器A杯(13・14)、土師器甕B片(32)・小型甕D(24)、須恵器甕片を用いた転用硯(116)が折り重なって出土している。この状況からカマドが廃絶された後、遺物が投げ込まれたものと判断される。床：III層上面まで掘り下げた地山面を床としている。埋没：2分層される自然堆積土である。砂礫の混入が多い。遺物出土状況：南西隅を中心とした西壁際で床面直上および床面より10cmほど浮いた状態で黒色土器A杯が5個体(5・6・9・10・12)、土師器甕B片(34)・小型甕D(26)が完形・半完形の状態で出土しており、それぞれの出土レベルから南西方向から一括投棄されたと考えられる。ほかに砥石(8)が床面直上で出土している。帰属時期：切合い関係からSB112より新しいと判断されるが、出土土器の様相からは7期に比定される。

SB112 位置：北部II 図版43、第88図、PL18

検出：II B層・III層上面で灰色土が落ち込む。ST38・SK573を切り、SB111に切られる。ST・SKより本址の覆土のほうが灰色が濃い。カマド：粘土カマドであるが、袖付け根部に細長い花崗岩の円礫を縦位に置いている。袖先端部にも小穴が見られたことから袖先端にも礫を配していたものと考え。また、燃焼部では床を15cm程掘り凹めた後、奥壁に偏平な円礫を1個埋設している。火床上より黒色土器A杯(2)・皿(4)、土師器甕B片(6)が出土した。床：III層上面まで掘り下げた地山面を床としている。埋没：2分層される自然堆積土である。覆土中の遺物量は比較的多い。帰属時期：切合い関係からSB111より古く位置付けられるが、出土した土器の様相からは7期に比定される。

SB113 位置：北部II 図版43、第87図

検出：II B層上面で明褐色土が落ち込む。土層断面ではII A層から切り込んでいる。北西側は用地外で調査に至らなかった。床：III層上面まで掘り下げた地山面を床としている。諸施設：南東隅より床面で深さ8cmの落ち込みを確認している(P₁)。埋没：4分層される自然堆積土である。遺物出土状況：東壁近くでは床面からやや浮いた状態で、黒色土器A椀(1)、軟質須恵器杯(3)、灰釉陶器椀(5)・長頸壺(6)が出土している。なお、5は転用硯で朱が薄く付着していた。帰属時期：出土遺物の様相から8期に比定される。

SB114 位置：北部II 図版44、第89・90図

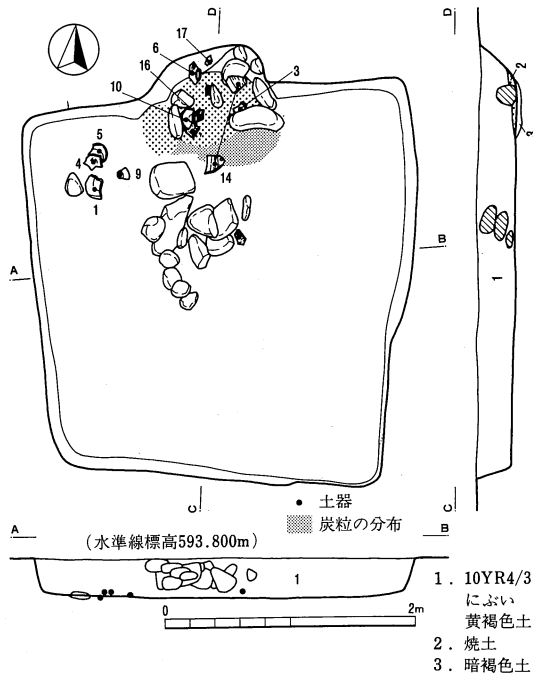
検出：II A層上面で褐色土が落ち込む。SB116を切る。本址の覆土のほうがやや灰色の混入が多い。カマド：石組カマドである。袖の構築は地山を皿状に掘り凹めた後、偏平な人頭大の円礫を袖石として横長・縦位に置く。天井石が崩れ落ちた状態で出土した。火床上で軟質須恵器杯(6)、土師器甕B片(10)・小型甕D(9)が見られた。床：II B層下位まで掘り下げた後、築き固めている。一部SB116覆土中に床面を設けている。埋没：単層であるが、鶏卵大以下の礫を多含しており、自然堆積土と判断される。カマド前で床面より数cm浮いた状態で花崗岩の偏平な人頭大の円礫が3個出土し、いずれも被熱によって赤変し煤が付着していた。南東隅下床面で砥石(9)が見られた。帰属時期：切合い関係からSB116より新しいと位置付けられるが、出土土器の様相では7期に比定される。

SB115 位置：北部II 図版56、第89図

検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。SB117に切られる。また、南側ではSB108と隣接している。カマド：東壁中央やや南寄り火床のみ残っており、厚く焼土が堆積していた。床：III層上面まで掘り下げた後、築き固めている。諸施設：北東隅寄り床面で深さ44cmの落ち込みを確認しており(P₁)、位置的に柱穴の可能性があるが他の部分では見付からなかった。埋没：単層であるが、砂礫を多く含むことから一過性の自然堆積土と判断される。遺物出土状況：覆土中で土製の鞆羽口(20)が出土している。帰属時期：切合い関係からSB117より古く位置付けられるが、出土土器の様相から4期に比定される。

SB116 位置：北部II 図版44、第89・90・91図

検出：II A層上面で黄褐色土が落ち込む。SB117を切る。本址の覆土のほうが灰色が濃い。また、SB114に切られる。カマド：石組カマドである。燃焼部は壁を掘り込んでいる。カマドの構築は地山を深さ10cmほど掘り凹めた後、偏平な人頭大の円礫を袖石として横長・縦位に置く。天井石が崩れ落ちた状態で残っている。支脚石も火床中央に残る。燃焼部内上位に黒色土器A椀(6)・皿B(10)、土師器甕B片(16)・小型甕D片(14)が斜位または逆位で、さらに、天井石下より黒色土器A杯(3)が出土した。床：III層上位まで掘り下げた後、築き固める。一部SB117覆土中に床面が設けられている。埋没：単層で砂礫の混入が多い土である。カマド前で床直から覆土中位にかけて花崗岩のカマド袖石を含む拳大以上の円礫が出土している。遺物出土状況：カマド左脇の床面で黒色土器A杯(1・4・5)・皿B(9)が正位で出土している。なお、土器1とカマド内遺物の6には「東」の墨書が見られた。覆土中より土製品の鞆羽口片が出土している。帰属時期：カマドを中心とした遺物の様相から7期に比定される。



第91図 SB116実測図

SB117

位置：北部II
図版56、第89図

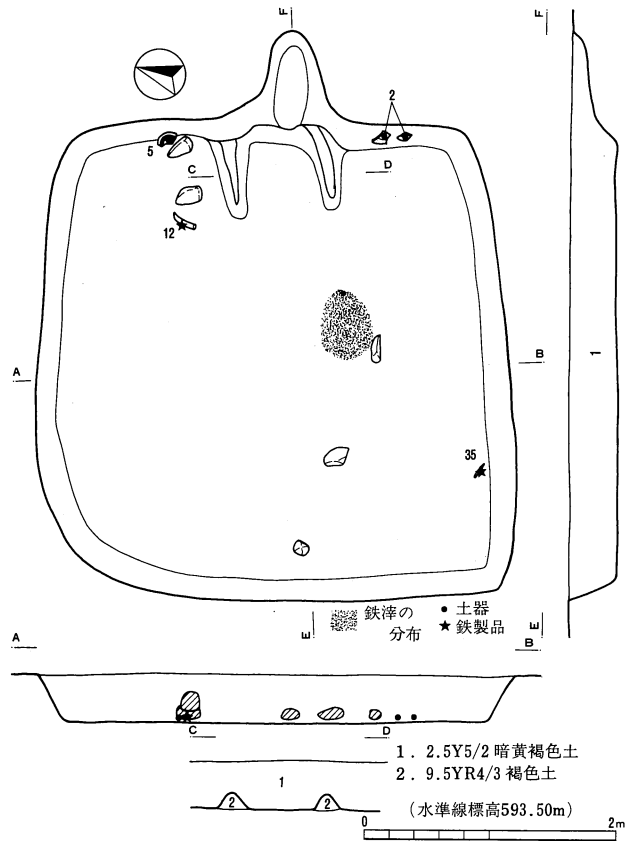
検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。SB115を切る。本址の覆土のほうはやや灰色が濃い。また、SB116に切られる。カマド：東壁中央下に火床のみ残る。床：II B層下位まで掘り下げた後、築き固めている。一部はSB115覆土中に床面を設けている。北東隅下床面に人頭大の円礫が据えられている。埋没：単層ではあるが、砂礫の混入が多いため一過性の自然堆積と判断される。遺物出土状況：覆土中より女性裸像をへら描きした須恵器杯B片(6)、鉄製の鎌片(9・10)・刀子(35)、鉄滓1点、土製の鞆羽口片(22)が出土している。帰属時期：切合い関係からSB115より新しく、またSB116よりは古く位置付けられるが、出土遺物の様相からは4期に比定される。

SB118 位置：北部II 図版57、第85図

検出：II B層上面で黄灰色土が落ち込む。II A層検出のSB122に切られる。また、SB121を切る。本址の覆土のほうで灰色が濃い。カマド：東壁中央に火床のみ残る。火床はわずかに掘り凹められている。床：III層上面まで掘り下げた後、築き固めている。諸施設：南壁下床面に花崗岩の扁平な人頭大の円礫が平らに置かれている。埋没：単一層であるが、小豆大以下の礫が多混しており自然堆積と判断される。遺物出土状況：西壁下床面で須恵器長頸壺(4)、土師器甑C(5)が出土している。帰属時期：出土遺物の様相から5期に比定される。本址の遺物はSB119の遺物と接合関係を有している。

SB119 位置：北部II 図版57、第85・92図、PL19

検出：II B層上面で暗褐色土が落ち込む。II A層検出のSB120・122に切られる。カマド：粘土カマドである。袖は床面上に褐色土で作られている。明確な火床は認められなかった。床：II B層下位およびIII層上面まで掘り下げた後、築き固めている。埋没：単層で地山の土塊が混じることから埋め戻しと判断される。遺物出土状況：カマド周囲の壁面および床面で須恵器杯A(2)・杯B(5)、鉄製の刀子・鎌(12)が出土している。床中央で鉄滓46点が集中して出土している。帰属時期：出土遺物の様相から5期に比定される。



第92図 SB119実測図

本址とSB108の遺物と接合関係を有している。

SB120 位置：北部II 図版45、第85図、PL19

検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。SB110およびSB119を切る。本址の覆土は灰色土を主体としており明瞭に分離できた。カマド：煙道と火床のみ確認した。煙道底部は焼けていた。床：II B層下位まで掘り下げた地山面を床としている。床中央と東壁際に焼土が分布していた。埋没：4分層される自然堆積土である。竪穴中央に堆積する3層には多量の焼土・炭粒が含まれている。覆土中で鉄製の刀子、大形の鉄滓が見られた。帰属時期：出土遺物の様相から7期に比定される。

SB121 位置：北部II 図版57、第85・93図、PL20

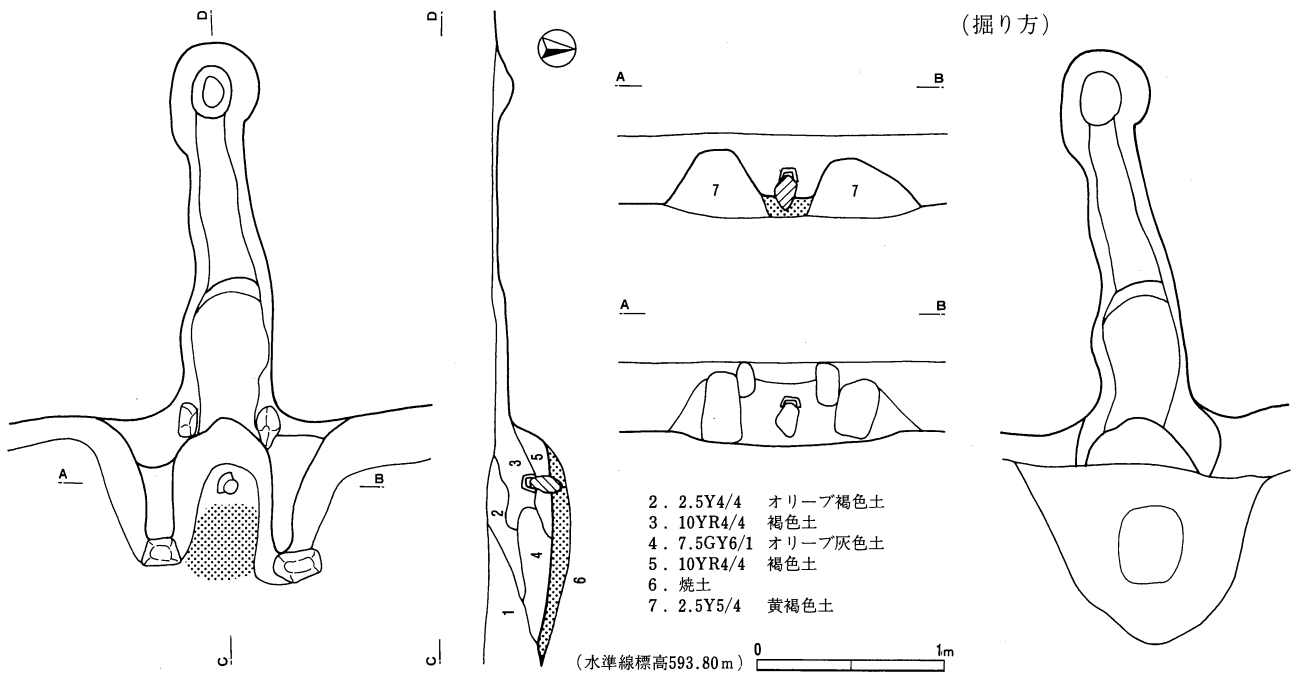
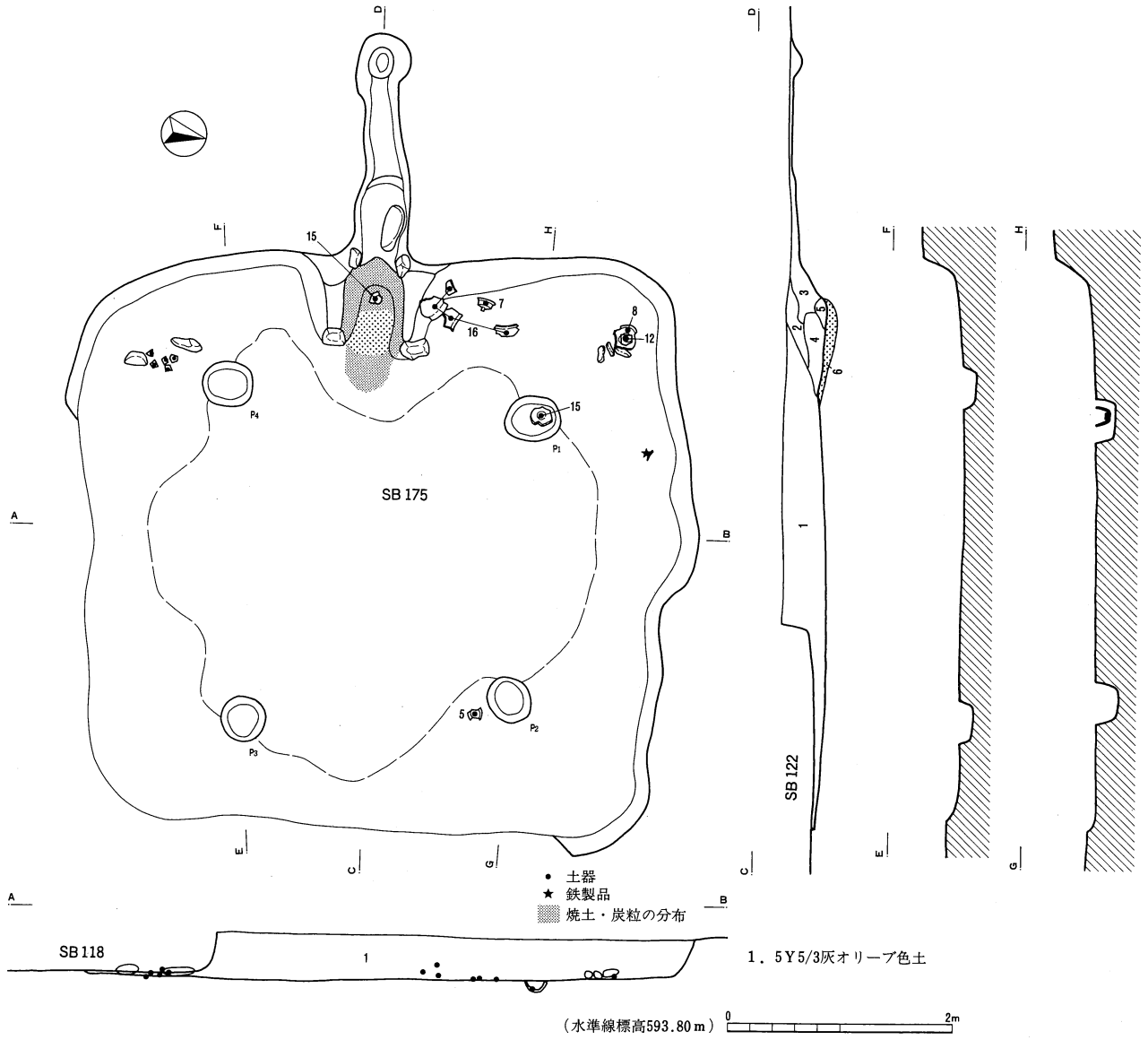
検出：II B層上面で灰色土とII A層の混じった土が落ち込む。SB118に切られる。また、II A層上面検出のSB122に切られる。カマド：粘土カマドであるが、両袖付け根と先端部に花崗岩・閃緑岩の人頭大の円礫を縦位に置く。袖の構築は地山を15cmほど皿状に掘り凹めた後、礫を配し黄褐色土で塗り固めている。天井石と思われる人頭大の長い円礫が煙道内に落ち込んでいた。良好な火床を残しており、支脚石には棒状の円礫を立てて土師器甕A底部片(15)をかぶせていた。煙道先端には深さ15cmのピットが見られ、内部は焼土化していた。主柱穴：径40cmの円形ないし楕円形を呈し、深さ10~17cmを測る(P₁~P₄)。床：III層上面まで掘り下げた後、築き固めている。壁際を除き堅緻面が認められる。埋没：単層だが、小豆大以下の礫を多く含んでおり、一過性の自然堆積と判断される。遺物出土状況：西壁際に集中しており、土師器甕F(16)がカマド右脇で、須恵器高杯(7)、土師器鉢(8)・甕A底部(12)が床面直上で出土した。また、土師器甕A(13)がP₁内に落ち込んでいた。他に須恵器杯A(5)、鉄製の刀子(36)が床面直上で検出された。帰属時期：カマドを中心とした遺物の様相から1期に比定される。

SB122 位置：北部II 図版44、第85・94図、PL19

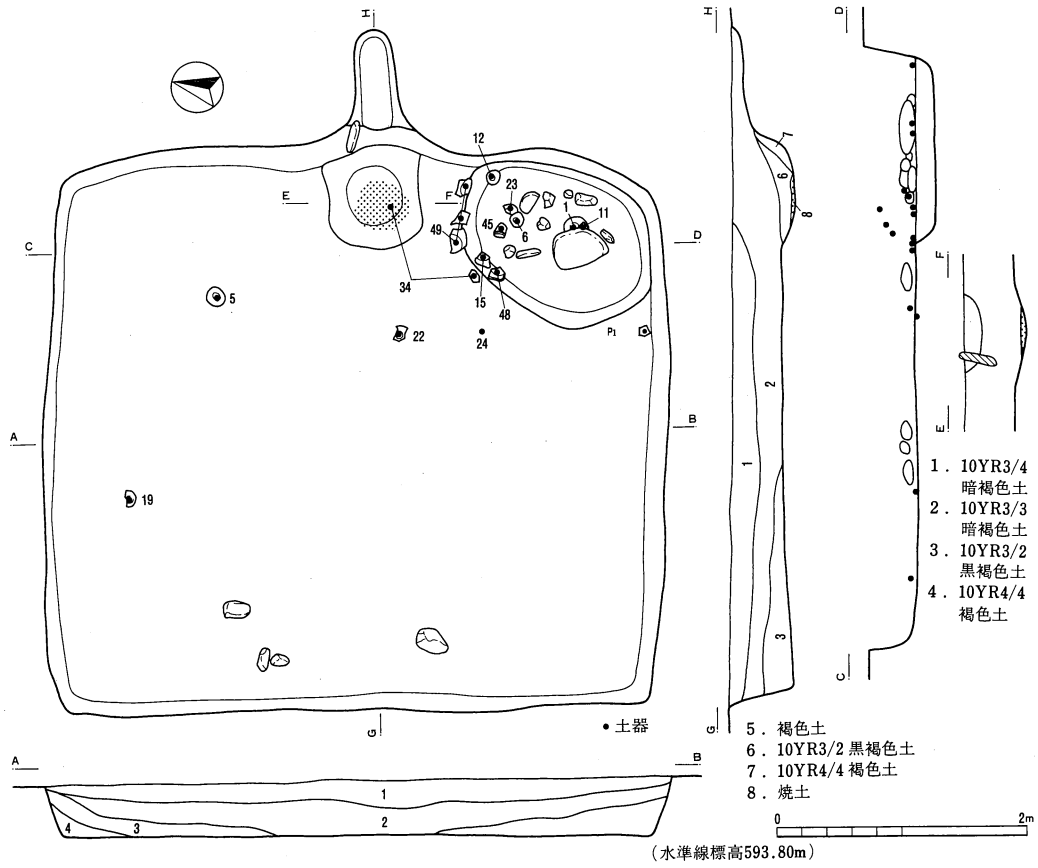
検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。II B層上面検出のSB118・119・120を切る。カマド：石組カマドであるが、袖石は左袖にのみ残っていた。火床は床面を10cm弱掘り凹められており、焼土の堆積が見られた。床：III層上面まで掘り下げた地山面、およびSB118・119・120の覆土中に設けられている。全体に堅緻である。諸施設：カマド右脇、南東隅下床面に深さ20cm強の落ち込みを確認した(P₁)。この覆土は竪穴の2層と同じで住居使用時に開口していたとも考えられるが、この上部より完形・半完形の遺物が床面とほぼ同レベルで出土していることから、落ち込みは埋没していたと考えるほうが良いであろう。埋没：4分層される自然堆積土で、4層は壁の崩落土である。遺物出土状況：覆土中に多量の遺物を含むが、ほとんどが破片であった。完形・半完形の床面直上の遺物は黒色土器A杯(1・11・12)・皿(19)、須恵器長頸壺(45)があり、カマド右脇に多く検出された。覆土中から墨書土器が3点(49~51)、朱の付着した転用硯(118)、鉄製の刀子(37)、鉄滓が出土している。帰属時期：出土遺物の様相から7期に比定される。SB151の遺物と接合関係を有している。

SB123 位置：北部II 図版45、第95図、PL21

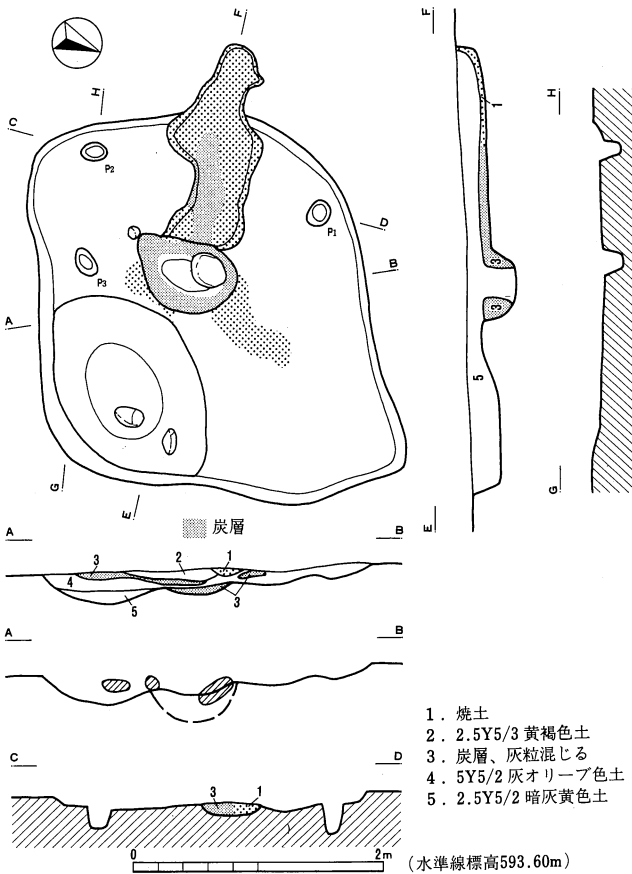
検出：II A層下位で黄褐色土が落ち込む。SB124・SK570を切る。本址の覆土のほうが明るい土色であった。諸施設：床面中央部に70cm×55cm、深さ30cm弱の落ち込みが見られた。その内部は炭・灰で満たされていた。また、大小様々な大きさの鉄滓が総計1550g出土しており、小鍛冶にかかわる炉と判断される。さらに、炉から西壁外へ幅50~70cm、深さ7~8cmの溝上の凹みが続いている。この底面でも多量の焼土が確認されており、炉にかかわる施設と考えられる。床：III層上面まで掘り下げた後、築き固めている。床面には水酸化鉄・マンガンが集積し、堅緻であった。南東側床面はなだらかに落ち込んでいる。埋没：5分層される自然堆積土である。覆土上位にも焼土や炭・灰が多混する層が見られる。帰属時間：出土遺物の様相から8期に比定される。



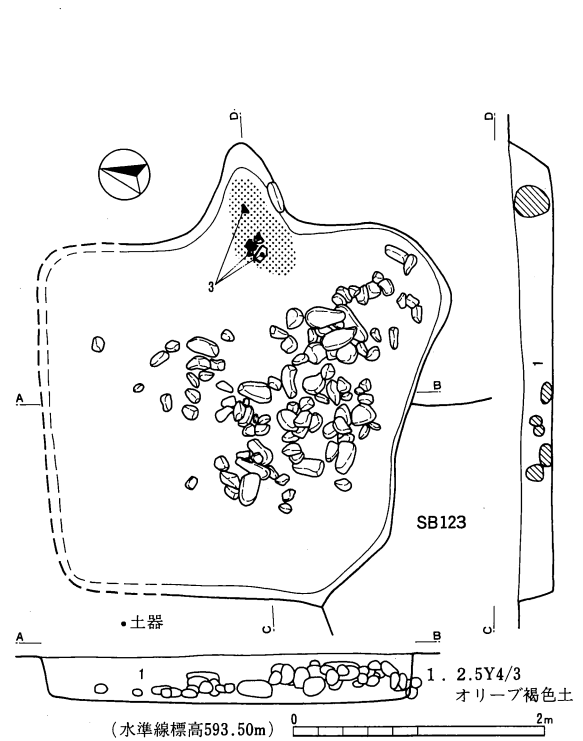
第93図 SB121実測図・カマド実測図



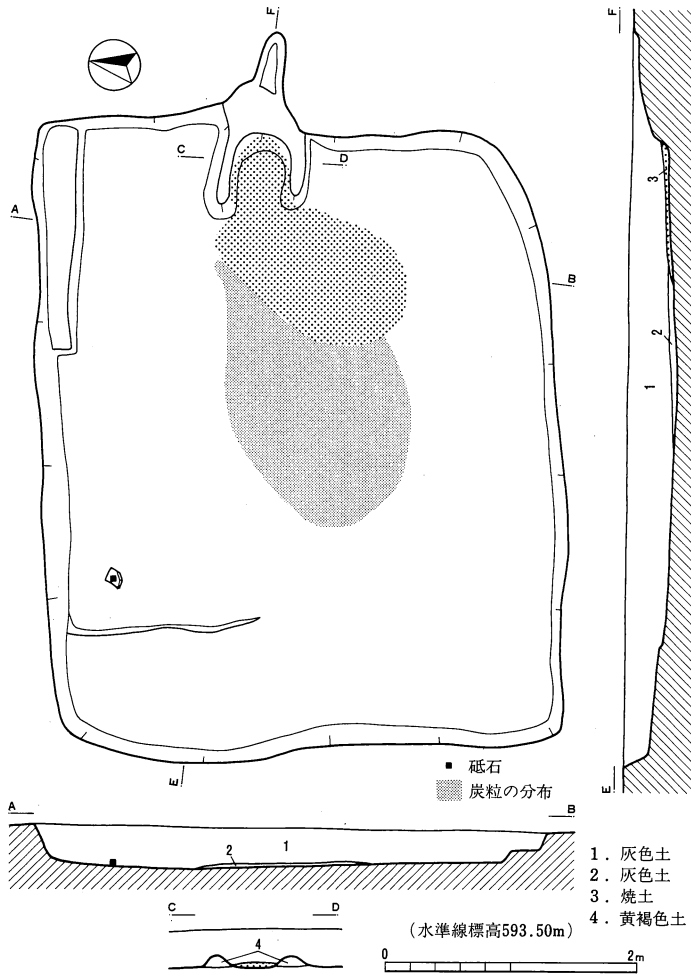
第94図 SB122実測図



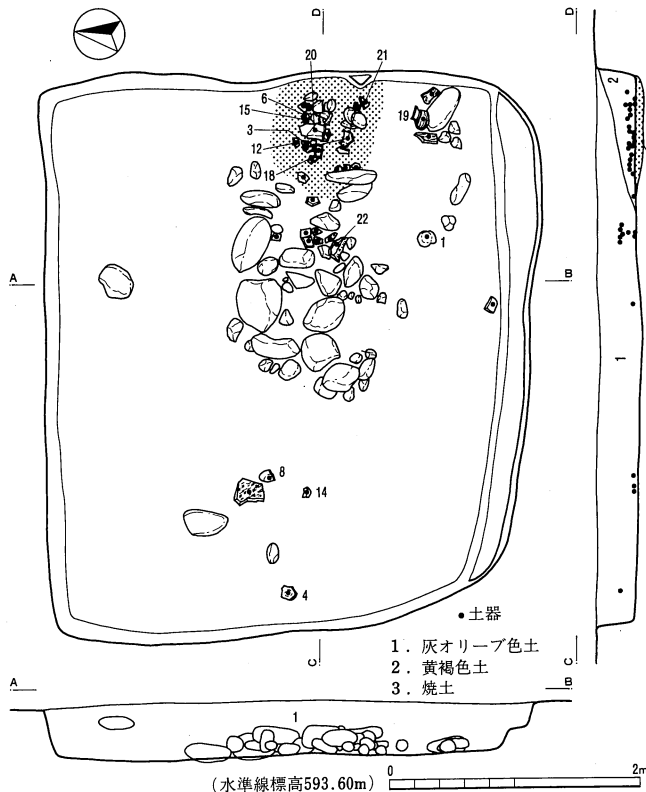
第95図 SB123実測図



第96図 SB124実測図



第97図 SB125実測図



第98図 SB126実測図

SB124 位置：北部II

図版45、第96図、PL21

検出：II A層下位で灰褐色土が落ち込む。SB123に切られる。SB123の覆土のほうが灰色が濃い。カマド：東壁中央に火床のみ残る。燃烧部は壁を掘り込んでいる。袖石が1個残っている。火床上に土師器甕B片(3)が見られた。床：単層で埋め戻しと考えられる。床面直上から覆土下位にかけて拳大から人頭大の円礫が混入している。帰属時期：出土遺物の様相から2期に比定される。

SB125 位置：北部II

図版57、第97図、PL21

検出：II B層上面で褐色土が落ち込む。II A層上面検出のSB126に切られる。カマド：粘土カマドである。燃烧部は壁をやや掘り込んでいる。袖は黄褐色土によって作られている。カマド内から焚口部にかけて広く焼土が分布する。床：II B層下位およびIII層上面まで掘り下げた地山面を床としている。北東隅寄り壁面に床面からの高さ10~15cmの平坦面を有している。床中央では炭粒の分布が見られた。埋没：単層であるが灰色土・地山の土粒と砂礫が混じり合う自然堆積土である。遺物出土状況：遺物量は少ない。床面北寄りで砥石(10)が出土している。帰属時期：出土遺物の様相から4期に比定される。

SB126 位置：北部II

図版47、第98・99図、PL22

検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。SB127を切る。本址覆土のほうが灰色が濃い。カマド：東壁中央に火床のみ確認した。竪穴内にカマド袖石が散在することから石組カマドの可能性が有する。火床上で黒色土器A杯(3)・椀(6)・鉢片(18)、灰釉陶器椀(12)・段皿(15)、土師器甕B片(20・21)が折り重なって出土した。床：III層上面まで掘り下げた後、暗褐色土を入れている。部

分的に堅緻面が見られた。南壁沿いに床面からの高さ20cm位の位置に平坦面が見られる。埋没：単層である。竪穴中央部で、床面直上から10cmほど浮いた状態でカマド袖石を含む拳大以上の円礫が多出している。礫間で土師器甕B片、須恵器甕A(22)が見られた。遺物出土状況：黒色土器A碗(8)、灰釉陶器碗(14)、須恵器長頸壺片が床面直上で、カマド右脇で土師器小型甕D(19)、須恵器甕A片が出土している。覆土中で灰釉陶器碗片を用いた転用碗(119)が検出された。帰属時期：出土遺物の様相から7期に比定される。

SB127 位置：北部II 図版47、PL22

検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。SB126に切られているため、カマドの位置等は不明である。床：III層上面まで掘り下げた地山面を床としている。全体に堅緻である。埋没：単層で地山の土塊が混じることから埋め戻しと判断される。遺物出土状況：遺物量は少ない。西壁際床面で黒色土器A杯(2)、須恵器甕D(16)が見られた。また、覆土中で棒状鉄製品(79)、小形の鉄滓が見られた。帰属時期：切合い関係からSB126より古く位置付けられるが、出土遺物の様相からは7期に比定される。

SB128 位置：北部II 図版59、第99・100図、PL21・22

検出：II A層検出のSK618・619調査中にその存在を知り、本址の平面形はII B層上面で確定した。SB129、II A層検出のSK612～620に切られる。カマド：西壁際に床面直上で人頭大の礫が見られることからカマドが存在した可能性もある。床：III層上位まで掘り下げた後、築き固めている。壁際を除き堅緻であった。主柱穴：円形ないし楕円形を呈し、深さ35～45cmを測る(P₁～P₄)。P₂・P₃の底面にさらに径25cm・深さ10cm位の小穴があり、建物の自重による柱の沈下を示すものと判断される。埋没：3分層される自然堆積土である。覆土3層上面に焼土・炭粒の堆積が見られる。炭粒の分布は住居址全体に及び、また、炭粒の形状はヨシ等の草本類と判断され、屋根材等が焼失したものと考えられる。こうした状況から推察すると、住居址が廃絶された後に、壁やカマドが崩落するようなある期間を経て、廃屋が火災にあったものと解釈される。遺物出土状況：土師器杯D片(3)・小型甕A(13・14)・小型甕B(15)・甕F(16・17)、土製品の紡錘車(4)が床面直上もしくは壁際で出土している。また、P₃内から鉄製の鋤先耳部(3)が出土。他に鉄製紡錘車(68・69)、砥石片(11)が覆土中で見られた。帰属時期：出土遺物の様相から1期に比定される。

SB129 位置：北部II 図版59、第99図、PL21・22

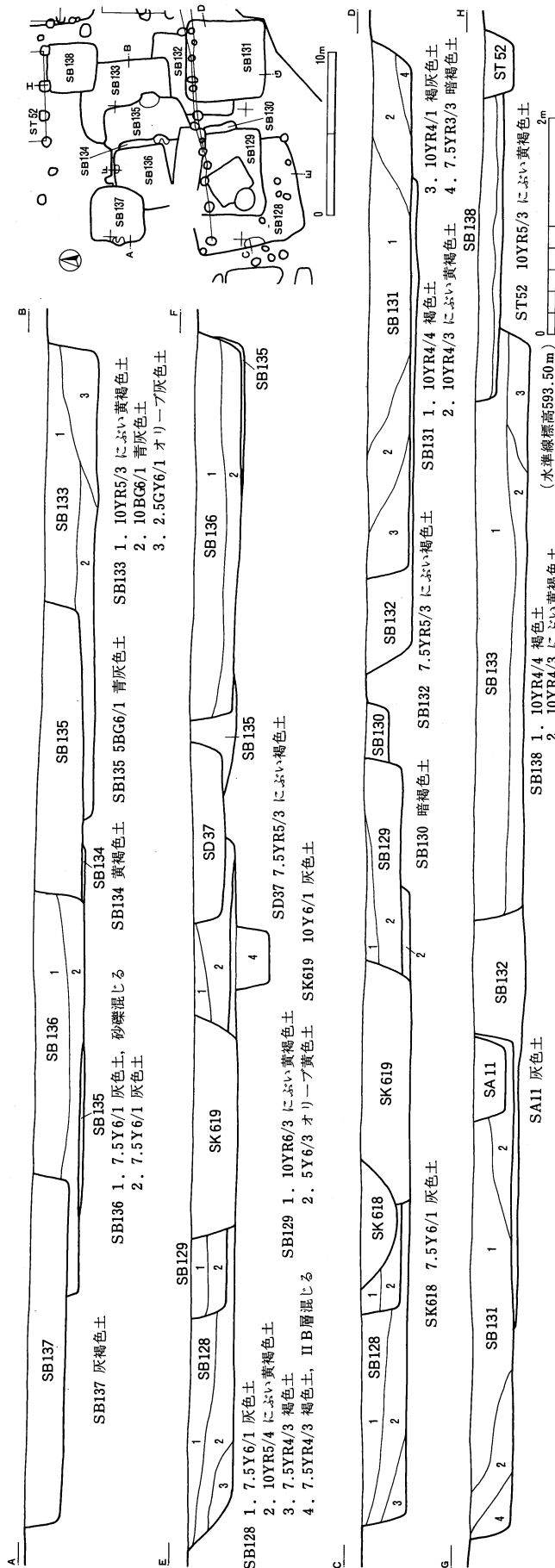
検出：II B層上面で灰褐色土が落ち込む。SB128・130を切っている。本址の覆土のほうが明るい土色であった。II A層上面で検出されたSA12、SD37、SK618・619に切られる。カマド：東壁際及び西壁寄り床面で焼土の分布が見られたのみで確定には至っていない。床：III層上面まで掘り下げた後、築き固めている。一部ではSB128覆土中に床面を設けている。埋没：2分層される自然堆積土である。遺物量は少ない。帰属時期：切合い関係からSB128より新しく位置付けられるが、出土遺物の様相からは1期に比定される。

SB130 位置：北部II 図版59、第99図、PL21

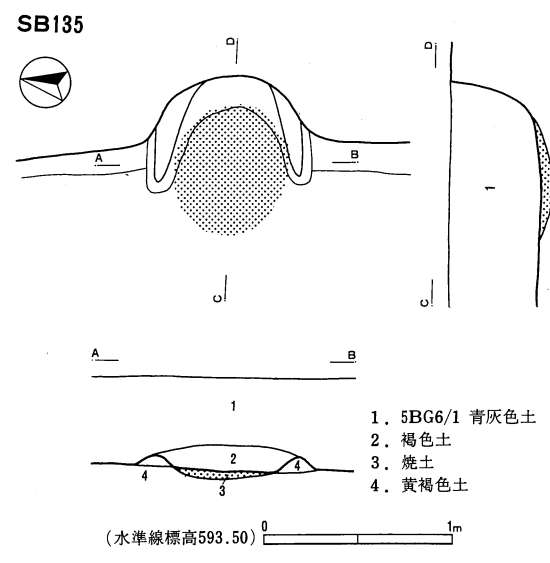
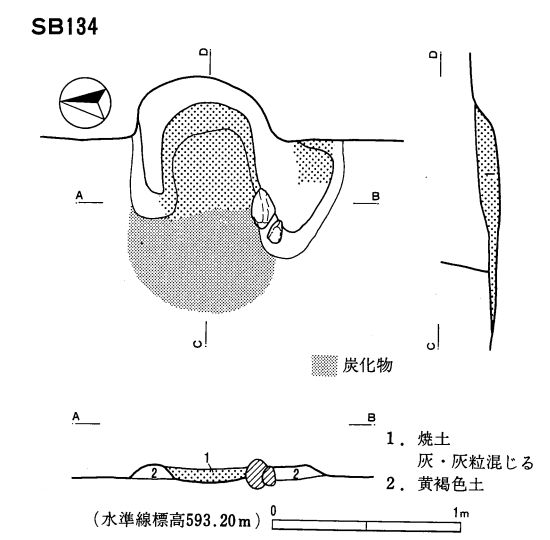
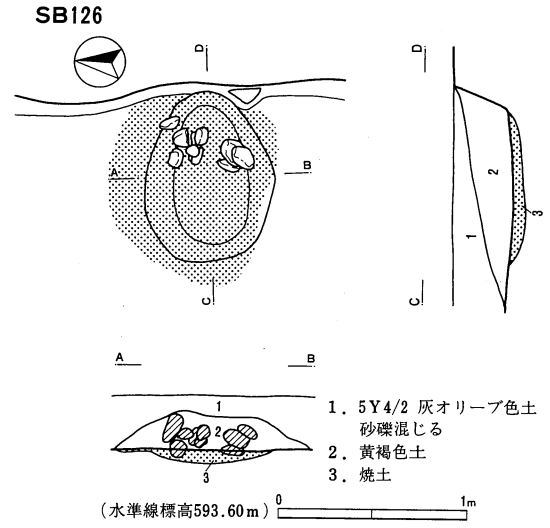
検出：II B層上面で暗褐色土を主体とした土が落ち込む。SB128・129及びII A層上面検出のSB134・135、SD37、SA12に切られる。大部分が他の遺構に攪乱されているため全体像が明確ではないが、平坦な床面を持つことから竪穴住居址と判断した。床：III層上面まで掘り下げた後、築き固めている。埋没：単層で埋め戻しと判断される。覆土はII A層を主体としII B層が混入している。帰属時期：遺物が少量のため特定できないが、切合い関係からSB129より古く、覆土・検出状況から1期と考えられる。

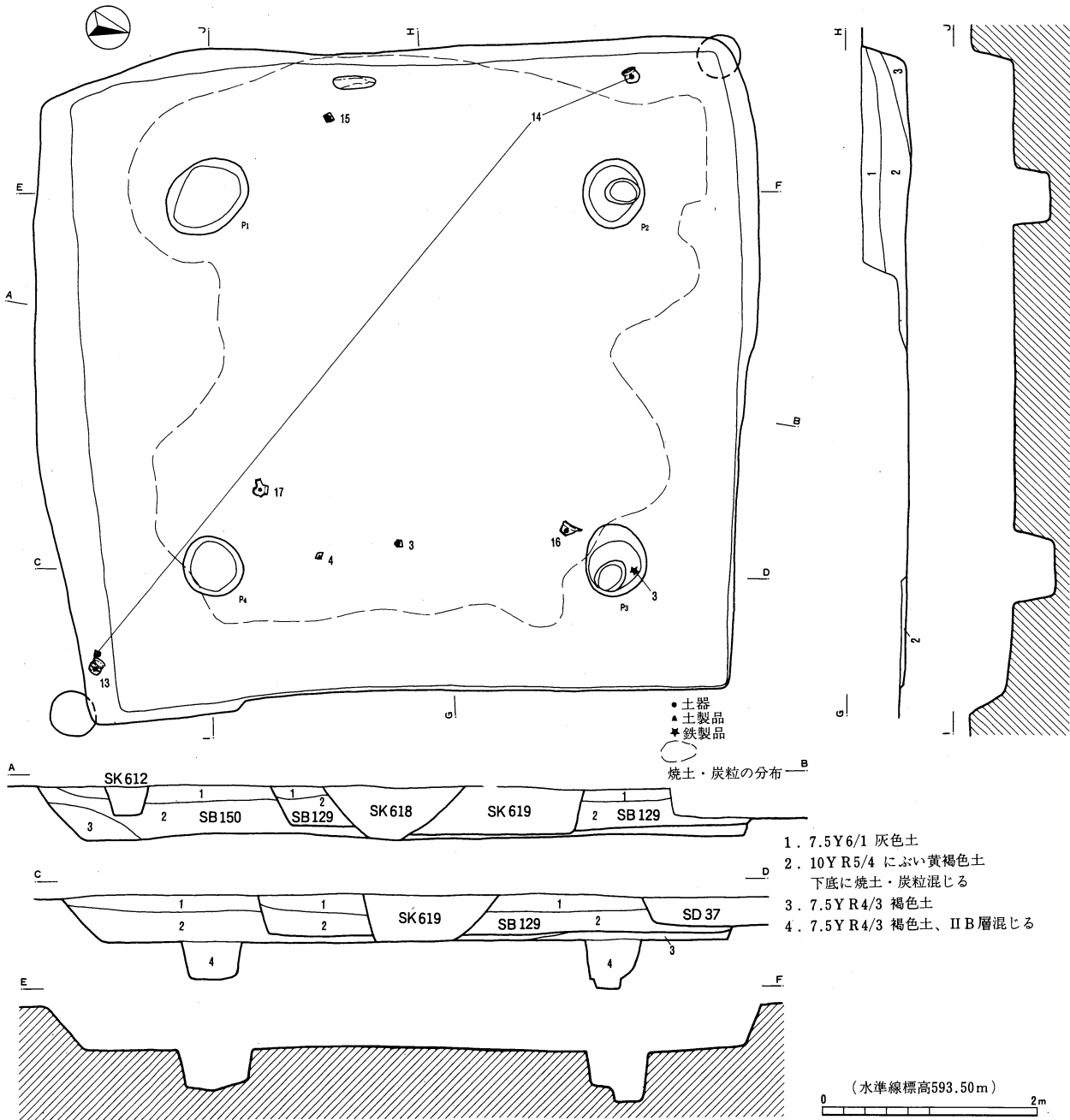
SB131 位置：北部II 図版59、第99図、PL21

検出：II B層上面で褐色土が落ち込む。SB132を切る。本址の覆土のほうが濃い黄色を呈している。またSB135に切られる。本址はカマドが見られないものの、規模や平坦な床面を持つことから竪穴住居址と判断した。床：III層上面まで掘り下げた後、築き固めている。埋没：4分層される自然堆積土である。帰属



第99図 SB128~138・ST52・SD37・SA11ほか土層断面図
SB126・134・135カマド実測図





第100図 SB128実測図

時期：切合い関係からSB132より新しく位置付けられるが、出土遺物の様相からは1期に比定される。SB133の遺物と接合関係を有している。

SB132 位置：北部II 図版59、第99・101図、PL21

検出：II B層上面で褐色土が落ち込む。SB131・132に切られる。さらにII A層上面検出のSB135に切られる。床：III層上位まで掘り下げた後、築き固めている。埋没：単層で、覆土中には灰色土と黄褐色土塊を多く含む。壁の傾斜が緩やかなことから崩落土の混入も多いと考えられる。北西部床面を中心にして焼土・炭粒が広く分布している。こうした状況はSB128と同様であり、本址も焼失した可能性が高い。帰属時期：切合い関係からSB131・132より古く位置付けられるが、出土遺物の様相からは1期に比定される。

SB133 位置：北部II 図版59、第99図

検出：II B層上面で黄褐色土が落ち込む。SB132を切る。本址の覆土のほうが黄色味のある土色であった。

II A層上面検出のSB135に切られる。床：III層上位まで掘り下げた後、築き固めている。埋没：4分層される自然堆積土である。下層ほど灰色が濃い。4層は砂を主体とした土層である。遺物量は少ない。帰属時期：切合い関係からSB132より新しく位置付けられるが、出土遺物の様相からは1期と考えられる。

SB134 位置：北部II 図版47、第99図、PL23

検出：SB135調査中にカマド部分が見つかり、本址の存在を確認した。II A層上面で灰色土と地山の混じった土が落ち込む。SB136に切られ、SB135を切っている。カマド：粘土カマドである。右袖先端部に花崗岩の礫を配している。袖の構築は地山をわずかに掘り凹めた後、黄褐色土を塗り固めている。天井部が右袖上に崩落した状態で残っていた。埋没：覆土の大部分が他遺構に切られているため、詳細は不明である。帰属時期：切合い関係からSB135より新しく、SB135より古く位置付けられるが、カマド燃焼部内出土の遺物の様相から5期に比定される。

SB135 位置：北部II 図版47、第99図、PL23

検出：II A層上面で褐色土が落ち込む。SB134・136・137、SD37に切られる。また、II B層上面で検出したSB132・133を切っている。カマド：粘土カマドである。燃焼部は壁を丸く掘り込む。火床はよく焼けており、焼土化した地山の厚さは5cmに達する。床：III層上面まで掘り下げた後、築き固めている。諸施設：北壁に三か所、床面よりの高さ20cm位の矩形の張出しを壁面に有している。覆土の観察から本址に伴うものと判断したが、その性格は不明である。埋没：単層であるが、土塊の混入がなく、砂礫を多く含むことから自然堆積と考えられる。遺物は覆土中に少量見られた。帰属時期：切合い関係からSB134より古く位置付けられる。出土遺物が少なく特定はできないが、覆土等の特徴から4～5期に比定される。

SB136 位置：北部II 図版47、第99図、PL23

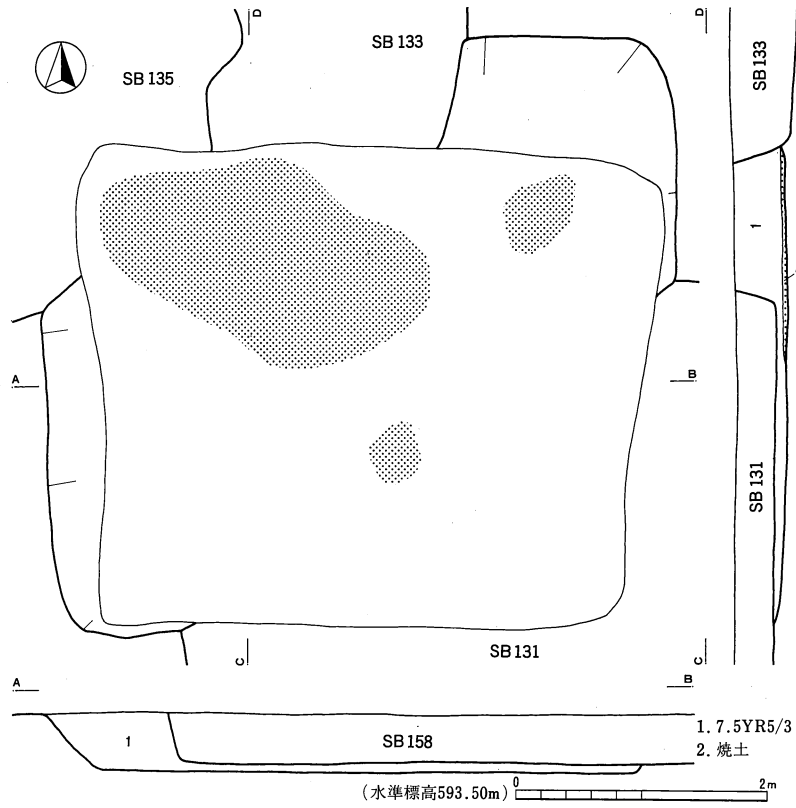
検出：II A層上面で灰色とII A層土粒の混じった土が落ち込む。SB137に切られ、SB134・135を切っている。SB134のカマド上に本址の床面が構築されている。カマド：北壁中央からやや東寄りに火床のみ確認された。床：III層上面およびSB134・135覆土下位まで掘り下げた後、暗褐色土を入れ叩き締めている。埋没：2分層される自然堆積土である。覆土中に砂礫を多く含む。遺物量は少ない。帰属時期：切合い関係からSB134より新しく位置付けられるが、出土遺物の様相は5期に比定されている。

SB137 位置：北部II 図版47、第99・102図、PL23

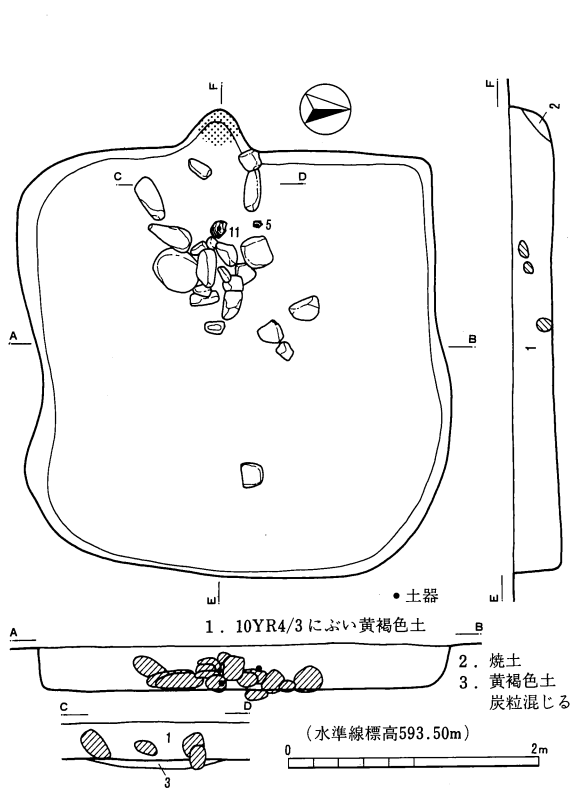
検出：II A層上面でII A層を主体とした土が落ち込む。SB136・137を切る。本址の覆土のほうが灰色が濃い。カマド：石組カマドであるが、袖石は右袖に残るのみである。カマドの構築は床面を皿状に掘り凹めた後、人頭大の扁平な円礫を縦位に置いて作られている。床：III層上面まで掘り下げた地山面を床としている。全体に堅緻であった。埋没：単層で鶏卵大以下の礫を多く含む自然堆積土である。カマド前で床面直上ないしは10cm位、浮いた状態でカマド袖石を含む拳大以上の円礫が集中して出土している。遺物出土状況：これらの礫の間で黒色土器A鉢片(5)、土師器甕B片・小型甕D片(11)が出土しているほかは、小片で量も少ない。帰属時期：出土遺物の様相から7期に比定される。SB153の遺物と接合関係を有している。

SB138 位置：北部II 図版47、第99図

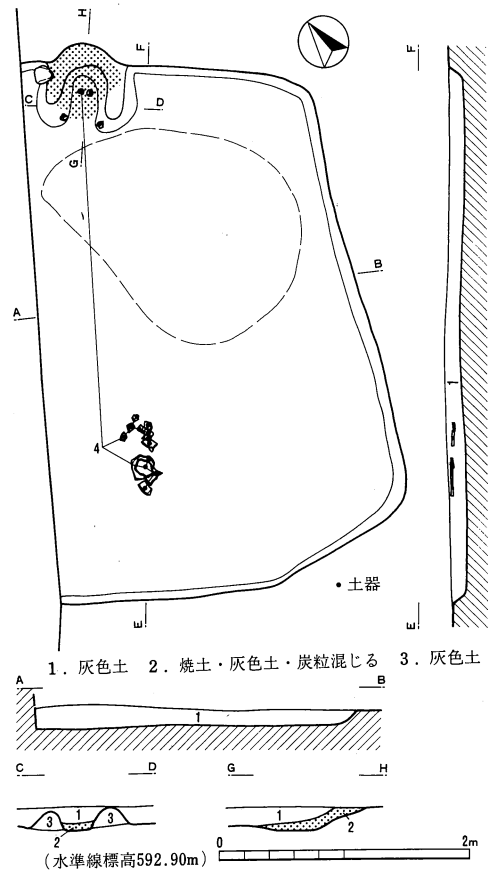
検出：II A層上面で明褐色土が落ち込む。ST52に切られる。STの柱穴埋土のほうが灰色が濃い。またII B層上面検出のSB133を切る。本址にはカマドが見られないものの規模や平坦な床面を持つことから竪穴住居址と判断した。床：III層上面まで掘り下げた地山面を床としている。全体に堅緻である。埋没：2分層される自然堆積土である。床面上に人頭大の円礫が散在している。遺物出土状況：北壁際床面で黒色土器A杯(2)・鉢片(3)が出土している。帰属時間：出土遺物の様相から7期に比定される。SB158の遺物と接合関係を有している。



第101図 SB132実測図



第102図 SB137実測図



第103図 SB139実測図

SB139

位置：北部II

図版58、第103図、PL24

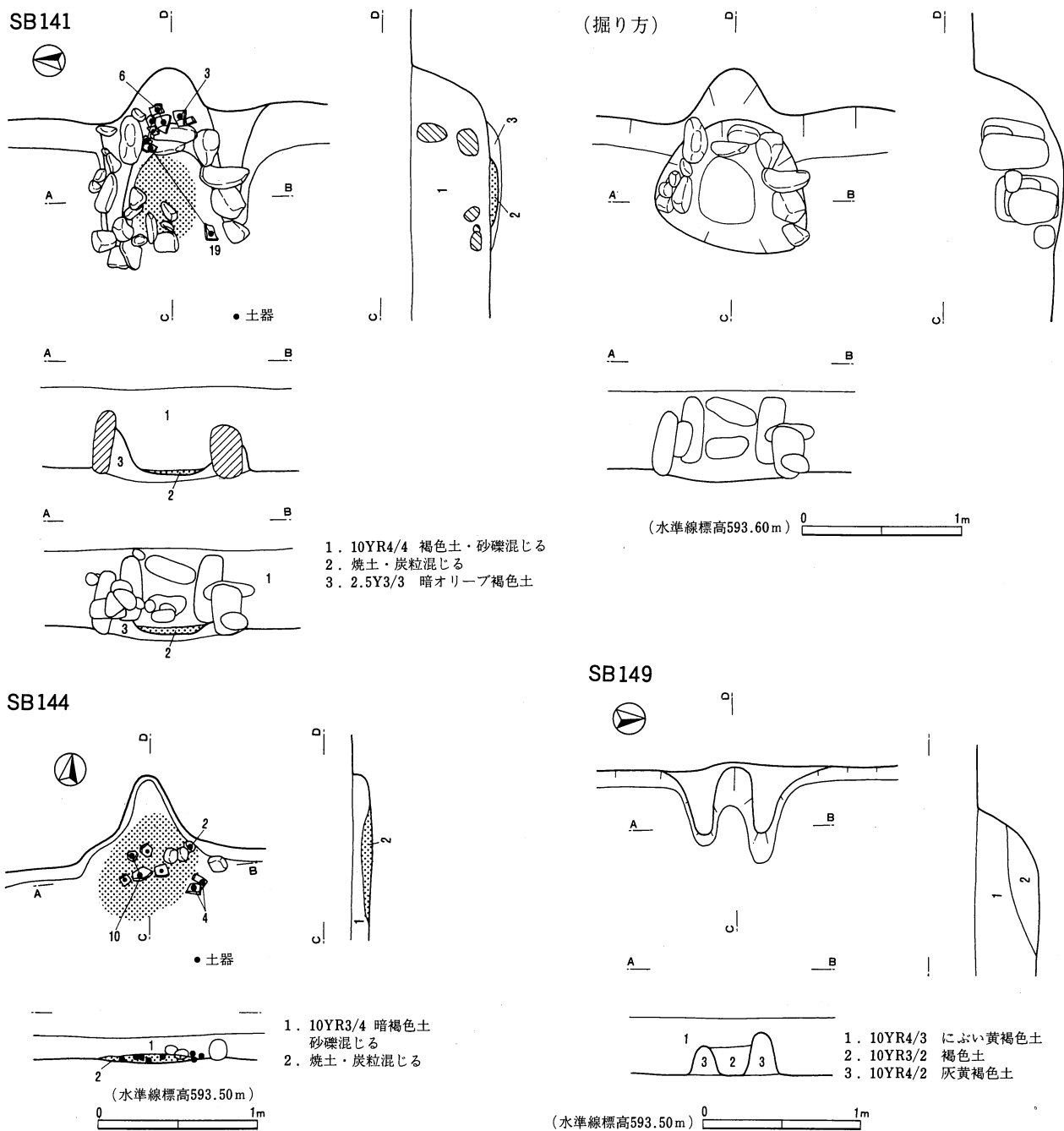
検出：II B層上面で灰褐色土が落ち込み遺物が散在していた。西半部は調査区域外に当たり調査に至らなかった。カマド：粘土カマドであるが、左袖付け根部に礫を配している。袖は床面に灰色土で作られている。床：III層上面まで掘り下げた後、暗褐色土で貼床をしている。埋没：単層であるが、覆土が浅いため詳細は不明である。遺物出土状況：床面より10cmほど浮いた状態で土師器甕Bの下半部(4)が出土している。遺物量は少ない。帰属時期：出土遺物の様相から5期に比定される。

SB140

位置：北部II

図版47、PL24

検出：II A層上面で礫を多含する暗褐色土が落ち込む。SB141を切る。SB141覆土中に本址の床面壁が確認できた。カマド：東壁中央下に火床のみ残っていた。床：II B層下位・III層上面まで掘り下げた後、築



第104図 SB141・144・149カマド実測図

き固めている。埋没：単層であるが、覆土はII A層に対比される含礫泥層に似ており、その土が流れ込んで本址が埋没したと考えられる。遺物量は多く、鉄滓、土製の鞆羽口片も検出された。帰属時期：出土遺物の様相から8期に比定される。

SB141 位置：北部II 図版47、第104図、PL24

検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。SB140に切られる。カマド：石組カマドである。袖は地山を浅く皿状に掘り凹めた後、柱状の幼児頭大の礫を縦位に置き、灰色土を充填して作っている。袖石は先端部のほうで低く、付け根部のほうで高くなるように配されている。燃烧部奥に天井石が崩れ落ちた状態で残っていた。カマド内で黒色土器A椀片(3)・鉢片(6)、土師器甕B片(19)が出土した。床：III層上面まで掘り下げた地山面を床としている。全体に堅緻であった。また、西壁際では壁に倒れ掛かるような状態で人頭大の円礫が出土した。埋没：単層であるが、砂礫を多く含むため一過性の自然堆積と判断される。遺物出土状況：東壁側で鉄製の苧引鉄(65)が床面直上で出土している。覆土中の遺物量は多い。帰属時期：出土遺物の様相から7期に比定される。SB151の遺物と接合関係を有している。

SB142 位置：北部II 図版47、第109図

検出：II A層上面で灰オリーブ色土が落ち込む。SB143・144を切る。本址の覆土は周囲の住居址と異なった土色のため明確に区別できた。カマドの見られないものの規模の平坦な床をもつことから竪穴住居址と判断した。床：II B層下位からIII層上面まで掘り下げた後、築き固めている。埋没：単層ではあるが砂礫の混入が多いため自然堆積と判断される。帰属時期：出土遺物の様相から14期に比定される。

SB143 位置：北部II 図版47、第109図

検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。SB142・143に切られる。カマド：北壁中央下に火床のみ残る。燃烧部は壁を丸く掘り込んでいる。床：III層上面まで掘り下げた後、築き固めている。埋没：単層であるが、鶏卵大以下の円礫の混入が多く一過性の自然堆積と判断される。遺物量は少ない。帰属時期：出土遺物の様相から6期に比定される。

SB144 位置：北部II 図版50、第104・109図

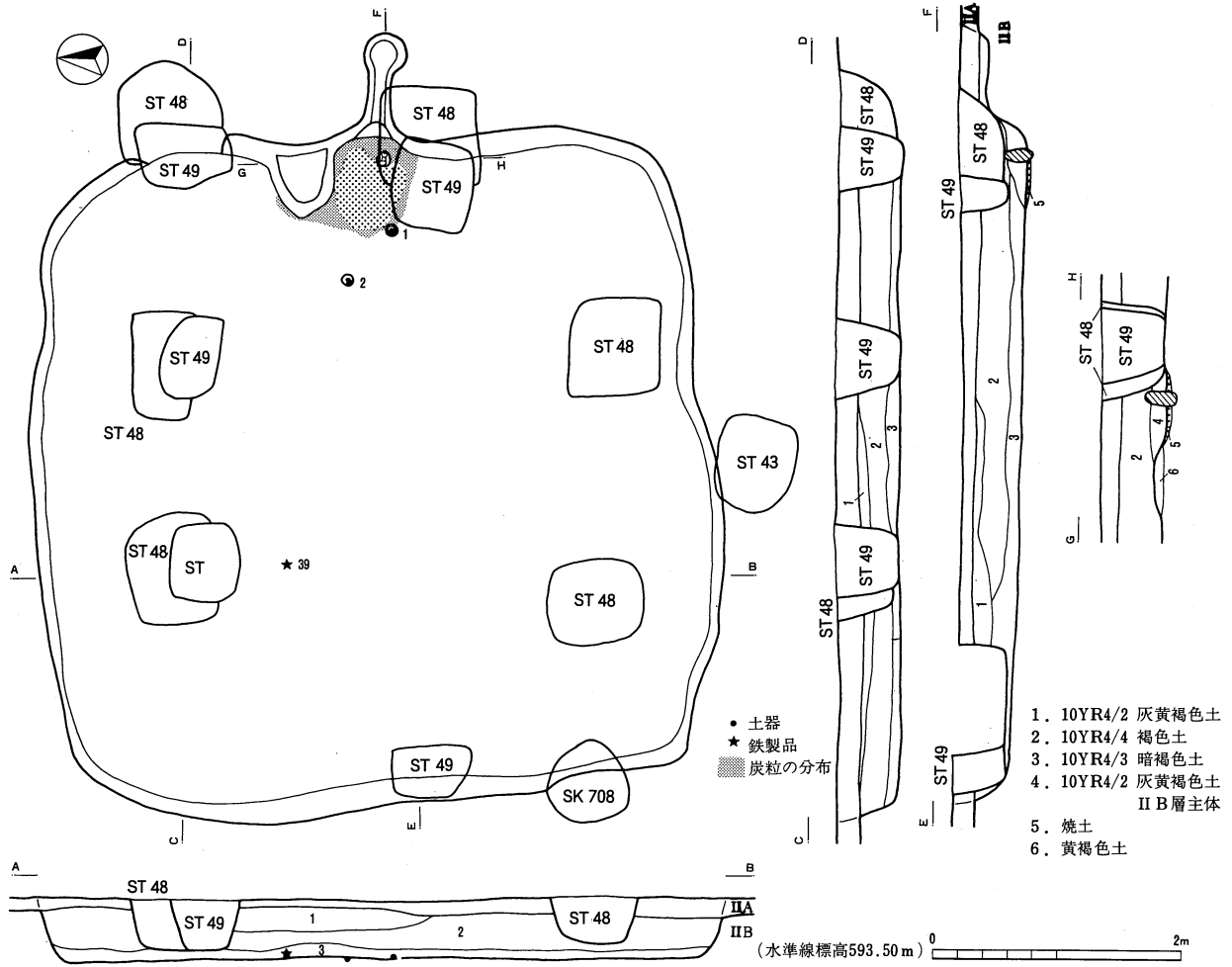
検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。SB143を切り、SB142に切られる。本址の覆土はSB143より灰色土の混入が多い。カマド：北壁中央下に火床のみ残る。右袖付け根部に袖石が一つ残っていた。燃烧部は壁を丸く掘り込んでいる。火床上には黒色土器A杯片(2)・椀片(4)、須恵器杯蓋片(10)が見られた。床：III層上面まで掘り下げた後、築き固めている。埋没：単層であるが砂礫の混入が多いことから自然堆積と判断される。カマド周辺で遺物の出土が多い。帰属時期：出土遺物の様相から8期に比定される。

SB145 位置：北部II 図版59、第105図

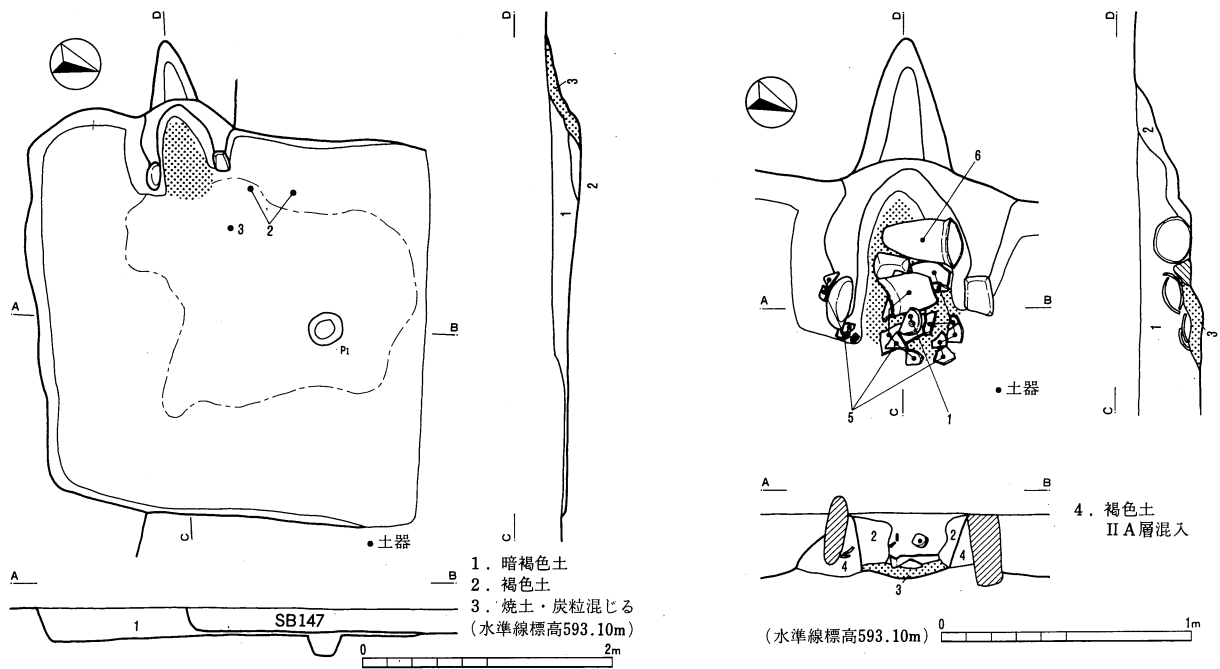
検出：II B層上面で灰褐色土が落ち込む。II A層上面検出のST43・48・49、II B層上面検出のSK708に切られる。カマド：粘土カマドである。左袖はST48・49に錯乱され残っていない。袖は床面に黄褐色土で作られている。火床中央に支脚石が残る。また、煙道先ピットが認められた。床：III層上面まで掘り下げた後、築き固めている。埋没：2分層される自然堆積土である。遺物出土状況：カマド前床面で須恵器杯蓋Aが2個(1・2)、また、床面中央で鉄製の刀子(39)が見られた。覆土上位で陶硯(110)が出土しているが、ST48・49他からの混入と考えられる。帰属時期：出土遺物の様相から1期に比定される。

SB146 位置：北部II 図版60、第106図、PL25

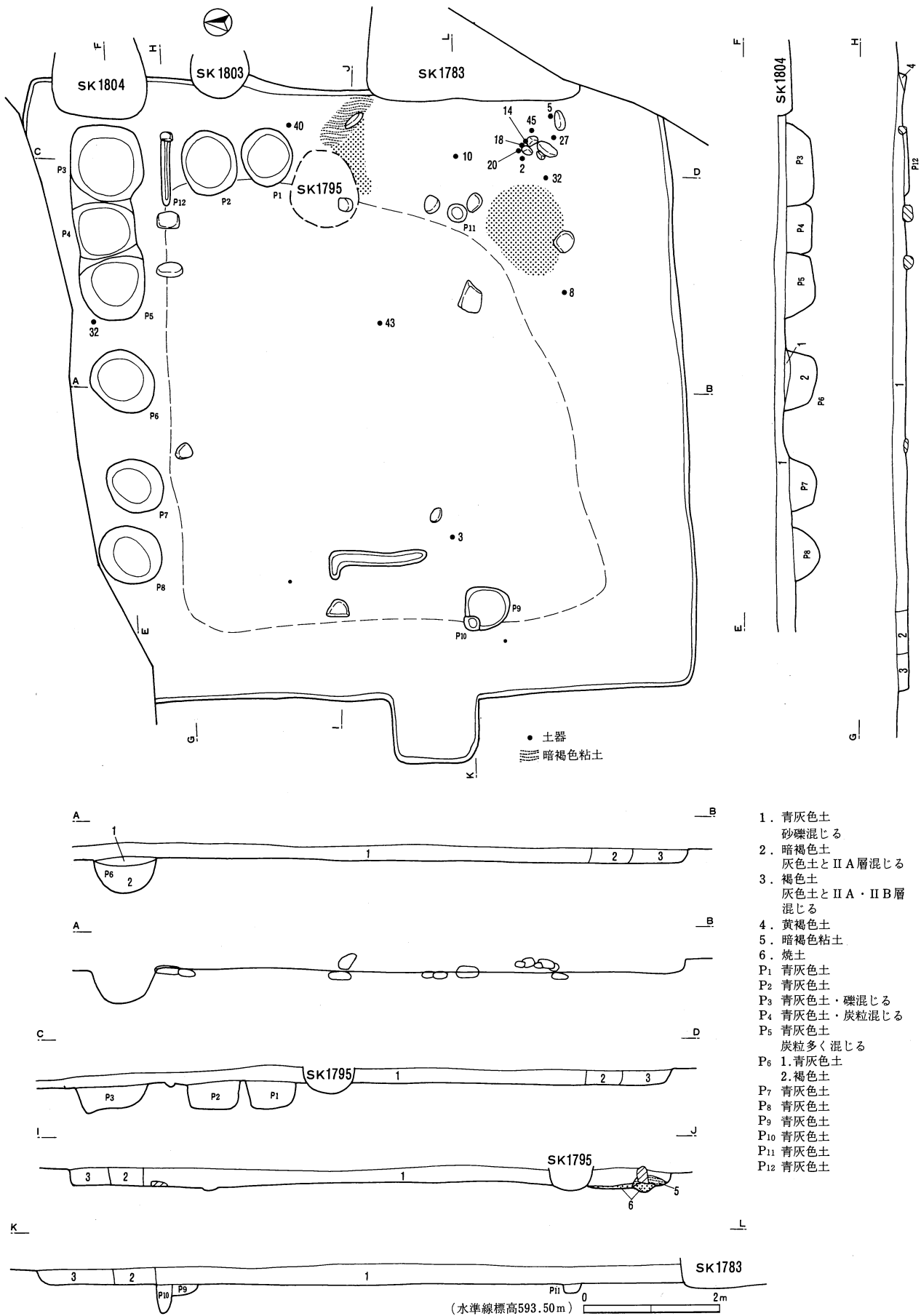
検出：II A層上面検出のSB147調査中に本址の存在が確認され、II B層上面でプランを確定した。II B層上面で明褐色土が落ち込む。カマド：粘土カマドであるが、両袖先端に礫を配している。袖の構築は地山を15cmほど掘り凹めた後、礫を配し黄褐色土を充填して作っている。火床中央で支脚石が倒れた状態で残り、その上には土師器甕A片(6)が完形で横倒しの状態で検出され、本来はカマドに掛けられていたもの



第105図 SB145実測図



第106図 SB146実測図・カマド実測図



第107図 SB147実測図

であろう。その前でも土師器甕A(5)がもう1個体分横倒しで出土し、その上には須恵器杯蓋A(5)が乗っていた。床：Ⅲ層上面まで掘り下げた後、壁際を除いて黄褐色土を入れ叩き締めている。床面北寄りに深さ17cmの落ち込みを確認している(P₁)。埋没：単層で埋め戻しと判断される。覆土は地山ⅡA層・ⅡB層の混じり合った土である。帰属時期：カマドを中心とした出土遺物の様相から1期に比定される。

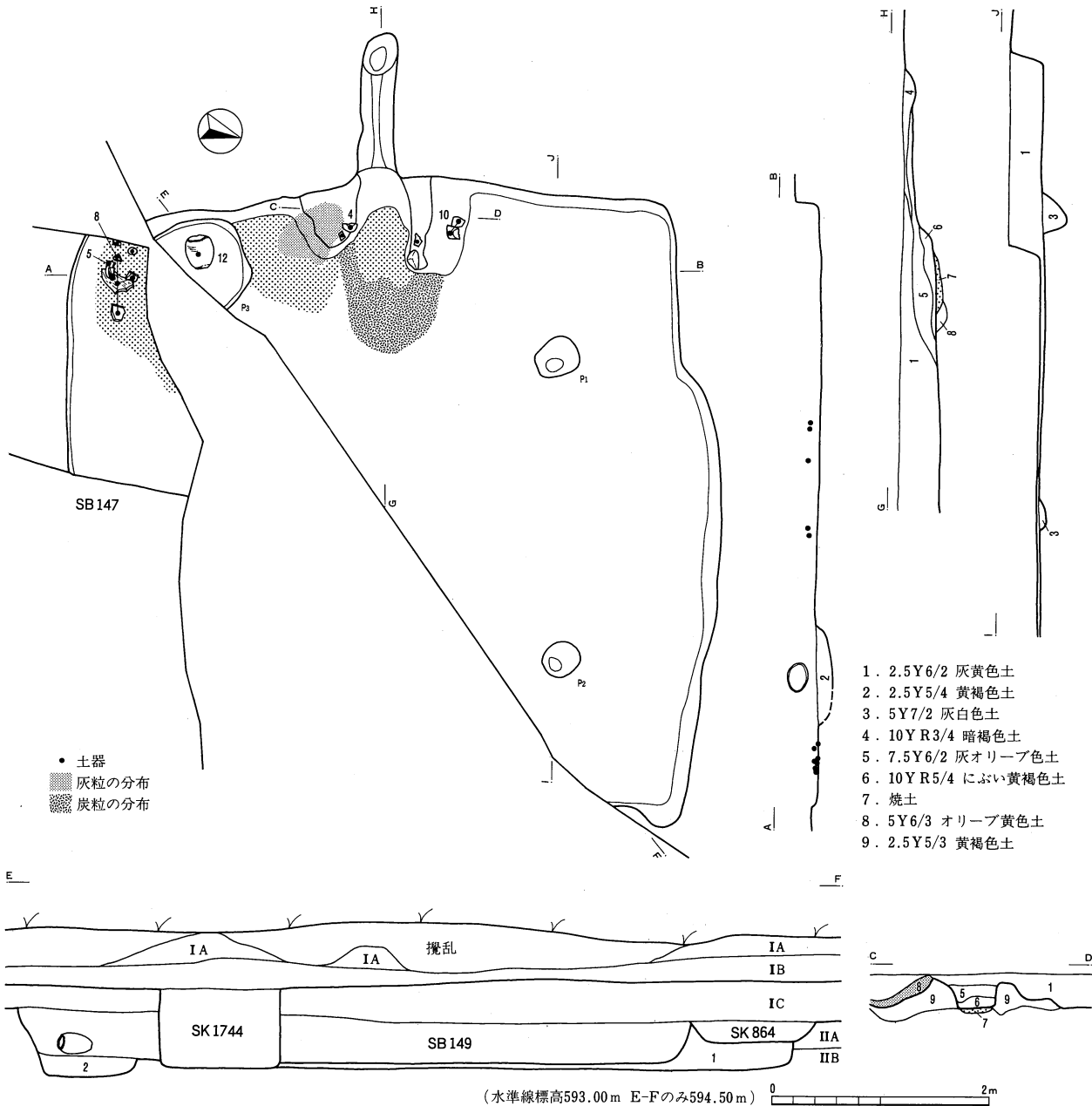
SB147 位置：北部Ⅱ 図版48、第107図、PL27

検出：ⅡB層上面で褐色土が落ち込む。土層断面ではⅠDf層上面から切り込む。中世の遺構のSK1783・1795・1803・1804に切られる。また、SB146・148を切る。SB149とも接しているが、その部分を含め本址の北側は調査区域外にかかるため切合い関係は確認に至っていない。カマド：石組カマドである。右袖が倒壊したと考えられる暗褐色粘土と焼損した人頭大の円礫が見られ、カマド前床面に焼土の堆積が見られた。礎石・溝状施設：床面に11個の人頭大の円礫が埋設されている(S₁~S₁₁)。北側および南側は東西方向に直線状に並び、カマド前でも直線状に並ぶように思われるがこちらは明確ではない。北側の礎石間(S₁~S₂)と西寄りの床面で溝状の落ち込みが見られ、SB151と同様の施設と判断される。柱穴：カマド近くと西壁張出し部近くに深さ15cmと40cmの円形プランの落ち込み(P₁₁・P₁₀)が見られ、その位置から柱穴と判断される。貯蔵穴：北側に6基、カマド左脇に2基、深さ30~45cmの円形の落ち込みが見られる(P₁~P₈)。P₄を除きそれらの覆土は住居址の1層と同様で、住居址使用時には開口していたものと判断される。床：ⅡB層下位まで掘り下げた後、壁際を除き青褐色土を入れ築き固めている。貼床の下で3基の土坑が確認された(SK839~841)。SK839・840の覆土は褐色土を呈し、多量の焼土・炭粒を含む。SK841では拳大以上の礫が出土し、礫間で墨書土器が出土した。これらの土坑は出土遺物の様相が本址に類似しているため、時期的に近接しており、本址の構築と何らかの関係を有していたものと考えられる。埋没：西・南壁に沿って帯状に地山ⅡA層・ⅡB層の混じった土の堆積が見られ、その分布状況から意図的に埋め戻された公算が高い。その内部では該期の通常の住居址の覆土と変わらず灰色土を主体としたの堆積が見られる。遺物出土状況：南東隅寄りで拳大の円礫と共に土師器杯A(2)、黒色土器A杯(5)・椀(14・18)・皿(20)、軟質須恵器杯(27・32)、土師器小型甕D(45)がほぼ完形の状態でまとまって出土しており、一括投棄されたものと判断される。他に黒色土器A杯(8)が床面直上で検出されたのを除き、出土遺物のほとんどが覆土中の遺物である。また、P₁内から黒色土器A杯(6)、軟質須恵器杯(36)、土師器小型甕D(44)、P₂内から須恵器杯A(24)、P₃内から黒色土器A椀(17)、P₄内から軟質須恵器杯(25)、P₅内から黒色土器A杯(7・9)・椀(15)・皿B(21)、軟質須恵器杯(31)、P₆内から黒色土器A鉢片(23)、軟質須恵器杯(34)が出土した。なお覆土中で鉄鏃(58)が出土した。帰属時期：出土遺物の様相から8期に比定される。

SB148 位置：北部Ⅱ 図版60、第108図、PL26

検出：ⅡA層上面検出のSB147・149調査中にその存在を知り、ⅡB層上面でプランを確定した。ⅠC層検出のSK1744、ⅡA層検出のSB147・149、SK846に切られる。東側は調査区外に当たる。カマド：粘土カマドであるが、袖先端に礫を配している。袖の構築は地山をやや掘り凹めた後、黄褐色土で作っている。深さ10cmの煙道先ピットが見られた。左袖外側から床面にかけて灰・炭・焼土を多含する灰色土が堆積していた。主柱穴：深さ19cm・8cmとやや浅めではあるが、楕円形プランの落ち込みを2基床面で確認した(P₁・P₂)。位置的に主柱穴と考えられる。諸施設：南西隅寄り床面で深さ25cmの落ち込みが見られ、土師器甕A(12)が横倒しの状態で出土している。覆土中には灰粒が混じり、貯蔵穴に類する施設と判断される(P₃)。床：Ⅲ層上面まで掘り下げた後、黄灰色土を入れ築き固めている。P₃周囲の床面で焼土が分布していた。埋没：単層で埋め戻しと判断される。遺物出土状況：南西隅下の床面で土師器鉢(5)・甕A(8)が出土した。遺物はカマド周囲にも散在している。帰属時期：出土遺物の様相から1期に比定される。

SB149 位置：北部Ⅱ 図版48、第104図



第108図 SB148実測図

検出：IIA層上面で灰色土が落ち込む。SK846に切られる。SK846の覆土のほうが灰色が濃い。IIB層上面検出のSB148を切る。東側は調査区域外に当たる。カマド：粘土カマドである。袖は床面に灰黄色土を使って作っている。床：SB148覆土下位まで掘り下げた後、灰色土を入れ築き固めている。埋没：単層ではあるが、IIA層土塊が混入するため埋め戻し土と判断される。覆土中で墨書土器(58)が検出された。帰属時期：出土遺物の様相から7期に比定される。

SB150 位置：北部II 図版50、第109図

検出：IIA層上面で灰色土粒が分布していた。地山と土色が、変わらず検出は困難を究めた。SB151・ST52に切られる。カマド：東壁中央下に火床のみ残る。火床上に人頭大の円礫が出土しており、袖石が倒壊したものと判断される。床：IIB層中位まで掘り下げた地山面を床としている。埋没：単層であり、IIA層を主体とした灰色土が混じる埋め戻し土と考えられる。帰属時期：切合い関係からSB151より古く

位置付けられるが、出土遺物の様相は7期である。

SB151 位置：北部II 図版50、第109～111図、PL27・28

後述するように本址は上下2面の床面を有し、それぞれ異なった施設・構造を有するため新旧2段階にわけて記述する。

新段階

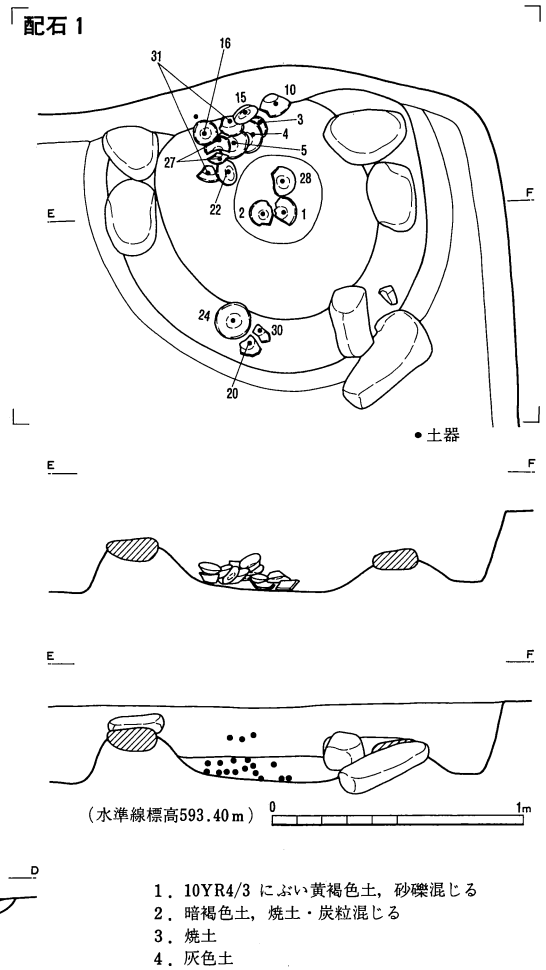
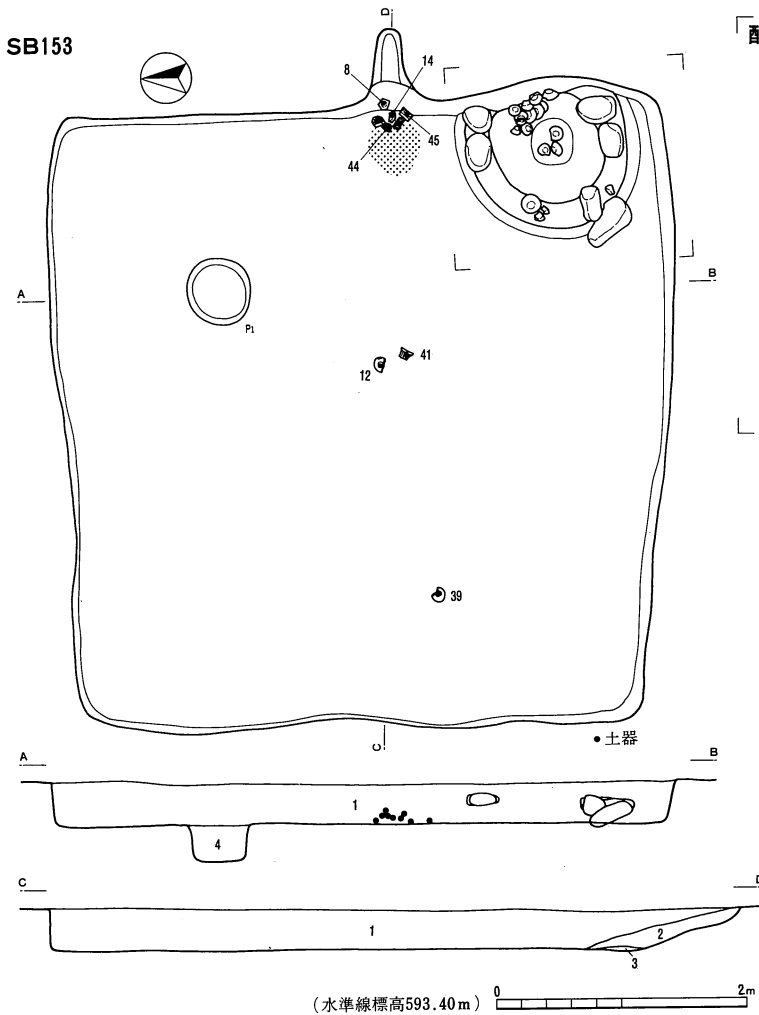
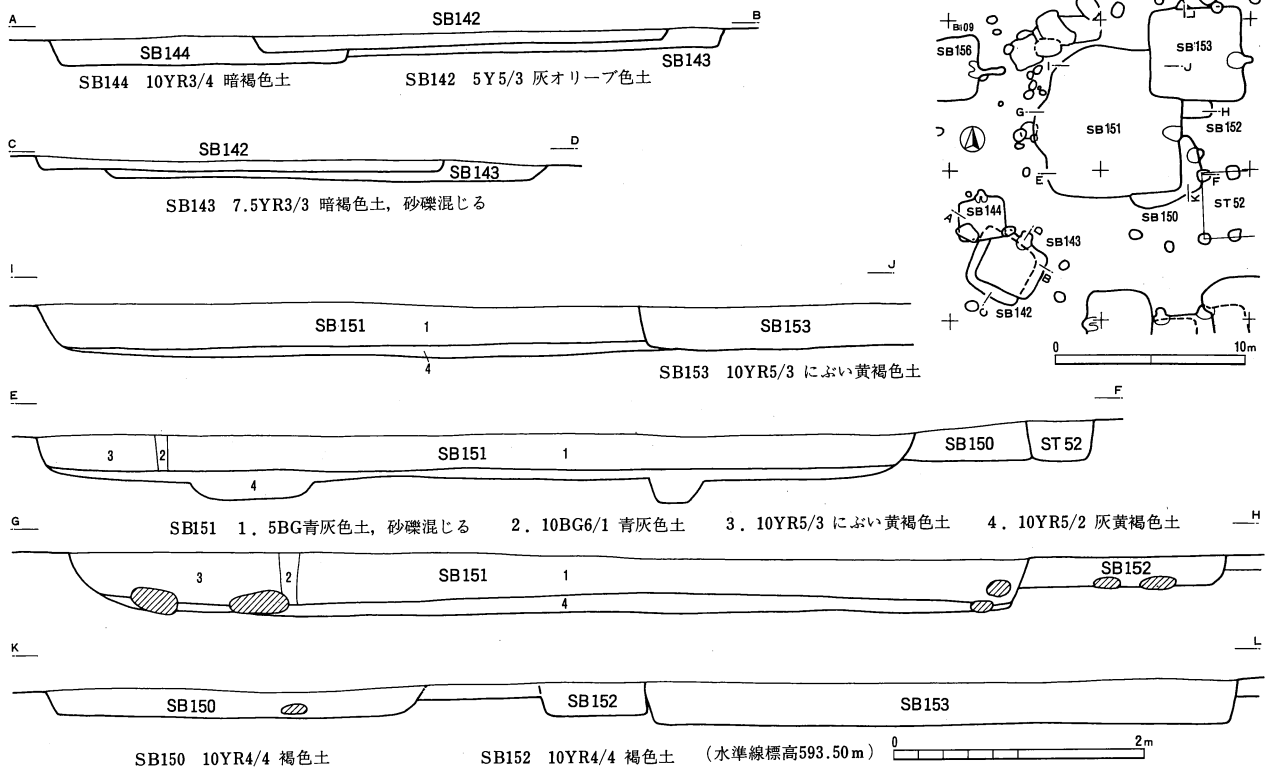
検出：II A層上面で灰色土が落ち込み、遺物が散布していた。SB153に切られる。また、SB150・152を切る。本址の覆土のほうに灰色が濃く、SB150・152の床面を切って本址は構築されている。平面形：東西6.85m南北7.50mを測る長方形を呈しているが、後述するように、カマドや礎石の配置から一辺6.85mの方形プランに復元され、北壁中央部は台形状に張出し、西壁中央部でも半円形状に張出すといった特異な構造をもつ住居址である。カマド：東壁中央に火床のみ残る。火床下には深さ20cmにおよぶ楕円形プランの掘り方が見られた。カマド前に床面から10cmほど浮いて焼損した礫が出土したことから本来は石組カマドであったと思われる。カマド前に床面から10cmほど浮いて焼損した礫が出土したことから本来は石組カマドであったと思われる。礎石・溝状施設：壁際には花崗岩の扁平なカマド袖石を転用した礎石が埋設されている(S₁～S₁₉)。西壁際では6mの間に大小7個の礎石が見られ、そのうち4個は1.85～1.90mの間隔に置かれている。また、南壁際では6mの間に6個の礎石があり、そのうち4個は西壁と同様な間隔で配されている。東壁・北壁側も残存する部分から想定して、西壁・南壁の礎石と対象を成すように埋設されていたと思われる。個々の礎石は下位床面上に据えられ、上位床面上で礫の上半部が露出するように埋設されている。カマド前にも南北報告に礫が並んでいるが、その配置には規則性は見られなかった。礎石間には深さ5cm弱の浅い溝状の落ち込みがみられ(P₁～P₈)、一部では針葉樹の丸太材らしき木質片と樹皮片が認められ、溝内には木材が横に埋設されていたと考えられる。床：古段階の床面に灰色土を主体とした土を入れて、築き固めている。礎石列の内側に堅緻面が認められた。北壁際張出し部の西側に地山の掘り残しによる高まりが、段状に残る。埋没：覆土は3分層される。床面の溝状施設の上には掘立柱建物址の柱痕部分と同様な粒子の細かく緻密な灰白色土がみられた(2層)。この部分と壁の間は地山と灰色土が混じり合った埋め戻し土と判断され、住居址使用時には埋め戻されており、その土を支えるために設けられた壁材の痕跡が溝状施設とこの2層と推察される。1層は他の住居址と同様に灰色土と砂礫の混じった埋め戻し土と判断される。遺物出土状況：西側張出し部覆土中にほぼ関係状態の黒色土器A杯(5)・碗(15)・皿(18・19)が、また、礎石S₁₂・S₁₃間に黒色土器A皿(21)が逆位で、他に、黒色土器A碗(14)、土師器小型甕D(44)、鉄製の鎌(15)、銅碗底部片(101)が床面直上で出土しているが、覆土中の遺物量に比べ床面直上のは極端に少ない。帰属時期：切合い関係からSB152より新しく、SB153よりは古く位置付けられるが、出土遺物の様相からは7期に比定される。

古段階

平面形：覆土の状態や床面の残る範囲から、新段階とほぼ同様な規模と考えられる。但し、新段階で見られた西壁の張出し下に古段階の床面は認められなかった。カマド：東壁中央下に掘り方が残っていた。覆土中には焼土・炭粒を多含している。支柱穴：4基の落ち込みが確認され、位置的に支柱穴と判断される(P₀～P₁₂)。P₁₀・P₁₂は深さ15cmと他に比べて浅く、特にP₁₀は不整形である。但し、どの柱穴も地山III層まで掘り抜いている。床：III層上位まで掘り下げた後、暗褐色土を入れて築き固めた貼床が中央部に残っていた。埋没：灰黄褐色土によって埋め戻されている。帰属時期：本段階に伴う遺物が少ないため確定できないが、切合い関係や遺構配置から7期に属するものと判断した。

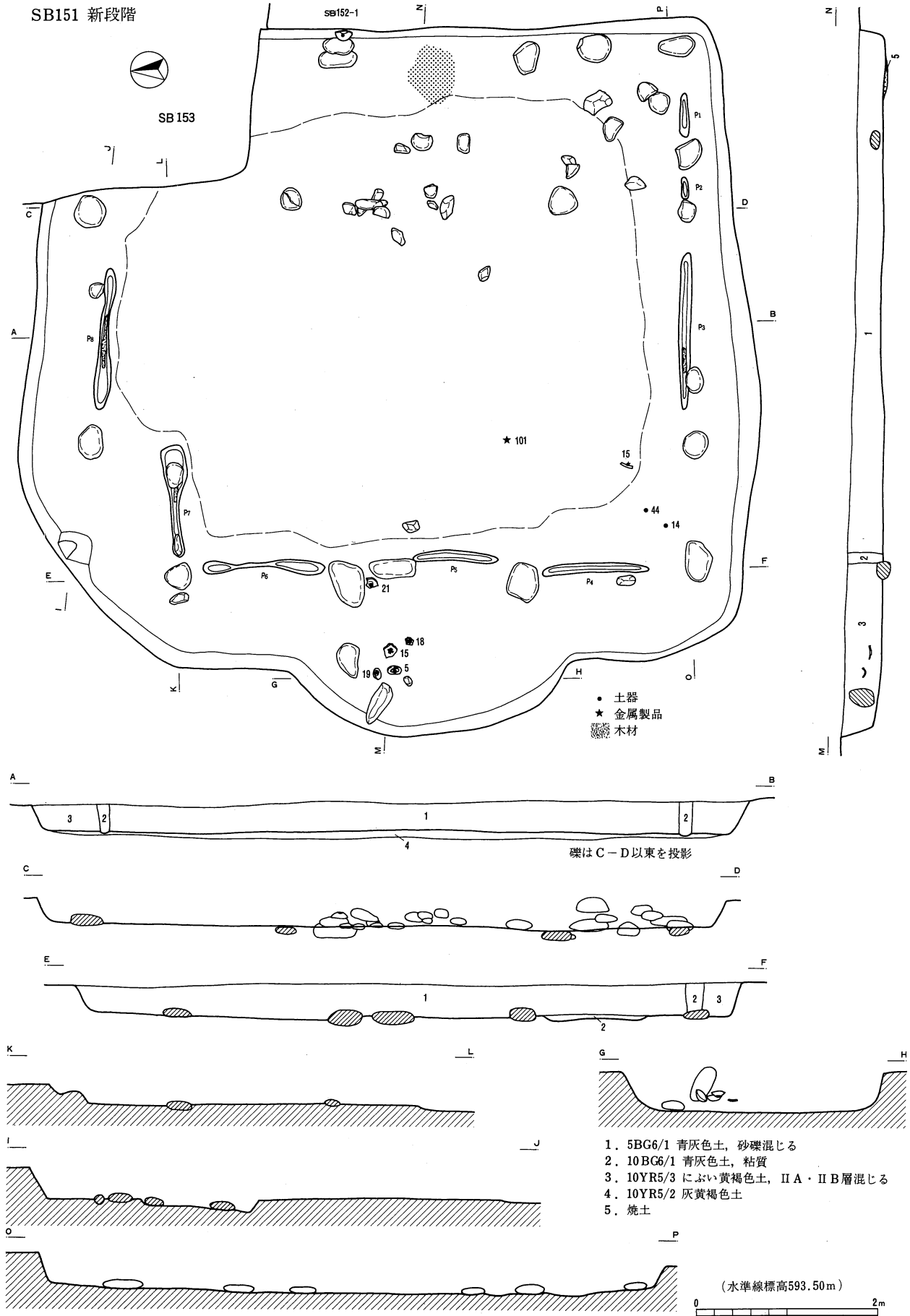
SB152 位置：北部II 図版50、第109図

検出：II A層上面で灰色土粒・炭粒が分布していた。本址の覆土にはII A層土粒の混入が多く検出は困難

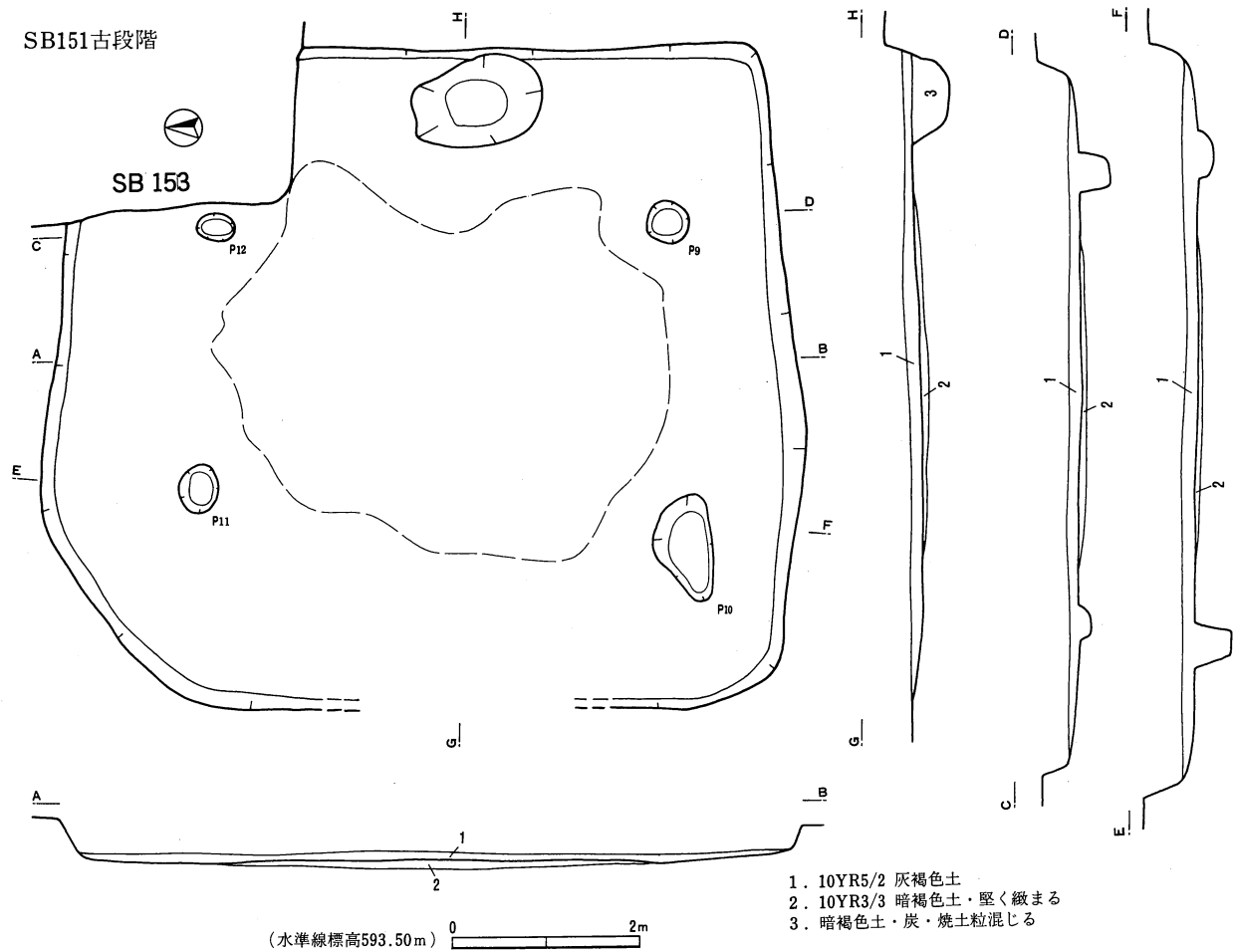


1. 10YR4/3 にぶい黄褐色土, 砂礫混じる
2. 暗褐色土, 焼土・炭粒混じる
3. 焼土
4. 灰色土

第109図 SB142~144・150~153土層断面図
SB153実測図・配石実測図



第110図 SB151実測図(1)



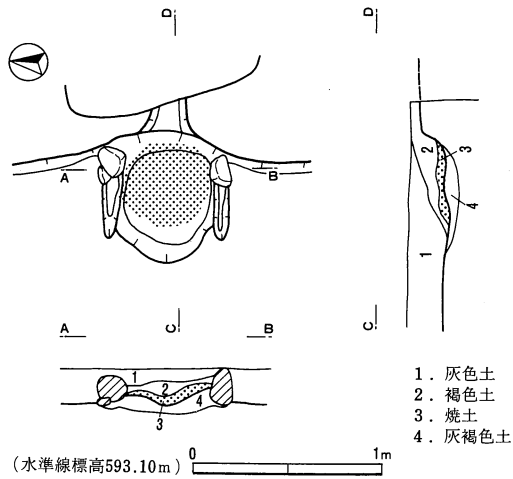
第111図 SB151実測図(2)

を究めた。諸施設：壁際床面にカマド袖石を転用したと思われる花崗岩の人頭大の円礫が2個置かれていた。床：II B層下位まで掘り下げた地山面を床としている。埋没：単層で灰色土とII A層がほぼ等量混じり合う埋め戻し土と考えられる。遺物出土状況：黒色土器A杯(1)と土師器小型甕D(2)が床面直上で出土しているが、その土器の1はSB151との境界部で出土しており、墨書「菟」がみられることからSB151に帰属する可能性がある。帰属時期：切合い関係からSB151より古く位置付けられるが、出土遺物の様相から7期に比定される。

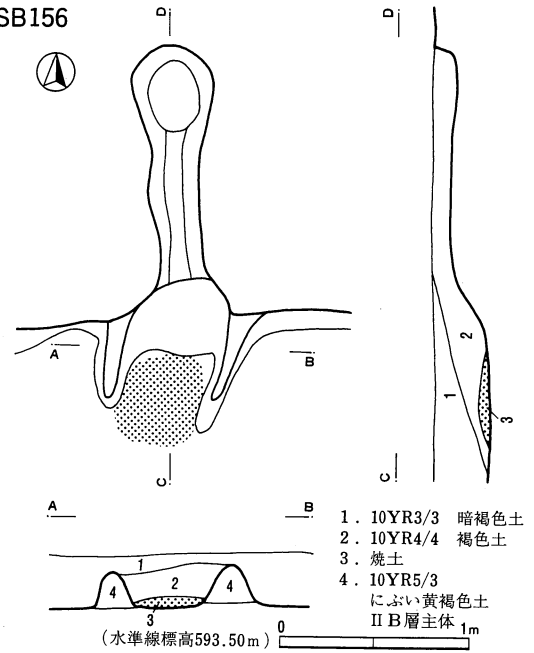
SB153 位置：北部II 図版50, 第109図、PL29

検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。SB151・152、SK931・941を切る。これらの遺構より本址の覆土のほうが灰色が濃い。カマド：東壁中央下に火床のみ残る。火床上から黒色土器A杯片(8・14)、土師器甕B片(44・45)が出土している。諸施設：北東寄りの床面で深さ30cmの落ち込みを確認した(P₁)。その位置から柱穴の可能性がある。また、カマド右脇から南東隅下にかけて、地山II B層を周堤状に掘り残した高まりの上に、花崗岩の扁平な人頭大の円礫を平らに据えて並べ、さらに、内側は床面より深さ5cmほど掘り凹められた施設を確認した(配石1)。配石1内では周堤上で黒色土器A碗(20)・皿(24)・軟質須恵器杯(30)が、中央部で黒色土器A杯(1・2)、軟質須恵器杯(28)が見られ、さらに東壁際では黒色土器A杯(3・4・10・15・16)・皿(22)・軟質須恵器杯(27・31)が正位で重なり合って出土しており、その出土状態から一括

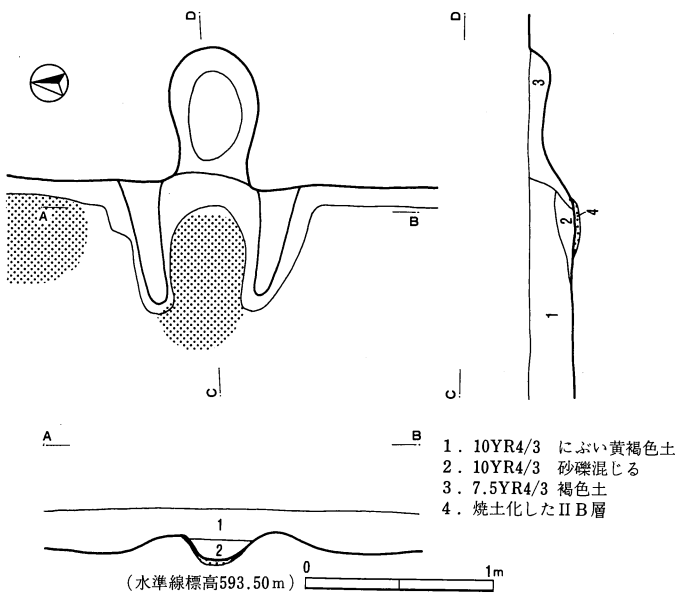
SB154



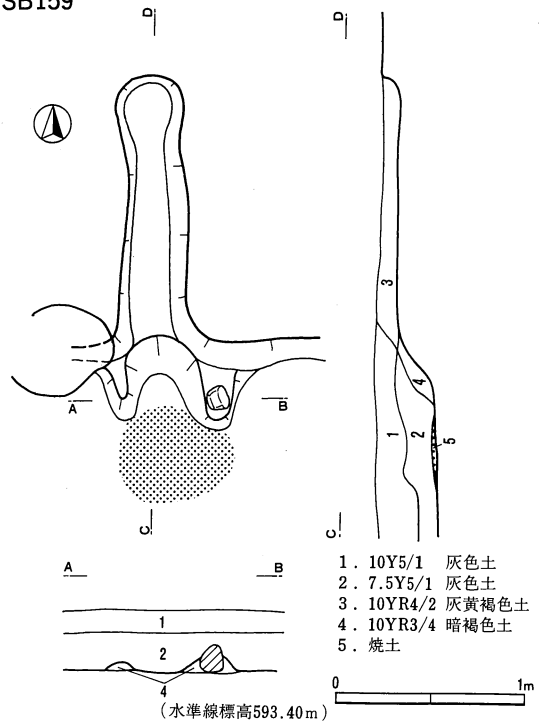
SB156



SB157



SB159



第112図 SB154・156・157・159カマド実測図

遺棄されたと判断される。なお、そのうち土器の10には墨書が見られた。床：III層上位まで掘り下げた後、築き固めている。埋没：単層であるが、地山の土粒の混入が見られないことから自然堆積と判断される。覆土中で鉄滓が見られた。帰属時期：切合い関係からSB151より新しく位置付けられるが、配石1を中心とした出土遺物の様相からは7期に比定される。

SB154 位置：北部II 図版49, 第112図

検出：II A層上面で灰褐色土が落ち込む。ST53に切られる。STの掘り方埋土は青灰色土を主体としており、本址とは明瞭に区別できた。カマド：粘土カマドであるが、袖付け根部に礫を配している。袖下の掘り方は深さ5cmの溝状を呈している。火床上には厚く焼土が堆積しており、焼土内から土師器甕B底部片

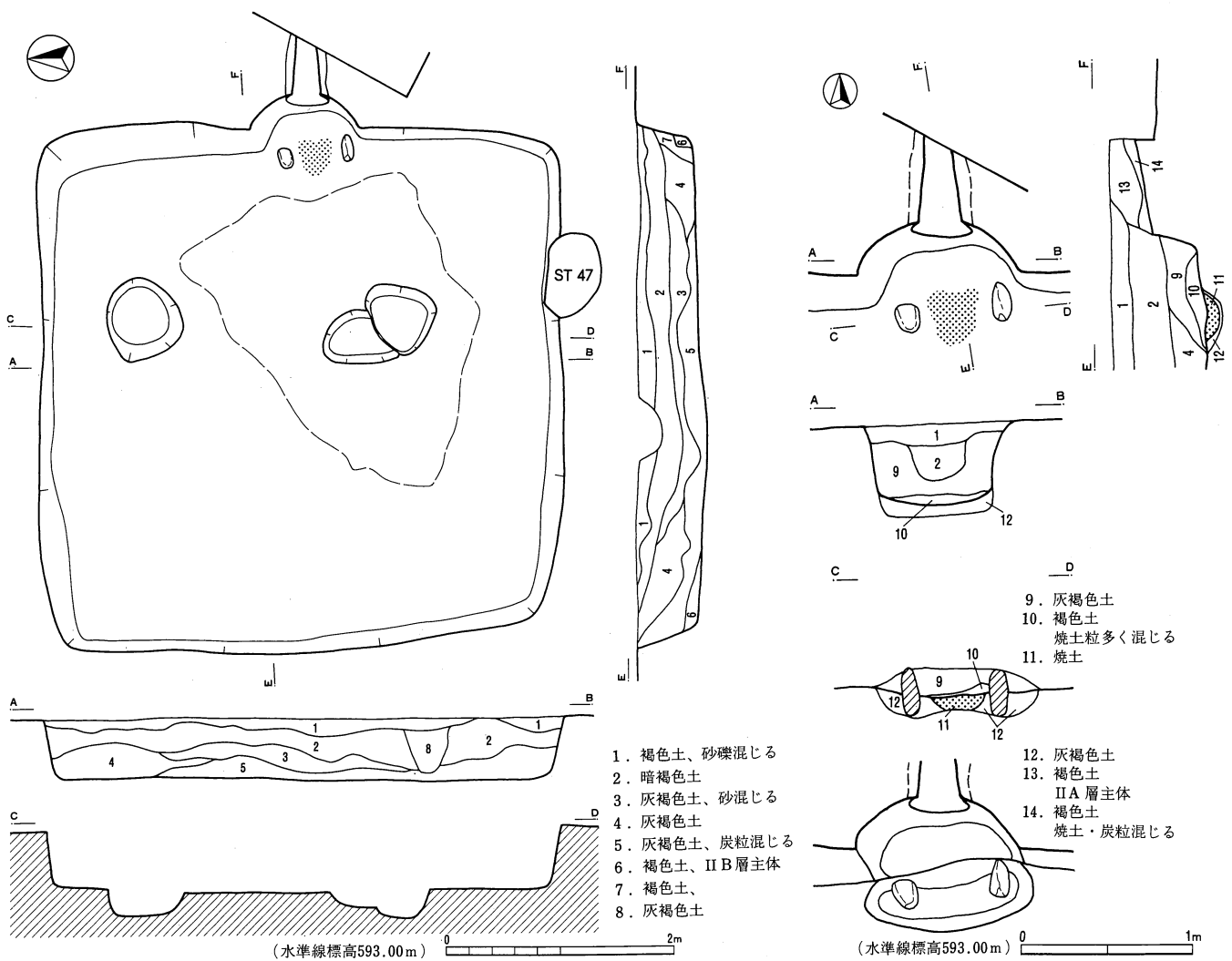
(1)が出土している。床：Ⅲ層上面まで掘り下げた後、築き固めている。壁際を除き堅緻であった。諸施設：カマド寄りの床面で深さ10cm(P₁)、深さ8cm(P₂)、深さ15cm(P₃)の落ち込みと、西壁寄り深さ9cm(P₄)、深さ10cm(P₅)の溝状を呈する落ち込みを確認している。埋没：2分層される自然堆積土である。遺物量は少ない。帰属時期：出土遺物の様相から4期に比定される。

SB155 位置：北部II 図版49, 第113図、PL30

検出：ⅡA層上面で灰褐色土が落ち込む。ST47、SD38、SK746~748・758に切られる。これらの遺構の覆土は灰色土を主体としている。カマド：粘土カマドであるが、両袖に一对の礫を配している。カマドの構築は地山を25cmほど掘り凹めた後、花崗岩の棒状の人頭大の円礫を縦位に置き灰褐色土で塗り固めている。床：Ⅲ層上面まで掘り下げた後、築き固めている。カマド前から床面中央部までは、暗褐色土を入れた貼床であった。柱穴：2基確認している。北側は深さ20cm、南側は深さ12cmと22cmのものが重複している。2基のみであるが、位置から見ても柱穴の可能性が高い。埋没：8分層される自然堆積土である。下層ほど粗粒が目立ち、かつ、粘性も強くなる。遺物量は少ない。帰属時期：出土遺物の様相から5期に比定される。

SB156 位置：北部II 図版49, 第112図、PL30

検出：ⅡA層上面で灰色土の混入する褐色土が落ち込む。カマド：粘土カマドである。袖は地山ⅡB層を



第113図 SB155実測図・カマド実測図

使って作っている。火床上には厚く焼土が堆積していた。床：Ⅲ層上面まで掘り下げた後、築き固めている。埋没：単層ではあるが、鶏卵大以下の円礫を多く含むことから一過性の自然堆積と判断される。遺物量は少ない。帰属時期：出土遺物の様相から4期に比定される。

SB157 位置：北部Ⅱ 図版60, 第112図

検出：ⅡB層上面で灰褐色土が落ち込む。ⅡA層上面で検出したSK812・815・816、ⅡB層上面で検出したSK820に切られる。本址の覆土よりこれら土坑の方が灰色が濃い土色であった。カマド：粘土カマドである。袖の構築は地山ⅡB層を高く掘り残し、また、火床は地山を深さ5cmくらい掘り凹めている。床：ⅡB層下位まで掘り下げた後、築き固めている。カマド左脇と南西寄り床面に炭・焼土粒の分布が見られた。埋没：2分層される。1層は自然堆積土である。2層は地山の土塊が混じることから埋め戻しと判断される。遺物量は少ない。覆土中で土製の鞆羽口片が出土している。帰属時期：出土遺物の様相から1期に比定される。

SB158 位置：北部Ⅱ 図版50, 第114図、PL30

検出：ⅡA層上面で灰色土が落ち込む。SK831・832に切られる。SKの覆土のほうが灰色が濃い。カマド：西壁中央下で火床のみ確認している。火床は深さ5cmほど掘り凹められている。床：ⅡB層下位まで掘り下げた地山面を床としている。全体に堅緻である。埋没：単層で埋め戻しと思われる。床面から覆土中位にかけてカマド袖石を含む拳大以上の円礫が多量に出土している。遺物出土状況：カマド左脇で黒色土器A杯(2・6)、土師器甕B片(21・22・23)がややまとまって出土しているほか、覆土中の遺物量は多い。鉄製の刀子(40)が東壁下で出土している。帰属時期：出土遺物の様相から7期に比定される。SB138の遺物と接合関係を有している。

SB159 位置：北部Ⅱ 図版50, 第112図

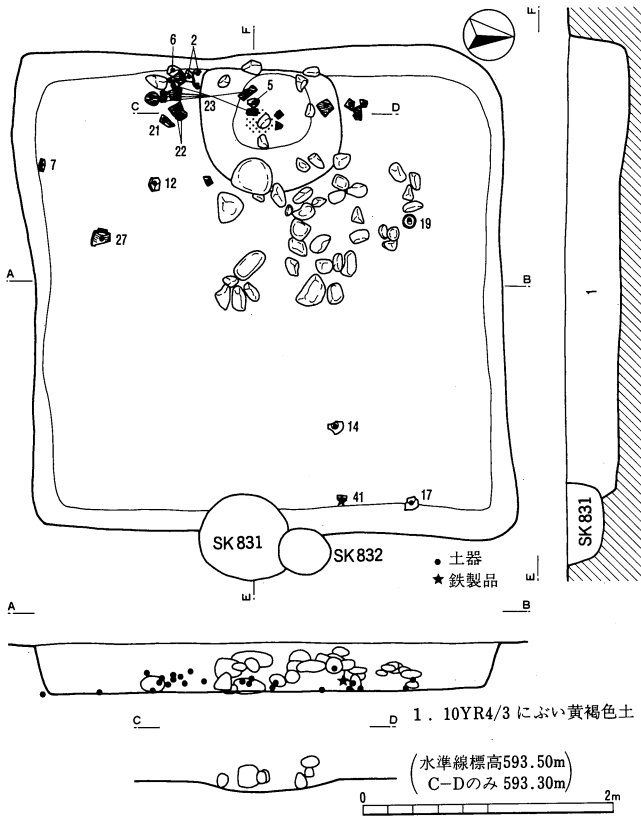
検出：ⅡA層上面で灰色土が落ち込む。SB158・ST57・SK970・SA17に切られる。本址の覆土はこれらの遺構に比べⅡA層土粒の混入が多い。カマド：粘土カマドである。袖は床面上に暗褐色土で作られている。床：ⅡB層下底まで掘り下げた後、築き固めている。埋没：2分層される。下層は粒子が均一で混入物がないことから自然堆積土であり、上層はⅡA層土塊が多く混じることから埋め戻されたものと判断される。帰属時期：出土遺物の様相から5期に比定される。

SB160 位置：北部Ⅱ 図版61, 第115図

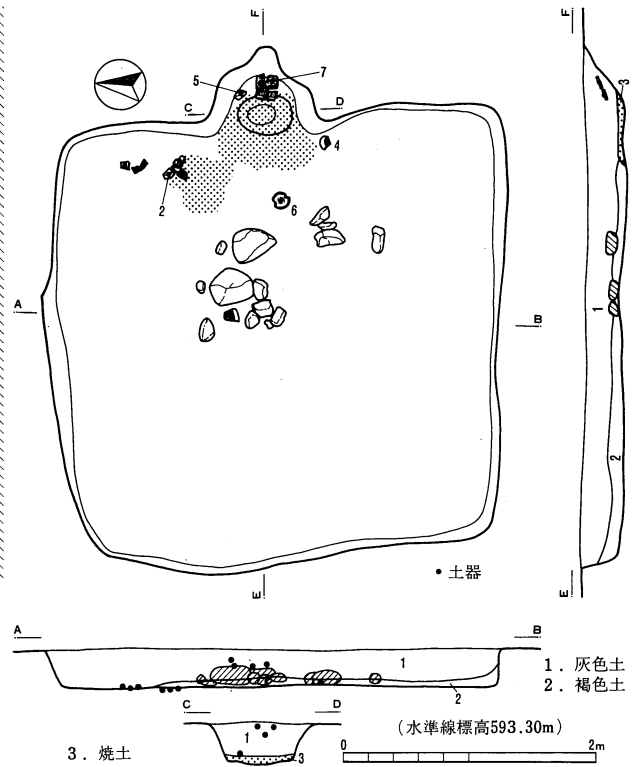
検出：ⅡB層上面で褐色土が落ち込み、遺物・炭粒が散布していた。ⅡA層上面検出のST55、SA13・14、SK1001~1003に切られる。カマド：石組カマドである。右袖に袖石が1個残るのみであるが、袖下には溝状の掘り方と、左袖に袖石の抜取り痕が2基残されていた。カマドは床面をやや掘り凹めた後作られている。床：Ⅲ層上位まで掘り下げた後、築き固めている。床土には水酸化鉄・マンガンの集積が見られた。北西隅・南西隅寄りの床面で炭粒の分布が見られた。埋没：単層で埋め戻しと判断される。住居址の中央部で床面直上ないしは床面よりやや浮いた状態で、拳大以上の円礫が多量に出土している。遺物量は少ない。帰属時期：出土遺物の様相から2期に比定される。

SB161 位置：北部Ⅱ 図版51, 第116図

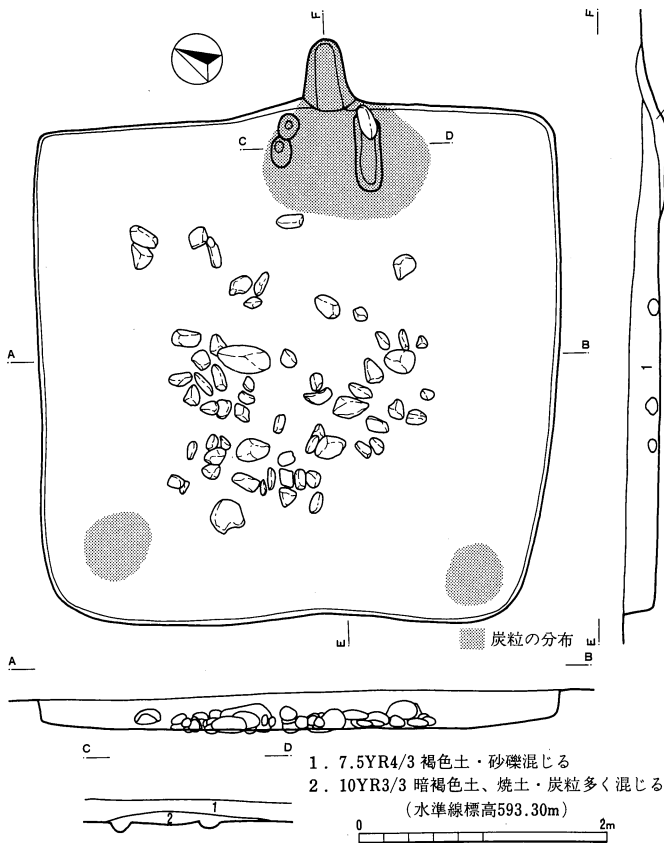
検出：ⅡA層上面で灰色土が落ち込む。カマド：東壁中央下に火床のみ残る。燃焼部は壁を大きく掘り込んでいる。火床上で黒色土器A杯片(7)が見られた。床：Ⅲ層上面まで掘り下げた後、築き固めている。埋没：2分層される。下層は淘汰が良いことから自然堆積土であり、上層はⅡB層土塊が混じることから埋め戻し土と判断される。カマド前の床面にカマド袖石を含む拳大以上の円礫が出土している。遺物出土状況：カマド周囲で黒色土器A杯(2)、須恵器杯A(4)、土師器小型甕D底部(6)が床面直上で出土。覆土中で鉄製の刀子(41)が検出された。帰属時期：出土遺物の様相から7期に比定される。



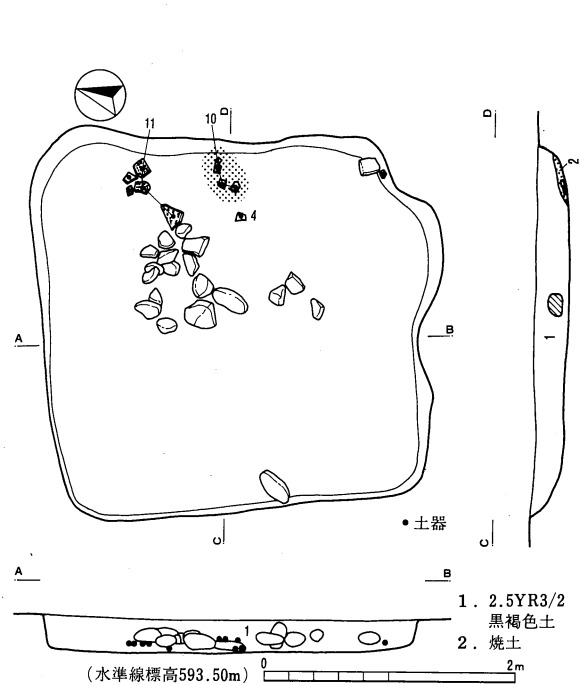
第114図 SB158実測図



第116図 SB161実測図



第115図 SB160実測図



第117図 SB163実測図

SB162 位置：北部II 図版54

検出：II A層対比の含礫泥層上面で褐色土が落ち込む。本址の大部分は調査区域外に当たり調査に至らなかった。床：III層上面まで掘り下げた後、築き固めている。埋没：単層で、灰色土と砂礫の混じる埋め戻し土と判断される。帰属時期：出土遺物の様相から7期に比定される。

SB163 位置：北部II 図版53、第117図、PL31

検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。SN 1を切る。本址の覆土の方が明るい土色であった。カマド：東壁中央下で火床のみ残っていた。火床上では土師器甕B片(10)が散在していた。床：III層上面まで掘り下げた後、築き固めている。埋没：単層である。覆土上位は灰色が濃い。住居址中央からやや東寄りの床面で拳大以上の円礫が多出している。遺物出土状況：カマド左脇で須恵器甕片(11)が礫と同じレベルで出土している。帰属時期：出土遺物の様相から7期に比定される。

SB164 位置：北部II 図版53

検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。ST61・SK1240に切られる。これらの遺構の方が本址の覆土より灰色が濃い。また、I C層面検出の土坑に2箇所切られている。カマド：東壁南寄りの床面上に焼土・炭粒の分布が見られることから、ここにカマドがあったと想定される。床：III層上面まで掘り下げた後、築き固めている。埋没：単層であるが、鶏卵大の円礫を多量に含むことから埋め戻しと判断される。遺物出土状況：西壁下の中央で黒色土器A杯(3)、南東隅下で鉄製の刀子(42)が床面直上で出土している。他に「東」などの墨書が見られるが、全て覆土中の遺物である。帰属時期：出土遺物の様相から7期に比定される。

SB165 位置：北部II 図版54、第119図

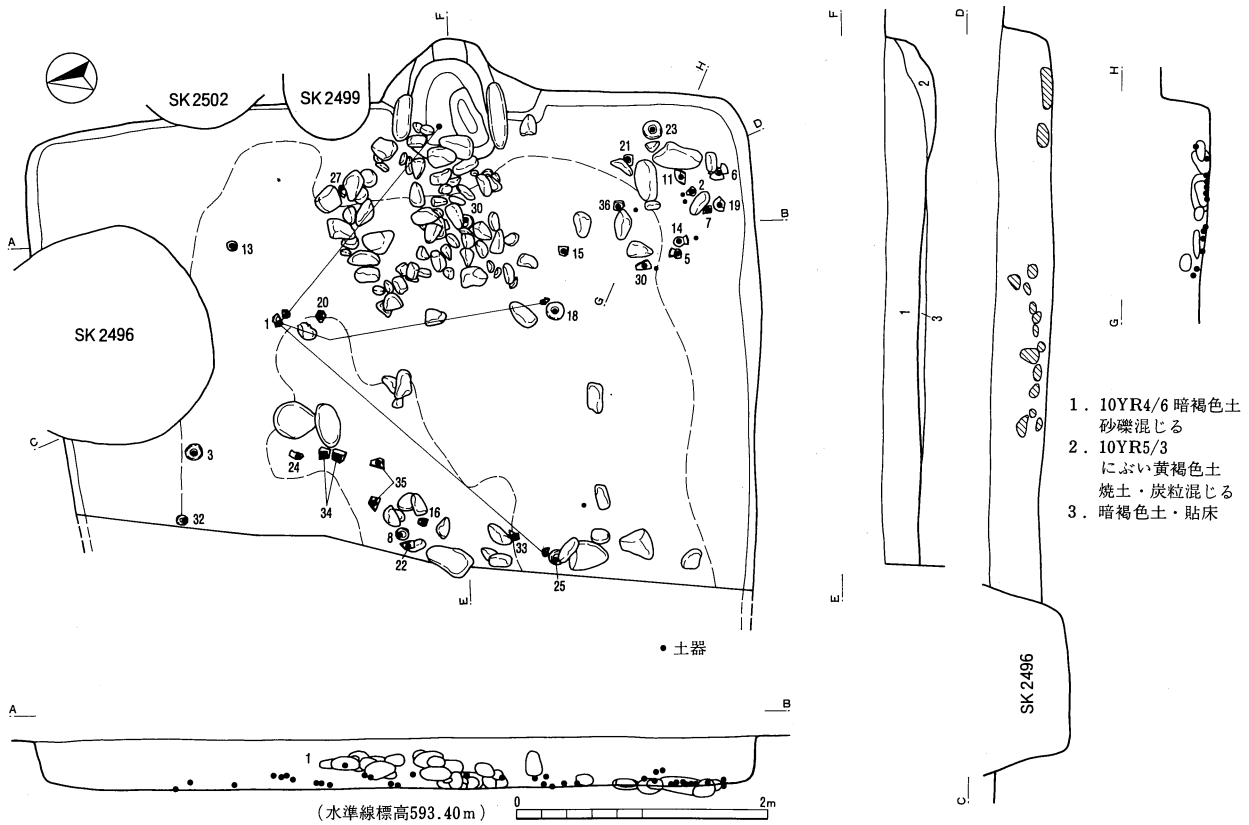
検出：II A層上面で灰色土粒を混えた暗褐色土が落ち込む。本址の大半は調査区外に属している。カマド：粘土カマドであるが、袖付け根部と先端に礫を配している。遺存状態は悪く、左袖は倒壊し右袖は袖石痕のみ残る。右袖内側には土師器甕A片(2)が張り付けられていた。床：III層上部まで掘り下げた後、築き固めている。埋没：単層で埋め戻しと考えられる。覆土中には砂礫を多く混じえる。遺物出土状況：カマド前で床面よりやや浮いて、土師器甕A底部(3)が横倒しの状態で出土している。覆土中で鉄製の刀子(43・44)、鉄滓が検出された。帰属時期：出土遺物の様相から1期に比定される。

SB166 位置：北部II 図版54、第119図

検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。カマド：石組カマドである。袖の構築は床面を深さ10cmほど掘り凹めた後、長方形の人頭大の円礫を縦長・縦位に置き暗褐色を充填している。天井石が崩れ落ちた状態が残る。床：II A層対比の含礫泥層中位まで掘り下げた後、褐色砂質土を厚さ10cmくらい入れている。床中央部に焼土・灰・炭粒が分布していた。埋没：単層で埋め戻しと判断される。覆土中にカマド袖石を含む人頭大の円礫が散在する。帰属時期：出土遺物の様相から8期に比定される。

SB167 位置：北部II 図版54、第118・119図、PL32

検出：II A層上面で暗褐色土が落ち込む。中世遺構のSK2496・2499・2502に切られる。また、西側は土層確認用試掘溝に切られている。カマド：石組カマドである。燃烧部は壁を掘り込んでいる。袖の構築は地山を深さ25cmくらい丸底形に掘り凹めた後、長大で扁平な円礫を横長・縦位に一對置き、そのほかはやや小形の礫を配し、その上に暗褐色土を充填している。燃烧部内から「太」の墨書の見られる黒色土器A杯(4)、土師器杯(1)が出土しており、特に、土師器杯は覆土中の遺物と接合関係を有している。配石：南西隅寄り床面で棒状の人頭大の円礫が9個見られた。規則的な配置とは言えないものの円環状に並べられているようであり、内部および周囲から黒色土器A杯(2・5・7・11)・椀(17)、軟質須恵器杯(19・21・23)の食器類が完形・半完形の状態で出土していることから、SB153と同様な施設と考えられる。床：III層上



第118図 SB167実測図

面まで掘り下げた後、暗褐色土を入れて平らにし、さらに褐色土を厚さ1cmほど入れて、叩き締めている。埋没：単層で埋め戻しと判断される。床面上から覆土下位にかけて拳大以上の円礫が多出している。礫はその出土レベルから住居址が若干埋没した後にはいったと判断される。遺物出土状況：遺物も礫と同様に床面からやや浮いた状態での出土例が多く、そのなかで黒色土器A杯(3・8)・皿(13)、軟質須恵器杯(18・20・25)、土師器小型甕D(32)はほぼ完形で、20・25は礫に押し潰された状態で出土している。なお、本址出土の食器には「太」「東」「秋」「一」などの多くの墨書や「田中」の刻書が見られた。また、鉄製の釘(55)が覆土中で出土している。帰属時期：出土遺物の様相から8期に比定される。

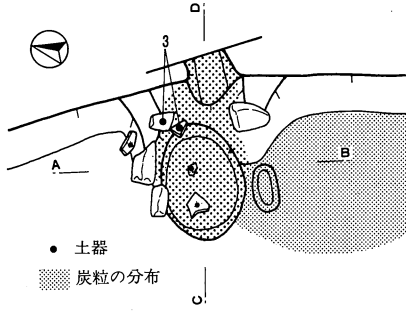
SB168 位置：北部II 図版55、第119図

検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。I C層上面でも礫や焼土粒が散布していた。中世遺構のSK2514・2515・2525・2527～2529・2531・2555に切られている。カマド：石組カマドである。左袖と火床のみ残る。カマド内から灰釉陶器椀(1)が逆位で、他に土師器杯片(1・2)が火床よりやや浮いて出土している。床：II A層下位まで掘り下げた後、築き固めている。埋没：2分層される自然堆積土である。遺物出土状況：西壁下床面で緑釉陶器椀(5)が、また、南西隅下床面で鉄製の釘(53)が出土している。帰属時期：出土遺物の様相から11～12期に比定される。

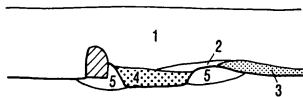
SB169 位置：北部II 図版55、第120図、PL31

検出：II A層上面で黄褐色土が落ち込む。中世遺構のSK2649・2650・2665・2666・2669・2670に切られる。カマド：SK2649・2650調査時に焼土・炭粒が多量に見られ、その周辺でカマド袖石が出土したことから北東隅に存在したものと判断される。床：II A層下位まで掘り下げた後、築き固めている。床中央から東寄りにかけて青灰色砂による貼床が見られる。埋没：単層であるが、覆土が浅いため詳細は不明である。遺物出土状況：東・北・西壁のほぼ中央の壁面に土師器皿(2・1・4)が伏せられた状態で出土してい

SB165

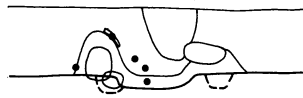


A ————— B

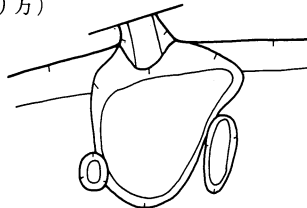


1. 7.5YR3/3 暗褐色土・砂礫混じる
2. 10YR4/2 灰褐色土
3. 7.5YR3/3 暗褐色土・炭粒多く混じる
4. 焼土・炭粒混じる
5. 7.5YR4/4 褐色土
6. 7.5YR3/3 暗褐色土

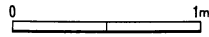
A ————— B



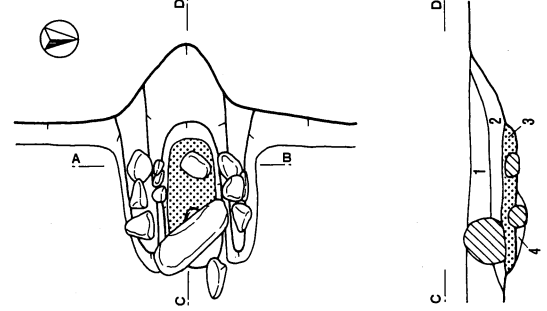
(掘り方)



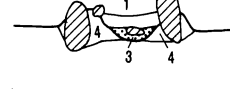
(水準線標高593.00m)



SB166

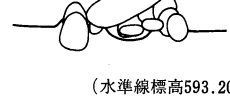


A ————— B

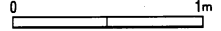


1. 5Y4/3 暗オリーブ色土
2. 暗褐色土
3. 焼土
4. 暗褐色土

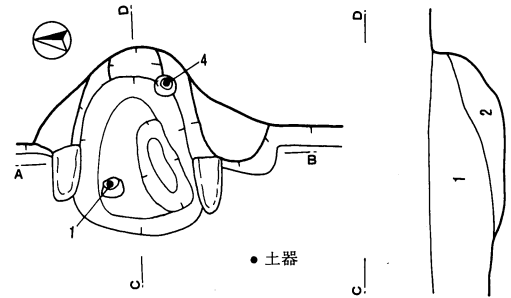
A ————— B



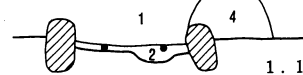
(水準線標高593.20m)



SB167

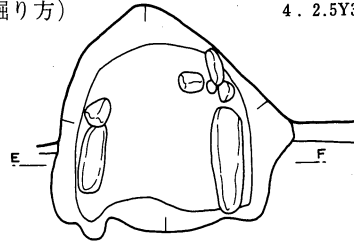


A ————— B

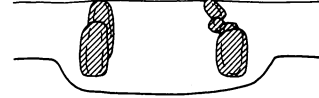


1. 10YR4/6 暗褐色土
2. 10YR5/3 にぶい黄褐色土
焼土・炭粒混じる
3. 10YR4/6 暗褐色土・堅い
4. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色土

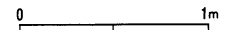
(掘り方)



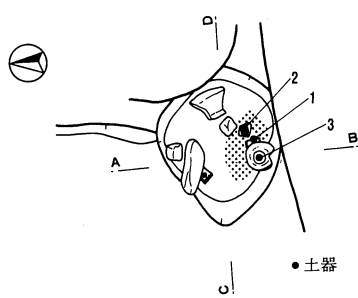
E ————— F



(水準線標高593.20m)



SB168



A ————— B

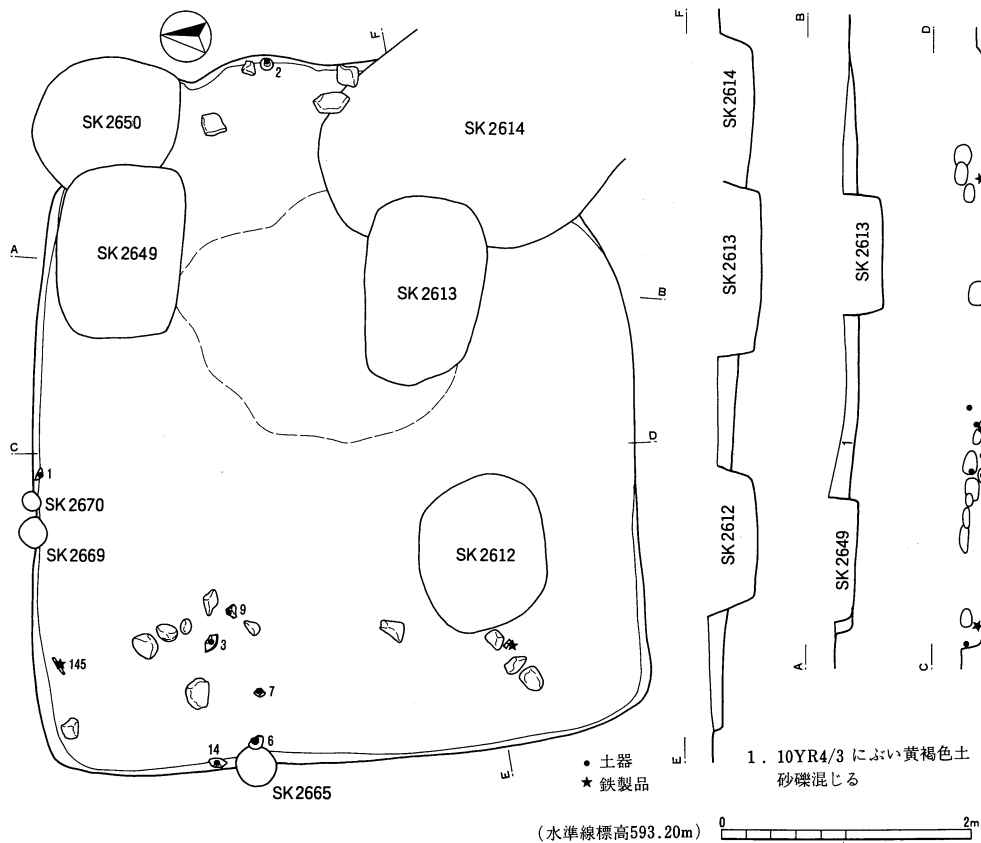


1. 5Y4/1 灰色土
2. 10YR4/2 オリーブ灰色土
3. 焼土

(水準線標高592.20m)



第119図 SB165・166・167・168カマド実測図



第120図 SB169実測図

る。また、西壁際床面で土師器皿(3・6)・椀(7)、灰釉陶器耳皿(9)が床面直上で出土した。覆土中の遺物量は少ない。帰属時期：出土遺物の様相から15期に比定される。

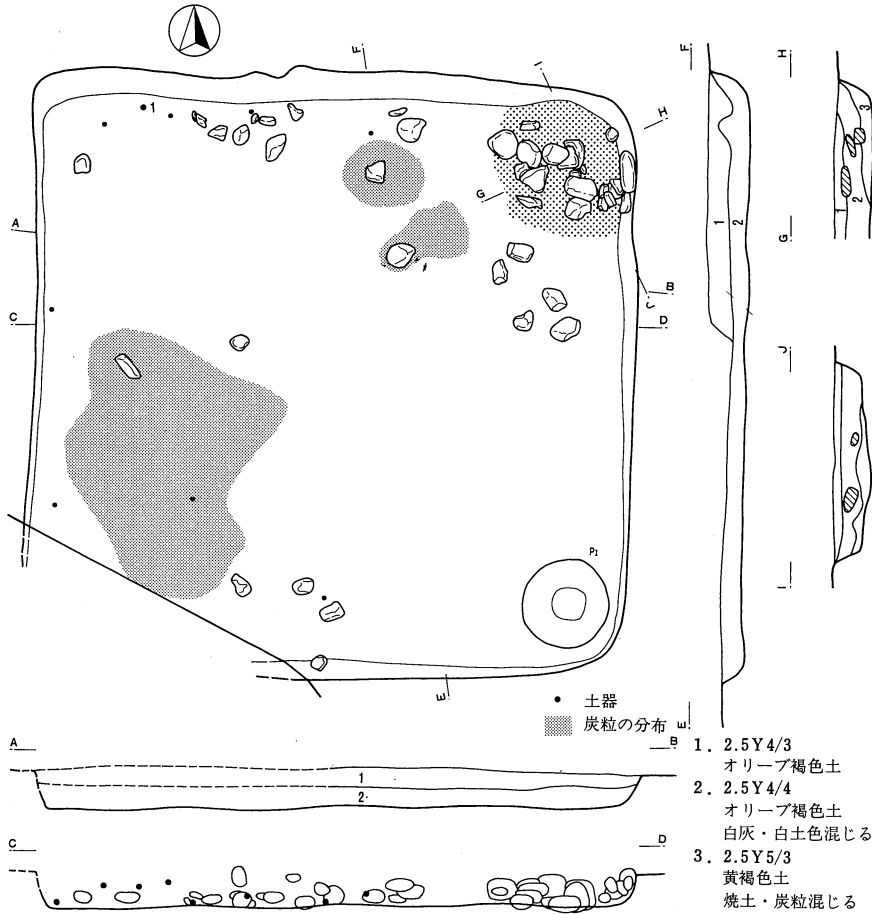
SB170 位置：北端 I 図版63

検出：I Dr層上面で黄灰色土が落ち込み、炭粒が散在していた。SK1270に切られる。SK1270の覆土のほうが青灰色が濃い。カマド：北東隅より床面に煤の附着した拳大の礫が3個、また、床面に焼土・炭粒が分布していることから、カマドはここに存在していたものと考えられる。床：I Dr層下位まで掘り下げた後褐色土を1cm程入れ、叩き締めている。埋没：2分層される自然堆積土である。2層には砂粒の混入が多い。遺物出土状況：北壁中央の壁面で床面からの高さ30cmの位置に灰釉陶器花瓶(7)が、また、その直下に土師器杯が2個(1・2)出土している。また、北東隅近くの壁面でも床面から15cmの高さで土師器杯が2個(3・4)出土した。これらの土師器杯は一方を正位に置き、他方を蓋のように逆位に被せており(2の上に1を、4の上に3を載せる)、そのなかに鶉卵大の円礫を3個ずつ入れるという特異な出土状況を示す。帰属時期：出土遺物の様相から14期に比定される。

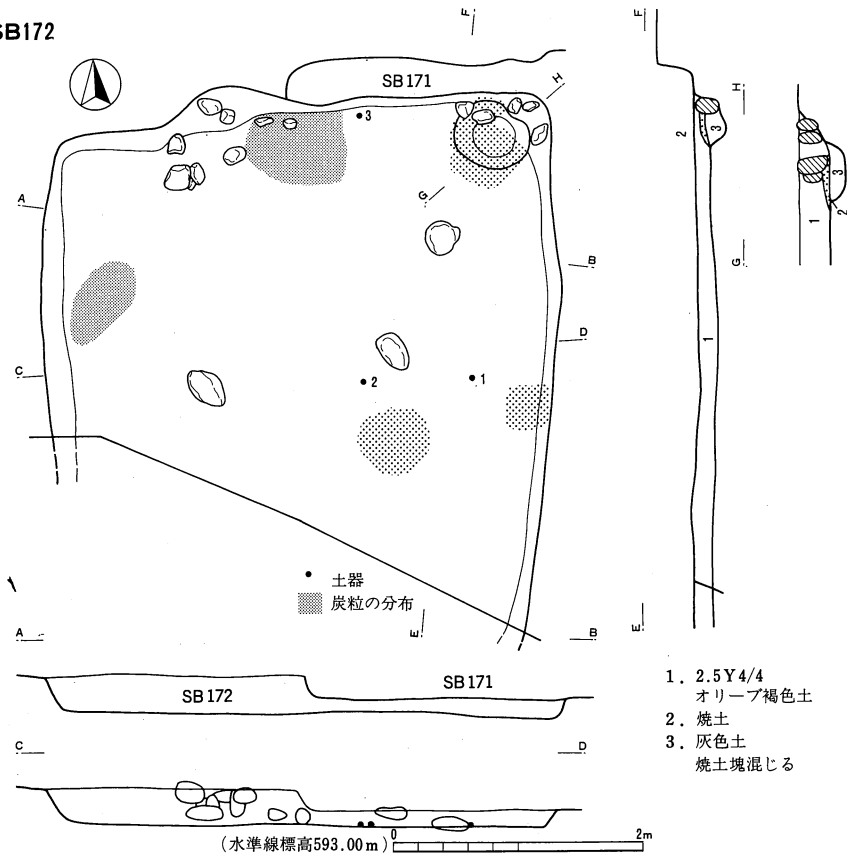
SB171 位置：北端 I 図版63、第121図、PL38

検出：I C層上面で黄褐色土が落ち込み炭粒が散布していた。SB172を切る。本址の覆土のほうが灰色が濃く、また、SB172覆土中に本址の床は構築されている。カマド：焼土・炭粒が床面に分布し、付近にカマド袖石を含む人頭大の礫が出土していることから北東隅にカマドがあったものと思われる。床：I Dr層上位まで掘り下げた後、築き固めている。カマド前と南西寄り床面に炭粒が分布し、厚い所では1cmに達する。諸施設：南東隅下床面に深さ3cmの凹みが見られ、内部には炭粒が多く混じっていた(P1)。埋没：2分層される自然堆積土である。土の粒子は細かい。遺物出土状況：山茶碗片(1)のほかは遺物量は極度に少ない。帰属時期：切合い関係からSB172より新しく位置付けられるが出土遺物の様相からは15期

SB171



SB172



第121図 SB171・172実測図

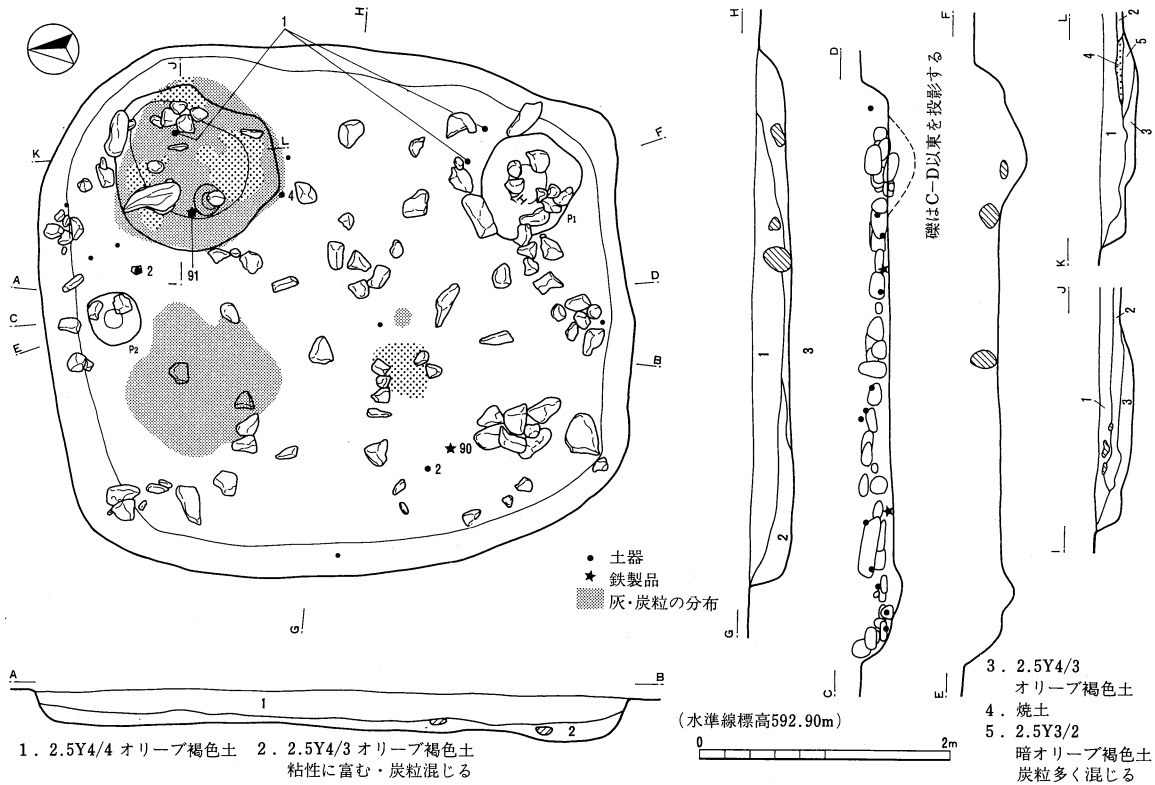
に比定される。

SB172

位置：北端 I

図版63、第121図

検出：I C層上面で黄灰色土が落ち込み、炭粒が散布していた。SB171に切られる。南側は土層確認用試掘溝によって切られている。カマド：北東隅から北壁沿いに人頭大の礫が4個並び、左袖の芯材と考えられる。右袖にも袖石が1個残っていた。火床上には厚く焼土が堆積し、その下に深さ10cmの落ち込みがあり、カマドの掘り方を示すものであろう。床：I Dr層下位まで掘り下げた後、築き固めている。床面で2か所に焼土粒の分布が見られた。また、北壁下と西壁下では床面より数cm浮いて、チガヤやヨシといった草木類を揃えて並べたと考えられる炭化物が認められた。北壁沿いの炭化物は東西方向に、西壁下では北東-南西方向に並行する茎の走向が観察された。炭化物の状態や出土レベルから屋根材が焼け落ちたと考えられる。埋没：単層で覆土中に灰色土塊が混じることから埋め戻しと判断される。北壁沿いを中心として床面よりやや浮いた状態で拳大以上の円礫が



第122図 SB174実測図

出土している。遺物出土状況：遺物量は極端に少ない。白磁碗の口縁部片(1~3)が床面直上で出土している。

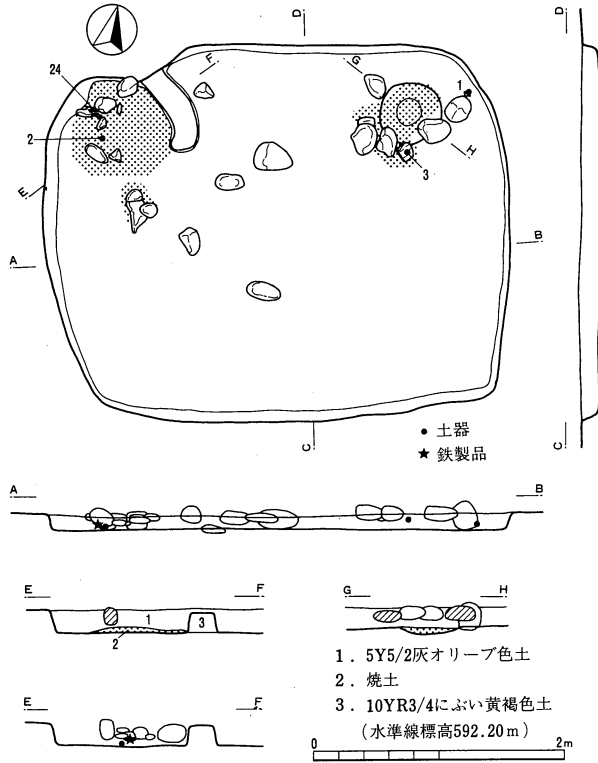
SB173 位置：北端 I 図版53、PL38

検出：I C層上面で灰色を呈する粘質土が落ち込む。SB174を切る。本址の覆土のほうが灰白色がより鮮明であった。隅丸長方形プランを呈し、カマド等の施設が見られないことから竪穴住居址と認定するには疑問も残るが、平坦な床面をもつことや、覆土の状況が周囲の15期の住居址に似ていることから竪穴住居址と認定した。床：I Dr層中まで掘り下げた後、築き固めている。埋没：2分層される自然堆積土である。上層中に砂粒が集中する部分が見られた。遺物出土状況：用途不明の鉄製品(97)が覆土中で出土したほかは遺物は見られなかった。帰属時期：SB171・174と同様な覆土であることから15期と考えられる。SB174を切って構築されることから中世に下る可能性もある。

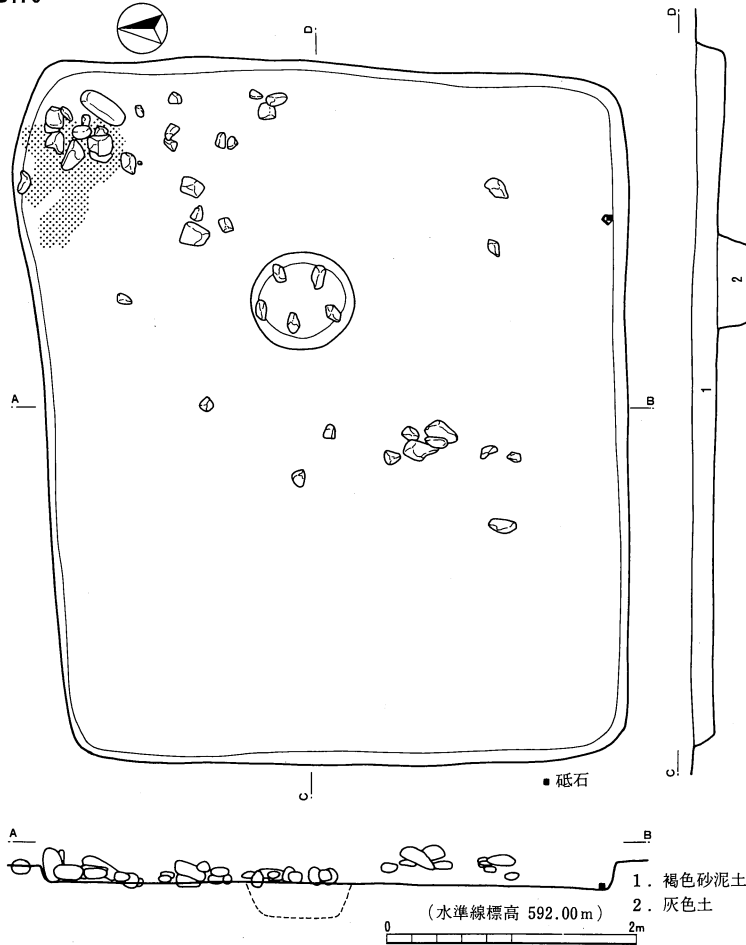
SB174 位置：北端 I 図版53、第122図、PL39

検出：I C層上面で灰白色土塊・炭粒が混じる黄灰色土が落ち込む。SB173に切られる。SB173の覆土のほうが黄色が濃い。カマド：北東隅下床面に焼土・炭・灰粒が厚さ5~7cm堆積しており、被熱して赤変した人頭大の円礫も3個見られることから、本来は石組カマドであったと判断される。焼土の分布下には深さ12cmの落ち込みが存在している。床：I Dr層上位まで掘り下げた後、築き固めている。諸施設：北壁際と南東隅寄りの床面に深さ10cmと20cmの播鉢状の落ち込みを確認している(P₁・P₂)。P₂内には礫が入り込んでいる。埋没：3分層される。1層はI C層を基調とした自然堆積土である。2層は炭粒を多含し、灰白色土塊を多く混じえることから埋め戻し土と判断される。覆土下位から中位にかけて拳大から人頭大の円・角礫が多量に出土している。礫は住居址内に散発的に分布している。床面中央で焼土が見られ、北西寄りでは床面より数cm浮いて炭粒が分布していることから、本址は焼失した住居の可能性もある。遺物出土状況：遺物は礫と同様に床面よりやや浮いて出土しているが、量は少ない。帰属時期：出土遺物の

SB175



SB179



第123図 SB175・179実測図

様相から15期に比定される。

SB175 位置：北端 I

図版64、第123図、PL39

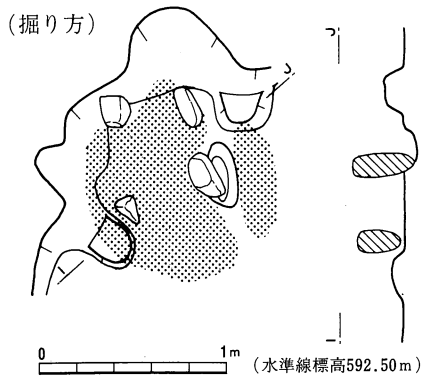
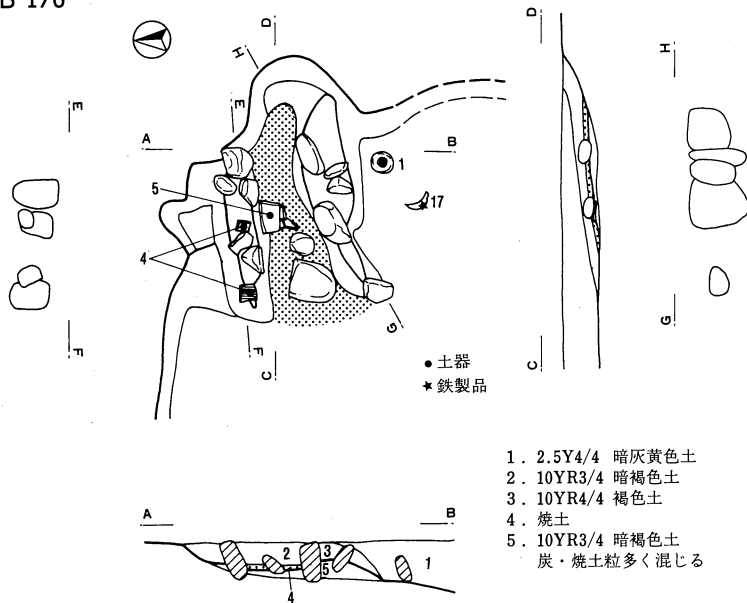
検出：I C層上面で黄灰色土が落ち込み、炭粒・人頭大の円礫が散在していた。覆土は水田土壌化され、マンガン・水酸化鉄の班紋が見られた。カマド：南東隅に設けられた石組カマドである。右袖はにぶい黄褐色土で作られ、付け根部に円礫を配している。左袖部分にも礫が見られるが構築物としては捉えられなかった。火床上には焼土の堆積が見られ、土師器碗片(2)、鉄製の刀子(24)が出土している。また、南西隅下では径50cm深さ5cmの皿状の落ち込みが見られ、内部は焼土で満たされていた。この周囲では人頭大の礫や土師器羽釜片(3)も出土しておりカマドに類する施設とも考えられる。埋没：単層である。床面直上および床面よりやや浮いて人頭大の円礫が数個出土している。遺物量は少ない。帰属時期：出土遺物の様相から15期に比定される。

SB176 位置：北端 I

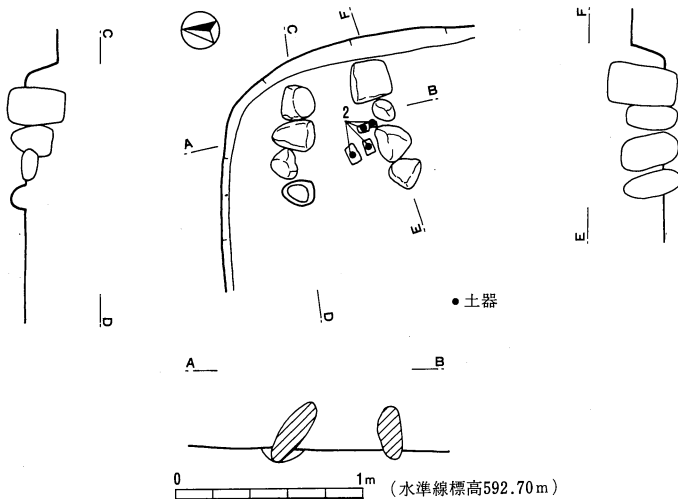
図版64、第124図、PL39

検出：I C層上面で黄灰色土が落ち込む。SK2792に切られる。SKの覆土は本址より黒味を帯び、I B層土粒が混入していた。また、本址の覆土は水田土壌化されている。南西部は土層確認用試掘溝によって切られている。カマド：北東隅に設けられた石組カマドである。カマドの中軸は北壁に対しやや南に傾く程度で、住居の中央には向いていない。カマドの構築は地山を一对土手状に掘り残し、その内側に棒状の円礫を縦列に置いている。次に炭・焼土粒を多

SB 176



SB 177



第124図 SB176・177カマド実測図

含する土(5層)の存在から、袖構築以前に火を焚いたと判断され、その後に黄褐色土を充填して袖・火床と住居址床面を同時に作っている。火床上で土師器羽釜片(5)が、カマド右脇で土師器杯(1)、鉄製の鎌(17)が出土している。また、5層中でも土師器杯(2)が見られた。床：I C層対比の含礫泥層上位まで掘り下げた後、黄褐色土を入れて叩き締めている。北・西壁際は地山面を床としている。埋没：単層であるが、粒子が均一で混入物が見られないことから自然堆積と判断される。遺物量は少ない。帰属時期：出土遺物の様相から15期に比定される。

SB177 位置：北端II

図版64、第124図、PL40
 検出：I C層上面で褐色砂質土が落ち込む。西側をI B層上面検出のSD82に切られる。本址の覆土は水田土壌化されていた。カマド：北東隅に設けられた石組カマドである。カマドの中軸は北壁に対してやや南に傾いている。明確な火床は認められない。袖の構築は棒状の人頭大の円礫を縦位に並べており、また左袖先端にも深さ10cm弱の袖石痕が残っていた。カマド内にも袖芯材と考えられる礫がみられ、土師器鉢片(2)が出土した。床：II A層対比の含礫泥層上位まで掘り下げた後、築き固めている。床中央から南寄りの床面が焼土化していた。また、南東隅下床面には炭粒の分布が見られた。埋没：単層で埋め戻しと

判断される。床面直上ないしは床よりやや浮いた状態で拳大以上の礫が散発的に出土している。帰属時期：出土遺物の様相から15期に比定される。

SB178 位置：北端II 図版64、第124図

検出：I C層上面で褐色砂質土が落ち込む。SB179に切られる。床：II A層上位まで掘り下げた後、暗褐色砂質土を入れて叩き締めている。埋没：単層で青灰色粘土塊を混入することから埋め戻しと判断される。覆土中には拳大から人頭大の礫が散発的に入る。遺物出土状況：北壁寄り床面で土師器坏(1・2)が見られたほかは遺物量は極端に少ない。帰属時期：出土遺物の様相から14期に比定される。

SB179 位置：北端II 図版64、第123図

検出：I C層上面で褐色砂泥土が落ち込み：人頭大の礫が散布していた。SB178を切る。本址の覆土のほうが褐色が濃く、砂礫の混入が少ない。カマド：北東隅下に火床のみ残っており、袖石等の構築物は見出されなかった。付近には袖石に用いたと思われる人頭大の円礫が散在している。カマド付近の壁はやや掘り込まれ、住居址全体のプランは北東隅で膨らみを有している。床：II A層上位まで掘り下げた後、壁際を除き暗褐色の含礫砂泥土を入れて、叩き締めている。諸施設：床中央からやや南寄りに深さ15cmの落ち込みを確認している(P₁)。埋没：単層でグライ化した粘土塊を混入する。覆土中に拳大から人頭大の円礫が出土している。遺物出土状況：南東隅下床面で砥石の破片が出土したほかは遺物量は極端に少ない。帰属時期：出土遺物の様相から15期に比定される。

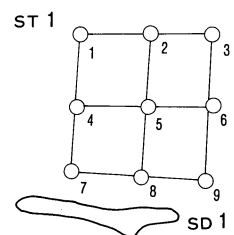
2 掘立柱建物址

概観

分布：本遺跡では62棟におよぶ古代の掘立柱建物址が確認された。各地区での建物の棟数は南部地区が10棟、中部地区21棟、北部地区は31棟で0北端地区では検出されなかった。中でも中部I地区では1・2期を中心とした建物址が、北部II地区では7・8期に属する掘立柱建物址が多く分布しており注目される。構造：総柱の建物址が9棟見られる。建物の規模では床面積が30㎡を越えるような大形の建物址が中部I地区と北部II地区に見られた。ほかに、建物内に須恵器甕を埋設しているものが1棟、建物の脇に溝を併設するものが3棟認められた。帰属時期：時期を確定できるだけの資料を有する建物址は少ないが、出土遺物・遺構配置・掘り方の埋土の特徴等から1～3期に帰属するものが22棟、7・8期に帰属する建物址が27棟と他の時期より多いのも本遺跡の特徴である。

ST 1 位置：南部 I 図版13

検出：II B層上面で検出したが、北東隅と南西隅の柱穴はII A層上面で確認できた。一部でII A層対比の含礫泥層を掘り込む。柱配置：2間×2間の総柱建物である。南北方向の柱間のほうが間隔が一定であることから東西棟と判断される。桁方向の柱間は170cmと190cmを測る。柱穴：掘り方は円形で断面は逆台形を呈する。その深さは検出面を考慮すると35～50cmを測り、中央の柱穴のみが他より5cm浅い。埋土は灰色土とII A層が混じり合い、拳大以下の礫も入っていた。柱痕跡は見られない。付属施設：本址のすぐ南にSD27が位置するが、主軸が一致し、覆土も同質であることから本址に伴う可能性が高い。帰属時期：遺物は見られなかったが、SD 1内からは4・5期の遺物が出土している。

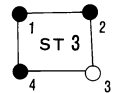


ST 2 位置：南部 I 図版12、第125図、PL 6

検出：II A層上面で検出された。SB10に切られるため西側の柱穴は見つからなかった。柱配置：2間×2間で、主軸を南北に取る。北側中央の柱穴はやや南に位置する。柱穴：掘り方は円形で断面は鍋底形を呈している。深さは45～50cmを測るが、南側は地山III層が高まるため40cmとやや浅い。全ての柱穴で径20～25cm・深さ30～45cmの柱痕跡が確認できた。南側3本のみ10cmほど浅い。埋土は灰色土を主体とし、拳大以下の円礫やマンガン・水酸化鉄の班紋が見られた。柱痕跡には炭粒が7%程混入する。帰属時期：切り合い関係からSB10より古く位置付けられるが、掘り方埋土内の出土土器やSB8・9との主軸の一致から8期と考えられる。

ST 3 位置：南部 I 図版12、PL 6

検出：II A層上面でST2・SA3と重複して検出された。前後関係は明らかでない。柱配置：1間×1間で、東西方向の柱間が長い建物である。柱穴：掘り方は円形プランで断面は鍋底型を呈している。深さは北西隅の柱穴が48cmを測るほかは30cm前後で、南東隅の柱穴を除き径15cm深さ20～30cmの柱痕跡が見られた。掘り方の埋土は灰色土を主体とし砂礫が混じる。柱痕跡は灰色が濃いため区別できた。帰属時期：遺物が出土していないため確定は難しいが、ST2と主軸や埋土が一致することからそれと相前後する時期であろう。



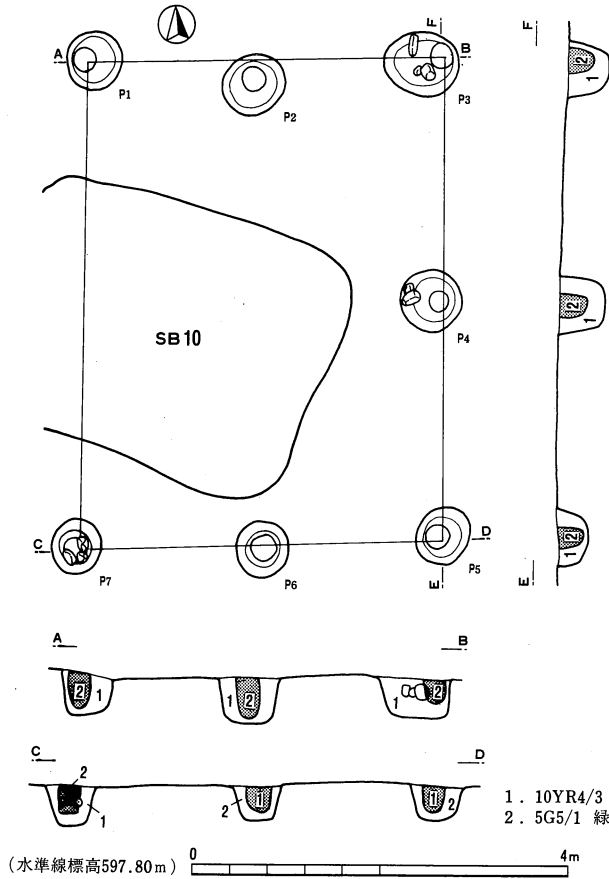
ST 4 位置：南部 II 図版15、第125図、PL 6

検出：II A層上面で検出。埋土にII A層の混入が多く検出は難しかった。柱配置：3間×2間で主軸を南北に取る。棟の延長上で南に1mはなれて径35cm・深さ29cmの円形の落ち込み(SK89)を検出しており本址に所属する可能性もある。桁行柱間はほぼ一定であるが、梁行では185cmと215cmで30cmの差がある。柱穴：掘り方は円形プランで断面は鍋底形を呈する。深さは50cm前後で、地山III層上位まで掘り込んでいる。全ての柱穴で柱痕跡が見られ、径15cm強・深さは35cm前後である。掘り方の埋土はII A・II B層と砂礫が混じり合う。下位ほど砂礫の混入が多い。灰色土の多い部分を柱痕跡に当てた。遺物出土状況：掘り方埋土(P₅)内から須恵器甕A片が出土している。帰属時期：掘り方埋土はSB20・25の覆土と酷似しており、さらにSB25と主軸をそろえることから2期に属する可能性がある。

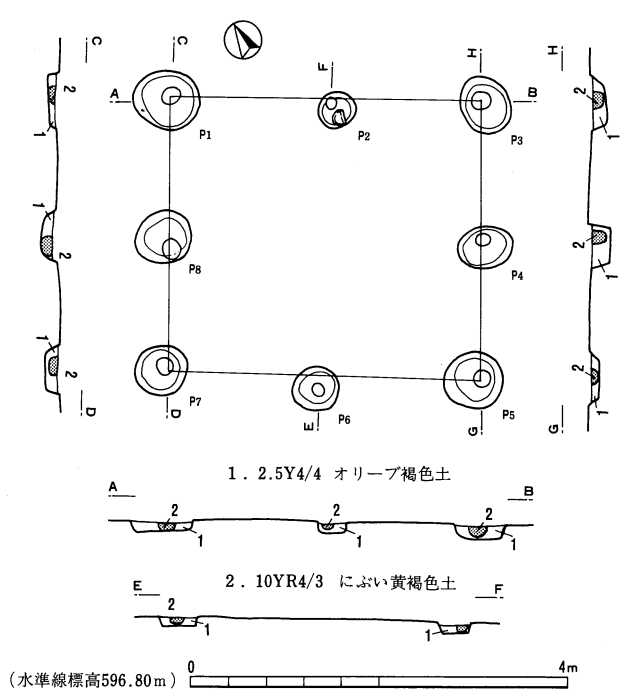
ST 5 位置：南部 II 図版17、第126図、PL 7

検出：I Df層中で確認。SB21・22・27を切る。本址の埋土のほうが住居址に比べ、灰色土・砂礫の混入が多い。ST7に切られる。また、ST6と重複している。柱配置：3間×1間で主軸を南北に取る。北側梁行と南側梁行には70cmの差が見られ、建物の平面形は台形状を呈している。桁行の柱間は195cm前後であるが、東面ではふぞろいな部分も見られる。柱穴：掘り方は隅丸方形プランで長方形の柱穴もある。深さは40～50cmを測り、SB21・22の床面か、地山III層上面まで掘り込まれている。径20cmでほぼ掘り方底面に達する柱痕跡が見られた。P₄・P₈の柱痕跡下には扁平な円礫が出土している。掘り方の埋土は灰色土を主体とし、I Df・II A層と砂礫が混じる。柱痕跡は灰白色を呈し粘質な土である。遺物出土状況：住居址と切り合う柱穴のほかに、P₆・P₇で7期に比定される遺物が出土している。付属施設：建物の北西隅より須恵器の大形の甕A(1)を伴う土坑が確認された(SK137)。覆土が本址と同様であることやその位置から本址に伴うものと考えられる。土坑は長軸175cm・短軸140cmの隅丸長方形プランで深さは40cmを測り、断面は鍋底形を呈している。覆土は灰色土を主体とし、覆土下位から甕の底部付近の破片が甕の裏側を上に向いて、さらに、覆土の中・上部にかけては甕の頸部の破片が折り重なって出土しており、胴部・口縁部は失われている。この甕の上には閃緑岩の扁平な円礫が載っていた。このような出土状態から丸底の甕を穴を掘って設置したと考えられる。土坑内からは他に黒色土器A杯片、土師器甕C片が見られた。帰属時期：切り合い関係からSB21・22・27より新しく位置付けられ、出土遺物の様相から7期に比定される。

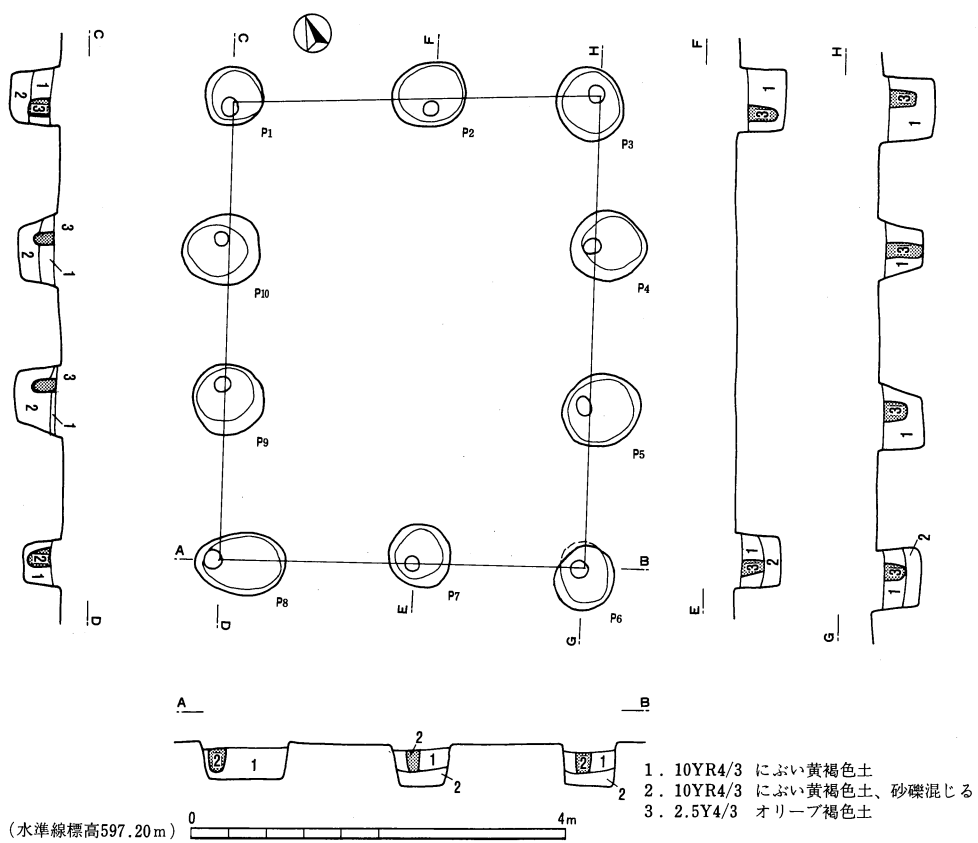
ST 2



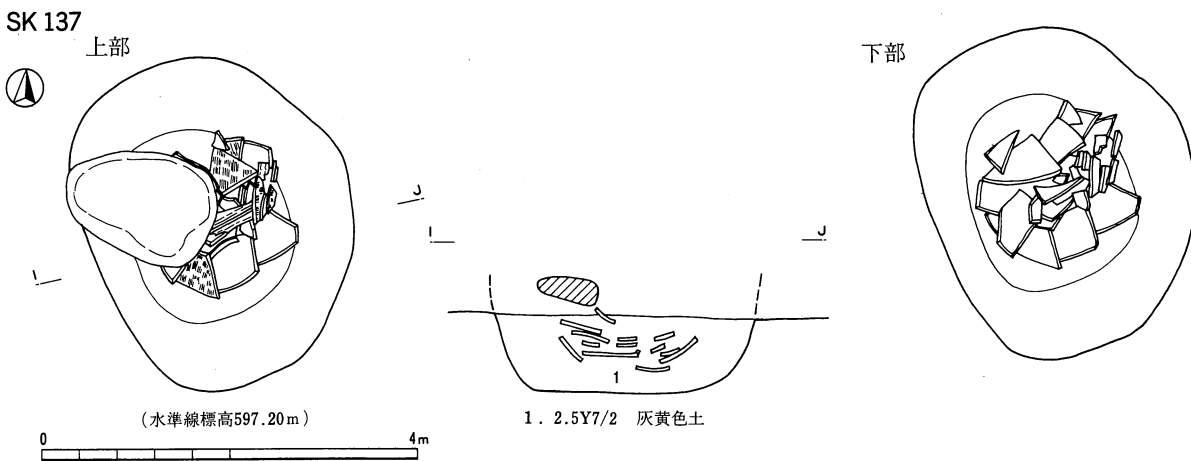
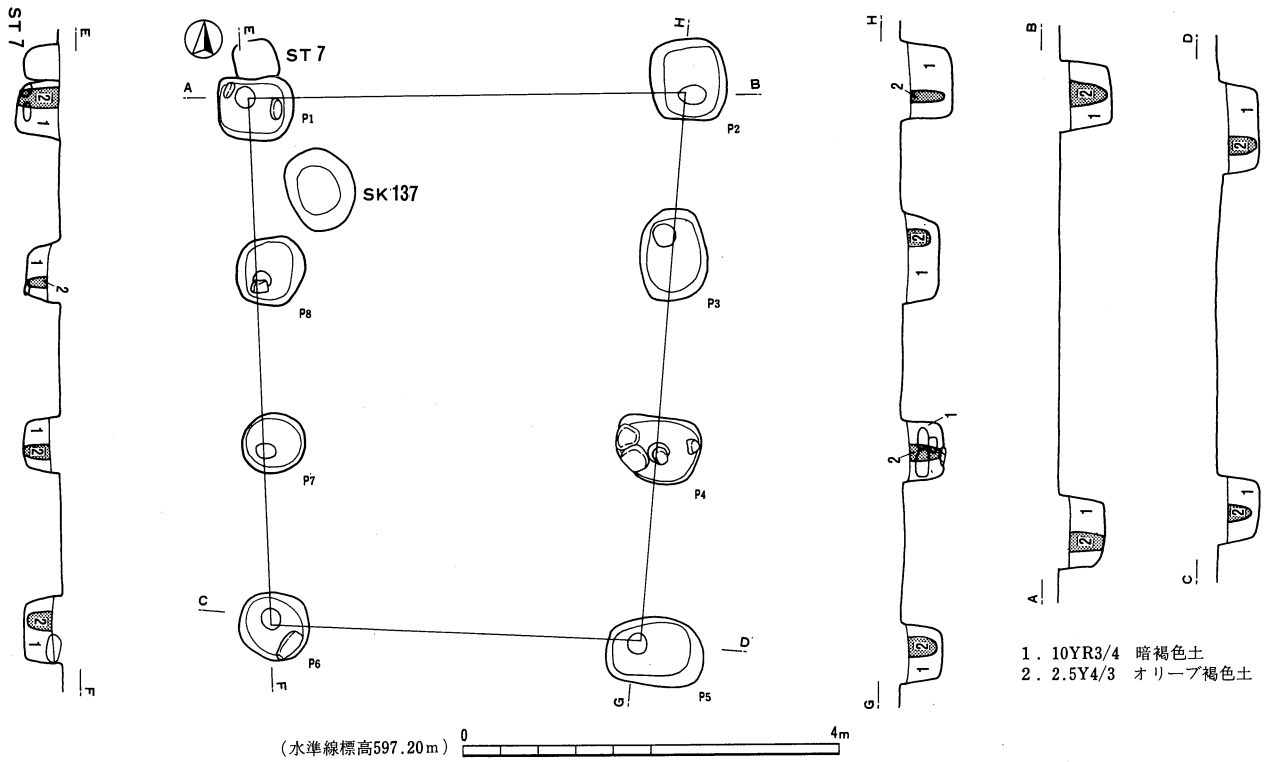
ST 8



ST 4



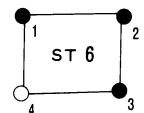
第125図 ST 2・4・8実測図



第126図 ST 5・SK137実測図

ST 6 位置：南部II 図版17

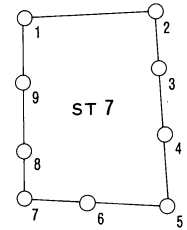
検出：I Df層中で確認した。ST 5・7と重複している。柱配置：1間×1間で東西方向に長い建物址である。柱穴：掘り方は隅丸方形プランで、断面は鍋底形を呈している。柱穴の深さは25～35cmを測り、東側の柱穴がやや深い。南西隅の柱穴を除き径20cm前後、深さ20～30cmの柱痕跡を確認している。掘り方の埋土は灰白色土を主体とし、I Df・II A・II B層の混入はST 5・7より多い。柱痕跡は灰色が濃く粘質であった。遺物出土状況：南西隅の柱穴掘り方内より須恵器杯・甕・壺片が検出された。帰属時期：埋土の特徴からST 5・7より古いと判断され、出土遺物の様相から5・6期に比定される。



ST 7 位置：南部II 図版17、PL 7

検出：I Df層上面で確認。ST 5を切り、ST 6と重複するが、これらの遺構に比べ本址の埋土はより灰白色が濃い。柱配置：3間×2間の南北棟の建物であるが、北側梁行中央には柱穴が見られなかった。柱

間はふぞろいである。柱穴：掘り方は隅丸方形プランであるが、周囲の建物に比べ小さい。断面は鍋底形で深さは30～40cmを測るが、南側中央の柱穴のみ25cmと浅めである。掘り方の埋土は灰白色土を主体とし地山の土塊が少量混じる。柱痕跡は見られなかった。遺物出土状況：柱穴内より須恵器杯A片・土師器甕B片が出土している。帰属時期：切り合い関係ではST5より新しいが、主軸方向はST5と一致していることから、ST5が本址へ建替えられたものと判断される。

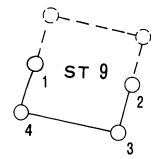


ST 8 位置：南部II 図版18、第125図

検出：II B層上面で検出したが、本来はII A層上面で検出可能と思われる。柱配置：2間×2間の建物で柱はほぼ方形に配されるが、柱の規模・位置から南北棟と判断される。梁行中央の柱は2本ともやや南にずれており、大きさも10cm位小さい。柱穴：掘り方は円形プランで断面は鍋底形を呈している。柱穴の深さは10～15cmで梁行中央の2本のみ20cmとやや深い。径20cm弱・深さ10cm強の柱痕跡を確認しており、梁行中央の柱がやはり深い。掘り方の埋土は地山と灰色土が混じった土で、柱痕跡は黒味を帯びた土であった。帰属時期：I Df層堆積以前である。SB25・ST4と主軸が一致することから2期に属する可能性が高い。

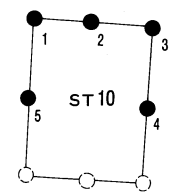
ST 9 位置：南部III 図版21

検出：II A層中で確認した。本址および周辺はNR7に大きく浸食されている。柱配置：1間×1間であるが、本来はST12のような2間×1間の建物址であったと判断される。ST12とは主軸方向や柱穴の規模・柱間がほぼ同様である。柱穴：掘り方は円形プランで断面は鍋底形を呈している。深さは10cm弱で大半はNR7に浸食されて残されていない。埋土は灰色土を主体とし、地山の土が混じる。柱痕跡は見られなかった。帰属時期：NR7が流れる以前である。遺物が見られず決定は困難であるがSB39・43、ST12・13と主軸が一致していることから1・2期に属するものと考えられる。



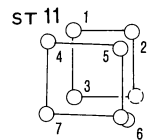
ST 10 位置：南部III 図版24

検出：II A層中で確認した。ST9と同様にNR7に浸食される。SD13と重複している。灰色土を主体とした覆土のSD13のほうが新しい。柱配置：南側が失われているが、本来は2間×2間の建物址であったと考えられる。北側中央の柱穴の柱痕跡がやや北にずれていることから、南北に主軸をもつと判断される。柱穴：基本的に掘り方は円形プランであろう。断面は不整形な播鉢形で深さは35～45cmを測る。径10cmで、ほぼ掘り方底部に達する柱痕跡が見られる。いくつかの柱穴で建物の自重で沈下した痕跡を示す凹みが見られた。掘り方の埋土は灰色土と地山II A層の混合であり、柱痕跡は灰色土が主体となる。遺物出土状況：土師器甕A片が北東隅の柱穴掘り方内から出土している。帰属時期：I Df層堆積以前で、主軸方向からST14・16・17・20などとの関連が考えられる。

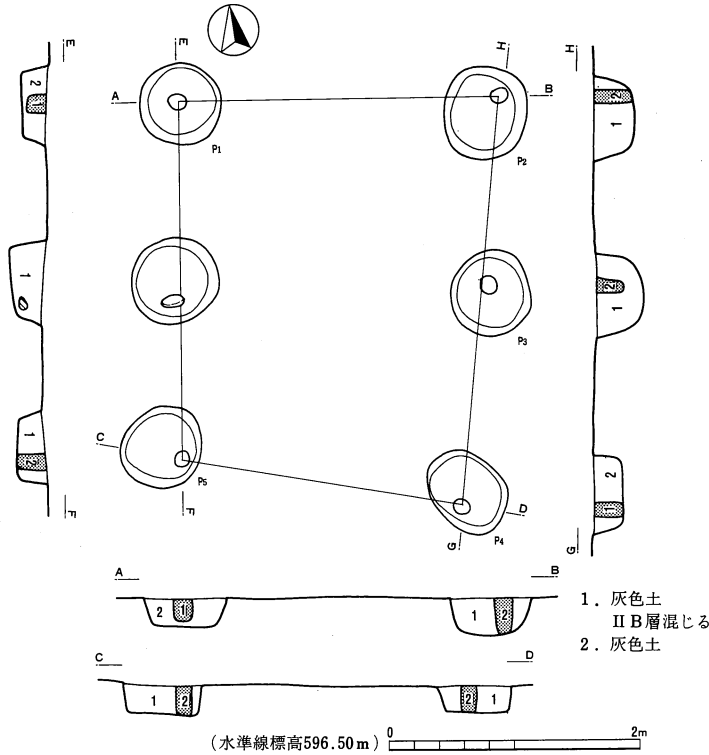


ST 11 位置：中部I 図版24

検出：II A層中で検出された。柱配置：1間×1間の建物址が重複し合い、面積の小さいものから大きいほうへ建替えられたと判断される。前者は南北に長いが、後者は南北方向の柱間と東西方向の柱間が等しくなるように拡大されて建替えられたと考えられる。柱穴：両者とも掘り方は円形プランで、深さは10～20cmを測る。掘り方の断面は播鉢形と鍋底形の双方が見られる。古段階の建物の北東隅の柱穴には柱痕跡が、新段階の南東隅の柱穴では柱の建替えが見られる。掘り方の埋土は地山II B層を主体としてII A層土を混じえる。柱痕跡は暗褐色を呈していた。古段階の柱穴のほうがII A層の混入が多い。帰属時期：遺物の出土がなく決定は困難であるが、古段階



ST12



から新段階への建替えは主軸がずれることから、ST13とST9・13の構築にかかわる可能性がある。

ST12 位置：中部 I

図版23、第127図

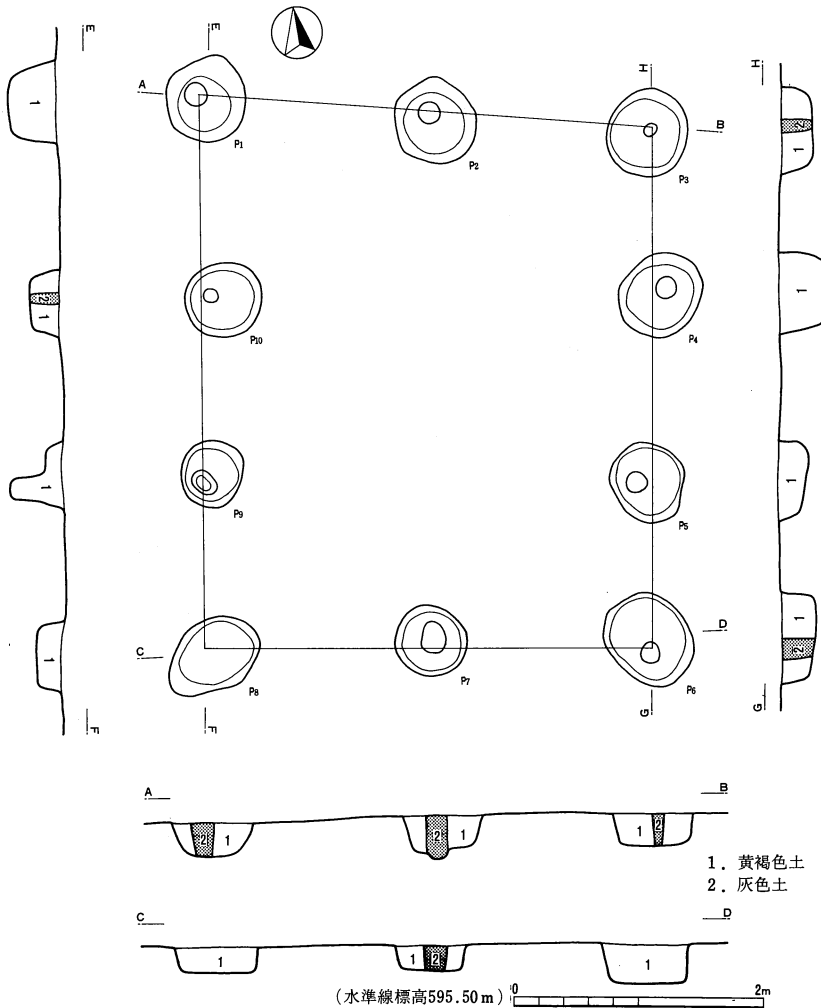
検出：II A層中で確認した。
柱配置：2間×1間で南北棟の建物址である。東側桁行の柱間が西側より大きくなる傾向にある。柱穴：円形プランの掘り方で、断面は播鉢形と鍋底形の双方があり、深さは25～40cmを測る。西側中央の柱穴を除き径10cm強・深さ20cm位の柱痕跡が見られた。掘り方の埋土は灰色土と地山II B層の混合した土で、柱痕跡は灰色土のみの土である。遺物出土状況：南西隅の柱穴掘り方内より土師器甕A片、須恵器短頸壺(1)が出土している。帰属時期：出土遺物の様相から1・2期に比定され、主軸方向の一致からSB39・48・49・50と関係を有すると考えられる。

ST13 位置：中部 I

図版24、第127図

検出：II A層中で確認した。
柱配置：3間×2間の建物址で、規則的な柱配置が見られる。柱穴：円形プランの掘り方を持ち、断面は鍋底形である。柱穴の深さは15～40cmとばらつきがあり、位置のうえでも規則性は見られない。径15cmで掘り方底面に達する柱痕跡が、南西隅に柱穴を除き確認できた。建物の自重によ

ST13

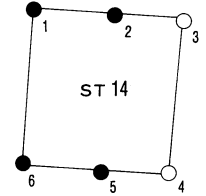


第127図 ST12・13実測図

る沈下痕と判断される凹みが、柱痕跡下の柱穴底面に見られる。掘り方の埋土は灰色土と地山のII A・II B層の混合で、柱痕跡は灰色土であった。帰属時期：遺物の出土を見ていないため決定は困難であるが、主軸の一致、埋土の類似からSB48・ST10などとの関連が考えられる。

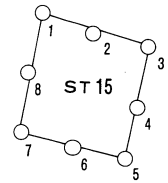
ST14 位置：中部 I 図版26

検出：II B層上面で確認したが、柱穴の埋土中にII A層が混じることから、本来はII A層上面でも検出可能であろう。柱配置：2間×1間の東西棟の建物址で、柱穴はほぼ方形に配列する。柱穴：円形プランの掘り方で、断面は鍋底形である。柱穴の深さは10~27cmを測り、東側ほど浅い。これはIII層上面の高低に影響されたものと思われる。東側の2本を除き径10cm強・深さ15~20cmの柱痕跡が見られた。北西隅の柱穴底面では柱痕跡下に凹みが見られた。掘り方の埋土は灰色土とII A・II B層の混合で、柱痕跡は灰色土を主体としている。帰属時期：遺物の出土が見られないため決定は困難であるが、主軸の一致からST16・17・19・20などとの関連が考えられる。



ST15 位置：中部 I 図版25

検出：II A層中で確認した。柱配置：2間×2間の建物址で柱穴は方形に配列するが、東側中央の柱穴が小さいことから東西棟と考えられる。柱穴：円形プランの掘り方で断面は鍋底形を呈する。柱穴の深さは30~40cmで、柱痕跡は見られなかった。埋土は灰色土と地山II A層との混合である。帰属時期：遺物の出土を見ていないため決定は困難であるが、主軸の一致と埋土の類似からSB48・49・50、ST18・22との関連が考えられる。



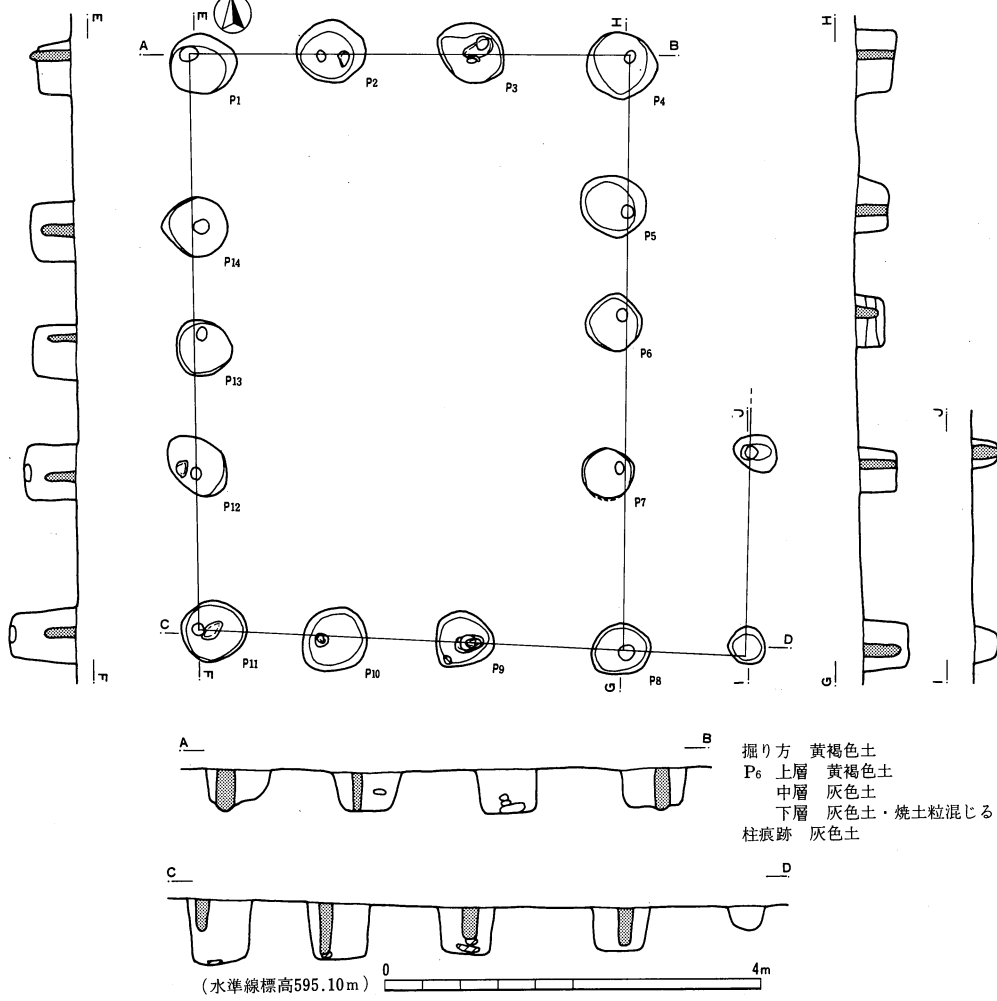
ST16 位置：中部 I 図版26、第128図、PL11

検出：II B層上面で検出した。柱穴の埋土の特徴から本来はII A層上面でも検出可能であろう。ST19と重複する。柱配置：4間×3間の建物址である。柱は規則的には位置しているが柱間は等間隔でない。梁行では西側の柱間が狭く、桁行では隅寄りの柱間が広く中央部の2か所の柱間が狭い。東側に庇が付く。柱穴：円形プランの掘り方で断面は鍋底形である。柱穴の深さは30~70cmを測るが40cm強のものが多い。底部分の2本は深さ20~25cmである。全ての柱穴で径10~15cm・深さ20~55cmと数値にばらつきが見られるが、ほぼ掘り方底面に達する柱痕跡を確認している。柱痕跡下に人頭大の円礫群を敷く柱穴が5本見られる。北西隅と北東隅の柱穴底面には建物の自重による沈下の痕跡を示す凹みが見られた。掘り方の埋土は地山II B層を主体とし、灰色土とII A層土粒が混入し、柱痕跡は灰色土を呈した粘性のある土であった。東側中央の柱穴では焼土塊の混入が見られた。遺物出土状況：6本の柱穴掘り方内から土師器甕A・須恵器杯Aの小片が出土した。帰属時期：ST17と主軸が一致し、構造が類似することから相前後するものであろう。主軸の一致はST14・20・21とも見られ、桁行の柱間の取り方はST17・20・22と類似している。

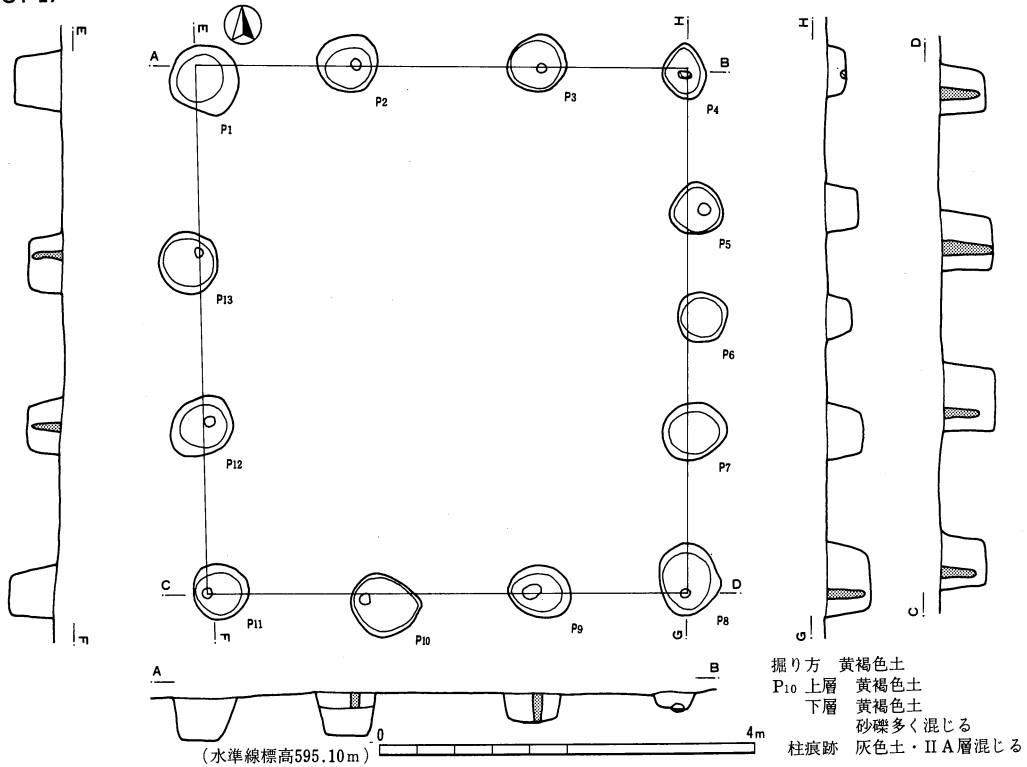
ST17 位置：中部 I 図版26、第128図

検出：II B層上面でST16と重複して確認された。柱穴の埋土の特徴から本来はII A層上面でも検出可能であろう。柱配置：3間×3間ではほぼ方形プランの建物址である。南北にやや長いこと、東西方向の柱間のほうが規則的であることから南北棟と考えられる。東面は4間で中央の柱間が狭い。柱穴：円形プランの掘り方で断面は鍋底形である。柱穴の深さは20~50cmを測るが、その差は地山III層上面の高低を反映するものと思われる。9本の柱穴で径10cm強の柱痕跡を確認している。その深さは20~50cmではほぼ掘り方底面に達している。掘り方の埋土は地山II B層を主体とし、灰色土・II A層・砂礫が混じる。柱痕跡はII A層の混入が多い。帰属時期：ST19・20、SB51などと主軸の一致が見られる。特にST19とは東西両面を合せており併存した可能性が高い。

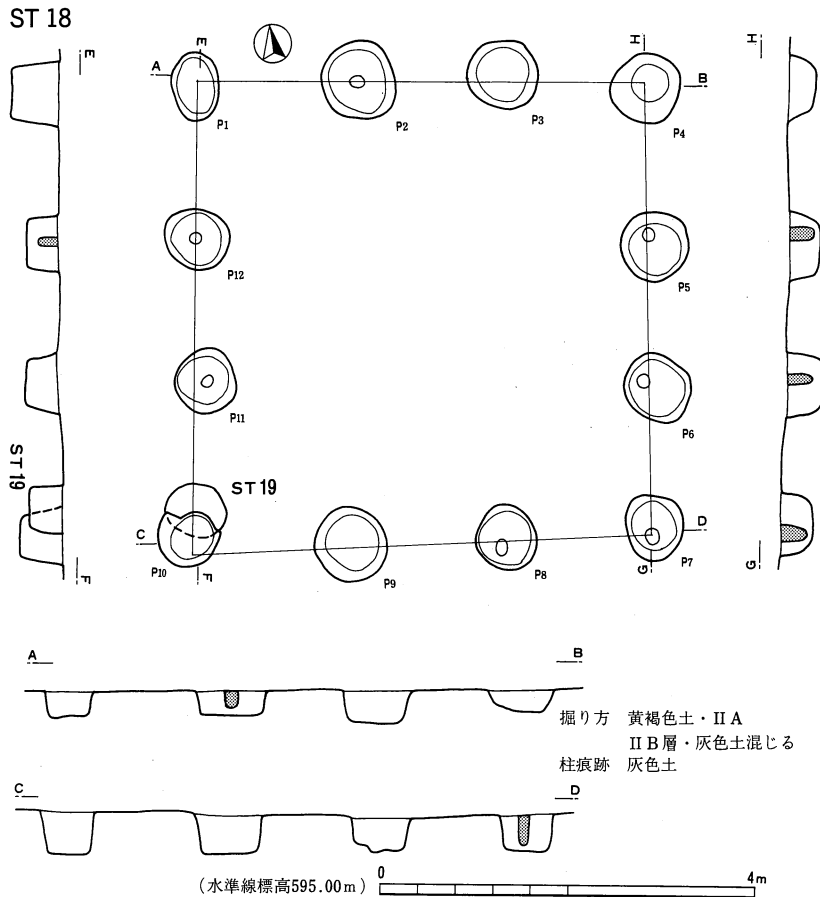
ST 16



ST 17



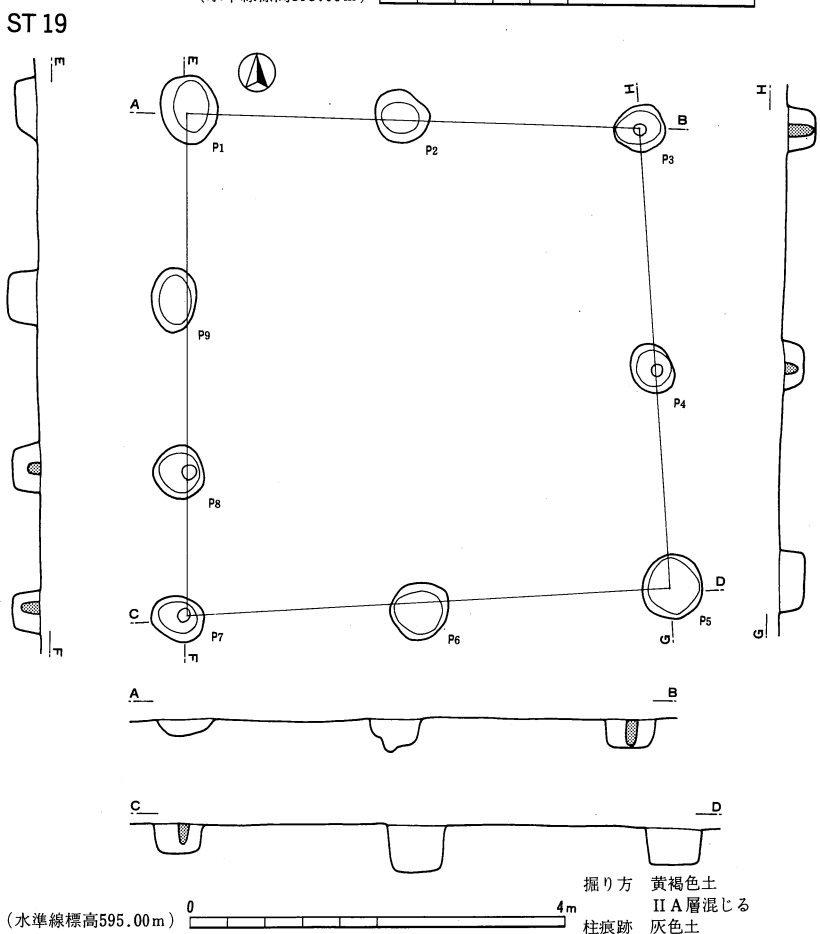
第128図 ST16・17実測図



ST18 位置：中部 I

図版28、第129図

検出：II B層上面で確認。本来はII A層上面で検出可能であろう。南西隅の柱穴がST19に切られる。柱配置：3間×3間で方形プランの建物址である。南北に若干長いことから南北棟と判断した。柱穴：円形プランの掘り方で断面は鍋底形である。柱穴の深さは26~45cmを測るが、30cm強のものが多く、南側のほうがやや深い。7本の柱穴で径15cm弱の柱痕跡を確認した。その深さは20~30cmで掘り方底よりやや上部に留まっているものが多い。掘り方の埋土は地山II A・II B層を主体とし、灰色土・砂礫が混じる。柱痕跡は灰色土が主体である。遺物出土状況：3柱穴内より土師器甕A・須恵器鉢片が出土した。帰属時期：遺物は1・2期に比定されるが、ST13・15・22、SB53などと主軸が一致しており、特に、ST22とは直角に棟を配した可能性がある。

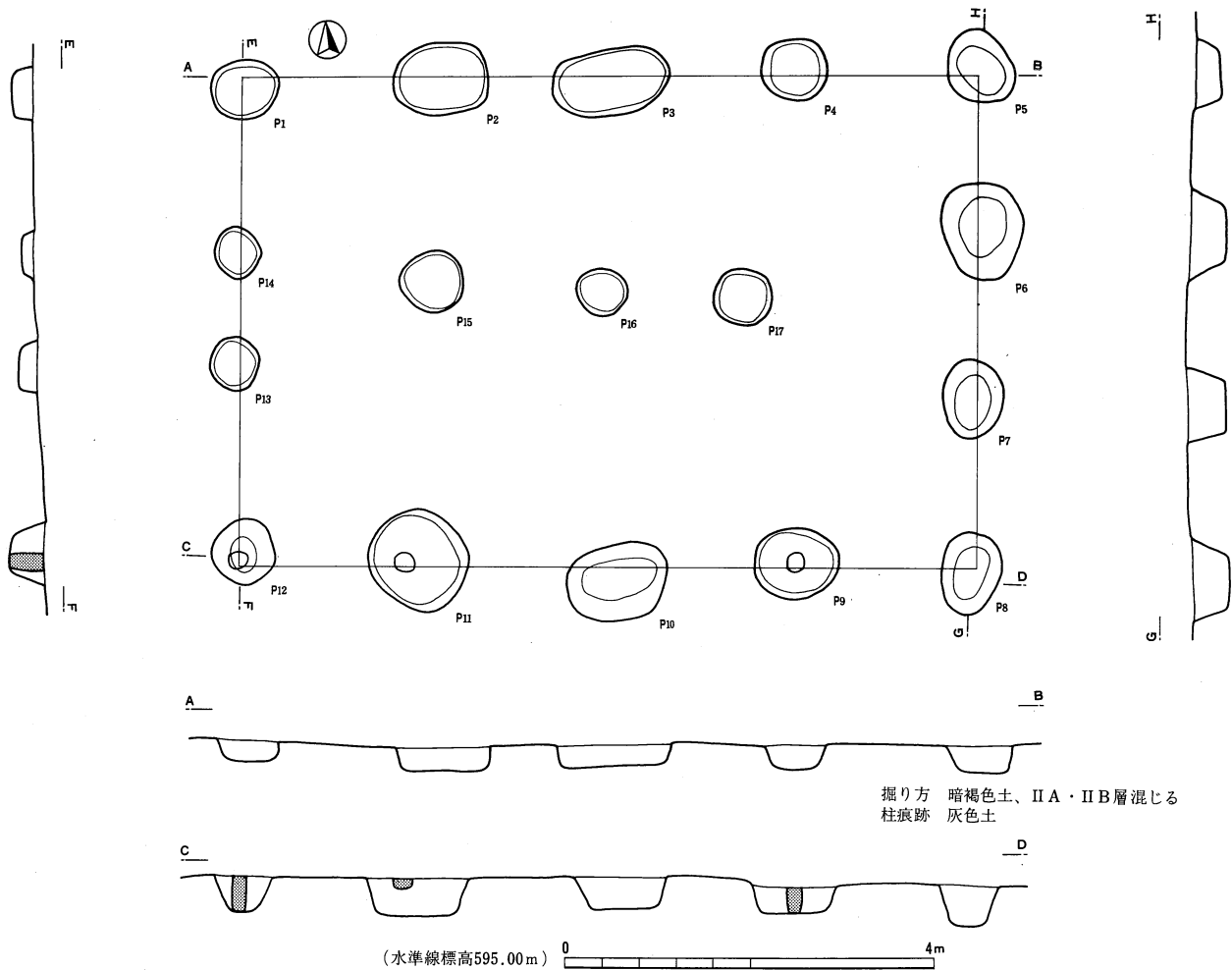


ST19 位置：中部 I

図版28、第129図

検出：II B層上面で検出した。本来はII A層上面でも検出可能であろう。南東隅の柱穴がST18を切っている。ST20とも重複している。柱配置：2間×2間で、ほぼ方形プランの建物址である。西面のみ3間となることから南北棟と判断される。面積では3間×3

第129図 ST18・19実測図



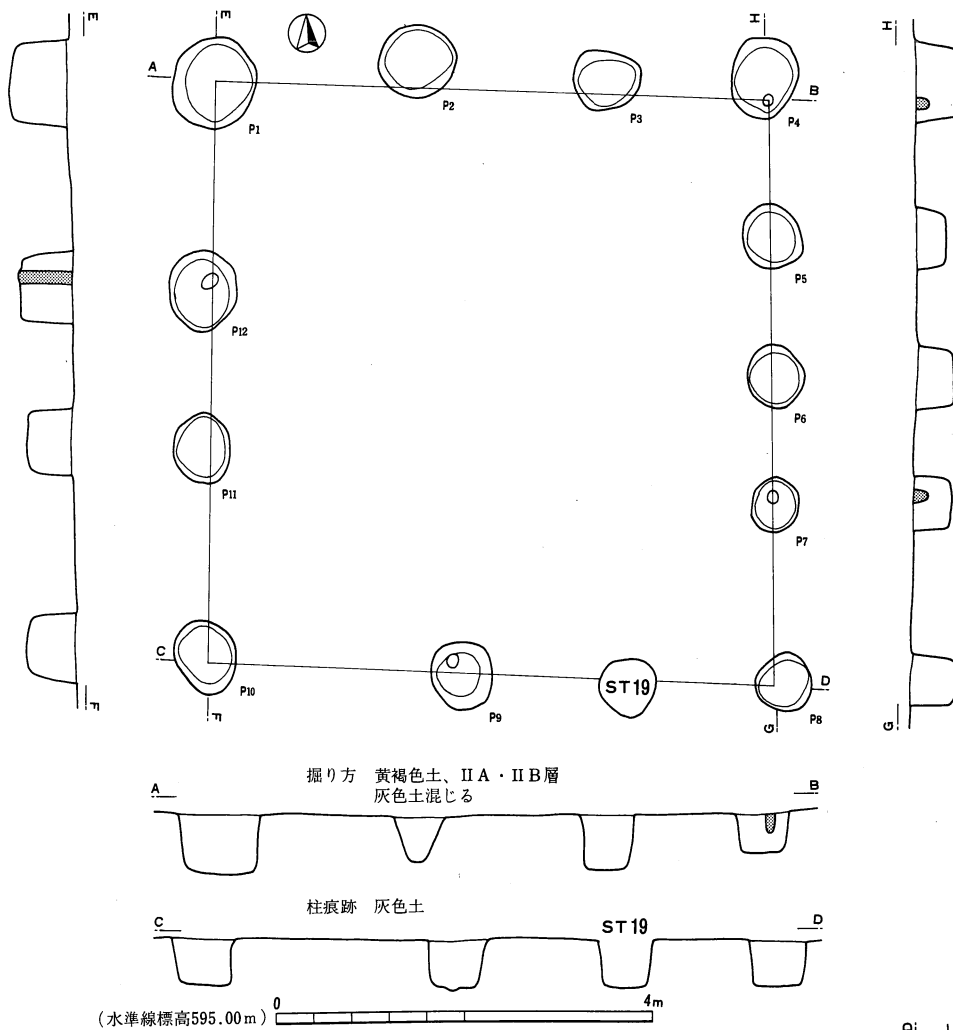
第130図 ST21実測図

間のST18・22と同様の広さを有する。柱穴：円形プランの掘り方を持ち、断面は鍋底形である。柱穴の深さは20～48cmを測るが30cm前後のものが多い。4本の柱穴で径15cm弱の柱痕跡を確認した。柱痕跡の深さは15～28cmである。掘り方の埋土は地山II B層を主体とし、灰色土・II A層が混じる。柱痕跡は灰色土が主体である。遺物出土状況：北西隅の柱穴掘り方より土師器杯A・甕Aの小片が出土した。帰属時期：遺物は2期に比定される。ST14・16・17・21、SB51などと主軸の一致が見られ、特に、ST17とは東西両面を合せるように並んでいる。

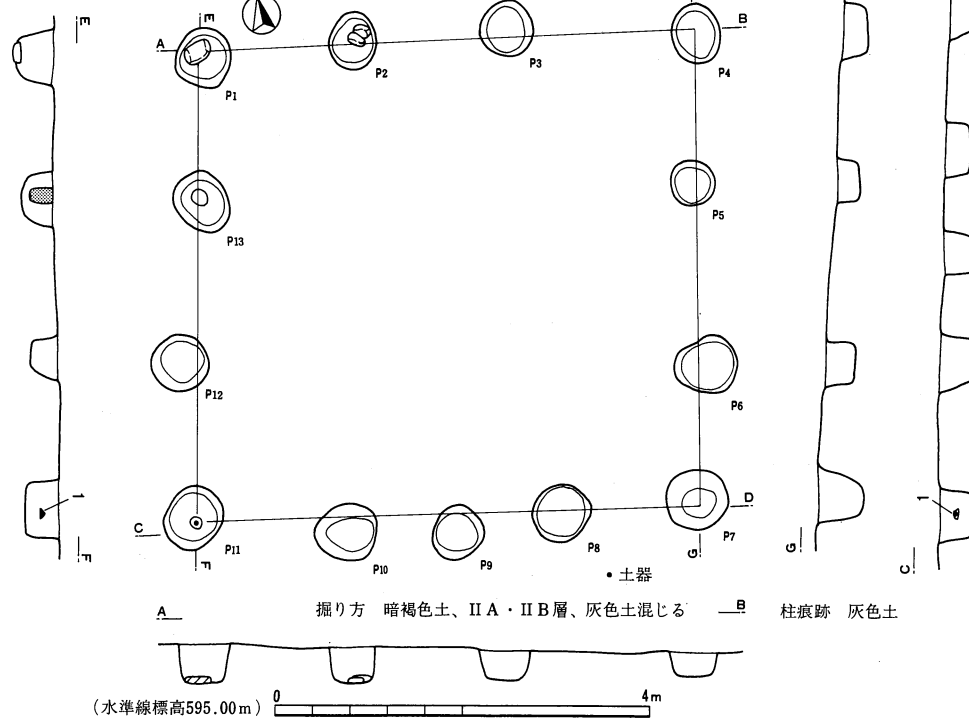
ST20 位置：中部 I 図版28、第131図

検出：II B層上面で検出した。本来はII A層上面でも検出可能であろう。ST19に切られ、ST18とも隣接している。柱配置：3間×3間でほぼ方形プランの建物址である。南北にやや長いことから南北棟の建物と判断される。東面だけ4間で、この部分の柱間の取り方はST16・19・22と共通している。柱穴：円形プランの掘り方を有し、断面は鍋底形である。柱穴の深さは30～65cmを測るが、東側の中央の3本のみ30cmと浅いだけで、他は50cmを越えるものが多い。4本の柱穴で径15cm弱の柱痕跡が認められた。それぞれの柱痕跡はほぼ掘り方底に達している。3本の柱穴では建物の自重による沈下の痕跡と考えられる凹みが柱穴底面で見られた。掘り方の埋土は地山II A・II B層を主体とし灰色土・砂礫が混じる。柱痕跡は灰色を呈している。遺物出土状況：北東隅の柱穴掘り方より土師器甕A片が出土した。帰属時期：切合い関係からST19より古く位置付けられる。ST16・17と主軸が一致している。

ST 20



ST 22



ST 21

位置：中部 I
図版 28

第130図

検出：II B層上面で検出した。本来はII A層上面でも検出可能であろう。柱配置：4間×3間の東西棟の建物址である。建物内に3基落ち込みが並び、床束とも考えられる。柱穴：基本的に円形プランの掘り方であるが、桁行中央部の6本の柱穴が大きく、楕円形を呈している。深さは15~47cmを測るが25~40cmの柱穴が多い。3本の柱穴で径15cm強の柱痕跡を確認しており、その深さは掘り方底にまで達している。掘り方の埋土は地山II A・II B・III層を主体とし灰色土が混入する。柱痕跡は灰色土を主体としている。帰属時期：遺物の出土がないため決定は困

第131図 ST20・22実測図

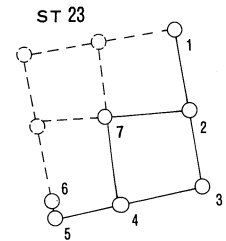
難であるが、主軸の一致からST17・19との併存が想定される。

ST22 位置：中部Ⅰ 図版28、第131図、PL11

検出：ⅡB層上面で検出した。柱穴の埋土の特徴から本来はⅡA層上面でも検出可能であろう。柱配置：3間×3間でほぼ方形プランの建物址である。東西にやや長いため東西棟と判断される。南面のみ4間で、中央よりの柱間が狭い。柱穴：掘り方は円形プランで、断面は鍋底形である。柱穴の深さは25～45cmを測る。1本の柱穴で径15cm・深さ30cmの柱痕跡が認められた。また、北西隅の柱穴底に扁平な人頭大の円礫が見られる。掘り方の埋土は地山ⅡA層を主体とし灰色土が混じる。柱痕跡は灰色を主体とする。遺物出土状況：南西隅の柱穴中央部で、底面より17cm浮いた位置で関係の須恵器杯A(1)が逆位で出土している。出土状態から柱痕内に落ち込んだ遺物と考える。ほかに、3本の柱穴から土師器杯・須恵器杯・甕片が見られた。帰属時期：出土遺物は2期に比定されることから本址は2期には廃絶されていたと考えられる。ST18とは棟を直角に配しており、SB53と主軸が一致していることから1期に帰属する可能性もある。

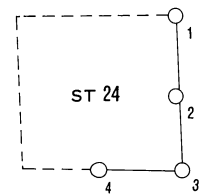
ST23 位置：中部Ⅱ 図版32

検出：ⅡB層上面で検出した。本来はⅡA層上面でも検出可能であろう。北西側は調査区域外に当たる。SB55と近接する。柱配置：2間×2間の総柱の建物址と推定される。柱間や柱穴の大きさから東西棟になる可能性がある。柱穴：円形プランの掘り方をもつが、大きさは30～60cmとふぞろいである。深さも5～30cmと一定していない。南西隅の柱穴の近くにもう1基、落ち込みが見られる。柱穴の埋土は地山ⅡA層を主体としⅡB層・灰色土が混じる。帰属時期：遺物の出土がないため決定は困難である。SB58と主軸が一致しており関係が注意される。



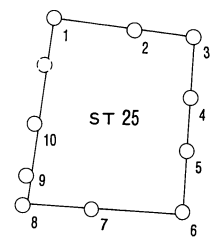
ST24 位置：中部Ⅱ 図版32

検出：ⅡB層上面で検出した。本来はⅡA層上面でも検出可能であろう。北西側は調査区域外に当たる。柱配置：不明な部分が多いが隣接するST23と同様な規模・構造をもつと考えられる。柱穴：円形プランの掘り方もち、東側中央の柱穴のみ小さい。柱穴の深さは5～15cmを測る。埋土は地山ⅡA層を主体としⅡB層・灰色土が混じる。帰属時期：決定は困難であるが、ST27と主軸の一致が見られる。



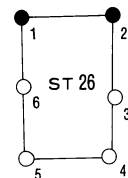
ST25 位置：中部Ⅱ 図版31

検出：ⅡB層上面で検出した。掘り方の埋土にⅡA層が混入することから、本来はⅡA層上面でも検出可能であろう。ST26に切られ、ST28とも接している。柱配置：3間×2間の南北棟の建物址である。東面の柱配置に対して西面は不規則であるが、ST26・28構築時に西側が攪乱されたとも考えられる。柱穴：掘り方のプランは方形と円形の双方が見られるが、基本的な形は方形である。断面は鍋底形で深さは30～40cmを測る。3本の柱穴で径15cm・深さ20～30cmの柱痕跡が見られた。掘り方の埋土は地山ⅡA層を主体としⅡB層・灰色土が混じる。柱痕跡は灰色土を主体としている。なお、柱痕跡内には焼土・炭粒の混入が多く、一部の掘り方の埋土に焼土化したところが見られるため、本址は火災にあったものと判断される。帰属時期：遺物の出土がなく決定は困難であるが、ST27・28、SB57と主軸が一致しており、関連が考えられる。



ST26 位置：中部Ⅱ 図版31

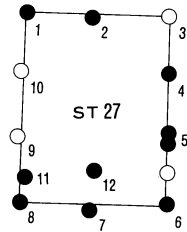
検出：ⅡB層上面でST25を切った状態で検出された。柱配置：2間×1間の南北棟の建物址である。柱穴：掘り方は隅丸(長)方形プランで、建物の規模に比べかなり大きい。深さは南西隅の柱穴が17cmであるほかは30cmを測る。北面の2本の柱穴で径15cmの柱痕跡が認めら



れた。掘り方の埋土は地山II A・II B層を主体とし灰色土が混じる。柱痕跡は灰色土が主体である。帰属時期：遺物の出土がなく決定は困難であるがSB54・59と主軸が一致しており関連が考えられる。

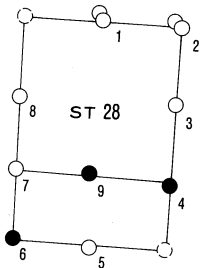
ST27 位置：中部II 図版31

検出：II B層上面で確認された。柱配置：3間×2間の南北棟の建物址である。南面から半間北寄りの梁行に3基の柱穴が配されており特異な構造である。但し、この部分については別遺構との重複も考えられる。北面と南面中央の柱は30cmほど南へずれている。柱穴：円形プランの掘り方を有し断面は鍋底形である。柱穴の深さは20～30cmを測る。9本の柱穴で径15cm強の柱痕跡が認められた。柱痕跡は掘り方底に達している。掘り方の埋土は地山II A層を主体としII B層・灰色土が混入する。柱痕跡は灰色土を主体とし、わずかに炭粒が混じる。遺物出土状況：2本の柱穴掘り方内より土師器甕A・甕B、須恵器杯A・鉢A(1)が検出された。帰属時期：遺物が少なく決定は困難であるが主軸方向の一致からSB57、ST25・28との関連が考えられる。



ST28 位置：中部II 図版31

検出：II B層上面で確認された。南側にST25と接している。北西隅と南東隅の柱穴は確認できなかった。柱配置：3間×2間の南北棟の建物址である。南面は底葺きか、もしくは、建物内に間仕切りをもつものと考えられる。柱穴：基本形は方形プランの掘り方で、断面は鍋底形である。柱穴の深さは南面中央の柱穴(7cm)を除き22～35cmを測る。北面の2柱穴で建替えのあとが見られる。3本の柱穴で径15cm位の柱痕跡が認められた。柱痕跡は掘り方底に達している。掘り方の埋土は地山II A層を主体とし、II B層・灰色土が混じる。柱痕跡は青灰色を呈している。遺物出土状況：掘り方内より土師器甕A・甕B片が見られた。帰属時期：出土遺物の様相から2期に帰属すると考えられ、主軸方向からSB54・ST25との関連が注意される。特に、ST25とは同規模であり相前後して構築されたものと判断される。



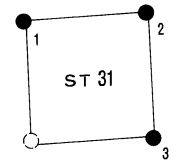
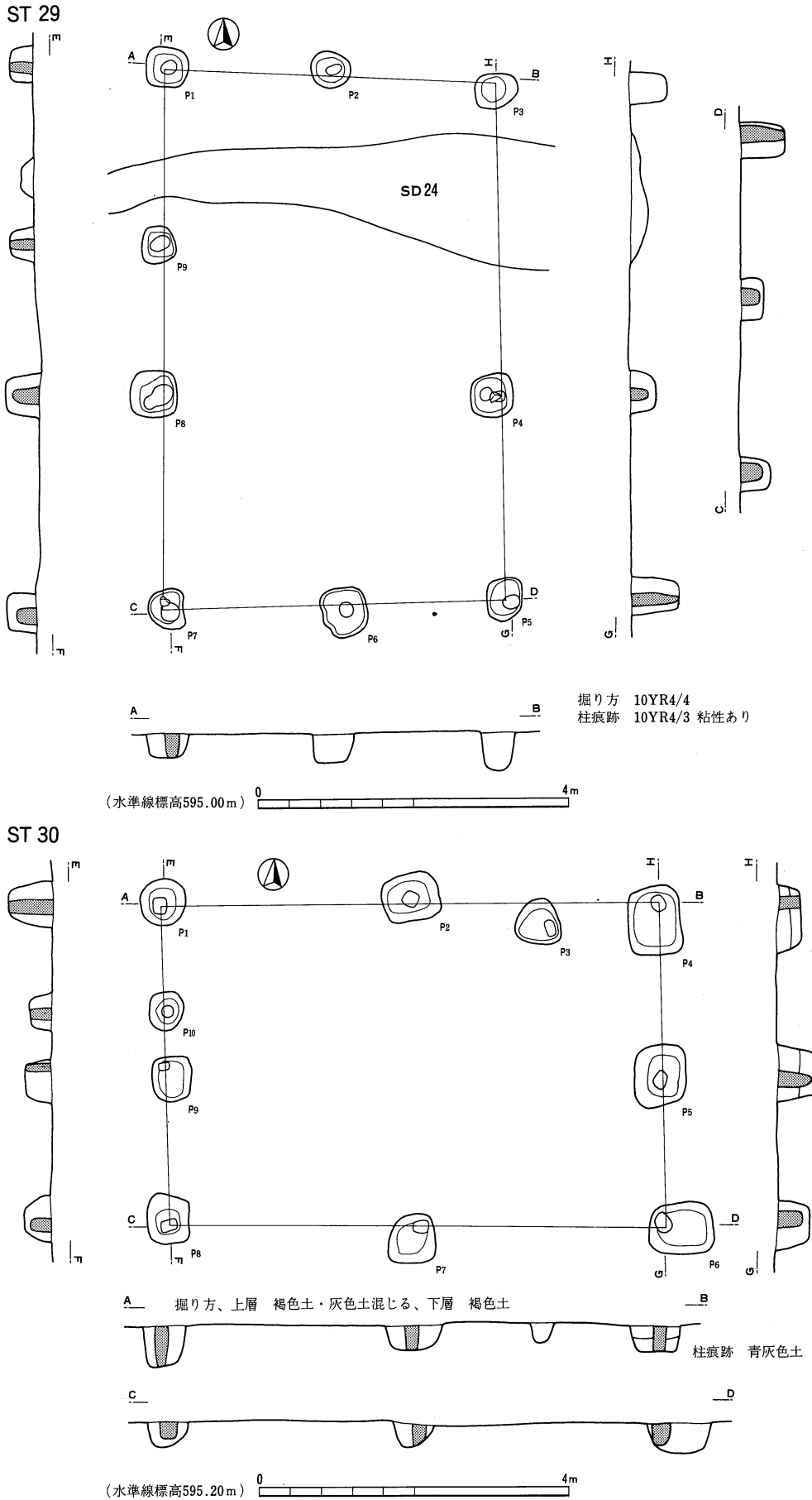
ST29 位置：中部III 図版32、第132図

検出：II A層上面で確認した。SD24によって東面の柱穴が浸食されている。また、I C層上面で検出した土坑群に切られている。柱配置：3間×2間の南北棟の建物址である。桁行の南側部分の柱間がほかより広い。柱穴：柱穴の掘り方は方形プランで、断面は鍋底形である。深さは27～50cmを測り、梁行中央の2柱穴がほかより5cm浅い。北東隅の柱穴を除き径20cmの柱痕跡が見られた。その深さは23～31cmを測るが、有意な差は見られない。掘り方の埋土は灰色土で、水酸化鉄・マンガンの斑紋が見られる。柱痕跡は掘り方より粘性のある灰色土である。帰属時期：土師器甕片が掘り方埋土内で検出されたのみで時期の決定は難しいが、埋土はSB61・62など周囲の7～8期の遺構に類似しており、周囲に7期の竪穴住居址が分布することから本址も7期に比定されよう。

ST30 位置：中部III 図版31、第132図、PL12

検出：II A層上面で確認した。柱配置：2間×2間の東西に長い建物址である。桁行柱間は梁行に比べかなり広い。北面と西面の柱間にはさらに1本ずつ柱が加わる。柱穴：隅丸方形プランの掘り方で、鍋底形の断面を有する。柱穴の深さは30cm前後から50cmを測る。全ての柱穴で径20cm弱の柱痕跡が見られ、それぞれ掘り方底に達する深さを有する。掘り方の埋土は灰色土と地山II A層との混合で、柱痕跡は灰色土を多く含む。帰属時期：遺物の出土がなく決定は困難であるが、埋土は周囲の7・8期の遺構と類似しており、周囲に8期の竪穴住居址が見られることから本址も8期に比定されよう。

ST31 位置：中部III 図版35

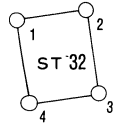


検出：II A層上面で確認した。SB74に切られ、II B層上面で検出したSB76を切る。柱配置：1間×1間の方形プランの建物である。やや南北に長い。柱穴：掘り方は方形プランで鍋底形の断面を有する。柱穴の深さは30~41cmを測る。径15cmの柱痕跡が見られ深さは20~30cmである。掘り方の埋土は灰色土を主体とし地山II A層が混じる。柱痕跡はII A層の混入の少ない部分を当てた。遺物出土状況：掘り方内より土師器甕B片、須恵器杯・甕片のほか3・4期に属する遺物も見られた。帰属時期：出土遺物や埋土の状況から6・7期に比定される。

第132図 ST29・30実測図

ST32 位置：北部 I 図版37

検出：II A層上面で確認した。柱穴の埋土の特徴から I Df層上面でも検出可能であろう。柱配置：1間×1間で南北に長い建物址である。柱穴：円形プランの建物で柱穴の径は小さい。深さは10cm前後であるが検出面を考慮すれば本来は30cm前後であろう。埋土は黄褐色土を主体とし、SB83・86に類似する。帰属時期：遺物の出土が見られず決定は困難であるが、南北を意識した主軸をもつことや埋土の特徴からSB81・83・86との関連が考えられる。

**ST33** 位置：北部 I 図版38、第133図、PL32

検出：II A層上面で検出。ST34と重複する。本址の埋土のほうが灰色が濃いため新しいと判断した。柱配置：基本的には2間×2間の建物址で、南北方向の柱間が一定なことから東西棟と判断される。桁行中央の柱は北に寄っている。また、北面のみ3間となっている。梁行中央の柱は2本ともやや西へずれている。柱穴：円形プランの掘り方で、鍋底形の断面を有する。柱穴の深さは15~27cmで周囲の建物址に比べかなり浅い。8本の柱穴で径10cm強の柱痕跡を認めている。ほぼ掘り方底に達する深さを有している。掘り方の埋土は灰色土を主体としており、柱痕跡はシルト質な部分を当てた。帰属時期：主軸方向の一致から周囲の6・7期の竪穴住居址群との関連が考えられ、ST34・35・36との切合い関係や位置関係から7期に帰属するものと判断される。

ST34 位置：北部 I 図版38、第133図、PL32

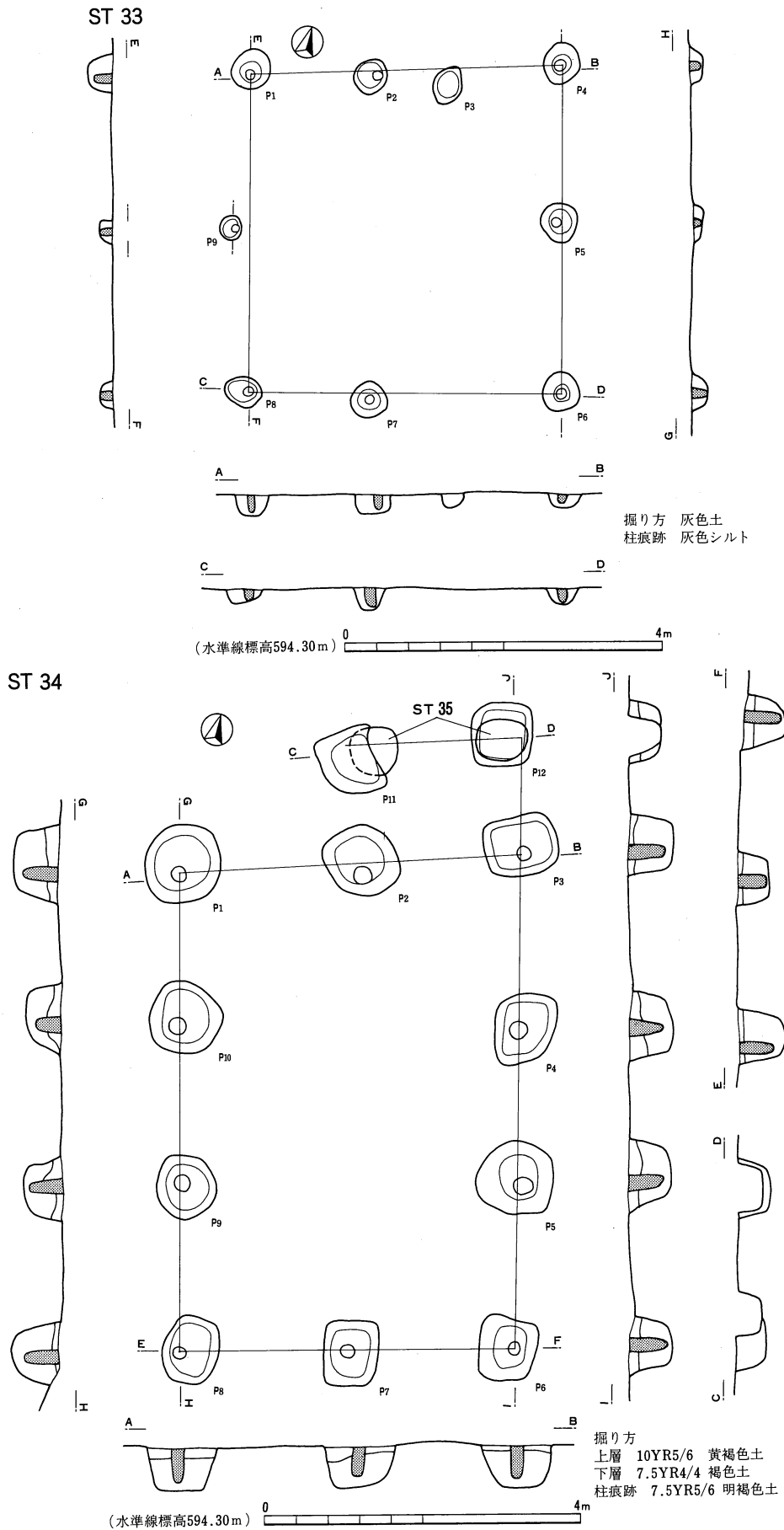
検出：II A層上面で検出。ST33・35に切られる。また、南西隅の柱穴はNR 9に浸食される。柱配置：3間×2間の南北棟の建物址で、北面に庇が付くと考えられる。柱は規則的に配置する。柱穴：隅丸方形プランの大きな掘り方を有している。断面は鍋底形で深さは35~58cmを測る。北面庇部分と南面中央の柱穴が10~20cmと浅い。庇部分の柱穴を除き径20cm前後の柱痕跡が見られた。柱痕跡は短く掘り方底より10cm浮いた位置に留まっている。掘り方の埋土は灰色土と地山の混じった褐色土で、下位には多量の砂礫が混入する。柱痕跡は灰色土を主体としている。遺物出土状況：北面中央の柱穴掘り方内より黒色土器A皿片が出土している。帰属時期：ST36とは東西両面を合わせたように並び、規模・構造も類似していることから併存した可能性が高い。

ST35 位置：北部 I 図版39、第134図、PL32・33

検出：II A層上面で確認した。ST34・36を切る。本址の埋土のほうが灰色が濃い。北はSB92と隣接する。柱配置：隅丸方形プランの大きな掘り方をもつ。北面中央の柱穴のみ円形プランで径も小さい。柱穴は鍋底形の断面を有し、深さは15~43cmを測るが、南西隅の柱穴のみ浅く、ほかは30cmを越える深さをもつ。9本の柱穴で径15cm弱の柱痕跡が見られた。深さは30cm前後で3本の柱穴で建物の自重による沈下の痕跡が認められる。また、南西隅の柱穴のみ建替えが見られる。掘り方の埋土は灰色土を主体としマンガンの斑紋が見られる。柱痕跡は掘り方に比べ粒子の細かい土である。遺物出土状況：掘り方内より須恵器甕片が出土している。そのうち1片はSD32出土のものと接合した。帰属時期：主軸方向からSB91・93などと関連すると考えられる。

ST36 位置：北部 I 図版39、第134図、PL32・33

検出：II A層上面で確認した。SB92・ST35に切られている。柱配置：3間×2間の南北棟の建物址である。柱は規則的に配置するが、梁行の柱間が桁行に比べやや長い。柱穴：隅丸方形プランで大きな掘り方を有している。断面は鍋底形を呈し、深さは43~62cmを測り、50cmを越えるものが多い。南東隅の柱穴を除き径20cm弱の柱痕跡が見られる。掘り方の埋土は灰色土と地山の混じった土で2~3分層される。柱痕跡は赤褐色を呈していた。周囲の建物と異なり掘り方最上層中にはII A層が多く混入しており、本址廃絶

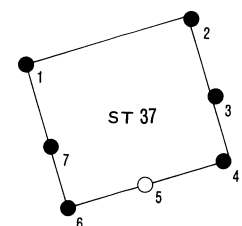


第133図 ST33・34実測図

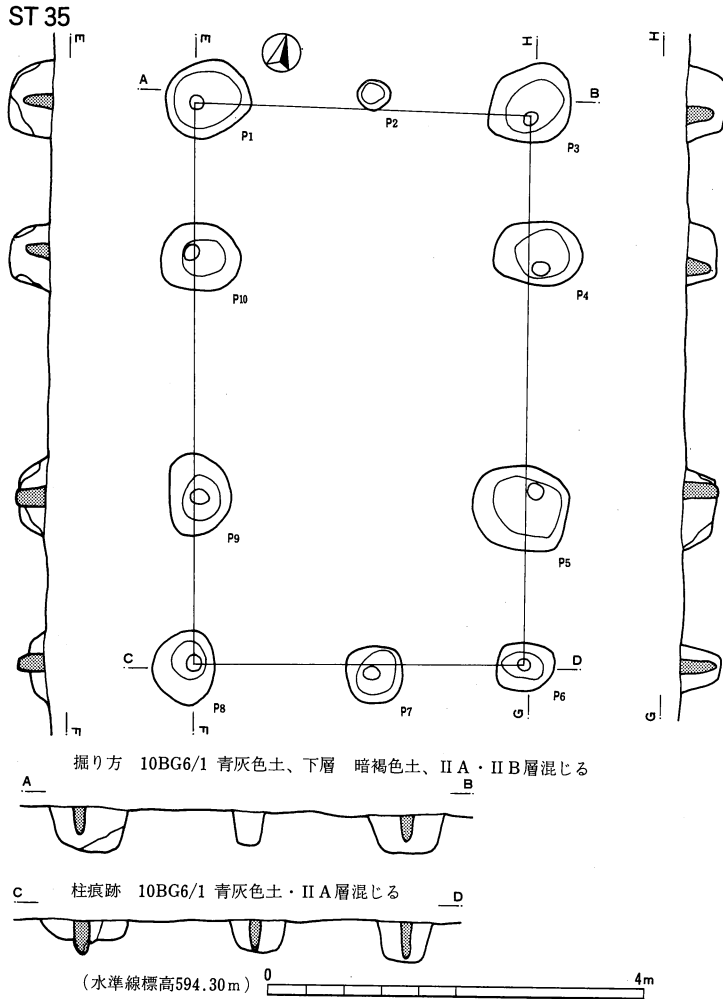
後付近は整地された可能性もある。遺物出土状況：掘り方内から黒色土器A鉢、土師器甕B片が検出された。付属施設：本址の東西両面に沿うようにSD29・30が検出されたが、覆土が本址と類似することやその位置関係から同時に存在した可能性が高い。帰属時期：切合い関係からSB92より古く位置付けられ、出土遺物の様相から6期に比定される。ST34と併存した可能性もある。

ST37

位置：北部I
図版40
検出：II B層上面で検出した。本来はII



A層上面でも検出可能であろう。SD28および土坑群と重複しているが新旧関係は不明である。柱配置：基本的には2間×2間の建物址で、東西に長く柱間も等間隔であることから南北棟に判断される。



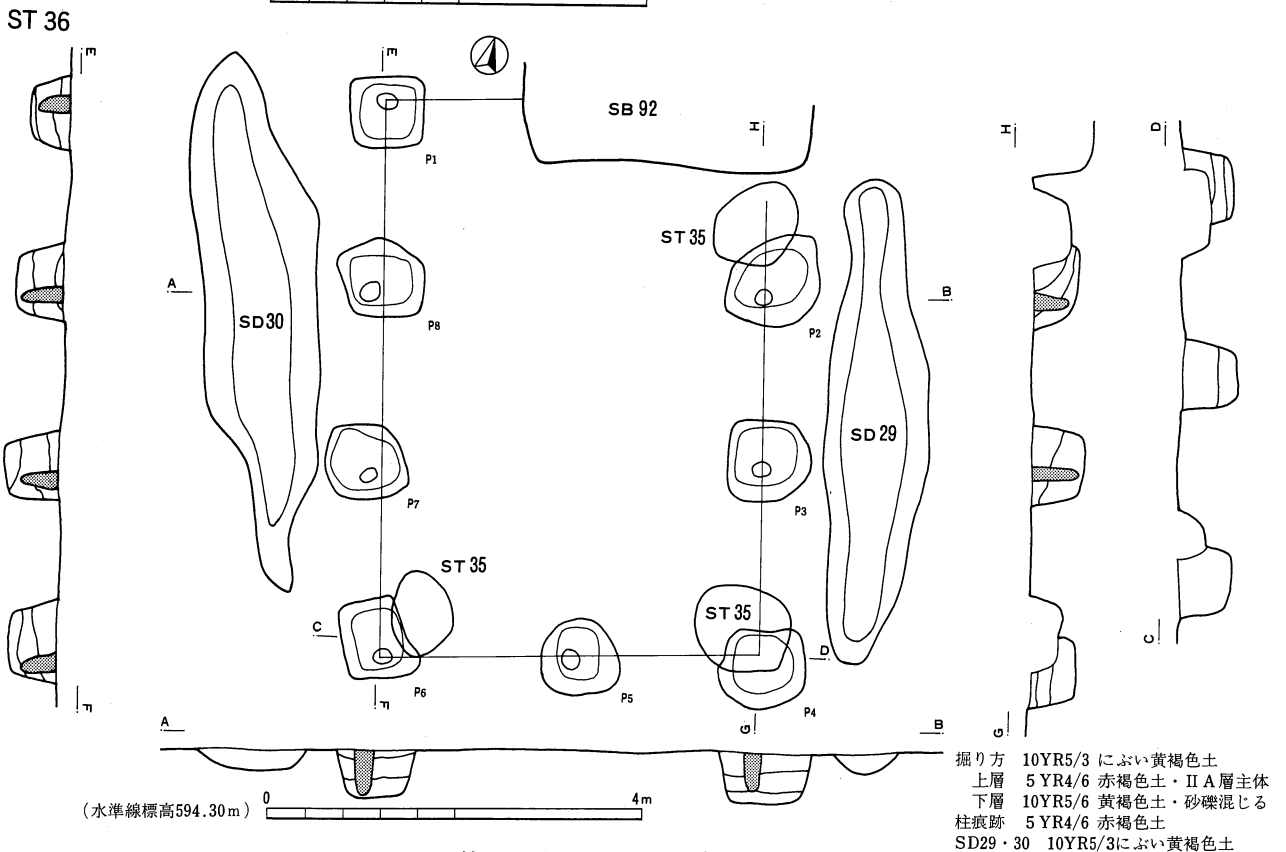
北面中央の柱を欠く。桁行南寄りの柱間が狭い。柱穴：円形・方形プランの掘り方が見られるが、基本的には方形を意識したものであろう。鍋底形の断面で深さは10~37cmを測るが30cmを越える柱穴が多い。南面中央の柱穴を除き径15cm強の柱痕跡が見られその深さは14~30cmを測る。掘り方や柱痕跡は南東隅のものが浅い。掘り方の埋土は灰色土を主体とし地山II A・II B層が混じる。柱痕跡は灰色土を主体とする。帰属時期：遺物が見られないため決定は困難であるが、主軸方向と埋土の特徴から6・7期の遺構群との関連が考えられる。

ST38

位置：北部II

図版43

検出：II A層対比の含礫泥層上面で確認した。SB111・112に切られ、SB113とも近接する。柱配置：2間×1間の方形プランの建物址と思われる。南北

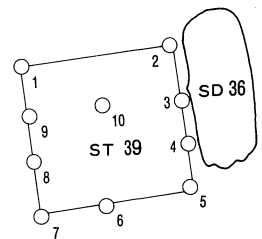
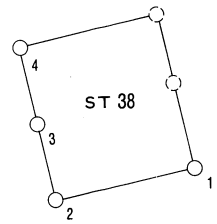


第134図 ST35・36実測図

にやや長いため南北棟の建物址であろう。柱穴：円形プランの掘り方で、断面は鍋底形である。深さは20cm強を測り、ほぼ一定である。柱痕跡は見られない。埋土は地山II B層を主体とする。帰属時期：SB111・112より古く位置付けられるが、主軸方向から7期の遺構群との関連を考える必要がある。

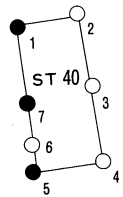
ST39 位置：北部II 図版45

検出：II A層中で確認した。SB110・119・120を切る。本址の埋土のほうが灰色が濃い。柱配置：基本的には3間×2間で、方形プランの建物址である。柱配置から南北方向が桁行と考えられる。南面中央部と建物址内の棟木の通る位置に柱穴が見られた。柱穴：円形プランの掘り方で深さは20～30cmを測る。埋土は灰色土と地山の混じった土である。遺物出土状況：掘り方内より黒色土器A鉢、須恵器杯片が検出された。付属施設：東面に沿ってSD36が確認され、併設されていた可能性がある。溝は幅広く鍋底形の断面を有し、深さは32cmを測る。溝の底面には20cm内外の凹凸が見られ、覆土最下位に砂礫が堆積することから、水流に影響されており、その上はシルト質で緩慢に土が堆積したと判断される。こうした溝の状態から雨落ち溝・排水溝といった機能が想定される。南面にも小さな溝SD35が見られるが、本址との関係は不明である。帰属時期：出土遺物・主軸方向から7期に比定されよう。



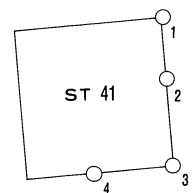
ST40 位置：北部II 図版46

検出：II A層上面で確認した。何基かの小土坑と重複している。柱配置：2間×1間の南北に長い建物址である。柱間はほぼ一定であるが、西面南側の柱間にさらに柱穴が1本加わっている(P₆)。円形プランの掘り方を持つが、ほかの建物址に比べて掘り方の規模はかなり小さい。深さは20～30cmを測るが、P₆のみ12cmと浅い。西面の柱穴で径5cm強の柱痕跡を確認した。柱痕跡の深さは10～15cmに及ぶ。掘り方の埋土は灰色土を主体とし、地山の土粒が混じる。柱痕跡は灰白色土である。帰属時期：遺物の出土が見られないため決定は難しいが、SB122・126・127・140・141などの7期に比定される遺構群との関連が注意される。



ST41 位置：北部II 図版46

検出：II B層下位からIII層上面で確認した。柱穴の埋土の特徴から本来はII A層上面でも検出可能であろう。西側は調査区域外で調査に至らなかった。柱配置：詳細は不明である。柱穴の大きさや形からST46と同じ構造を取ることも考えられる。柱穴：円形プランの掘り方を持つ。柱穴の深さは12～33cmを測る。東面中央の柱穴がやや深い。埋土は地山II A・II B層と灰色土の混じった土である。帰属時期：不明な部分が多いが、ST46との関連が注意される。

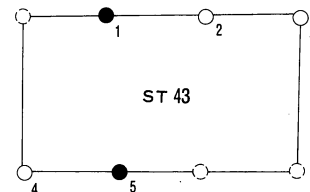


ST42 位置：北部II 図版59、第135図、PL33

検出：II A層下位からII B層上位で確認された。柱配置：3間×2間の東西棟の建物址である。建物址内の梁行方向に2基柱穴が見られ、その位置から間仕切り柱と考えられる。北面東側に柱穴が1基加わるがこれのみ浅い。柱穴：円形プランの掘り方を有する。断面は鍋底形で、深さは4～30cmを測るが、20cmを越えるものが大半である。1本を除き径15cmの柱痕跡が認められた。柱痕跡はほぼ掘り方底に達する深さを有している。掘り方の埋土は地山II A層を主体とし灰色土が混じる。柱痕跡は灰色土を主体とする。遺物出土状況：南の間仕切り柱掘り方内から須恵器甕Aの大形破片が出土している。帰属時期：出土遺物・埋土・位置から4・5期の遺構群との関連が注意される。

ST43 位置：北部II 図版48

検出：II A層上面で検出した。中世の土坑群やST45に切られ、ST44を切る。ST43・44・45の埋土は灰色土を主体としたものだが、混入する地山II A・II B層土粒の量によって切り合いを判断した。東側は調査区域外である。柱配置：5基の柱穴が確認されたのみで確定はできないが、3間×



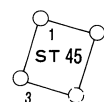
1間の東西棟の建物址と判断される。西面中央部に柱穴が加わる可能性がある(SK645・646)。柱穴：隅丸方形プランの掘り方を持ち、断面は鍋底形である。柱穴の深さは27～38cmを測る。2本の柱穴で径20cm強の柱痕跡を確認した。柱痕跡には掘り方底に達するものとそうでないものが見られる。掘り方の埋土は灰色土を主体としII A層・礫がわずかに混じるのに対し、柱痕跡は細粒の灰色土よりなる。遺物出土状況：掘り方内より黒色土器A杯・軟質須恵器杯・土師器甕E片が少量出土した。帰属時期：出土遺物・遺構配置から7期の遺構群と関連を有している。

ST44 位置：北部II 図版48、第135図

検出：II A層上面で確認した。中世の土坑群・ST43・45に切られる。柱配置：2間×2間の総柱の建物址で南北に主軸をもつと考えられる。柱間は桁行・梁行とも一定しないが、桁行のほうが差が大きい。柱穴：方形プランの掘り方で鍋底形の断面を有している。柱穴の深さは23～40cmを測る。7本の柱穴で径15～20cmの柱痕跡を確認した。その深さは20～30cmで、中央のもののみ深く40cmを測る。中央と南面中央の柱穴で3回、南東隅で2回の柱穴の重複が見られることから、柱の建替えが想定される。掘り方の埋土は灰色土を主体とし、地山II A・II B層を混じえるのに対し、柱痕跡は灰色土が主体である。遺物出土状況：柱穴掘り方内より黒色土器A杯・皿片、須恵器杯A片のほか4期以前の遺物が出土している。帰属時期：出土遺物の様相から7期に比定される。ST49とは主軸・埋土の特徴が一致し、また、東面を合せるように位置することから併存していた可能性が高い。

ST45 位置：北部II 図版48

検出：II A層上面で確認した。ST43・44を切る。南東側は調査区外に入る。柱配置：1間×1間の建物址で方形プランを呈している。柱穴：円形プランの掘り方で断面形は鍋底形である。柱穴の深さは25～33cmを測る。掘り方の埋土は灰色土で、地山II A・II B層をわずかに混じえる。柱痕跡は灰白色土である。帰属時期：本址と同様な主軸方向をもつ遺構は7・8期では見られず、埋土の特徴からも時期が下る可能性を指摘できる。



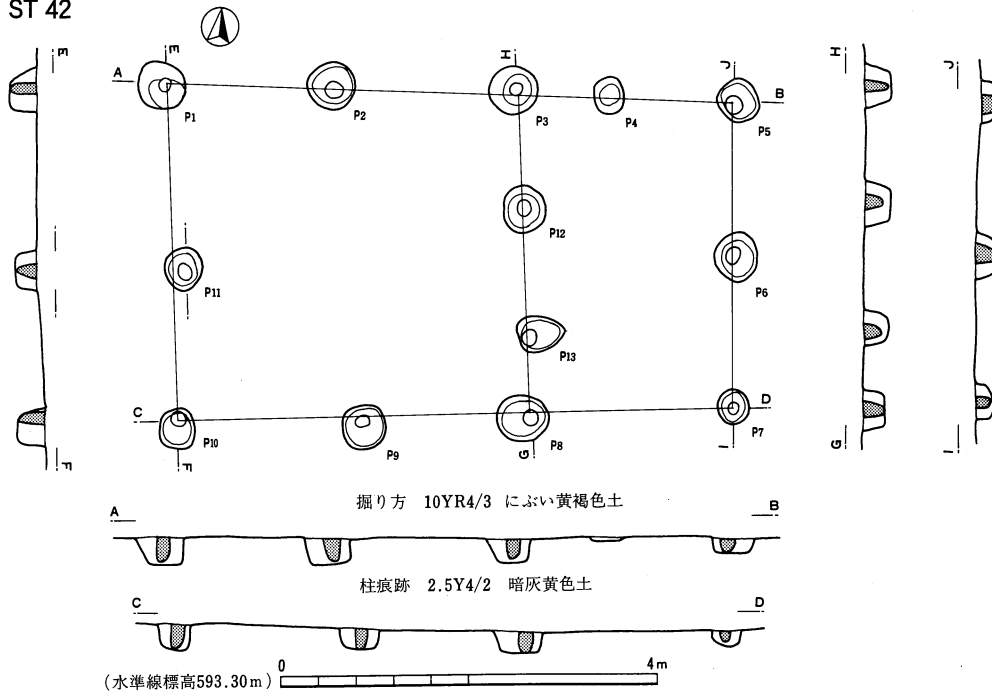
ST46 位置：北部II 図版46、第135図

検出：II B層下位からIII層上面で確認した。柱穴の埋土の特徴から本来はII A層上面でも検出可能であろう。柱配置：2間×2間の総柱の建物址である。東西方向の柱間のほうが比較的そろっているので南北棟と考えられる。柱穴：円形プランの掘り方で断面は鍋底形を呈している。柱穴の深さはほぼ一定で20cm前後を測る。埋土は地山II A・II B層と灰色土の混じった暗褐色土である。帰属時期：出土遺物を欠くため決定は難しいが、埋土の特徴や遺構配置から4・5期に属すものと判断される。

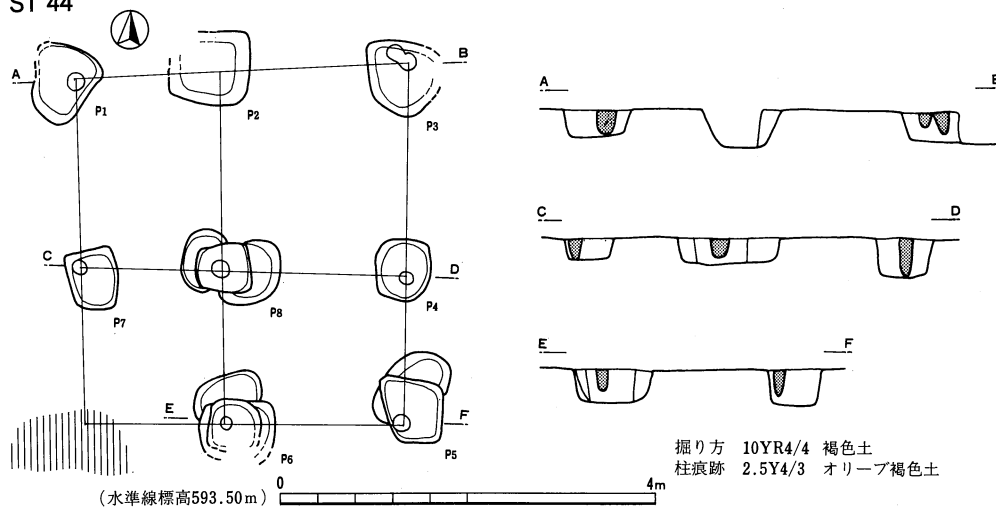
ST47 位置：北部II 図版58、第136図

検出：II B層下位からIII層上面で確認した。本来はII A層上面でも検出可能であろう。SB141・155、SD38と重複する。検出状況・埋土の特徴から本址のほうが古いと判断される。他にいくつかの土坑と重複している。柱配置：3間×3間の建物址で、建物址内にも2基の柱穴が見られる。建物址は方形プランを呈しているが、南北方向の柱間のほうが揃うことから東西棟と判断される。柱穴：掘り方は円形プランで断面は鍋底形である。柱穴の深さはほぼ一定で25～40cm測る。埋土は地山II A層・II B層を主体とし灰色土が混じる褐色土で灰色を帯びるものも見られる。帰属時期：検出状況や切合い関係から5期以前と判断

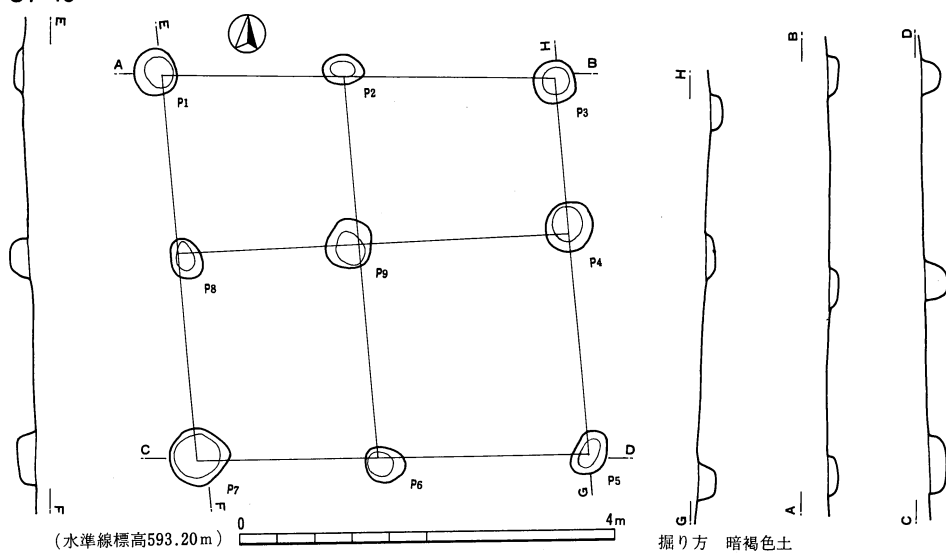
ST 42



ST 44

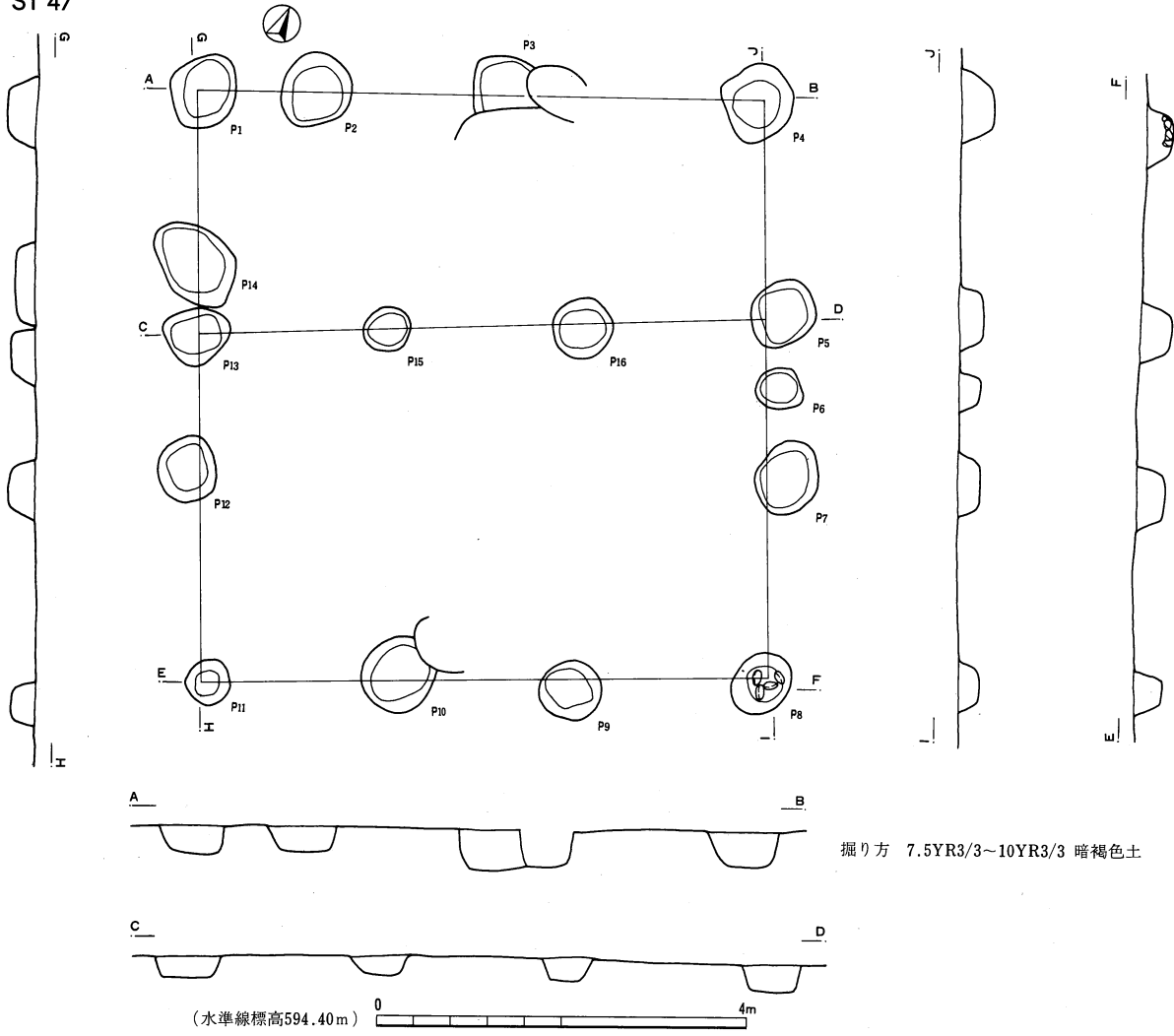


ST 46

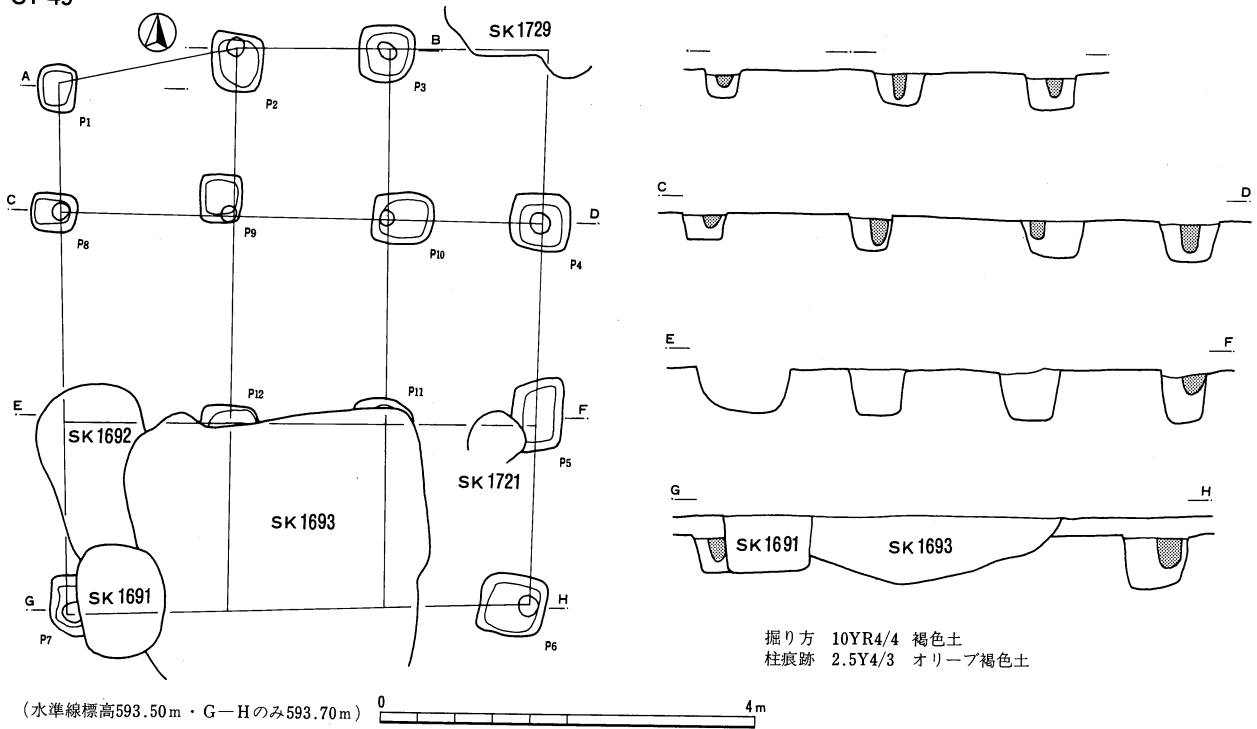


第135図 ST42・44・46実測図

ST 47



ST 49

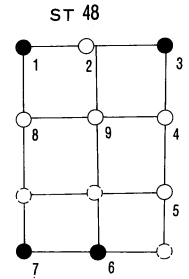


第136図 ST47・49実測図

される。主軸方向から1期の遺構群との関連が指摘される。

ST48 位置：北部II 図版48

検出：II A層上面で確認した。中世の土坑群およびST49ほか3基の土坑にも切られる。ST50とII B層上面で検出したSB145を切る。ST51とも重複している。切合い関係は混入する地山の土粒の量によって判断した。本址より新しい遺構は灰色土を主体とした埋土であるのに対し、本址はII A層の混入の割合が高い。柱配置：3間×2間の総柱の建物址で、南北棟である。桁行南側の柱間がやや狭い。柱穴：隅丸方形プランの大きな掘り方を有し、断面は鍋底形である。柱穴の深さは40～50cmを測る。3柱穴で径15cmの柱痕跡を確認している。その深さは20～38cmで一定していない。掘り方の埋土は灰色土を主体とし、わずかに地山II A層が混じる。柱痕跡は黒味を帯びた灰色土である。遺物出土状況：掘り方内より土師器杯D、黑色土器A杯片のほか1期に属す遺物が出土した。帰属時期：出土遺物の様相や埋土の特徴から7期に比定される。ST53とほぼ同構造であり、ST43・44や切合い関係をもつST49との関係も注意される。



ST49 位置：北部II 図版48、第136図、PL34

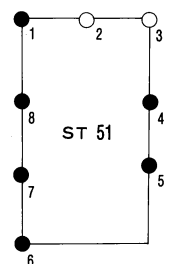
検出：II A層上面で確認した。中世の土坑群に切られる。ST48・50及びII B層上面検出のSB145を切る。ST51とも重複しており、埋土の特徴から本址のほうが新しいと判断される。柱配置：3間×3間の総柱の建物址で南北に長い。南北棟と判断される。西面の柱配置はやや不規則である。柱穴：隅丸方形プランの掘り方で鍋底形の断面を有する。柱穴の深さは30～50cmを測り、その差は地山III層上面の高低を反映したものと考えられる。7柱穴で径15cm位の柱痕跡が確認され、その深さは15～32cmで掘り方底には達していない。掘り方の埋土は灰色土を主体とし地山II A・II B層が混じった土で、柱痕跡は灰色土のみよりなる。遺物出土状況：黑色土器A杯片と1期に比定される遺物が、掘り方内でわずかに検出される。帰属時期：出土遺物・埋土の特徴や遺構配置から7期に属すと判断され、SB137・140・151と主軸が一致し、特にST44との位置関係が注意される。

ST50 位置：北部II 図版48・第137図

検出：II A層上面で確認した。中世の土坑群およびST48・49に切られる。ST51とも接している。柱配置：2間×1間で東西に長い建物址である。南北方向の柱間のほうが東西にくらべて長い。柱穴：円形と方形プランの掘り方が見られるが基本的には方形であろう。鍋底形の断面で、柱穴の深さは30cm前後で一定している。全ての柱穴で径15cm位の柱痕跡を検出した。深さは12～20cmを測るが、中央の2本のみ周囲よりも浅めであった。掘り方の埋土は灰色土を主体とし地山の土粒が混じるのに対して、柱痕跡は青灰色土を主体とする。帰属時期：主軸方向や埋土の特徴からSB136・151などとの関連が考えられる。

ST51 位置：北部II 図版48

検出：II A層上面で確認した。中世の土坑群に切られる。SB158・ST48・49・50と近接・重複しているが検出状況や埋土の特徴から、これらのなかでは本址が最も古いと判断される。柱配置：3間×2間の南北棟の建物址である。梁行に比べ桁行の柱間のほうが広い。柱穴：方形プランの掘り方で鍋底形の断面を有する。柱穴の深さは25～30cmでほぼ一定している。6柱穴で径15cm位の柱痕跡を確認した。その深さは14～19cmである。掘り方の埋土は灰色土中に多量の地山II A・II B層土粒が混じっており、柱痕跡は灰色土である。帰属時期：埋土の特徴や主軸方向から7期の遺構群との関連が考えられる。



ST52 位置：北部II 図版50、第138図

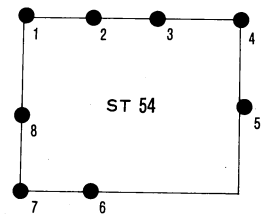
検出：II A層上面で確認した。SB138・150を切る。本址の埋土のほうが灰色土の混入が多い。柱配置：3間×2間の東西棟の建物址であるが西面中央には柱穴が確認できなかった。柱穴：方形プランの掘り方で鍋底形の断面を有する。柱穴の深さは30～47cmを測り、南西側で深くなる。全ての柱穴で径20cm弱の柱痕跡を確認しており、その深さは20～33cmで、いずれも掘り方底には達していない。なお、東面中央の柱穴のみ円形で小さいものになっている。掘り方の埋土は灰色土を主体としている。柱痕跡は黒味を帯びた灰色土であった。帰属時期：検出状況・埋土の特徴からSB138・150・151より新しく、またST55～59・61と主軸が一致していることから8期に比定される。

ST53 位置：北部II 図版49、第137図、PL29・36

検出：II A層上面でSB154を切って確認された。柱配置：3間×2間の総柱の建物址である。柱は規則的に配置される。柱穴：隅丸方形プランの大きな掘り方を持つ。断面形は鍋底形で深さは60～76cmを測る。建物址内部の2柱穴のみ35～40cmと浅い。全ての柱穴で径30cm強の柱痕跡を確認しており、掘り方底部にまで達しているものが多い。掘り方の埋土は灰色土を主体とし地山II A・II B層・砂礫の混入が見られ、2・3分層が可能である。柱痕跡は粘質で砂礫の含まない灰色土で明瞭に検出された。遺物出土状況：10基の柱穴掘り方内から黒色土器A杯、須恵器杯・杯蓋B・甕、軟質須恵器杯・灰釉陶器碗片が出土した。帰属時期：出土遺物・埋土の特徴から7期に比定され、主軸方向や遺構配置からSB151・SD38・ST48などとの関連が考えられる。

ST54 位置：北部II 図版51

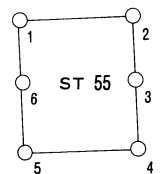
検出：II A層上面で確認した。SB161・ST55・59と近接している。南東部は調査区域外である。柱配置：3間×2間の東西棟の建物址と判断される。梁行中央の柱穴は2基とも東へややずれる。柱穴：隅丸方形プランの掘り方で、鍋底形の断面である。柱穴の深さは23～37cmで、30cm前後でほぼ一定している。全ての柱穴で径10～20cmの柱痕跡を確認した。その深さは20cm強である。掘り方の埋土は灰色土を主体とし、炭粒・砂礫が混じる。柱痕跡は黒味を帯びた灰色土である。



遺物出土状況：掘り方の埋土内より土師器・須恵器甕片が検出された。帰属時期：出土遺物や埋土の特徴から7期に比定され、主軸方向や位置関係からST48～51・60などとの関連が考えられる。

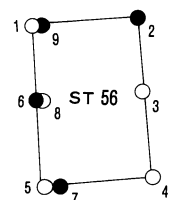
ST55 位置：北部II 図版51

検出：II A層上面で確認した。SB161・ST54と近接している。柱配置：2間×1間で南北に長い建物址である。柱穴：円形プランの掘り方で断面は鍋底形である。柱穴の深さは20～29cmを測る。東面北側の2柱穴では底部に幼児頭大の円礫が見られた。掘り方の埋土は灰色土を主体とし砂礫が混じる。遺物出土状況：南西隅の柱穴より黒色土器A杯片が出土している。帰属時期：主軸方向や埋土の特徴からST56・57・61との関連が考えられる。

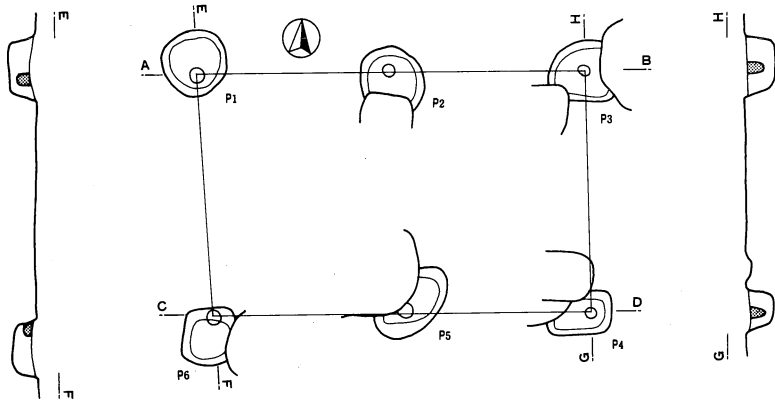


ST56 位置：北部II 図版50

検出：II A層上面で確認した。ST57と重複しており、SB158・159とも近接する。柱配置：2間×1間で南北に長い建物址である。西面の柱穴が重複しており柱の建替えが想定される。柱穴：掘り方は1基を除き円形プランで、鍋底形の断面を有する。柱穴の深さは10～40cmを測るが、南ほど深い。4基の柱穴で径15～29cmの柱痕跡が確認された。柱痕跡の深さは7～23cmを測る。掘り方の埋土は灰色土を主体とし地山II A層が混じる。柱痕跡は青灰色土であった。遺物出土状況：9基の柱穴の掘り方内より須恵器杯・甕・壺・軟質須恵器杯、灰釉陶器碗片が出土した。帰属時期：出土遺物の様相から7期に比定され、ST59



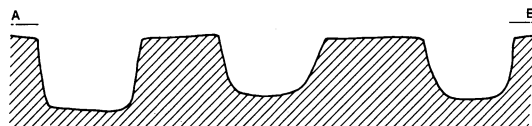
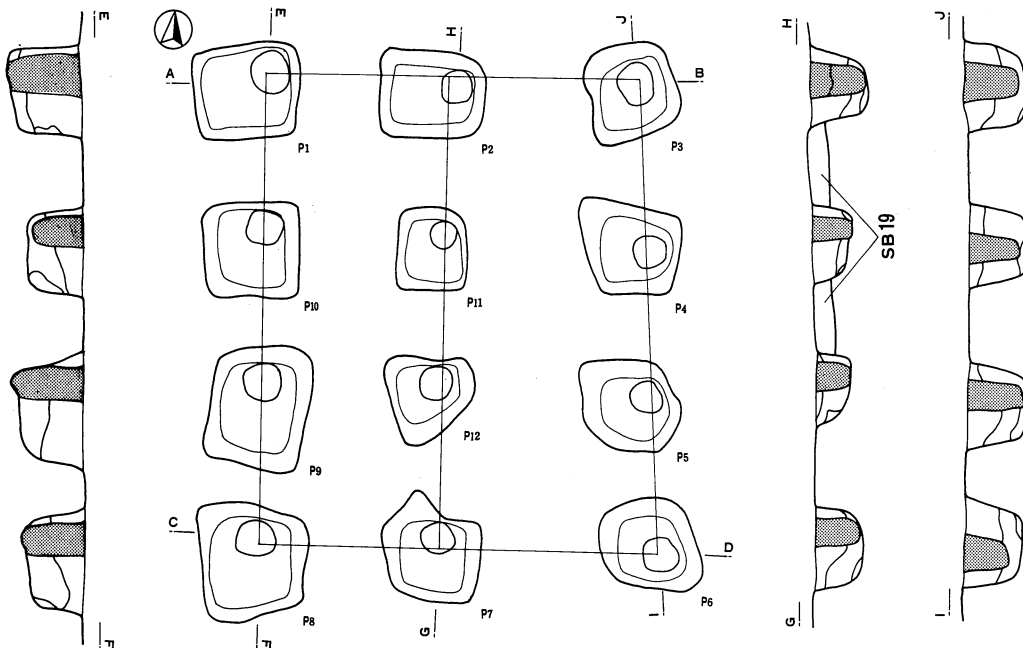
ST 50



掘り方 10YR4/4 褐色土
柱痕跡 2.5Y4/4 オリーブ褐色土

(水準線標高593.50m) 0 4m

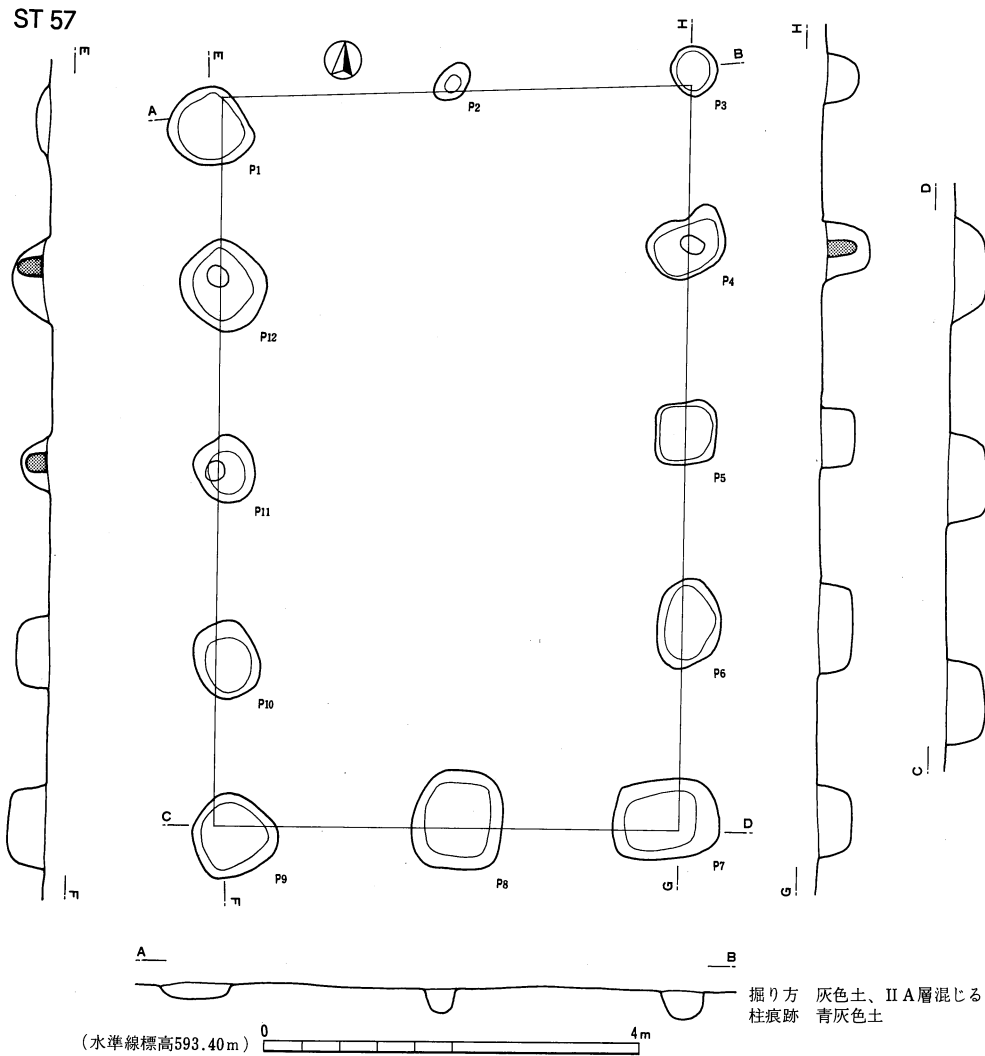
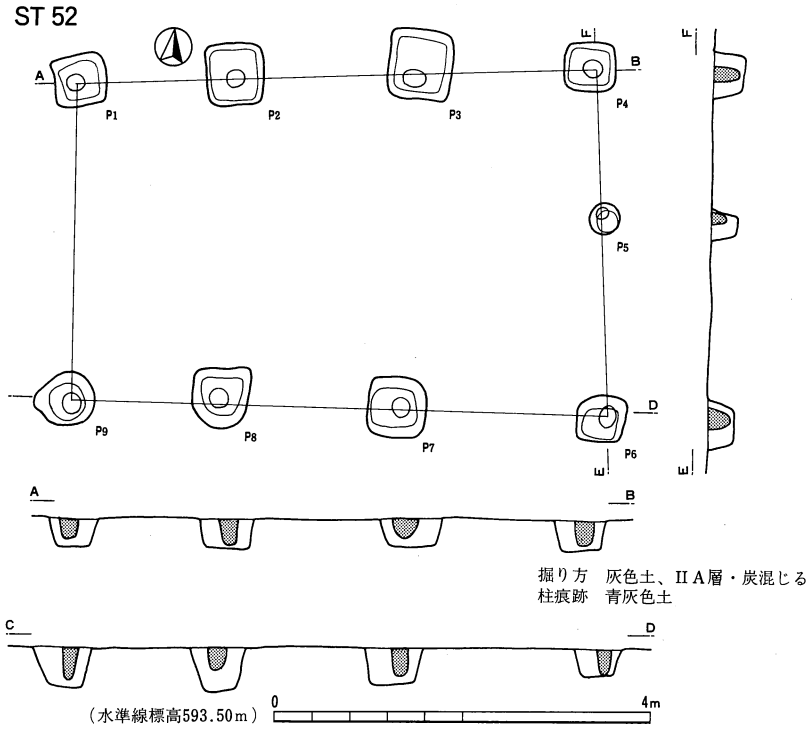
ST 53



掘り方 明褐色土、砂礫・II A層混じる
上層 褐色土
中層 黄褐色土、II B層主体
下層 黄褐色土、II B層主体
柱痕跡 灰褐色土

(水準線標高593.10m) 0 4m

第137図 ST50・53実測図



・61と主軸方向
が一致しており
関連が考えられ
る。

ST 57

位置：北部II
図版51、第138

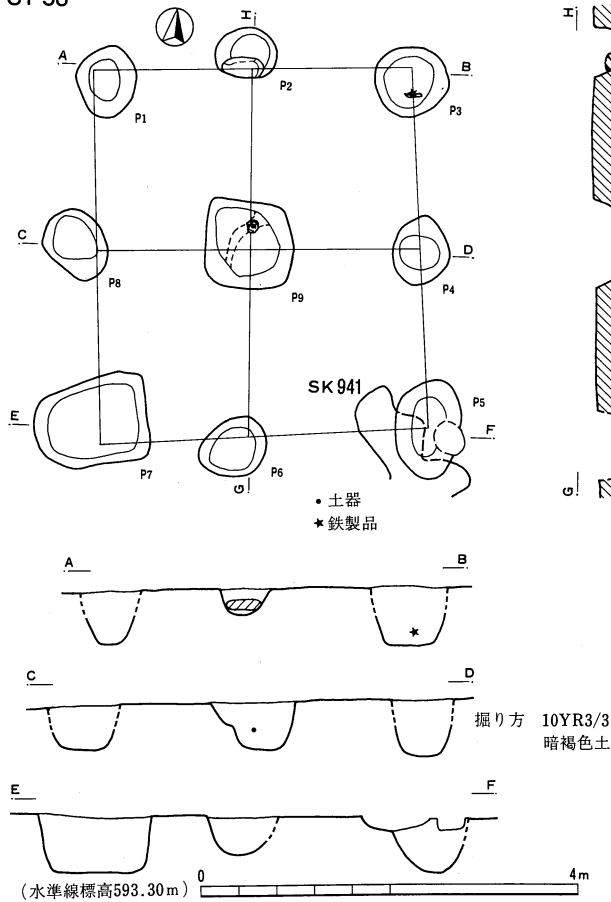
図、PL34

検出：II A層上
面で確認した。
SB143を切り、
ST56ほか小土
坑とも重複して
いる。検出時に
は本址の埋土の
ほうが灰色が濃

かった。柱配
置：4間×2間
の南北棟の建物
址である。柱穴：
掘り方には円形
と方形プランの
双方が見られる
が、円形のほう
が多い。断面は
鍋底形で深さは
30～47cmを測り、
北面の3柱穴の
みやや浅い。3
基の柱穴で径20
cm位の柱痕跡を
確認している。
柱痕跡の深さは
23～37cmで一定
していない。掘
り方の埋土は灰
色土を主体とし、
柱痕跡は青灰色
土であった。遺
物出土状況：掘

第138図 ST52・57実測図

ST 58



り方内より7・8期に比定される遺物が少量出土している。帰属時期：主軸方向・埋土の特徴からST52・55・59・61との関連が考えられる。

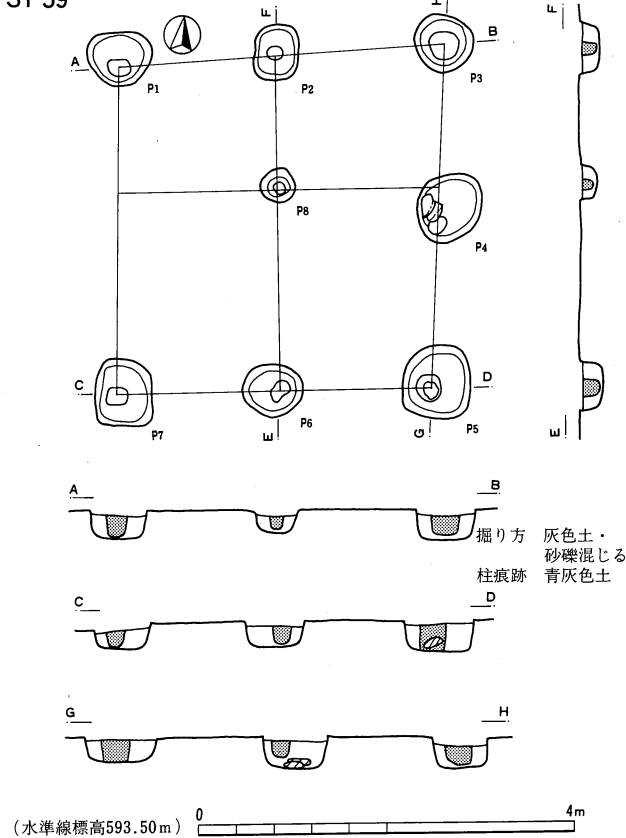
ST58

位置：北部II

図版52、第139図

検出：II A層上面で確認した。SK941に切られSK939を切る。柱配置：2間×2間の総柱の建物址であるが、南北にやや長いことや柱穴の深さから南北棟と判断される。柱穴：円形プランの掘り方で建物址の規模にくらべて大きなものが多い。鍋底形の断面で深さは50~60cmを測るが、北面中央と南面中央の柱穴のみ29cm・40cmと浅い。前者の柱穴では底部付近に人頭大の扁平な円礫が見られた。掘り方の埋土は灰色土を主体とし地山II A・II B層が混じる。遺物出土状況：5基の柱穴内から黒色土器A椀(2)、須恵器杯・壺・甕、土師器甕片などが出土した。また北東隅の柱穴掘り方内より鉄製の鎌(18)が出土している。帰属時期：出土遺物や埋土の特徴から7期に比定される。

ST 59



ST59

位置：北部II

図版51、第139図、PL35

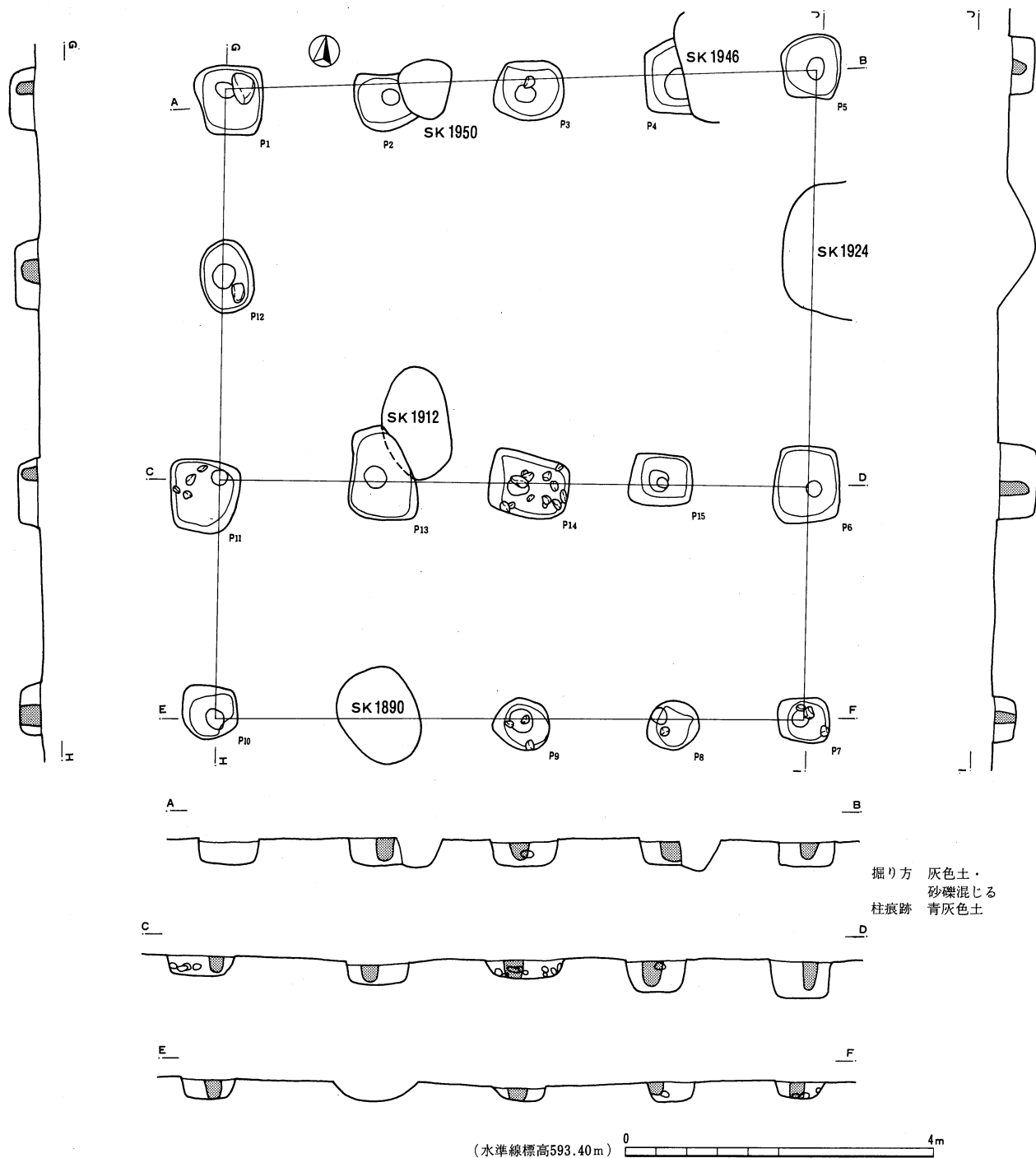
検出：II A層上面で確認された。SB161・ST54と近接している。柱配置：基本的に2間×2間の総柱の建物址である。南北にやや長く東西方向の柱間のほうが揃っていることから南北棟と判断される。柱穴：方形と円形の掘り方が見られるが、方形プランのほうが多い。断面は鍋底形で、柱穴の深さは30cm前後を測るが北面中央の柱穴のみ17cmと浅い。全ての柱穴で径15~20cmの柱痕跡を確認した。それぞれ掘り方底に達する深さを有している。掘り方の埋土は灰色土を主体とし砂礫が混入している。柱痕跡は青灰色を呈していた。遺物出土状況：2基の柱穴内から黒色土器A椀、須恵器杯片が出土した。帰属時期：出土遺物の様相や埋土の特徴から7・8期と推定される。主軸方向がST55・61と一致している。

ST60

位置：北部II

図版51

第139図 ST58・59実測図

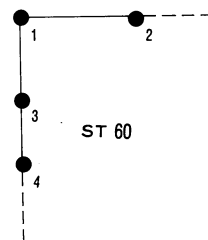


第140図 ST61実測図

検出：II A層上面で確認した。本址の大半が調査区域外のため、規模や柱配置は不明である。柱穴：方形プランの掘り方で断面は鍋底形である。柱穴の深さは28~35cmを測る。全ての柱穴で径20cm位の柱痕跡が確認され、その深さは30cm前後でほぼ一定である。掘り方の埋土は灰色土を主体とし砂礫が混入する。柱痕跡は青灰色土である。遺物出土状況：柱穴掘り方内より須恵器甕片が出土した。帰属時期：埋土の特徴や主軸方向からST48~51・54との関連が考えられる。

ST61 位置：北部II 図版53、第140図、PL35

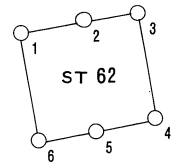
検出：II A層上面でSB164を切った状態で確認された。本址の埋土は灰色土を主体とするのに対して住居



址は地山II A層の混入が多い。4基の柱穴が中世の土坑に切られている。また、SK1224と切り合うが埋土は本址と同様であり、位置関係から同時に併存した可能性もある。さらに、SN 2を切っている。SN 2は本址内では検出されていないことから、本址構築時に整地され消滅したと判断される。柱配置：4間×2間の建物址で南面は庇葺きと考えられる。柱穴：隅丸方形プランで規模は大きい。鍋底形の断面で深さは20～44cmを測るが、身舎部分では40cm前後を測り、庇では20～28cmとやや浅くなる。径20～30cmの柱痕跡が全ての柱穴で確認された。柱痕跡は掘り方底に達する深さを有している。掘り方の埋土は灰色土を主体とし砂礫が混入する。掘り方中に人頭大の礫が見られる柱穴もある。柱痕跡は青灰色であった。遺物出土状況：北東隅の柱穴掘り方内より黒色土器A杯・土師器甕B片が見られた。本址と重複するSK1225および中世の土坑のSK1927の覆土中で「東」「寺」と墨書された土器が出土しているが、これらは本址に帰属する可能性もある。SB164の覆土中でも「東」が見られるが、この墨書が盛行する時期が8期と判断されることから、本址からの混入とも考えられる。帰属時期：切合い関係からSB164より新しく位置付けられ、また出土遺物・埋土の特徴から8期と判断される。ST55～57・59などと主軸の一致が見られる。また、墨書「東」が本址に帰属するならば、位置的にもSB147との関係が注意される。

ST62 位置：北部II 図版62、PL35

検出：II B層上面で確認された。II A層上面検出のSN 1に切れ、II B層上面検出のSD40を切っている。本来はII A層上面でも検出可能であろう。柱配置：2間×1間の東西棟の建物址と判断される。柱穴：円形プランの掘り方で、断面は鍋底形である。掘り方の深さは20cm前後でほぼ一定である。埋土は地山II A層・II B層を多量に混入する灰色土である。帰属時期：埋土の特徴から時期が上の可能性が高いが、主軸方向はST 56・57などの遺構群と一致している。



3 溝址

概観

分布：本遺跡では44本にのぼる古代の溝址が確認された。また、本遺跡には河川の痕跡と理解される不整形なプランの砂礫層・砂層も存在するが、これらは自然流路(NR)として扱い、砂礫を覆土に持つものでもほぼ一定の深さと幅を有し、直線的に走るものは人工的に開削されたと判断して溝址と扱った。44本の溝址は南部地区に13本、中部地区に14本、北部地区に16本、北端地区に1本存在し、そのほかの遺構分布と同様に北端地区では少ない。規模・形状：20mを越える長い溝址は11本認められ、その諸属性から水路、あるいは集落を区画する機能を有していたと考えられる。直線的に伸びるものがほとんどであるが、湾曲が見られたり屈曲する溝も見られる。幅は1m以下が大半であるが、逆に2mに近い幅を持つSD30・40は特異な存在である。帰属時期：遺物の検出された溝は少なく、遺構間の切合い関係も希薄なため、覆土の特徴・主軸方向・遺構配置から判断せざるをえないが、推定不可能な溝址も多い。機能：覆土の特徴から水流・滞水があったと判断される溝もあるが、比較的短い溝では何に使われたか不明なものも多い。SD 1・29・30・36は掘立柱建物址に併設された雨落ち溝・排水溝と判断される。

SD 1 位置：南部I 図版13

検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。ST 1と隣接している。規模・形状：長さ4.2m、幅0.5m弱の規模を有する。東側でやや膨らむ部分が見られる。断面はD字形を呈し、深さは10cm位であった。底面は平坦である。覆土：灰色土を主体とし砂礫が混じるが、水流・滞水の痕跡は認められない。遺物出土状況：覆土中より土師器甕B片(1)が出土した。帰属時期：出土遺物の様相から4・5期に比定される。また、

覆土の特徴や位置関係からST 1 と併存した可能性が高い。

SD 2 位置：南部 I 図版13

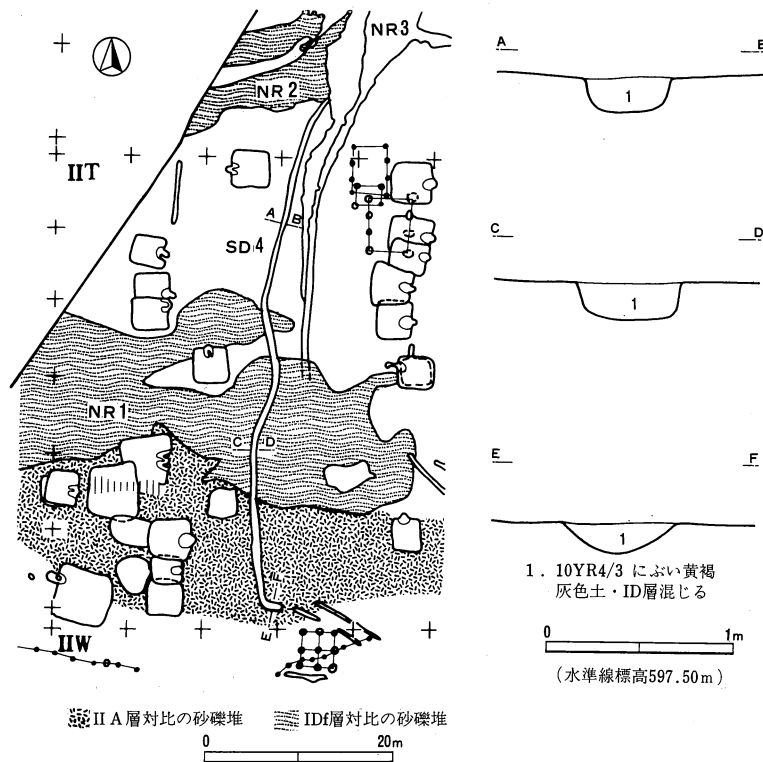
検出：II A層に対比される含礫泥層上面で灰色土が落ち込む。SA 2 と重複しているが新旧関係は不明である。規模・形状：長さ8.3m、幅0.2m内外である。断面はU字形を呈し、深さは10cm弱である。底面は平坦であった。覆土：灰色土を主体とし砂礫が混じるものの水流の影響は認められない。帰属時期：出土遺物が見られず決定は困難である。1.2mの間隔を置いて同規模にSD 3 が並走している。また、SD 4 との位置関係も注意される。

SD 3 位置：南部 I 図版13

検出：SD 2 とに同様II A層に対比される含礫泥層上面で灰色土が落ち込む。規模・形状：長さ8.2mを測り、幅・断面形さらに覆土の特徴もSD 2 と同様である。帰属時期：出土遺物がなく不明ではあるが覆土の特徴が一致することからSD 2 と併存していたと判断される。

SD 4 位置：南部 I・II 図版15・16、第141図

検出：I Df層上面およびそれに対比される含礫泥層上面で灰色土が落ち込む。規模・形状：長さは55mに達し、幅0.35~0.75mの規模を有する。断面はD字形を呈し、深さは20cm弱でほぼ一定している。底面の標高には10cmほど差が見られるが、南北両端の比高差は4cmに過ぎない。中央部ではI Dfに対比される砂礫層(NR 1)の堆積によって形成された微高地を回避するようにやや東に湾曲している。また、本址の南端は東へ屈曲している。覆土：灰色土を主体とし青灰色土・I Df層・砂礫が混じる。底面近くに砂粒の集積が見られ、マンガンが沈着していた。帰属時期：I Df層堆積後に本址は掘られており、周辺の7・8期の遺構群の配置と関連を有している。所見：本址はNR 5・6・7(小境沢)から分岐し南へ流れていたと判断される水路(NR 3)から分岐してこれと並行しており、NR 3 と同様に北から南へ水を流していたと考えられる。また、I Df層の堆積によってNR 3 が埋没したあと、この自然流路の機能を補完するために本址が開削されたものと推定される。



第141図 SD 4 実測図

SD 5 位置：南部 I

図版14

検出：II A層上面で灰色土が落ち込む、規模・形状：長さ3.3m、幅0.4~0.5mの小規模な溝である。深さは20cm強を測り、断面はD字形を呈している。底面は平坦であった。覆土：灰色土を主体とし、地山II A層・砂礫が混じる。帰属時期：出土遺物がないため不明であるが、埋土の特徴や主軸方向の一致からST 2・3、SA 3 などの遺構群との関連が考えられる。

SD 6 位置：南部 I

図版15

検出：II A層上面およびI Df層に対比される含礫泥層上面で灰色土が

落ち込む。規模・形状：長さ5.5m、幅0.3m強の規模を持つ。断面はD字形を呈し、深さは10cm位で底面は平坦である。覆土：灰色土を主体とすし地山II A層・砂礫が混じる。帰属時期：出土遺物がなく不明である。本址の1.5m北に同方向の主軸をとるSD7が並行しており関連が考えられる。

SD7 位置：南部I 図版15

検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。検出状況はSD6と同様であった。規模・形状：長さ1.4m強、幅0.5mの規模を有する。断面はD字形を呈し、深さは10cm強を測る。底面は平坦であった。覆土：灰色土を主体とし砂礫・地山II A層が混じる。SD6と形状・覆土が類似している。

SD8 位置：南部II 図版15

検出：I Df層上面で灰色土が落ち込む。規模・形状：長さ1.4m、幅0.3mの規模を有する。断面はD字形を呈し、深さは10cm強を測る。底面は平坦であった。覆土：灰色土を主体とし砂礫が混じる。帰属時期：出土遺物が見られず不明ではあるが、主軸方向や覆土の特徴からSB16・17・19、SD9・10との関連が想定される。

SD9 位置：南部II 図版17

検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。規模・形状：長さ9.2m、幅0.3～0.55mの規模を持つ。南端部は東に直角に折れ曲がっている。断面はD字形を呈し、深さは10cm強であった。底面は平坦である。覆土：灰色土を主体とし砂礫・地山II A層が混じる。帰属時期：出土遺物がなく決定は困難であるが、主軸方向や覆土の特徴からSB16・17・19との併存が予想される。本址の東側に1.8mの距離を置きSD10が並行している。また、本址の東側に深さ20cmの円形の土坑（SK93）が隣接している。

SD10 位置：南部II 図版17

検出：I Df層上面で灰色土が落ち込む。規模・形状：長さ2.3m、幅0.6mの規模を有している。断面はD字形を呈し、深さは5cm強であった。底面は平坦である。覆土：灰色土を主体としている。帰属時期：出土遺物がなく不明であるが、主軸方向・覆土の類似からSD9との併存が考えられる。

SD11 位置：南部II 図版16

検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。規模・形状：長さ7.1m、幅0.4mの規模を有している。断面はD字形を呈し、深さは20cm弱を測る。本址の南北両端の底面には比高差が10cm見られ、南側が高い。覆土：灰色土と地山II A層が混じり合う。帰属時期：出土遺物は検出されていないが、主軸方向・遺構配置から5期に比定され、SB26・28との併存が想定される。

SD12 位置：南部III 図版21

検出：II A層上面で灰色土が落ち込み、SB39を切った状態で検出された。SB40とも近接している。規模・形状：長さ3.0m、幅は一定しないが0.4～0.9m弱の規模を有し、南北に延びる溝であるが北側はやや西に屈曲する。深さは10～20cmを測り、底面には深さ5cm位の小さな凹みが多く見られる。覆土：青灰色土を主体とし地山II A層の土粒が混じる。遺物出土状況：覆土中より土師器甕B片(1)が出土している。帰属時期：出土遺物の様相や覆土の特徴からSB37・40などとの併存が想定される。

SD13 位置：南部III 図版21・23・24

検出：II A層上面で青灰色土が落ち込む。NR7に浸食される。また、ST10を切っている。東側は用地外で調査に至らなかった。規模・形状：途中でとぎれているが全長は40m以上に達する東西方向に延びる溝で、本址の西寄りでは南北方向に長さ6.5mほど分岐した部分が見られ、全体ではT字形を呈している。幅は0.5m～1.2m、断面はD字形で深さは10cm強を測る。底面はほぼ平坦であった。覆土：淘汰の良い灰色土を主体とするが、II A層土粒も多く混じり、水酸化鉄の斑紋が見られた。帰属時期：切合い関係からST10より新しく位置付けられ、I Df層の堆積以前である。所見：水流のあった痕跡は見られないものの

NR6・7と並行していること、さらに、本址の北側ではII A層上面で土壌の灰色化現象が観察され、水田化されていた可能性があることから、本址はこの付近を流れていた自然流路から取水し北側へ水を落とした用水路と想定される。

SD14 位置：南部III 図版23

検出：I Df層上面で青灰色土が落ち込む。SK150に切られる。検出状況はSD15～18と同様である。また、SD13の覆土よりは青灰色土が濃かった。規模・形状：全長5.5mを測る。中央部で屈曲しており、くの字形を呈している。幅は50cm強、深さは5cmを測る。覆土：青灰色土を主体とする。帰属時期：検出状況からはSD13より新しいと判断される。SD15～18と併存していた可能性もあるが、それらの性格は不明である。

SD15 位置：中部I 図版24・26

検出：II A層上面で青灰色土が落ち込む。直接的な切合い関係ではないものの、検出面の状況からはST13・SA5よりは新しいと判断される。規模・形状：長さ21m以上で、幅1.0～1.2mの規模を有している。深さは10cm弱で断面は弓形を呈している。底面は平坦である。覆土：青灰色土を主体とし、地山II A層が混じる。水流等の痕跡は見られない。帰属時期：検出状況から中部I地区の古代面では一番新しいと判断される。

SD16 位置：中部I 図版24・25

検出：II A層上面で青灰色土が落ち込む。SD15と同様の検出状況であった。規模・形状：長さ8.5m、幅0.45～0.65mの規模を有し、中央部では屈曲しており、くの字形を呈したプランである。北側はSD15と主軸方向が同一である。深さは20cm弱を測り、断面はD字形を呈している。底面は平坦であった。覆土：青灰色土を主体としており、主軸方向や覆土の特徴からSD15と併存した可能性がある。

SD17 位置：中部I 図版23

検出：II A層上面で青灰色土が落ち込む。西側は調査区域外で調査に至らなかった。規模・形状：調査された部分で長さ5.6m、幅3m弱の規模を有する。断面はD字形を呈し、深さは10cm弱であった。底面は平坦である。覆土：SD15と同様に青灰色土を主体とする。北側に本址と同規模のSD18が並走しており関連が考えられる。

SD18 位置：中部I 図版23

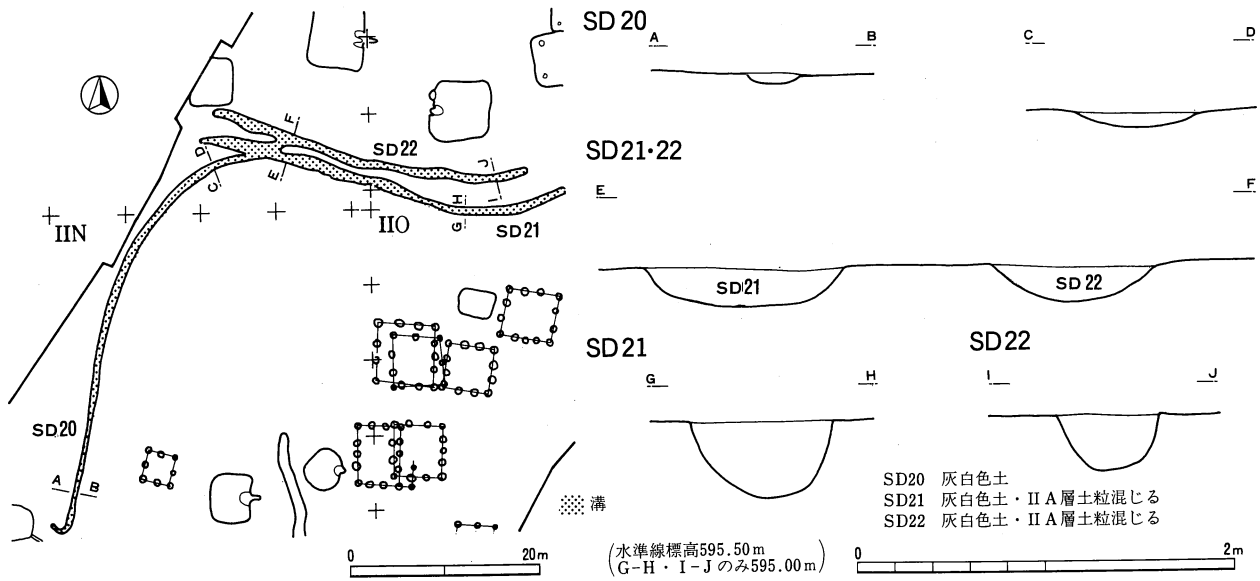
検出：SD17と同様の検出状況でII A層上面で青灰色土が落ち込む。西側は調査区域外で調査に至らなかった。規模・形状：調査された部分で長さ6.9m、幅0.4～0.5mの規模を有する。断面はU字形を呈し、深さは10cm弱である。底面は平坦であった。主軸方向、覆土の特徴ともSD17と同様であった。

SD19 位置：中部I 図版25

検出：II B層上面で灰白色土が落ち込む。SK156と接続しており覆土もSK156の下位部分と同様であった。規模・形状：長さ11.1m・幅0.35mの規模を有している。断面はU字形を呈し深さは5cmを測る。底面は平坦であった。覆土：灰色土を主体とし、地山II A層が混じる。底面には水酸化鉄・マンガンが沈着している。帰属時期：SK156が1期に比定されることから本址も同時期と考えられる。所見：SK156は排水を目的とした施設と判断され、本址はSB49付近からSK156へ雨水を流す排水路の機能を果たしていたと判断される。

SD20 位置：中部I 図版5・25・27、第142図

検出：II B層上面で灰白色土が落ち込む。北端部分でSD21・22と重複している。規模・形状：全長は50mに近く、幅0.4～0.9mの規模を有している。南側では南北に主軸を取るが、北半部では東方向に湾曲しつつSD22に接続している。また、南端部ではSK156方向に向かって釣り針状に屈曲している。南北両端の底面の比高差は30cm強に達し、SK156の存在する南側が高い。覆土：灰色土を主体とし地山II A層が混



第142図 SD20・21・22実測図

入する。水流の痕跡は見られなかった。帰属時期：SK156を意識して構築されていることや松本市教委調査部分(県道部分)の遺構配置・SD21・22との切合い関係から1期に比定されよう。

SD21 位置：中部II 図版6、第142図

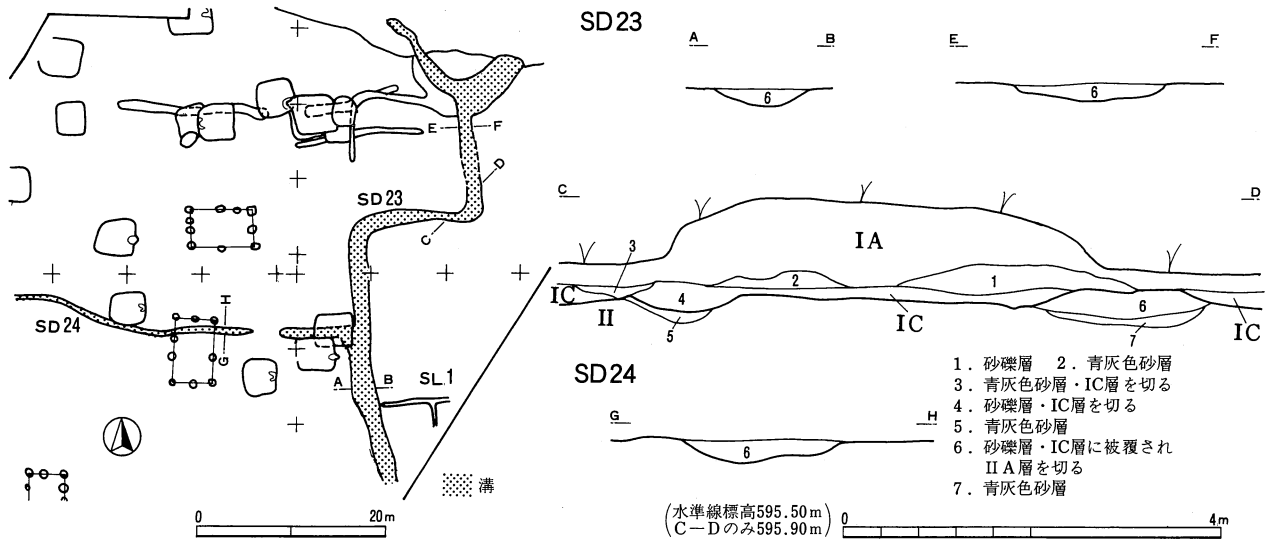
検出：II B層上面で灰白色土が落ち込む。SD20を切る。またSD22と隣接している。本址の覆土はSD20・22より灰色が濃く明瞭に検出できた。規模・形状：全長40mに達し、幅は一定しないが0.55~1.20mの規模をもつ。断面はD字形を呈し、深さは20cmを測る。東西両端の底面には50cm近い比高差が見られ西側が高い。覆土：灰色土を主体とし地山II A層が混入する。水流の痕跡は見られない。帰属時期：出土遺物がなく不明確であるが、覆土の特徴や周囲の遺構配置から2期に比定される。所見：本址は中部II地区の1・2期の住居址群と中部I地区の掘立柱建物址群の分布域の境界部に位置しており、集落内部を区画する機能を有していたと考えられる。

SD22 位置：中部II 図版6・29、第142図

検出：II B層上面で灰白色土が落ち込む。本址西寄りSD20と接続している。規模・形状：全長34.4mにおよび、幅は0.7~1.4mを測りSD21と同様の規模を有している。断面はD字形を呈し、深さは20cm位を測る。溝の東西両端で40cm弱の比高差を有し、西側が高い。覆土：灰色土を主体とし、地山II A層が混入する。水流の痕跡は見られない。帰属時期：出土遺物がなく不明確であるが、SD21より古く位置付けられることからSD20と同じく1期に比定されよう。本址もSD21と同様に集落内部を区画する機能を負っていたと判断される。

SD23 位置：中部II・III 図版6・32・35、第143図

検出：II A層上面で青灰色を呈した砂礫が落ち込む。本址南寄りSD24と接続している。SB63・NR 8を切る。また、SL 1と隣接している。南側は調査区域外で調査に至らなかった。規模・形状：NR 8上で検出された部分は二股に分かれており、この付近を東流する河川(宮沢)に接続していたと考えられる。また、中程でクランク状に折り返している。調査された部分で全長60mに達し幅は1.5~2.2mの規模を有している。断面は弓形を呈し深さは20cm強を測る。底面は平坦で比高差はほとんど無い。覆土：青灰色砂礫を主体とし、一部で確認された下層は砂のみよりなる。遺物出土状況：覆土中から須恵器杯(1・2)、灰釉陶器碗(3)、白磁碗片(4)が出土した。帰属期間：切合い関係からSB63より新しく位置付けられ、出土



第143図 SD23・24実測図

遺物の様相から15期に比定される。所見：本址と接続するSD24は西から本址へ水を流していたと判断され、また、SL1との位置関係から、本址は「宮沢」から取水し、本址の東側に展開する水田址に水を落としていた用水路と判断される。

SD24 位置：中部III 図版32・33、第143図

検出：II A層上面で青灰色を呈した砂礫が落ち込む。SB62・63・ST29を切り、SD23と接続している。規模・形状：全長36m、幅0.4~1.0mの規模を有する。断面は弓形で深さは20cmを測る。溝の東西両端の底面で20cmの比高差が見られ、西側が高い。覆土：鶏卵大から拳大の礫を主体とする砂礫層である。帰属時期：出土遺物が見られず不明確であるが、SD23と接続することから15期に比定される。所見：SD23とSD27に挟まれた地域はII A層上面に灰色化した土壌が存在し、この部分はプラントオパール分析でも水田址の可能性が指摘されており、本址は両側に展開していたであろう水田址の用排水路として機能していたと推定される。

SD25 位置：中部III 図版35、第57図

検出：II A層上面で灰色砂が落ち込む。SD23に切られ、SB75・76・SD26・27・NR8を切っている。SD26・27は褐色を呈し本址とは明瞭に区別できた。規模・形状：NR8上ではSD23と同様に二股に分かれていたと考えられる。また、SB76上で直角に折れ曲がり、途中で消滅しているが全体ではSD23と同様に南に続いていたと考えられる。全長は20mに達し、0.3~1.1mの規模を有する。断面は半月形で深さは20cm強である。溝の南北両端の底面の比高差は10cm以内で底面は平坦である。覆土：淘汰の良い灰色砂の単層である。帰属時期：自然流路との接続やクランク状に屈曲することはSD23と同様であり、ほぼ同一位置を流れていたと判断されることからSD23の祖型であり、時期的にも近接していたと推定される。

SD26 位置：中部III 図版35、第57図

検出：II B層上面で確認された。本址はII A層上面で地山と同色調を呈する砂層で検出は困難であった。規模・形状：長さ14m弱、幅0.6~0.7mの規模を有している。断面は半月形で、深さは40cm強を測る。底面の標高は西側でやや高く、西から東へ水流があったと判断される。覆土：2分層される。上層は灰色砂でII A層と同色であることから、後置的な土壌化現象を被ったと考えられる。下層は褐色砂礫であった。遺物出土状況：覆土中から土師器杯(1)、須恵器杯(2・3)が出土した。帰属時期：切合い関係からSB76より古く位置付けられ、出土遺物の様相から2期に比定される。

SD27 位置：中部III 図版34、第57図

検出：II A層上面で褐色砂礫が落ち込む。SB70～72・74・76を切っており、SD25に切られる。規模・形状：途中でとぎれるが全長30mに及ぶ。幅は1.0m弱で断面は弓形を呈し、深さは10cm強を測る。溝の東西両端の底面の比高差は30cmで、西側が高い。覆土：褐色砂礫の単層で粗粒砂を主体としている。水酸化鉄の沈着が著しい。帰属時期：切合い関係から8期以降と判断され、また、本址からSB74に混入した遺物と思われる白磁片の帰属時期から本址は15期に比定される。SD24と同様に本址の南側には水田土壌が分布し、プラントオパール定量分析もそれを裏付けていることから、本址は水田の用排水路として機能していたと判断される。

SD28 位置：北部 I 図版40

検出：II B層上面で灰白色土が落ち込む。SB96・ST37と重複しているがSB96とは検出状況から本址のほうが古いと判断される。SK387を切っている。南側は調査区域外で調査に至らなかった。規模・形状：途中SB96付近ではとぎれているが、調査された部分で全長21.5mに達し、幅0.4～0.6mの規模を有している。断面は逆台形を呈し、深さは20cm位である。底面は平坦である。覆土：灰白色土を主体とし、地山II A層・砂礫が混じる。帰属時期：出土遺物が見られないため不明確であるが、ST33～36などと主軸方向が一致し、またNR9（久保川）の方向とも直行していることから6・7期と判断される。

SD29 位置：北部 I 図版39

検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。SD32と重複している。西側はST35・36と隣接している。SK358・371に切られる。規模・形状：長さ5.0m、幅0.6～1.0mの規模を有している。断面は弓形で深さは10cm位を測る。覆土：灰色土を主体とし、地山II A層・砂礫が混じる。遺物出土状況：覆土中より黒色土器A碗、須恵器杯B、土師器甕B、須恵器甕片が出土している。須恵器甕はST35の出土遺物と接合関係を有している。帰属時期：出土遺物の様相から6・7期と判断される。遺構の位置関係から本址はST36に併設されたと推定される。

SD30 位置：北部 I 図版39

検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。SD31と重複している。東側はST35・36と隣接する。規模・形状：長さ5.7m、幅0.3～1.2mの規模を有する。断面は弓形を呈し、深さは10cm位でSD29と良く似ている。覆土：灰色土を主体とし、地山II A層・砂礫が混じる。帰属時期：出土遺物がなく不明確であるがSD29と同様に遺構の位置関係からST36に併設された雨落ち溝と推定される。

SD31 位置：北部 I 図版39

検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。SD31と重複するが新旧関係は明らかにできなかった。規模・形状：長さ10.3m、幅0.3～0.5mの規模を有している。断面はD字形を呈し、深さは20cm位を測る。溝の東西両端の底面の比高差は10cmで西側が高い。覆土：灰色土を主体とし地山II A層・砂礫が混入する。帰属時期：出土遺物がなく不明確であるが、NR9と主軸方向を合せ、ST35北面の延長上に本址は延びており建物址との関連が注意される。

SD32 位置：北部 I 図版39・40

検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。SD29と重複しており北側には本址と並行してSD33が延びる。またSD31と本址は接続する可能性もあるが主軸方向はややずれている。規模・形状：長さ10.5m、幅0.3mの規模を有する。断面はU字形を呈し深さは10cmを測る。底面は平坦である。覆土：灰色土を主体とし、地山II A層・砂礫が混入する。SD31・33と類似した覆土であった。帰属時期：出土遺物が見られず不明確であるが、SD31と同様に主軸方向の一致からST35との関係していた可能性がある。

SD33 位置：北部 I 図版39・40

検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。SB92に切られる。南にSD32が並行して延びている。規模・形

状：長さ12.5m、幅0.4mの規模を有する。断面はU字形を呈し深さは10cm位を測る。底面は平坦であった。覆土：灰色土を主体とし地山II A層・砂礫が混入する。帰属時期：出土遺物が見られず不明確であるが、ST36の主軸方向と本址とは直行し、ST36北面の延長上に本址が延びていることから、ST36との関連が考えられる。

SD34 位置：北部II 図版45

検出：II A層下位で黄灰色土が落ち込む。規模・形状：長さ5.4m、幅0.5mの規模を有する。断面はD字形を呈し深さは10cm強である。底面は平坦であった。覆土：灰色土を主体とし地山II A層・砂礫が混じる。帰属時期：出土遺物が見られず不明確であるがSA 8・NR 9と主軸方向が一致している。

SD35 位置：北部II 図版45

検出：II A層下位で黄灰色土が落ち込む。ST39に切られる。規模・形状：長さ1.5m、幅0.3mの規模である。断面はD字形を呈し深さは10cm強であった。底面は平坦である。覆土：灰色土を主体とし、地山II A層・砂礫が混じる。帰属時期：出土遺物がなく不明確であるが、SD34と同様の検出状況で主軸もほぼ一致しており関係が注意される。

SD36 位置：北部II 図版45

検出：II A層中で灰色土が落ち込む。規模・形状：長さ4.0m、幅1.8mの規模で、断面や深さはST39に記述したとおりであり、本址はST39の雨落ち溝として機能していたと判断される。覆土：底面近くには拳大以下の礫が見られ、砂粒が集積していた。

SD37 位置：北部II 図版47

検出：II A層上面で青灰色土が落ち込む。中世の土坑とSA11に切られており、SB129・130・134～136を切っている。切合い関係は覆土の特徴、特に地山II A層の混入の度合いによって判断した。規模・形状：長さ3.7m、幅1.7mの規模の幅広な溝である。断面は逆台形を呈し深さは30cm弱を測る。底面は平坦である。覆土：青灰色土を主体とし地山II A層・II B層が混入する。帰属時期：覆土中から土師器・須恵器壺片が出土したのみで決定は困難であるが、切合い関係・覆土の特徴や位置関係から7期に比定されよう。

SD38 位置：北部II 図版49

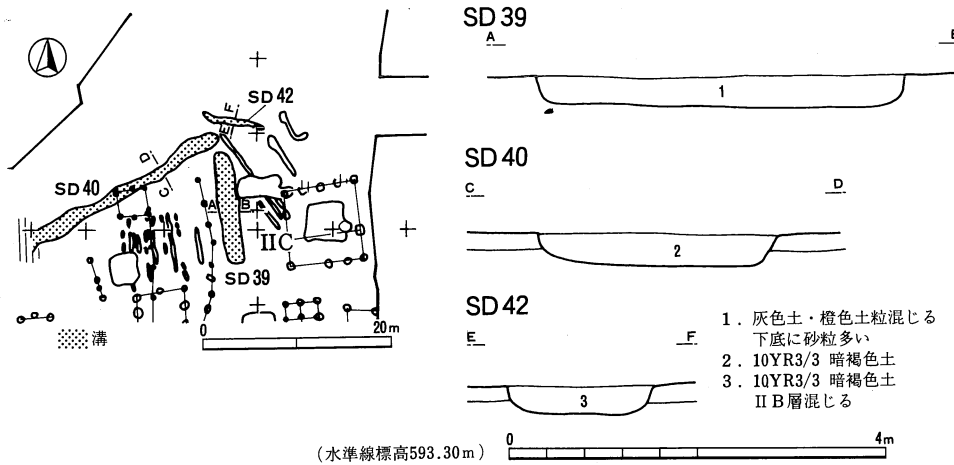
検出：II A層下位からII B層上面で青灰色土が落ち込む。SB155を切る。規模・形状：長さ8.3m、幅0.5～0.7mの規模を有している。断面はD字形を呈し深さ20cm強を測る。底面は平坦であった。覆土：青灰色土を主体とし地山II A層・II B層が混じる。遺物出土状況：覆土中から黒色土器A杯(1)・椀(2)、須恵器A(3)、灰釉陶器椀(4・5)片が出土した。帰属時期：出土遺物の様相から7期に比定される。覆土の特徴や主軸方向からST53と併存した可能性が高い。

SD39 位置：北部II 図版53、第144図

検出：II A層上面で青灰色土が落ち込む。規模・形状：長さ11.8m、幅1.5～1.9mの規模を有する幅広の溝である。断面は逆台形を呈する。中央部の底面で深さ10cmの凹みが見られたほかは平坦である。覆土：灰色土を主体とし橙色土粒が混じる。下底部に砂粒が多く混じる。帰属時期：覆土の特徴やST57・61と主軸を合わせることから8期と判断される。また、本址はSA14と並行しており、本址の延長上には7・8期の遺構が見られないことから、本址を含む帯状の遺構空白域は道跡の可能性もある。

SD40 位置：北部II 図版62、第144図

検出：II B層上面で褐色土が落ち込む。ST62のほか多くの土坑に切られる。規模・形状：長さは23mに達し、幅1.0～2.0mの規模を有する。断面は逆台形を呈し深さは20cm弱である。底面は平坦であった。覆土：地山II A層を主体とし灰色土・砂礫が混じる。黒色土器A杯片が覆土中から出土したが本址の検出状況を考慮すると混入品と判断される。帰属時期：決定は困難であるが、検出状況や覆土は1～4期の竪穴



第144図 SD39・40・42土層断面図

住居址に似ており、主軸方向から1期の遺構群との関連が考えられる。

SD41

位置：北部II

図版53

検出：II A層上面で青灰色土が落ち込む。

SK1193に切られる。

規模・形状：長さ2.6m、幅0.2~0.3mの

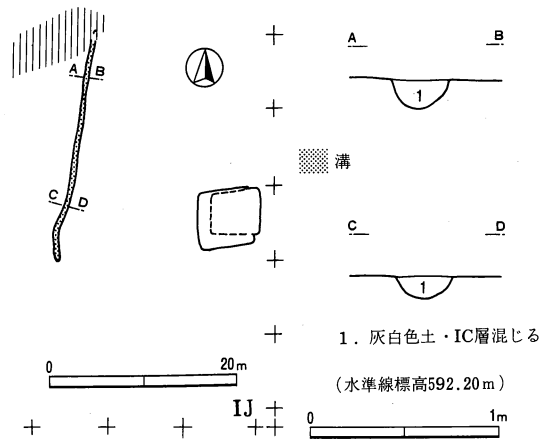
小規模な溝である。断面はU字形を呈し深さは10cm弱である。覆土：灰色土を主体とし、地山II A層が混入する。帰属時期：出土遺物がなく不明確であるが、覆土の特徴から6~8期に比定される。

SD42 位置：北部II 図版62、第144図

検出：II B層上面で暗褐色土が落ち込む。規模・形状：長さ7.0m、幅0.5~0.7mの規模を有する。断面は逆台形を呈し、深さは10cm強である。底面は平坦であった。覆土：II A層を主体としII B層が混入する。帰属時期：出土遺物がなく不明確であるが覆土の特徴から1~4期と判断される。

SD43 位置：北部II 図版54

検出：II A層上面で青灰色土が落ち込む。中世の土坑群に切られる。規模・形状：長さは9.7m、幅0.45~0.8mの規模で、北端部は東へ折れ曲がっている。断面はD字形を呈し、深さは10cm強を測る。底面は平坦である。覆土：灰色土を主体とし地山II A層が混じる。帰属時期：出土遺物が見られず決定は困難であるが、覆土の特徴や主軸方向の一致からSB166との関連が考えられる。



第145図 SD44実測図

SD44 位置：北部II 図版10、第145図

検出：I C層上面で灰白色土が落ち込む。北側はI B層の堆積によって削剥されている。規模・形状：長さ23.6m、幅0.3~0.4mの規模を有する。断面は半月形を呈し、深さは15cm弱を測る。底面は平坦である。覆土：灰白色土を主体としI C層が混じる。帰属時期：出土遺物がないため不明確ではあるが、覆土の特徴がSB177~179に類似していることから14・15期に比定される。

4 柵址

概観

分布：本遺跡では19条におよぶ古代の柵址が検出された。その内訳は南部I地区に4条、中部I地区に1条、北部II地区に13条、北端I地区に1条で北部II地区に多く存在している。規模・形状：長さ15mを越える長い柵址は3条に留まり、多くは10m前後の規模である。SA3・5・9・10・15は掘立柱建物址になる

可能性も否定できない。帰属時期：出土遺物から帰属時期が判断でき柵址はほとんど無く、時期の決定は専ら埋土の特徴・主軸方向や遺構配置から推定せざるをえなく、時期不明なものも多い。

SA 1 位置：南部 I 図版12、PL 7

検出：II A層上面およびそれに対比される含礫泥層上面で灰色土の落ち込む小土坑が12基並んでいる。規模・形状：長さ23.3mに及ぶが、西端より5柱穴目では2基の小土坑が隣接しているため、ここを境として、西と東では別の遺構になる可能性もある。柱間は200～280cmを測るが、230cm前後が主体である。柱穴：径25～55cmの円形プランを呈し、深さは15～40cmを測る。柱痕跡は確認されなかった。埋土は灰色土を主体とし砂礫・炭粒が混じる。帰属時期：埋土の特徴から6～8期と判断される。SB 2・10などの遺構や本址の南に流れていたであろう境況に主軸を合せている。

SA 2 位置：南部 I 図版13

検出：II A層上面で灰色土の落ち込む小土坑が8基並んでいた。ST 1・SD 2と重複するが新旧関係は不明である。規模・形状：長さ10.6mを測る。配列はやや不規則である。東端の柱穴では2基の小土坑が隣接していた。柱間は120～155cmを測るが120cm強が主体である。柱穴：径20～50cmの円形プランを呈し、深さは10～20cmを測る。柱痕跡は確認されなかった。埋土は灰色土を主体とし地山II A層・砂礫が混じる。帰属時期：埋土の特徴から6～8期と判断される。

SA 3 位置：南部 I 図版12

検出：II A層上面で灰色土の落ち込む小土坑が4基並んでいた。SB 2・ST 2と重複するが、先後関係は不明である。規模・形状：長さ10.6mである。東端の柱穴では2基の小土坑が近接していた。柱間は120～155cmを測るが120cm強が主体である。柱穴：径65～80cmの円形プランを呈し深さは30～50cmを測る。東端の柱穴を除き径20cm弱の柱痕跡が確認され、ほぼ掘り方底に達する深さを有していた。柱痕跡の埋土は灰色土を主体とするのに対して掘り方の埋土は灰色土を呈し緻密な土である。帰属時期：東端から2番目の柱穴で須恵器杯・高杯・壺の破片が出土したにすぎず決定は困難である。埋土の特徴から6～8期と考えられる。本址は柱穴の大きさから掘立柱建物址の一部であった可能性もある。

SA 4 位置：南部 I 図版14

検出：II A層およびそれに対比される含礫泥層上面で灰色土が落ち込む小土坑が7基並んでいた。規模・形状：長さは8.0mに達するが、配列はやや不規則で東端は北に折れ曲がっている。西端の柱穴は2基の小土坑が近接していた。柱間は120～270cmと一定していない。柱穴：径45～65cmの円形プランを呈し深さは20～35cmを測る。東側3本の柱穴で径10cm強の柱痕跡が確認された。柱痕跡は掘り方の下位の留まっていた。掘り方の埋土は灰色土を主体とし、地山II A層・砂礫が混じる。柱痕跡は灰色土を呈する土であった。遺物出土状況：西端と西から4番目の柱穴で土師器杯、黒色土器A椀、須恵器杯片などと鉄滓が出土している。帰属時期：出土遺物の様相から8期に比定される。SB 2・10・12などと主軸方向が一致している。

SA 5 位置：中部 I 図版27

検出：II B層上面で灰白色土の落ち込む小土坑が3基並んでいた。規模・形状：長さは2.9mである。柱間は125cmと165cmを測る。柱穴：径50cmの円形プランを呈し、深さは15cm位である。柱痕跡は認められない。埋土は灰色土を主体とし地山II A層が混じる。帰属時期：出土遺物がなく不明確であるがST 16・17などと主軸方向の一致が見られる。柱穴の大きさや柱間から本址は掘立柱建物址であった可能性もある。

SA 6 位置：北部 II 図版41

検出：II A層上面で黄褐色土の落ち込む小土坑が6基並んでいた。規模・形状：長さは2.6mである。配

列はやや不規則であるが、柱間は60～80cmを測り南端の柱間のみやや狭い。柱穴：円形と方形プランの柱穴が見られる。規模は30～60cmを測り深さは20～30cmであった。柱痕跡は認められない。埋土は黄灰色土を主体とし円礫が混じる。帰属時期：埋土の特徴や位置関係からSB105と併存していたと推定される。

SA 7 位置：北部II 図版44

検出：II A層上面で灰色土の落ち込む小土坑が9基並んでいた。規模・形状：長さ9mに達する4間の柵址である。柱間は190～245cmを測り、西側の2柱間内にはさらに2基の小土坑が加わる。柱穴：径20～65cmの円形プランを呈し、深さは10～30cmを測る。柱痕跡は認められない。埋土は灰色土を主体とし地山II A・II B層が混じる。帰属時期：出土遺物がなく不明確であるが、本址はNR 9(久保川)に沿っており関連が注意される。

SA 8 位置：北部II 図版44・45

検出：II A層下位で灰色土の落ち込む小土坑が5基並んでいた。規模・形状：長さ11.8mを測る。柱間は250～390cmの東端のみ広いほかはほぼ一定である。柱穴：径30cm位の円形プランを呈し深さは20～30cmである。柱痕跡は認められない。埋土は灰色土を主体とし地山II A層が混じる。西から3・4番目の柱穴には拳大の円礫が入っていた。帰属時期：出土遺物がなく不明確ではあるが本址はSA 7と同様にNR 9(久保川)に沿っている。

SA 9 位置：北部II 図版44

検出：II A層上面で灰色土の落ち込む小土坑が3基並ぶ。規模・形状：長さ3.3mを測り、柱穴は等間隔に配列している。柱穴：径40～50cmの円形プランを呈し深さは20～30cmである。埋土は灰色土を主体としている。帰属時期：出土遺物がなく不明確であるが、SB122・127などと主軸を一致させている。また主軸や柱間・柱穴の規模が一致しているSA10とともに掘立柱建物址であった可能性もあるが検出状況は大きく相違しており問題が残る。

SA10 位置：北部II 図版57

検出：II B層上面で灰白色土が落ち込む小土坑が3基並んでいた。規模・形状：長さ3.9mを測り、柱穴はほぼ等間隔に配列する。柱穴：径40cm位の円形プランを呈し、深さは20cm位である。埋土は灰白色土を主体としII A層土塊が混じる。帰属時期：出土遺物がなく不明確であるが、埋土の特徴は1～4期に比定される土坑と類似していた。

SA11 位置：北部II 図版47

検出：II A層上面で青灰色土が落ち込む小土坑が17基並んでいた。SB128～131・SD37を切っている。また、ST 4と近接している。規模・形状：長さは16mに達する。柱穴どうしが近接していることから本址には1回以上の建替えが想定される。柱間は180～210cmを測るが一定値は見られない。柱穴：径30～65cmの円形プランを呈し深さは20～45cmを測る。10本の柱穴で径10cm強の柱痕跡を確認した。柱痕跡は20cm以上の深さを有している。掘り方の埋土は灰色土を主体とし地山II A層が混じるのに対して、柱痕跡は青灰色の緻密な土であった。帰属時期：切合い関係や埋土の特徴から7・8期と推定される。ST52・57など8期の遺構群と主軸方向を合せている。

SA12 位置：北部II 図版49

検出：II B層上面で灰白色土が落ち込む小土坑が6基並ぶ。規模・形状：長さは6.4mにおよび、やや南に湾曲する。柱間は85～170cmを測るが一定値は見られない。柱穴：径30～45cmの円形プランを呈し深さは10～20cmを測る。埋土は灰色土を主体とする。帰属時期：出土遺物がなく不明確であるが、位置関係や主軸方向から7期の遺構群との関連が考えられる。

SA13 位置：北部II 図版51

検出：II A層上面で青灰色土の落ち込む小土坑が11基並んでいた。東側にSB161・ST55と隣接する。規模・形状：長さ9.7mの規模で、柱穴どうしが近接していることから本址には1回以上の建替えが想定される。柱間は120～235cmを測るが200cm前後が主体である。柱穴：径25～45cmの円形プランを呈し、深さは15cm弱であった。柱痕跡は認められない。北端の2柱穴には1・2回の建替えが見られる。埋土は灰色土を主体とする。帰属時期：出土遺物がなく不明確ではあるが、埋土の特徴から7・8期に比定される。また遺構の見られない帯状の空白域を挟んで、並走するSA14と併存していた可能性がある。

SA14 位置：北部II 図版50・51・53

検出：II A層上面で青灰色土の落ち込む小土坑がほぼ等間隔に12基並んでいた。多数の土坑と重複しているが新旧関係は不明である。規模・形状：長さ23.5mに達する。途中で2回やや浅く曲がり、北側ではST61・SD39と主軸方向が一致し、南側ではST55・57・59と主軸を合せている。柱間は210～290cmを測るが290cm弱の間隔が多い。柱穴：径25～50cmの円形プランを呈し深さは10～15cmを測る。柱痕跡は認められない。帰属時期：出土遺物がなく不明確ではあるが、埋土の特徴から7・8期に比定される。特にST55・57・61との位置関係が注意される。また、並行して存在するSA13・SD39との間に該期の遺構が存在しない帯状の遺構空白域が認められる。

SA15 位置：北部II 図版52

検出：II A層下位からII B層上面で灰褐色土が落ち込む小土坑が6基、等間隔に並ぶ。規模・形状：長さ3.9mである。途中で屈曲しており本址はくの字形に柱穴が配されている。柱間は120～150cmを測る。柱穴：径30cm弱の円形プランを呈し、深さは20cm位を測る。埋土は灰褐色土でわずかに炭粒を混じえる。帰属時期：出土遺物がなく不明確であるが、埋土の特徴から6～8期に比定される。しかし、本址と主軸の一致するような遺構は見られず疑問が残る。

SA16 位置：北部II 図版50

検出：II B層上面で灰白色土の落ち込む小土坑が7基並ぶ。SB153に切られている。規模・形状：長さ9.5mである。柱間は145cmと215cmを測る。柱穴：径30～55cmの円形プランを呈し深さは15cm弱である。埋土は黄灰色土を主体として地山II A層が混じる。帰属時期：埋土の特徴から1～5期に比定され、主軸方向や位置関係からSB157・160との関係が注意される。

SA17 位置：北部II 図版51・53

検出：II A層上面で青灰色土が落ち込む小土坑がほぼ等間隔に7基並ぶ。SB159を切っている。また、ST57・SN1ほか多数の土坑と重複するが直接的な新旧関係は不明である。規模・形状：長さ15.8mである。柱間は200～330cmを測り南側のほうが広い。柱穴：径40～50cmの円形プランを呈し深さは15cm位である。柱痕跡は認められない。埋土は青灰色土を主体とし地山II A層が混じる。検出面ではST57の埋土の方がより鮮明な青灰色を呈しており、本址より新しいと判断した。帰属時期：埋土の特徴から7・8期に比定される。主軸方向や遺構配置から7期の遺構群、特にSB151・158、ST48との位置関係が注意される。

SA18 位置：北部II 図版52

検出：II A層上面で青灰色土が落ち込む小土坑が直線状に5基並ぶ。規模・形状：長さ4.3mの小規模な柵址で、柱間は狭く100～125cmを測る。柱穴：径25～40cmの円形プランを呈し深さは10cm弱である。北端と中央の柱穴で径10cmの柱痕跡を確認している。埋土は灰色土を主体とし地山II A層が混じる。柱痕跡は灰色土の緻密な土であった。帰属時期：埋土の特徴から6～8期に比定される。SB163と主軸方向を合せている。

SA19 位置：北端I 図版64

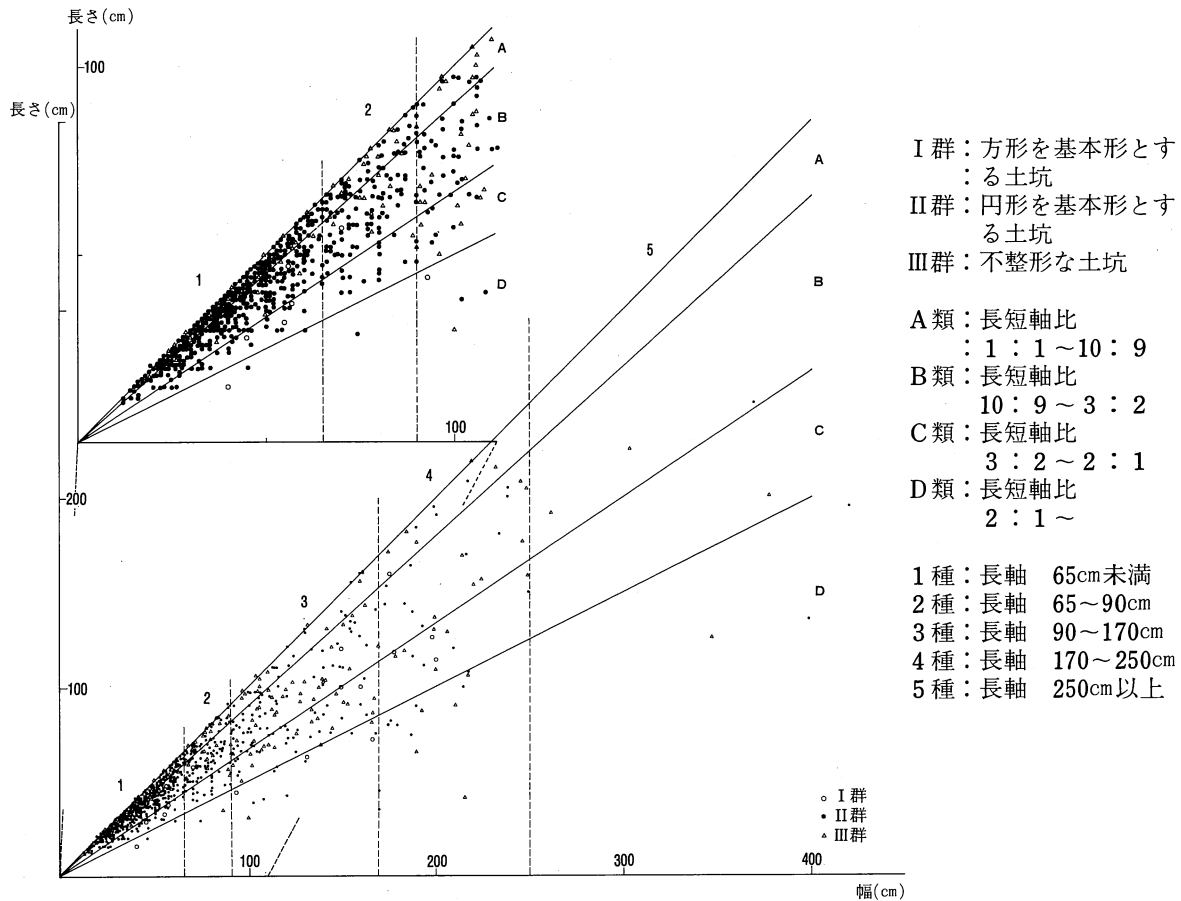
検出：I Dr層上面で灰白色土の落ち込む小土坑が5基並ぶ。規模・形状：長さ9.4mである。柱間は一定

せず180～340cmを測る。柱穴：径20～30cmの円形プランを呈し、深さは10～15cmを測る。埋土は灰白色土を主体とする。帰属時期：検出面・埋土の特徴から15期と判断した。SB175・176と隣接している。

5 土坑

概観

本遺跡では1284基にのぼる数の古代に帰属する土坑が検出されたが、これらは遺構の形態から以下のように分類される。



第146図 古代土坑の長軸と短軸関係図

	A					小計	B					小計	C					小計	D					小計	不明					小計	計
	1	2	3	4	5		1	2	3	4	5		1	2	3	4	5		1	2	3	4	5		1	2	3	4	5		
I	20	11	15	6	0	52	13	9	29	8	3	62	0	2	19	5	2	28	0	1	2	5	1	9	0	3	8	3	0	14	165
II	492	49	22	3	0	566	285	68	60	12	0	425	26	16	29	6	1	78	1	1	9	6	2	19	6	3	2	1	0	12	1,100
III	0	0	0	1	0	1	1	1	3	0	0	5	3	0	2	3	0	8	1	0	4	0	0	5	0	0	0	0	0	0	19
計	512	60	37	10	0	619	299	78	92	20	3	492	29	18	50	14	3	114	2	2	15	11	3	33	6	6	10	4	0	26	1,284

第1表 古代の土坑形態分類表

この図・表から次のようなことが指摘できる。古代の土坑の平面形については円形を基本的プランとしたII群が圧倒的であり、また、プランの長短軸比による分類ではA・B類が多く、細長いプランのC・D類はわずかである。土坑の規模では1種と規定される小土坑の占める割合が高く、3種以上の大形の土坑は少ない。この点で墓域の調査が中心であった中世の土坑群では(第173図参照)、方形・長方形を基本的

プランとしたI群が多く、土坑の規模では1種が多いものの3種も3割近く見られるなど、古代の土坑群と中世の土坑群とではその形態に相違が見られる。

分布：1284基の内訳は南部地区142基、中部地区131基、北部地区988基、北端地区23基で、大多数の土坑は北部地区に集中して分布している。また、3種以上の大形の土坑の分布状況については遺跡全面に広がるのではなく、むしろ局所的に集中して分布する傾向にある。各地区での大形土坑の分布状況は次のとおりである。南部I地区ではSB2・3の南に6～8期の大形土坑が集中しており、南部II地区東端では2～7期の土坑がやや集中して分布している。中部I・II地区では掘立柱建物址群の周囲に大形土坑が規則的に配置しており、多数の土坑が集中する北部地区でもSB90、SB105・106の周囲、SB151・153の北側というようにいくつかの地点に集中して検出された。帰属時期：時期が決定できるような状態で遺物が出土した土坑はごく少数であり、多くの土坑の帰属時期は検出面、および検出面上での覆土の土色に基づいて判断したが、推定不能なものも多い。検出面・覆土の土色と土坑の帰属時期は一般的に次のような関係を有している。I Df層上面で検出した土坑は7期以降に比定される。また、II A層あるいはI Df層上面で検出され覆土が黄褐色を呈するものは12期以降、青灰色ないし灰色を呈する土坑は6～8期で、それ以前の時期に帰属する土坑の覆土は暗褐色を呈し検出困難な土坑が多く、さらに検出面を下げII B層上面で明瞭にプランが確定できた。II B層上面検出の土坑は5・6期以前と判断される。諸属性：用途が明らかにされた土坑には、小鍛冶址と考えられるもの(第155図)、排水施設(第154図)がある。そのほかの土坑では機能を限定できるような所見は得られていないが次のような属性を有する土坑も見られた。

- (1) 焼土・炭粒の堆積、焼痕を伴う土坑(第147図)
- (2) 大形の長方形・楕円形プランの土坑(第148図)
- (3) 集石と焼土・炭粒の堆積を伴う土坑(第149図)
- (4) 集石もしくは人頭大以上の礫を伴う土坑(第150・151図)
- (5) 完形・半完形状態の土器・金属製品を伴う土坑(第152・153図)
- (6) 排水のための施設(第154図)

(1) 焼土・炭粒の堆積、焼痕を伴う土坑 第147図

分布：遺跡内に点在して分布しているがSK147・148、SK1123・1204・1210のように類似した土坑が複数集まって一カ所に存在することが多い。機能：こうした土坑に類似した特徴が見られるものに火葬施設や小鍛冶址があるが、それに該当するような遺物が見られず判断はつきかねる。

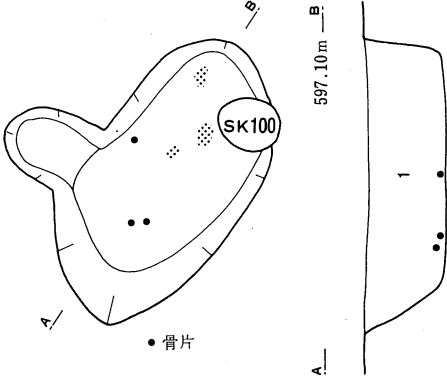
SK99 (II群C類3種) 位置：南部II 図版18

検出：II A層上面で焼土・炭粒の混じる灰色土が落ち込む。SK100に切られ、暗褐色の覆土のSK101を切る。規模・形状：163cm×85cmの楕円形プランを呈し深さは17cmを測る。西側に長さ45cm幅40cmの円形の張出しを有している。張出し部底面は坑底より急角度で立ち上がる。覆土：灰色土を主体とし地山II A層・砂礫が混じる。覆土中には焼土・炭粒を多含しているが焼痕は認められなかった。坑底より数cm浮いて焼骨片が散在していた。帰属時期・所見：覆土中で1・2期に比定される遺物が見られるが、これはSK101からの混入と考えられ、覆土の特徴や周辺の遺構分布から6・7期と判断される。焼土・焼骨片の出土や遺構の形態から火葬施設と考えられるが確定はできない。

SK147 (I群A類3種) 位置：中部I 図版23

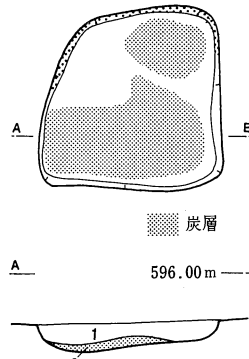
検出：II B層上面で黄褐色土が落ち込む。規模・形状：98cm×96cmの隅方形プランを呈し深さは15cmを測る。西壁から北壁にかけて焼土化していた。覆土：2分層され、上層は地山II A層を主体としII B層が混

SK 99



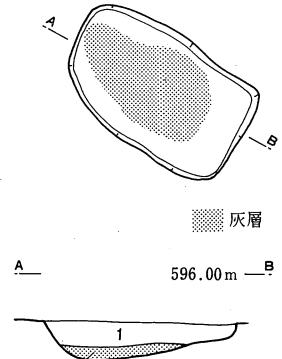
1. 10YR4/4 褐色土、焼土・炭粒多く混じる

SK147



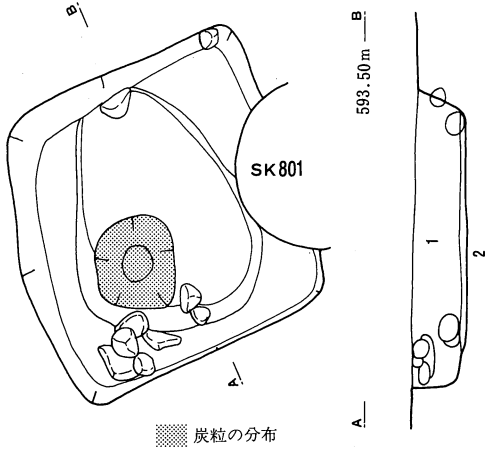
1. 黄褐色土
2. 灰層、焼土・炭粒混じる

SK148



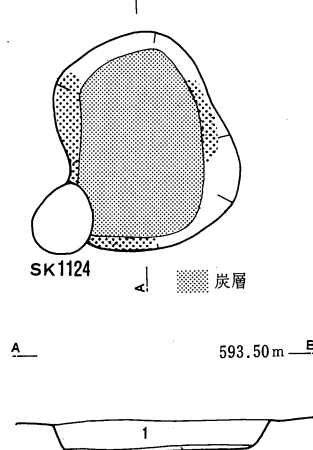
1. 黄褐色土
2. 灰層、焼土・炭粒混じる

SK 800



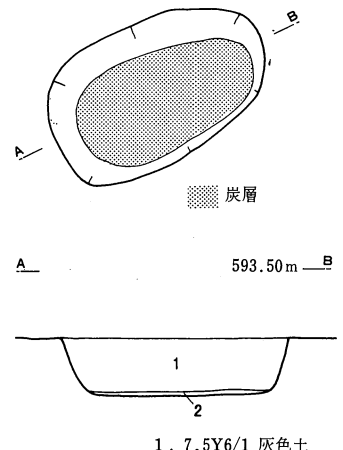
1. 10YR4/4 褐色土
2. 炭層、焼土粒混じる

SK1123



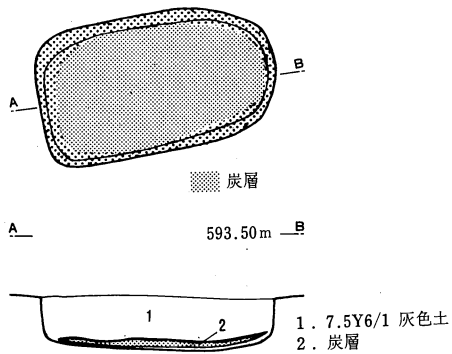
1. 7.5Y6/1 灰色土
2. 炭層

SK1204



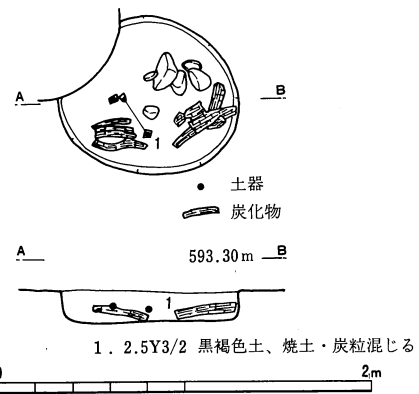
1. 7.5Y6/1 灰色土
2. 炭層

SK1210



1. 7.5Y6/1 灰色土
2. 炭層

SK1259



1. 2.5Y3/2 黒褐色土、焼土・炭粒混じる

第147図 古代土坑実測図(1)

じる。下層は焼土・炭粒を多含する灰の堆積である。帰属時期：出土遺物がなく不明確であるが、検出状況や周囲の遺構分布から1～3期に比定される。所見：本址内で火の焚かれたのは确实であるが骨・鉄滓などの出土が見られずその目的は不明である。

SK148 (I群C類3種)

位置：中部 I

図版23

検出：II B層上面で黄褐色土が落ち込む。SK147と近接している。規模・形状：101cm×63cmの隅丸長方形プランを呈し深さは19cmを測る。覆土：SK147と同様に2分層され、上層は地山II B層を主体とし、下層は焼土・炭粒を多含する灰の堆積である。帰属時期・所見：SK147同様に1～3期に比定される。坑内で火の焚かれたのは確実であるが目的は定かでない。

SK800(I群A類3種) 位置：北部II 図版50

検出：II A層上面で青灰色土が落ち込む。SK801に切られ、SK802・803を切る。切合い関係は覆土に混入する地山II A層の多寡によって判断した。規模・形状：160cm×155cmの隅丸方形プランを呈し深さは41cmを測る。底面は浅く二段に渡る皿状の凹みが見られた。覆土：2分層される。上層は青灰色土を主体とし地山II A層が混じる。坑底部に薄く分布する下層中には炭粒を多含し焼土粒も混じる。特に、最下底の円形の凹みのなかには炭粒が濃密に混じっていた。覆土中で拳大から人頭大の円礫が8個出土している。また、黒色土器A・須恵器・軟質須恵器杯片も検出された。帰属時期・所見：出土遺物の様相から7期に比定される。覆土の状態から坑内で火の焚かれた可能性が高いがその目的は不明である。

SK1123(II群B類3種) 位置：北部II 図版51

検出：II A層上面で青灰色土が落ち込む。小土坑SK1124に切られている。規模・形状：104cm×79cmの楕円形プランを呈し深さは20cmを測る。西壁から南壁にかけて焼土化している。覆土：2分層される。上層は青灰色土を主体とし地山II A層が混じる。下層は坑底部に薄く分布する炭層で、炭粒は小豆大以下で灰粒も混じっていた。帰属時期・所見：出土遺物がなく不明確であるが、覆土の特徴から7・8期に比定される。覆土や壁面の状態から坑内で火の焚かれたのは確実であるがその目的は不明である。

SK1204(II群C類3種) 位置：北部II 図版53

検出：II A層上面で青灰色土が落ち込む。規模・形状：121cm×73cmの楕円形のプランを呈し深さは34cmを測る。覆土：2分層される。上層は青灰色土を主体とし地山II A層・砂礫が混じる。下層は坑底部に薄く分布する炭層で灰粒が混入している。帰属時期・所見：出土遺物がなく不明確であるが覆土の特徴から7・8期に比定される。覆土の状態から本址内で火の焚かれたのは確実であるがその目的は定かでない。

SK1210(I群C類3種) 位置：北部II 図版53

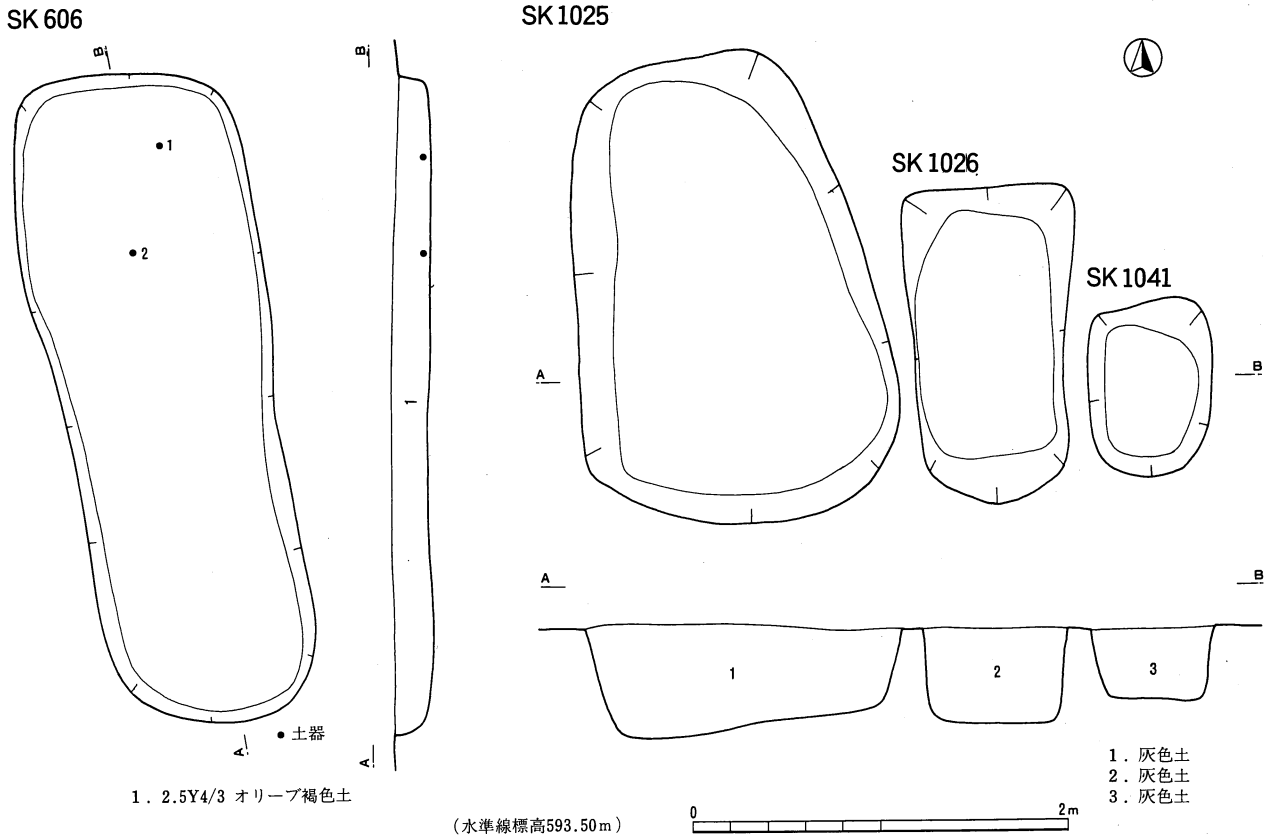
検出：II A層上面で青灰色土が落ち込む。SA14と重複するが検出状況からは本址のほうが古いと判断される。規模・形状：126cm×74cmの隅丸長方形プランを呈するが東側は丸い。深さは28cmを測る。壁は全面にわたって焼土化していた。覆土：2分層される。上層および炭層下に入り込む土は青灰色土を主体とし地山II A層が混入する。下層は坑底より2cm浮いて薄く分布する炭層で灰が混入する。炭粒は小豆大以下であった。帰属時期・所見：出土遺物がなく不明確であるが覆土の特徴から7・8期と判断される。覆土の状態から本址は掘り上げられた後、わずかに埋没するような期間を置いて底部で火が焚かれたと判断されるがその目的は不明である。

SK1259(II群B類3種) 位置：北部II 図版55、PL40

検出：II A層上面で黒褐色土が落ち込む。SK1260の覆土は灰色土を主体としている。規模・形状：90cm×82cmの楕円形プランを呈し深さは20cmを測る。覆土：灰色土を主体とするが炭粒を多含するため黒褐色を呈している。覆土下位に棒状の炭化材と拳大の円礫が出土し、炭化材の上で土師器杯(1)が検出された。帰属時期：出土遺物の様相から15期に比定される。所見：焼痕は見られないものの炭化材の遺存状況から構内で火が焚かれたと判断される。炭化材は径5～10cmを測り丸木材起源と考えられる。

(2) 大形の長方形・楕円形プランの土坑 第148図

整った形状の大形土坑はここにあげたほかにも存在するが、いずれも単独で検出されることはなく、複



第148図 古代土坑実測図(2)

数の土坑が群を成して分布しており、中には意図的に配置されたような分布状況を呈するものも認められる。普通数基から20ないし30基が集まって一群を形成し、一定の範囲に展開する傾向にある。

SK606(I群D類5種) 位置：北部II 図版57、PL21

検出：II B層上面で灰白色土が落ち込む。SK603・604・607と共に直線状に並ぶように近接して存在している。規模・形状：348cm×125cmの隅丸長方形プランを呈し深さは22cmを測る。覆土：灰白色土を主体とし、地山II A層・砂礫が混入する。坑内北寄り須恵器杯蓋(1)・鉢C片(2)が出土した。帰属時期：出土遺物の様相から4・5期に比定され、SB118・119・125との関係が想定される。

SK1025(I群C類5種) 位置：北部II 図版52

検出：II A層上面で青灰色土が落ち込む。隣接するSK1026・1041とは主軸方向が一致し、また、位置関係や土坑の形状から互いを意識して掘り下げられたと判断される。規模・形状：250cm×158cmの隅丸長方形を意図したプランではあるが、南側は膨らみ台形状を呈している。深さは58cmを測り西側がやや深い。覆土：灰色土を主体とし地山II A・II B層・砂礫が混入する。覆土中で黒色土器A杯・椀、須恵器杯片が出土している。帰属時期：出土遺物の様相から6～8期と判断される。

SK1026(I群D類3種) 位置：北部II 図版52

検出：II A層上面で青灰色土が落ち込む。規模・形状：166cm×80cmの隅丸長方形プランを呈し深さは58cmを測る。覆土：青灰色土を主体とするが地山II A層が多く混入する。帰属時期：出土遺物がなく不明確ではあるが、SK1025を意識して掘り下げられている。

SK1041(I群D類3種) 位置：北部II 図版52

検出：II A層上面で青灰色土が落ち込む。規模・形状：92cm×64cmの隅丸長方形プランを呈し深さは40cm

を測る。覆土：青灰色土を主体とし地山II A層が混じる。帰属時期：出土遺物がなく不明確ではあるが土坑の形状からSK1025・1026の存在を意識して本址は掘り下げられたと考えられる。

(3) 集石と焼土・炭粒の堆積を伴う土坑 第149図

本遺跡で見られるこの種の土坑には坑内で火を焚いた後、埋め戻す過程で礫を入れるものと、他所で火を焚きそこで生じた焼土・炭粒・灰を主体とした土を土坑内に持込み同時に礫を入れて埋め戻す例が見られるが、双方ともその目的を明らかにできるような遺物の出土には恵まれなかった。前者の例は古代8期以前に属し、後者は15期の土坑に見られる。

SK249(II群B類4種) 位置：中部III 図版34

検出：II A層上面で褐色土が落ち込み、SB70を切った状態で確認された。規模・形状：193cm×132cmの楕円形プランを呈し深さは43cmを測る。坑内西寄りで壁面が焼土化していた。覆土：灰色土と褐色土が混じり合い炭粒も混入する。覆土中位にカマド袖石を含む拳大から人頭大の円礫・角礫が30個位出土している。また、土師器甕B片(3)、須恵器杯、軟質須恵器杯(1)、灰釉陶器長頸壺(2)が覆土中で検出された。帰属時期：出土遺物の様相から7期に比定される。所見：坑底に焼痕が残されていることから坑内で火の焚かれたのは確実で、その後一気に埋め戻し礫を入れたと判断されるが、その目的は不明である。

SK460(II群B類3種) 位置：北部I 図版43、PL36

検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。SB99・102など東西両側に竪穴住居址が近接している。規模・形状：152cm×138cmの楕円形プランを呈するが南側は方形を意識したようでもある。深さは40cmを測る。坑底は被熱によって赤変・硬化していた。覆土：5分層される。上位の1・2層は灰色土に地山II A層が混入し、拳大以上の円礫が多出している。3・4層は地山II A層を基調としII B層と灰粒が混じる。最下位の5層は炭・炭粒を主体としわずかにII A層が混じる。炭粒は小豆大以下で軟らかいため粗朶か草本類を起源としたものであろう。覆土上位で須恵器杯片が出土した。帰属時期：出土遺物が少なく不明確であるが、覆土の特徴から5～8期に比定される。所見：坑内で火の焚かれたのは確実でその後一気に埋め戻され、その上に礫が入れられたと判断されるが、その目的は不明である。

SK1258(II群A類3種) 位置：北部II 図版55

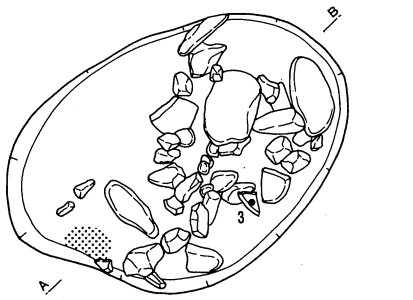
検出：II A層上面で黒褐色土が落ち込む。本址の北側にSK1259～1261が近接している。規模・形状：径105cm位の円形プランを呈し深さは30cmを測る。底面は焼土化していた。覆土：2分層される。上層は黒褐色土を主体とし焼土・炭粒が混じる。また、拳大以上の円礫と土師器杯片(1)も出土している。下層は底部に薄く分布する炭層で焼土粒を混じえる。帰属時期・所見：出土遺物の様相から15期に比定される。坑内で火が焚かれ、その後埋め戻す過程で礫が入れられたと判断されるが、その目的は不明である。

SK1277(I群C類3種) 位置：北端I 図版63

検出：I C層中で黒褐色土が落ち込む。本址の周囲にはSK1272～1276・1278が存在する。規模・形状：163cm×85cmの隅丸長方形プランを呈し深さは24cmを測る。北壁がやや張出しその部分に深さ5cm位の小さな凹みが見られた。覆土：2分層される。上層は炭粒を多く含むため黒褐色を呈する。下層はオリブ褐色を呈したI C層起源の土である。覆土上位に拳大以上の円・角礫が20個ほど出土している。帰属時期：遺物の出土がなく不明確であるが、覆土の特徴がSK1278と同様で、周辺の土坑と同じく15期と判断される。所見：本址はやや埋没しかけた時に炭粒や焼土を主体とする土を他所から持込み、礫を入れて埋め戻したと判断される。

SK1278(III群A類3種) 位置：北端II 図版63

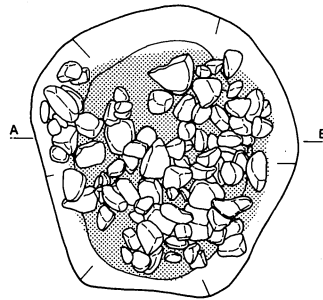
SK249



A 595.10m B

1. 10YR4/6 褐色土、灰色土塊混じる

SK460

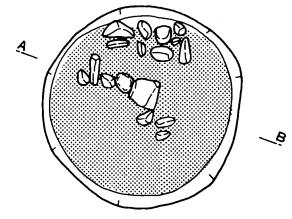


炭層

A 593.70m B

1. 2.5Y5/3 黄褐色土
2. 5BG6/1 青灰色土
3. 5YR4/4 暗オリーブ色土
4. 2.5Y5/3 黄褐色土
5. 炭層

SK1258

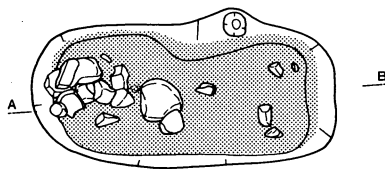


炭層

A 593.30m B

1. 10YR2/3 黒褐色土
2. 灰層、焼土粒混じる

SK1277

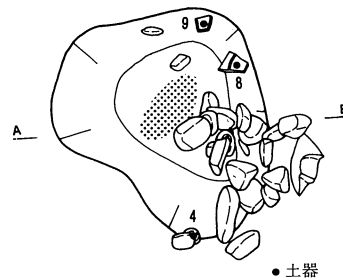


炭層

A 592.40m B

1. 10YR3/2 黒褐色土、炭粒多く混じる
2. 2.5Y4/4 オリーブ褐色土

SK1278



●土器

A 592.70m B

1. 焼土
2. 灰色土、焼土・炭粒多く混じる

0 2m

第149図 古代土坑実測図(3)

検出： I C層下位からII A層上面で灰色土が落ち込んでいる。本址はSK1277と隣接する。規模・形状： 122cm×111cmの不整形な楕円形プランを呈する。深さは12cmにすぎず、断面形や礫の出土レベルから本来はより上位から掘り込まれていたと判断される。覆土： 灰色土を主体とし焼土・炭粒を多混する。覆土上位に焼土塊が見られ拳大以上の礫が多出している。また、礫と同様の出土レベルで土師器杯(1)・椀(2)・鉢(5)・羽釜(8・9・10)片・足釜の脚部(7)、灰釉陶器(3・4)、青白磁合子(6)の破片が出土した。帰属時期： 出土遺物の様相から15期に比定される。所見： 覆土の状態から本址がやや埋没しかけた時点で炭・焼土を主体とする土を他所より持ち込み埋め戻したと判断される。屋外カマドの可能性はある。

(4) 集石もしくは人頭大以上の礫を伴う土坑

第150・151図

礫が出土する土坑には拳大から幼児頭大の円礫を多数出土する場合と、人頭大以上の大形の礫を一個伴う例が見られる。本遺跡においては土坑内に礫が埋没過程で自然に入り込む可能性は否定できないが、集

石を形成する礫は比較的大きさが揃っていること、後者では土坑の隅寄りで出土する例が多いことからむしろ意図的に入れられたと判断される。但し、その目的が究明できるような遺物などの出土には恵まれなかった。

SK119(I群C類3種) 位置：南部II 図版18

検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。規模・形状：153cm×90cmの不整形な隅丸長方形プランを呈し深さは15cmを測る。覆土：灰色土を主体とし地山II A層・粗朶起源の炭粒を含む。また覆土中位に拳大以上の円礫が15個位出土している。帰属時期：出土遺物がなく不明確であるが覆土の特徴から5～7期と判断される。

SK425(I群B類4種) 位置：北部II 図版41

検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。規模・形状：215cm×169cmの隅丸長方形プランを呈し深さは21cmを測る。覆土：灰色土を主体とするが地山II A層の混入も多い。坑内北側覆土中位に花崗岩の人頭大の円礫が一個出土している。また、土師器甕B片、須恵器甕片が見られた。帰属時期：出土遺物の様相から5・6期に比定される。

SK426(I群C類4種) 位置：北部II 図版41

検出：II A層下位で灰色土が落ち込む。SK425と隣接している。規模・形状：179cm×15cmの隅丸長方形プランを呈し深さは26cmを測る。覆土：灰色土を主体とし地山II A層が混じる。坑内東寄りで人頭大の円礫が覆土中位で出土した。他に黒色土器A杯、須恵器杯A・B片、土製の鞆羽口片が3個(24)出土した。帰属時期：出土遺物の様相から5・6期に比定される。

SK529(II群B類3種) 位置：北部II 図版56

検出：II B層上面で灰色土粒を含む暗褐色土が落ち込む。規模・形状：124cm×102cmの楕円形プランを呈し深さは36cmを測る。覆土：地山II A層と灰色土・砂礫が混じり合う。覆土下位に人頭大の円礫が2個、さらに、径50cmを越える巨大な円礫が1個出土している。帰属時期：出土遺物がなく不明確であるが覆土の特徴から4～6期と判断される。

SK535(I群A類3種) 位置：北部II 図版56

検出：II A層上面で灰色土粒を含む褐色土が落ち込む。SK534に切られる。規模・形状：134cm×120cmの不整形な隅丸方形を呈し、深さは47cmを測る。覆土：灰色土を主体とする地山II A層の混入が多い。覆土中位で人頭大の円礫が一個出土している。帰属時期：出土遺物がなく不明確であるが、覆土の特徴から4～6期と判断される。

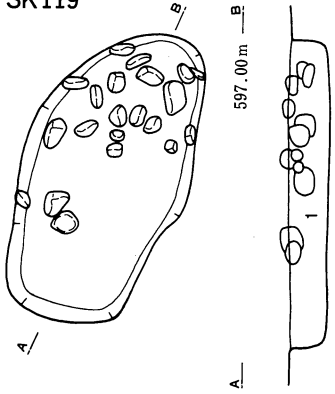
SK801(I群B類3種) 位置：北部II 図版50

検出：II A層上面で灰色土を主体とする土が落ち込む。SK800・803・804を切る。切合い関係は覆土中に地山II A層の混じる割合によって判断した。規模・形状：135cm×92cmの隅丸長方形プランを呈し深さは23cmを測る。底面に深さ5cm位の小さな凹みが見られる。覆土：灰色土と地山II A層がほぼ等量混じり合う。坑底西寄りで人頭大の円礫が一個出土している。他に黒色土器A杯・椀、須恵器片が検出された。帰属時期：出土遺物の様相から6～7期に比定される。

SK806(II群C類3種) 位置：北部II 図版50

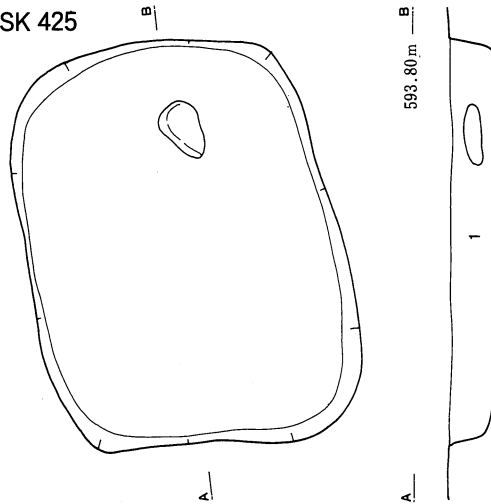
検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。SK805を切っている。本址の覆土の方が灰色土の混入が多い。規模・形状：162cm×104cmの楕円形プランを呈し深さは22cmを測る。南寄りの壁面が焼土化している。覆土：青灰色土を主体とし地山II A層・炭粒が混じる。坑内北寄りで花崗岩の人頭大の円礫が一個出土している。なお、円礫は被熱により赤変していた。帰属時期：出土遺物がなく不明確であるが、覆土の特徴か

SK119



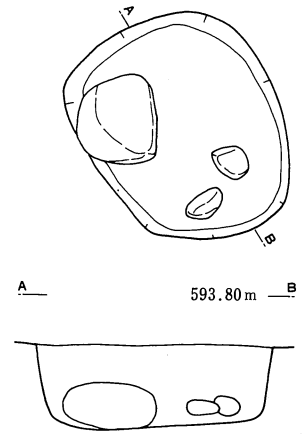
1. 灰色土、II A層・炭粒混じる

SK 425

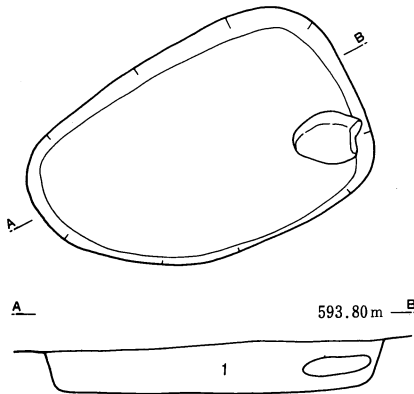


1. 10YR3/2 黒褐色土

SK 529

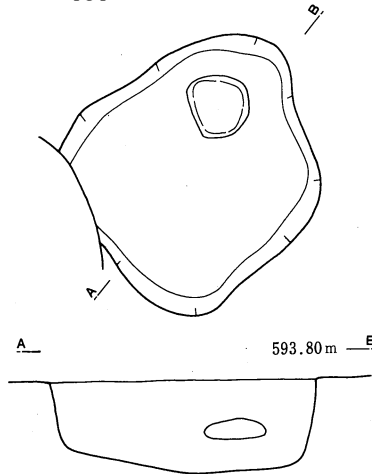


SK 426

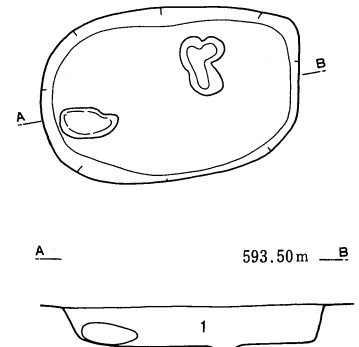


1. 10YR3/2黒褐色土

SK535

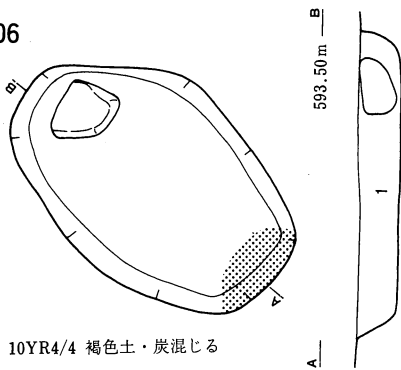


SK 801



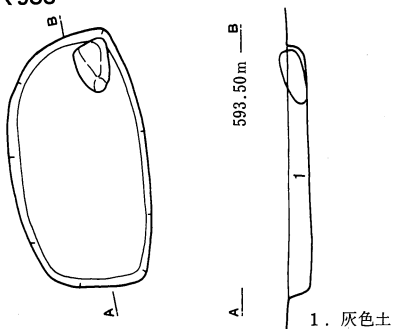
1. 10YR4/4 褐色土

SK 806



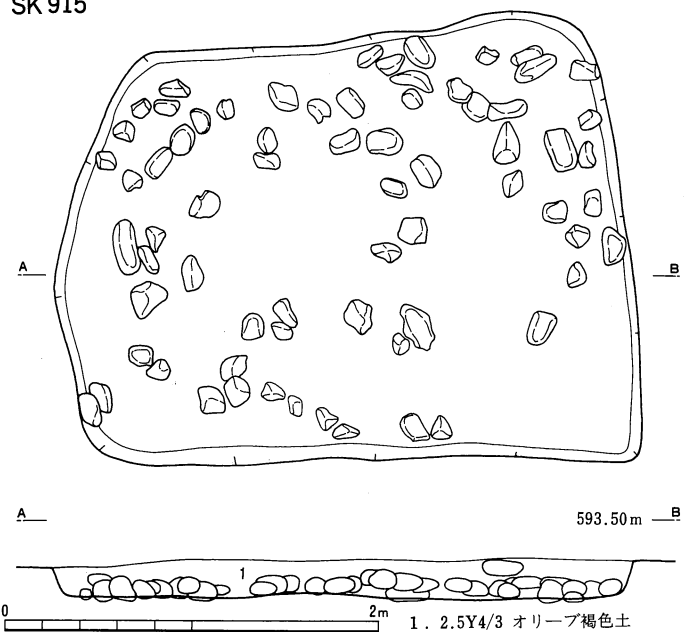
1. 10YR4/4 褐色土・炭混じる

SK 938



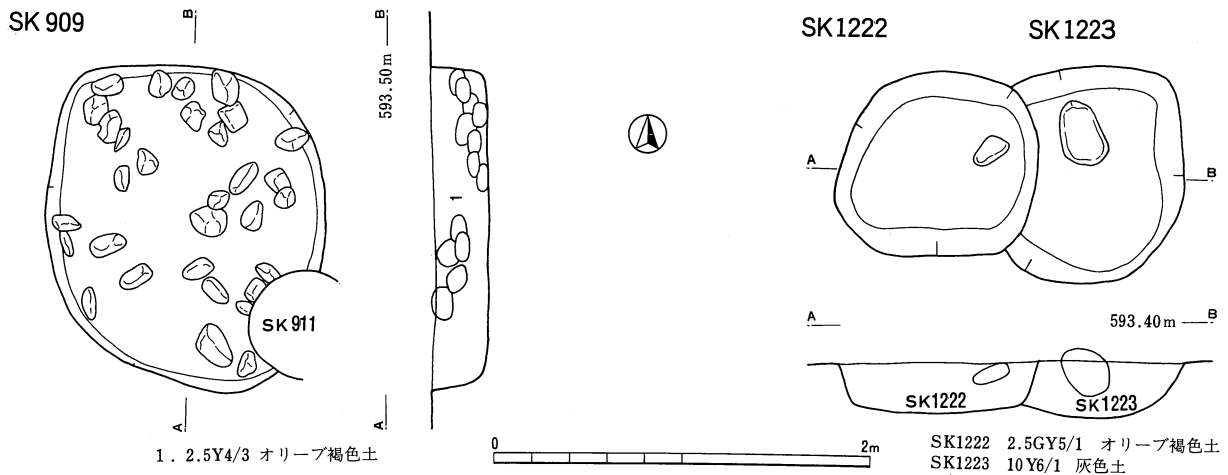
1. 灰色土

SK 915



1. 2.5Y4/3 オリーブ褐色土

第150図 古代土坑実測図



第151図 古代土坑実測図(5)

ら6～7期に比定される。

SK909(II群B類4種)

位置：北部II

図版52

検出：II A層上面で暗褐色土の混じる青灰色土が落ち込む。SK911・912に切られSK908・910・913を切る。切合い関係は覆土中に混じる地山II A層の量によって判断した。規模・形状：188cm×156cmの楕円形プランを呈し深さは21cmを測る。覆土：青灰色土を主体とし地山II A層が混じる。拳大以上の礫が多数覆土中で出土している。他に黒色土器A杯・椀、須恵器杯、軟質須恵器杯片などの遺物が検出された。帰属時期：出土遺物の様相から7期に比定される。

SK915(I群B類5種)

位置：北部II

図版52

検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。SK913を切る。本址のほうが覆土中に灰色土の混じる割合が高い。規模・形状：304cm×225cmの隅丸長方形プランを呈し深さは15cmを測る。覆土：青灰色土を主体とするが地山II A層の混入も多い。覆土下位に拳大以上の円礫が多出している。また、覆土中で土師器杯、黒色土器A杯・椀、須恵器杯、軟質須恵器杯、灰釉陶器碗の破片が出土している。帰属時期：出土遺物の様相から8期に比定される。

SK938(II群C類3種)

位置：北部II

図版50

検出：II A層上面で青灰色土が落ち込む。規模・形状：133cm×73cmの隅丸長方形プランを呈し深さは11cmを測る。覆土：青灰色土を主体とし地山II A層・炭粒が混じる。坑内北寄りで人頭大の花崗岩の円礫が一個出土した。なお、円礫は被熱により赤変していた。帰属時期：出土遺物がなく不明確であるが、覆土の特徴から7・8期に比定される。

SK1222・1223(I群B類3種)

位置：北部II

図版53

検出：II A層上面でSK1222がSK1223を切った状態で検出された。規模・形状：SK1222は105×73cmで、SK1223は115cm×110cmの規模を有し双方とも隅丸方形を意識したプランで、深さはそれぞれ23・27cmを測る。覆土：青灰色土を主体とし地山II A層が混じる。SK1223のほうがII A層の混入が多い。覆土中で人頭大の円礫が一個ずつ出土している。SK1223では黒色土器A杯、須恵器杯、軟質須恵器杯、灰釉陶器碗片が出土しており黒色土器A杯には墨書がされている。帰属時期：出土遺物の様相や遺構配置から8期と判断される。

(5) 完形・半完形状態の土器・金属製品を伴う土坑

第152・153図

土師器甕を埋設した例(SK239)のほかは遺物の出土状況から土坑に遺物が帰属するかどうか見極めるの

は困難であるが、逆に、本遺跡においては完形・半完形状態の遺物が土坑から出土すること自体限られた数しか見出せず、特異な存在である。出土遺物では食器類が多く検出されているが、土師器甕が埋設されたSK228・239、須恵器の甕類の破片が多数出土したSK229は甕を埋設した施設と判断され、掘立柱建物址の近くに存在している。また、多器種にわたる遺物が出土したSK187・188・190は1・2期に比定される掘立柱建物址と極めて規則的な位置関係を有しながら隣接しており、遺物の出土状況や覆土の特徴から掘立柱建物址から廃棄された遺物が入られるごみ溜めといった機能が考えられる。

SK101(II群C類4種) 位置：南部II 図版18

検出：II A層上面で暗褐色土が落ち込む。SK99に切られる。規模・形状：201cm×108cmの楕円形プランを呈し深さは25cmを測る。覆土：地山II A層を主体としII B層・灰色土・炭粒が混じっており、SB25の覆土中・下位に類似している。遺物出土状況：状況：坑底北寄りではほぼ完形状態の土師器高杯(2)が横位で出土した。帰属時期：出土遺物の様相から2期に比定される。

SK187(II群B類4種) 位置：中部I 図版27

検出：II B層上面で褐色土が落ち込む焼土・炭粒が散布していた。SK188を切る。規模・形状：183cm×156cmの楕円形プランを呈し深さは17cmを測る。覆土：3分層される。上層は黄褐色土、中・下層は炭・灰・焼土粒を多く含み、特に中層は焼土塊を主体とした土である。遺物出土状況：須恵器杯A(1)・鉢(8)をはじめ須恵器杯・杯蓋・鉢片が散在的に出土した。所見：中・下層の状態から他所で形成された焼土・灰・炭を坑内に持ち込んだと判断され、遺物もその際に混入したのであろう。SK188～194は本址と類似した土坑で本址を含め何度かの切合い関係が見られるが、これらの配置はST19・20の存在を強く意識したと考えられる。

SK188(II群B類4種) 位置：中部II 図版27

検出：II B層上面で暗褐色土が落ち込む。SK187に切られSK189を切っている。切り合い関係は覆土中で見られる地山の土粒の量によって判断した。規模・形状：234cm×181cmの楕円形プランを呈し深さ25cmを測る。覆土：3分層される。上・下層は暗褐色土を主体とし地山II B層が混じる。中層は灰色を呈し炭・焼土を多混する。遺物出土状況：中層中で土師器杯(1)、須恵器杯・杯蓋・甕片(5・7)が出土した。帰属時期：出土遺物の様相から2期に比定される。所見：SK187と同様に炭・焼土は他所で形成されたものが坑内に持ち込まれたと判断され、同時に遺物も混入したと思われる。

SK190(I群A類4種) 位置：中部I 図版27

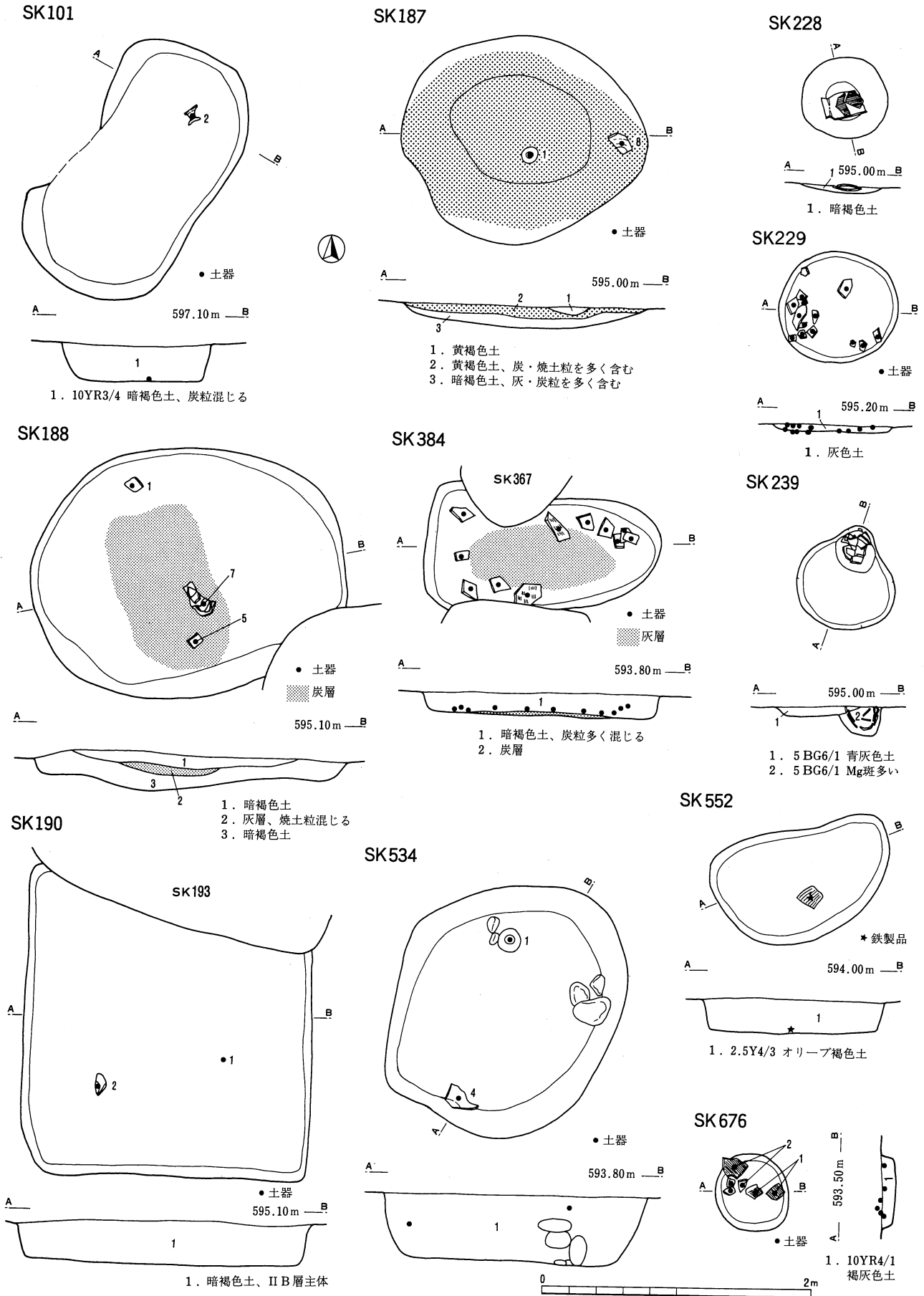
検出：II B層上面で灰色土粒の混じる褐色土が落ち込む。SK193に切られSK189・191・192を切る。切合いは覆土の特徴によって判断を下した。規模・形状：233cm×215cmの隅丸方形プランを呈し深さは32cmを測る。覆土：地山II A層を主体としII A層・灰色土・炭・焼土粒が混じる。遺物出土状況：覆土中で須恵器杯片(1・2)が出土した。帰属時期：出土遺物の様相から2期に比定される。本址もSK187・188と同様にST19・20などとの関係が注意される。

SK228(II群A類1種) 位置：中部II 図版30

検出：II A層上面で暗褐色土が落ち込む。規模・形状：径61cmの円形プランを呈し深さは6cmと浅い皿状である。覆土：地山II A層を主体とし灰色土が混じる。遺物出土状況：土師器甕Bが横倒しの状態で出土している。帰属時期：出土遺物の様相から2・3期に比定される。

SK229(II群A類2種) 位置：中部II 図版30

検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。規模・形状：90cm×86cmの円形プランを呈し深さは10cmを測る。覆土：灰色土を主体とし地山II A・II B層が混じる。遺物出土状況：3個体分の須恵器甕の口縁部破片が



第152図 古代土坑実測図(6)

多出している。帰属時期：出土遺物の様相から5期以前と判断される。

SK239 (II群A類2種) 位置：中部II 図版6、PL12

検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。ST27と隣接している。規模・形状：一辺68cmの方形を意識したプランを呈し、深さは5cmであった。北東隅底面がさらに径30cm、深さ20cm位掘り凹められ、中に土師器甕Bの下半部が正位に埋設されていた。覆土：土師器甕Bの出土した部分は灰色土と地山II A層の土塊が混じり埋め戻された状況が示されていた。その上の浅い掘り込みの部分は灰色土を主体とし、自然堆積土と判断される淘汰の良い土であった。帰属時期：出土遺物の様相から3・4期に比定される。

SK518 (I群B類4種) 位置：北部II 図版56

検出：II B層上面で灰色土粒の混じる暗褐色土が落ち込む。覆土中に灰色土が多く混じるSK519・520に切られている。規模・形状：249cm×204cmの隅丸長方形プランを呈し深さは30cmを測る。覆土：地山II A層・灰色土・II B層が混じり合い炭粒が混じる。人頭大の円礫が7個底面上で出土した。遺物出土状況：南壁寄り底面で黒色土器A杯(2)が検出された。帰属時期：出土遺物の様相から6・7期に比定される。

SK534 (II群B類4種) 位置：北部II 図版56

検出：II B層上面で灰色土粒の混じる暗褐色土が落ち込む。SK535を切る。切合い関係は灰色土粒の混入する割合によって判断した。規模・形状：217cm×170cmの楕円形プランを呈し深さは46cmを測る。覆土：地山II A層・灰色土・II B層が混じり合い炭粒が混じる。覆土中に拳大から人頭大の円礫が5個出土している。遺物出土状況：覆土中で黒色土器A鉢(1)・須恵器甕(4)が逆位で出土している。帰属時期：出土遺物の様相から5・6期に比定される。

SK552 (I群C類3種) 位置：北部II 図版42

検出：II A層上面で青灰色土が落ち込む。規模・形状：136cm×86cmの楕円形プランを呈し、深さは13cmを測る。覆土：青灰色土を主体とし褐色土粒が混じる。遺物出土状況：不明鉄製品(94・95)が坑底上で出土している。他に鉄滓も検出された。帰属時期：出土遺物が見られず不明確であるが、覆土の特徴から6・7期に比定される。

SK676 (II群A類1種) 位置：北部II 図版49、PL37

検出：II A層上面で灰褐色土が落ち込む。規模・形状：径52cmの円形プランを呈し深さは9cmであった。覆土：灰色土を主体とし地山II A層が混じる。遺物出土状況：土師器甕B片(1~3)が覆土中で出土した。出土状況には規則性は見られず、むしろ散在的な出土である。帰属時期：出土遺物の様相から3・4期に比定される。

SK841 (II群B類2種) 位置：北部II 図版48

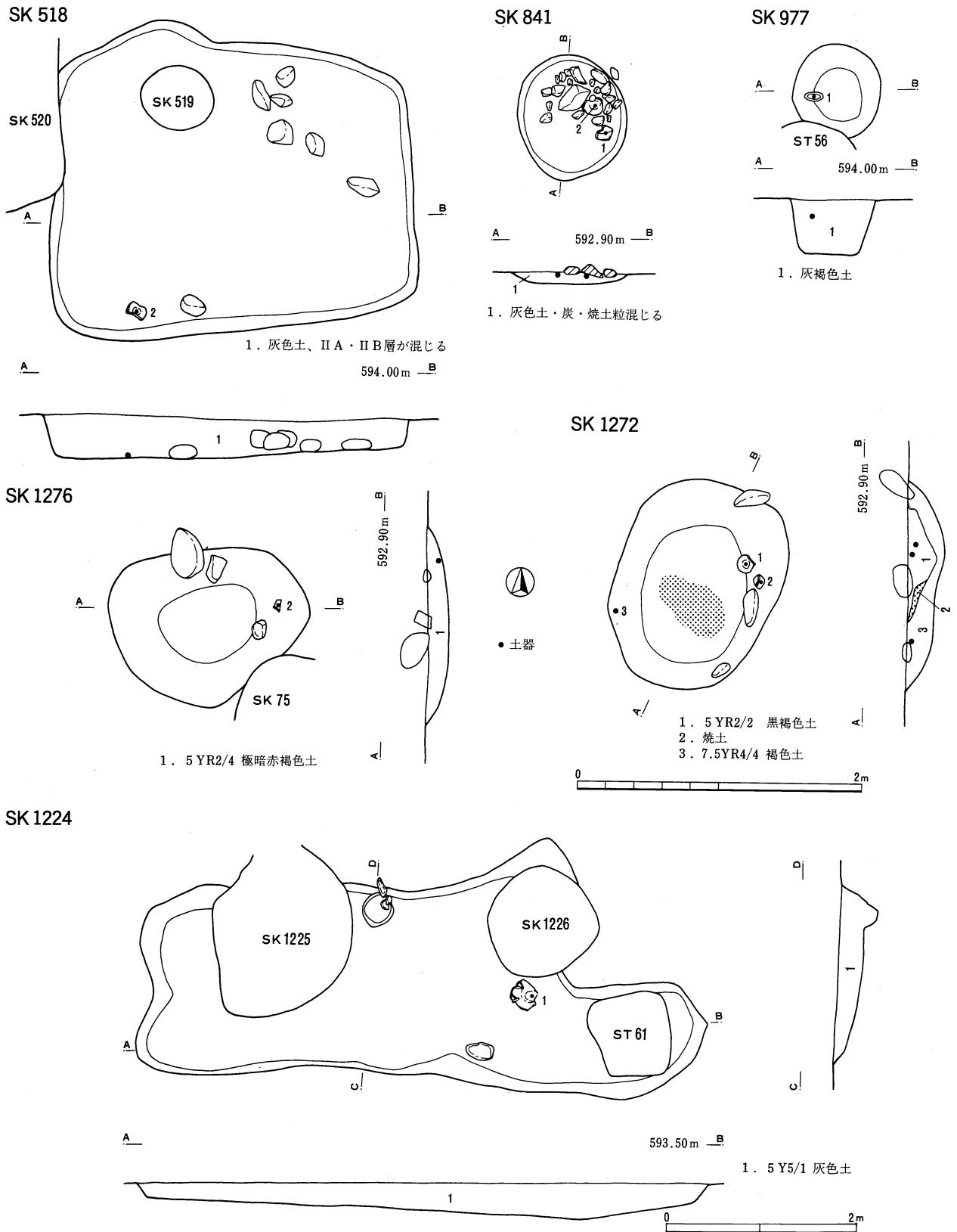
検出：SB147床下で検出され、灰色土が落ち込んでいた。規模・形状：86cm×77cmの楕円形のプランを呈し深さは8cmである。覆土：灰色土を主体とし地山II A層が混じる。覆土中に拳大から人頭大の円礫が多出した。遺物出土状況：黒色土器A杯(1・2)が礫間で出土している。帰属時期：出土遺物の様相から6~8期に比定される。

SK977 (II群B類2種) 位置：北部II 図版51、PL37

検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。ST56に切られる。規模・形状：67cm×61cmの楕円形プランを呈し深さは42cmを測る。覆土：灰色土を主体とし地山II A層が混じる。遺物出土状況：須恵器杯蓋A(1)が逆位で覆土上位に出土している。帰属時期：出土遺物の様相から1期に比定される。

SK1224 (III群D類5種) 位置：北部II 図版53

検出：II A層上面で青灰色土が落ち込む。SK1225・1227に切られる。切合い関係は地山II A層の混入する割合から判断した。規模・形状：575cm×210cmを測る不整形なプランであるが東西方向に長い。東側で



第153図 古代土坑実測図(7)

はST61の柱穴の周囲を掘り込んである。北側坑底面に深さ20cm弱の落込みが見られた。覆土：淘汰の良い青灰色土を主体とする。遺物出土状況：東側坑底上で黒色土器A鉢(1)が伏せた状態で出土している。帰属時期：出土遺物の様相や覆土の特徴、特に、ST61の柱穴の存在を意識して掘り込まれていることからST61と併存した可能性が高い。

SK1276(II群B類3種)

位置：北部II

図版63

検出：I C層上面で褐色土が落ち込む。SK1275に切られる。規模・形状：140cm×110cmの楕円形プランを呈し深さは7cmを測る。覆土：褐色土を主体とし覆土中に拳大以上の円・角礫が3個出土した。遺物出土状況：土師器杯(1)が坑底近くで出土したほか山茶碗片が検出されている。帰属時期：出土遺物の様相から15期に比定される。

SK1272(II群B類3種)

位置：北部II

図版63

検出：I C層中で黒褐色土が落ち込み炭粒が散布していた。規模・形状：148cm×123cmの楕円形プランを呈し深さは27cmを測る。覆土：3分層される。上層は黒褐色土、中層は焼土で、下層は灰褐色土を主体とする。覆土中位に人頭大の円礫が3個出土している。中層の焼土は本址内で火の焚かれた痕跡のないことから他所より持ち込まれたものであろう。遺物出土状況：覆土中位で土師器杯(1)・椀(2)・羽釜片が検出された。帰属時期：出土遺物の様相から15期に比定される。

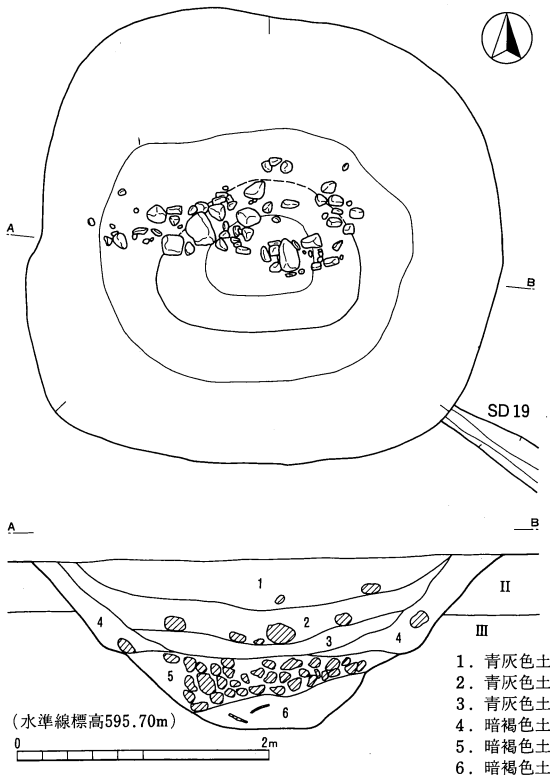
(6) 排水にかかわる施設

第154図

SK156(I群A類5種)

位置：中部I

図版25、PL12



検出：II A層上面で青灰色土が落ち込む。規模・形状：376cm×355cmの方形を意識したプランで、断面は播鉢形を呈し深さは135cmを測る。検出面から深さ75cm位の位置に平坦面が見られる。また、本址の下半部は地山III層を掘り込んでいる。覆土：6分層される自然堆積土である。最下層には炭化材が見られた。その上の5層中には拳大から人頭大の円礫が多量に出土している。遺物出土状況：上半部の1～4層中には土師器杯(1)、黒色土器A椀(3)、灰釉陶器椀(7)など7・8期に比定される遺物が、また、集石下から坑底にかけ土師器高杯(2)、須恵器杯A(4～6)・平瓶(8)が出土している。帰属時期：集石下から坑底にかけての遺物の様相から本址の構築されたのは1期と判断される。所見：本址は深い播鉢形の断面を呈し、地山III層まで掘り込むという他址には見られない特徴を有している。覆土も級化作用が顕著に見られる自然堆積土であり、また、SD19と接続していることから、周辺部、特にSB49・50付近の排水を目的として作られたと推定される。同様の遺構としては中世2期に帰属するSK2769・2770があげられる。

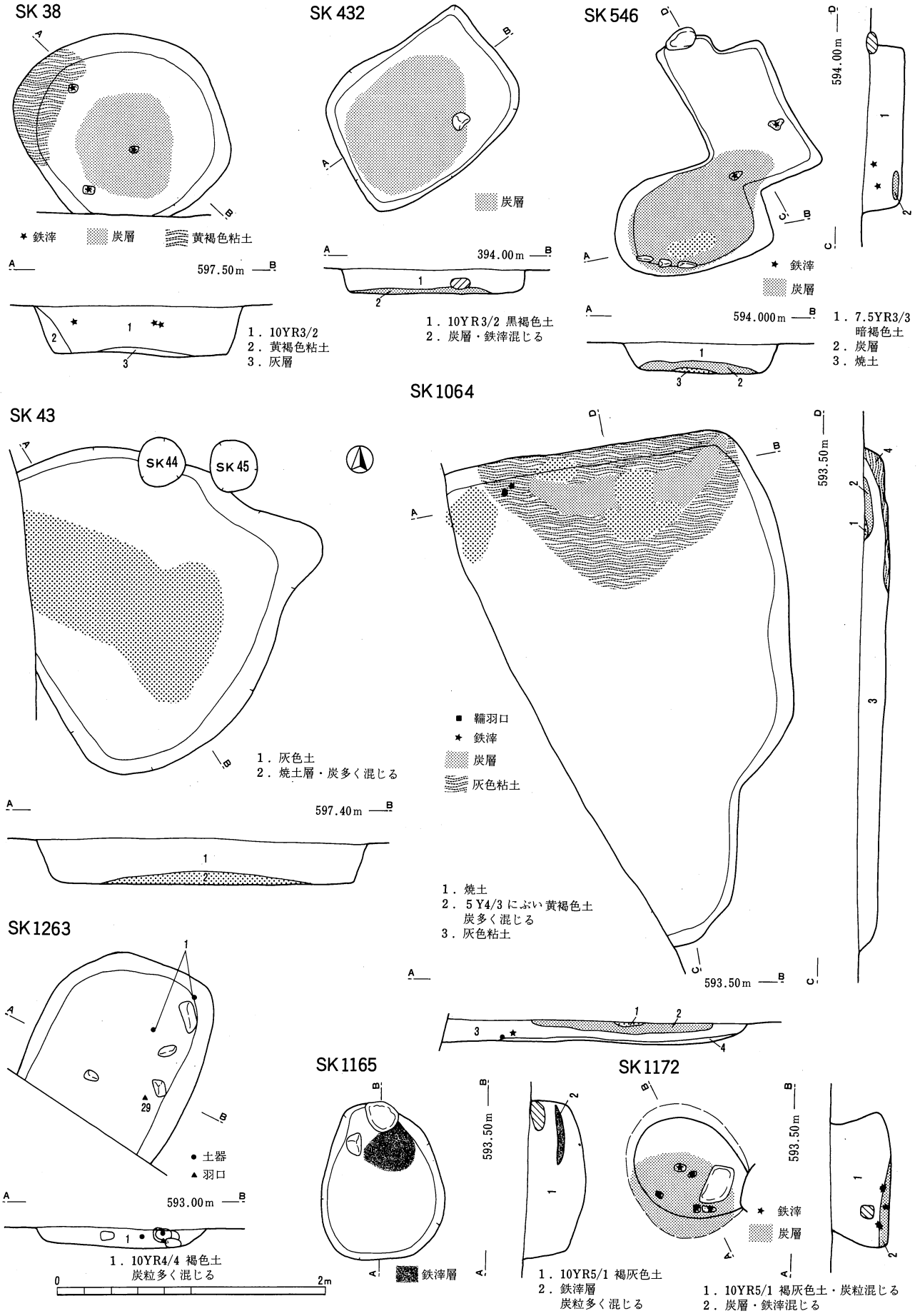
第154図 SK156実測図

6 小鍛冶址

第155図

概観

本遺跡で小鍛冶址と判断される遺構にはこのほかにSB2・8・123が存在するが、明確に炉体もしくはそれに類する構造物が検出されたのはSB123のみである。ここに掲げた土坑は土製の轆羽口、大小様々な形状の鉄滓の出土、炉体の痕跡と考えられる粘土塊や焼土・炭層など、小鍛冶にかかわる諸属性が複数以上確認された遺構である。そのなかには直接その場所で小鍛冶が行われた場合と、あるいは近くで行われた



第155図 古代小鍛冶址実測図

小鍛冶の廃棄物が入ったと判断される遺構もある。SB2・8では覆土中で鉄滓・鞆羽口・炭層が確認され、埋没途中の竪穴住居址内で小鍛冶が行われた可能性が高い。

SK38(II群B類3種) 位置：南部I 図版13

検出：II A層上面で灰色土を主体とした土が落ち込む。規模・形状：152cm×132cmの楕円形プランで鍋底形の断面を有し深さは36cmを測る。覆土：3分層される。1層は灰色土を主体とし炭粒・砂礫が混じる。2層は北西寄りの坑底から壁面に分布する黄褐色粘土層で炉体の痕跡が考えられる。3層は灰層である。遺物出土状況：1層中で鉄滓が3個検出された。帰属時期：出土遺物が少なく不明確であるが、覆土の特徴から6～8期と判断される。

SK43(III群B類4種) 位置：南部I 図版13

検出：II A層上面で灰色土が落ち込む。小土坑SK44・45に切られる。また西側は攪乱されている。SK38と隣接している。規模・形状：205cm×139cmの不整形な楕円形で東側に張出しが見られる。断面は鍋底形で深さは28cmを測る。覆土：2分層される。上層は灰色土を主体とし砂礫が混じる。下層は坑底部に帯状に分布する焼土層で炭粒を多く含む。帰属時期：2期に比定される土師器甕片と椀片が出土した。覆土の特徴は6～8期のものである。所見：本址内で小鍛冶に係わるものは発見できなかったがSK38と隣接することや周辺で鉄滓が多出したことから小鍛冶址と判断した。

SK432(I群C類3種) 位置：北部II 図版41

検出：II A層中で青灰色土が落ち込んでいた。規模・形状：140cm×103cmの隅丸長方形プランを呈し、断面は鍋底形で深さは23cmを測る。覆土：2分層される。上層は青灰色土を主体とし地山II A層が混じる。下層は坑底部に薄く分布する炭層で多量の鉄滓が混入する。遺物出土状況：鉄滓は大小様々な形状を取り総数62個1475gに及ぶ。また、上層中で黒色土器A椀、須恵器杯、軟質須恵器杯片、土製の鞆羽口片が出土している。帰属時期：出土遺物の様相から7期に比定される。

SK546(III群4種) 位置：北部II 図版44

検出：II A層上面で炭粒を多く含む灰色土が落ち込む。II B層上面検出のSB108を切る。規模・形状：くの字形を呈した不整形な土坑で2基の長方形プランが重なり合ったような平面形である。北側は126cm×70cm・深さ25cm、南側は115cm×77cm・深さ23cmを測る。覆土：3分層される。上層は灰色土を主体とし地山II A層・砂礫が混じる。中・下層は炭・焼土を主体とした土で坑底部に薄く分布していた。遺物出土状況：2層を中心として大小様々な形状の鉄滓が50個1,140g出土した。また、覆土中で土製の鞆羽口片(25)も検出された。帰属時間：出土遺物の様相や覆土の特徴から6～8期と考えられる。

SK1064(I群5種) 位置：北部II 図版52

検出：II A層上面で灰色土が落ち込み焼土塊・炭粒が散布していた。西側は攪乱を受けている。規模・形状：南北方向に378cmの方形を意識したプランと判断され、深さは18cmを測り坑底面は平坦であった。覆土：4分層される。1・2層は検出面上で見られた焼土・炭粒を多含する土である。覆土の主体をなす3層は灰色土を主体とし、地山II A層が混じる。4層は灰色を呈した粘土で炭・焼土粒を混じえている。この粘土層は炉体の痕跡とも考えられる。遺物出土状況：4層中で土製の鞆羽口片、大小様々な形状の鉄滓9個940gが出土した。帰属時期：覆土の特徴から6～8期に比定される。

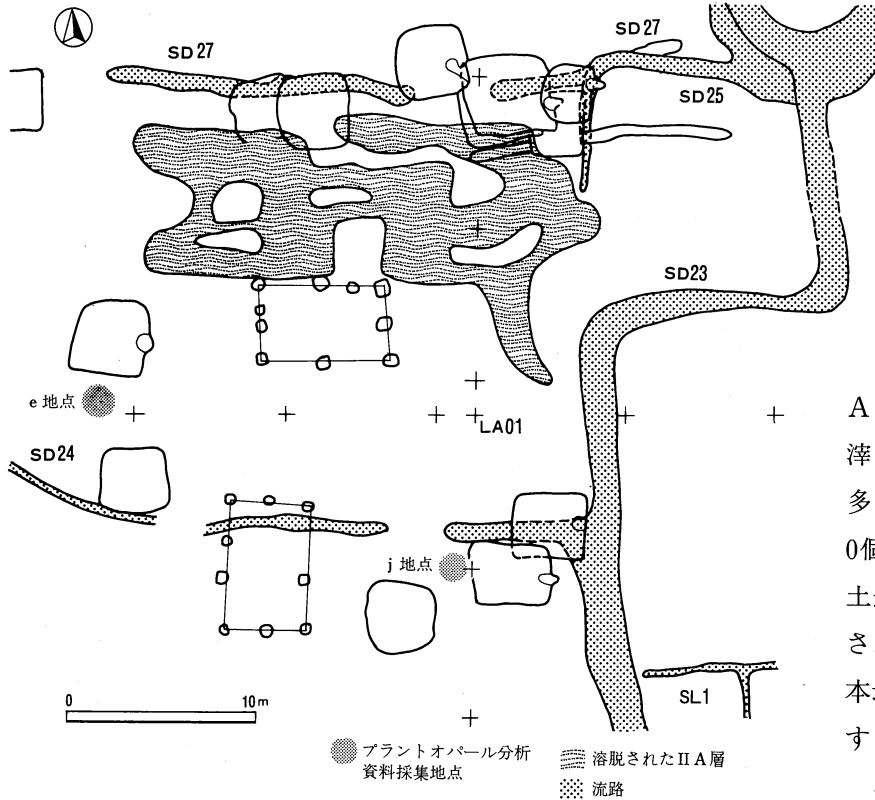
SK1165(II群B類3種) 位置：北部II 図版52

検出：II A層上面で青灰色土が落ち込む。SK1064と隣接している。規模・形状：115cm×92cmの楕円形プランを呈し深さは46cmを測り坑底中央がやや低い。覆土：2分層される。主体となる1層は青灰色土を主体とし、地山II A層が混じる。2層は炭層で鉄滓を多含している。遺物出土状況：覆土中で土製の鞆羽口

片(28)が見られたほか、紡錘車片・土師器・須恵器片が出土している。また、鉄滓が17個720gが確認されている。帰属時期：出土遺物の様相から7期に比定される。所見：炭層の状態から坑内で火の焚かれたのは確実に製錬に係わった遺構の可能性はある。

SK1172(II群B類3種) 位置：北部II 図版52

検出：II A層上面で青灰色土が落ち込む。小土坑SK1173に切られる。また、SK1165と隣接している。規模・形状：検出面上では80cm×72cmの楕円形プランであるが坑底付近では100cm×85cmの規模を有し断面



は袋状を呈している。深さは44cmを測る。覆土：2分層される。上層は青灰色土を主体とし地山II A層が混じる。下層は坑底付近に分布する炭層で多量の鉄滓が混じる。遺物出土状況：覆土中で土製品の鞆羽口片が4個出土したほか黒色土器A・土師器甕B片が出土した。鉄滓は指頭大以下の大きさのものが多くが大形のものも混じり総計110個2540gに及ぶ。帰属時期：出土遺物の様相から7・8期に比定される。所見：SK1165と同様に本址は製錬に係わった可能性を有する。

SK1263(I群3種)

位置：北端I

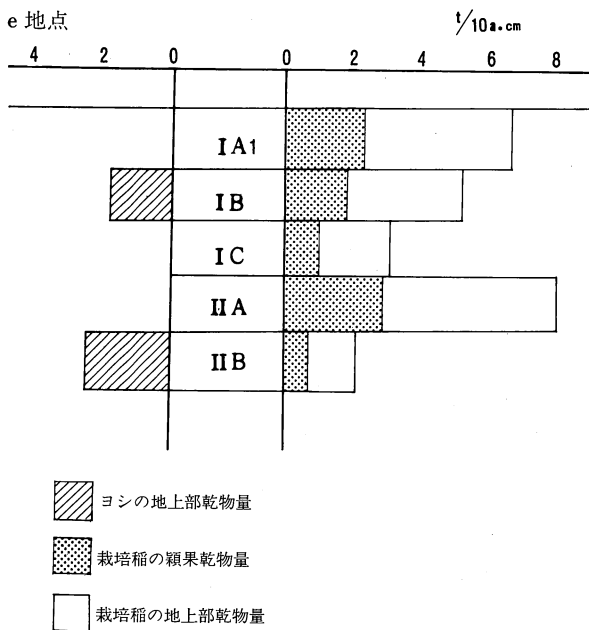
図版63、PL40

検出：I C層上面で灰白色土が落ち込む。南側を試掘溝に切られている。規模・形状：東西130cmの隅丸長方形を意識したプランで深さは16cmを測る。覆土：灰白色土を主体とし炭粒を多含し、焼土粒も混じる。遺物出土状況：覆土中で土製の鞆羽口片(29)が出土したほか白磁碗片(1)も検出された。帰属時期：出土遺物の様相から15期に比定される。

7 水田址

概観

分布：水田址は中部III地区の東側II A層上面と北端地区I Df層上面の2か所で確認された。このほかに灰色土化現象が進み、水田が営まれたと判断される土壌が分布するところも3地点で確認されている。



第156図 中部III地区の水田土壌

水田土壌は南部 I 地区東側SB14の周囲、中部 I 地区のSB48～51の周囲、中部III地区のST30の周囲に分布しており、梅村弘氏の現地指導でもその可能性を指摘されたが、明確な畦畔を捉えられなかったため水田址として認定できなかった。現地表面の条里景観との関係についてはSD23・24・SL1で部分的に一致する部分が見られ、同じ地点のIC層上面でも同じ傾向が認められ注意される。

SL1 位置：中部III 図版6、第156・183図

検出：II A層上面でSD23と軸を合わせるようにマンガンの集積が著しい土壌が細長く帯状に分布してT字形を呈していたため、この部分を畦畔と判断した。本址付近は面的調査に先立ってプラントオパール分析を宮崎大学の藤原宏志氏に依頼して行った。その結果、SL1に近接するNo.21-j地点で13,557個/cc、地上部乾物量に換算して3,986t/10a.cmと多量のプラントオパールが検出された。アゼ：周囲よりマンガンの集積が強く、灰色土粒が多く混じる部分が帯状に延びるT字形に延びる部分をアゼと判断した。土層断面ではこうした現象は検出面下5cmまで見られ、田面下とアゼ下における金属イオンの溶脱・集積作用の相違を反映するもので、いわば「畦畔の影」を検出したと判断される。規模・形状：アゼと判断される土壌は幅20cm～45cmで、東西方向に3.6m・南北に12mを測る範囲に分布している。アゼの走行はSD23に沿っている。帰属時期：本址の北側に分布する水田土壌と本址は一連のものと判断され、主軸を合わせるSD23の帰属時期から本址も15期に比定される。所見：本址の北側、ST30とSD27に挟まれた部分でもII A層上面が溶脱作用を受けて灰白色に変色した水田土壌が確認された。この灰白色の土壌は不整形なプランで展開し、一部では矩形を呈しているものの田面とアゼを峻別することは不可能であった。SL1と同様に行われたプラントオパール分析(e地点)ではII A層上面で27,208個/cc、地上部乾物量に換算して、7,999t/10a.cmと多量のイネのプラントオパールが検出されており水田址の存在していた公算は強い。水田土壌は遺構との切合い関係からSB70～75より新しく主軸方向を合わせているSD27の帰属時期からも15期と判断される。

SL2・3 位置：北端 I 図版10・63・64

検出：I Df層上面で灰白色土粒が多く、マンガン・水酸化鉄の班紋の薄い土壌が帯状に分布する地点が2箇所認められ、南側をSL2、北側をSL3とした。アゼ：検出された帯状の部分は田面下と畦畔下の水田土壌化作用の進行の相違によって形成されたと判断され、同様な状況はIC層上面で数多く確認されている。規模・形状：アゼと判断される土壌はSL2で長さ4m・幅50～70cm、SL3で長さ3.2m・幅90cmを測る。田面の形状等は不明である。帰属時期：IC層堆積以前であることから14期以前と判断される。

8 畠址

概観

本遺跡で古代の畠址と考えられる遺構は2地点で確認された。いずれも溝状の掘り込みが並列した状態で、畝と畝の間の掘り凹められた部分を調査したにすぎず、畝本体や耕作面の凹凸は確認されなかった。また、規模については100㎡前後の広さで、北部II地区の集落内もしくは隣接した位置に存在する小規模な畠と推定される。

SN1 位置：北部II 図版53、PL36

検出：II A層上面で青灰色土が落ち込む溝が15条並行して検出された。SB163に切られ、SA17ほか多数の土坑と重複関係をもつ。切り合い関係は覆土中に含まれる地山II A層の量によって判断した。規模・形状：東西方向に8m・南北に7.7m位のほぼ正方形の範囲内に14条の畝が存在したと判断される。検出さ

れた畝間の凹みは半月形の断面を呈し幅15～40cm・深さ10cm弱を測る。底面には若干の凹凸が見られた。畝の間隔には10～20cmと60～70cmの二つの値が見られることから畝の作替えも想定される。覆土：淘汰の良い青灰色土で自然堆積と判断される。覆土中で鉄製品が出土している。帰属時期：切合い関係からSB163より古く位置付けられ、覆土の特徴から7・8期と判断される。

SN 2 位置：北部II 図版53

検出：II A層上面で青灰色土が落ち込む溝が6条並行して検出された。ST61・SD39・SK1244ほか多くの土坑群に切られている。規模・形状：主軸はかなり西に振り、東西9m・南北12mの範囲を占有していたと判断される。SN1と同様に畝と畝の間の掘り込みを確認したにすぎず、消滅した部分も見られる。検出された畝間の凹みは幅10～25cm・深さ15cm弱で断面は半月形を呈している。畝の間隔は60～80cmと想定される。覆土：青灰色土を主体とするがSN1よりは地山II A層の混入は多かった。帰属時期：出土遺物がなく不明確であるが、覆土の特徴から6・7期に比定される。

9 自然流路・河川跡

概観

本遺跡で古代に帰属する河川跡は11本確認された。このうち一過性の氾濫・洪水の痕跡と判断されるものにNR1・2・8がある。また、NR5・6・7・10は遺構が展開する以前から流れていた河川の流路跡と判断される。そのほかは地形や流下方向から古代の遺構群の展開にともなって人工的に開削された流路と推定され、自然流路起源の河川を含めいずれも多少の移動や断絶は見られるものの、現在に至るまで連綿と流れ用排水路として機能していたものと考えられる。

NR 1 位置：南部I・II 図版4・14～17

検出：I Df層上面およびII A層上面で灰色ないしは暗褐色を呈する含礫泥層の堆積が認められた。規模・形状：調査された部分で長さ45m、最大幅は16mに達する。II A層・II B層を切り込んで堆積しIII層上部もわずかに浸食されている。断面はレンズ状を呈し最大厚60cmを測る。主体となる礫は鶏卵大が多く幼児頭大までの円礫を含む。基質の淘汰は悪く砂粒を不規則に混入する。この含礫泥層には礫の長軸方向が東西方向ないしは西南西―東北東の間に収束する構造(インプリケーション)が観察され、それに基づいて古水流を復元すると本調査区西側の現永田集落の東方から流れてきたと推定される。これは本遺跡と北栗遺跡の境に流れていたと推定される河川(境沢)からの氾濫性堆積物が河川沿いの微高地を避けて東流し堆積したものと考えられる。帰属時期：SB15を浸食しており、また、この含礫泥層を掘り込んでSB9・18・SD4が構築されている。I C層には完全に覆われている。遺構との切合い関係から7期に比定され、中部III・北部I・II地区で見られるNR8・I Df層の堆積と同時期と判断される。

NR 2 位置：南部II 図版4

検出：I Df層上面で褐色を呈する含礫泥層の堆積が認められる。規模・形状：3本の流れに分かれるがほぼ同じ内容である。調査された部分で長さ14m、幅は南から4.3・3.4・3.8mを測る。II A層・II B層を切り込んで堆積し断面はレンズ状を呈している。最大厚は50cmに達する。礫は拳大以下で基質は粗粒砂であるが縁辺部では灰色土を混入している。礫の長軸方向は西南西―東北東の方向に収束し、流路の走向と調和している。本流路もNR1と同様に調査区の西側から流れてきた泥流性堆積物と判断される。帰属時期：土層断面の観察ではI Df層とNR2の堆積物とは指交状態で接し合うことから南部地区のI Df層堆積時に形成された一過性の堆積物であろう。遺構との切合い関係からSB34より古く位置付けられI Df層の堆積時期から本流路も6期と判断される。

NR 3 位置：南部II 図版4、第5図、PL50

検出：II A層上面で灰色の砂礫層の堆積が認められた。現地表面でもほぼ同一位置に「横堰」が存在している(第1章第5節参照)。規模・形状：残存する部分で長さ53m・幅0.6～4mを測り途中でNR4を分岐させている。北側はI C層の堆積によって、南側はNR1の浸食によって消滅している。礫は拳大以下で鶏卵大の円礫が主体となり基質は粗粒砂である。本流路および上方からの水の浸透によってNR3沿いは土壌の灰色化現象が進行していた。帰属時期：2期以降の遺構配置と相関が見られ、4・5期以降の南部II地区の遺構群の変遷は確実に本流路の存在を意識したものであろう。南北両端の底面にはあまり比高差は見られず流下方向は不明であるが、SD4・NR4の分岐の状態や、古代においては小境沢のほうが優勢な河川であったこと、境沢からの取水部分の流路跡はI B層以上でしか観察されないことから北から南へ水を流していたと判断される。本流路の走行は地形や地面の傾斜方向からみて不自然で、NR3下には河川の痕跡が見られないことから人工的に開削されたと考えられる。

NR 4 位置：南部II 図版4、第5図

検出：I Df層上面で灰白色を呈する砂礫が堆積していた。調査された部分で長さ34m・幅0.4～2.1mの規模を有する。断面は弓形ないしはD字形を呈し深さは30cm位を測る。拳大以下の礫を主体とし、基質は粗粒砂である。本流路下II A層上面でも流路の痕跡が見られた。帰属時期：土層断面の観察から本流路付近はII A層上面で周囲より20cm位低く、II A・II B層中にも指頭大以下の礫が混じることから降水時に水流があったと考えられるが、砂礫が堆積するような奔流になったのは周辺の遺構配置から7期以降と考えられ、この時期に改めて開削されたのであろう。

NR 5 位置：南部III 図版5、第6・7図

検出：II A層およびそれに対比される含礫泥層上面で褐色を呈する砂礫層が堆積していた。本流路を含めNR6・7下には幅30mの範囲で移動を繰り返した優勢な河川が存在している。規模・形状：調査された部分で長さ38m・幅0.6～2.4mの規模を有する。拳大までの礫を主体とし基質はII B層に似た黄褐色砂である。流路の断面は弓形を呈し深さは60cmを測る。流路内から須恵器甕片が出土している。帰属時期：I Df層堆積以前で、土層断面の観察からNR6より古いと判断される。本流路は小境沢の祖型でもある。

NR 6 位置：南部III 図版5・20～22、第6・7図

検出：II A層およびそれに対比される含礫泥層上面で、青灰色ないし褐色を呈する砂礫層が堆積する。規模・形状：調査された部分で長さ67mに達し、幅1.5～4.2mの規模を有する。流路の断面は弓形で深さは40cmを測る。流路内の堆積物は砂層と砂礫層及び泥層部分よりなり3・4分層されるが、地点により必ずしも層順や色調は一定していない。流路内から黒色土器A杯、須恵器杯・甕片などが出土している。帰属時期：I Df層堆積以前で出土遺物の様相から6・7期に比定される。本流路も小境沢の祖型と判断される。

NR 7 位置：南部III 図版5・20～22、第6・7・39図

検出：I Df層上面で青灰色砂礫層が堆積している。本流路はSB40・41・43～45・ST9・10・SD13を浸食している。また、SB42は流路の砂礫を掘り込んで構築されている。規模・形状：調査された部分で長さ62mに達し幅は0.7～2.8mを測る。SD43付近では幅広く砂層が堆積し6mの流路幅を有する。流路内の堆積物は4分層されるがいずれも基質は青灰色砂である。帰属時期：遺構との切合い関係から8期に比定される。本流路も小境沢の祖型と見なされる。

NR 8 位置：中部III・北部I 図版6・7・36～38、第7・63図、PL50

検出：II A層上面で褐色ないし灰色を呈する砂礫層が幅広く堆積している。SB78・79・80・84・85・ST34を浸食している。規模・形状：調査された部分で長さ52mに達し、幅10～26mを測る。流路底には30cm

内外の凹凸が見られる。流路の断面は弓形で深い部分では50cmを測り、II A・II B層およびIII層の上部を浸食している。堆積物中には拳大までの礫を含み粗粒砂が基質となる。部分的ではあるがこの砂礫層の上に砂層の堆積が見られ、さらに上部を灰色シルトを基質とするI Df層が覆っており、NR 8の成形からI Df層の堆積までは一連の過程に取まると判断される。帰属時期：遺構との切合い関係から7期に形成されたものであろう。この付近はやや微高地状を呈しており、地山も安定した状態で河川の痕跡等が見られないことから、遺構の展開していたある時期に人工的に開削され、その流路に沿って泥質物が流下して形成されたのが本流路であると判断される。本流路は宮沢の祖型と考えられる。

NR 9 位置：北部 図版 7・41～45、第 7 図、PL50

検出：II A層上面で灰色砂礫が堆積する。SB107は本流路を掘り込んで構築されている。規模・形状：調査された部分で長さ100mに達する。幅は0.25～2.5mを測るが1.5m前後の部分が多い。東側で二股に分岐する。断面はD字形を呈し深さは30～40cm位である。鶏卵大の礫を主体とし基質は灰色の粗粒砂である。後置的な水酸化鉄・マンガン沈澱が見られる。帰属時期：土層断面の観察からI Df層堆積以前に流れていたことは確実で、1期および6・7期の遺構配置との相関が強い。なお、I Df層上面から切込む河川は付近には存在していない。NR 9の流れている位置はやや微高地状を呈し、流路下に河川の痕跡が見られないことから、本流路は人工的に開削された流路と考えられる。本流路は久保川の祖型である。

NR10 位置：北部II 図版 9、第 8 図

検出：I Df層上面で褐色含礫泥土が堆積する。規模・形状：現堂沢に浸食されて全体像は不明であるが、残存する部分で長さ32m・幅0.7～3mの規模を有する。流路の断面は弓形で深さは最深25cmを測る。堆積物は4分層され全体に礫は少なく砂・シルトが基調である。帰属時期：I Dr層を切込み面としI C層に完全に覆われていることから14期と考えられる。本流路以北は土層断面の観察から13期以前は級化層理の発達するような河川堆積物に覆われており、側方堆積の様相を呈することから、幅の広い低湿地で降雨時や他の河川の氾濫時には常に冠水する地域であったと判断される。I Dr層堆積以降この付近にいくつかの河川跡が観察されるようになる。本流路は堂沢の祖型である。

NR11 位置：北部I 図版63

検出：I Dr層上面でマンガンの沈着する砂が帯状に延びていた。規模・形状：長さ8m幅60～70cmの小規模な流路である。断面は弓形を呈し深さは5cm位であった。明確な掘込みを持たず、その状態からI Dr層堆積時に生じた流路の痕跡と考えられる。

第2節 中世の遺構

1 竪穴住居址

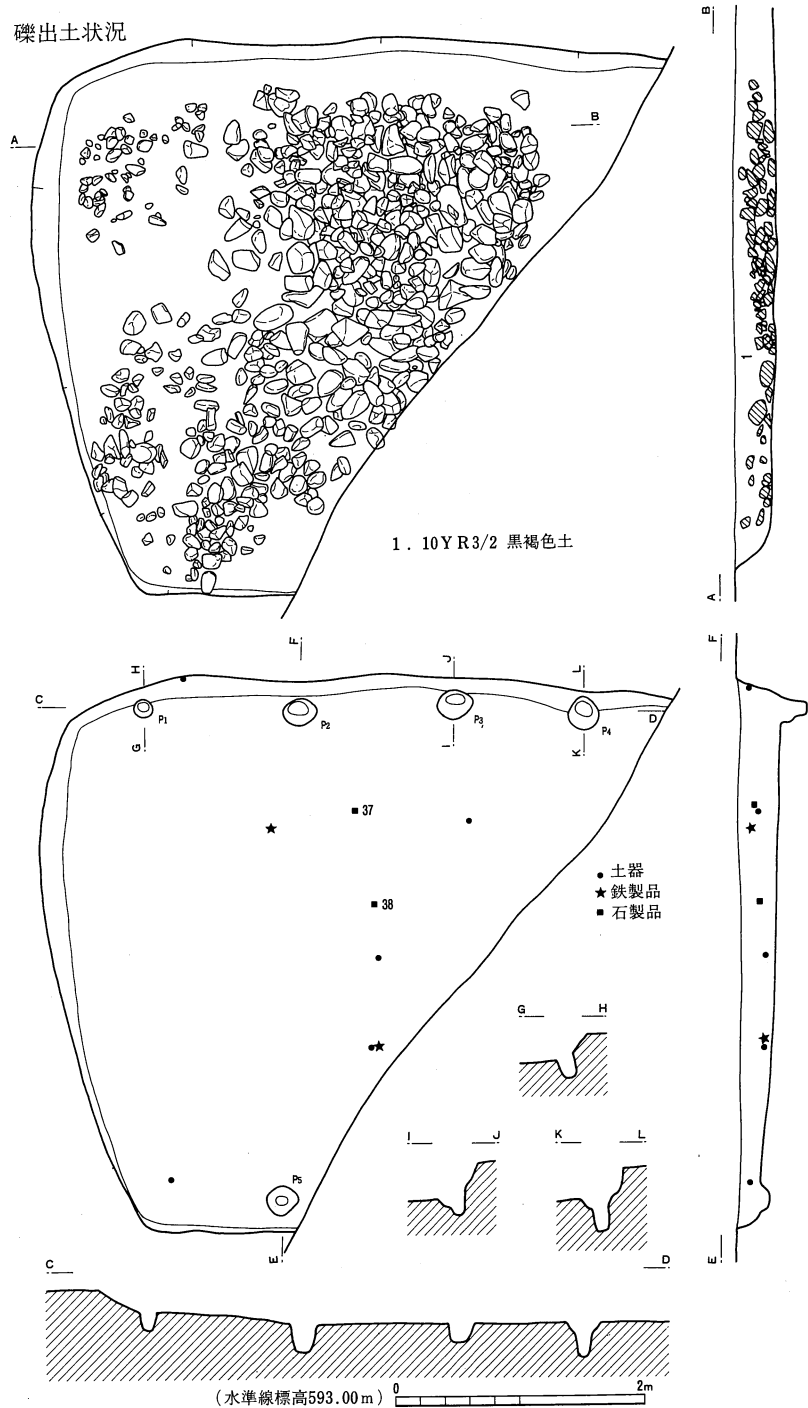
概観

本遺跡で確認された中世に属する竪穴住居址はSB190の1軒に過ぎないが、掘り込みの規模や深さからSK1693・2000・2435・2516・2521・2463など大形の土坑は居住可能な底面積を有し、竪穴住居址であった可能性は高いが、上屋の存在や据えカマドや火床・炉などの痕跡が認められず認定には至らなかった。

SB190 位置：北部II

図版89、第157図、PL48

検出：I C層上面で黒褐色土が落ち込む。SK2216～2218に切られる。土坑の覆土は灰色土を主体としており、本址とは明瞭に区分できた。なお、平面形はII A層上面で確定させた。東側は用地外で調査に至らなかった。規模：東西方向は推定で5.5m、南北に4.15mの規模を有し深さは30cm強を測る。柱穴：北壁下に4本(P₁～P₄)、南壁下に1本(P₅)を確認した。それぞれの柱穴は径15～25cmの円形ないしは楕円形プランを呈し深さは20～25cmを測る。北壁下の柱穴は柱が南側へ傾くように斜めに掘られており、これから推定される上屋構造は壁から直接、合掌を組み切妻形の屋根を葺下ろしたような外観を呈し、出入口は東ないしは西面に設けられていたと思われる。覆土：黒褐色土の単層である。床直から覆土中位にかけて拳大以上の円・角礫が多量にはいって



第157図 SB190実測図

り、礫の出土状態から住居址がやや埋没しかけた時点では入り込んだものと想定される。遺物出土状況：礫間で古瀬戸四耳壺・常滑系甕片・棒状鉄製品・用途不明の石製品(37・38)が出土している。帰属時期：出土遺物の様相から中世1期に比定される。

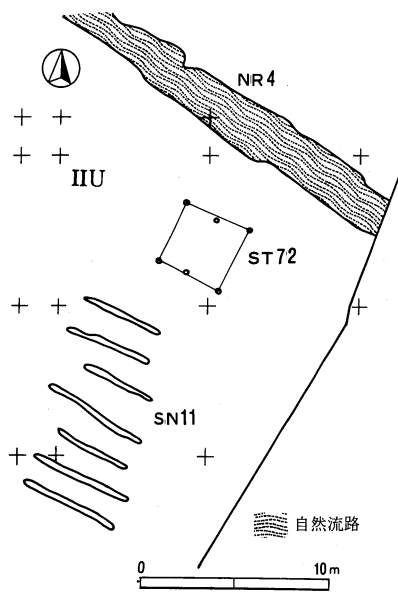
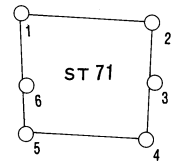
2 掘立柱建物址

概観

分布：本遺跡では19棟の中世に帰属する掘立柱建物址が検出された。各地区ごとの棟数は、南部II地区2棟・中部III地区4棟・北部I地区4棟・北部II地区2棟・北端I地区7棟で、北部地区やや集中するものの古代の集落に比べてかなり少数で、分布状況も散在的である。規模・構造：建物面積50㎡を越える建物が1棟、20～30㎡台のものが8棟、40㎡台の建物は1棟であった。北端I地区では20～30㎡の面積で、ほぼ同構造の建物址で占められるのに対し、他の地区では大小様々なプランの建物址が見られ、併立する可能性を有しており対照的である。建物址の構造では6間×3間の総柱の建物址で土坑を付属するST77のほか、土坑を建物址内に併設する例は2棟で認められた。ほかに特異な例としては3間×3間の方形プランの建物址も2棟存在する。帰属時期：時期を決定できるような出土遺物を有する建物址はほとんど無く、多くの建物址はI C層上面で検出されたことを根拠に中世遺構と判断を下しており、中には近世に下る可能性を有する建物址も見られる。

ST71 位置：南部II 図版66

検出：I C層対比の含礫泥層中で確認された。柱配置：2間×1間の南北棟の建物址と考えられるが、梁行が桁行に比べ0.3mほど長い。南北方向の柱間は一定していない。柱穴：径20cm強の円形を呈し、断面は鍋底形である。深さは10～15cmとほぼ一定である。埋土はI C層を基調とする黄褐色土で、柱痕跡は確認されなかった。帰属時期：出土遺物がなく不明確であるが、I C層堆積以降I B層以前の間である。本址の東側には堰を挟んで水田址が展開していた可能性があり(SD51～56)、それとの関連も考えられる。耕作地内の小屋的な建物址と思われる。



第158図 ST72周辺遺構配置図

ST72 位置：南部II 図版66、第158図

検出：I C層下位で確認された。柱配置：2間×1間で東西棟の建物址と判断される。平面形はほぼ方形である。桁行中央の柱がやや内側に位置する。柱間は一定していない。柱穴：径20cm強の円形プランで断面は鍋底形である。深さは10～15cmでほぼ一定である。埋土はI C層を基調とした黄褐色土である。柱痕跡は確認できなかった。帰属時期：出土遺物が見られず不明確であるが、I C層堆積以降I B層以前である。なお、主軸方向や埋土の類似からSN11との併存が考えられる。NR4とも主軸が一致している。

ST73 位置：中部III 図版76、PL42

検出：I C層の基底付近からII A層上面で確認された。本来はI C層上面でも検出可能と判断されるが、この付近は灰色低地水田土壌化が進みI C層上面では検出は困難であった。柱配置：3間×3間の建物址址で建物址内中央にも柱穴が見られる。建物址は東西方向にやや短いことから南北棟と判断される。桁行の柱間は210cm前後

で一定するが、梁行では中央の柱間のみ20cmほど狭い。柱筋は揃っている。
柱穴：方形プランで一辺15～25cmを測る。柱の向きは必ずしも建物址の主軸方向とは一致しない。断面は鍋底形で深さは10～60cmとばらつきが認められるが、30cmを越えるものが大半であり、東西両桁行に1本ずつ浅い柱穴が見られる。埋土はI C層を基調とした青灰色砂質土でST74・75と類似するが、周囲の土坑群とは異なった埋土である。柱痕跡は確認できなかった。帰属時期：出土遺物が見られず不明確であるが、I C層堆積以降でI B層堆積以前である。

ST74 位置：中部III 図版76

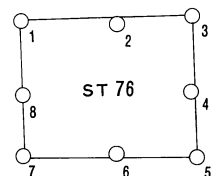
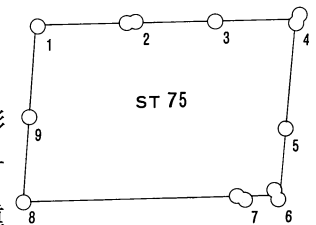
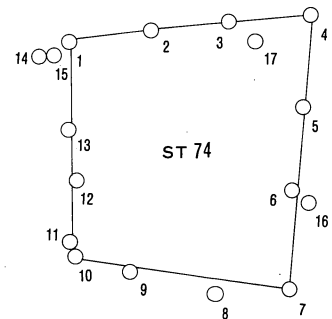
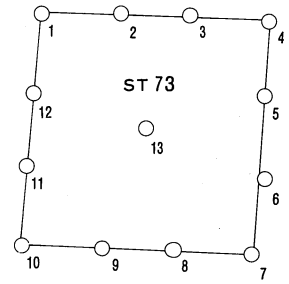
検出：I C層基底付近からII A層上面で検出した。検出状況はST73と同様である。柱配置：基本的にはST73と同構造の3間×3間の建物址と考えられるが、不整形なプランで特に、南面・西面とも柱筋・柱間が揃わない。南北方向に建物址がやや長いことから南北棟の建物址と考えられる。桁行東面の柱間は240cm前後で一定であるが、梁行東面ではST73と同様に中央の柱間が20cmほど狭い。柱穴：一辺20cm弱の方形の柱穴であるが、柱の向きはST73と同様に一定していない。断面は鍋底形で深さは6～46cmを測り全体に浅いものが多い。柱穴の埋土はST73と同様で柱痕跡は確認できなかった。帰属時期：出土遺物が見られず不明確であるが、I C層堆積以降I B層以前である。ST73と隣接しており、構造上も共通する部分が見られることから時期的にも近いものと考えられる。

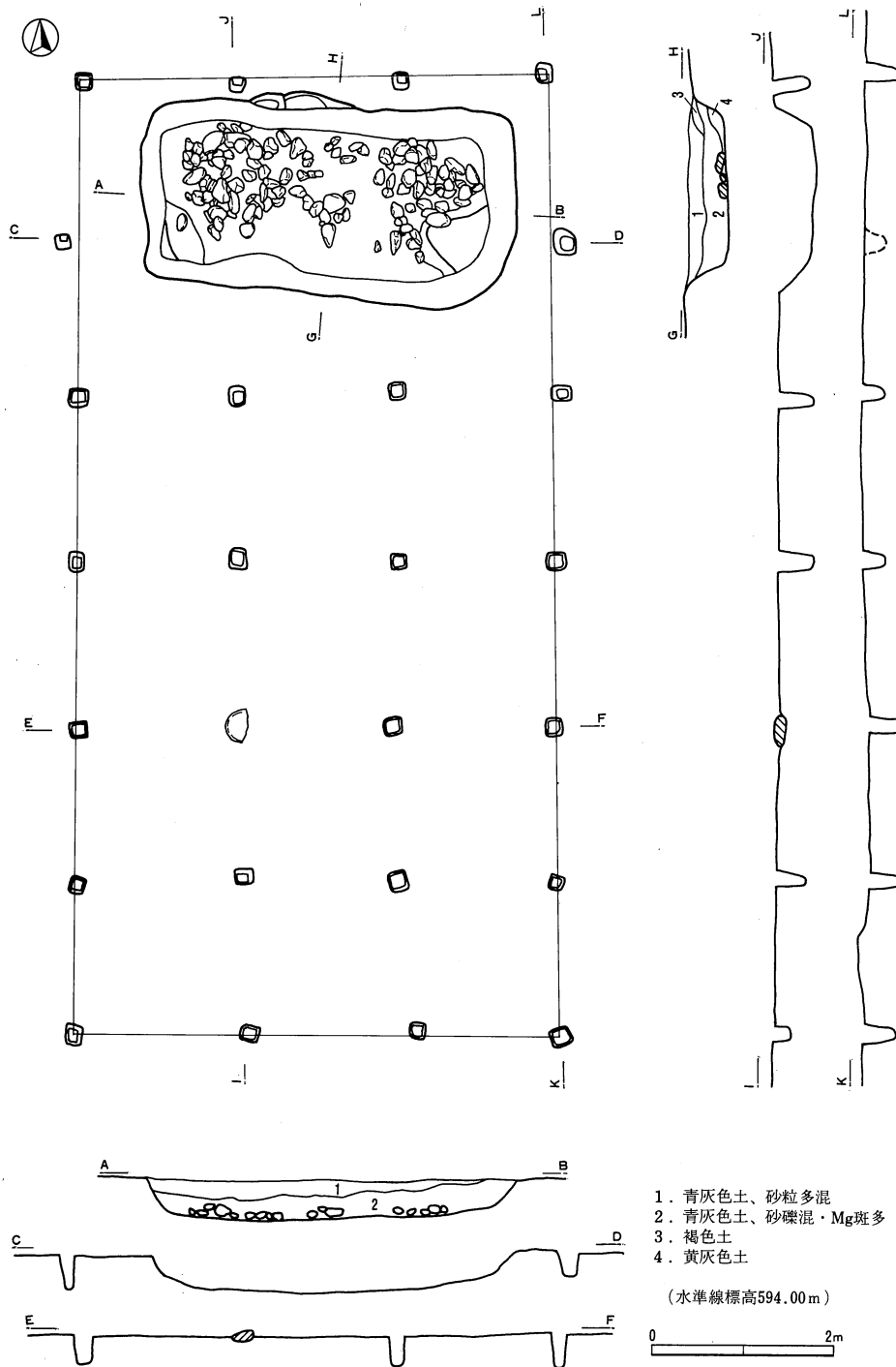
ST75 位置：中部III 図版79

検出：I C層基底からII A層上面で検出した。検出状況はST73と同様である。SK1586～1592と重複するが埋土の特徴から本址のほうが新しいと判断される。柱配置：3間×2間の東西棟の建物址である。プランはやや不整形で平行四辺形気味である。桁行東面の柱間は230cm位で一定であるが、西面にはそれに対応する柱は見られない。梁行西面の柱間は等間隔である。なお、4本の柱穴で柱が重複しており建替えが想定される。柱穴：一辺15～25cmの方形を意識した柱穴である。断面は鍋底形で深さは10～19cmを測る。梁行中央の柱のみ10・12cmとほかに比べ浅めである。柱穴の埋土はI C層を基調とするものの灰白色の砂質土が混じり、I B層の混入とも考えられる。柱痕跡は認められなかった。帰属時期：I C層堆積以降であるが遺物出土が見られないため推定は困難である。

ST76 位置：中部III 図版80、PL12

検出：I C層基底付近からII A層上面で確認した。検出状況はST73と同様である。柱配置：2間×2間の建物址で東西方向に長いので東西棟と判断される。桁行・梁行とも中央の柱穴が建物址内部によっており、特に桁行で著しい。柱穴は規則的に配されるが、桁行では西側、梁行では北側の柱間が広がる。柱穴：一辺20～25cmの方形の柱穴で、中部地区のほかの建物址に比べやや大きめである。柱の向きは建物址の主軸一致している。断面は鍋底形で深さは14～35cmを測り、東西両面の柱穴は25cm以上の深さを有する。柱穴の埋土はST73・74と同様にI C層を基調とした青灰色砂質土である。柱痕跡は確認されなかった。帰属時期：I C層堆積以降であるが出土遺物が見られず推定は困難である。ST75と近接し、規模・主軸ともほぼ一致し関連が想定される。またSA31・32とも主軸方向を一致させている。南側に展開する土坑群の覆土と本址の柱穴の埋土は類似している。





第159図 ST77実測図

ST77

位置：北部 I
 図版83、第159図
 PL43

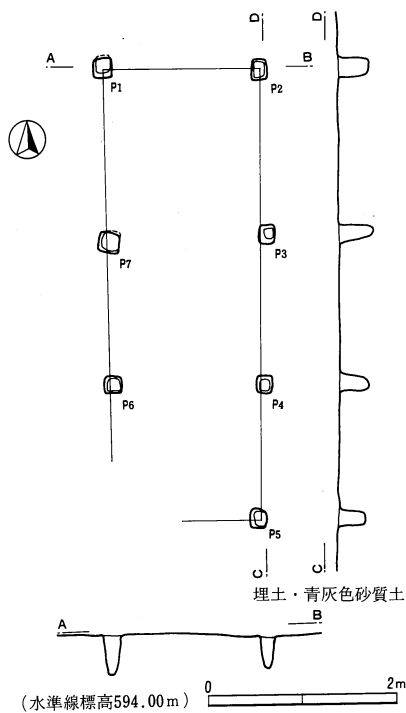
検出：I C層上面
 で確認した。SK
 1616~1619・1624・
 1625と重複する。

これらの土坑とは
 埋土がほとんど同
 質であるため新旧
 関係を考えるのは
 困難である。柱配
 置：6間×3間の
 南北棟で北側の土
 坑部分を除き総柱
 の建物址である。

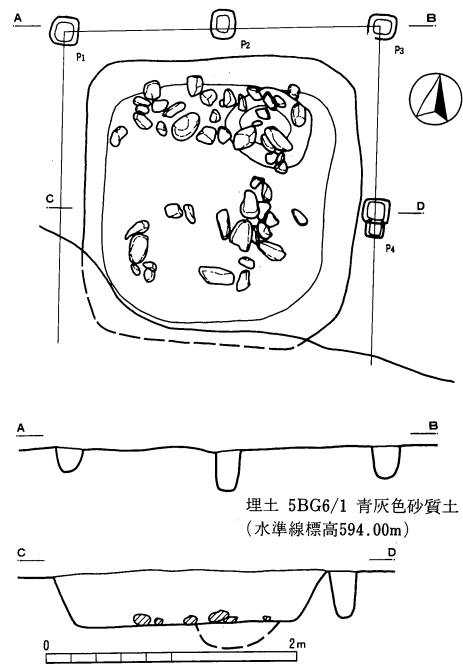
柱の向き・柱筋と
 も揃い、柱間も桁
 行で173cm・梁行
 で176cmと一定し、
 規格性が高い。土
 坑の東西両側の柱
 穴は柱筋からやや
 はずれて外側に位
 置し、土坑の構築
 を意図して立てら
 れたと判断される。

建物址内南西より
 の1か所のみ花崗
 岩の扁平な円礫が
 埋設されており、
 礎石と考えられる。

礎石下には柱穴が確認されなかった。柱穴：一辺15~20cmの方形の柱穴で深さは25~40cmを測るが、その深い浅いに規則性は見られない。柱穴の埋土は青灰色砂質土で土坑の第1層と同質であった。柱痕跡は認められない。付属施設：建物址の北側で411×211cmを測る隅丸長方形プランの土坑が確認された。建物址の主軸とはややずれるがそれを意識した柱穴の配置から本址に併設することは確実であろう。土坑の埋土は4分層される自然堆積土である。坑底には拳大から人頭大の円礫が多出するが出土状況からそのまま構築物とは考えられず、土坑廃絶時にはいったか、あるいは壁の石積みが崩れ落ちたものであろう。坑底および壁面は固く締まっていた。土坑の南東・南西隅には坑底より10~15cm位高まった部分が認められた。



第160図 ST78実測図



第161図 ST80実測図

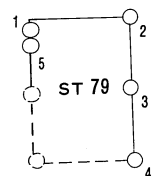
帰属時期：ST77付近の検出面で常滑系甕片が検出されたのみで、推定は困難である。主軸方向や遺構配置からST78・SN12との関連が想定される。

ST78 位置：北部 I 図版83、第160図、PL43

検出：I C層上面で確認された。SK1636と重複するが先後関係は明らかでない。柱配置：3間×1間の南北に長い建物址である。南西隅の柱穴は確認に至らなかった。柱筋は揃っているが南北方向の柱間は一定でなく、北側ほど広い。柱穴：一辺15~20cmの方形の柱穴で、断面はU字形を呈している。深さは30~40cmを測る。柱穴の埋土はST77と同様な青灰色砂質土である。柱痕跡は確認されなかった。帰属時期：I C層堆積以降I B層以前であるが遺物の出土が見られず推定は困難である。主軸方向や埋土の特徴の一致からST77との関係が注意される。

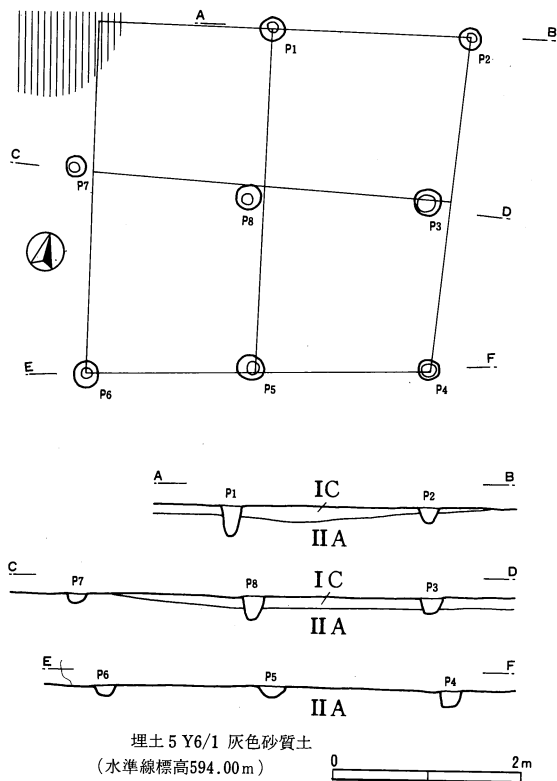
ST79 位置：北部 I 図版83

検出：I C層上面で確認された。ST80に切られている。ST80の付属土坑上では本址に伴う柱穴は確認されなかった。柱配置：4柱穴しか残されていないため確定はできないが、柱間隔から2間×1間の南北に長い建物址と考えられる。桁行の想定される柱間は190cmと推定される。柱穴：一辺20cmの方形の柱穴で、断面はU字形を呈している。深さは20~27cmを測る。柱穴の埋土はST77・78と同様な青灰色砂質土である。帰属時期：I C層堆積以降I B層以前であるが、遺物の出土がなく推定は困難である。ST77・78とは大きく主軸がずれている。



ST80 位置：北部 I 図版83、第161図、PL42

検出：I C層上面で確認した。ST79を切る。本址の埋土はかなり青みがかかった青灰色土で、識別は容易であった。柱配置：南側は攪乱を受けているため確定はできないが、2間×2間の方形プランを呈し、残っていた柱間から推定して、280cm×252cmの南北にやや長い建物址と判断される。柱の向き・柱筋とも



第162図 ST81実測図

そろっている。柱穴：一辺20cmの方形の柱穴で断面はU字形を呈し、深さは17～30cmを測る。柱穴の埋土は付属する土坑と同じであった。柱痕跡は確認されなかった。付属施設：建物址の中央部に推定230×220cmの方形プランの土坑が位置し、本址の床面積の大部分はこの土坑が占めている。この点では本址は竪穴住居址と同構造である。土坑の深さは40cm位を測り、坑底部および壁面下半部は非常に固く締まっている。土坑の埋土は単層で、坑底直上にはST77の土坑と同様に拳大から人頭大の円礫が多出している。出土した礫はその分布状況から構造物とは考えられず、本址の廃絶直後に入ったものと思われる。なお、坑底北東寄りに65cm×60cmの楕円形を呈し、深さ20cmの落ち込みが見られる。落ち込みの埋土は土坑と同じで礫も入り込んでいたことから、本址使用時には開口していたと判断される。帰属時期：I C層堆積以降であるが、遺物の出土を見ていないため推定は困難である。ただし、ST77～79の埋土とはかなり相違が見られることから時間差を持つのは確実であろう。

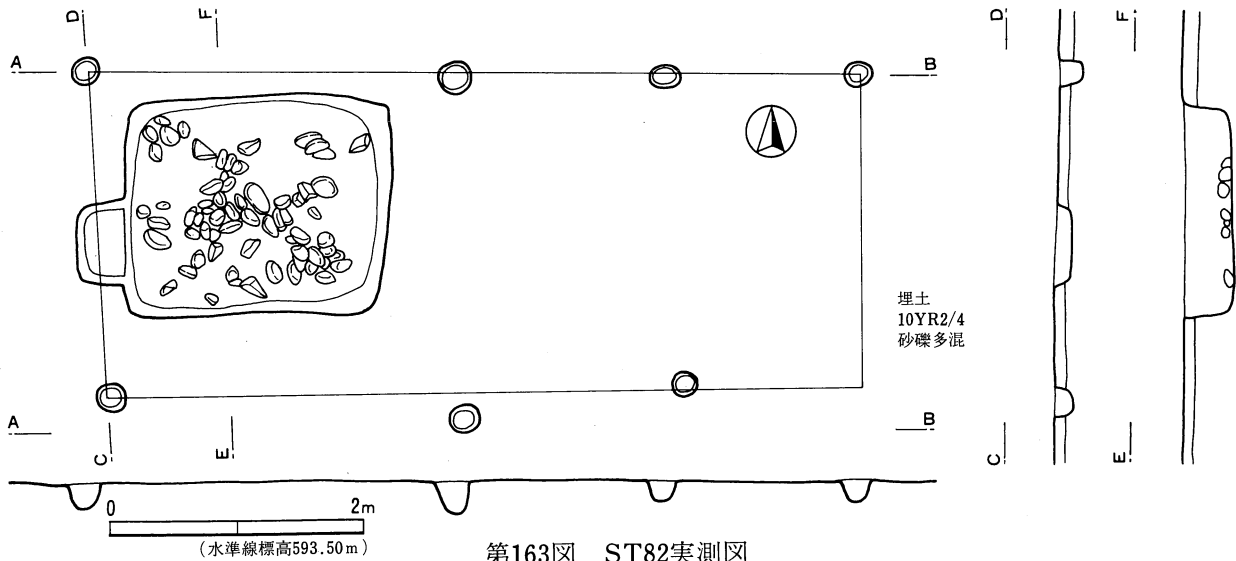
ST81 位置：北部II 図版82、第162図

検出：I C層基底付近からII A層上面で確認した。北東隅は攪乱を受けている。柱配置：2間×2間の縦柱建物址で、ほぼ方形プランである。北面・南面の柱は規則的に配されるが、東西方向中央の列の3柱穴はそれらに比べやや西にずれている。柱穴：径20～30cmの円形の柱穴で断面はU字形ないしは鍋底形を呈し、深さは10～31cmを測る。柱穴の深い・浅いは地山II A層の高低によるものと考えられる。柱穴の埋土はI C層を基調とした灰色土である。帰属時期：I C層堆積以降であるが出土遺物が見られず推定は困難である。やや離れているが久保川を挟んでST79と主軸方向を一致させており関連が想定される。

ST82 位置：北部II 図版87、第163図

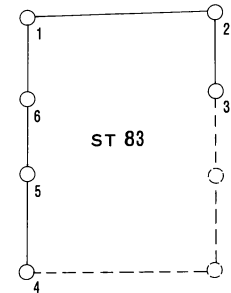
検出：I C層中位で確認した。SK2161～2166・2192～2199と重複するが、新旧関係は不明である。柱配置：当初、大形の土坑とその周囲の4柱穴で1遺構と判断したが、その東側にも柱穴が直線状に配列することから4間×1間の東西棟の建物址と認定した。土坑と重複する部分の桁行西側の柱間は東側の2倍になっている。柱穴：径20～25cmの円形の柱穴で、断面はU字形を呈し深さは15～25cmを測る。柱穴の埋土はI C層を基調とした灰色土である。柱痕跡は確認されなかった。付属施設：建物址の西側に210×170cmの方形プランで、深さ40cm強の土坑が付属する。坑底は地山II A層に達し、堅緻であった。土坑の西壁には坑底より高さ20cm位の位置に方形の張出しが見られ、出入口にかかわる施設とも考えられる。埋土はI C層起源の単層で礫や焼土・炭粒を多く混じえる。坑底直上からやや浮いた状態で拳大から人頭大の円礫が多出しており、ST77・80と同様に本址廃絶直後に入ったものと判断される。帰属時期：I C層の堆積以降I B層以前であるが出土遺物が見られず推定は困難である。本址の南側に展開するSK2130～2151などと主軸を揃えていることから中世2期に帰属する可能性がある。

ST83 位置：北端I 図版95



第163図 ST82実測図

検出：I C層上面で検出した。南東隅をSD62に切られている。本址はSL15上で検出されたがSL15はI B層下部上面においても検出できることから、本址のほうが古く位置付けられる。また、ST84・101と重複する。ST101はI B層下部の検出である。ST84とはST84の柱穴埋土のほうが青味が強いことから本址が古いと判断した。その他、SK2716～2719と重複しているが新旧関係は不明である。柱配置：3間×1間の南北棟の建物址である。桁行方向の柱間は215cm位でほぼ一定し、ST87・88の桁行方向の複数の柱間とも一致している。また、梁行の柱間はST89の建替え前のものと一致する。柱穴：径20～30cmの円形の柱穴でU字形の断面を呈し深さは20～25cmでほぼ一定している。柱穴の埋土はI C層を起源としたオリーブ褐色土である。柱痕跡は確認されなかった。帰属時期：I C層堆積以降I B層以前であるが、遺物の出土が見られず推定は困難である。ほぼ同様な検出状況にあるST87と主軸方向・桁行の柱間が一致し、ST89とは梁行のスペンが同じであることから、それらの建物址との併存も考えられる。

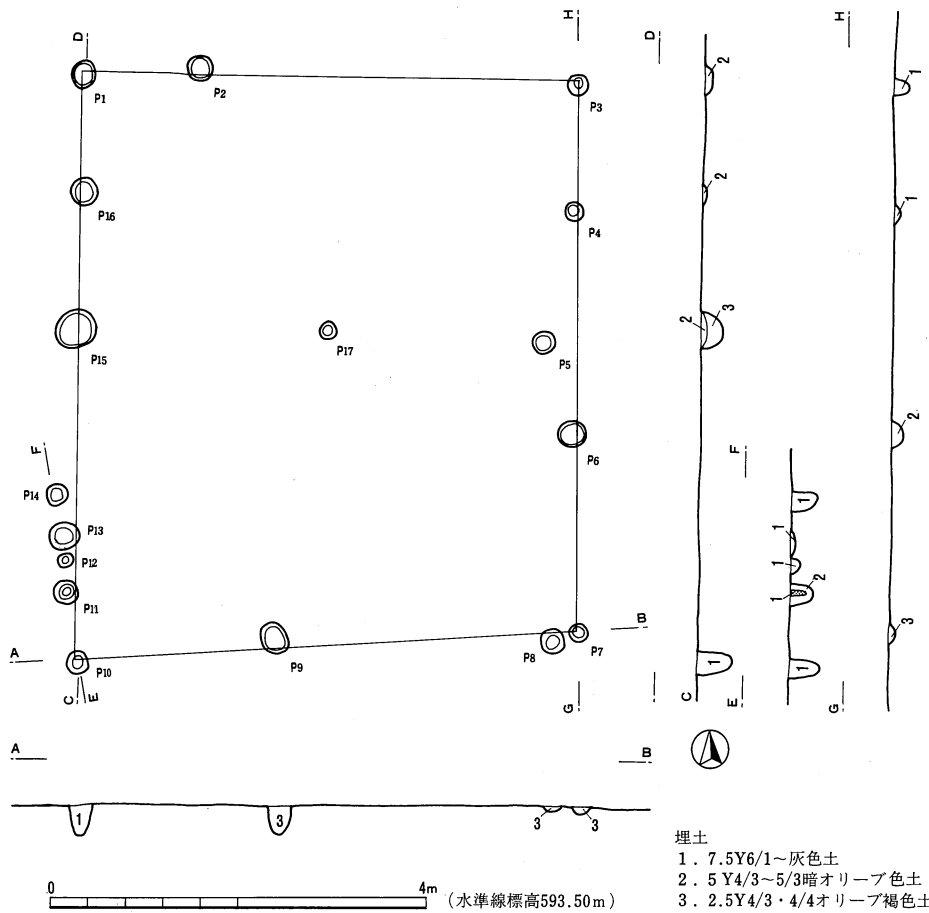


ST84 位置：北端 I 図版95、第164図

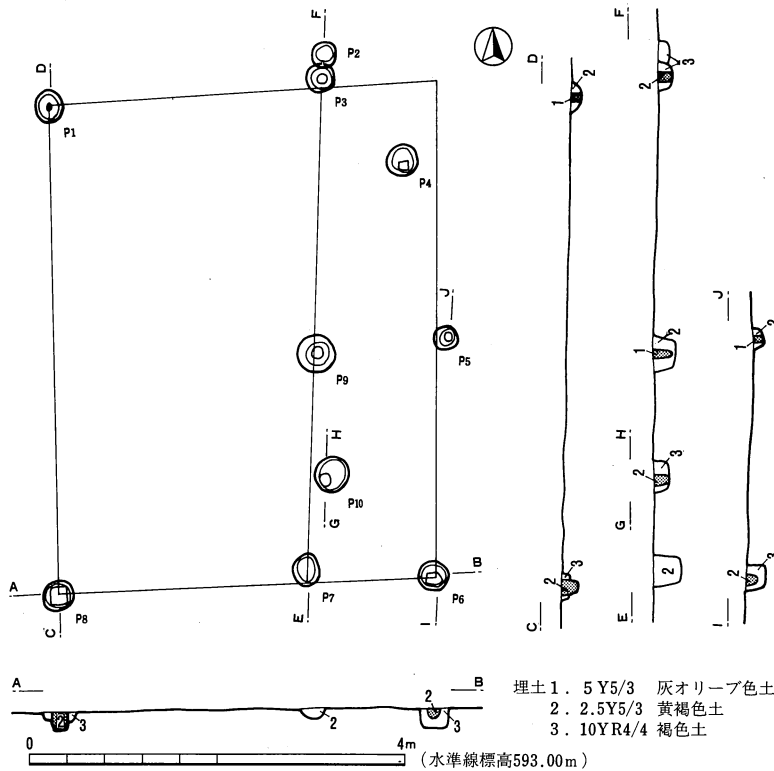
検出：I C層上面で確認した。ST83と重複するが、柱穴の検出状況から本址のほうが新しいと判断される。I B層下部で検出されたST101・SL18と重複する。そのほか、SK2727～2731・2734とも重複している。柱配置：4間×2間の南北棟の建物址である。柱穴の配置や柱筋はやや不規則であるが、桁行では柱間が145cm前後で一定し南側でのみ広がる。建物址内中央でも深さ10cmの柱穴が見られる。南東隅・南西隅よりで多数の柱穴が存在し、柱の建替えが行われたと考えられる。柱穴：径20～40cmの円形の柱穴で断面は鍋底形のものやU字形の双方が見られる。深さは5～37cmと一定していない。南西隅よりの1本の柱穴で径8cmの柱痕跡が確認されており、径30cmを越えるものは掘り方を示すものであろう。柱穴の埋土はI C層を起源としたオリーブ褐色土である。帰属時期：I C層堆積以降I B層以前であるが、遺物の出土が見られず推定は困難である。ST86と主軸方向が一致している。

ST85 位置：北端 II 図版97、第165図

検出：I C層上面で検出した。ST86・87と重複する。検出状況では褐色を呈した埋土の柱穴が多いため本址のほうが古く位置付けられる。柱配置：2間×1間の南北棟の建物址で、南面に半間の下屋が付く。桁行の柱間は北側がやや広い。梁行中央の柱穴は南北両面ともやや北寄りに位置する。柱穴：径30～40cmの円形の掘り方をもち断面は鍋底形を呈している。深さは10～30cmを測る。8本の柱穴で灰白色を呈した



第164図 ST84実測図



第165図 ST85実測図

柱痕跡を確認した。そのなかには一辺15cmの方形と径10cmの円形ものが認められたが、その深さは20cm位で一定しており、浅い柱穴では柱穴底下に及んでいる。柱穴の埋土はI C層を起源とした黄褐色土である。帰属時期：I C層の堆積以降I B層以前である。SD65と主軸を合せている。

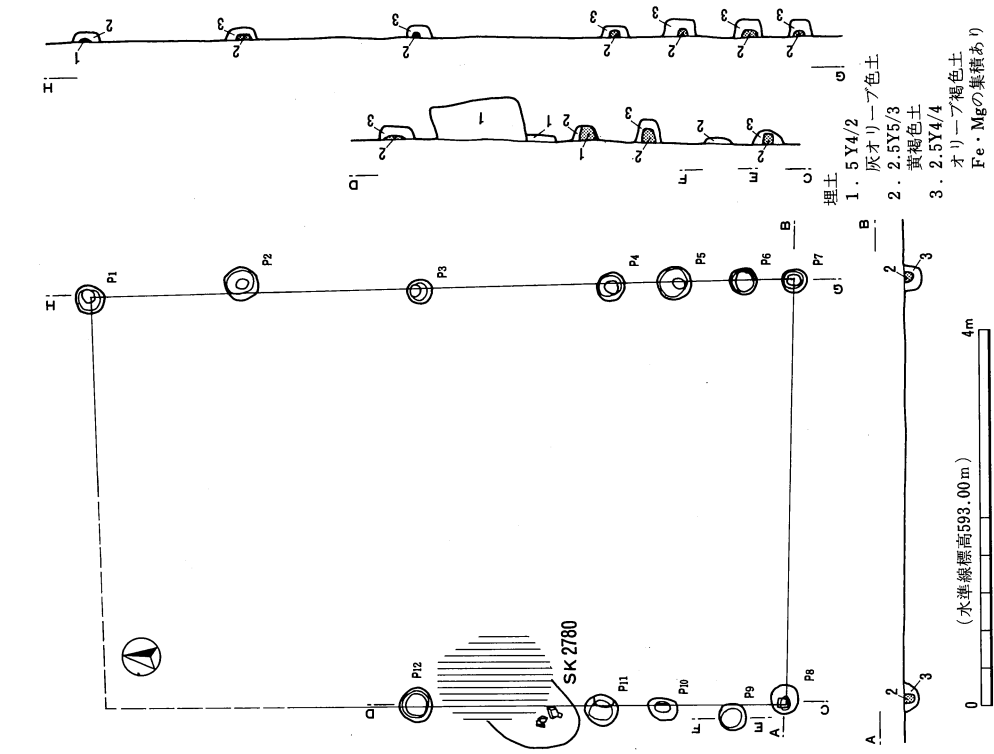
ST86

位置：北端II

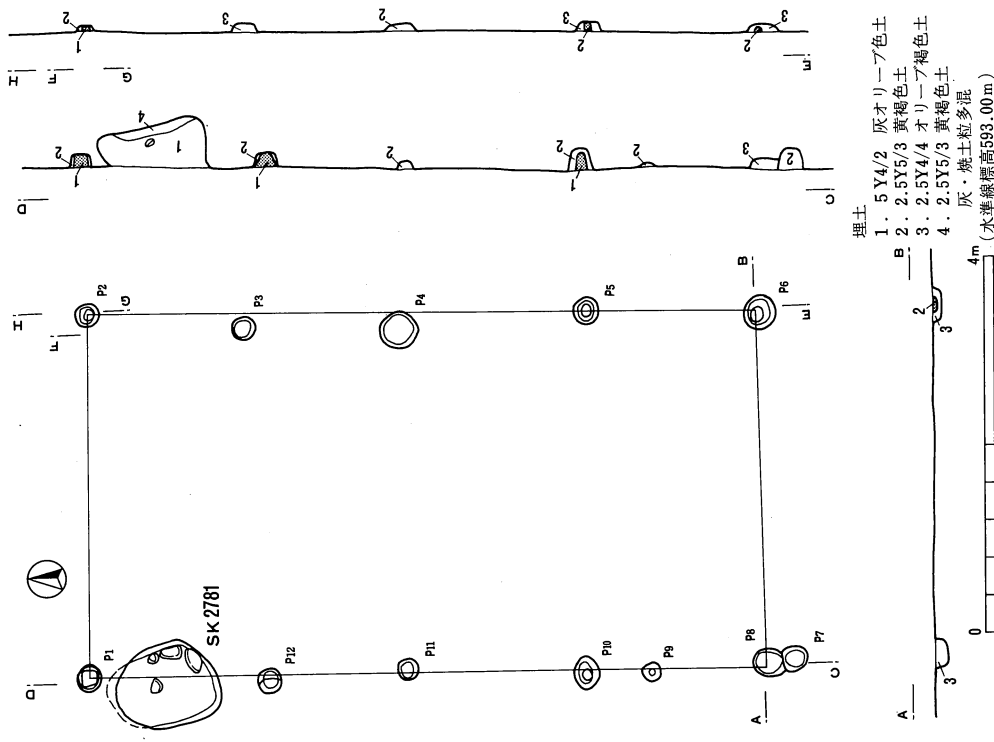
図版97、第166図

検出：I C層上面で確認した。ST85を切る。また、ST89とも重複するが本址のほうが新しいと判断した。

柱配置：4間×1間の南北棟の建物址である。柱筋は揃っているが、柱間は一定せず、西面では195cm・東面では175cmをスパンとし、桁行中央でその差を調整しているようである。東面の柱間はST89の桁行と類似する。柱穴：径25~40cmの円形の掘り方で断面は鍋底形を呈する。深さは10~30cmである。6本の柱穴でオリーブ灰色を呈する柱痕跡が確認された。北西隅の柱穴で一辺15cmの方形の柱痕跡が確認されたほかは径10~15cmの円形である。掘り方の埋土は黄褐色ないしオリーブ褐色土で、I C層を起源としている。付属施設：西面北側に107cm×90cmの楕円形を呈し、深さ55cm位を測る土坑(SK2781)が存在する。ST83・S



第167図 ST87実測図



第166図 ST86実測図

T87にも同規模の土坑が西面下に見られること、土坑の埋土が本址の柱穴と同様であることから本址に併設されると判断した。土坑の埋土は2分層され下層中には焼土・炭粒が多量に混じる。また、覆土中位に人頭大の円礫が見られ、古代の竪穴住居址に併設されたカマドの様な施設とも考えられる。帰属時期：I B層堆積以前で、SK2780を本址に付属するSK2781が切っていることから、中世2期に比定される。

ST87 位置：北端 I 図版97、第167図

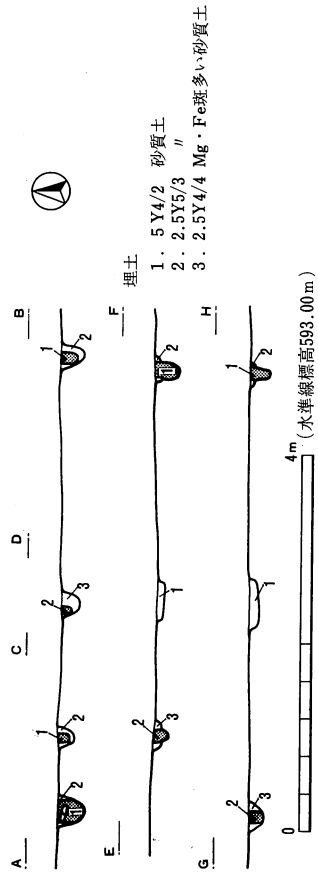
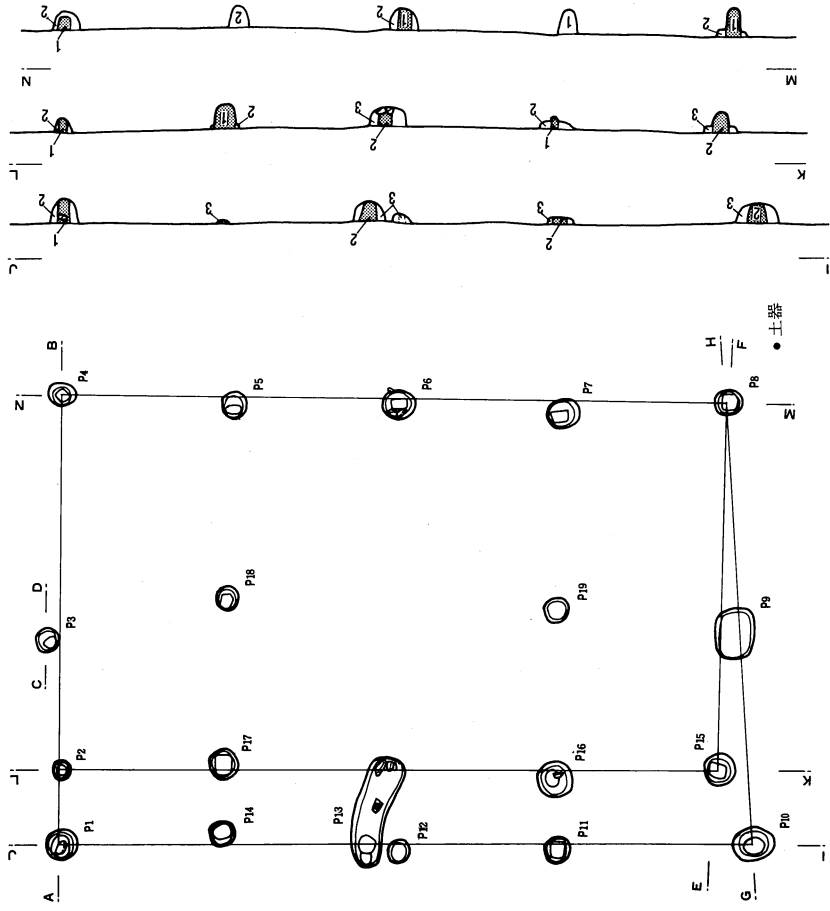
検出：I C層上面で確認された。ST86・SA51とI B層下部で検出されたST106に切られる。また、柱穴の検出状況からはST85より新しいと判断した。そのほか、SK2782～2785と重複している。柱配置：4間×1間の南北棟の建物址である。桁行南側の部分ではさらに柱穴が2本ずつ加わり、約60cmのスペンで柱穴が並ぶことになる。梁行の柱間はST87と部分的に一致している。柱穴：径25～30cmに円形の掘り方を有し、断面は鍋底形である。深さは10～20cmを測り、大半が15cm以上である。柱痕跡は11本の柱穴で見られた。方形のものが2本でほかは径10cm位の円形で深さ10～15cmを測る。柱痕跡は灰オリーブ色土でI C層起源の掘り方埋土に対し明瞭に区別できた。付属施設：西面柱筋下にSK2780が存在する。ST88と同様な根拠から本址に併設された可能性が高い。SK2781とほぼ同規模であるが、深さは10cmと浅い。覆土中には焼土・炭粒が含まれ、坑底で内耳鍋体部片が出土した。帰属時期：SK2780の出土遺物から本址は中世2期に比定される。SD65と主軸を合せている。

ST88 位置：北端 I 図版99、第168図

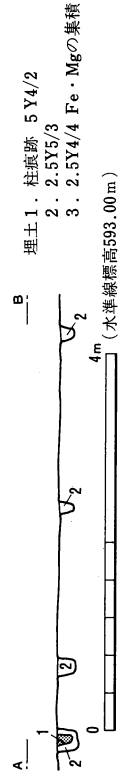
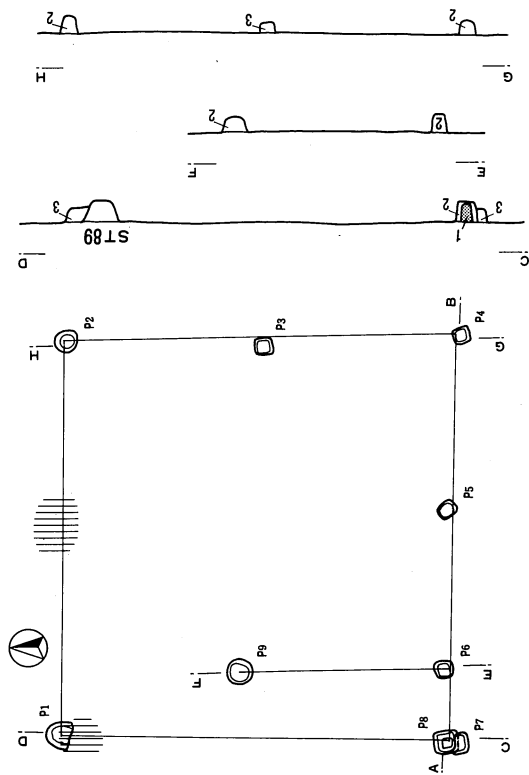
検出：I C層上面で確認された。北側の2柱穴がST89に切られている。柱配置：2間×2間のほぼ方形プランの建物址である。西側は75cmの間隔で柱穴が並んでおり、ST89と同様に西面の柱の建替えによって建物址の規模を拡大したと考えられる。桁行の柱間は梁行に比べやや短い。柱穴：径20～25cmの円形プランの柱穴と一辺15～20cmの方形の柱穴が見られる。1柱穴で一辺10cmの方形の柱痕跡が確認された。小さな方形プランの柱穴は柱痕跡のみ調査したと考えられる。柱の向きは必ずしも建物址の主軸とは一致していない。掘り方の埋土はI C層を起源とした黄褐色かオリーブ褐色土である。帰属時期：出土遺物が見られず、推定は困難であるがSD65に沿っており、同様な建替えがST89でも見られることから、これらの遺構の併存も考えられる。

ST89 位置：北端 II 図版99、第169図

検出：I C層上面で確認された。ST88・SD66を切っている。本址の柱穴はSD66上で明瞭に検出できた。柱配置：桁行4間の南北棟の建物址で西側には80cmの間隔を置いて柱列が平行することから、西面のみ建替えられたと判断される。最西端の柱穴列の埋土のほうが褐色が濃いことから古く位置付けられ、建物址は5間×2間から5間×1間へ面積を減じる形で建替えられたと判断される。古段階の建物址では梁行中央に4本の柱穴が存在している。桁行の柱間間隔は新旧とも180cmで一定である。柱穴：径25～40cmの円形の掘り方で断面は鍋底形を呈する。深さは10～35cmを測る。西面・南面中央の柱穴が細長い形状であるが、これは柱の建替えによるものであろう。古段階で12本、新段階では全ての柱穴に柱痕跡が確認された。円形プランと方形のものが見られるが、一辺15cm強の方形の柱痕跡が多い。柱痕跡の深さは一定しないが、掘り方底下に及ぶ柱痕跡も見られ、柱が打ち込まれて建てられたことを示している。西面中央の柱穴では柱痕跡下に円礫が、東面中央の柱穴では柱痕跡のかたわらに礫が入れられている。遺物出土状況：西面中央の溝状を呈する柱穴掘り方内から内耳鍋底部片が出土した。帰属時期：内耳鍋の出土から中世2期に比定されよう。SD65に沿って位置している。



第169図 ST89実測図



第168図 ST88実測図

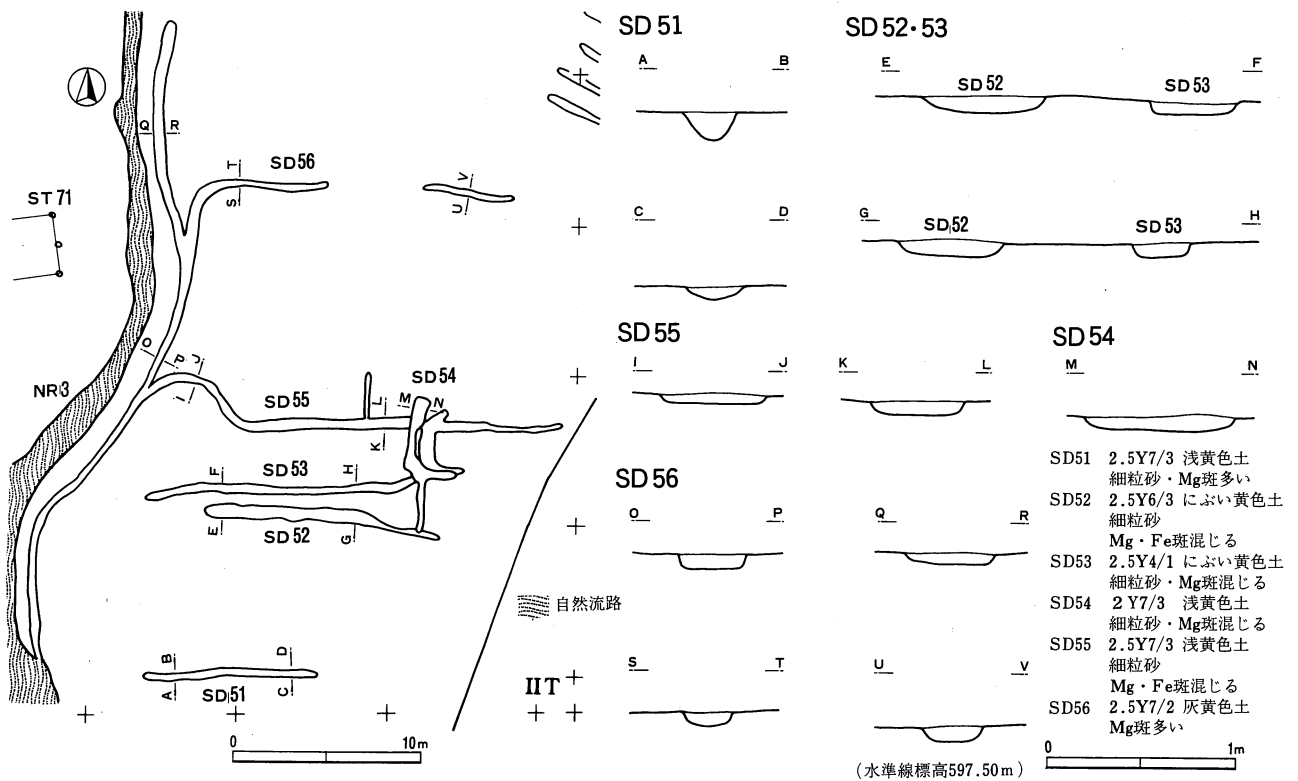
3 溝址

概観

本遺跡が確認された中世に属する溝址は17条に及ぶ。このうち、南部・中部地区で確認されたSD51～59、北端地区のSD62・63・67は水田址に伴う用排水路と判断される。北部II地区のSD60は道に併設された側溝であり、北端I地区のSD64～66は集落内の区画と排水機能を兼ね備えた溝と判断される。溝址のうち、SD59・60・64・65は現地表面の地割と部分的に一致している。

SD51～56 位置：南部 図版66、第170図

検出：I C層上面で黄色土ないしは灰黄色土が落ち込む。SD55・56は完全にI B層に覆われていることが土層断面で確認できた。また、黄色味の強い覆土のSD53がSD52・54・55を切っている。付近のI C層上面はマンガン・水酸化鉄斑の散点する溶脱層である。規模・形状：SD51は長さ8.2m・幅30cmの規模で断面は半月形を呈し、深さは10～15cmを測る。東西両端部の底面には10cm弱の比高差が見られ、西側が高い。SD52は長さ12.3m・幅40～65cmの規模で、断面は逆台形を呈し深さは10cm位を測る。底面は平坦であった。SD53はNR3から分岐し、途中で南北方向と東西方向の二股に分かれる。全長35mに達し、分岐した部分は長さ20mで、全体にNR3に沿って湾曲している。幅は40cm弱で、断面は逆台形を呈し深さは10cm弱である。南北両端の底面には30cmの比高差が見られ南側が高い。SD54は三叉状を呈するが基本的には南北と東西に走る溝が交差したものと判断される。南北方向に長さ7m・幅40～80cmを測り、深さは10cm弱である。SD55はSD53より分岐し東西方向に走る溝であるが、SD53とは覆土が異なることから別遺構と判断した。長さは23mに達し、SD53と分岐する部分で大きく北に湾曲する。途中で直角に枝別れし、さらに、その東方でSD56と同様に南北方向に走る溝と交差している。幅は20～60cmで、断面は半月



第170図 SD51～56実測図

形ないしは逆台形を呈する。深さは10cm弱であった。覆土：灰黄色ないしは黄色を呈する細粒砂を主体とし、マンガン・水酸化鉄斑を点在させる。SD53・54のみ黄色味が強い。底面にはマンガンの集積が見られる。帰属時期：出土遺物が見られず推定は困難であるが、I C層堆積以降でI B層以前であることから中世の所産とした。所見：SD51と南側、境沢沿いと、SD53の北、NR 4以北には砂礫堆による微高地が展開し、SD51～56はその間の小凹地に立地している。また、NR 3の西側ではI C層中に砂礫が多含まれるのに対して、溝址の分布する東側では泥質のI C層が厚く堆積し、その上位に灰白色を呈する土壌が見られた。この土壌は梅村弘氏に灰色低地水田土壌であるとの指摘を受けており、溝は水田への用排水路(畝畝、けんぼ)として機能していたと判断される。

SD57・58 位置：中部II 図版74

検出：I C層上面で黄色土が落ち込む。SD57・58とSL11とは位置関係や主軸方向の一致から併存していたと判断される。付近のI C層上面はマンガン斑の点在する溶脱層で灰色低地水田土壌と判断される。規模・形状：SD57は長さ8.6m・幅70～120cmの規模を有している。西側にさらに展開すると思われるが検出には至らなかった。断面は弓形を呈し深さは15cm位である。SD58は調査された部分で長さ4.5m・幅50～90cmを測る。断面・深さともSD57と同じであった。SD58はSD57を避けるように掘り込まれている。双方とも底面は平坦であった。覆土：灰色土を主体とし、マンガン・水酸化鉄の斑紋が見られる。底部付近に砂粒がやや多い。SD57・58ともSL11の用排水路(畝畝)であったと判断される。

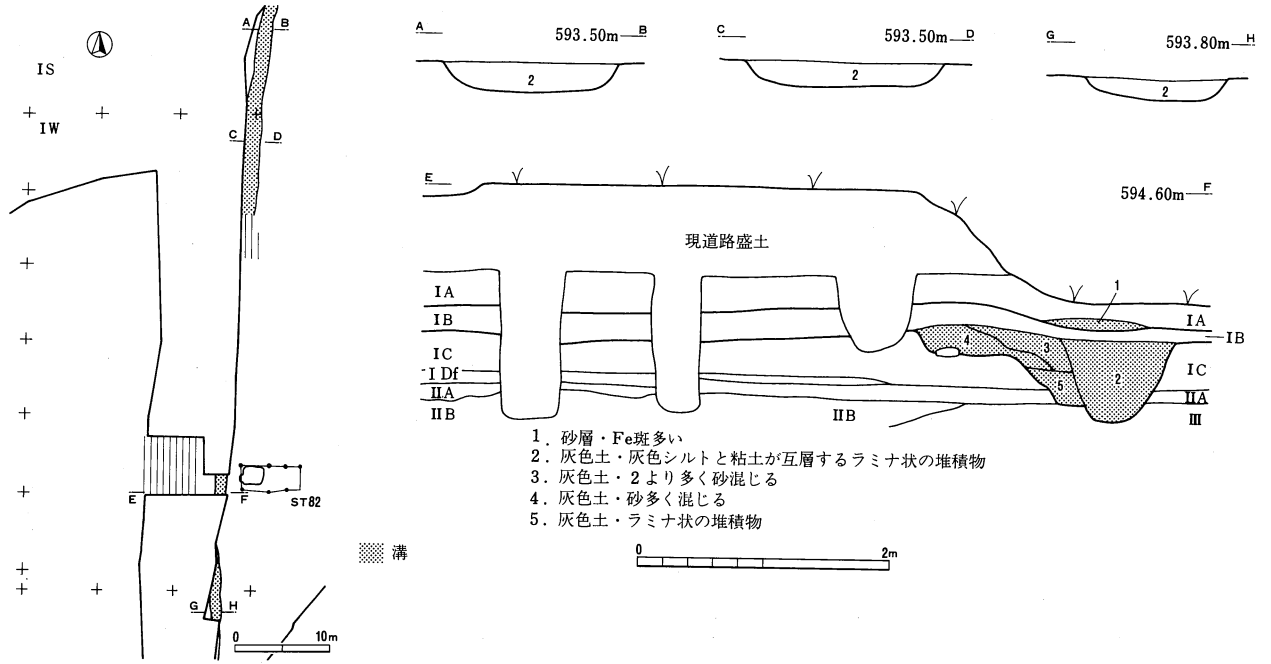
SD59 位置：中部III 図版67・74・75、第184図

検出：I C層上面で青灰色土が落ち込む。SA33・SL12と併存していたと判断される。規模・形状：北側ではクランク状に折れ曲がり、その南側で直角に分岐している。調査された範囲で全長56mを越える。幅は70～180cmを測り、断面は逆台形を呈している。深さは10cm位であった。南北両端の底面に比高差は存在しないが、枝分かれして東西方向に延びる部分では10cm強の比高差が見られ西側が高い。覆土：青灰色土を主体とし、マンガン・水酸化鉄の斑紋が見られる。底部には砂粒が多く混じり、稀に拳大以下の礫が入っており、水流があったのは確実である。帰属時期：出土遺物が見られず推定は困難であるが、I C層で検出され、I B層に覆われることから中世の所産と判断される。所見：本址はII A層上面で検出されたSD23と同様に宮沢から取水しSL12に水を落とす用水路と考えられる。溝の東西方向に延びる部分と水田との間には、溝と平行して地山を帯状に高く掘り残した高まりが見られた。

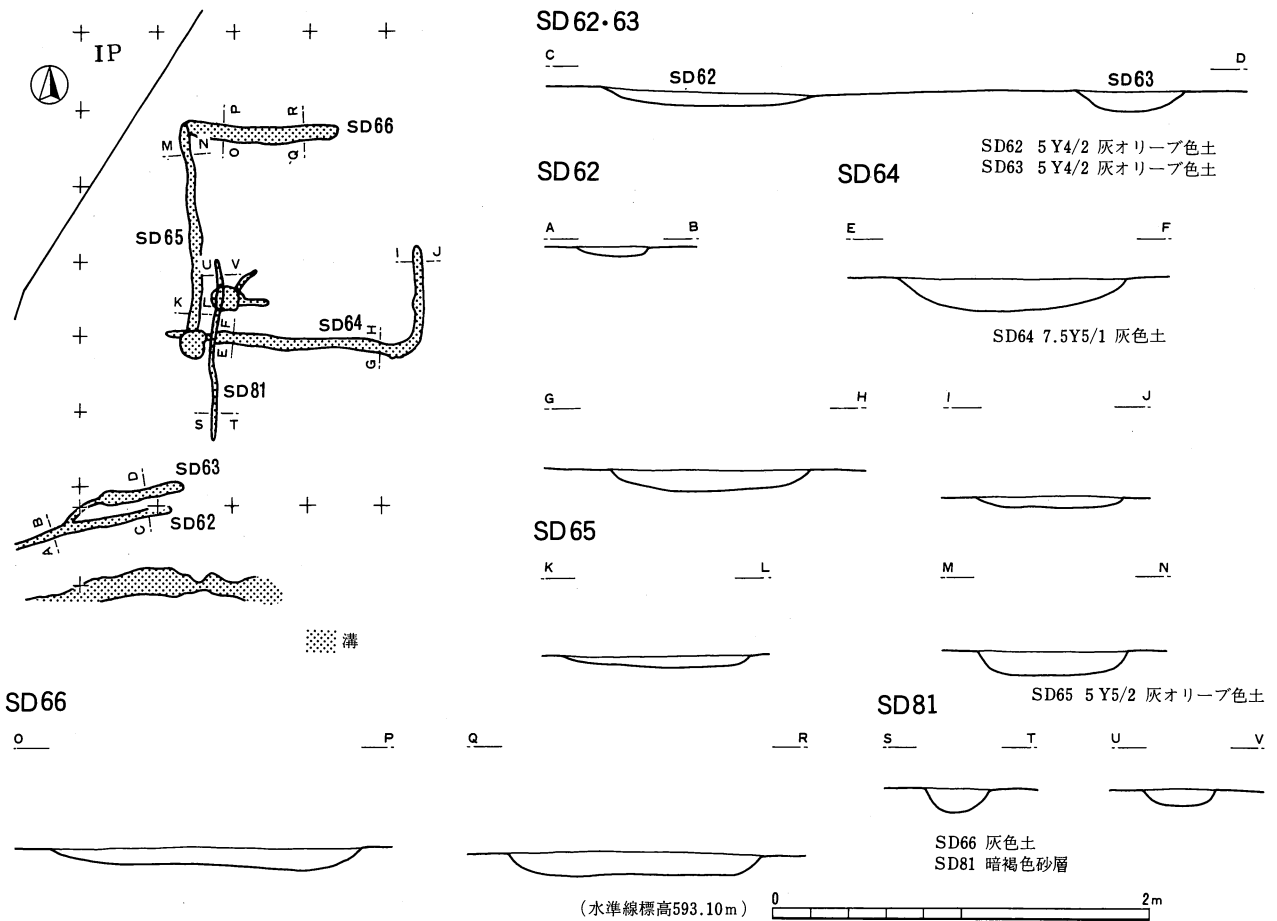
SD60 位置：北部II 図版69・87・90・91、第171図

検出：市道仁科線に沿ってI C層上面で検出された溝である。土層断面ではI B層上面でも確認され、現条里景観でも道路に添って側溝が見られる。規模・形状：仁科線にかかる部分が多く部分的な調査に留まったが、調査区を横断するように南北に延び、全長は72mに達する。I B層で検出されたものを含め4回に上る溝の掘替えが同じ地点で行われたと判断される。幅は150～200cmで、断面は弓形ないしはU字形を呈し、深さは25～60cmを測る。覆土：I B層上面では灰色の砂層であった。I C層で検出された部分については4本の溝が重なり合った状態であるが、どの溝の覆土でも細粒砂と粘土が薄く互層をなすラミナ状の堆積物が観察された。こうした状況から用水路的な水流ではなく、むしろ降水時に雨水が流れる程度で、晴天時には空掘の状態であったと判断される。所見：市道仁科線は島立条里の南北方向の基軸線で、「安曇郡」へ通じる古道と推定されてきた(信濃史学会1985ほか)。この「仁科道」が過去においてどのような姿であったかを究明するために、道路に直交するトレンチを設定し調査を行ったが、明確に道跡と判断される遺構(石敷・掘込み・柵など)は確認できなかった。この部分では本址の存在と本址の西側に幅2m弱の帯状に延びる遺構空白域が確認されるに留まった。

SD61 位置：北部II 図版89



第171図 SD60実測図



第172図 SD62~66・81実測図

検出：I C層上面で灰黄褐色土が落ち込む。II A層上面検出のSD43を切っている。規模・形状：長さ6m弱・幅30cmの小規模な溝である。断面は半月形を呈し、深さは20cm弱である。覆土：I C層起源の灰色土を主体とする。帰属時期：出土遺物が見られず推定は困難であるが、I C層上面で検出されたことから中世と判断した。SK2151・2307などと主軸や埋土の特徴が一致していることから中世2期と判断した。

SD62 位置：北端 I 図版70・95、第172図

検出：I C層上面で青灰色土が落ち込む。I B層下位でも検出は可能であった。ST83を切る。途中でSD63を分岐させている。規模・形状：調査された範囲で全長22m弱・幅30～125cmの規模を有し、断面は弓形で、深さは10～15cmを測る。溝の東西両端の底面には比高差15cmが見られ西側が高い、覆土：青灰色土を主体とし砂粒が混じる。底部付近には細礫が見られ、底面にはマンガンが沈着していた。帰属時期：出土遺物が見られず不明確であるが、検出状況から中世2期ないしは近世初頭と判断される。所見：本址は堂沢に添って掘り込まれており、堂沢から取水しSL15に水を落した用水路(畝)であったと考えられる。

SD63 位置：北端 I 図版95、第172図

検出：I C層上面で青灰色土が落ち込む。SD62から分岐し、並走している。規模・形状：全長12mで、幅はSD62からの分岐部分が20～50cmを測るほかは90～100cmの規模である。断面は弓形で、深さは10cm弱である。溝の東西両端の底面には10cmの比高差が見られ、西側が高い。覆土：SD62と同様に青灰色土を主体とする。底面にはマンガン・水酸化鉄が沈着していた。帰属時期：位置関係や覆土の特徴からSD62・SL15と併存していた可能性が高い。本址もSL15に水を落す用水路と考えられる。

SD64 位置：北端 I 図版97～98、第172図

検出：I B層下部およびI C層上面で灰色土が落ち込む。SD81・SK3032・3033に切られ、SD2769と接続している。規模・形状：L字形に曲がる溝で全長37m・幅70～120cmを測る。断面は弓形を呈し深さは10～20cm弱である。底面には10cm内外の凹凸が見られるが全般に平坦であった。覆土：灰色土を主体とする。覆土にはマンガン・水酸化鉄の斑紋が見られ、底部には砂・細礫が局所的に堆積しマンガンが沈着していた。これらの特徴から本址には弱い水流があったことが想像される。また、覆土の状況はSK2769の中・下位に類似している。遺物出土状況：溝の屈曲部付近で土師器皿片(3)が出土している。帰属時期：検出状況や出土遺物の様相から中世2期に比定される。所見：覆土の類似や位置関係からSD65・SK2769と併存していた可能性が高く、SK2769が排水を目的とした施設と考えられることから、本址は雨水を流す排水路と推定され、同時にST85～89などが建つ集落内部を区画していたと考えられる。

SD65 位置：北端 II 図版97・99、第172図

検出：I C層上面で灰オリーブ色土が落ち込む。ST105～107に切られる。またSK2769と重複していた。規模・形状：長さ21m・幅75～120cmの規模を有する。断面は弓形で、深さは10cm内外であった。底面は平坦である。覆土：灰色土を主体とする。覆土中には砂粒がレンズ状に集積する部分も見られることから、弱い水流があったと考えられる。SD64と同様の覆土であるが検出状況からは本址のほうが先行すると判断される。また、SK2769の覆土中・下位とも類似した覆土であった。帰属時期：SK2769と併存していた可能性があることから中世2期と考えられる。所見：SD64と同様に排水路として機能していたと考えられる。本址の両側にはST85～89が本址と主軸を合せるように展開している。

SD66 位置：北端 I 図版99、第172図

検出：I C層上面で灰色土を主体とした土が落ち込む。マンガンの汚染が激しく検出は困難であった。ST89・106・107・SD65に切られる。本址の両側では地山の砂礫層が高まり、その間の谷状の凹地上に添って本址が掘り込まれたと判断される。規模・形状：長さ16mを越え、幅は135～175cmを測る。底面は平坦であった。覆土：灰色土を主体とする。覆土中に拳大の礫が点在している。掘込みは地山III層に達し

ている。帰属時期：SL17・18より新しい。また、SD65・ST89よりも古い、検出状況からはそれに近い時期と考えられる。所見：主軸方向や位置関係からST85・88と併存した可能性がある。本址は付近の地形や土質から水路として掘り込まれたものではないことは確実で、道跡とも考えられる。

SD67 位置：北端II 図版101

検出：I C層上面で灰色砂礫が落ち込む。本址はSL23内に位置し、主軸方向や位置関係から水田址の一部と判断される。規模・形状：長さ4.3m・幅30cmの規模を有し、断面は弓形を呈し、深さは10cm弱であった。覆土：灰色の砂礫を主体とし灰色土も混じる。帰属時期：SL23と同様で中世2期と判断される。所見：SL23のアゼとの位置関係からアゼに併設された小規模な用排水路か、もしくは、水流による級化作用で形成された流路痕と判断される。

4 柵址

概観

本遺跡では6条の中世段階の柵址が確認された。その内訳は中部地区に3条、北部地区に1条、北端地区に2条である。規模や形状については柱間が2間以下の小規模な柵址が多く、SA31・32・36は掘立柱建物址であった可能性も捨て切れない。SA33・35は溝や畦畔にかかわる施設と判断される。

SA31 位置：中部III 図版80

検出：I C層上面で青灰色土の落ち込む小土坑が等間隔に3基並ぶ。規模・形状：長さ4.3mである。柱穴は径20～30cmの円形プランを呈し、深さは20cm強である。埋土は青灰色土を主体とする。帰属時期：I C層上面で検出されI B層に覆われていることから中世と判断した。

SA32 位置：中部III 図版79

検出：I C層上面で青灰色土の落ち込む小土坑がほぼ等間隔に3基並んでいた。SK1576・1583を切る。これらの土坑より本址のほうがより鮮明な青灰色を呈していた。規模・形状：長さ3.3mである。柱穴は一辺40～50cmの隅丸方形プランを呈し、深さは20cm弱である。柱痕跡は確認されなかった。柱穴の埋土は青灰色土を主体とする。帰属時期：I C層上面で検出されI B層に覆われていることから中世とした。ST75と主軸を一致させている。

SA33 位置：中部III 図版75

検出：I C層上面、SL12アゼ上で灰白色土が落ち込む小土坑が2基並んでいた。規模・形状：長さ1.7mで柵址とするには疑問が残るが、アゼ上で検出されたことから水田にかかわる施設の可能性もあろう。柱穴は径40～50cmの円形プランで深さは20cm位である。埋土は灰白色土を主体とし、マンガンの斑紋が見られた。帰属時期：I C層上面で検出されI B層に覆われていることから中世と判断した。

SA34 位置：北部II 図版85

検出：I C層上面で青灰色土の落ち込む小土坑が7基並んでいた。規模・形状：途中で柱穴を欠くが本来は5間の柵であろう。長さは10m強である。西から3番目と東端の柱では建替えが見られる。柱間は175～250cmを測る。柱穴：径20～30cmの円形プランを呈し深さは25cm位である。埋土は青灰色土を主体とする。帰属時期：I C層上面で検出されたことから中世と判断した。北側に展開する中世2期の土坑群の南縁を成す位置に本址は存在している。

SA35 位置：北端I 図版95

検出：I C層上面で青灰色土の落ち込む小土坑がほぼ等間隔に3基並ぶ。SL15のアゼ上、SD62・63の間で検出された。規模・形状：長さ3.3mである。柱穴は径20cmの円形プランで深さは10cm位であった。埋

土は青灰色土を主体とする。帰属時期：SL15・SD62・63と係って存在していたと判断されることから中世2期と考えられる。

SA36 位置：北端 I 図版96

検出：I C層上面で灰白色土の落ち込む小土坑が、等間隔に3基並んでいた。SL18と重複している。規模・形状：長さ5mを測る。柱穴は径20cm位の円形プランで深さは30cm強であった。埋土は灰色土を主体としている。帰属時期：I C層上面で検出され、ST103など近世遺構の柱穴の埋土とは特徴が異なることから中世と判断した。SD64に主軸を合わせている。

5 墓址

概観 第173図

本遺跡で骨・歯が出土し、副葬品などから明確に墓址と判断できる遺構は9基を数える。墓址の分布は北端I地区の1基を除き北部II地区に集中しており、この地区に多数存在する土坑についても、そのなかには墓坑であったものが多いと考えられる。墓址のなかで火葬墓と判断されるのは3基である。なお、北部II地区の墓址・土坑の位置については、市道仁科線を境に北部II西地区と北部II東地区に分けた。

SK2023 位置：北部II西 図版88

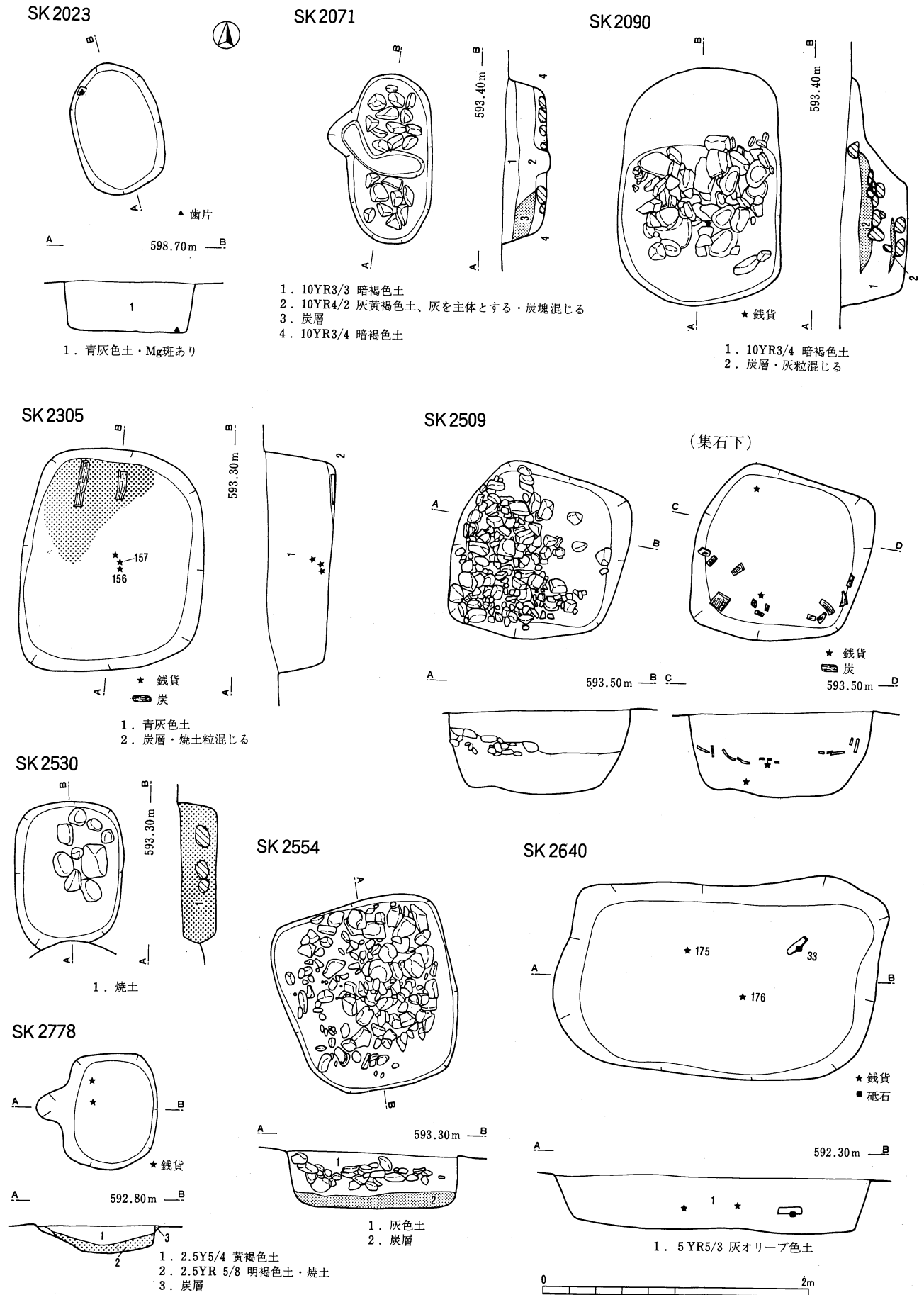
検出：I C層上面で青灰色土が落ち込む。規模・形状：98cm×65cmの楕円形プランを呈し、深さは42cmを測る。遺物出土状況：坑底北西よりで偶蹄目に分類される動物の歯が出土した。埋土：青灰色土の単層でマンガンの斑紋が見られる。帰属時期：主軸方向や埋土の特徴から中世2期に比定される。隣接するSK1987・1988・2035などと主軸方向を一致させている。所見：歯片の出土から墓址としたが比較的小規模な土坑であり、どのような方法で埋葬されたのか疑問が残る。

SK2071 位置：北部II東 図版87、PL47

検出：I C層上面で炭粒の混じる灰色土が落ち込む。SK2070を切っている。規模・形状：127cm×63cmの楕円形プランを呈し、深さは30cmを測る。西壁部に半円形の張出し部を伴う。坑底には中央部を除き拳大の円礫による石敷きが施され、礫の上面まで埋め戻されていた。それによって坑底中央部には幅20cm弱の溝状の凹みが形成され、西壁の張出し部に向けて緩やかに立ち上っている。この部分は煙道もしくは通気口として機能していたと判断される。埋土：石敷き部分を除き3分層される。坑内西半分には粗朶起源と推定される炭粒が堆積しており(3層)その上には灰が厚く堆積していた(2層)。遺物出土状況：灰層内よりかなり大形で多量の焼骨が検出され、ほぼ全身部位にわたって出土している。西沢寿晃氏から壮年を経た女性であるとの鑑定結果を得ている。帰属時期：主軸方向や埋土の特徴から中世2期に比定される。隣接するSK2067・2073・2089などと主軸方向を揃えている。所見：本址は焼骨の出土や炭・灰層の存在から火葬施設であるとともに、火葬後も拾骨の有無にかかわらず墓と同様な意義を持っていたことが遺構配置から考えられる。

SK2090 位置：北部II東 図版87

検出：I C層上面で灰粒の混じる灰色土が落ち込む。規模・形状：177cm×123cmの楕円形プランを呈し、深さは50cmを測る。北壁は緩やかに立ち上がる。埋土：覆土中位と下位に2回にわたる炭層と堆積と集石が見られる。炭層中には灰粒および焼骨片が見られ、集石は拳大から人頭大の円礫で形成されている。炭層は攪乱されていないことから他所から持ち込まれたものではなく、ここで焚火によって形成されたものであろう。帰属時期：主軸方向や埋土の特徴から中世1期と判断される。隣接するSK2091と主軸を合せている。所見：本址は焼骨や炭層の存在から火葬施設と判断され、拾骨の後に集石が形成されていること



第173図 中世墓址実測図

から、墓と同様に意識されていたと思われる。2枚の炭層が形成されていることから2回の火葬が同一の土坑内で行われたと判断される。

SK2305 位置：北部II東 図版90

検出：I C層上面でオリブ灰色土が落ち込む。SK2304に切られる。SK2304の覆土は灰黄褐色を呈している。規模・形状：165cm×135cmの隅丸長方形プランを呈し、深さは54cmを測る。坑底西側に焼痕が見られた。埋土：2分層される。上層は青灰色土を主体とし砂礫が混じる。下層は坑底付近にのみ分布する炭層で焼土粒・焼骨片を混じえる。また、長さ20～35cm・径7～8cmの炭化材が何本か横たわっていた。遺物出土状況：青磁碗片と埋土下位より銭貨が3枚(156・157)がかたまって出土した。帰属時期：出土遺物の様相から中世1期に比定される。隣接するSK2331・2333・2353と主軸を合せている。所見：坑底部の焼痕や炭層、焼骨の存在から本址は火葬施設と判断され、拾骨後に銭貨の埋納が行われたと考えられる。

SK2509 位置：北部II東 図版91

検出：I C層下位からII A層上面でオリブ灰色土が落ち込む。規模・形状：一辺126cmの隅丸方形プランを呈し深さは58cmを測る。埋土：埋土中位に集石が見られ、それを境に上下2分層される。上層はオリブ灰色土で炭・焼土粒が混じる。下層は灰色土を主体とし焼骨片が混じる。集石下に10cm弱の大きさの炭化材が多量に見られた。炭化材はその形状から板材を起源としている。遺物出土状況：覆土下位から銭貨が2枚(160・161)出土した。帰属時期：主軸方向や埋土の特徴から中世1期に比定される。近接するSK2469・2480・2514と主軸方向が一致している。所見：焼痕や焼土の堆積が見られないことから坑内で火が焚かれたとは考えられず、炭化材や焼骨の混乱した状況から他所で火葬に付された後、炭・灰ごとさらって本址に埋納し礫を積み上げたものと判断される。なお、炭化材の形状から木棺の存在も指摘できる。

SK2530 位置：北部II東 図版91

検出：I C層下位からII A層上面で焼土を多含するオリブ灰色土が落ち込む。SK2529を切りSK2526に切られる。規模・形状：112cm×80cmの隅丸長方形プランを呈し深さは28cmを測る。埋土：焼土塊・炭粒を多含するオリブ灰色土で焼骨片を混じる。また、人頭大の円礫も入る。帰属時期：主軸方向や埋土の特徴・検出状況から中世1期に比定される。所見：焼痕が見られないことや埋土の状況から坑内で火が焚かれたとは思われず、他所で火葬に付された後、焼骨を焼土ごとさらって本址に埋納したと判断される。

SK2554 位置：北部II東 図版92

検出：I C層下位からII A層上面で灰オリブ色土が落ち込む。規模・形状：141cm×132cmの隅丸方形プランを呈し深さは22cmを測る。坑底に焼痕が見られた。埋土：2分層される。上層は灰色土を主体としその中位に集石が形成されている。下層は坑底上に薄く堆積する炭層で、粗朶起源と判断される。わずかに焼骨片が混入する。遺物出土状況：上層中で古瀬戸折縁深皿片が出土した。帰属時期：出土遺物の様相から中世2期に比定される。所見：焼痕や炭層・焼骨片の存在から火葬施設と判断される。拾骨後、埋め戻され礫が積み上げられたと考えられる。

SK2640 位置：北部II東 図版94

検出：I C層上面で灰オリブ色土が落ち込む。規模・形状：240cm×145cmの隅丸長方形プランで深さ40cmを測る。埋土：灰オリブ色土を主体とし砂礫が混じる。骨片も混入する。遺物出土状況：覆土中位で銭貨が2枚(175・176)、また、砥石(33)が出土した。帰属時期：主軸方向や埋土の特徴から中世1期に比定される。隣接するSK2637～2639・2641・2642などと主軸を一致させ、規則的な遺構配置を取る。所見：骨片の出土や土坑の規模・形状から土坑墓と推定される。

SK2778 位置：北端I 図版98

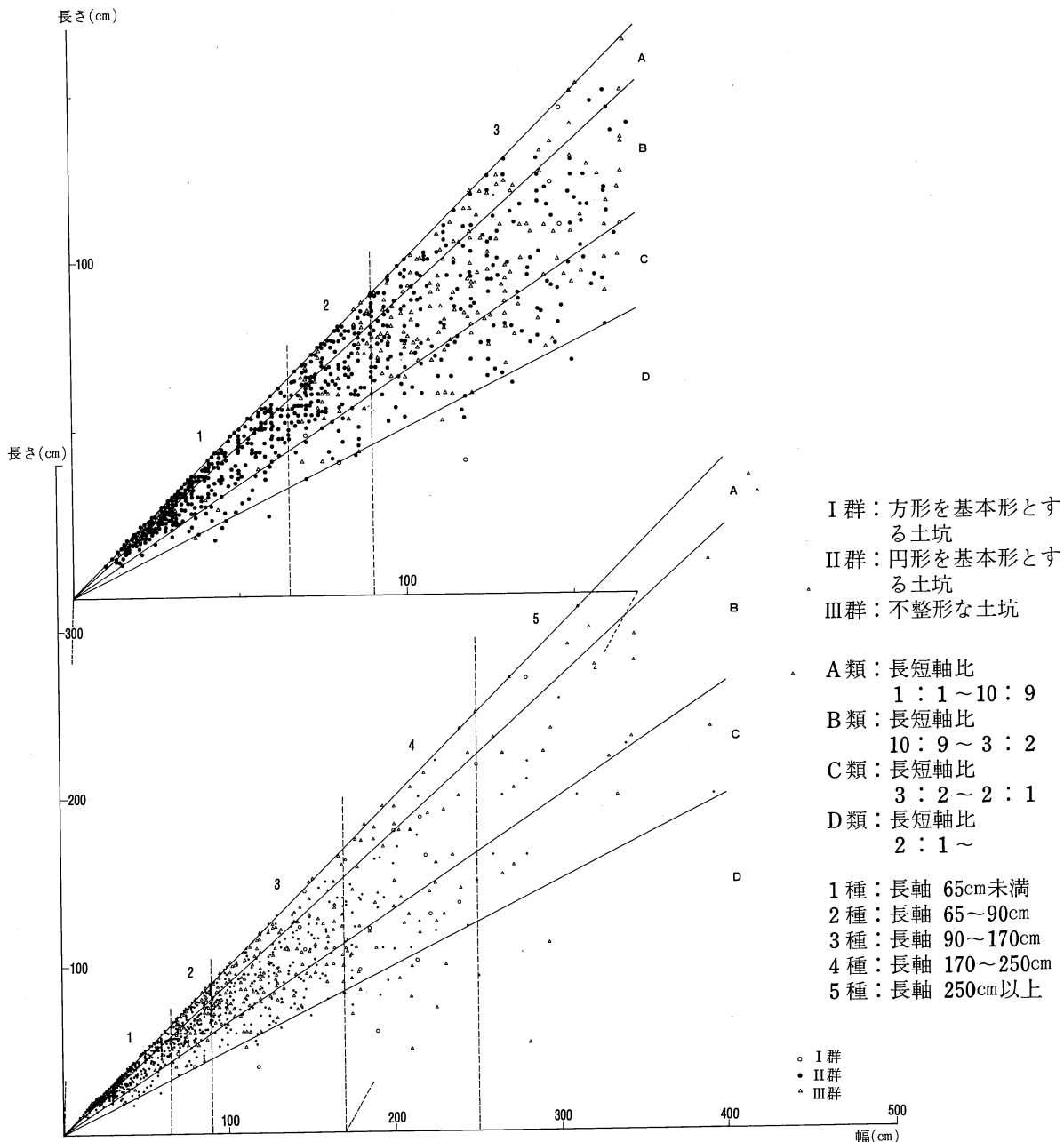
検出：I B層上面で灰色土が落ち込み、土坑の縁辺に添って焼痕が見られた。規模・形状：75cm×60cmの

隅丸長方形プランで深さは20cmを測る。西壁中央に半円形の張出し部を有し、その断面形は坑底部より緩やかに立ち上がっている。壁沿いに厚さ2cmにわたって焼土化していた。埋土：2分層される。上層はI B層を主体としている。下層は坑底部に分布する炭層で、多量の焼骨片を含む。炭はその形状から粗朶起源と判断される。遺物出土状況：炭層中より銭貨が6枚付着した状態で出土している。焼骨はほぼ全身部位に渡る人骨片で女性的な特徴を有することが西沢寿晃の鑑定によって明らかにされている。帰属時期：炭化材から 320 ± 80 B. P. (I-14851、Teledyne Isotopes) という C^{14} 年代が得られており、銭貨も北宗銭であったことから中世2期末期と判断した。所見：焼痕や炭層・焼骨の存在から火葬施設と判断され、多くの骨は拾骨されたと考えられる。

6 土坑

概観

分類：本遺跡では墓址9基を含む1436基の中世段階の土坑が検出されたが、これらは土坑の形態から以下



第174図 中世土坑の長軸と短軸関係図

	A					小計	B					小計	C					小計	D					小計	不明					小計	計
	1	2	3	4	5		1	2	3	4	5		1	2	3	4	5		1	2	3	4	5		1	2	3	4	5		
I	21	15	39	15	10	100	8	18	102	20	11	159	2	3	28	18	5	56	1	1	2	9	2	15	0	0	0	1	1	2	332
II	398	53	48	4	0	503	227	81	106	17	6	437	26	18	47	10	5	106	4	2	6	3	1	16	0	3	4	1	0	8	1,070
III	0	0	2	0	1	3	0	2	2	5	1	10	0	1	0	5	0	6	0	1	1	1	0	3	0	0	6	5	1	12	34
計	419	68	89	19	11	606	235	101	210	42	18	606	28	22	75	33	10	168	5	4	9	13	3	34	0	3	10	7	2	22	1,436

第2表 中世の土坑形態分類表

のように分類される。

検出された土坑については平面形では圧倒的にII群が多いものの、古代に比べI群の占める割合が全般に高い。プランの長短軸比ではA類・B類が大半で、C類・D類が少ないのは古代と同様であった。土坑の規模については古代と様相を異にし、3種・4種が全体の35%を占め、墓域の調査を反映する数字と考えられる。

分布：1436基の内訳は、中部地区207基、北部I地区56基、北部II地区1047基、北端I地区103基、北端II地区23基で、大多数は北部II地区に集中している。また、大形の土坑が集中するのは中部地区と北部II地区である。この中部地区の土坑群は平面形・断面形とも不整形なものが多く、遺物の出土や集石が見られないなど、人工的に掘り込まれたかどうか判断に迷う土坑も多い。それに対し北部II地区では形の整った土坑が数多く存在し、出土遺物の様相や遺構の内容から中世1期から中世2期前葉にかけての集落と墓域が重なり合った地域と推定される。

帰属時期：時期が決定できるような状況で遺物の出土する土坑は極少数であり、中部地区・北部I地区では隣接する掘立柱建物址も含め、中世段階に帰属するものより細かな時期の推定は困難であった。北部II地区については、切合い関係が錯綜する部分ではIC層上面で明瞭にプランが確定できた土坑とIC層下位からIIA層上面で検出された土坑の双方が見られるが、出土遺物の検討からは前者のほうが新しいと判断される。また、切合い関係・検出状況・埋土の特徴および主軸方向で分類した段階で、隣接する土坑同志に規則的な配列が認められ、ある程度隣同士を意識して土坑が掘り込まれたと考えられる。そのことを同時性の根拠として時期を推定した土坑もある。

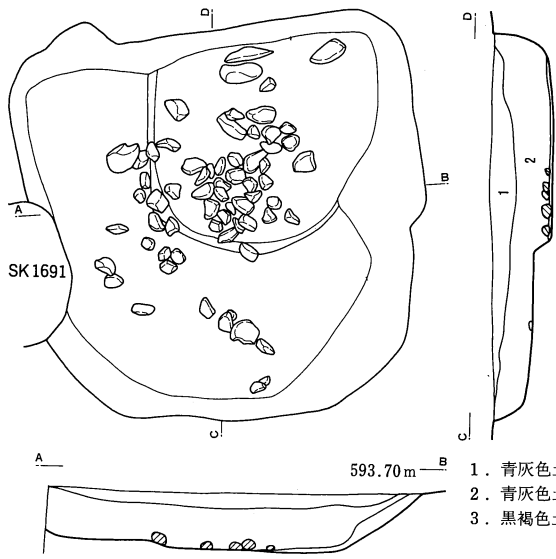
所属性：墓址(第174図)や、排水にかかわる施設(第182図)のほかに、明確に機能を推定できる土坑は見られないが、次のような属性を有する土坑も存在している。

- (1) 大形(4・5種)の土坑(第175・176図)
- (2) 集石を伴う土坑(第177~179図)
- (3) 完形・半完形状態の土器・陶磁器、石製品、金属製品を伴う土坑(第180・181図)
- (4) 排水にかかわる施設(第182図)

(1) 大形の土坑 第175・176図

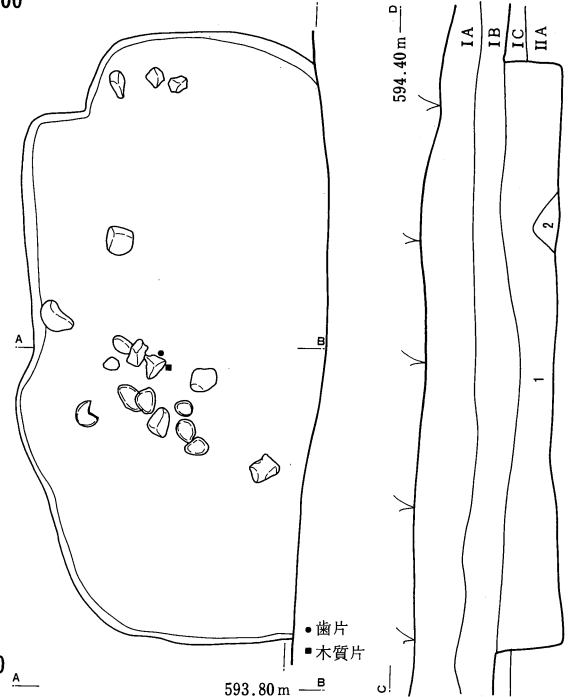
北部II地区にのみ分布する。長軸3mを越える規模を有する土坑と、2.5~3mで楕円形・(隅丸)長方形を呈し整ったプランの土坑とに分けられる。両者とも居住可能な底面積を有している。前者は竪穴住居址と認定されるだけの面積を有しているが、柱穴や上屋を想定できるような施設あるいは火処といった居住の痕跡が見られず、その性格には不明な部分が多い。後者はその規模・形状から伸展葬や大形動物の墓が考えられるが、一方では「むろ」といった地下式の貯蔵庫の可能性もある。類例としてはここに挙げたほかにSK1796・1808・2065・2151・2311・2380・2433~2435・2414・2415がある。

SK1693



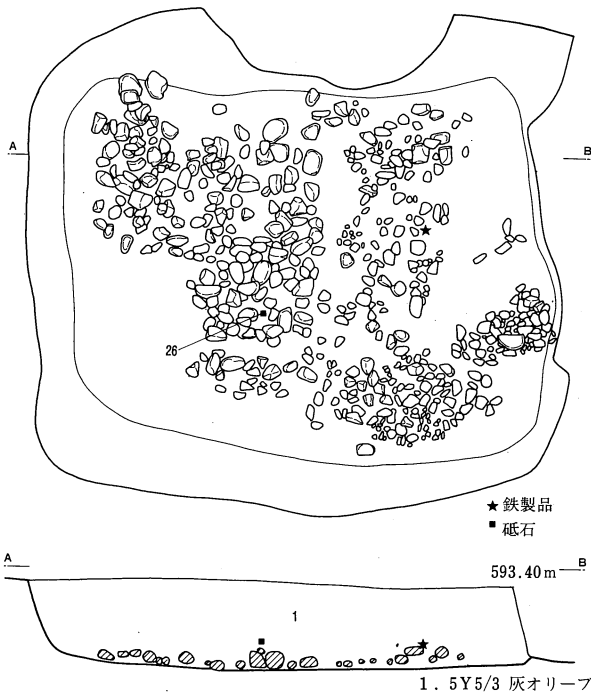
- 1. 青灰色土、Mg斑多い
- 2. 青灰色土
- 3. 黒褐色土、炭粒混じる

SK2000



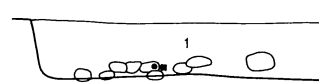
- 歯片
- 木質片

SK2435

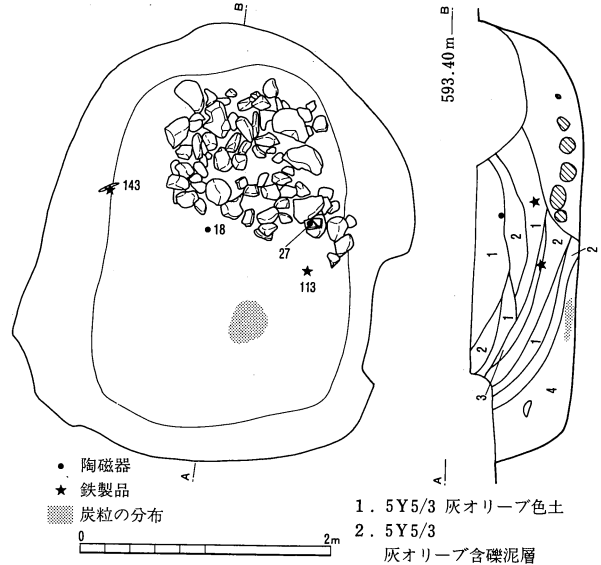


- ★ 鉄製品
- 砥石
- 1. 5Y5/3 灰オリーブ色土

SK2480



- 1. 青灰色土
- 2. 青灰色砂



- 陶磁器
- ★ 鉄製品
- 炭粒の分布

- 1. 5Y5/3 灰オリーブ色土
- 2. 5Y5/3 灰オリーブ含礫泥層
- 3. 青灰色土
- 4. 灰色土、炭粒混じる

第175図 中世土坑実測図(1)

SK1693 (I群A類5種)

位置：北部II西

図版84、PL46

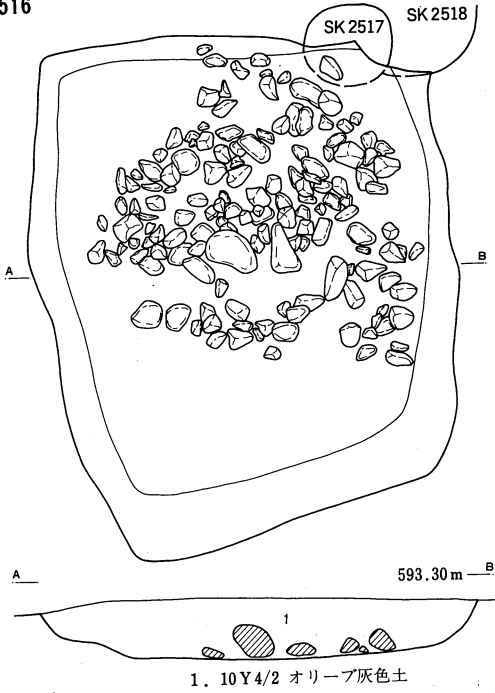
検出：I C層上面で青灰色土が落ち込む。SK1691・1692に切られることを土層断面で確認している。規模・形状：一辺310cmの不整形な隅丸方形プランを呈し、深さは45cmを測る。北東寄りの底面が180cm×165cmの範囲でさらに掘り凹められている。覆土：3分層される。上・中層は青灰色土を主体とし、中層には赤褐色土塊が混じる。壁面から底面に薄く分布する下層は黒褐色を呈し炭粒の混入が多い。坑底上で拳大から人頭大の円礫が出土している。帰属時期：主軸方向や埋土の特徴や周辺の土坑の帰属時期から本址も中世1期に比定される。

SK1973 (I群D類5種)

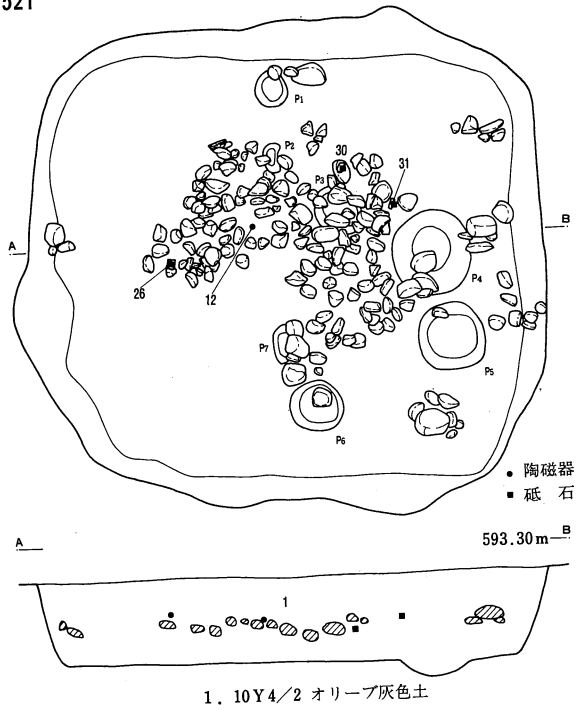
位置：北部II西

図版86

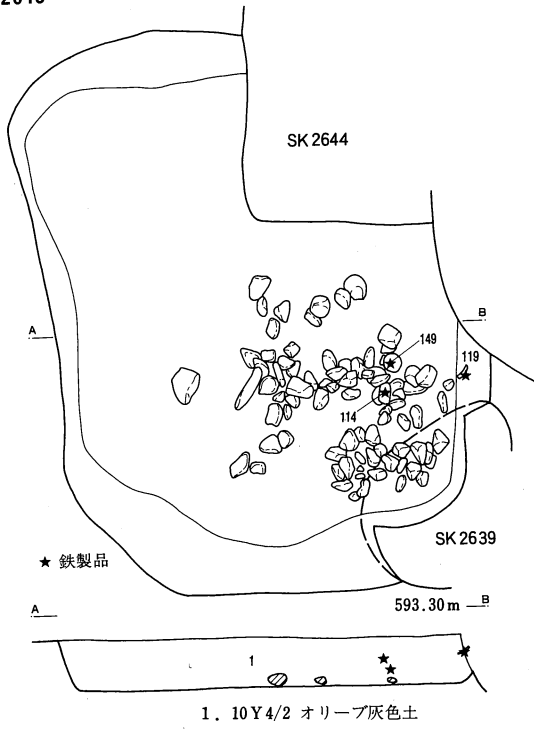
SK2516



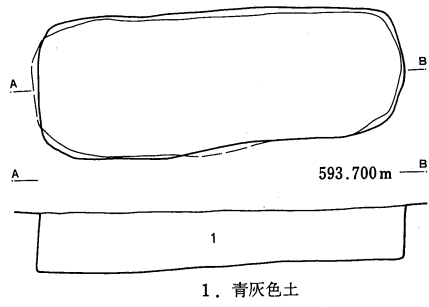
SK2521



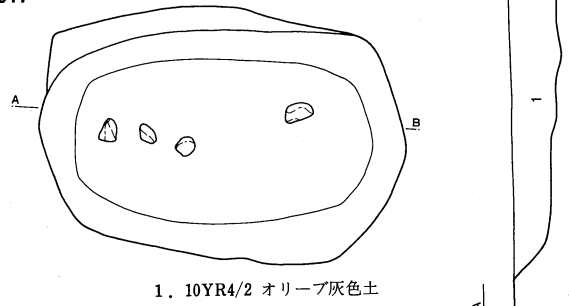
SK2643



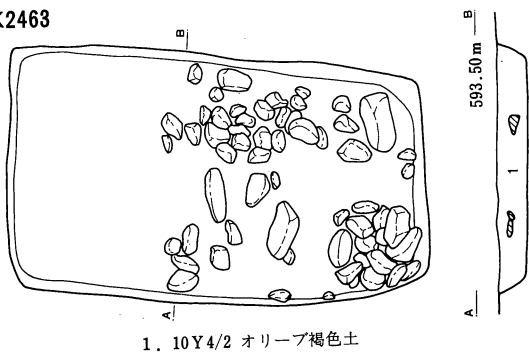
SK1973



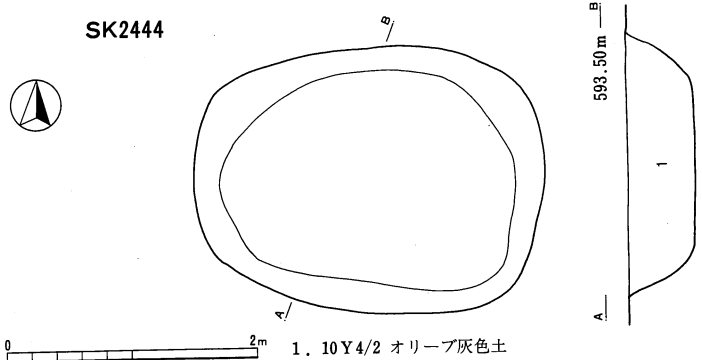
SK2317



SK2463



SK2444



第176図 中世土坑実測図(2)

検出：I C層上面で青灰色土が落ち込む。規模・形状：293cm×112cmの隅丸長方形プランを呈し深さは48cmを測る。覆土：青灰色土を主体とし地山II A層・砂礫・炭粒が混入する。遺物出土状況：覆土中より鉄製の刀子(107)・釘・金具・棒状品が出土している。帰属時期：主軸方向や遺構配置からSK1975・2151と同時期と考えられる。

SK2000(I群5種) 位置：北部II西 図版86・88

検出：I C層上面で青灰色土が落ち込む。坑底でさらに2基の落ち込みを確認したが、埋土が異なることから別遺構(SK2001・2002)と判断した。東側は調査区外に属す。規模・形状：調査された部分で南北に490cmの方形を意識したプランを呈し、深さは25～30cmを測るが坑底はほぼ平坦である。覆土：2分層される。下層は青灰色土塊で、上層は青灰色土を主体とし砂礫が混じる。坑底より数cm浮いて拳大以上の礫が散在的に出土した。遺物出土状況：坑内中央、底面より7cm浮いて人間の歯と木片が出土した。帰属時期：周辺の土坑の時期や主軸方向から中世2期と判断されるが根拠は弱い。

SK2317(II群C類5種) 位置：北部II東 図版89

検出：I C層下位からII A層上面でオリーブ灰色土が落ち込む。SK2316・2318・2325に切られ、SK2322・2323を切る。切合い関係は土層断面で確認した。規模・形状：329cm×200cmの楕円形プランを呈し、深さは40cmを測る。北壁は緩やかに立上る。覆土：青灰色土を主体とし、マンガン・水酸化鉄の斑紋が見られた。帰属時期：切合い関係からSK2323より新しく位置付けられるが、主軸方向や遺構配置からほぼ同時期の所産と考えられる。

SK2435(I群A類5種) 位置：北部II東 図版90

検出：I C層中で灰オリーブ色土が落ち込む。青灰色土を主体とした埋土のSK2432・2434に切られ、SK2436・2438・2439を切る。規模・形状：420cm×400cmの隅丸方形プランを呈し、深さは70cmを測る。底面は平坦であった。覆土：青灰色土を主体とし鶏卵大以下の礫が混じる。底面直上に拳大から人頭大の円礫が多出している。遺物出土状況：覆土下位で鉄製の刀子、砥石(26)が出土したほか、大塚期の皿片が検出されたが、SK2433からの混入品と考えられる。帰属時期：検出状況や遺構配置からSK2305と同時期と判断した。

SK2444(II群B類5種) 位置：北部II東 図版90

検出：I C層下位からII A層上面でオリーブ灰色土が落ち込む。規模・形状：280cm×210cmの楕円形プランを呈し深さは55cmを測る。覆土：青灰色土を主体とし砂礫が混じる。帰属時期：主軸方向や遺構配置、特にSK2441とは同様の規模・形状であるところから同時期と判断される。

SK2463(I群C類5種) 位置：北部II東 図版91、PL47

検出：I C層下位からII A層上面でオリーブ灰色土が落ち込む。SK2464を切る。覆土：青灰色土を主体とし礫群が混じる。坑底直上から覆土下位にかけて拳大から人頭大の礫が多出している。また、覆土中で骨片も検出された。帰属時期：検出状況や遺構配置から中世1期に比定される。所見：小片ではあるが骨片の出土や土坑の形態から本址は土坑墓である可能性が高い。

SK2480(II群B群5種) 位置：北部II 図版91、PL47

検出：I C層下位からII A層上面でオリーブ灰色土が落ち込む。SK2468・2469・2479・2481～2483に切られる。切合いは土層断面の観察から決定した。規模・形状：345cm×280cmの楕円形プランを呈し、深さは82cmを測る。覆土：11分層される。礫が混入する土と灰色土が互層を成しており、一気に埋め戻された状況が良好に復元される。坑内北側の底面には拳大から人頭大の円礫が多出している。遺物出土状況：覆土中から捏鉢(27)、山茶碗、青磁碗片(18)、鉄製の刀子2点(113)、釘(143)が出土した。帰属時期：出土遺物の様相から中世1期に比定される。

SK2516(I群B類5種) 位置：北部II東 図版91

検出：I C層下位からII A層上面でオリーブ灰色土が落ち込む。SK2512を切り、I C層上面で明瞭に検出されたSK2517・2518に切られる。規模・形状：灰色土を主体とし鶏卵大以下の礫が混じる。底面直上で拳大から人頭大の礫が多出している。帰属時期：切合い関係や主軸方向・遺構配置からSK2521と同時期と判断した。

SK2521(I群A類5種) 位置：北部II東 図版92

検出：I C層下位からII A層上面でオリーブ灰色土が落ち込む。SK2520・2522を切っている。規模・形状：420cm×380cmの隅丸長方形プランを呈し、深さ70cmを測る。底面には径24～70cm・深さ7～30cmの様々な規模の落ち込みが6基存在する。落ち込みの覆土は土坑の覆土と同一であった。覆土：灰色土を主体とする。覆土中に拳大から人頭大の礫が多出しており、これを境に上下2分層も可能である。遺物出土状況：集石と同じレベルで山茶碗片(26)、古瀬戸水注片(12)、砥石(31)が出土している。帰属時期：出土遺物の様相から中世2期に比定される。

SK2643(I群B類5種) 位置：北部II東 図版93

検出：I C層下位からII A層上面でオリーブ灰色土が落ち込む。I C層上面で明瞭にプランが確定できたSK2639・2644に切られる。規模・形状：450cm×320cmの隅丸長方形プランを呈し深さは40cmを測る。覆土：灰色土を主体とする。底面直上ないしはこれよりやや浮いて拳大から人頭大の円礫が多出している。遺物出土状況：覆土中で鉄製の刀子2点(114・115)、鑿(119)、環状製品(149)、棒状品、鉄片が出土した。帰属時期：切合い関係や遺構配置からSK2637・2645と同時期である可能性が高い。

(2) 集石を伴う土坑 第177～179図

集石を伴う土坑は77基確認されたが、その大半が北部II地区に集中し、特に市道仁科線の東側に多い。これらの土坑は礫の出土状況によって次の3類型に分けられる。礫が底部付近に集中する土坑、覆土の中上位に集中する土坑、覆土中に万遍なく礫が混じる土坑で、残念ながらこれらの相違が究明できるような資料を得ることはできなかったが、中・上位に礫が見られるものについては土坑を埋め戻したあと石積みしてマウンドを築くような意義を有していたと考えられる。

SK1677(I群B類4種) 位置：北部II西 図版84、PL46

検出：I C層上面で青灰色土が落ち込む。規模・形状：225cm×161cmの隅丸長方形プランを呈し、深さは59cmを測る。南壁に半円形の張出し部を有する。覆土：2分層される。下層中には地山II A層・砂礫が混じる。坑底直上に拳大から人頭大の礫が多出している。遺物出土状況：覆土中から土師器杯、捏鉢、山茶碗、青磁碗の破片が検出された。帰属時期：出土遺物の様相から中世1期に比定される。

SK1801(I群B類3種) 位置：北部II西 図版84

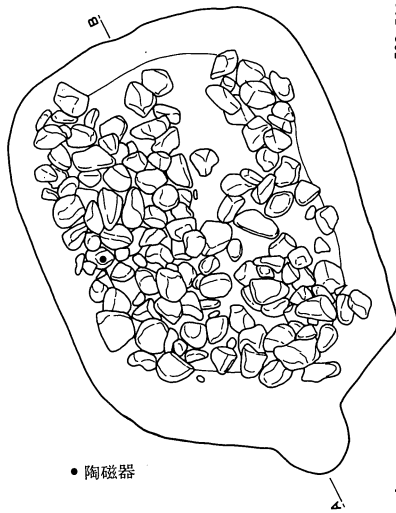
検出：I C層上面で青灰色土が落ち込む。規模・形状：130cm×94cmの隅丸長方形プランを呈し、深さは47cmを測る。覆土：青灰色土を主体としている。覆土中に拳大から人頭大の礫が散漫に出土している。帰属時期：主軸方向や遺構配置からSK1799・1800と同時期と判断した。

SK2034(II群B類3種) 位置：北部II西 図版88

検出：I C層上面で青灰色土が落ち込む。規模・形状：144cm×113cmの楕円形プランを呈し深さは35cmを測る。覆土：青灰色土を主体とし、炭・焼土粒が混じる。覆土下位に人頭大の円礫が5個出土している。帰属時期：主軸方向や遺構配置から中世2期と考えられるが根拠は弱い。

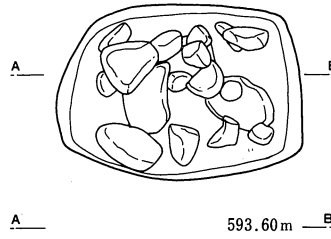
SK2061(I群B類3種) 位置：北部II西 図版87

SK 1667



● 陶磁器

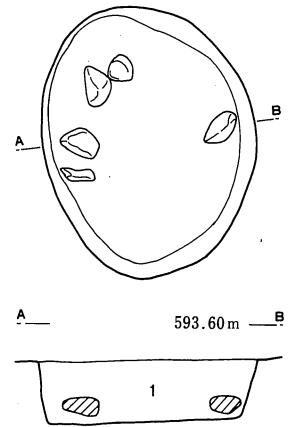
SK 1801



1. 青灰色土・マンガン斑混じる

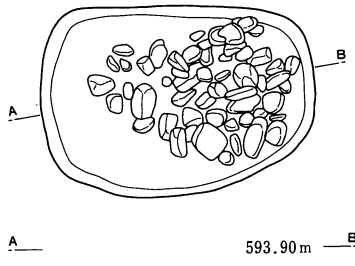
1. 青灰色土
2. 青灰色土
II A層土塊混じる

SK 2034



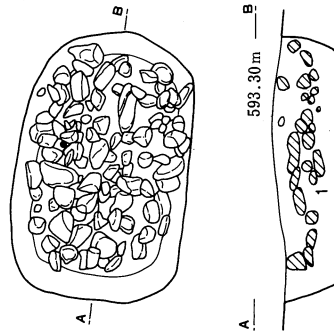
1. 灰色土

SK 2061



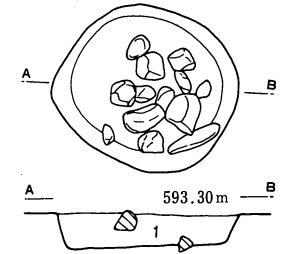
1. 10Y4/2 オリーブ灰色土

SK 2138



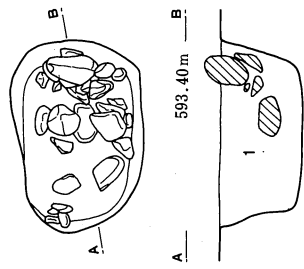
● 陶磁器
1. 10YR3/3 暗褐色土

SK 2170



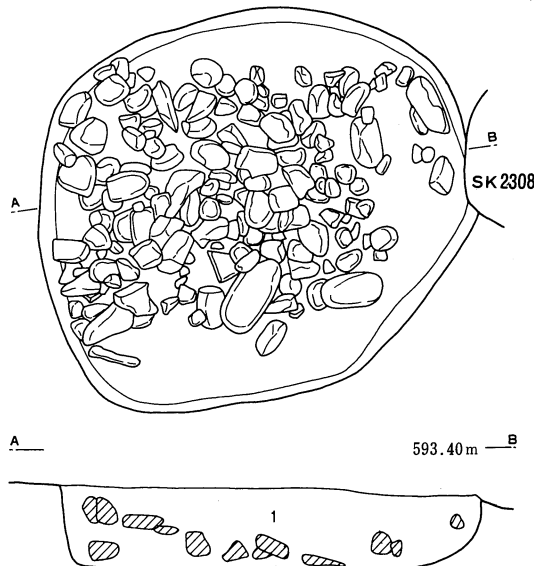
1. 青灰色土

SK 2236



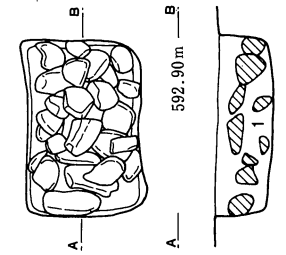
1. 10Y4/2 オリーブ灰色土
焼土・炭粒多く混じる

SK 2307



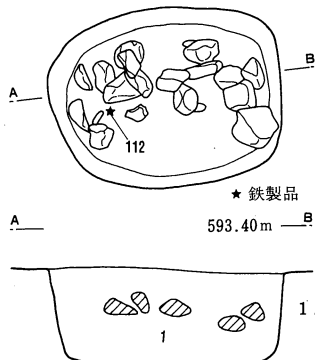
1. 10YR4/2 灰黄褐色土・炭塊混じる

SK 2210



1. 灰色土・炭塊混じる

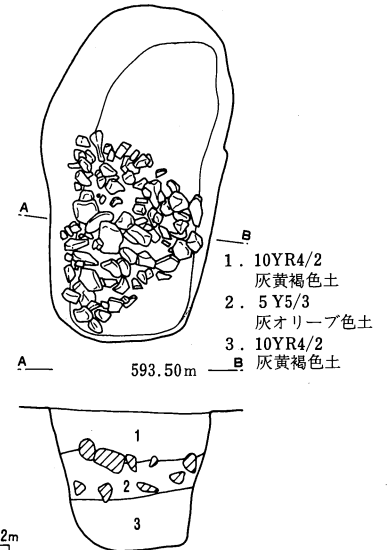
SK 2285



★ 鉄製品

1. 10YR4/2 灰黄褐色土
焼土・炭粒混じる

SK 2275

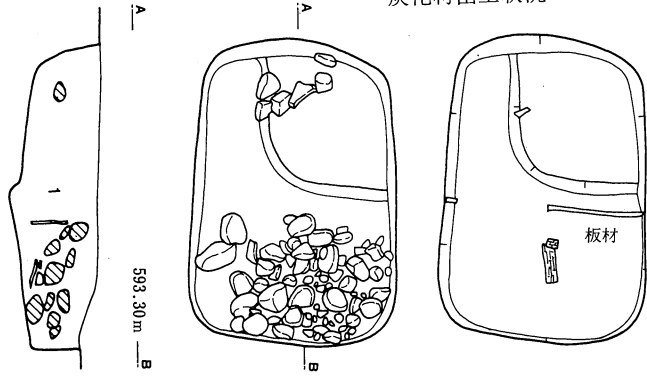


1. 10YR4/2 灰黄褐色土
2. 5Y5/3 灰オリーブ色土
3. 10YR4/2 灰黄褐色土



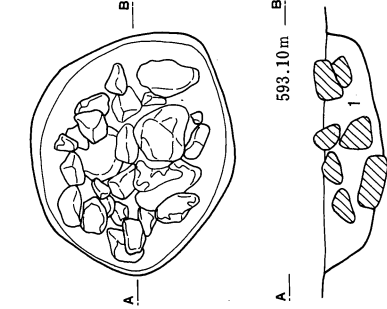
第177図 中世土坑実測図(3)

SK 2347



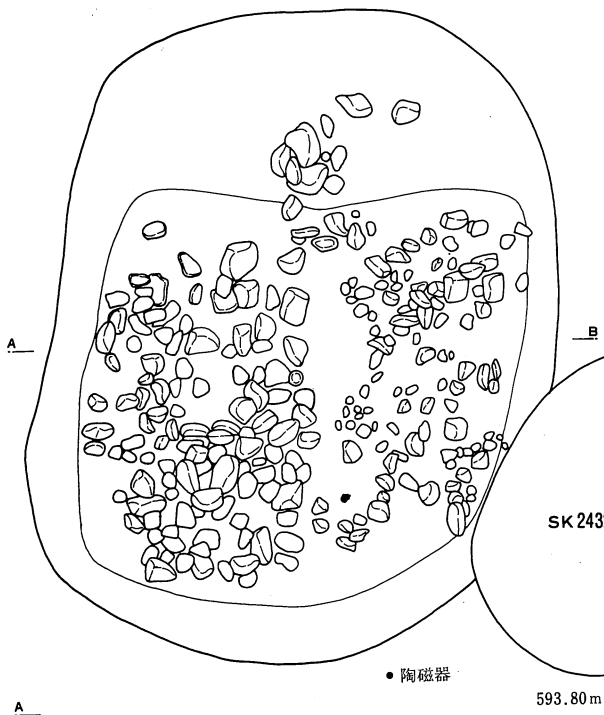
1. 10YR4/2 灰黄褐色土

SK 2363



1. 10YR4/3 灰黄褐色土

SK 2433

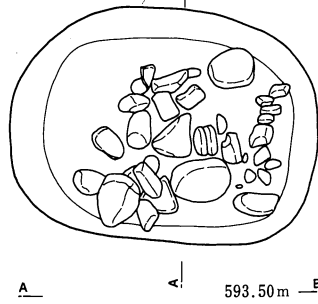


● 陶磁器

SK 2432

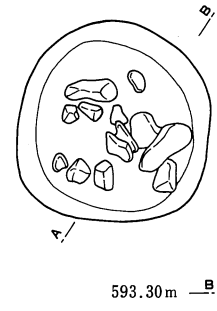
593.80m

SK 2417



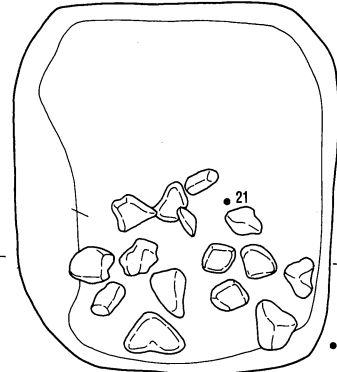
1. 灰色土

SK 2447



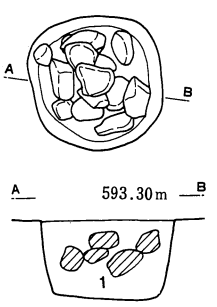
1. 灰色土

SK 2446



1. 10YR4/2 灰オリーブ色土、炭・焼土粒混じる

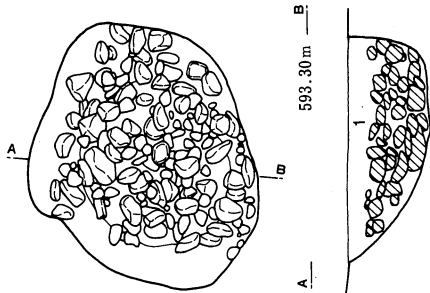
SK 2481



1. 10Y4/2 オリーブ灰色土
2. 5 Y5/3 灰オリーブ色土

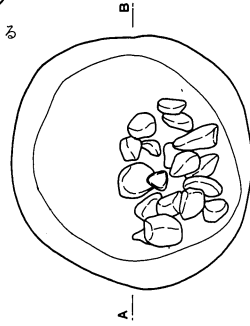
1. 5 Y5/3 灰オリーブ色土

SK 2461



1. 10YR4/2 灰オリーブ色土

SK 2482



第178図 中世土坑実測図(4)

検出：I C層上面で青灰色土が落ち込む。SK2059・2060を切る。切合い関係は土層断面の観察から決定した。規模・形状：146cm×100cmの隅丸長方形プランを呈し深さは30cmを測る。覆土：青灰色土を主体とし鶉卵大以下の礫が混じる。覆土中位に拳大の礫が多出している。帰属時期：主軸方向からSK1975などと同時期としたが根拠は弱い。隣接するSK2046・2056・2058などと主軸を揃えて配置している。

SK2138(II群C類3種) 位置：北部II東 図版87、PL47

検出：I C層上面でオリーブ灰色土が落ち込む。規模・形状：144cm×92cmの楕円形プランを呈し深さは36cmを測る。覆土：灰色土を主体とし炭粒が混じる。覆土中・上位に拳大以上の角礫が多出している。礫はより上位に大形のものが目立つ。遺物出土状況：山茶碗、古瀬戸折縁深皿片と常滑系甕片が集石下で出土し、そのうち折縁深皿はSK2151の遺物と接合関係を有している。帰属時期：出土遺物の様相から中世2期に比定される。SK2129～2151と主軸方向を合わせている。

SK2170(II群A類3種) 位置：北部II東 図版89

検出：I C層上面で灰色土が落ち込む。規模・形状：97cm×88cmの円形プランを呈し深さは18cmを測る。覆土：灰色土を主体とする。覆土中に拳大から人頭大の円礫が散在的に出土している。帰属時期は不明である。

SK2210(I群C類3種) 位置：北部II東 図版89

検出：I C層下位からII A層上面で暗褐色土が落ち込む。I C層上面で明瞭にプランを検出できたSK2209に切られる。規模・形状：93cm×60cmの長方形プランを呈し深さは30cmを測る。覆土：灰色土を主体とし炭粒が混じる。壁沿いに炭粒が多く分布するが焼痕は確認されない。覆土中・下位に焼損したものを含む人頭大の礫が多出している。帰属時期：主軸方向から中世2期と判断したが根拠は弱い。所見：炭粒の分布状況はSK2554など火葬施設とした土坑に類似しており、本址には墓址の可能性もある。

SK2236(II群B類3種) 位置：北部II東 図版89

検出：I C層上面でオリーブ灰色土が落ち込む。規模・形状：101cm×77cmの楕円形プランを呈し深さは47cmを測る。覆土：青灰色土を主体とし焼土・炭粒が多く混じる。焼損した礫を含む拳大から人頭大の円・角礫が覆土中に散点する。覆土や礫に出土状況はSK2509・2530などの墓址に類似している。帰属時期：中世段階ではあるが詳細は不明である。

SK2275(I群D類3種) 位置：北部II東 図版89

検出：I C層上面で灰黄褐色土が落ち込む。SK2272・2273・2276を切り、SK2277に切られる。切合い関係は覆土の色調によって決定した。規模・形状：178cm×96cmの隅丸長方形プランを呈し、深さは77cmを測る。覆土：3分層される。上・下層は灰黄褐色土を主体とし、中層は灰オリーブ色土を主体とする。中層には被熱した礫を多含し、炭塊も混じる。帰属時期：切合い関係や主軸方向から中世2期と判断した。

SK2285(I群B類3種) 位置：北部II東 図版90

検出：I C層上面で灰黄褐色土が落ち込む。SK2286・2289・2292・2293を切る。本址付近は土坑が複雑に切り合うが本址は明瞭に検出できた。規模・形状：122cm×96cmの隅丸長方形プランを呈し深さは52cmを測る。覆土：灰黄褐色土を主体とする。覆土中位に拳大から人頭大の円礫が多出している。遺物出土状況：覆土中位で鉄製の刀子(112)が出土した。帰属時期：切合い関係や検出状況・主軸方向から中世2期と判断した。SK2309・2310と主軸方向を一致させている。

SK2307(II群B類4種) 位置：北部II東 図版89

検出：I C層上面で灰黄褐色土が落ち込む。SK2308に切られる。規模・形状：225cm×205cmの楕円形プランを呈し、深さは41cmを測る。覆土：灰黄褐色土を主体とし、炭塊が混じる。覆土中・下位に拳大から人頭大の礫が多出しており、その出土状態は坑外西側から本址が埋め戻されたことを示している。帰属時

期：検出状況や主軸方向の一致から中世2期と判断した。SD61・SK2272などと主軸方向を一致させている。

SK2347(I群B類3種) 位置：北部II東 図版90

検出：IC層下位からIIA層上面で灰黄褐色土が落ち込む。SK2345・2346・2348を切る。本址の覆土中には炭粒が多く含まれることから切合いは容易に確定された。規模・形状：160cm×110cmの隅丸長方形プランを呈し、深さは45cmを測る。北西寄りの坑底は70cm×60cmの範囲で周囲より10cm高く掘り残されていた。覆土：炭粒を多含する灰黄褐色土を主体としている。坑内中央の東西方向に炭化した板材が渡され、その南側では覆土中に拳大の礫が密集して出土している。このような状況から、本来は墓として掘られたが、その後、仕切板を中央に渡して北と南に分割し、別々に土坑を使用したと判断される。焼痕は見られないものの炭化材の出土は坑内で火の焚かれたことを示している。帰属時期：切合い関係や主軸方向から中世1期と判断した。SK2317・2330と主軸を合せている。

SK2417(I群B類3種) 位置：北部II東 図版90

検出：IC層下位からIIA層上面でオリブ灰色土が落ち込む。SK2416・2418を切る。本址の覆土に青灰色粘土が含まれることを手掛りに切合いを確定した。規模・形状：164cm×121cmの隅丸長方形プランを呈し深さは34cmを測る。覆土：灰色土を主体とし青灰色土粒・炭粒が混じる。坑底直上に拳大から人頭大の礫が多出した。帰属時期：中世段階ではあるが詳細は不明である。

SK2433(I群B類5種) 位置：北部II東 図版90

検出：IC層上面でオリブ灰色土が落ち込む。IC層下位からIIA層上面で検出したSK2435・2438・2439を切り、SK2432に切られる。規模・形状：検出面では343cm×235cmの隅丸長方形プランであるが、底面では215cm×225cmの隅丸方形プランで、壁の大幅な崩落が想定される。深さは75cmを測る。覆土：灰色土を主体とし鶏卵大以下の礫が混じる。坑底直上に拳大から人頭大の円礫が密集して出土した。遺物出土状況：SK2435から出土した大窯期皿はその出土位置から本址に帰属するものであろう。帰属時期：出土遺物の様相から中世2期に比定される。隣接するSK2434は本址と同様な規模・形状を有している。

SK2446(I群B類4種) 位置：北部II東 図版90

検出：IC層下位からIIA層上面でオリブ灰色土が落ち込む。規模・形状：195cm×171cmの隅丸長方形プランを呈し深さは37cmを測る。覆土：灰オリブ色土を主体とし炭・焼土粒が混じる。覆土下位に人頭大の礫が出土している。遺物出土状況：覆土中で青磁碗片(21)が検出された。帰属時期：出土遺物の様相や検出状況から中世1期に比定される。

SK2447(II群A類3種) 位置：北部II東 図版90

検出：IC層下位からIIA層上面でオリブ灰色土が落ち込む。規模・形状：106cm×100cmの隅丸方形プランを呈し深さは17cmを測る。覆土：オリブ灰色土を主体とし礫が混じる。覆土中に人頭大の礫が散点している。帰属時期：隣接するSK2446と同様の検出状況を示すことから中世1期に比定した。

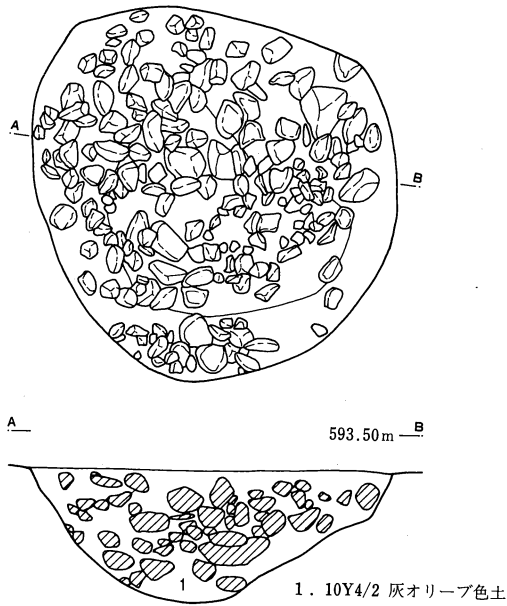
SK2461(II群B類3種) 位置：北部II東 図版91

検出：IC層下位からIIA層上面でオリブ灰色土が落ち込む。SK2460を切る。規模・形状：153cm×116cmの楕円形プランを呈し深さは43cmを測る。覆土：オリブ灰色土を主体とし青灰色土粘土塊が混じる。覆土中・下位に拳大から人頭大の礫が密集して出土し、礫間に炭塊が入っていた。帰属時期：検出状況から中世1期と判断した。

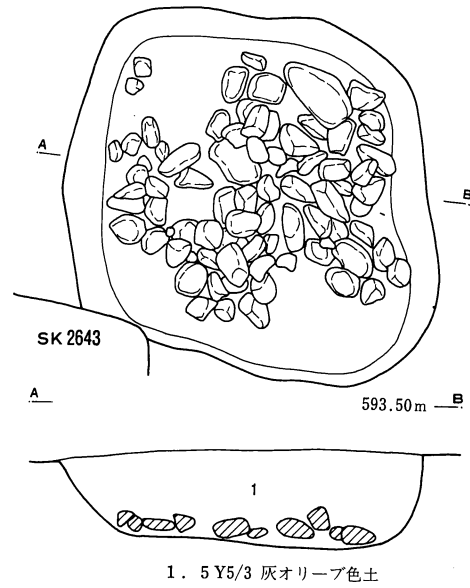
SK2462(II群A類4種) 位置：北部II東 図版91

検出：IC層下位からIIA層上面でオリブ灰色土が落ち込む。SK2461と同様の検出状況にあった。規模・形状：198cm×191cmの楕円形プランを呈し深さは69cmを測る。断面は楕円形をしている。覆土：オリ

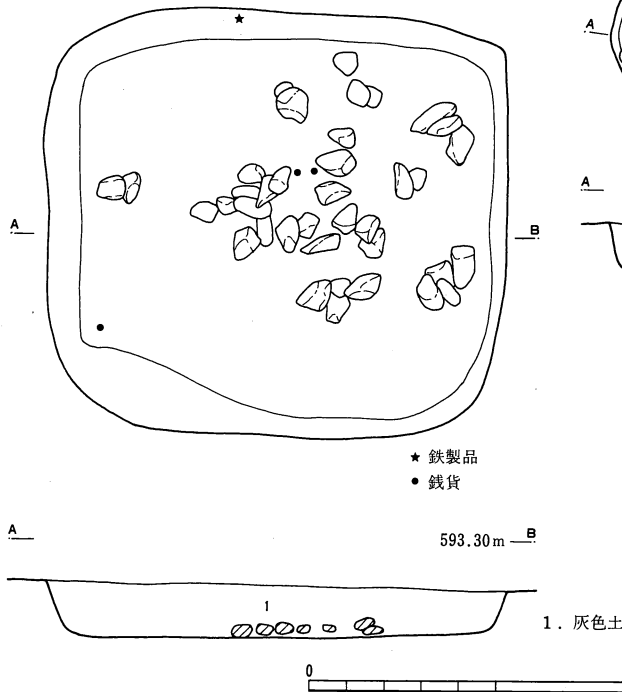
SK 2462



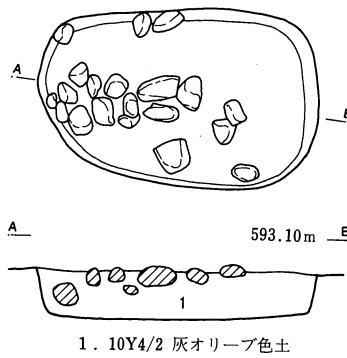
SK 2464



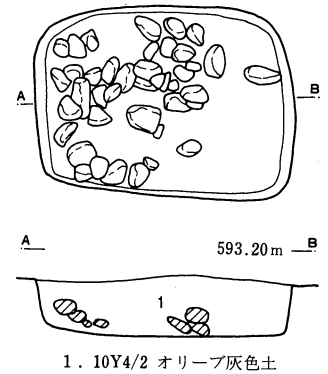
SK 2637



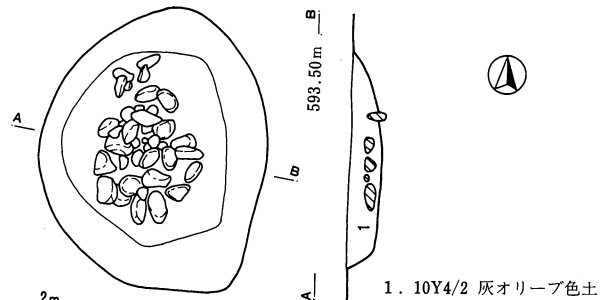
SK 2613



SK 2649



SK 2493



第179図 中世土坑実測図(5)

ーブ灰色土を主体とし、覆土中で拳大から人頭大の礫が密集して出土する。礫間には焼土塊が混じり、被熱によって破損した礫も見られる。帰属時期：検出状況や主軸方向から中世1期と判断した。

SK2464 (I群A類4種)

位置：北部II東

図版91

検出：I C層下位からII A層上面でオリブ灰色土が落ち込む。I C層上面で検出されたSK2463に切れ、SK2465～2468を切る。規模・形状：200cm×195cmの隅丸方形プランを呈し、深さは50cmを測る。覆土：灰色土を主体とする。覆土下位に拳大から人頭大の礫が多出している。礫間には焼土・灰粒が入り込む。帰属時期：SK2480と同様の検出状況で主軸方向も一致していることから中世1期と判断した。

SK2481(I群A類2種) 位置：北部II東 図版91

検出：I C層下位からII A層上面で灰オリーブ色土が落ち込む。SK2480を切る。規模・形状：70cm×70cmの隅丸方形プランを呈し深さは40cmを測る。覆土：灰色土を主体とする。覆土中位に人頭大の礫が多出した。帰属時期：SK2480より新しいが、SK2467と検出状況が同じであることから中世1期と判断した。近接するSK2484・2485・2486・2492とはプラン・覆土とも類似し、ほぼ直線上に配列している。

SK2482(II群A類3種) 位置：北部II東 図版91

検出：I C層中でオリーブ灰色土が落ち込む。I C層下位からII A層上面で検出したSK2480を切る。規模・形状：径30cmの円形プランを呈し深さは38cmを測る。覆土：2分層される。上層中には拳大から人頭大の礫が含まれる。下層はより黄色味が強い土であった。帰属時期：SK2480より新しくSK2481と同様に中世1期と判断した。

SK2493(I群B類3種) 位置：北部II東 図版91

検出：I C層中でオリーブ灰色土が落ち込む。規模・形状：150cm×125cmの楕円形プランで深さは25cmを測る。覆土：灰色土を主体とする。覆土中に拳大から幼児頭大の礫が多出している。帰属時期：SK2467・2496と同様なプラン覆土を有することから中世1期と判断した。

SK2613(I群C類3種) 位置：北部II東 図版94

検出：I C層上面でオリーブ灰色土が落ち込む。SK2614を切る。規模・形状：148cm×95cmの隅丸長方形プランを呈し深さは28cmを測る。覆土：灰色土を主体とし、覆土中・上位に拳大の礫が多出している。帰属時期：SK2614より新しいがSK2637・2643と検出状況や主軸が一致するため中世1期と判断した。

SK2637(I群A類4種) 位置：北部II東 図版93

検出：I C層上面でオリーブ灰色土が落ち込む。規模・形状：245cm×225cmの隅丸方形プランを呈し深さは30cmを測る。覆土：灰色土を主体とする。覆土下位で拳大から幼児頭大の礫がやや散在的に出土している。遺物出土状況：覆土中で古瀬戸壺片のほか、棒状鉄製品・銭貨3点が出土した。帰属時期：出土遺物の様相から中世1期に比定される。

SK2649(I群B類3種) 位置：北部II東 図版94

検出：I C層：上面でオリーブ灰色土が落ち込む。SK2650を切る。規模・形状：135cm×130cmの隅丸方形プランを呈し深さは30cmを測る。覆土：灰色土を主体とする。覆土中・下位に拳大の礫が多出している。帰属時期：SK2613と同様に遺構配置から中世1期と判断した。

(3) 完形・半完形状態の土器・陶磁器、金属製品、石製品を伴う土坑 第180・181図

土器・陶磁器は破片での出土が大半であるが、そのなかでSK1800では常滑系甕2個体と捏鉢がほぼ完形状態で出土しており、本遺跡では唯一、蔵骨器をもった遺構と考えられる。鉄製品では刀子などの刃物類と釘・棒状品などの出土が目立ち、墓の副葬品の性格や木棺など墓域の様相を反映していると考えられる。銭貨ではSK2534で北宋銭が12枚、SK2778で6枚の銭貨が出土したほか、19基の土坑で銭貨が出土しており、多くは「六文銭・六渡銭」の埋納といった葬送儀礼と係った遺物と考えられる。

SK1783(I群A類4種) 位置：北部II西 図版84

検出：I C層上面でオリーブ灰色土が落ち込む。SK1785に切られ、SK1782を切る。規模・形状：一辺184cmの隅丸方形プランを呈し深さは39cmを測る。覆土：2分層される。上層は灰オリーブ色土を主体とし、下層は青灰色を呈していた。坑底南西よりに焼土・灰の堆積が見られ、底面中央には50cm×40cmの範囲に厚さ2cmにわたり腐敗途中の植物繊維が出土した。植物繊維は中島豊志の鑑定によると、ギシギシ、水

ゴケ、カヤツリクサ科の植物、甲虫片などが見られ、草本類の茎が圧着した状態であった。帰属時期：覆土の特徴や周辺の遺構分布から中世1期と判断した。所見：腐敗途中の植物繊維が出土したのは特筆される。特に編まれた状態ではなかったが、圧着した状態から敷物とも考えられる。また、本址の用途については馬屋(午屋)・飼料溜めなども考えられる。

SK1800(II群B類4種) 位置：北部II西 図版84、PL46

検出：I C層上面で拳大の角礫を主体とした集石が検出され、その下に青灰色土の落ち込む土坑が存在している。規模・形状：土坑は193cm×164cmの楕円形プランを呈し深さは55cmを測る。断面は播鉢形であった。検出面で確認された集石は土坑より広い範囲に分布している。(上部集石)。覆土：青灰色土を主体としわずかに炭粒を混じえる。覆土中位にも拳大から人頭大の礫の密集する集石が見られる(下部集石)。上部集石の南北方向の断面では集石の中央部が凹んでおり、礫が積まれた後に埋設された甕が土圧で押し潰されて集石が沈下したと考えられる。遺物出土状況：下部集石中に常滑系甕(31)が、上部集石中に捏鉢(28・29)と常滑系甕(30)が潰れた状態で出土している。出土位置から30は坑内東のやや上方に、31が坑内西のやや下方に埋設されていたと考えられる。帰属時期：出土遺物の様相から中世1期に比定される。所見：同一坑内で蔵骨器を埋設し礫を積むという行為が2回繰返された特異な例であり、蔵骨器の埋設後は積石によるマウンドが築かれていたと考えられる。

SK1975(I群2種) 位置：北部II西 図版86

検出：I C層上面で灰黄褐色土が落ち込む。南側をSK1974に切られる。規模・形状：短軸が78cmの隅丸方形プランと推定され、深さは31cmを測る。覆土：灰色土を主体とし、わずかに炭粒が混じる。遺物出土状況：坑内南寄り、底面より7cm浮いて古瀬戸天目茶碗(1)が正位で出土した。天目茶碗の内部には漆の皮膜が付着し木質部が朽ちた漆皿の残片と判断される。帰属時期：出土遺物の様相から中世2期に比定される。

SK2134(I群C類2種) 位置：北部II東 図版87

検出：I C層上面でオリーブ灰色土が落ち込む。SK2133に切られ、SK2132を切る。切り合いは土層断面の観察から確定した。規模・形状：83cm×53cmの隅丸長方形プランを呈し深さは26cmを測る。坑底西側はさらに掘り凹められ、深さは39cmであった。覆土：灰色土を主体とする。遺物出土状況：覆土中で鉄製品の斧(118)と板状品が出土している。帰属時期：遺構配置や覆土の特徴からSK2151と同時期と考えられる。

SK2150(I群C類3種) 位置：北部II東 図版87

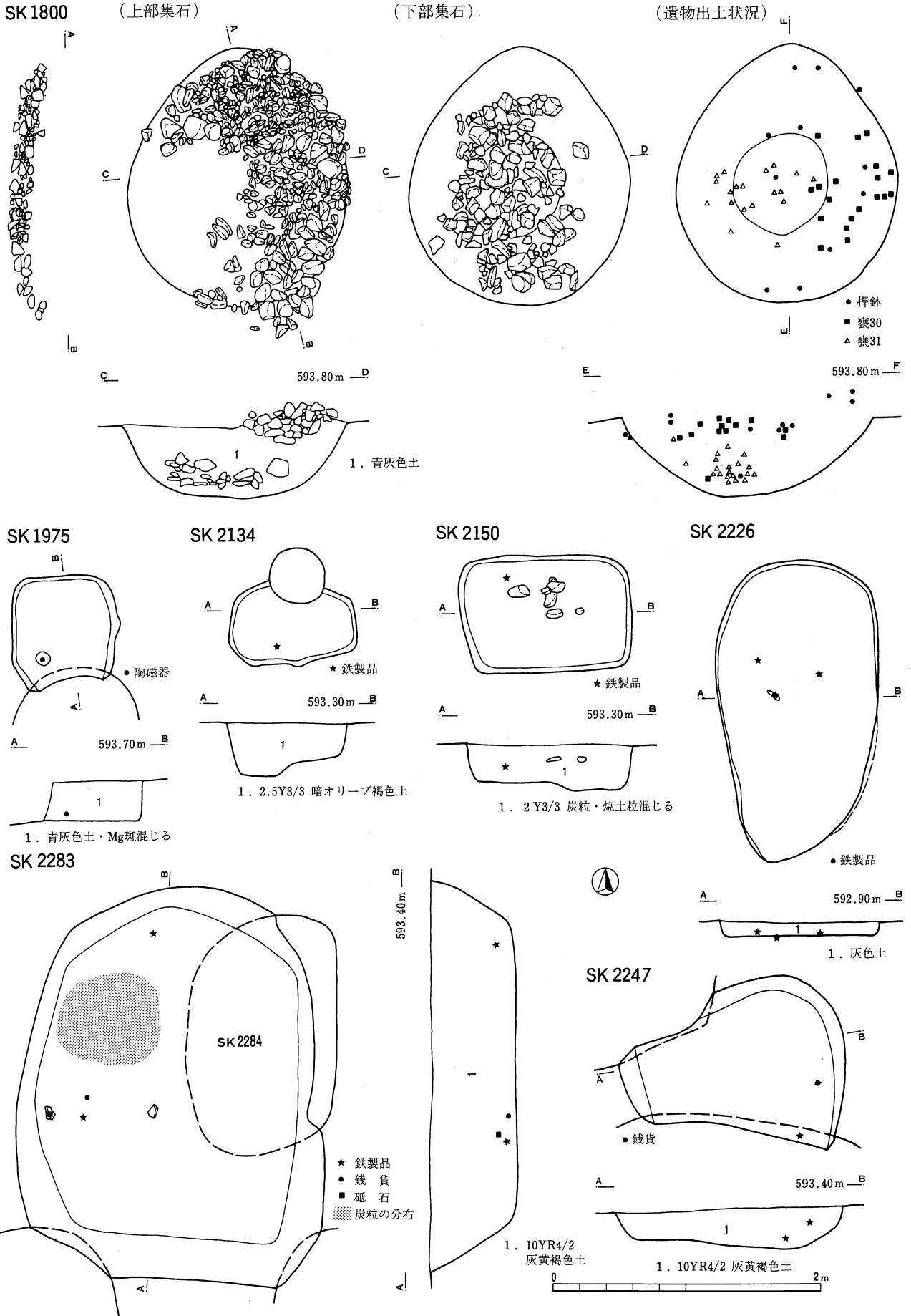
検出：I C層上面でオリーブ灰色土が落ち込む。SK2149を切る。切り合いは土層断面の観察から確定させた。規模・形状：137cm×86cmの隅丸長方形プランを呈し深さは28cmを測る。坑底東側はさらに掘り凹められて深さ33cmであった。覆土：灰色土を主体とし焼土・炭粒が混じる。覆土上位で拳大の礫が5個見られた。遺物出土状況：覆土中位で鉄製の刀子が出土した。帰属時期：遺構配置や覆土の状況からSK2134と同様にSK2151と併存したと判断される。

SK2226(II群C類4種) 位置：北部II東 図版89

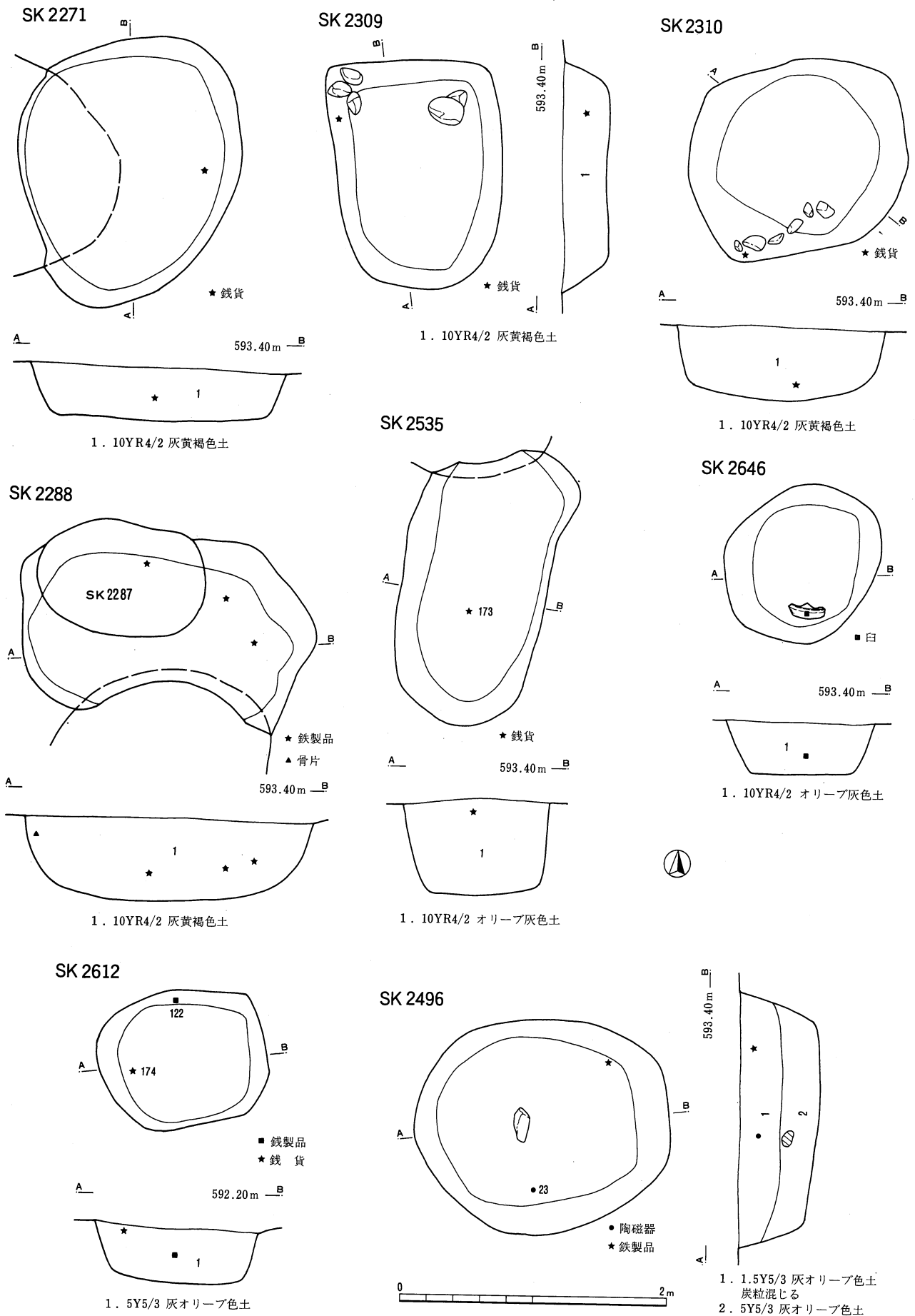
検出：I C層下位からII A層で灰色土が落ち込む。規模・形状：215cm×123cmの楕円形プランを呈し深さは10cmであった。覆土：灰色土を主体とする。遺物出土状況：坑底中央で鉄製の釘(141)・棒状品・不明製品が出土している。帰属時期：検出状況や主軸方向から中世1期と考えられるが、根拠は弱い。所見：土坑のプランや釘の出土から本址は木棺墓であったと思われる。

SK2247(II群3種) 位置：北部II東 図版89

検出：I C層上面で灰黄褐色土が落ち込む。SK2244・2250に切られる。切り合いは土層断面の観察によった。規模・形状：残存する範囲で最大165cmを測り、楕円形プランの土坑と推定される。覆土：灰黄



第180図 中世土坑実測図(6)



第181図 中世土坑実測図(7)

褐色土を主体とする。遺物出土状況：坑内東寄りで北宋銭が2枚(154)出土している。帰属時期：覆土の特徴や主軸方向から中世1期と考えられるが根拠は弱い。

SK2271(II群) 位置：北部II東 図版89

検出：I C層上面で灰黄褐色土が落ち込む。SK2272に切られ、SK2270・2273・2274を切る。切り合いは土層断面の観察から確定させた。規模・形状：202cm×170cmの楕円形プランを呈し深さは45cmを測る。覆土：灰黄褐色土を主体とする。遺物出土状況：坑内東寄りで北宋銭が1枚出土した。帰属時期：SK2270より新しく位置付けられることから中世2期と判断した。

SK2283(I群B類5種) 位置：北部II東 図版90

検出：I C層上面で灰黄褐色土が落ち込む。SK2284に切られSK2269・2279・2280・2292・2294を切る。切り合いは土層断面の観察から確定させた。規模・形状：検出面上では290cm×226cmの規模を有するが、底面は240cm×190cmの隅丸長方形プランを呈しており、大幅な壁の崩落が想定される。深さは66cmを測る。覆土：灰黄褐色土を主体とする。坑底西寄りに炭粒が分布していた。遺物出土状況：坑底西寄りで鉄製の釘・北宋銭・砥石(22)が、また、坑底北寄りでも釘が出土した。帰属時期：SK2299・2270と同様な覆土であることから中世1期と判断した。

SK2288(I群C類4種) 位置：北部II東 図版90

検出：I C層上面で灰黄褐色土が落ち込む。SK2286・2287に切られ、I C層下位からII A層上面で検出したSK2293・2311を切る。切合いは土層断面の観察から確定させた。規模・形状：221cm×144cmの隅丸長方形プランを呈し深さは64cmを測る。覆土：灰黄褐色土を主体とし焼土・炭粒が混じる。遺物出土状況：覆土上位で焼骨の小片が、また、覆土下位で鉄製の燧鉄(127)・刀子が出土している。帰属時期：主軸方向や覆土の状況がSK2299と同様であることから中世1期と判断した。

SK2309(I群B類4種) 位置：北部II東 図版90

検出：I C層上面で灰黄褐色土が落ち込む。I C層下位からII A層上面で検出したSK2311・2313を切っている。規模・形状：170cm×123cmの隅丸長方形プランを呈し深さは35cmを測る。覆土：灰色土を主体とする。遺物出土状況：坑内西寄りで北宋銭が1枚出土した。帰属時期：検出状況や切合い関係から中世2期と判断した。隣接するSK2307・2310などと規則的な遺構配置を取る。

SK2310(I群A類3種) 位置：北部II東 図版90

検出：I C層上面で灰黄褐色土が落ち込む。I C層下位からII A層上面で検出したSK2325～2327を切っている。規模・形状：161cm×145cmの隅丸長方形プランを呈し深さは35cmを測る。覆土：灰色土を主体とする。遺物出土状況：坑内南西隅よりで銭貨1枚出土した。帰属時期：SK2309と同様に中世2期と判断される。

SK2496(II群B類4種) 位置：北部II東 図版91

検出：I C層下位からII A層上面で灰オリーブ色土が落ち込む。規模・形状：190cm×160cmの楕円形プランを呈し深さは65cmを測る。覆土：2分層される。上・下層とも基調は同じであるが、上層中には炭粒が混じる。遺物出土状況：覆土上位で青磁碗片(23)、棒状鉄製品が出土した。帰属時期：出土遺物の様相や検出状況から中世1期に比定される。

SK2535(II群C類4種) 位置：北部II東 図版91

検出：I C層上面でオリーブ灰色土が落ち込む。SK2536に切られる。規模・形状：210cm×110cmの楕円形プランを呈し深さは70cmを測る。覆土：青灰色土を主体とし、炭粒が混じる。遺物出土状況：覆土中で鉄製の釘・環状製品、北宋銭(173)が出土している。帰属時期：覆土の特徴や主軸方向の一致からSK2444・2496と同時期と判断した。

SK2612 (I群B類3種)

位置：北部II東

図版94

検出：I C層上面でオリブ灰色土が落ち込む。規模・形状：125cm×102cmの隅長丸方形プランを呈し深さは42cmを測る。覆土：灰色土を主体とし拳大以下の礫が混じる。遺物出土状況：覆土中から鉄製品の楔(122)と北宋銭が3枚出土した。帰属時期：主軸方向や埋土の特徴がSK2614・2637と類似することから中世1期と判断した。

SK2646 (I群A類3種)

位置：北部II東

図版93

検出：I C層上面で灰黄褐色土が落ち込む。規模・形状：120cm×115cmの隅丸方形プランを呈し深さは40cmを測る。覆土：灰色土を主体とし拳大以下の礫が混じる。遺物出土状況：覆土中から内耳鍋片と石臼片(39)が出土した。なお、この石臼はSK2681出土品と接合関係を有している。帰属時期：出土遺物の様相から中世2期に比定される。

(4) 排水にかかわる施設

第182図

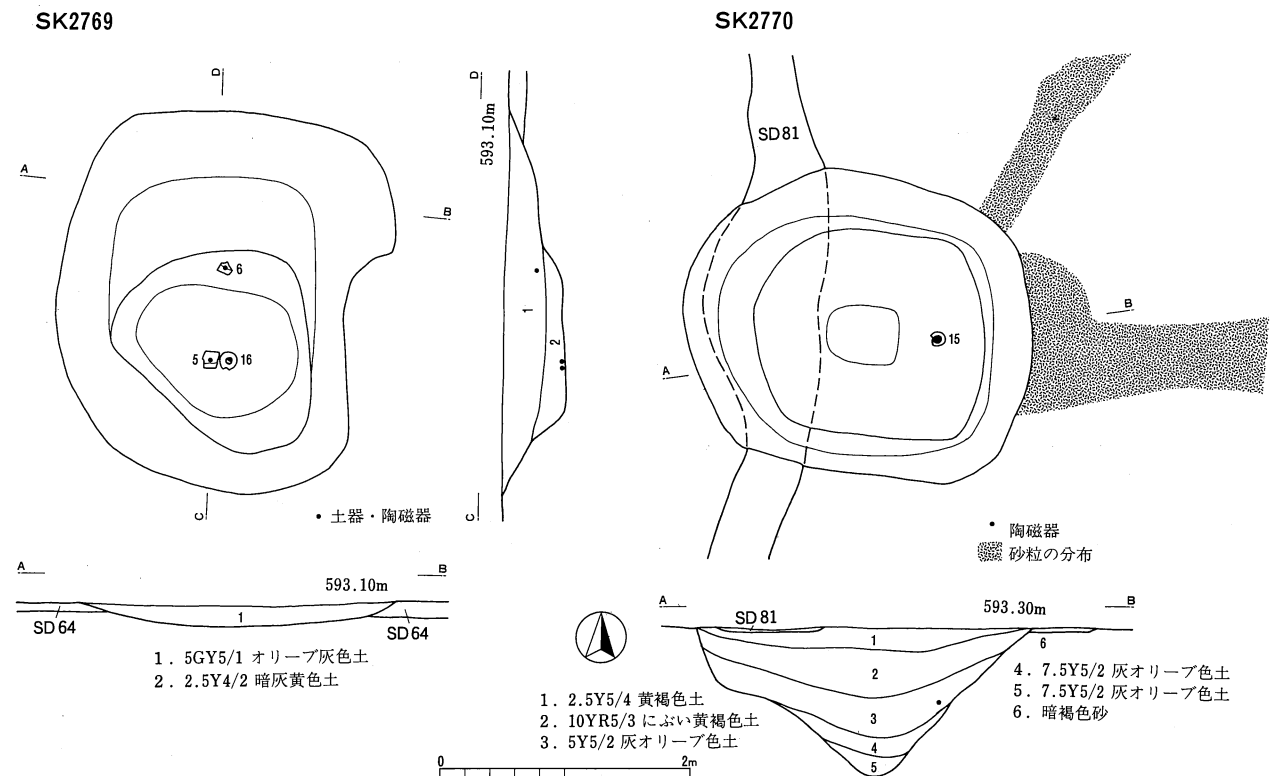
北端地区で検出したSK2769・2770がこれに該当する。いずれも深い播鉢形の断面を有し、地山の砂礫層中まで掘り込んでいる。土坑の覆土は自然埋没の様相を呈し、分層された各層内でも級化作用が観察され、流水によって運ばれてきた土砂と判断される。また、土坑は溝と接続しており溝には土坑に向かって水の流れた痕跡が窺えることから、雨水を集め地中に浸透させることを目的として掘られた施設と考えられる。

SK2769 (II群B類5種)

位置：北端

図版97、PL48

検出：I C層上面で青灰色土が落ち込む。小形の円礫が土坑の縁に沿って円環状に分布していた。SD64・65と接続している。SL18を切る。規模・形状：300cm×228cmの楕円形プランで断面は播鉢形を呈して



第182図 SK2769・2770実測図

いる。深さは100cmを測り地山III層(砂礫層)を50cm位掘り込んでいる。覆土：2分層される。上層はシルト質で下層中には砂礫が多く含まれる。遺物出土状況：上層中で内耳鍋片(6)、下層中で内耳鍋片(5)と大窯期稜皿(15)が出土している。帰属時期：出土遺物の様相から中世2期に比定される。SK2770と隣接するが検出状況や遺物の焼成年代から本址の方が後出的と判断される。所見：SK2769とSK2770は双方とも同一の機能を果たした施設で、SK2770から本址へ直接、作り替えられたものであろう。

SK2770(II群B類5種) 位置：北端I 図版97

検出：I C層上面でオリーブ灰色土が落ち込む。検出面ではマンガン・水酸化鉄の斑紋が目立っていた。周囲に2条の砂流の帯状の集積が見られた。規模・形状：275cm×240cmの楕円形プランで断面は播鉢形を呈している。深さは115cmを測る。検出面から深さ40cm位の壁に緩斜面が見られる。土坑は地山砂礫層を80cm位掘り込んでいる。覆土：5分層される。各分層内で級化作用が観察される。遺物出土状況：覆土中(3層)で内耳鍋片(3)、大窯期丸皿(16)が出土した。帰属時期：出土遺物の様相から中世2期に比定される。

7 水田址

概観

本遺跡内では南部I・II地区東側、中部I・II地区東側、北部II地区西側、北端I地区、北端II地区の梅沢以北の6か所で水田址もしくは水田土壌の分布が認められた。小規模で全体像の明らかにされない北部II地区と梅沢以北の部分を除き、広範に水田址が展開する地点は地形的には小凹地に当たり、土壌では地山III層の標高が低くその上にII B・II A・I D・I C層が厚く堆積したところに当たっている。これとは逆に同じI C層上面でも含礫泥層に該当し砂礫の混入が多い部分では水田址や畠址は認められず、耕作地には適していなかったと考えられる。こうした状況からI C層は遺跡全面を覆い尽くしているものの、その被覆はまだ不安定で、深耕の可能な安定した生産力を得られる水田址が営める土地は古代よりは拡大しているが、遺跡全面には及ばなかったと判断される。遺跡全面が耕地化されるのは次のI B層・I A層の堆積を待たなければならなかった。帰属する時期の判断は遺物の出土がほとんど認められず、また、ほかの遺構との切合いから考察できる部分も限られており、細かな時期の検討は困難である。I B層下部で検出可能であったSL15・21・23は近世に下るかもしれない。SL12・15・21・23では現条里景観とその位置が一致する部分も見られた。それは「大アゼ」に当たる太い畦畔に限られ、その中の水田1枚ごとの区画は現景観に比べかなり小規模である。

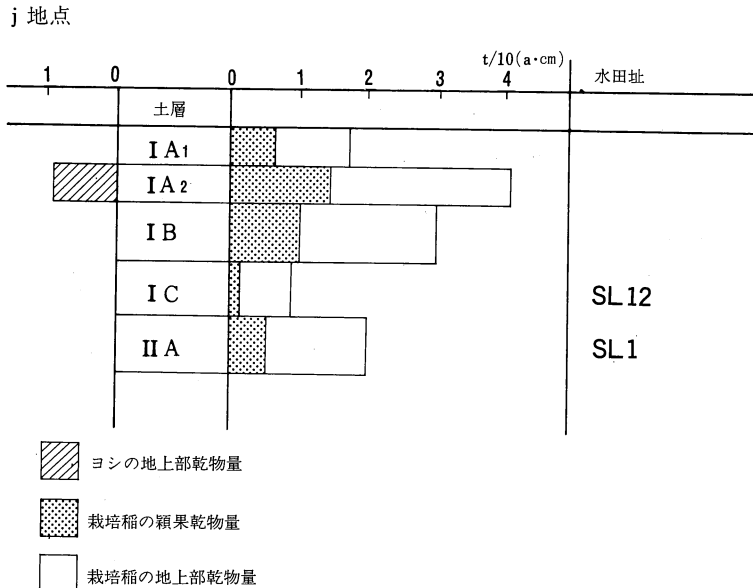
SL11 位置：中部II 図版73

検出：I C層上面で灰白色粘土粒が多く、マンガンの斑紋が薄い土壌が帯状に分布し、SD57・58と並走しないしは直交する方向に伸びていた。なお、検出面はマンガン斑の散点する溶脱層に当たり、灰色低地水田土壌化が進行している。中部地区を中心にプラントオパール分析を藤原宏志氏に依頼したが、その結果本址に最も近い8地点では、I C層中に12,619個/ccと多量のプラントオパールが検出されている(付表17)。アゼ：検出された4本の帯状の部分(ℓ1～ℓ4)は構築物ではなく田面下と畦畔下との水田土壌化作用の相違によって形成されたいわば「畦畔の影」とされるようなものである。規模・形状：田面の規模などは不明である。検出状況はSL12と同様であり、本来は同一の水田であった可能性もある。位置関係からSD57・58は本址の用排水路と考えられる。帰属時期：I C層上面で検出されI B層に覆われていることから中世と判断したが、詳細は不明である。

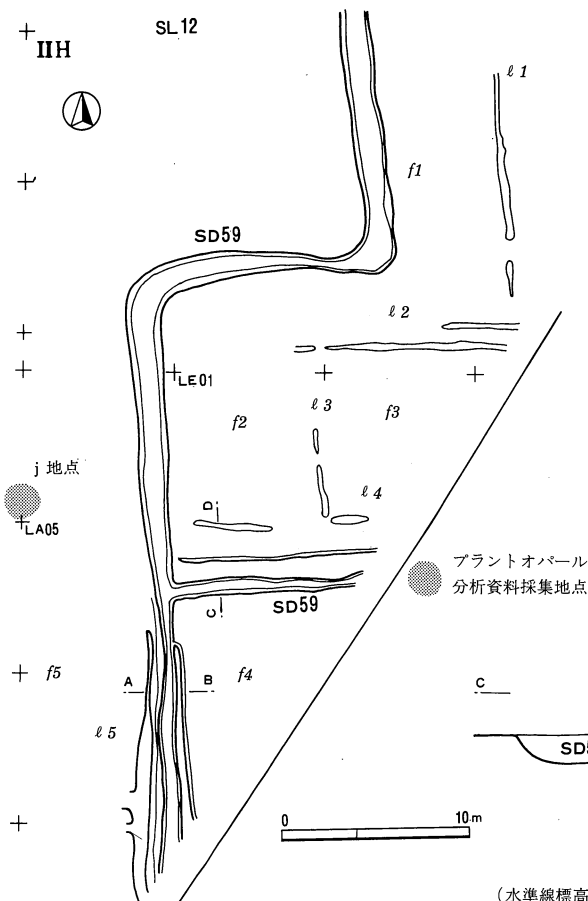
SL12 位置：中部III 図版74、第183・184図、PL49

検出：I C層上面でSD59に沿うように灰白色粘土粒が多く、水酸化鉄・マンガンの斑紋が薄い土壤が帯状に分布していた。また、アゼ：ℓ 4 南側でSD59と平行するように、そして、田面 f 4北縁ではSD59に沿って高さ10cmほどI C層を掘り残した部分が続いている。アゼ：ℓ 5の形状からSD59西側にも引き続き水田址が広がっていたと考えられるが、掘立柱建物址などと重複し検出に至らなかった。あわせて行った

中部地区のプラントオパール分析によれば、本址に最も近い j 地点では5,664個/ccとやや少ないものの h 地点では44,656個/cc、i 地点で34,650個/ccをはじめ、d・e・f・g 地点で10,000個/ccを越えるプラントオパールが検出され(附表17)、本址西側でも広範囲かつ連続的に水田が営まれていたと考えられる。規模・形状：田面とアゼの計測値を第3表に示した。アゼはクランク状に屈曲するSD59に沿って規格性を持って配されている。アゼの幅・長さ・走向と田面の形状・面積を第184図に示したが、アゼの幅は遺構本来の正確な数値ではない。田面の標高は f 5が一番高く、f 2～f 4はほぼ同標高で f 1がやや低い。田面への水掛りは直接SD59から導水されたと思われるが、f 1から東



第183図 SL1・12プラントオパール定量分析結果(抄)



SL12 田面

	f 1	f 2	f 3	f 4	f 5
形状	(長方形)	長方形	(長方形)	(長方形)	不明
面積	—	73.80㎡	89.76㎡	—	—
標高	594.368m	594.540m	594.524m	594.540m	594.650m
備考				籾大の礫散布	

SL12 アゼ

	ℓ 1	ℓ 2	ℓ 3	ℓ 4	ℓ 5
幅	0.5m	0.35m	0.3m	0.3m	0.3m
長さ	11.5m	4.0m 11.6m	9.0m (465m)	8.0m(4.0m)+ 5.5m以上	10.5m(8.5m)+ 5.0m以上
走向方向	N6°W	N90°	N7°W	N87°E	N87°E
備考		二条(0.75m間隔)		2田面に及ぶ	2田面に及ぶ

第3表 SL12、田面・アゼ計測表

(水準線標高594.80m)

第184図 SL12実測図

方へ、f2からf3へはアゼが途中でとぎれていることから「畔越し」の灌漑と判断される。帰属時期：I C層上面で検出されI B層に覆われていることから中世と判断したが詳細は不明である。本址西側に展開する掘立柱建物址群はI C層上面ではマンガンや水酸化鉄の斑紋が著しく検出が困難であったことから、建物址が廃絶されたあと付近一帯が水田化された可能性がある。

SL13 位置：北部II 図版81

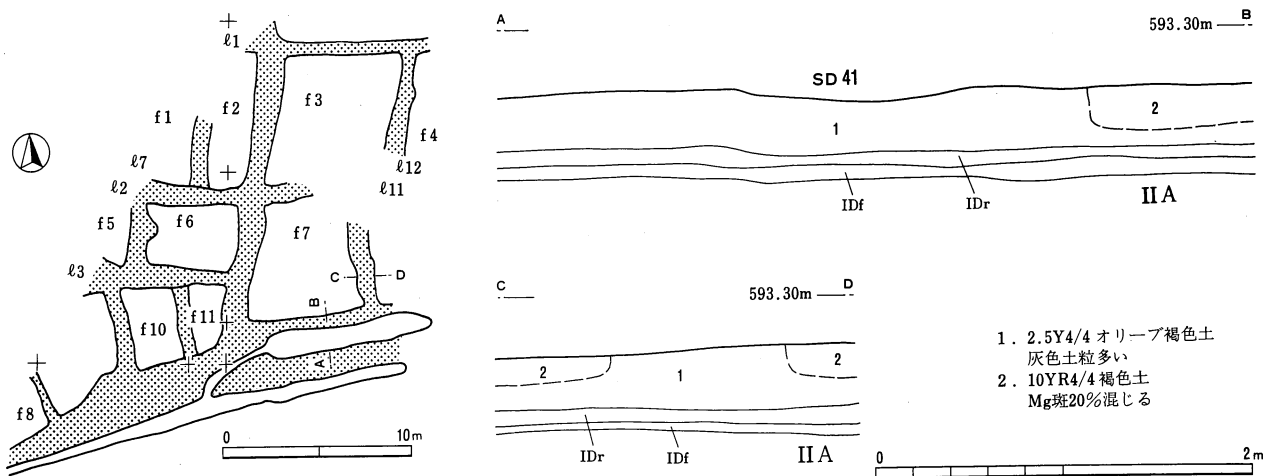
検出：I C層上面で灰白色土粒が集中し、マンガン・水酸化鉄の斑紋が薄い土壌が分布していたことからSL11・12と同様に水田址と判断した。規模・形状：带状に続く土壌は長さ3.6m・幅90~135cmを測り、アゼを示すものと考えられる。主軸方向を久保川と合せている。帰属時期：検出状況から中世と判断したが詳細は明らかではない。

SL14 位置：北部II 図版68

検出：I C層上面で灰白色土の高まりが带状に延びていた。土層断面ではI C層上面で10cm位の高まりがI B層に覆われた状態で残されていた。アゼ：長さ14cm・幅60~95cmで直線状に延びる。アゼ部分ではマンガン・水酸化鉄の斑紋は薄い。田面の規模などは不明である。帰属時期：検出状況から中世と判断したが詳細は不明である。

SL15 位置：北端I 図版95、第185図、PL49

検出：I B層下部もしくはI C層上面でマンガンの斑紋が薄く灰色土粒の多く混じる土壌が格子状を成して広がるため水田址と判断した。土層断面ではこうした現象が検出面下10~15cmにわたって見られた。検出面付近はマンガン斑の散点する溶脱層で、その下15cm位からは疑似グライ化の進んだ集積層である。全体に付近の土壌には粘土分が多く、灰色低地水田土壌化が進行している。アゼ：12条のアゼが検出され、各アゼの規模と走向を第4表に示した。但しアゼ幅は遺構本来の正確な数値ではない。北半部では東西・南北方向に主軸を取るのに対し、南半部では堂沢・SD62・63に主軸を合せているため田面の形状も不整形である。田面：推定面積と形状を第5表に示す。f3・f7のように大形で方形プランの田面と小形のものに分かれる。正確な耕作面はつかめなかったが田面の標高はf8が最も高く、逆にf3が最も低く、その比高差は15cmであった。本位の西側に並走するSD62・63は本址への用水路と判断される。帰属時期：検出状況から中世2期ないしは近世と判断される。重複するST83・84の柱穴が水田土壌化されていることから、本址より先行するものであろう。



第185図 SL15実測図

アゼ	ℓ1	ℓ2	ℓ3	ℓ4	ℓ5	ℓ6	ℓ7	ℓ8	ℓ9	ℓ10	ℓ11	ℓ12
幅	0.85~1.45 m	0.75~1.20 m	0.65~1.80 m	0.9~2.60 m	0.4m	0.9m	1.05m	0.7m	0.95m	0.85~1.40 m	0.7~1.10 m	0.5~1.05 m
走向	N88°E	N87°W	N86°W	N73°E	N28°W	N12°W	N4°E	N10°W	N7°E	N7°E	N10°W	N10°E

第4表 SL15 アゼの幅・走向表

田面	f1	f2	f3	f4	f5	f6	f7	f8	f9	f10	f11
形状	長方形か	長方形か	正方形	不明	長方形か	長方形	台形	不明	不整四辺形	長方形	不整形
面積	—	15.84m ²	41.67m ²	—	—	14.65m ²	32.76m ²	—	—	13.32m ²	5.61m ²

第5表 SL15 田面の形状・面積表

SL16 位置：北端 I 図版97・99

検出：I C層上面でマンガンの斑紋が薄く灰色土粒の多い土壌が帯状に延び、長方形の区画を呈するため水田址と判断した。検出面の土壌の状態はSL15と同様であったが、本址をはじめSL17・18のほうが相対的により下位の検出であった。ST88に切られる。ST105とも重複するが検出状況から建物址のほうが新しいと判断した。SL18のアゼ上でも本址のアゼは確認できた。アゼ：各アゼの幅と走向を第6表に示す。但し、数値は遺構本来の正確な計測値ではない。東西方向に延びるアゼを北からℓ1・ℓ2とし、南北方向に延びるものを西からℓ3・ℓ4とした。東西方向のアゼは南北方向に比べかなり幅広い。ℓ3の北寄りにアゼが屈曲する部分が見られここに「水口」が想定される。田面：面積と形状を第7表に示す。SL1

アゼ	ℓ1	ℓ2	ℓ3	ℓ4
幅	0.85m	0.65~0.95m	0.3m	0.25~0.4m
走向	N90°	N88°E	N0°	N2°W

第6表 SL16 アゼの幅・走向表

8・19などに比べ規模が大きく形も整っている。帰属時期：ST88より古く位置付けられ、古代15期の住居址群より新しいことから、中世1期から中世2期前半までの間と考えられる。

SL17 位置：北端 I 図版99

田面	f1
形状	長方形
面積	110.63m ²

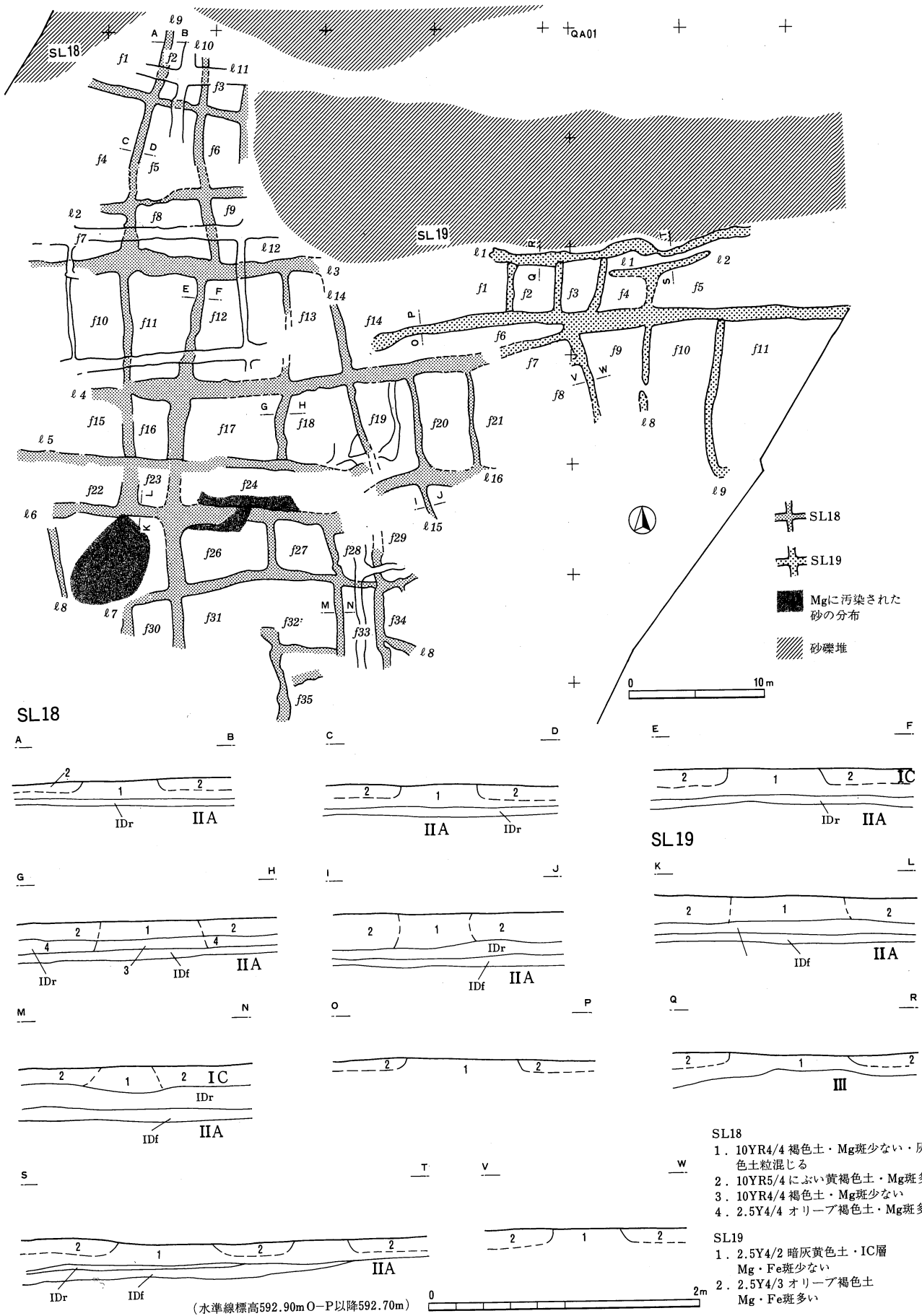
第7表 SL16 田面の形状・面積表

検出：I C層上面でマンガンの斑紋が薄く灰色土粒の多く混じる土壌が十字形に分布しているため水田址のアゼと判断した。本址はSL18上で検出された。SL18のアゼより灰白色が濃い土壌が帯状に分布することから切合いを決定した。検出面の状況はSL15と同様である。

アゼ：アゼは水田土壌化作用の痕跡を示すもので、必ずしも正確な数値ではないが東西方向に延びる部分では長さ8m・幅65~128cm、南北方向では7.5m・幅80cmを測り、いずれもSL19と同様に主軸が東偏している。帰属時期：検出状況からSL18より新しいが付近に展開する建物群よりは古いと判断した。

SL18 位置：北端 I 図版95~99、第186図

検出：I C層上面で1,072m²にわたりアゼと考えられる灰白色土が帯状に分布し格子状に展開していたことから水田址と認定した。検出面の土壌の状態はSL15と同様である。アゼと認定した部分では粘土粒の混入が多い。灰色ないし青灰色土の落ち込みとして検出されたST85~89・SD65・66ほか多数の土坑に切られている。SD174・175上でもアゼは確認できた。アゼ：16条のアゼが確認され、各アゼの幅と走向を第8表に示した。但し、アゼは水田土壌化作用の痕跡であって遺構本来の正確な数値ではない。アゼの走向は東西方向を意識していると判断されるが南北方向では一様ではなく、特に北側では微地形に影響されてかアゼの主軸方向は東偏している。田面：推定面積と形状を第9表に示す。平均面積は24.5m²であるが、6.5~46.2m²と大小様々で、形状も一律ではない。f24~f26には砂粒の分布が見られることからf22・24が用水路の役割を果たしていたと考えられる。本址に付属する用排水路が見出せないことから、田面への



第186図 SL18・19実測図

アゼ	ℓ 1	ℓ 2	ℓ 3	ℓ 4	ℓ 5	ℓ 6	ℓ 7	ℓ 8
幅	0.65m	0.35~0.70m	0.75~1.40m	0.85~1.60m	0.70m	0.75~1.05m	0.35~0.80m	0.70m
走向	N75°W	N83°E	N83°E N85°E	N85°E	N87°W	N88°W	N80°E N84°W	N85°W
アゼ	ℓ 9	ℓ 10	ℓ 11	ℓ 12	ℓ 13	ℓ 14	ℓ 15	ℓ 16
幅	0.60~1.35m	0.4~1.35m	—	0.35~0.85m	0.55m	0.35~0.70m	0.5m	0.3m
走向	N15°E~N0°	N80°E N10°W N6°E	N8°E	N2°E	N12°W N0°	N14°W	N6°W	N5°W

第8表 SL18 アゼの幅・走向表

	f 1	f 2	f 3	f 4	f 5	f 6	f 7	f 8	f 9	f 10
形状	不明	台形か	長方形	台形か	台形	長方形	長方形か	台形	不明	長方形か
面積	—	—	—	—	24.75㎡	11.47㎡	—	19.12㎡	—	—
田面	f 11	f 12	f 13	f 14	f 15	f 16	f 17	f 18	f 19	f 20
形状	台形	台形	台形	不明	長方形か	長方形	長方形	不整形	長方形	長方形
面積	34.87㎡	48.16㎡	26.60㎡	—	—	11.43㎡	30.76㎡	24.36㎡	25.84㎡	—
田面	f 21	f 22	f 23	f 24	f 25	f 26	f 27	f 28	f 29	f 30
形状	長方形か	長方形	長方形	長方形か	台形	台形	台形	不整形	台形か	長方形か
面積	—	—	6.56㎡	—	46.20㎡	24.96㎡	16.80㎡	—	—	—
田面	f 31	f 32	f 33	f 34	f 35					
形状	長方形か	長方形	長方形か	不整形	不整形					
面積	—	15.84㎡	—	—	—					

第9表 SL18 田面の形状・面積表

「水掛り」は「畔越し」によったと推定され、いわゆる梯子状区画水田と考えられる。地形環境：本址の南側には堂沢が南流し、北側には砂礫堆が東西に延びている。本址はその間の土層の堆積の厚い小凹地状の部分に展開している。I C層上面でこの砂礫堆上面と本址中央部との比高差は40cmに及んでいる。帰属時期：ST85~89より古く位置付けられるため中世1期から中世2期前半までの間と考えられる。SL19と本址はアゼが連続するように延び、田面の規模・形状も類似しているため、一連の水田とも考えられる。

SL19 位置：北端 I 図版98、第186図、PL49

検出：I C層上面で315㎡にわたりアゼと考えられる灰白色土が帯状に延び格子状に展開していたため水田址と判断した。検出面での土壌の状況はSD15と同様である。SB176上でもアゼは確認できた。アゼ部分には粘土粒が多く混じる。アゼ：9条のアゼが確認され第10表に幅と走向を示した。但しアゼは水田土壌化作用の痕跡であって、幅は遺構本来の正確な数値ではない。ℓ 1は北隣する砂礫堆の形状に沿っている。また、ℓ 3は西側で二股に分かれ、一方はSL18 ℓ 4につながる。ℓ 1・ℓ 2間は幅30~80cmの間隔を有し内部には砂粒が多混されるため用排水路(畝畝、けんぼ)が位置していたと考えられる。ℓ 8は途中でとぎれており、そこに「水口」が想定される。こうした状況から本水田への灌漑は「畝畝」と「畔越し」を併用するが、全体的には梯子状区画水田の形態である。田面：形状と推定面積を第11表に示す。規模・形状ともSL18に類似している。地形環境：SL18と同様の環境下にあり、特に北側では砂礫堆のぎりぎりまで水田化しており、標高の高い砂礫堆沿いに「畝畝」を配している。なお、この砂礫堆上では水田土壌は確認されなかった。帰属時期：SL18と同様に中世1期から中世2期前半の間と考えられる。

SL20 位置：北端 I 図版96・98

検出：I C層上面で灰白色を呈した土壌が帯状に延びていたため水田址のアゼと判断した。SL18のアゼ上でも本址は確認できた。SD64に切られている。規模・形状：北側はSD64の両側でコの字状にアゼが見られ(ℓ 1)、南側ではST103の西側にトの字形にアゼが確認された(ℓ 2)。部分的な検出に留まったため全体像は不明であるが、田面の形状はSL18と類似したものであろう。帰属時期：検出状況からはSL18よ

アゼ	ℓ1	ℓ2	ℓ3	ℓ4	ℓ5	ℓ6	ℓ7	ℓ8	ℓ9
幅	0.45~1.10m	0.5m	0.5~1.55m	0.4m	0.45m	0.7m	0.5m	0.45m	0.65m
走向	N86°E	N82°E	N0°	N3°E	N2°E	N17°W	N9°E	N3°E	N8°E

第10表 SL19 アゼの幅・走向表

田面	f1	f2	f3	f4	f5	f6	f7	f8	f9	f10	f11
形状	長方形か	長方形	不整四辺形	不整四辺形	不明	不明	長方形か	長方形か	台形か	長方形か	長方形か
面積	—	10.85m	10.53m	7.92m	—	—	—	—	—	—	—

第11表 SL19 田面の形状・面積表

り新しいが、極近接した時期に営まれたものと考えられる。

SL21 位置：北端II 図版100

検出：I C層上面で青灰色を呈し水酸化鉄の斑紋が薄い土壌が帯状に延びている。土層断面ではI C層上面で15cm位の高まりがI B層に覆われた状態で残されていた。規模・形状：長さ28m・幅40~100cmの2条のアゼが50~80cmの間隔をおいて並走する。これは直交するようなアゼは見られず田面の規模・形状は不明である。地形環境：本址の南北両側には地山III層の高まる砂礫堆が存在し、その間の土壌の堆積の厚い部分に本址は展開している。帰属時期：検出状況から中世と判断されるが詳細は不明である。

SL22 位置：北端II 図版71

検出：マンガンの散在する溶脱層であるI C層上面でマンガン・水酸化鉄の斑紋が薄く、周囲より砂粒の混入が少ない土壌が、幅広く帯状に分布していたため水田のアゼ跡と判断した。検出面の土壌の状態はSL15と同様であった。規模・形状：北側は長さ11m・幅180cm、南側は長さ7m・幅250cmを測り、西にむかってV字形に開く。本址の西側では地山III層が高まり礫層が露出していた。帰属時期：検出状況から中世と判断した。

SL23 位置：北端II 図版71・72

検出：I B層下部およびI C層上面で周囲の地山に比べ、マンガン・水酸化鉄の斑紋が見られない土壌が帯状に分布し、全体では格子状に展開しているため水田址と判断した。但し、アゼ跡ℓ4は位置・形状から別遺構の可能性もある。SD67は位置から見て本址に伴う水路跡と判断される。アゼ：16条のアゼが検出され、第12表に幅と走向を示す。但し、アゼは水田土壌化作用の痕跡であって遺構本来の正確な数値ではない。ℓ1~ℓ3間、ℓ6・ℓ7間は用排水路(「畝畝」と判断され、ℓ8の東寄りにも「水口」と想定される部分が見られる。田面：12面の田面が確認され、第13表に形状と推定面積を示した。面積の推定可

アゼ	ℓ1	ℓ2	ℓ3	ℓ4	ℓ5	ℓ6	ℓ7	ℓ8
幅	0.4m	0.2m	0.4m	0.4~1.20m	0.45~0.7m	0.25m	0.40m	0.30m
走向	N80°E	N78°E	N81°E	—	N0°	N88°E	N84°E	N88°E
アゼ	ℓ9	ℓ10	ℓ11	ℓ12	ℓ13	ℓ14	ℓ15	ℓ16
幅	0.80~1.10m	0.90~1.60m	0.40~1.00m	0.90m	0.70~1.15m	1.60m	0.30~0.70m	0.6m
走向	N80°E	N87°W	N4°E	N4°E	N8°E	N6°E	N0°~N25°E	N10°E

第12表 SL23 アゼの幅・走向表

田面	f1	f2	f3	f4	f5	f6	f7	f8	f9	f10	f11	f12
形状	不整形	不整四辺形	不整形	不整形	長方形か	長方形か	長方形か	長方形か	長方形か	不整四辺形	不明	不明
面積	—	—	—	—	—	—	—	—	—	147.56m ²	—	—

第13表 SL23 田面の形状・面積表

能なのは一応四方に限られる f 10のみである。途中で消滅しているアゼが多く、不明確であるが、本来は f 6～f 8のように小規模な田面が連続していたと考えられる。耕作面は確認できなかったが田面の標高は西方ほど高く、f 6で最低数値が得られ、比高差は46cmに達する。全体に f 5・f 6にかけてが低く、凹地状を呈している。地形環境：本址の南側には砂礫堆が東西に延び、北側も梅沢沿いに地山の砂礫層が高まり、その間の土層の厚い部分で水田が営まれたと判断される。帰属時期：検出状況から中世と判断した。ℓ 5・ℓ 10・ℓ 13と、やや東にずれるがℓ 11は現条里景観の地割と一致していた。

SL24 位置：北端II 図版101

検出：I C層上面で東西に延びる灰白色土の帯状の分布が認められ、ほかの水田址と同様の検出状態であったため水田址と認定した。規模・形状：確認されたアゼは長さ6m・幅40cmを測る。アゼの部分ではマンガン・水酸化鉄の集積が薄い。帰属時期：検出状況から中世と判断したが、全体像がつかめず疑問も残る。

8 畝址

本遺跡では中世の畝址と判断される遺構は2地点で確認された。検出状況は古代の畝址と同様で畝間の溝状の部分を調査したに留まる。

SN11 位置：南部II 図版66

検出：I C層下位からI Df層上面で、オリブ灰色土が落ち込む7条の並走する溝状遺構を畝址と判断した。規模・形状：東西方向に6.3m、南北方向に10.7mの範囲に6本の畝が存在していたと判断される。想定される畝の幅は105～150cmを測る。畝間の掘込みのあとと判断される溝は幅25～30cm・深さ5～10cmを測り、断面は半月形を呈していた。帰属時期：検出状況から中世と判断した。同様の検出状況であったST72、およびNR4と主軸を合せている。本址の南には水田址(SD51～56)が存在するが主軸方向を違えており、存在した時期も重複しないものと判断される。

SN12 位置：北部I 図版82・83、PL48

検出：I C層上面で地山に対しやや黒味を帯びた灰白色土が落ち込む溝状遺構が、3列にわたって計29本認められ畝址と判断した。規模・形状：調査された範囲で東西に14.5m、南北に10.8mの広さのなかに、最高11本の畝が3列存在していた。畝の東列の北端の溝はやや太く、畝址とST77を区画した溝址とも考えられる。畝の幅は25～40cm、畝の長さは380～470cmを測る。畝間の掘込みのあとは深さ2～5cmを測り、断面は弓形を呈していた。帰属時期：検出状況から中世と判断した。北隣するST77とは主軸方向が一致しその位置関係から併存していた可能性が高い。

9 その他の遺構

SX1 位置：北部II 図版81

検出：I C層上面で鶏卵大から拳大の礫が集積しており、不整形ながら帯状に分布していた。砂粒の混入が認められず、自然流路や河川の氾濫性堆積物とは考えられないため、一応、人工的に作られた遺構として扱った。規模・形状：長さ7.5m、幅160～230cmの範囲に礫が広がる。礫の分布には濃淡が見られ、南側では重なり合って出土したが意図的に積まれた状況ではない。集石下には掘り込みは見られない。礫間で摩滅した須恵器甕片が出土したが混入品と考えられる。帰属時期：検出状況から中世と判断した。久保川・SL13とは直交するような主軸方向を有している。

第3節 近世以降の遺構

概観

本遺跡で確認された近世の遺構は掘立柱建物址7棟、溝址2条、柵址2条、墓址4基を含む37基の土坑である。分布：全体に散漫な分布状況を示す。北部I・II地区では墓址や土坑が散在的に分布する。北端I地区ではややまとまった遺構分布が認められ、掘立柱建物址7棟が展開し、遺物の出土量も多い。帰属時期：I B層の堆積年代が中世末もしくは近世初頭と判断されるので、I B層上面以降で検出されたものを近世以降として扱った。近代に比定される遺構としては幕末に帰属する瓦片が出土したSK3101・3102の2基があげられる。

1 掘立柱建物址

概観

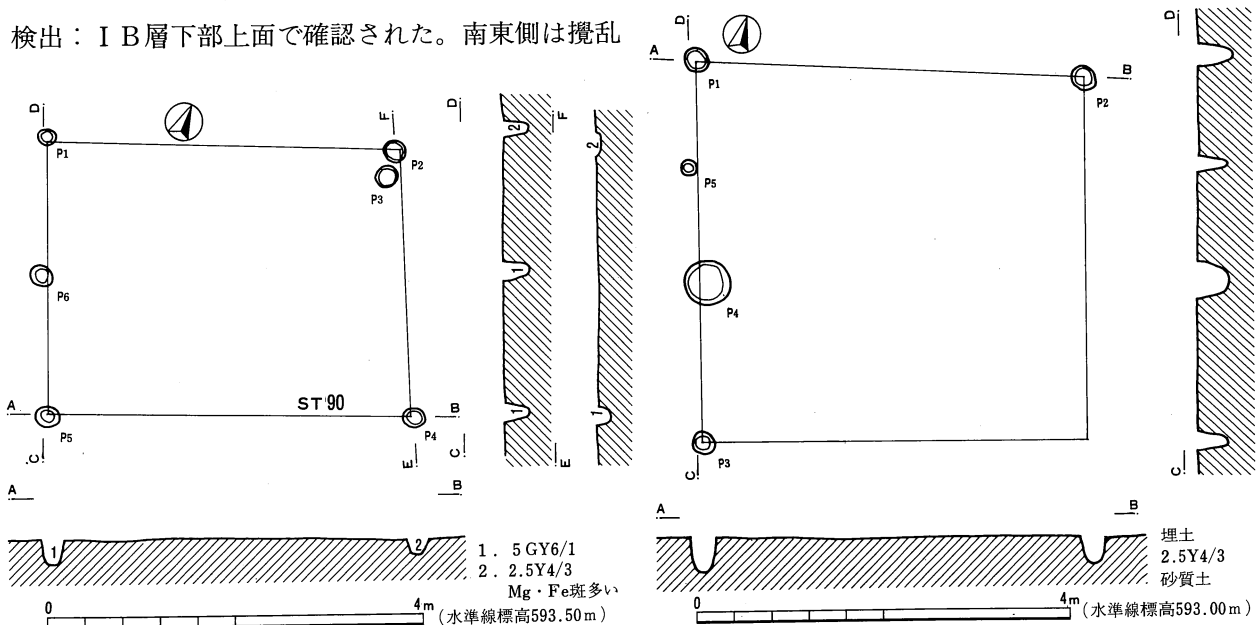
建物の規模から小型(ST101・102)、中型(ST105~107)、大型(ST103・104)の3類型に分けられる。大型の建物では内部に東柱が見られ、高床の部屋と土間の部分、さらに庇や下屋が併設されているようで、構造はかなり複雑である。小型・中型の建物はI B層で検出され、切合い関係や遺構配置を根拠に近世と判断したが、規模や形状では中世の掘立柱建物址群と類似した特徴を有している。

ST101 位置：北端I 図版95

検出：I C層上面およびI B層中で確認した。ST83・84と重複している。検出状況から本址のほうが新しいと判断した。柱配置：2間×1間の東西に長い建物址である。小規模で構造を推定しえないが、ST102・105と主軸を合わせていることから南北棟と判断される。柱穴：径15~25cmの円形プランの柱穴で深さは7~25cmで西面の柱穴が深い。埋土は灰色化のかなり進んだ砂質土である。帰属時期：検出状況およびST102・105・I B層下部堆積以降の堂沢と主軸を一致させていることから近世に属する可能性が高い。

ST102 位置：北端I 図版98

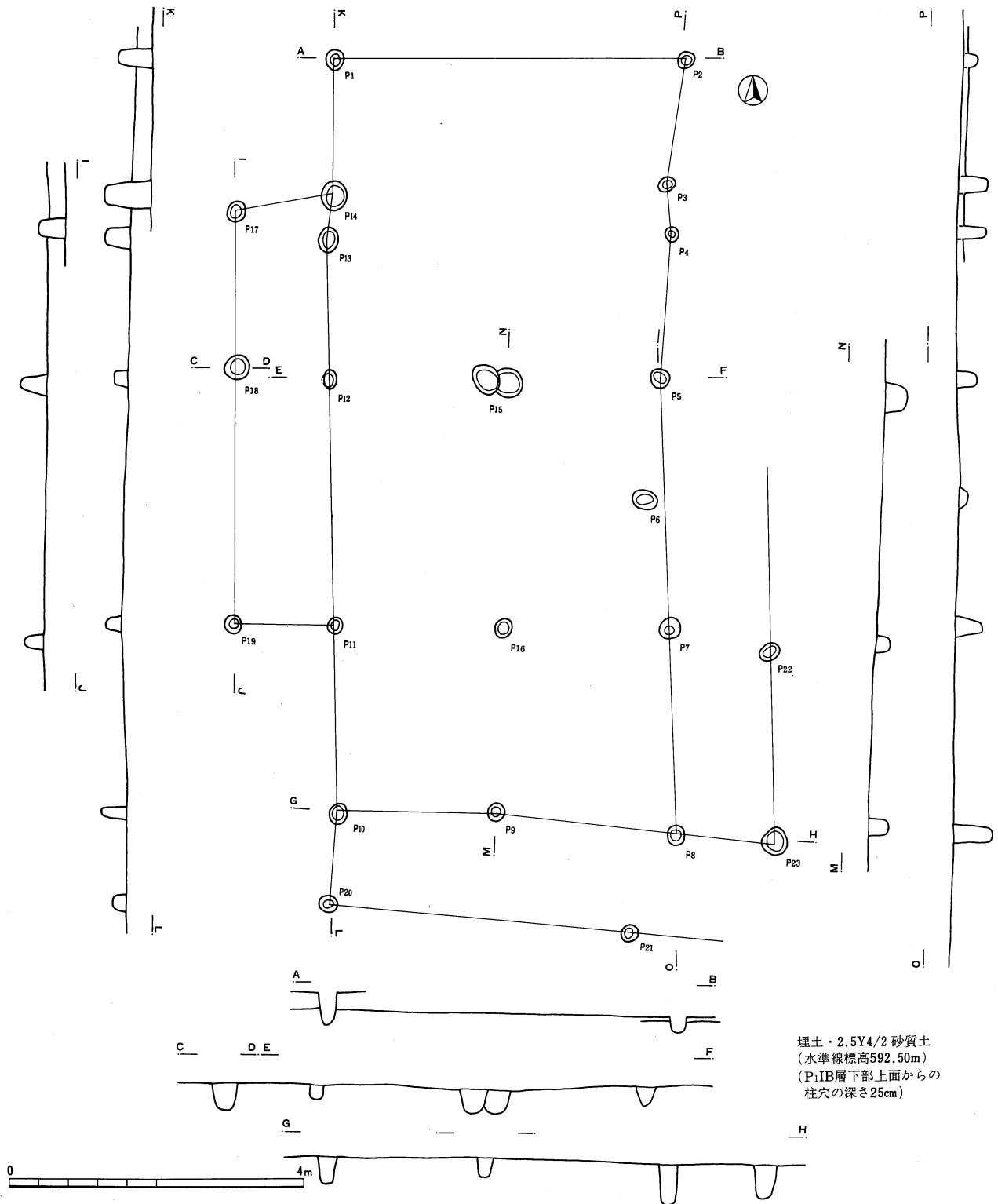
検出：I B層下部上面で確認された。南東側は攪乱



第187図 ST101実測図

第188図 ST102実測図

る。柱配置：3間×1間の方形プランの建物址である。ST105との関係を考慮すれば南北棟とも考えられる。柱穴：径20～40cmの円形の柱穴で深さは25～40cmを測る。径の大きなものは掘り方を示すものであろう。柱穴の覆土はI B層起源のオリブ褐色土である。帰属時期：本址周辺のI A・I B層中で17・18世紀に比定される瀬戸・美濃系および肥前系陶器・磁器片が出土していることや、柱穴の埋土がST103・SK3032・3033と同様であることから近世と判断した。



第189図 ST103実測図

ST103 位置：北端 I 図版96、第189図

検出：柱穴によって検出面は異なり、 $P_1 \cdot P_{13} \cdot P_{16}$ はI B層上面で、 $P_2 \sim P_4$ はI C層上面で確認され、そのほかはI B層下部上面で検出できた。柱配置：4間×2間の南北棟の建物址で西面・南面・東面に半間出しの下屋が付属すると考えられる。北側にも $P_3 \cdot P_{13}$ 、 $P_4 \cdot P_{12}$ と柱間間隔の狭い部分があり、下屋あるいは建増しの可能性がある。 $P_{14} \cdot P_{15}$ はその位置から床束と考えられ、建物址の南半は高床であったと想定される。柱穴：柱穴は径20～30cmの円形で深さは17～65cmを測り、 $P_3 \cdot P_4 \cdot P_6 \cdot P_7 \cdot P_9 \cdot P_{12} \cdot P_{13} \cdot P_{17}$ はほかより深く、その位置からも建物址を支える主要な柱であったと思われる。埋土はI B層を起源とした暗灰黄色土である。なお、柱痕跡は確認されなかった。帰属時期：本址内および周辺のI A・I B層中から瀬戸・美濃系陶磁器片が出土していること、拳骨茶碗を出土したSK3032の埋土と本址の柱穴の埋土が同一であることから、18・19世紀に帰属すると考えられる。

ST104 位置：北端 I 図版96、第190図

検出：I B層下部上面およびI C層上面で確認した。柱配置：4間×2間の建物址である。梁行の柱間がやや間隔がやや短く、梁行中央に柱が見られない。北面は2間×2間の下屋だしととらえられる。東面にも4間×1間の庇が付く。上屋の桁行中央の柱穴はほかに比べ10cm位浅く床束柱と考えられよう。西面の3柱穴で建替えが見られる。隣接するST103に比べ柱筋は揃っている。柱穴：径20～37cmの円形の柱穴で P_{18} のみ径12cmの柱痕跡が認められ、ほかの柱穴も掘り方を示すものととらえられる。U字形の断面で深さは20～56cmを測り40cm以上の柱穴が多い。埋土はI B層を起源とする暗オリーブ褐色土で、柱痕跡は灰白色であった。帰属時期：本址および本址の北東側のI B層から瀬戸・美濃系陶器の丸椀や拳骨茶碗片が出土していること、隣接するST103と検出状況や規模・構造が類似することから18・19世紀に帰属すると考えられる。

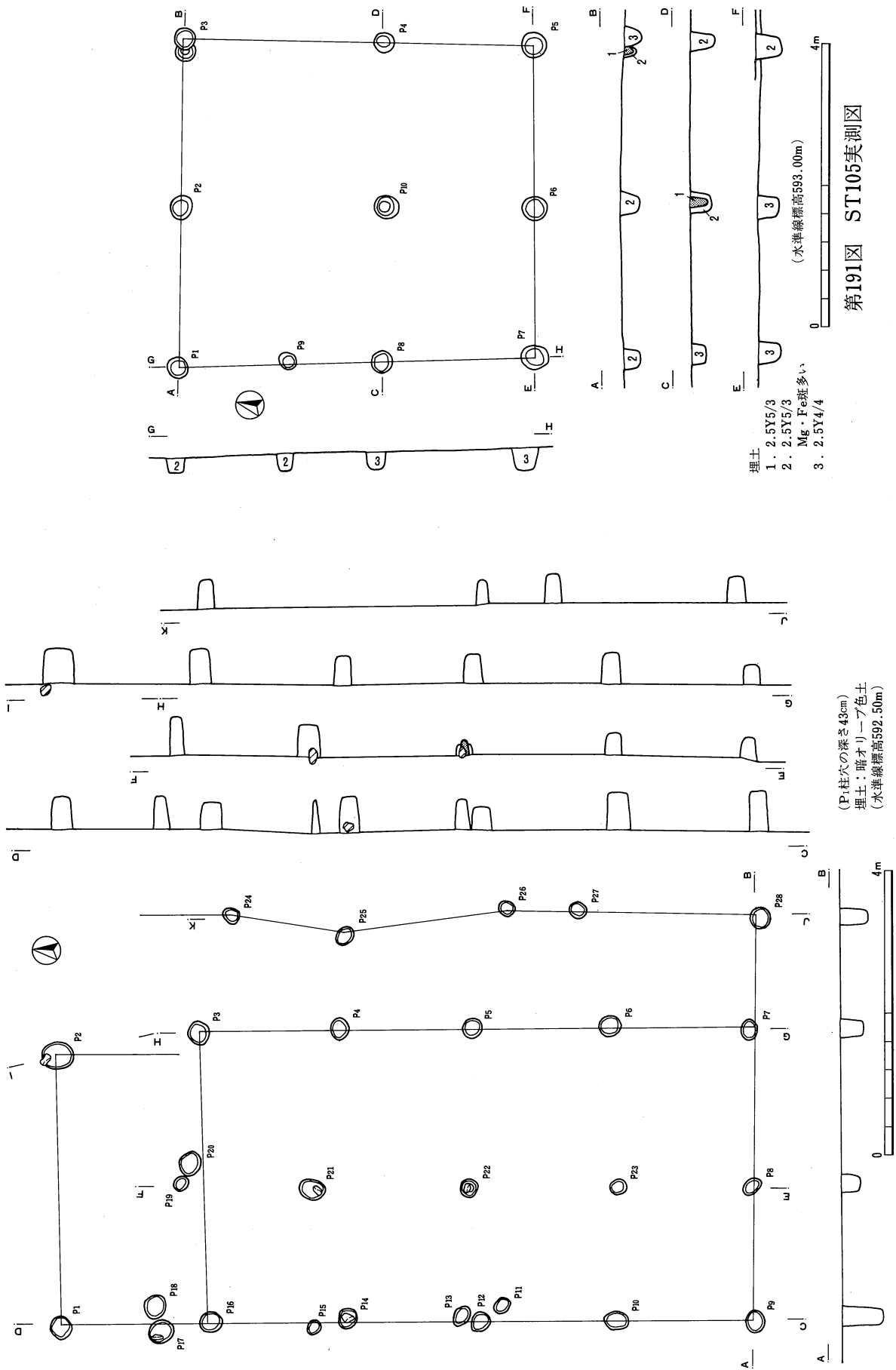
ST105 位置：北端 I 図版97、第191図

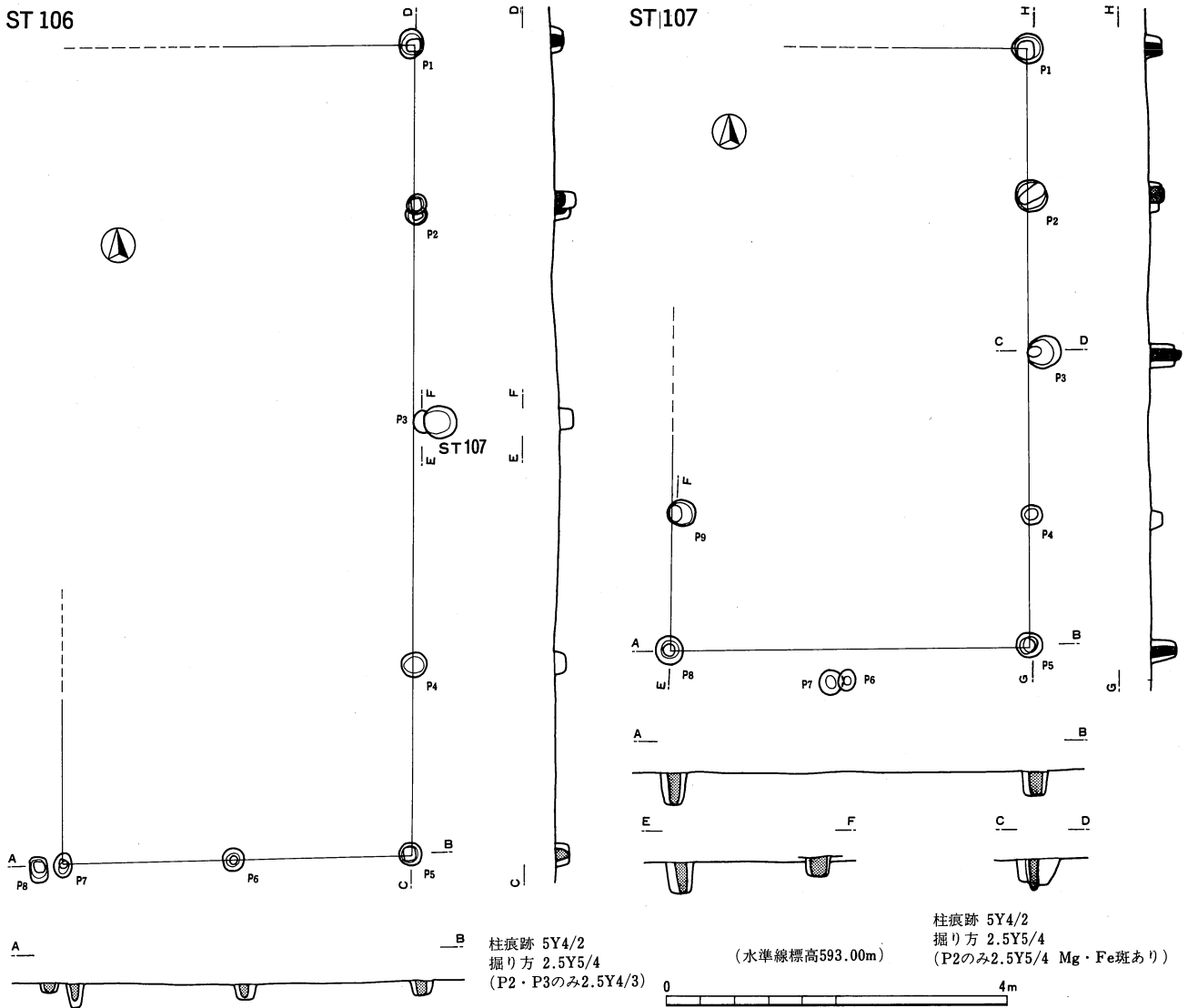
検出： P_5 のみI B層中で検出したほかはI C層上面で確認した。SD65を切る。SA51との重複するが新旧関係は不明である。柱配置：2間×2間の南北に長い総柱建物址である。桁行北側の柱間が広く、西面にはこの部分にもう一本柱穴が加わっている。柱筋・柱間間隔とも整った建物址である。柱穴：径25～30cmの円形の柱穴で、 $P_3 \cdot P_{10}$ で柱痕跡が確認された。柱穴の深さは18～33cmを測るが顕著な差は見出せない。柱痕跡は径12cmの円形で2本とも柱穴底部には達していない。埋土はI B・I C層を起源とする褐色土である。帰属時期：SD65を切り、SD64・65およびST85～89の配列とは大きく異なることやI B層で検出されたことから、近世に属する可能性が強く、ST102と主軸方向を一致させている。

ST106 位置：北端 I 図版99、第192図

検出：I C層上面でST87・107・SD65と重複して確認された。SD65を切って構築されており、SD65と主軸を揃えるST87より新しいと判断される。また、本址の P_3 がST107の P_5 に切られている。北西側は調査に至らなかった。柱配置：4間×2間の南北棟の建物址である。梁行はST107とほぼ同じであるが、桁行は本址のほうが長く、柱間も不揃いである。桁行の柱間間隔は $P_2 \cdot P_3$ 間、 $P_3 \cdot P_4$ 間がほかより広がっている。 P_2 では柱の建替えが見られ P_8 も同様のものであろう。柱穴：径20～30cmの円形の掘り方を有し、深さは15～30cmを測るが、 P_7 のみ深いほかは15cm強である。6柱穴で柱痕跡が確認された。柱痕跡は一辺10cm強の方形と径8cmの円形のものがあり、全て掘り方底に達している。掘り方の埋土はI B・I C層起源の褐色土で灰オリーブ色土の柱痕跡は明瞭に検出された。帰属時期：位置・構造からSD64・65・ST85～89の遺構配置からずれており、本址はST107へ直接、建替えられたと判断されることから近世の遺構とした。

ST107 位置：北端 I 図版99、第192図





第192図 ST106・107実測図

検出：I C層上面で確認した。P₈のみI B層中で検出された。ST106・SD65・66を切って構築される。北西側は調査に至らなかった。柱配置：ST106と同様に、4間×2間の南北棟の建物址である。ST106に比べ桁行が短く柱間も揃っているが梁行の間隔は共通している。梁行中央の柱は柱筋からずれている。柱穴：径25~40cmの円形の掘り方を有し、深さは15~35cmを測る。P₄・P₆を除き柱痕跡が各柱穴で認められた。径12~13cmの円形のもの20cm近くの方形の柱痕跡が見られる。P₂は不整形な大形の柱穴で添柱があったかもしれない。柱痕跡は掘り方底を抜くものもある。P₃柱痕跡内では鶏卵大の炭化材が検出され、その出土状況は柱が立ったまま炭化したようであった。掘り方の埋土はI B・I C層を基調とした褐色土でST106と類似している。帰属時期：SD65・66を切ること、I B層で検出したこと、SD81との位置関係から近世の遺構と判断した。

2 溝址

SD81 位置：北端 I 図版95・97、第172図

検出：I B層上面でマンガンの沈着の著しい砂が落ち込む。SK2770を切る。規模・形状：長さ18.5m・

幅25～40cmの規模を有し、深さは10cm弱を測り断面は弓形を呈している。西両端の底面には比高差は見られない。覆土：上部は砂を主体とし、下部は大豆大までの礫を多含しており、かなり強い水流があったと推定される。遺物出土状況：SK2770と切り合う部分で17世紀後半から18世紀に比定される肥前系の丸砲片が出土している。帰属時期：I B層上面で検出されたことや出土遺物の様相から近世と判断される。

SD82 位置：北端II 図版71・100

検出：I B層上面で灰色土が落ち込む。SB177を切る。規模・形状：L字形に折れ曲がる溝で、調査された範囲で全長56.5m・幅110～130cmの規模を有する。深さは25cmを測り、断面は弓形を呈している。覆土：緑灰色を呈する灰色土を主体とし、I A層を起源とする。底面には水酸化鉄が沈着していた。帰属時期：検出状況から近世と判断した。南北に走る部分では現景観と一致しているが、東西方向ではずれている。

3 柵址

SA51 位置：北端I 図版97

検出：I B層上面およびI C層上面で灰色土の落ち込む小土坑が、ほぼ等間隔に7基並び、その線上に位置していた3基の小土坑を含めSA51とした。SD105と重複しているが、直接的な新旧関係は不明である。規模・形状：長さ13.2mに及ぶ。柱間は183cmと220cmの二つの値が見られる。東端の柱間はほかの倍の間隔を有することから本来はもう1基柱穴が加わっていた可能性がある。西端から2番目の柱間内では3基の柱穴が加わり、それらが直角に配列することから、出入口などの施設か、あるいは別の遺構との重複とも考えられる。柱穴：径30～40cmの円形プランの柱穴と一辺20cm位の方形プランのものが混在し、深さは20cm強を測る。7柱穴で一辺10cmの方形の柱痕跡を確認した。埋土は青灰色土を主体とし柱痕跡は灰白色を呈していた。帰属時期：I B層上面で検出したことから近世と判断した。主軸方向の一致や位置関係からST106・107との関係が想定される。

SA52 位置：北端II 図版100

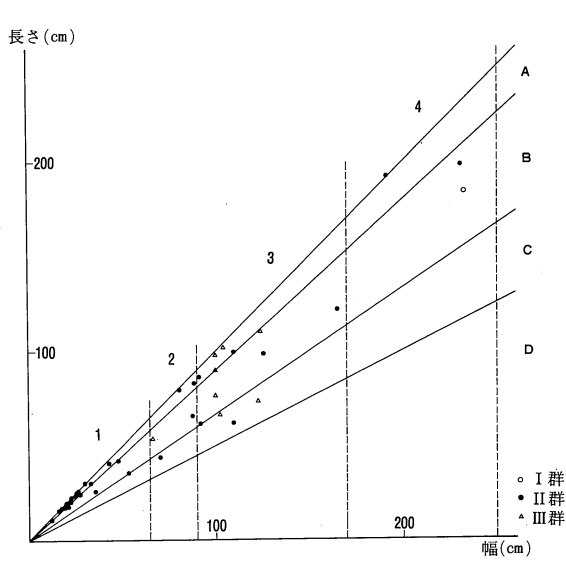
検出：I B層上面で灰色土の落ち込む小土坑が14基ほぼ等間隔に並ぶ。SD82覆土中でも本址の柱穴は確認できた。規模・形状：長さ26.5mに及ぶ。柱間は160～190cmを測る。柱穴：径25cmの円形プランを呈し深さは15cm弱を測る。埋土は灰色土を主体としている。帰属時期：I B層上面で検出されたことから近世と判断した。

4 墓址

ここにあげた3基のほか、SK3001で寛永通寶2枚を含む6枚の銭貨が付着した状態で出土しており、SK3033でも寛永通寶が見られ墓址であった可能性を有するが、骨・歯や焼痕などは確認されなかった。北部II地区西側では中世の土坑群よた15mくらい西方の地点に火葬施設2基を含む7基の土坑が集中しており、小規模な墓域が存在していたと考えられる。

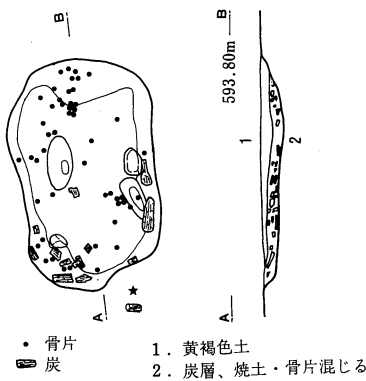
SK3005 位置：北部II西 図版85

検出：I B層上面で灰褐色が落ち込む。規模・形状：123cm×74cmを測り、隅丸長方形を意識したプランである。深さは13cmである。坑底東側と南西寄りに幼児頭大の礫が置かれていた。また、西側と東側には深さ5cm位の浅い皿状の凹みが見られ、ここにも礫が据えられていたと考えられる。坑底および壁面は被熱により赤変していた。覆土：2分層される。上層はI B層を主体としているが、下層は炭を多含し焼土灰粒・骨片が混じっていた。遺物出土状況：覆土上位より寛永通寶が1枚出土した。帰属時期・所見：検

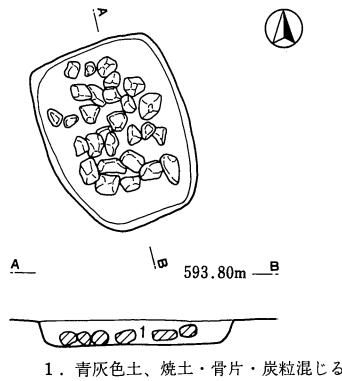


- I 群：方形を基本形とする土坑
- II 群：円形を基本形とする土坑
- III 群：不整形な土坑
- A 類：長短軸比 1 : 1 ~ 10 : 9
- B 類：長短軸比 10 : 9 ~ 3 : 2
- C 類：長短軸比 3 : 2 ~ 2 : 1
- D 類：長短軸比 2 : 1 ~
- 1 種：長軸 65cm 未満
- 2 種：長軸 65~90cm
- 3 種：長軸 90~170cm
- 4 種：長軸 170~250cm
- 5 種：長軸 250cm 以上

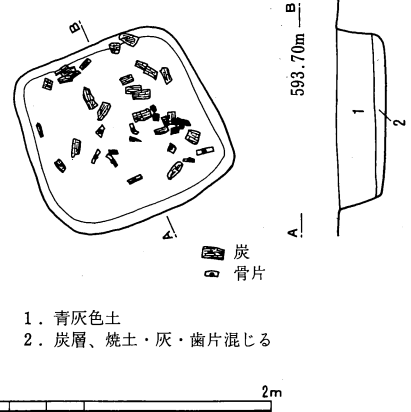
SK 3005



SK 3006



SK 3012



第193図 (上) 近世以降の土坑の長軸と短軸関係図
(下) 近世墓址実測図

	A					小計	B					小計	C					小計	D					小計	不明					小計	計									
	1	2	3	4	5		1	2	3	4	5		1	2	3	4	5		1	2	3	4	5		1	2	3	4	5											
I	0	1	3	0	0	4	0	1	4	0	0	5	0	0	2	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11
II	13	3	1	1	0	18	6	1	2	1	0	10	1	1	1	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	31
III	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
計	13	4	4	1	0	22	6	2	6	2	0	16	1	1	2	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	43

第14表 近世以降の土坑形態分類表

出状況や寛永通寶の出土から近世と判断される。坑内の焼痕や骨片の出土から本址は火葬施設と判断される。坑底部の礫は火葬時の通風を考慮して置かれたものであろう。骨の遺存状態から拾骨の行われたのは確実であり、埋め戻す過程で銭貨が埋納されたものらしい。

SK3006 位置：北部II西 図版85

検出：I B層上面で灰色土が落ち込む。規模・形状：100cm×77cmの隅丸長方形プランを呈し、深さは15cmを測る。坑底および壁面は被熱によって赤変していた。覆土：灰色土を主体とし、焼土・灰・炭粒・焼骨片が混入する。坑底には微細な炭粒が薄く全面に広がっていた。拳大の礫が30個ほど出土していた。礫は底面直上ないしはそれよりやや浮いた状態で出土し、全てに被熱による赤変や煤の付着が認められた。帰属時期・所見：I B層で検出されたことやSK3005と埋土が類似することから近世に比定される。本址

は焼痕や骨片の出土から火葬施設と判断される。礫には底面に置かれていたものと火葬時に入れられたものがあるらしい。骨の出土状態から拾骨の行われたのは確実である。

SK3012 位置：北部II 図版85

検出：I B層上面で灰色土が落ち込む。規模・形状：100cm×98cmの隅丸長方形プランを呈し深さは23cmを測る。坑底および壁面は被熱により赤黒く変色し硬化していた。覆土：2分層される。上層は灰色土を主体とし、炭粒・砂礫が混じる。下層は炭化材と焼土・灰粒が互層をなして厚さ5cm位堆積し、骨片が多量に出土した。帰属時期・所見：I B層で検出されたことから近世と判断した。焼痕や骨片の出土から本址は火葬施設と判断され、骨の遺存状態から火葬後、拾骨の行われたのは確実であろう。

5 土坑

本遺跡では墓址3基を含む41基の近世段階の土坑(SK3001～3041)と近代に属する2基の土坑(3109・3102)が確認されたが、これらは土坑の形態から次のよう分類される(第193図・第14表)。

近世の土坑は北部I地区に2基、北部II地区に11基、北端I地区に21基、北端II地区に7基確認され、そのうち1種とされる小規模な土坑は北端I地区に多く、ST102・103の周囲に分布する。機能・用途が推定可能なものとしては墓址のほかに、SK3035・3041がその形態から中世段階のSK2769・2770と同様な排水のための施設と判断されるのみである。出土遺物についてはSK3013で瀬戸・美濃系陶器の捏鉢片と、SK3032から瀬戸・美濃系陶器拳骨茶碗破片・鉄の鍛造板状品が、SK3001(180)・3004・3033(181)で寛永通寶の出土を見ている。

近代に比定されるSK3101・3102は径90cmの円形プランを呈し、深さ50cm強の規模を有する土坑で、現条里景観の畦畔下に2基並んで確認された。双方とも坑底部には5・6枚の板が並べられ端を円形に切り落とされた板材が出土していることから、本来は桶が埋設されていたものと判断される。覆土中より幕末から明治時代に比定される瓦片と鉄製の釘(177)・棒状鉄製品(178・179)が出土した。

第3章 遺物

第1節 縄文・弥生時代の遺物

縄文・弥生時代の遺物は25点を数え、いずれも古代の遺構の覆土中で検出された。分布は堂沢以南の地域に限られるが、散布状況と微地形との相関は読み取れない。遺物の状態は小破片で摩滅したものが多く、調査区外、特に調査区西方から流れ込んだ遺物と判断される(第194図)。

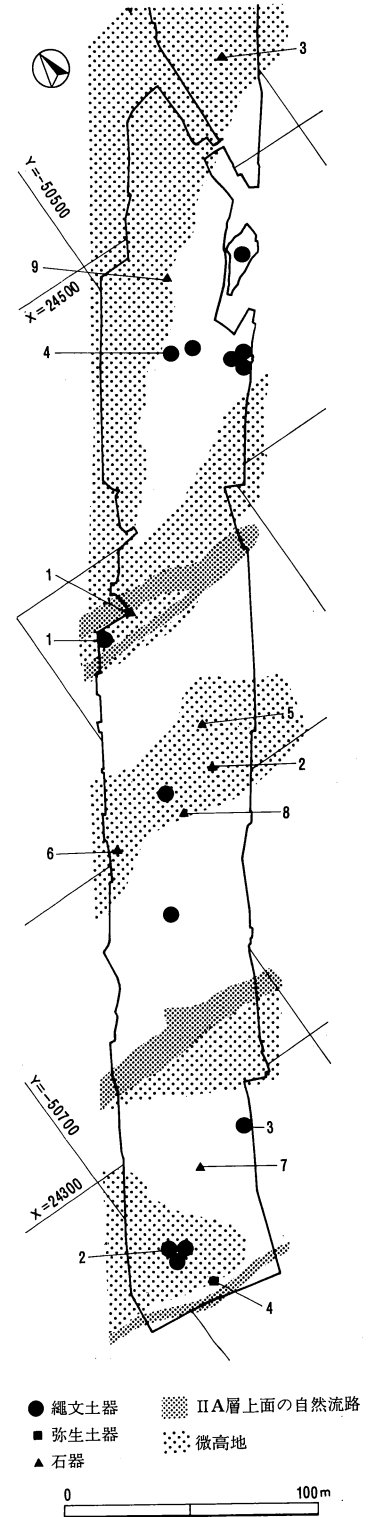
当センターの調査区の東方200mの地点で行われた松本市教委による発掘調査では(中村集落東北地点)、II B層上面に比定される「第2検出面」で弥生時代末期から古墳時代初頭にかけての竪穴住居址が11軒確認されており、今後、同様にII B層上面で縄文・弥生時代の集落が本調査区の周辺で発見される可能性が高まったと考えられる。

1 土器・石器

図版102

縄文時代中期では、1に示した楔形の工具で連続押圧していく勝坂II式土器(下総考研1985)が前半に属すほかは、後半の遺物としてとらえられる。2に掲げた唐草文系土器や、加曾利E式系土器・曾利V式土器が11点存在する。後期の土器では、称名寺式土器が2点出土し、3は磨消縄文のあるこの時期の土器である。4は、唯一出土した弥生土器で、楯描波状文をめぐらす後期の箱清水式土器の甕である。

9点の石器が確認された。その内訳は石鏃が3点、スクレイパーが1点、打製石斧が4点、凹石が1点であった。石鏃では凹基鏃(1・2)と凸基鏃(3)が見られる。4は幅広で分厚い剥片の周縁に調整を加えて刃部を作り出したスクレイパーである。これらの小形石器の石材は1が黒曜石のほかは青灰色のチャートであった。5～7は打製石斧で、板状の礫を素材として縦に割って薄い剥片を得た後、周縁に調整を加えて成形しており、石器には原礫の風化した自然面が残されている。7は長さ17cmを越え、縄文時代の通常の石斧に比べかなり大きい。こうした大形の石斧は近年の奈良井川左岸地域の遺跡の調査で散見され、その帰属時期や性格について今後注意を払っていく必要がある。8は表裏両面にわたって刃部付近が光沢をもつほど摩耗している。9は凹石で円礫の中央に径12mm・深さ4mm位の凹みを有する。大形石器の石材は5～7がホルンフェルス、8は凝灰岩、9は安山岩である。



第194図 縄文・弥生時代遺物分布図

第2節 古代の遺物

1 古代の土器

(1) 古代の土器の概観

ア 土器の事実記載

三の宮遺跡では竪穴住居址・掘立柱建物址・土坑などの古代の遺構を初めとして、遺構外の包含層などから出土した古代の土器の量は膨大な量にのぼる。

本報告書ではこの膨大な量の土器の事実提示を、限られた紙幅のなかで行うために、実測図・文章記載・遺構別の一覧表の三者で行うこととした。実測図では図示可能な土器について法量・調整などを示し、文章記載では、実測図に示せなかった情報を中心に必要な最小限の記述をおこなった。また、主要な遺構の土器については出土土器の構成表を加え補足した。構成表では主要な遺構出土の土器について、土器分類の細別に従って、器種それぞれの推定個体数と重量、個体数の構成比率、実測図番号を示してある。さらに巻末の一覧表(附表6)では遺構出土の土器を推定個体数で表わし、遺構出土の土器が網羅できるようにした。

なお、土器の出土状態については、遺構の章に記述してある。

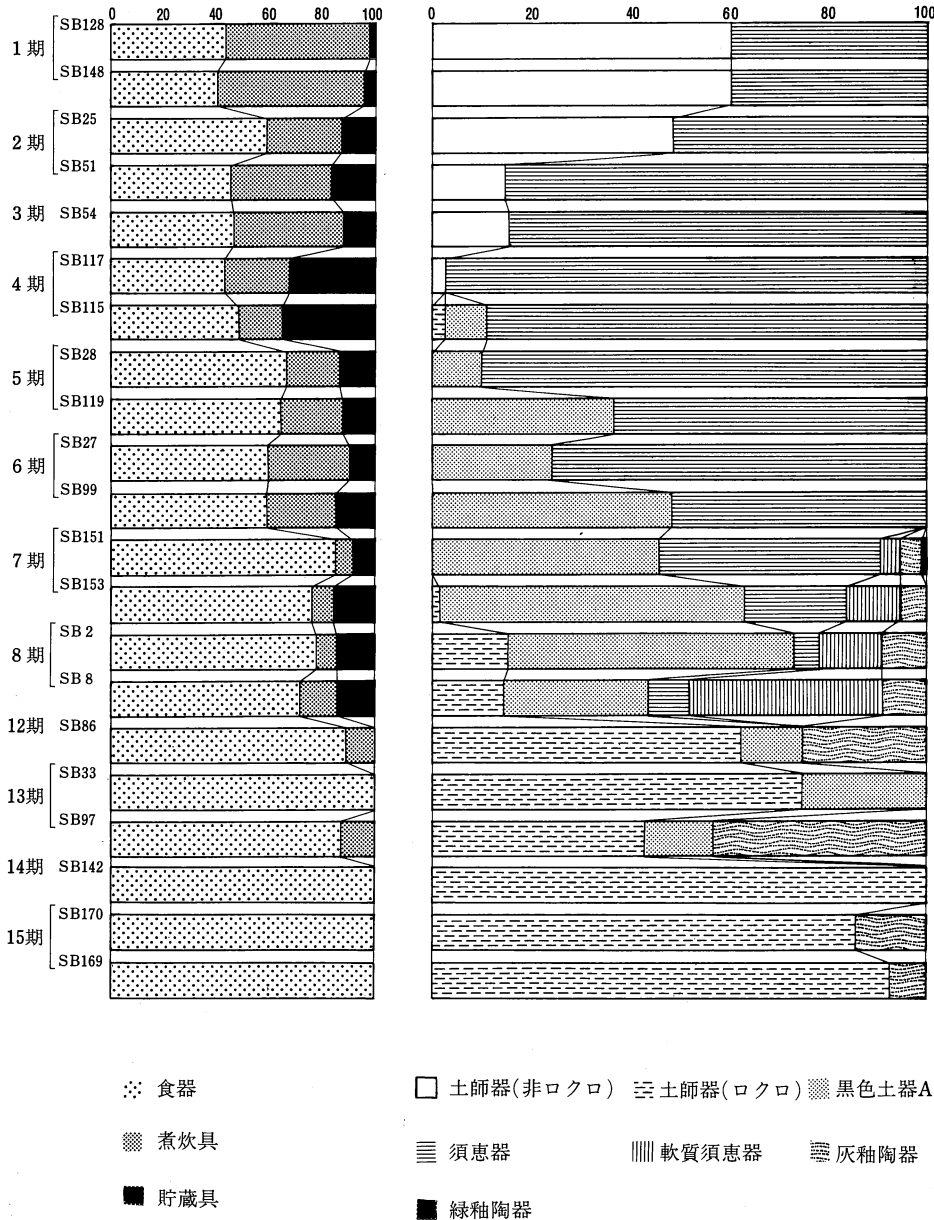
イ 三の宮遺跡の古代の土器

三の宮遺跡では、古代1期から古代15期まで、途中遺構がとぎれるため土器がない数時期を除いて、古代各期の遺構の多寡に応じ土器が出土した。総論編でそれぞれの器種の分類の詳細や型式変化・時期区分について奈良井川左岸の遺跡群出土の土器について総括して述べているので、ここでは三の宮遺跡の古代各期の土器様相について時期をおってその概要を述べる。

1期 食器は非ロクロ調整の土師器と須恵器で構成されている。土師器は杯D・杯E・杯Fの三者が主体で、2点ではあるが畿内系の暗文土器がある。SB49・128の杯は飛鳥Ⅲ・Ⅳに比定できる。産地を狭い範囲に限定できないが、畿内産に近いとの教示を得た。土師器は杯のほか、多様な形態をもつ鉢・高杯がある。食器類は内面をへら磨きすることを原則とし、黒色処理するものとしがないものがある。須恵器は杯A・杯B・高杯などがある。杯Aは杯蓋Aとセットになるもので小口径のものが多い。SB53には杯Aと杯蓋Bがセットになるもので、杯体部と蓋の天井部外面に「財」の字をへら書きしたものがある。煮炊具は土師器甕A・甕B・甕F・小型甕A・小型甕Bがあり、主体は甕Aと小型甕Aである。須恵器の貯蔵具が少ない分へら磨きで仕上げる甕Fが多い。

2期 食器では須恵器が比率をふやし、土師器は減少する。須恵器では杯Bが増加の傾向にある。杯Aは回転へら切りのみで、口径10cm前後の小型品は姿を消し、それとともに内面に返りのある杯蓋Aも1期までで消滅している。煮炊具の構成は1期を踏襲しているが、須恵器貯蔵具の増加にともなって甕Fは減少している。SB25では、体部の調整にロクロの回転を利用したと思われる土師器甕Dがある。法量・形態ともに甕Aに類似するが体部から口縁にかけて強いロクロ目を残している。類例は少なく、これ以降の時期にこの甕が継続することはない。須恵器では美濃須衛窯産の須恵器の比率が高い時期で、SB51では須恵器16個体中6個体が美濃須衛窯産の須恵器で占められている。

3期 この時期の資料は少なくわずかにSB54・76に見られるのみである。須恵器杯Aに底部回転糸切



第195図 縦穴住居址出土土器の構成

未調整のものがあらわれることを除けば、土器全体の様相は2期のそれに近い。

4期 4・5期は在地産須恵器を軸とした土器構成が展開する時期である。土器全体のなかにおける食器の割合が増加するとともに、食器のなかにも占める須恵器の割合は圧倒的で、杯Aとともに食器の主体をなす杯Bは多様な量量に分化し、質・量ともに食器が充実する段階である。この時期、3期までであった非ロクロの土師器杯に変わって、ロクロ調整の黒色土器A杯A、「甲斐型杯」と一般に呼ばれる土師器杯Cが新た

に登場する。また、煮炊具にもロクロ調整の土師器小型甕Dが登場し、ロクロ調整の技法が須恵器のみでなく、土師器系の食器類・煮炊具にも拡大されつつある。須恵器杯Aは底部回転糸切りが量を増やし、回転へら切りをうわまわるようになる。SB117では杯BVIの底部内面に女性像と「泰□」のへら描きが施されたものがある。煮炊具は土師器甕Bと小型甕Dの組み合わせを主体として、甕Cと小型甕Bが少量まじる構成で、1～3期に主体であった甕A・小型甕Aは消滅している。

5期 4期の状況を引き継いでいる。食器は須恵器主体の構成で、黒色土器A杯Aと土師器杯Cが入るがその量は少ない。須恵器杯Aは底部回転糸切りのみとなる。煮炊具は土師器甕Bと小型甕Dの組み合わせに甕Cが加わる構成である。貯蔵具はその全容を把握できる遺構に恵まれないが、須恵器の長頸壺A・短頸壺A・短頸壺C・甕A・甕Dなどがある。

6期 5期の状況を基本的に受け継ぎつつ、食器で次第に黒色土器Aの占める比率が高まり、相対的に須恵器の占める割合が低下しつつある。須恵器は底部回転糸切りの杯Aが自然な型式変化のなかで底径の